昭和十年三月十五日印刷
昭和十年三月二十日發行

國譯一切經 釋經論部 二

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所 大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝(二)一一六番
(三)〇四〇番

製本所
兩角製本所

復次に、十八空の中の初の三空は一切法を破し、後の三空も亦た一切法を破す。有法空は一切法の生時、住時を破し、無法空は一切法の滅時を破し、無法有法空は生滅を一時に倶に破す。

復次に、有人の言く、「過去と未來との法の空は、是を無法空と名け、現在及び無爲の法の空は、是を有法空と名く。何となれば過去の法は、滅失して變異して無に歸し、未來の法は、因緣未だ和合せずして、未だ生ぜず、未だ有らず、未だ出でず、未だ起らず、是を以ての故に無法と名く。現在の法及び無爲法を觀知するに、現在に有れば是を有法と名くるも、是の二は倶に空なるが故に、名けて無法有法空と爲す」と。

復次に、有人の言く、「無爲法は、生・住・滅なし、是を無法と名け、有爲法は生・住・滅あり、是を有法と名け、是の如き等の空を名けて無法有法空と爲す」と。是を菩薩は、內空乃至無法有法に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と爲す。

行者は是の不可得空を得れば、三毒、四流、四縛、五蓋、六愛、七使、八邪、九結、十惡の諸の弊惡、垢結等を得ず。都て不可得なるが故に、不可得空と爲す。

問うて曰く、若し爾らば行は是れ不可得空なり、何等の法利を得るや。

答へて曰く、戒定慧を得、四沙門果、五根、五無學衆、六捨法、七覺分、八聖道分、九次第定、十無學法を得。是の如き等を得るは、是れ聲聞法なり。若し般若波羅蜜を得れば、即ち六波羅蜜及び十地の諸の功德地、諸の功德趣を具足す。

問うて曰く、上には一切法乃至涅槃は、不可得なりと言へり。今何を以てか、戒定慧乃至[三]十地の諸の功德法を得と言ふや。

答へて曰く、是の法は得と雖も、皆な不可得空を助くるが故に不可得と名け、又復た受なく著なきが故に、是を不可得と名け、無爲法と爲すが故に不可得と名け、聖諦なるが故に不可得と名け、第一義諦なるが故に不可得と名く。聖人は諸の功德を得と雖も、無餘涅槃に入るが故に以て得と爲さず、凡夫人は以て大に得と爲す。師子は所作ありて、自ら以て奇と爲さずと雖も、餘の衆生は見て以て希有と爲すが如し。[四]是の如き等の義を名けて不可得空と爲す。

無法空・有法空・無法有法空。無法空とは、有人の曰く、「無法は法の已に滅せるに名け、是に滅して無きが故に無法空と名く」と。有法空とは、諸法は因緣和合して生ずるが故に有法無し。有法は無きが故に有法空と名く。無法有法空とは、無法有法の相を取るに不可得なり。是を無法有法空と爲す。復次に、無法有法空を觀ずるが故に、無法有法空と名く。復次に、行者は諸法の生滅を觀ずるに、若しくは有門、若しくは無門なり。生門には喜を生じ、滅門には憂を生ず。行者は、生法の空を觀じて則ち喜心を滅し、滅法の空を觀じて則ち憂心を滅す。所以は何んとなれば、生ずるも得る所なく、滅するも失ふ所なければ、世の貪愛を除くが故なり。是を無法有法空と名く。

【三】「十地の諸の功德法」は別本にては「十無學法」又は「十地の功德」とあり。

【四】「是の如き等の義を」は別本にては「聖人は所得ありと雖も、而も以て得と爲さず。是を」とあり。

經の中には、智者は一切法に於て受けず著せず、若し法を受け著すれば、則ち戯論を生ず。若し依止する所なければ、則ち論ずるところなし。諸の得道の聖人は、諸法に於て取らず捨てず、若し取捨なければ、能く一切諸見を離ると説けり。是の如き等は三藏の中の處處に法空を説く。是の如き等を名けて一切法空と爲す。

不可得空とは、有人の言く、「衆、界、入の中に於て、我法も常法も不可得なるが故に、名けて不可得空と爲す」と。有人の言く、「諸の因緣中に法を求むれども不可得なり。五指の中に拳は不可得なるが如し。故に名けて不可得空と爲す」。と。有人の言く、「一切法、及び因緣は、畢竟不可得なるが故に、名けて不可得空と爲す」と。

問うて曰く 何を以ての故に不可得空と名くるや。智力少きが故に不可得と爲すや。實に無なるが故に不可得と爲すや。

答へて曰く、諸法は實に無なるが故に、不可得なり、智力少きゆへには非ざるなり。

問うて曰く、若し爾らば畢竟空、自相空と異なること無し。今何を以ての故に更に不可得空を說くや。

答へて曰く、若し人あり、上の諸空は都て所有なきことを聞かば、心に怖畏を懷いて、疑を生ぜん。今、空たる所以の因緣を說くも、求索するに、不可得なるを以ての故なり。不可得空を說いで、是の疑怖を斷ぜんが爲の故に、佛は不可得空を說きたまへり。所以は何んとなれば、佛の言はく、「我れ初發心より乃ち成佛するに至るまで、及び十方の佛は、諸法の中に於て實を求むるに不可得なり」と。是を不可得空と名く。

問うて曰く、何事か不可得なるや。

答へて曰く、一切法、乃至無餘涅槃は、不可得なるが故に、名けて不可得空と爲す。復次に、

等に著す。法に著するを以ての故に。自法には愛を生じ、他法には恚を生じて、而して惡業を起す。是の人の爲の故に諸法の空を說く。諸法空なれば、則ち法有ること無し。所以いかんとなれば、愛す可き所の法は能く結使を生じ、能く結使を生ずれば則ち是れ無明の因緣となる、若し無明を生ぜば、云何んぞ是れ實ならんや。是を法空と爲す。

復次に、衆生に二種あり。一には世間に著し、二には出世間を求む。出世間を求むるに上・中・下・あり。上は利根大心にして佛道を求め、中は中根にして辟支佛道を求め、下は鈍根にして聲聞道を求む。佛道を求むる者の爲には六波羅蜜及び法空を說き、辟支佛を求むる者の爲には十二因緣及び獨行の法を說き、聲聞を求むる者の爲には衆生空及び四眞諦の法を說く。聲聞は生死を畏れ惡み、衆生空及び四眞諦の無常・苦・空・無我を聞けば、諸法を戲論せず。園中に鹿あり、既に毒箭を被り、一向に脫せんことを求めて、更に他念なきが如し。辟支佛は老病死を厭ふと雖も、猶よく少しく甚深の因緣を觀じ、亦た能く少しく衆生を度す。譬へば犀が園中に在つて毒箭を被ると雖も、猶能く其の子を顧戀するが如し。菩薩は老病死を厭ふと雖も、能く諸法の實相を觀じ、究盡して深く十二因緣に入り、法空に通達して無量の法性に入る。譬へば白香象王が獵園の中に在つて、箭射を被むると雖も、獵者を顧視して、心に畏るる所なく、及び營從を將ゐて安步して去るが如し。是を以ての故に三藏の中に多く法空を說かず。或は利根の梵志あり。諸法の實相を求めて老病死を厭はず、種種の法相に著す。是が爲の故に法空を說く。所謂先尼梵志は、五衆は卽ち是れ實なりと說かず。亦た五衆を離れて是れ實なりと說かず。復た强論梵志あり。佛答へたまはく、「我が法の中には有無を受けず、汝何の論ず所がある。有無は是れ戲論の法、結使の生處なり」と。及び雜阿含の中の大空經には二種の空を說く。衆生空と法空なり。羅陀經の中には色衆を破裂分散して所有なからしむることを說き、栰喩經の中には、法すら尙ほ捨つべし、何に況んや非法をや、と說けり。波羅延經、利衆

答へて曰く、我は是れ一切諸の煩惱の根本なり。先づ五衆に著して我と爲し、然して後に外物に著して我所と爲す。我所に縛せらるゝ故に而も貪恚を生じ、貪恚の因緣の故に諸業を起す。佛の說きたまふが如く、作者なければ則ち一切法の中の我を破す。若し眼は從來する所なく、滅するも亦た去る所なしと說かば、則ち眼の無常を說くなり。若し無常なれば卽ち是れ苦なり。苦なれば卽ち是れ我・我所に非ず。我・我所なきが故に、一切法の中に於て心の著する所なし。心に著する所なきが故に則ち結使を生ぜず。結使を生ぜざれば、何ぞ空と說くを用ひん。是を以ての故に三藏の中には多く無常・苦・空・無我と說いて多く一切法空を說かず。　復次に、衆生は佛が無常・苦・空・無我を說き給へるを聞くと雖も、而も諸法を戲論す。是の人の爲の故に、諸法は空なり、若しくは我なく亦た我所なしと說く。若し我なく我所なければ、是れ卽ち空義に入る。

問うて曰く、佛は何を以てか業有り果報有りと說きたまひしや。若し業有り果報有らば、是れ則ち空ならず。

答へて曰く、佛の說法に二種あり。一には無我、二には無法なり。神を見て常有りと著する者の爲の故に、作者無しと說き、斷滅の見に著する者の爲の故に、業有り、業の果報有りと說きたまへり。若し人あり、作者無しと說くを聞いて、轉た斷滅の見の中に墮すれば爲に業有り業の果報有りと說く。此の五衆は能く業を起せども後世に至らず、此の五衆の因緣は五衆を生じ、業果報の相續を受くるを以ての故に、業の果報を受くと說く。母子の如し。身異なると雖も、而も因緣相續するが故に、母藥を服すれば、兒の病則ち差ゆるが如し。是の如く、今世と後世との五衆は異なりと雖も、而も罪福の業因緣、相續するが故に、今世の五衆の因緣に從つて、後世の五衆の果報を受くるなり。

復次に、有人は諸法の相を求めて、一法の若しくは有、若しくは無、若しくは常、若しくは無常

し。病なければ則ち藥なきが如し。是の故に經に言く、「凡夫の法を離れて更に聖法なく、凡夫法の實性は卽ち是れ聖法なり」と。　復次に、聖人は諸法に於て相を取り亦た著するが故に、凡夫人の法を以て虛妄と爲す。是の故に聖法を眞實と爲す。凡夫は諸法に於て相を取らず亦た著せず。是の故に聖法を眞實と爲す。凡夫は諸法に於て相を取り亦た著するが故に、凡夫人の法を以て虛妄と爲す。聖人は用ふと雖も而も相を取らず。相を取らざるが故に則ち定相なし。是の如きは應に難と爲すべからず。凡夫の地に於ては、法に著して「是は聖法なり、是は凡夫法なり」と分別すれども、賢聖の地の若きに於ては、則ち分別する所なく、衆生の病を斷ずるが爲の故に、「是は虛、是は實」と言ふのみ。「佛語は虛に非ず、實に非ず、縛に非ず、解に非ず、一に非ず、異に非ず、是の故に分別する所なく、清淨にして虛空の如し」と說くが如し。　復次に、若し法は悉く空ならざれば、說くべからず。不戲論を智人の相と爲すも、亦た說くべからず、受けず著せず依止する所なく、空・無相・無作なるを名けて眞法と爲す。

問うて曰く、若し一切法は空なるは、卽ち亦た是れ實ならば、云何んぞ實なるもの無しと言ふや。答へて曰く、若し一切法空ならば、假令法あるも已に一切法中に入つて破す。若し法なければ難を致すべからず。

問うて曰く、一切法は空なるが是れ眞實ならば、佛は三藏の中に何を以てか、多く無常・苦・空・無我の法を說きたまひしや。經に說くが如くんば、佛、諸の比丘に告げたまはく、「汝が爲に法を說く、名けて第一義空と爲す。何等か是れ第一義空なる。眼生ずるも、從來する所なく、滅するも亦た去る所なし。但だ業有り、業の果報有り、作者は不可得なり。耳鼻舌身意も亦復た是の如し」と。是の中に若し生は從來する所なく、滅も亦た去る所なしと說かば、是れ常なり。常法は不可得なるが故に無常なり。但だ業及び業果報のみ有り、而も作者は得べからず。是を聲聞法中の第一義空と爲す。云何なれば一切法は空なりと言ふや。

るべからず。酥・蜜・膠・臘等の如きは皆な是地相なれども、火と合するが故に自ら其の相を捨てゝ、轉じて濕相と成り、金・銀・銅・鐵は火と合するが故に亦た自ら其の相を捨てゝ變じて水相と爲り、水の如きは寒を得れば氷と成りて、轉じて地相と成る。人の醉ひ睡れる、（又は）無心定に入れる、（又は）凍氷の中の魚の如きは、皆な心識なく、其の心相を捨てゝ覺知する所なし。慧の如きは知相を爲せども、諸法實相に入れば、則ち覺知する所なく自ら知相を捨つ。是の故に諸法は定相あること無し。復次に、若し諸法は定相ありと謂はゞ是れ亦た然らず。何となれば、如し未來法の相の如きは、應に現在に來至すべからず。若し現在に至れば則ち未來の相を捨つ。若し未來の相を捨てずして現在に入らば、未來は則ち是れ現在にして、未來の果報なしと爲す。若し現在は過去に入れば則ち現在の相を捨つ。若し現在の相を捨てずして過去に入らば、過去は卽ち是れ現在なり。是の如き等の過あり。則ち諸法には定相あること無きを知る。復次に、[一]若し、無爲法は定有なりと謂はゞ、應に別に自ら相あるべし。火が自ら熱相を有して、他に因らずして相を作すが如し。是の故に、應に知るべし、無爲法は無相なるが故に實には無なることを。復次に汝は未來世の中の非智緣滅の法を以てするも、是れ有爲法にして而も有爲の相なし。若し汝、非智緣盡を以て、是滅相なりと謂はゞ、是れ亦た然らず。何となれば無常にして滅するが故に是を滅相と名け、非智緣滅を以ての故に、名けて滅相と爲すには非ざればなり。是の如く等の種種に定相あること無し。若し定相有らば、[二]不空ならしむべきも、定相無くして然も不空とは、是の事然らず。

問うて曰く、實有の法は不空なるべし。所以いかんとなれば凡夫と聖人は知る所を各異なり、凡夫の知る所は是れ虚妄にして、聖人の知る所は是れ實なればなり。實の聖智に依るが故に虚妄の法を捨し、虚妄に依つて虚妄を捨すべからず。

答へて曰く、凡夫の所知を破するが爲の故に名けて聖智と爲す。若し凡夫法なければ則ち聖法な

【一】「若し無爲法……………復た次に」までは、別本にては「若し、有爲法と謂へば、定んで三相あり。生と住と滅となり。無爲法にし亦た三相あり。不生と不住と不滅なり。」

【二】「不空ならしむべきも、定相なくして、然も」は別本には缺く。

は是れ總相にして、一耳を失へるは則ち是れ別相なるが如し。是の如く各各展轉して皆な總相・別あり。是を總相・別相と爲す。

依相とは諸法は各各共に相依止す。草木・山河は地に依止し、地は水に依止するが如し。是の如く一切各各相依る、是を依止相と名く。是の如く一法門の相に一切法を攝す。

復次に、二法門に一切法を攝す。所謂色と無色法、可見と不可見法、有對と無對法、有漏法と無漏法、有爲法と無爲法、內法と外法、觀法と緣法、有法と無法、是の如き等の種種の二法門の相、三四五六乃至無量の法門の相ありて一切法を攝す。是の諸法の皆空なることは上に說けるが如し。一切法空と名く。

問うて曰く、若し皆空ならば、何を以てか一切法の種種の名字を說くや。

答へて曰く、凡夫人は空法の中に於て、無明顚倒して相を取るが故に愛等の諸の煩惱を生じ、煩惱に因るが故に種種の業を起し、種種の業を起すが故に種種の道に入り、種種の道に入るが故に種種の身を受け、種種の身を受くるが故に種種の苦樂を受く。蠶の絲を出だすに因る所なく、自ら己より出だし、自ら纏裹して燒煮の苦を受くるが如し。聖人は清淨の智慧力の故に、一切法は本末皆な空なりと分別し、衆生を度せんと欲するが故に其の著處を說く。謂ゆる五衆・十二入・十八界等なり。汝は但だ無明を以ての故に而も五衆等を生じ、自ら作し自ら著す。若し聖人但だ空のみを說かば道を得ること能はざらん。(そは)因る所なく厭ふ所なきを以ての故なり。

問うて曰く、汝は、一切法は空なりと言ふも、是の事は然らず。何となれば、一切法は各各自相を攝するが故なり。地は堅相、水は濕相、火は熱相、風は動相、心は識を相と爲し、慧は知を相と爲すが如し。是の如く一切法は、各自ら其の相に住す。云何んぞ空と言はん。

答へて曰く、性空と自相空との中に已に破せり。今當に更に說くべし。相は不定の故に是れ相な

く。

知相とは、苦法智・苦比智もて能く苦諦を知り、集法智・集比智もて能く集諦を知り、滅法智・滅比智もて能く滅諦を知り、道法智・道比智もて能く道諦を知り、及び世俗智もて能く苦を知り、能く集を知り、能く滅を知り、能く道を知り、亦た能く虚空・非智縁滅を知る。是を一切法の知相と名く。知相の故に一切法を攝す。

識相とは、眼識は能く色を知り、耳識は能く聲を知り、鼻識は能く香を知り、舌識は能く味を知り、身識は能く觸を知り、意識は能く法を知る。能く眼を知り、能く色を知り、能く眼識を知る。能く耳に知り、能く聲を知り、能く耳識を知る。能く鼻を知り、能く香を知り、能く鼻識を知る。能く舌を知り、能く味を知り、能く舌識を知る。能く身を識り、能く觸を知り。能く身識を識る。能く意を知り、能く法を知り、能く意識を知る。是を識相と名く。

縁相とは、眼識及び眼識相應の諸法は能く色を縁じ、耳識及び耳識相應の諸法は能く聲を縁じ、鼻識及び鼻識相應の諸法は香を縁じ、舌識及び舌識相應の諸法は能く味を縁じ、身識及び身識相應の諸法は能く觸を縁じ、意識及び意識相應の諸法は能く法を縁じ、能く眼を縁じ、能く色を縁じ、能く眼識を縁じ、能く耳を縁じ、能く聲を縁じ、能く耳識を縁じ、能く鼻を縁じ、能く香を縁じ、能く鼻識を縁じ、能く舌を縁じ、能く味を縁じ、能く舌識を縁じ、能く身を縁じ、能く觸を縁じ、能く身識を縁じ、能く意を縁じ、能く法を縁じ、能く意識を縁ず。是を縁相と名く。

增上相とは、一切の有爲法は各各增上し、無爲法も亦た有爲法に於て增上す。是を增上相と名く。

因果相とは、一切法は各各因と爲り、各各果と爲る。是を因果相と名く。

總相・別相とは、一切法の中に各各總相別相あり。馬は是れ總相、白は是れ別相なるが如し。人

身も亦是の如し。識は覺相、智は慧相、慧は智相なり。捨を施相と爲し、悔いず惱まざるを持戒の相と爲し、心變異せざるを忍相と爲し、勤を發すを精進相と爲し、心を攝するを禪相と爲し、著する所なきを智慧相と爲し、能く事を成ずるを方便相と爲し、識の生滅を作すを世間相と爲し、識無きを涅槃相と爲す。是の如き等、諸法には各別相あり。當に知るべし、是の諸相は皆空なることを。是を自相空と名く。餘の義は性空の中に說くが如し。性と相とは義同じきが故なり。

問うて曰く、何を以てか但だ相空と說かずして自相空と說くや。

答へて曰く、若し相空と說けば法體の空を說かず、自相空と說けば卽ち法體空なり。復次に、衆法和合するが故に一法生ず。是の一法は空なり。是くの如く一一の法は皆な空なり。今和合因緣の法は展轉して皆な亦た空なり。一切法は各各自相空なり。是を以ての故に名づけて自相空と爲す。

問うて曰く、若し一切法は各各自相空ならば、云何んぞ復た所說あるや。

答へて曰く、衆生は顚倒の故に一相・異相・總相・別相等を以てして、諸法に著す。是を斷ぜんが爲の故に所說あり。是の如き等の因緣を名けて自相空と爲す。

一切法空とは、一切法は五衆・十二入・十八界等に名く。是の諸法は、皆な種種の門に入る。所謂一切法は有相・知相・識相・緣相・增上相・因相・果相・總相・別相・依相なり。

問うて曰く、云何なれば一切法は有相なるや。

答へて曰く、一切法には、好あり醜あり、內あり外あり。一切法は心あつて生ずるが故に名けて有と爲す。

問うて曰く、無法の中に云何んぞ相有りと言ふや。

答へて曰く、無法の若きは名けて法と爲さず、但だ有を遮するを以ての故に、名けて無法と爲すのみ。若し實に無法なるもの有らば、則ち名けて有と爲す。是の故に一切法は有相なりと說

に磨けば、金性に非ざることを知るが如く、人が恭敬供養する時、是れ善人に似たるは、是を相と爲し、罵詈・毀辱すれば、忿然として瞋恚するは、便ち是れ其の性なるが如し」と。性相・內外・遠近・初後等には、是の如きの差別あり。是の諸相は皆な空なるを名けて相空と爲す。

説くが如くんば一切の有爲法は皆是れ無常の相なり。所以は何んとなれば、生滅して住せざるが故に、先無にして今有、已に有にして還た、無なるが故に、諸の因縁に屬するが故に、虛誑にして不眞なるが故に、無常にして因縁生なるが故に、衆合する因縁より起るが故に、是の如き等の因縁の故に、一切の有爲法は是れ無常の相なり。能く身心に惱を生ずるが故に名けて苦身と爲す。四威儀は苦ならざるは無きが故に、苦は聖諦なるが故に、聖人は捨てゝ受けざるが故に、時として惱まさざること無きが故に、無常なるが故に、是等の如き因縁もて名けて苦相と爲す。我所を離るゝが故に空なり、因縁和合して生ずるが故に空なり、無常・苦・空・無我なるが故に名けて空と爲す。始・終は不可得なるが故に空なり、心を誑はすが故に名けて空と爲す。賢聖は一切法に著せざるが故に名けて空と爲す。無相・無作の解脱門を以ての故に名けて空と爲す。諸法の實相は無量無數なるが故に名けて空と爲す。一切語言の道を斷ずるが故に名けて空と爲す。一切の心行を滅するが故に名けて空と爲し、諸佛・辟支佛・阿羅漢は、入りて而も出でざるが故に、名けて空と爲す。是の如き等の因縁の故に、是を名けて空と爲す。無常・苦・空なるが故に無我なり。自在ならざるが故に無我なり。主なきが故に名けて無我と爲し、諸法は因縁より生ぜざるは無く、因縁より生ずるが故に無我なり。無相・無作なるが故に無我なり。假名字の故に無我なり。身見は顚倒の故に無我なり。我心を斷じて道を得るが故に無我なり。是の種種を以て名けて無我と爲す。是の如き等を名けて總相と爲す。

別相とは、地は堅相、火は熱相、水は濕相、風は動なり。眼識の依處を眼相と名く、耳・鼻・舌・

「是は堅固に相續して久しく住すと雖も皆な亦た性空なり」と說きたまへり。聖人の智慧は衆生を度して、諸の煩惱を破すと雖も、性は不可得なるが故に是れも亦た空と爲す。又人は「五衆十二入、十八界は皆な空にして、但だ法性實際の如きは是れ其の實性なり」と謂ふ。佛は此の疑を斷ぜんと欲するが故に、但だ分別して、「五衆は法性實際の如く皆な亦た是れ空なり」と說きたまへり。是を性空と名く。復次に、有爲の性に三相あり、生、住、滅なり。無爲の性にも亦た三相あり、不生、不住、不滅なり。有爲の性すら尙ほ空なり、何に況んや有爲の法をや。無爲の性すら尙ほ空なり、何に況んや無爲の法をや。是の種種の因緣を以て、性の不可得なるを名けて性空と爲す。

自性空とは、一切法に二種の相あり。總相と別相なり。是の二相は、空なるが故に名けて相空と爲す。

問うて曰く、何等か是れ總相にして、何等か是れ別相なるや。

答へて曰く、總相とは無常等の如し。別相とは諸法は皆な無常なりと雖も、而も各別相あり。地を堅相と爲し、火を熱相と爲すが如し。

問うて曰く、先に已に性を說き、今相を說く。性と相は何等の異あるや答へて曰く、有人は言ふ、「其の實は異なること無く、名に差別あり。性を說けば則ち相を說くと爲し、相を說けば則ち性を說くと爲す。譬へば火の性を說けば卽ち是れ熱相なり、熱相を說けば卽ち是れ火性なるが如し」と。有人は言ふ、「性と相とは小しく差別あり、性は其の體を言ひ、相は「識る可きもの」を言ふ。釋子が禁戒を受持するが如きは是れ其の性にして、剃髮、割截、染衣は是れ其の相なり。梵志が自ら其の法を受くるは是れ其の性にして、頂に周羅あり、三岐杖を執るは是れ其の相なり。火の熱の如きは是れ其の性にして、烟は是れ其の相なり。近きを性と爲し、遠きを相と爲す。相は不定にして身より出で、性は則ち其の實を言ふ。黃色を見て金の相と爲せども、而も內に是れ銅なれば、火に燒き石

何となれば若し空あれば應當に實あるべく、若し實あれば應當に空あるべければなり。(而るに)空性すら尙ほ無なり、何に況んや實有らんや。　復次に、若し無我ならば則ち縛なく解なく、亦た今世より後世に至つて罪福を受くること無く、亦た業因緣の果報なし。是の如き等の因緣により、無我性すら、尙ほ不可得なるを知る。何に況んや我性をや。　復次に、無生無滅の性も亦た不實なり。何となれば、若し實なれば、則ち常見に墮す。若し一切法常ならば、則ち罪なく福なし。若し有ならば常有、無ならば常無、若し無ならば不生、有ならば不失にして不生不滅性の如きは不可得なり、何に況んや生滅の性をや。無來・無去・無入・無出等の諸の總性も亦た是の如し。

　復次に、諸法の別性、是も亦た然らず。何となれば火の如きは能燒の造色と、能熖との、二法和合の故に、名けて火と爲す。若し是の二法を離れて火あらば、別に火の用あるべし、而も別に用なし。是を以ての故に火は是れ假名にして亦た實あること無きことを知る。若し實に火法なくんば、云何んぞ熱は是れ火性なりと云はん。　復次に、熱性は衆緣より生ず。內に身根あり、外に色觸あり、和合して、身識を生じて熱あるを覺知す。若し未だ和合せざる時は則ち熱性なし。是を以ての故に定んで熱を火性と爲さゞることを知る。　復次に、若し火が實に熱性を有すれば、云何んぞ人ありて、火に入るに燒けざる。及び人身中に火ありて而も身を燒かず、空中の火を水は能く滅せざるや。火に定んで熱性あること無きを以ての故に、(また)神通力の故に火も身を燒くこと能はず。業因緣の五藏は熱せず、神通力の故に水も滅すること能はざるなり。　復次に、若し熱性と火と異ならば、火は則ち熱に非ず。若し熱と火と一ならば、云何んぞ熱は是れ火性なりと言はん。餘性も亦た是の如く、是の總性、別性は無なるが故に、名けて性空と爲す。　復次に、性空とは本より已來、空なり。世間の人の如きは、虛妄にして久しからざる者を、是を空なりと謂ひ、須彌、金剛等の物、及び聖人の知るところの如きは、以て眞實不空なりと爲す。此の疑を斷ぜんと欲するが故に、佛は、

す。水の性は冷にして、火を假るが故に熱し、火を止むれば則ち還たび冷となるが如し。畢竟空は虚空の如く、常に不生不滅不垢不淨なり。云何んぞ同じと云はん。　復次に、諸法は畢竟空なり。何となれば、性は不可得なればなり。諸法の性は空なり。何となれば畢竟空なればなり。　復次に、性空は多くは是れ菩薩の所行にして、畢竟空は多くは是れ諸佛の所行なり。何となれば、性空の中には但だ因緣和合あつて實性あること無く、畢竟空は三世淸淨なるが故なり。是の如き等の差別あり。

復次に、一切諸法の性に二種あり。一には總性、二には別性なり。總性とは無常・苦・空・無我・無生無滅・無來・無去・無入・無出等にして、別性とは火は熱性、水は濕性、心は識性なるが如く、人、喜んで諸惡を作すが故に名けて惡性と爲し、好んで善事を集むるが故に名けて善性と爲すが如し。十力經の中に、「佛は世間の種種の性を知りたまふ。是の如きの諸の性は皆空なり」と說くが如し。是を性空と名く。何となれば、若し無常性是れ實ならば、應に業の果報を失すべければなり。所以は何んとなれば、生滅して過去は住せざるが故に、六情も亦塵を受けず、亦た因緣を積習せず、若し積習なくんば則ち誦經、坐禪等無ければなり。是を以ての故に無常性は不可得なることを知る。無常すら尙ほ不可得なり、何に況んや常相をや。　復次に、苦性も亦不可得なり。若し實に是の苦有らば則ち染著の心を生ずべからず。若し人苦痛を厭畏せば、諸樂の中に於ても、亦た應に厭畏すべく、佛も亦三受(即ち)苦・受・樂受・不苦不樂受を說きたまふべからず。亦た苦の中に瞋を生じ、樂の中に愛を生じ、不苦不樂の中に癡を生ずべからず。若し一相ならば、樂の中に瞋を生ずべく、苦の中に愛を生ずべし。但し是の事は然らず。是の如き等の苦性すら尙ほ不可得なり。何に況んや、樂性は虚妄なるに而も得可けんや。　復次に、空相も亦た不可得なり。所以は何となれば、若し空相あれば則ち罪福無し、罪福なきが故に、亦た今世・後世無ければなり。　復次に、諸法は相待して有なり。

は自ら冷なれども火を假るが故に熱し、火を止めて停むること久ければ水は則ち還つて冷なるが如く、諸法の性も亦た是の如し。未だ生ぜざる時は、空にして所有なきこと水性の常に冷かなるが如し。諸法は衆緣和合するが故に有なること、水の火を得て熱を成すか如し。衆緣、若しくは少く、若しくは無ければ、則ち法あること無きこと、火滅すれば湯冷やかなるが如し。經に說くが如し。「眼は空にして我なく我所なし、何となれば性として自ら爾なればなり。耳・鼻・舌・身・意・色乃至法等も亦復た是の如し」と。

問うて曰く、此の經は我・我所の空を說く、是を衆生空と爲す。法空を說かず、云何にして性空を證するや。

答へて曰く、此の中には但だ性空を說き、衆生空及び法空を說かず。性空に二種あり。一には十二入の中に於て我なく我所なし。二には十二入の相は自ら空にして我なく我所なし。是れ聲聞論の中の說なり。摩訶衍法には、十二入は我我所無きが故に空なり。十二入の性は無なるが故に空なりと說く。　復次に、若し我なく我所なくんば自然に法空を得、人は多く我及び我所に著するを以ての故に、佛は但だ我なく我所なしと說きたまへり。是の如くして應當に一切法の空なるを知るべし。若し我・我所の法にすら尙ほ著せずんば、何に況んや餘法をや。是を以ての故に衆生空と法空とは終に一義に歸す。是を性空と名く。　復次に性の名は自有にして因緣を待たず、若し因緣を待たば則ち是れ作法にして名けて性と爲さず。諸法の中には皆な性なし。何となれば一切の有爲法は皆な因緣に從て生ず。因緣に從て生ぜば則ち是れ作法、若し因緣の和合によらざれば則ち是れ無法なるを以てなり。是の如く、一切諸法の性は、不可得なるが故に名けて性空と爲す。

問うて曰く、畢竟空にして所有なきは則ち是れ性空なり。今何を以てか重ねて說くや。

答へて曰く、畢竟空とは名けて「遺餘あること無し」と爲し、性空とは名けて「本來常に爾り」と爲

得べからず。若し色は實に有ならば、此の諸法を捨てて別に色あるべし、而も更に別の色なし。是の故に經に言はく、「所有る色は皆な四大の和合によつて有なり」と。和合して有るが故に皆な是れ假名なり、假名なるが故に散ずべし。

問うて曰く、色は假名なるが故に散ず可し。四衆には色なし、云何にかして散ずべきや。

答へて曰く、四陰も亦た是れ假名なり。生・老・住・無常觀の故に散じて空と爲す。何となれば生時は異なり、老時は異なり、住時は異なり、無常の時は異なるを以てなり。復次に、三世の中に是の四衆を觀ずるに皆な亦た散滅す。復次に、心は所緣に隨ひ、緣滅すれば則ち滅し、緣破るれば則ち破る。復次に、此の四衆は不定なり。緣に隨つて生ずるが故なり。譬へば火が所燒の處に隨つて名を得、若し燒處を離れては火は不可得なるが如し。眼は色を緣ずるに因つて眼識を生ず、若し所緣を離れては識は不可得なり。餘の情識も亦た是の如し。經の中に、佛、羅陀に告げて、「此の色衆を破壞散滅して所有なからしむ、餘衆も亦た是の如し」と說くが如し。是を散空と名く。　復次に、譬へば小兒が土を聚めて臺殿・城郭・閭里・官舍と爲し、或は名けて米と爲し、或けは名けて麪と爲し、愛著し守護し、日暮れて將に歸らんとするや、其の心を捨離して、蹋壞し散滅するが如く、凡夫人も亦た是の如し。未だ欲を離れざるが故に諸法の中に於て愛著の心を生ず、若し欲を離るることを得て、諸法を見れば皆な散壞し棄捨す、是を散空と名く。　復次に、諸法は合集の故に各名字あり。凡夫人は名字を隨逐して、顚倒を生じて染著す。佛、爲に法を說きたまはく、「當に其實を觀ずべし、名字を逐ふこと莫れ、有・無は皆な空なり」と。迦旃延經に、「集諦を觀ずれば則ち無の見なく、滅諦を觀ずれば則ち有の見なし」と說くが如し。是の如き種種の因緣を是を散空と名く。

性空とは諸法の性は常に空なるも、假業相續するが故に空ならざるが若きに似たり、譬へば水性

じて無始を破すること能はず。無始は能く畢竟じて有始を破す。是の故に無始を勝れたりと爲す。善が不善を破り、不善が善を破するが如きは、互に相破すと雖も、而も善は能く畢竟して惡を破す。賢聖の道を得て永く惡を作さざるが如し。惡法は則ち然らず、勢力微薄なるが故なり。人の五逆罪を起して善根を斷じ、地獄に墮すと雖も、久うして一劫に過ずして、緣に因て地獄を脫することを得、終に道果を成ずるが如し。無始・有始の優劣不同も亦た是の如く、無始の力大なるを以ての故に、能く有始を破す、是の故に有始空を說かざるなり。

散空とは、散は別離の相に名く。諸法の如きは和合するが故に有なり。車は輻輞轅轂が、衆合するを以て車と爲り、若し離散して各一處に在れば則ち車の名を失するが如し。五衆和合の因緣の故に名けて人と爲す、若し五衆を別離すれば人は得べからず。

問うて曰く、若し是の如く說けば但だ假名のみを破して色を破せず、亦た輻輞を離散すれば車の名を破すべきも、輻輞を破せざるが如し。散空も亦た是の如く、但だ五衆を離散して人を破すべきも、而も色等の五衆を破せず。

答へて曰く、色等も亦た是れ假名なりと破す。所以は何んとなれば、微塵の和合せるを假に名けて色と爲すが故なり。

問うて曰く、我は微塵を受けず、今は可見の者を以て色と爲し、是れ實に有りと爲す、云何に散じて空と爲すや。

答へて曰く、若し微塵を除けば、四大和合の因緣より、可見の色も亦た是れ假名なり。四方の風和合して水を扇げば則ち沫聚を生ずるが如く、四大和合して色を成ずることも亦た是の如し。若し四大を離散すれば則ち色あること無し。　復次に、是の色は香味觸及び四大の和合を以ての故に色の見るべき有り。諸の香味觸等を除いて、更に別に色なし。智を以て分別するに各各離散して色は

爲すと說きたまへり。(これ)衆生多く、常・樂に著して、無常・苦に著せざるを以てなり。是の故に、無常・苦の諦を以て是の常・樂の倒を破す。是を以ての故に無常・苦を諦と爲すと說きたまふ。若し衆生あり、無常・苦に著せば、無常・苦も亦た空なりと說く。有始・無始も亦た是の如く、無始は能く始に著する倒を破す。若し無始に著すれば復た無始を以て空と爲す。是を無始空と名く。

問うて曰く、有始の法も亦た是れ邪見にして應當に破すべし。何を以てか但だ無始を破するをのみ說くや。

答へて曰く、有始は是れ大惑なり。所以は何となれば、若し始あらば初身には則ち罪福の因緣なくして、而も善惡の處に生ず。若し罪福の因緣に從つて生ぜば、名けて初身と爲さず。そは若し罪福あれば則ち前身に從つて後身を受くればなり。若し世間無始ならば是の如き咎なし。是の故に菩薩は先に已に是の麁惡の邪見を捨て、菩薩は常に無始を用つて衆生を念ずるを習ふが故に無始と說く。常に因緣の法を行ずるが故に、法は無始なりと言ふも、未だ一切智を得ざるが故に、或は無始の中に於て錯謬あり。是の故に無始空を說く。復次に無始は已に有始を破すれば、空を須ひずして有始を破す。今は無始を破せんと欲するが故に無始空說をく。

問うて曰く、若し無始は有始を破すれば、有始も亦た能く無始を破せん。汝は何を以てか但だ空を以て無始を破すと言ふや。

答へて曰く、是の二は皆な邪見なりと雖も而も差別あり。有始は諸の煩惱を起す邪見の因緣なり。無始は慈悲及び正見を起す因緣なり。所以何となれば衆生が無始より世界の苦惱を受くることを念じて悲心を生じ、身より次第に身を生じて、相續して斷えざることを知り、便ち罪福の果報を知つて正見を生ずればなり。若し人、無始に著せされば、卽ち是れ助道の善法なり。若し相を取り著を生ぜば、卽ち是れ邪見なること、常・無常の見の如し。有始の見は、無始の見を破すと雖も、畢竟

を破すれば、無始は卽ち復た患と爲る、復た無始空を以て是の無始を破す。是を無始空と名く。

問うて曰く、若し爾らば、佛は何を以てか、衆生は生死に往來して本際不可得なりと說きたまふや。

答へて曰く、衆生をして久遠より已來、生死に往來して大苦を爲すを知り、厭患の心を生ぜしめんと欲し給へばなり。經に說くが如く、一人世間に在つて一劫の中に身を受け害を被る時を計るに、諸血を聚集するに海水よりも多く、啼泣して涙を出し、及び母乳を飮むことも皆な亦た是の如く、身骨を積集すること毘浮羅山より過ぎたり。譬喩へば、天下の草木を斬つて二寸の籌と爲して、其の父祖・曾祖を數ふるに猶ほ盡くすこと能はず、又盡く地を以て泥丸と爲して、其の母及び曾祖母を數ふるに猶ほ亦た盡くさざるが如し。是の如き等無量劫の中に生死の苦惱を受け、初・始は不可得なるが故に、心に怖畏を生じて諸の結使を斷ず。無常の如きは邊(見)たりと雖も而も佛は是の無常を以て衆生を度したまへり。無始も亦た是の如く、是れ邊(見)たりと雖も、亦た是の無始を以て衆生を度し給へり。衆生を度して厭心を生ぜしめんが爲の故に、無始ありと說くも、實に無始ありと爲すに非ず。何となれば實に無始あらば無始空を說くべからざればなり。

問うて曰く、若し無始は實法に非ずんば云何にして以て人を度するや。

答へて曰く實法の中には人を度するに、諸の說法すべき語言なし。人を度するは皆是れ有爲虛誑の法なり。佛は方便力を以ての故に、是の無始を說き給ふ。無著の心を以て說き給ふが故に、受者も亦た無著なることを得、無著の故に則ち厭離を生ず。 復次に、宿命智を以て衆生を見るに、生死相續して無窮なり、是の時を實と爲す。若し慧眼を以てすれば、則ち衆生及び法の畢竟空を見る。是を以ての故に無始空と說く。般若波羅蜜の中に說くが如くんば、常觀も不實なれば、無常觀も亦た不實なり。苦觀も不實なれば、樂觀も亦た不實なり。而も佛は常・樂は倒と爲し、無常・苦を諦と

因緣によつて有り。前世も復た前世によつて有り。是の如く展轉して、衆生の始あること無く、法も亦た是の如し。何となれは、若し先に生じて後に死せば、則ち死に從はざるが故に生ず、生も亦た死無けん。若し先に死して後に生あらば、則ち因なく緣なく、亦た生ぜずして而も死あり、是を以ての故に一切法は則ち始あること無し。經の中に說くが如し。佛、諸の比丘に語りたまはく、「衆生は始あること無し、無明に覆はれ愛に繫がれて生死に往來するも、始は不可得なり」と。是の無始法を破するが故に名けて無始空と爲す。

問うて曰く、無始は是れ實なり、破すべからず。何となれば、若し衆生及び法に始あらば、邊見に墮し、無因見に墮す。是の如き等の過を遠離するが故に、應に衆生及び法は無始なりと說くべし。

答へて曰く、今無始空を以て無始の見を破するを爲すとも又有始の見に墮せず。譬へば人を火より救ふも深水の中に著くべからざるが如し。今是の無始を破するも亦た有始の中に著すべからず、是れは則ち中道を行ず。

問うて曰く、云何に無始を破するや。

答へて曰く、無窮なるを以ての故なり。若し無窮なれば則ち後なく、無窮にして後無くば則ち亦た中なし。若し無始なれば則ち一切智人を破すと爲す。所以いかんとなれば、若し世間無窮なれば則ち其の始を知らず、始を知らざるが故に則ち一切智人なし。若し一切智人あれば無始と名けず。復次に、若し衆生相を取り、又諸法の一相、異相を取り、此の一・異の相を以て今世より前世を推し、前世より復た前世を推し、是の如く展轉して、衆生及び法の始は不可得なれば、則ち無始の見を生ず。是の見は虛妄なり。一異を以て本と爲す。是の故に破すべし。有爲空もて有爲法を破するが如きは、是の有爲空は、卽ち復た患と爲る。復た無爲空を以て無爲法を破す。今無始を以て有始

無常は今有にして後空なり。

答へて曰く、無常は則ち是れ空の初門なり。若し無常を諦了せば、諸法は則ち空なり。是を以ての故に聖人は初に四行を以て世間の無常を觀ず。若し所著の物を見るに無常なり、無常なれば則ち能く苦を生じ、苦なるが故に心に厭離を生ず。若し無常空相ならば則ち取る可らず、幻の如く化の如し、是を名けて空と爲す。外物既に空なれば、內主も亦た空なり。是を無我と名く。 復次に畢竟空は是を眞空と爲す。二種の衆生あり。一は多く愛を習ひ、二は多く見を習ふ。愛多き者は喜んで著を生じ、著する所・無常なるを以ての故に、憂苦を生ず。是の人の爲には、「汝が著する所の物は、無常にして壞するが故に、汝は則ち之が爲に苦を生ず。若し此の所著の物、苦を生ぜば著を生ずべからず」と說く。是を無作解脫門を說くと名く。見多き者は、諸法を分別することを爲し、實を知らざるを以ての故に、邪見に著す。是の人の爲の故に、直に諸法は畢竟空なりと說く。

復次に、若し所說あれば皆な是は破すべし、破すべきが故に空なり。所見既に空なれば、見主も亦た空なり。是を畢竟空と名く。汝が「聖人所得の法は應に實なるべし」と言ふは、聖人の法を以て能く三毒を滅するは顚倒虛誑に非ず、能く衆生をして老病死の苦を離れて涅槃に至ることを得せしむ。是れは實と名くと雖も、皆な因緣和合より生ずるが故に、先に無にして今有なり。今有にして後無なるが故に、受くべからず。著す可らざるが故に亦た空にして實に非ず。佛栰喩經に說きたまふが如くんば、善法すら尙ほ捨つべし、何に況んや不善をや。 復次に、聖人の有爲・無漏の法は有漏法の緣より生ず。有漏法は虛妄不實の緣より生ずる所の法なり。云何んぞ實と爲さん。有爲法を離れて無爲法無きことは先に說けるが如し。有爲法の實相は卽ち是れ無爲法なり。是を以ての故に、一切法は畢竟不可得なり、故に名けて畢竟空と爲す。

無始空とは、世間の若しくは衆生、若しくは法は、皆な始あること無し。今生の如きは、前世の

爲す。若し龜甲の上に著けて、山羊の角を以て打ち破ることを知れば、則ち牢固ならざることを知る。七尺の身には、大海を以て深しと爲せども、羅睺阿脩羅王は、大海の中に立ちて膝水上に出で、兩手を以て須彌の頂を隱し、下に向つて忉利天の喜見城を觀る。此は則ち大海を以て淺しと爲す。若し短壽の人は地を以て常久牢固と爲し、長壽の者は地を無常にして牢固ならずと見る。佛說七日喩經の如し。佛、諸の比丘に告げたまはく、「一切の有爲法は無常變異して皆な磨滅に歸す。劫盡きんと欲する時は、大旱積ること久しく、藥草樹木は皆な悉く焦枯す。第二の日出づるあるや、諸の小流水は皆な悉く乾き竭き、第三日出づるや、大河の流水は亦た都べて涸れ盡き、第四日出づるや閻浮提の中の四大河、及び阿那婆達多池は皆な亦た空渴し、第五日出づるや、大海乾涸し、第六日出づるや、大地須彌山等、皆な悉く烟を出だすこと窯燒器の如く、第七日出づるや、悉く皆な熾然として復た烟氣なく、地及び須彌、乃至梵天まで、火然え滿つ、爾の時に、新に光音天に生ぜる者、火を見て、怖畏して言く、既に梵宮を燒けり、將に此に至ること無きやと。先生の諸天は後生の天を慰喩して言く、(吾)曾つて已に此に有りたるに、正に梵宮を燒くも、彼に於て滅して此に來り至らざりき」と。三千大千世界を燒き已つて復た灰炭なし。佛、比丘に語りたまはく、「此の如き大事は、誰か之を信ずる者ぞ。唯だ眼に見ること有りて乃ち能く信ずるのみ。又比丘よ、過去の時に須涅多羅外道師あり。欲を離れて四梵行を行じ。無量の弟子も亦た欲を離るることを得たり。須涅多羅は是の念を作さく、我は弟子と同じく一處に生ずべからず、今當に深く慈心を修すべしと。此の人は深く慈を思ふを以ての故に光音天に生じたり」と。佛の言はく、「須涅多羅は我が身是なり。我は是の時、眼に此の事を見たり」と。是を以ての故に當に知るべし。牢固なる實物も、皆な悉く滅に歸することを。

問うて曰く、汝は畢竟空を說くに何を以てか無常の事を說くや、畢竟空は今卽ち是れ空にして、

り。山河樹木、衆生の類の如きは皆な地に依止し、地は水に依止し、水は風に依止し、風は虚空に依止するも、虚空は依止する所なし。若し本にして依止する所なくんば、末も亦た依止する所なけん。是を以ての故に當に一切法の畢竟空なるを知るべし。

問うて曰く、然らず、諸法は應に根本あるべし。神通にて變化する所あるに、化する所は虚なりと雖も、而も化主は空ならざるが如し。

答へて曰く、凡夫人は見る所の化物は久しからざるが故に、之を謂つて空と爲し、化主は久しきが故に、之を謂つて實と爲す。聖人は、化主も復た前世の業因緣の和合より生じ、今世に復た諸の善法を集めて神通力を得るが故に能く化を作すと見る。般若波羅蜜の後品の中に說くが如くんば、三種の變化あり。煩惱變化、業變化、法變化〔法は法身なり。〕なりと。是の故に化主も亦た空なることを知る。

問うて曰く、諸の牢固ならざる者は、不實なるが故に、應に空なるべし、諸の牢固なる物、及び實法は空なるべからず。大地・須彌山・大海水・日月・金剛等の如きは、色の實法にして、牢固なるが故に、空なるべからず。所以いかんとなれば、地及び須彌は常に住して劫を竟るが故なり。衆川は竭くることとあらんも、海は則ち常に滿ち、日月天を周るは窮極すること有ること無けん。又凡人の所見の如きは虚妄不眞なるが故に、應に空ずべし。聖人の所得、及び法性眞際涅槃の相の如きは、應に是れ實法なるべし。云何んぞ畢竟皆な空と云ふや。復次に、有爲法は因緣生なるが故に、不實なれども、無爲法は因緣より生ぜざるが故に實なるべし。復た云何んぞ畢竟空と言ふや。

答へて曰く、堅固不堅固は不定なるが故に皆な空なり。所以いかんとなれば有人は此を以て堅固と爲し、有人は此を以て不堅固と爲す。人は金剛を以て牢固と爲せども、帝釋は手に執ること人の杖を捉ふるが如く、以て牢固と爲さざるが如し。又金剛を破する因緣を知らざるが故に以て牢固と

云何んぞ涅槃に於て捨離を求めんや。　復次に、比丘の四重禁を破るが如きは、是を畢竟破戒と名く。得道に任へざるなり。又五逆罪を作すが如きは、畢竟じて三善道を閉るなり。若し聲聞の證を取れば畢竟じて佛と作るを得ず。畢竟空も亦た是の如く、一切法に於て、畢竟空にして、復た餘ある無し。

問うて曰く、一切法畢竟空なりとは、是の事は然らず。何となれば三世十方の諸法、乃至法相、法住には、必ず實あるべし、一法の實あるを以ての故に、餘法を虛妄と爲す、若し一法の實なる者なくんば亦た諸の虛妄法、(また)是の畢竟空あるべからず。

答へて曰く、乃至一法の實なる者有ること無し。何となれば若し乃至一法の實なる者あらば、是の法は應に若しくは有爲、若しくは無爲なるべし。若し是れ有爲ならば、有爲空の中に已に破せり、若し是れ無爲ならば、無爲空の中に亦た破せり。是の如く世間・出世間も、若し世間ならば內空、外空、內外空、大空もて已に破せり。若し出世間ならば第一義空もて已に破せり。色法・無色法・有漏・無漏法も、亦た是の如し。復次に、一切法は、皆な畢竟空なり。是の畢竟空も亦た空なり。空にして法ある無きが故に、亦た虛と實と相待すること無し。　復次に、畢竟空とは、一切法を破して遺餘なからしむるが故に、畢竟空と名く。若し小にても遺餘あらば、畢竟と名けず。若し相待の故に、應に有るべしと言はば、是の事は然らず。

問うて曰く、諸法は盡く空ならず、何となれば因緣所生の法は空なるも、而も因緣は不空なればなり、譬へば、樑椽の因緣和合するが故に舍と名く、舍は空なるも、樑椽は空なるべからざるが如し。

答へて曰く、因緣も亦た空なり。因緣は不定なるが故なり。譬へば父子の如し、父生むが故に名けて子と爲し、子を生むが故に名けて父と爲す。　復次に、最後の因緣は依止する所無きが故な

無爲は空なりとは、涅槃の相を取るを破す、是を異と爲す。 復次に、若し人有爲を捨てて、無爲に著せば、著するを以ての故に、無爲は卽ち有爲と成る。是の故に無爲を破すと雖も、邪見に非ず。是を有爲、無爲の空と名く。

畢竟空とは有爲空、無爲空を以て、諸法を破して遺餘あること無からしむ。是を畢竟空と名く。漏盡の阿羅漢をば、畢竟淸淨と名け、阿那含乃至無所有所の欲を離れたるをば、畢竟淸淨と名けざるが如し。此も亦た是の如く、內空、外空、內外空、十方空、第一義空、有爲空、無爲空にして更に餘に空ならざる法あること無し。是を畢竟空と名く。 復次に、若し人七世、百千萬億無量世に貴族なる、是を畢竟貴と名け、一世二三世の貴族を以て眞貴と爲さず。畢竟空も亦た是の如く、本より已來定んで實にして空ならざる者あること無し。有人の言く、今は空なりと雖も最初は不空なり。天、造物の始、及び冥初の微塵の如しと。是等も皆な空なり。何となれば果無常なれば因も亦た無常なればなり。虛空の如きは果と作らず亦た因と作らず、天及び微塵等も亦た應に是の如くなるべし。若し是れ常ならば、無常を生ずべからず。若し過去に定相なくんば、未來・現在世も亦た是の如し。三世の中に於て、一法として定んで、實にして空ならざる者あること無し。是を畢竟空と名く。

問うて曰く、若し三世都べて空にして、乃至微塵及び一念も所有なくんば、則ち是は大に畏る可き處なり。諸の智慧人は禪定の樂を以ての故に世間の樂を捨て、涅槃の樂を以ての故に禪定の樂を捨つ。今畢竟空中、乃至、涅槃あること無くんば何の法に依止して涅槃を捨することを得るや。

答へて曰く、吾我に著する人あり、一異の相を以て諸法を分別す。是の如き人は則ち以て異と爲す。佛の說きたまふが如くんば、凡夫人の大に驚怖する處は所謂、無我・無我所なり。 復次に、有爲法には三世あり、有漏法なるを以ての故に著を生ずる處なり。涅槃は一切の愛著を斷ぜるに名く。

所以いかんとなれば若し有爲法と無爲法とを分別すれば、則ち有爲と無爲とに於て礙あり、若し諸の憶想分別を斷じ、諸緣を滅し、無緣の實智を以て生數の中に墮せざれば、則ち安隱常樂の涅槃を得。

問うて曰く、前の五空は皆な別說せり。今有爲無爲の空は何を以てか合說するや。答へて曰く、有爲・無爲の法は、相對して有なり。若し有爲を除けば卽ち無爲なく、若し無爲を除けば則ち有爲なし。是の二法に一切法を攝す。行者は有爲法の無常・苦・空等の過を觀じ、無爲法の所益の處廣きことを知る。是の故に二事を合說す。

問うて曰く、有爲法は因緣和合より生じ、自性なきが故に空なり、此は則ち爾るべし。無爲法は因緣生の法に非ず、破ること無く、壞すること無く、常に虛空の如し、云何なれば空なりや。

答へて曰く、先に說くが如く、若し有爲を除けば則ち無爲はなし、有爲の實相は卽ち是れ無爲なり。若し有爲の空なるが如くば、無爲も亦た空なり、二事は異ならざるを以ての故なり。復次に、人あり、有爲法の過罪を聞いて無爲法に著し、著するを以ての故に諸の結使を生ず。阿毘曇の中に說くが如し。八十九の有爲法の緣六、無爲法の緣三、當に分別すべし。欲界繫の盡諦所斷の無明使は或は有爲緣、或は無爲緣なり。何者か有爲緣にして盡諦所斷なる。有爲法緣使に相應する無明使なり。何者か無爲緣にして盡諦所斷なる。有爲法緣使に相應せざる無明使なり。色・無色界の無明も亦た是の如し。此の結使を以ての故に、能く不善業を起し、不善業の故に三惡道に墮す。是の故に無爲法は空なりと言ふ。無爲緣使とは疑・邪見・無明なり。疑とは涅槃法の中に於て有か無か（と疑ふなり）。邪見とは若し心を生じて定んで涅槃なしと言ふなり。是の邪疑に相應する無明、及び獨りの無明を合して無明使と爲す。

問うて曰く、若し無爲法は空なりと云はば、邪見と何ぞ異ならん。

答へて曰く、邪見の人は涅槃を信ぜず、然して後に心を生じて、定んで涅槃の法は無しと言ふ。

きが故に不可得なり、是の故に法も亦た空なることを知る。

問うて曰く、有爲法の中に、常相は不可得ならば、不可得とは、是れ衆生空と爲すや、是れ法空と爲すや。

答へて曰く、有人の言く、我心顚倒の故に我を計して常と爲す。是の常を空ずれば則ち衆生空に入ると。有人の言く、心を以て常と爲す、梵天王が是の四大を說くが如し。四大の造色は悉く皆な無常なり、心意識は是れ常なり、是の常を空ずれば則ち法空に入ると。或は有人の言く、五衆は卽ち是れ常なり、色衆の如きは變化有りと雖も而も亦た滅せず、餘衆は心の如し。(この)五衆の空を說けば卽ち是れ法空なり、是の故に常空も亦た法空の中に入ると。復次に、有爲法、無爲法の空とは、行者は、有爲法無爲法の實相は作者あること無く、因緣和合の故に有なり。皆な是れ虛妄にして憶想分別より生じ、內に在らず外に在らず、兩の中間に在らず、凡夫の顚倒の見の故に有りと觀ず。智者は有爲法に於て其の相を得ず、但だ假名なることを知る。此の假名を以て衆生を導引すれど、其の虛誑不實にして、無生、無作なるを知りて、心に著する所なし。復次に、諸の賢聖人は、有爲法を緣ぜずして而も道果を得、有爲法の空を觀ずるを以ての故に、有爲法に於て心繫著せざるが故なり。復次に、有爲を離れて則ち無爲なし。所以いかんとなれば有爲法の實相は卽ち是れ無爲なればなり。無爲の相は則ち有爲に非ず。但だ衆生の顚倒の爲の故に分別して、有爲相とは生滅住異なり、無爲相とは不生不滅不住不異なり、是を佛法に入るの初門と爲すと說く。若し無爲法に相あらば則ち是れ有爲なり。有爲法の生ずる相は、則ち是れ集諦なり。相を滅するは則ち是れ盡諦なり。若し集まらずんば則ち作らず、若し作らざれば則ち滅せず。是を無爲法は實相の如しと名く。若し是の諸法實相を得れば、則ち復た生滅住異の相の中に墮せず。是の時に有爲法と無爲法とを見ず、合して無爲法と有爲法とを見ず、合して有爲法と無爲法に於て相を取らず、是を無爲法と爲す。

答へて曰く、涅槃あり、是れ第一寶、無上法なり。是に二種あり。一には有餘涅槃、二には無餘涅槃なり。愛等の諸の煩惱を斷ずる、是を有餘涅槃と名く。聖人が、今世に受くる所の五衆盡きて更に復た受けざる、是を無餘涅槃と名く。涅槃無しと言ふことを得ず。衆生は涅槃の名を聞いて、邪見を生じ、涅槃の音聲に著して、若しくは有なり、若しくは無なりと戲論を作すを以て著を破するを以ての故に、涅槃は空なりと說く。若し人有に著すれば、是は世間に著し。若し無に著すれば、則ち涅槃に著す。是の凡人の著する所の涅槃を破して、聖人の得る所を破せず、何となれば聖人は一切法の中に於て相を取らざるが故なり。

復次に、愛等の諸の煩惱を假に名けて縛と爲す。若し道を修して是の縛を解き、解脫を得れば即ち涅槃と名く。更に法あつて名けて涅槃と爲すもの無し。人が械を被むりしが脫するを得て、而も戲論を作し、是は械、是は脚なり、何者か是れ解脫なる(と云ふが)如し。是の人は笑ふ可し、脚・械の外に、更に解脫を求む。衆生も亦た是の如く、五衆の械を離れて、更に解脫の法を求む。復次に。一切法は第一義を離れず、第一義は諸法實相を離れず、能く諸法實相をして空ならしむるを名けて第一義空と爲す、是の如き等の種種を名けて第一義空と爲す。

有爲空、無爲空とは、有爲法とは因緣和合の生に名く、所謂、五衆、十二入、十八界等なり。無爲法は、因緣なく、常に不生不滅なること虛空の如くなるに名く。今有爲法は二の因緣の故に空なり。一には我なく我所なく、及び常相變異せざるは、得べからざるが故に空なり。二には有爲法の有爲法たる相は、空にして不生不滅なり。(何となれば)所有なきが故なり。

問うて曰く、我・我所・及び常相は不可得なるが故に應に空なるべし。云何なれば有爲法の有爲法たる相は空なりと言ふや。

答へて曰く、若し衆生なければ、法は所依なく、又無常なるが故に、住する時なし、住する時な

問うて曰く、第一義空は亦た能く無作法、無因緣法、細微法を破す、何を以て大空と言はざるや。
答へて曰く、前に已に大の名を得るが故に名けて大と爲さず、今第一義の名は異なりと雖も、義は實に大と爲す。出世間には涅槃を以て大と爲し、世間には方を以て大と爲す。是の故に第一義も亦た是れ大空なり。　復次に、大邪見を破するが故に、名けて大空と爲す。行者、慈心を以て東方の一國土の衆生を緣じ、復た一國土の衆生を緣じ、是の如く展轉して緣ずる時の如きは、若し盡く東方の國土を緣ずと謂はば、則ち邊見に墮し、若し未だ盡くさずと謂はば、則ち無邊見に墮す。是の二見を生ずるが故に、卽ち慈心を失す。若し方空を以て是の東方を破すれば、則ち有邊無邊見を滅す。若し方空を以て東方を破せざれば、則ち東方心に隨ふ。心に隨つて已まざれば、慈心則ち滅して邪心則ち生ず。譬へば大海の潮の時、その常の限に至れば、水は則ち旋還するに、魚あり、若し還らずんば則ち漂つて、露地に在つて諸の苦患あり、若し魚に智あれば、則ち水に隨つて還り、永く安隱を得るが如く、行者も是の如し。若し心に隨つて還らざれば、則ち邪見に漂在し、若し心に隨つて還れば、慈心を失はず。是の如く、惡時の大邪見を破するが故に、名けて大空と爲す。

第一義空とは第一義は諸法實相に名く。破せず壞せざるが故なり。是の諸法實相も亦た空なり。何となれば、受くること無く著すること無きが故なり。若し諸法實相は有ならば應に受くべく著すべし、實無きを以ての故に受けず著せず。若し受け著せば卽ち是れ虛誑なり。　復次に、諸法の中の第一の法を名けて涅槃と爲す。阿毘曇の中に說くが如し。「云何なるが有上法、一切有爲法、及び虛空、非智緣盡にして、云何なるが無上法、智緣盡なる」と。智緣盡は是れ卽ち涅槃なり。涅槃の中には、亦た涅槃の相なし、涅槃空は是れ第一義空なり。

問うて曰く、[三〇] 若し涅槃は空無相ならば、云何にして聖人は、三種の乘に乘じて涅槃に入るや。又一切の佛法は、皆な涅槃の爲の故に說く。譬へば衆流の皆な海に入るが如し。

問うて曰く、十方空は、何を以てか名けて大空と爲すや。

答へて曰く、東方に無邊なるが故に、名けて大と爲し、亦た一切處に有るが故に名けて大と爲し、一切色に遍ずるが故に名けて大と爲し、常に有なるが故に名けて大と爲し、世間を益するが故に名けて大と爲し、衆生をして迷悶せざらしむるが故に名けて大と爲し、是の如き大方を能く破するが故に名けて大空と爲す。餘の空は因緣生の法を破す。作法麁法は破し易きが故に名けて大と爲さず。是の方は因緣生の法に非ず、作法に非ず、微細の法にして、破し難きが故に、名けて大空と爲す。

問うて曰く、佛法の中の若きは方なし。三無爲・虚空・智緣盡・非智緣盡にも亦た攝せざる所なり、何を以てか方ありと言ふや。亦た是は常にして、是れ無爲法なり。因緣生の法に非ず。作法にても微細法にても非ず。

答へて曰く、是の方たる法は聲聞の論議の中には無し、摩訶衍法の中には世俗諦を以ての故に有り。第一義の中には一切法は不可得なり、何に況んや方をや。五衆の和合を假に衆生と名くるが如く、方も亦た是の如し。四大造色の和合の中に此の間、彼の間等を分別し、假に名けて方と爲す。日出の處は是れ則ち東方、日沒の處は是れ則ち西方なり。是の如き等は是れ方の相なり。是の方は自然に常に有るが故に因緣生に非ず、亦た先無今有、今有後無にあらざるが故に、作法に非ず、現前に知るが故に、是れ微細の法に非ず。

問うて曰く、方若し是の如くならば、云何にしてか破すべきや。

答へて曰く、汝聞かずや、我先に世俗諦を以ての故に有にして、第一義の故に破すと說けり。俗諦を以て有なるが故に斷滅の中に墮せず、第一義（を以て）破するが故に常の中に墮せず、是を略して大空の義を說くと名く。

亦た無有り。是を以ての故に一切法は應に空なるべし。衆生は顚倒して內の六情に著するを以ての故に、行者は是の顚倒を破して名けて內空と爲す。外空、內外空も亦た是の如し。

空空とは空を以て內空・外空・內外空を破し、是の三空を破するが故に名けて空空と爲す。　復次に、先づ法空を以て內外法を破し、復た此の空を以て是の三空を破す、是を空空と名く。　復次に、空三昧を以て、五衆の空を觀じ、八聖道を得、諸の煩惱を斷じて、有餘涅槃を得。先世の業因緣の身命盡くる時、八道を放捨せだと欲するが故に、空空三昧を生ず、是を空空と名く。

問うて曰く、空と空空と何等の異ありや。

答へて曰く、空は五受衆を破し、空空は空を破す。

問うて曰く、空若し是れ法空ならば、已に破せりと爲す。空若し法空に非ずんば、何の破する所ぞ。

答へて曰く、空は一切法を破し、唯、空の在る有り。空は一切法を破し已らば、空も亦た應に捨すべし。是を以ての故に是の空空を須ゆ。　復次に、空は一切法を緣じ、空空は但だ空のみを緣ず。一の健兒あつて、一切の賊を破るに復た更に人あつて、能く此の健人を破るが如し。空空も亦た是の如し。亦た藥を服するに藥は能く病を破し、病已に破することを得ば、藥も亦た應に出だすべく、若し藥を出ださゞれば、則ち復た是れ病なるが如し。空を以て諸の煩惱の病を滅せば、恐らくは空も復た患を爲さん。是の故に空を以て空を捨す。是を空空と名く。

大空とは、聲聞法の中には法空を大空と爲す。雜阿含の大空經に、「生は、老死の因緣たり。」と說くが如し。有人は言ふ、「是の老死は是れ人の老死なり」と。二は倶に邪見なり。是の人の老死は則ち衆生空なり、是の老死は是れ法空なり。摩訶衍經に十方を說いて、「十方の相は空なり」と(いふ)。是を大空と爲す。

り、又は盜を怖畏し牆壁を穿ちて、亦た免れ出づることを得るも有るが如し。聲聞は、但だ吾我の因緣を破して、諸の煩惱を生ぜず、諸法の愛を離れ、老病死の惡道の苦を怖畏するも、復た欲の本末を推求して、了了に諸法を壞破せず、但だ脫するを得るを以て事と爲す。大乘は三界の獄を破り、魔衆を降伏し、諸の結使を斷じ及び習氣を滅し、一切諸法の本末を了知し、通達無礙に、諸法を破散し世間をして涅槃の如く、同じく寂滅の相ならしめ、阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切衆生を將いて三界より出さしむ。

問うて曰く、大乘には何の方便あつて能く諸法を破壞するや。

答へて曰く、佛說きたまはく、「色は種種の因緣より生じて、堅實有ること無し。水の波浪して、泡沫を成し、暫らく見えて、卽ち滅するが如く、色も亦た是の如し。今世の四大は、先世の行業の因緣和合するが故に色を成ずることを得、因緣滅するが故に色も亦た倶に滅す。無常道を行じ、轉じて空門に入る。所以は何んとなれば諸法は生滅して、住する時あること無し、若し住する時なくんば則ち取るべき無し。　復次に、有爲の相なるが故に生時に滅あり、滅時に生あり。若し已生の生の若きは、用ふる所なく、若し未生の生の若きは生ぜる所なし。法と生とは、亦た異なり有るべからず、何となれば、生若し法を生ぜば、應に生を生ずること有るべく、是の如くして復た生あるべくんば、是れ則ち無窮ならん。若し生を生ずるに更に生なくんば生も亦た生ずること有るべからず。若し生に生ずること有ること無ければ法も亦た生ずること有るべからず。是の如くして生は不可得なり、滅も亦た是の如し。是を以ての故に諸法は空にして不生不滅なり。是を實と爲す。

復次に、諸法若し有ならば終に無に歸せん。若し後に無ならば初も亦た無なるべし。人の履を著くるが如し。初より已に故きは有れども微細にして覺せず。若し初めに故き無くんば則ち應に常に新なべるし。若し後に故き相有らば初めにも亦た故き有り法も亦た是の如く、後の無あるが故に初も

は是れ一法にして因とするところの者は多し。一は多と爲らず。多は一と爲らず。 復次に、若し足等の分を除いて別に身あらば、一切世間と皆な相違背せん。是を以ての故に身は卽ち是れ諸分なりと言ふことを得ず。亦た諸分と異なると言ふことを得ず。是を以ての故に則ち身なし。身無きが故に足等も亦た無し。是の如き等を名けて內空と爲す。房舍等の外法も亦た是の如く、空なるを名けて外空と爲す。

問うて曰く、身・舍等を破すれば、是れ一を破し異を破すと爲す。一を破し異を破する是の破は外道の經なり。佛經の中には實に內外法あり。所謂內は六情、外は六塵なり。此れ云何んぞ無ならんや。

答へて曰く、是は內外の法和合して假に名字のみあるなり。亦た身の如く舍の如し。復次に、略說するに二種の空あり。衆生空と法空なり。小乘の弟子は鈍根なるが故に、爲に衆生空を說く、我・我所無きが故に、則ち餘法に著せず。大乘の弟子は利根なるが故に、爲に法空と說くに、卽時に世間は常空にして涅槃の如しと知る。聲聞の論議師は內空を說く。內法の中に於ては、我なく我所なく、無常にして作者なく、知者なく、受者なし、是を內空と名く。外空も亦た是の如し。內法の相、外相の相は卽ち是れ空なりとは說かず。大乘は內法の中に內法の相なく、外法の中に外法の相なしと說く。般若波羅蜜の中に說くが如くんば、色の色相は空なり。受・想・行・(乃至)識の識相は空なり。眼の眼相は空なり。耳・鼻・舌・身・(乃至)意の意相は空なり。色の色相は空なり、聲・香・味・觸・(乃至)法の法相は空なり。是の如く等、一切の諸法は自法空なり。

問うて曰く、此の二種の說、內外の空は、何れが是れ實なるや。

答へて曰く、二は皆な是れ實なり。但だ小智鈍根の爲の故に先づ衆生空を說き、大智利根の者の爲に法空を說く。人の閉獄せらるゝに、桎梏を破壞し獄卒を傷殺して意に隨つて去ることを得るあ

受の中に多く樂顚倒に著し、心の中に多く常顚倒に著し、法の中に多く我顚倒に著す。是の故に行者は身は不淨なりと觀じ、受は苦なりと觀じ、心は無常なりと觀じ、法は無我なりと觀ずるなり。復次に、內外空とは內外に定法あること無く、互に相因待するが故に謂つて內外と爲し。彼は以て外と爲して、我は以て內と爲し。我は以て外と爲して、彼は以て內と爲す。人の繫がる所の內に隨つて、內法と爲し、人の著する所の外法に隨つて、外と爲す。人が自舍を內と爲し、他舍を外と爲すが如し。行者は是の內外法を觀ずるに定相なきが故に空なり。復次に、是の內外法は自性あること無し。何となれば、和合して生ずるが故なり。是の內外法も亦た和合の因緣の中に在らず。若し因緣の中に無しとせば餘處にも亦た無なり。內外法の因緣も亦た無なり。因緣なきが故に內外法は空なり。

問うて曰く、內外法は定んで有なり、云何なれば無と言ふや。手足等が和合するが故に、身の法生ずるあるが如し。是を內法と名く。梁・椽・壁等が和合するが故に、屋の法生ずるあるが如し。是を名けて外と爲す。是の身法は別名ありと雖も亦た足等と異ならず、所以何んとなれば、若し足等を離れては、身は不可得の故なり。屋も亦た是の如し。

答へて曰く、若し足は身と異ならずとせば頭は應に是れ足なるべし、足と身と異ならざるが故なり、若し頭は是れ足ならば、甚だ笑ふべしと爲す。

問うて曰く、若し足と身と異ならずんば是の如きの過あり。今は足等和合するが故に更に法の生ずるあるべし。名けて身と爲す。身は足等と異なると雖も、當に足に依つて住すべし。衆縷の和合して能く氎を生じ、是の氎は縷に依つて住するが如し。

答へて曰く、是の身法は足等の分中に具有すと爲すや、分有すと爲すや。若し具有せば頭中に應に脚あるべし、何となれば、身法を具有するが故なり。若し分有せば足分と異なること無し。又身

答へて曰く、內法を名けて內心相應と爲し、想衆・行衆なり。外法を名けて外心相應と爲し、想衆・行衆及び心不相應の諸行及び無爲法なり。一時に等しく觀ずるを名けて內外法と爲す。　復次に、內法を名けて六情と爲し、外法を名けて六塵と爲す。　復次に、身・受・心及び想衆・行衆を總觀するを法念處と爲す。何となれば、行者は既に想衆・行衆及び無爲法の中に於て我を求むるに不可得なり、還た身・受・心・法の中に於て、求むるも亦た不可得なり。是の如く一切法の中に、若しくは色、若しくは非色、若しくは可見、若しくは不可見、若しくは有對、若しくは無對、若しくは有漏、若しくは無漏、若しくは有爲、若しくは無爲、若しくは遠き、若しくは近き、若しくは麁なる、若しくは細なる、其の中に我を求むるに、皆な不可得なり。但だ五衆和合の故に、强ひて名けて衆生と爲す。衆生は卽ち是れ我なり。我は不可得なるが故に亦た我所なし。我所は不可得なるが故に、一切諸の煩惱は皆な衰薄と爲る。　復次に、身念處は一切色法に名く。行者、內色を觀ずるに無常・苦・空・無我なり。外色を觀じ內外色を觀ずるも亦た是の如し。受・心法も亦た爾なり。四念處の內觀相應の空三昧を內空と名け、四念處の外觀相應の空三昧を外空と名け、四念處の內外觀相應の空三昧を內外空と名く。

　問うて曰く、是の空は是の三昧力の故に空と爲すや、是の法は自ら空なりと爲すや。

答へて曰く、有人は言ふ、「名けて三昧力の故に空なりと爲す。經に說くが如し。三三昧とは三解脫門(卽ち)空・無相・無作なり。是の空三昧は、身・受・心・法を緣じて、我我所を得ず、故に名けて空と爲す」と。

問うて曰く、四念處の空法は、皆な應に無常・苦・空・無我を觀ずべし。何を以ての故に、身は不淨と觀じ、受は是れ苦なりと觀じ、心は無常と觀じ、法は無我と觀ずるや。

答へて曰く、四法は皆な無常・苦・空・無我と觀ずと雖も、而も衆生は身中に多く淨顚倒に著し、

問うて曰く、心は是れ內入に攝す、云何なれば外心と爲すや。

答へて曰く、內身を觀ずるを名けて內心と爲し、外身を觀ずるを名けて外心と爲す。　復次に、內法を緣ずるを內心と爲し、外法を緣ずるを外心と爲す。　復次に、五識は常に外法を緣じて分別する能はざるが故に、名けて外心と爲し、意識は能く內法を緣じ、亦た好醜を分別するが故に、名けて內心と爲す。　復次に、意識の初め生ずるや未だ分別し決定すること能はず、是を外心と爲す。意識轉た深うして、能く分別して相を取る、是を內心と名く。是の如き等に內外心を分別す。行者は心意轉た異なり、身を知つて不淨相と爲し、受を知つて苦相と爲し、心の住せざることを知つて無常相と爲すも、結使未だ斷ぜざるが故に、或は吾我を生じて、是の如く思惟す、「若し心、無常ならば、誰か是の心を知らん。心は誰に屬すと爲さん。誰か心の主と爲つて、而も苦樂を受くる。一切の諸物は誰の所有ぞ」と。卽ち分別して、別に主あること無しと知る。但だ五衆に於て相を取るが故に人相ありと計し、而して我心を生ず。我心を以ての故に我所を生じ、我所の心生ずるが故に、我を利益する者あれば貪欲を生じ、我に違逆する者には而も瞋恚を生ず。此の結使は智より生ぜずして狂惑より生ずるが故に是を名けて癡と爲す。三毒は一切煩惱の根本たり。亦た吾我に由るが故に、福德を作しては、我れ、後に當に得べしと爲し、亦た助道の法を修しては、我當に解脫を得べしと爲す。初めて相を取るが故に名けて想衆と爲し、吾我に因つて結使及び諸の善行を起す、是を行衆と名く。是の二衆は、則ち是れ法念處なり。想・行・衆法の中に於て我を求むるに不可得なり。何となれば是の諸法は皆な因緣より生じ、悉く是れ作法にして而も牢固ならず、實我の法なし。行は芭蕉の如く、葉葉に之を求むるに中に堅相あること無し。遠く野馬を見れば、水なけれども水想あるが如く、但だ眼を誑惑す。是の如く內法・外法・內外法を觀ず。

問うて曰く、法は是れ外入に攝す、云何んぞ內法と爲すや。

搔けば疥は小しく樂なりと雖も、後轉た身を傷めて、則ち大苦と爲るが如し。愚人は之を謂つて樂と爲し、智者は但だ其の苦を見る。是の如く世間は樂顚倒の病の故に五欲の樂に著し、煩惱轉た多し、是の故に行者は樂を見ずして、但だ苦と見ること、病の如く、癰の如く、瘡の如く、刺の如し。

復次に、樂は少く苦は多く、少樂は現ぜざるが故に名けて苦と爲す。大河の水に一合の鹽を投ずれば、則ち鹽相を失ひて、名けて鹹と爲さざるが如し。　復次に、樂は不定なるが故に、或は此は以て樂と爲して、彼は以て苦と爲し。彼は以て樂と爲して、此は以て苦と爲す。著する者は樂と爲し、失する者は苦と爲す。愚は以て樂と爲し、智は以て苦と爲す。樂の患を見る者は苦と爲し、樂の過を見ざる者は樂と爲す。樂の無常相を見ざれば、樂と爲し、樂の無常相を見れば苦と爲す。未だ欲を離れざる人は以て樂と爲し、欲を離れたる人は以て苦と爲す。是の如く等に樂を觀じて苦と爲し、苦を觀ずること箭の身に入るが如し。　不苦不樂を觀ずるに、無常變異の相なり。是等の如く、三種の受を觀ずれば、心則ち捨離す、是を內受の空を觀ずと名く。外受、內外受を觀ずるも、亦た是の如し。行者は是の念を作す、「若し樂卽ち是れ苦ならば、誰か是の苦を受けん」と。念じ已つて則ち心の受くることを知り、然して後に心は實と爲すや虛と爲すやを觀じ。心を觀ずるに、無常生住滅の相にして、苦受心、樂受心、不苦不樂受心各各念を異にす。樂を覺ゆるの心滅して苦心生じ、苦心は爾所の時住し、住し已つて還た滅す。次に不苦不樂受の心を生じ、爾所の時不苦不樂受の心住するを知るも、住し已つて還た滅し、滅し已つて還た樂心を生ず。三受無常なるが故に心も亦た無常なり。　復次に、染心・無染心・瞋心・無瞋心・癡心・不癡心・散心・攝心・縛心・解脫心・是の如き等の心は、各各異相なるを知るが故に、心は無常にして、一定心の常住する無く、受苦・受樂等の心は、和合の因緣より生じ、因緣離散せば心も亦た隨つて滅すと知る。是の如く等內心・外心・內外心の無常相を觀ず。

答へて曰く、[六]世間に四顚倒あり。不淨の中に淨顚倒あり、苦中に樂顚倒あり、無常の中に常顚倒あり、無我の中に我顚倒あり。行者は四顚倒を破せんが爲の故に、四念處と十二種の觀を修す。所謂、初めに內身には三十六種の不淨充滿し、九孔より常に流れて、甚だ厭患すべく、淨相不可得なりと觀ず。淨相不可得なるが故に、內空と名く。行者は旣に內身の不淨を知らば、外の所著を觀ずるも、亦た復た是の如く、倶に實に不淨なり。愚夫は狂惑して、婬欲の爲に、心を覆はるるが故に之を謂つて淨と爲す。所著の色を觀ずることも亦た我が身の如く淨相は不可得なり、是を外空と爲す。行者若し已身の不淨を觀ずるも、或は外色を謂つて淨と爲し、若し外の不淨を觀ずるも、或は已身を謂つて淨と爲す。今、倶に內外を觀じて、我が身不淨なれば、外も亦た、是の如く、外身不淨なれば、我も亦た是の如く、一等にして異なること無く、淨相は不可得なりとす。是を內外空と名く。行者は思惟して、內外の身倶に實に不淨と知るも、而も惑ふ者は愛著し、愛著深きが故に、由つて以て身を受く。身は大苦たり、而も愚は以て樂と爲す。

問うて曰く、三受は皆な外入に攝する所なり、云何なれば內受を觀ずと言ふや。

答へて曰く、六塵始めに六情と和合して樂を生ず。是を外樂と名け、後に貪著深く入つて樂を生ず。是を內樂と名く。　復次に、內法の緣ずる樂、是を內樂と名け、外法の緣ずる樂、是を外樂と名く。復次に、五識相應の樂、是を外樂と名け、意識相應の樂、是を內樂と名く。麁樂を名けて外樂と爲し、細樂を名けて內樂と爲す。是の如く等、內外の樂を分別す。苦受・不苦不樂受も、亦た是の如し。

復次に、行者は思惟すらく、「是の內樂を觀ずるに實に可得ならず。卽ち分別して實に不可得なるを知る。但だ是の苦なるを强ひて名けて樂と爲すのみ。何となれば、是の樂は苦の因緣より生じ、亦た苦の果報を生ず。樂には厭足なきが故に苦なり」と。　復次に、　人疥を患ひ、火に向いて之を

と說き、若しくは十五と說くも、倶に亦た疑あり、此は問に非ざるなり。　復次に、善惡の法には、皆な定數あり、若しくは四念處、四正勤、三十七品、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、五衆、十二入、十八界、十二因緣、三毒、三結、四流、五蓋等なり。諸法には是の如く、各、定數あり。十八種の法の中に著を破るを以ての故に、十八空ありと說くなり。

問うて曰く、般若波羅蜜の空と十八空と異と爲すや一と爲すや。若し異ならば十八空を離れて、何を以て般若空と爲すや。又佛の說き給ふが如くんば、何等か是れ般若波羅蜜なるや。（と言ふに）所謂色空、受・想・行・識空、乃至一切種智空なり。若し異ならずとせば、云何なれば十八空に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと言ふや。

答へて曰く、因緣あるが故に異と言ひ、因緣あるが故に一と言ふ。異とは般若波羅蜜は諸法實相に名け、一切の觀法を滅す。十八空は則ち十八種の觀にして、諸法をして空ならしむ。菩薩は是の諸法實相を學して能く十八種の空を生ず、是を異と名く。一とは、十八空は是れ空無所有相なり。般若波羅蜜も亦た空無所有相なり。十八空は是れ相を捨離し、般若波羅蜜も一切法の中に、亦た相を捨離す。是の十八空は相に著せず、般若波羅蜜も亦た相に著せず。是を以ての故に般若波羅蜜を學せば則ち是れ十八空を學するなり、異ならざるが故なり。般若波羅蜜に二分あり、小あり大あり。大を得んと欲せば、先づ當に小方便門を學すべし。大智慧を得んと欲せば、當に十八空を學すべし。是の小智慧方便門に住せば能く十八空を得。何等か是れ方便門なる。所謂、般若波羅蜜經を讀誦し、正憶念し、思惟して、說の如く修行するなり。譬へば、人、種種の好寶を得んと欲せば、當に大海に入るべきが如し。若し人、内空等の三昧、智慧の寶を得んと欲せば、當に般若波羅蜜の大海に入るべし。

問うて曰く、行者は云何に般若波羅蜜を學する時、内空・外空・内外空に住するや。

卷の第三十一

初品第四十八……「十八空」義

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は內空、外空、內外空、空空、大空、第一義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、性空、自相空、諸法空、不可得空、無法空、有法空、無法有法空に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】內空とは內の法にして、內法は空なり。內法とは、所謂、內の六入にして眼・耳・鼻・舌・身・意なり。眼は空にして、我なく我所なく、眼法なし。耳・鼻・舌・身・意も亦た是の如し。外空とは外の法にして、外法は空なり。外法とは、所謂、外の六入にして色・聲・香・味・觸・法なり。色空とは、我なく、我所なく、色法なきなり。聲・香・味・觸・法も亦た是の如し。內外空とは內外の法にして、內外の法は空なり。內外法とは、所謂內外の十二入なり。十二入の中には、我なく我所なく內外法なし。

問うて曰く、諸法は無量なり、空は法に隨ふが故に、則ち亦た無量なり、何を以てか但だ十八を說くや、若し略說せば應に一空なるべし。所謂、一切法空なり。若し廣說せば一一の法に隨つて空なり。所謂眼空・色空等甚だ多し。何を以てか但だ十八空を說くや。

答へて曰く、若し略說せば則ち事周ねからず、若し廣說せば卽ち事繁し、譬へば藥を服するに、少なければ則ち病を除かず、多ければ則ち其の患を增す。病に應じて藥を投じ、增減せざらしむれば則ち能く病を愈すが如し。空も亦た是の如し。若し佛、但だ一空を說きたまはば、則ち種種の邪見及び諸の煩惱を破ること能はず、若し種種の邪見に隨つて廣く空を說けば、空は則ち多きに過ぎ、人は空相に愛著して、斷滅に墮在せん、十八空を說いて、正しく其の中を得たり。　復次に、若しくは十

に値遇して善を修し、持戒、布施、禮敬等の涅槃の因緣を種ゑ、乃ち畜生に至るまで皆な能く、福德の因緣を種ゆ。無佛の國の若きは、乃ち天人に至るまで、善を修すること能はず。是を以ての故に菩薩は願を生じて、佛の世界をして斷えざらしめんと欲す。

問うて曰く、云何にして佛の世界の因緣を斷ぜざるや。

答へて曰く、菩薩は衆生の中に於て、種種の因緣もて、佛道を讃歎し、衆生をして阿耨多羅三藐三菩提を發せしめ、漸漸に六波羅蜜を行じ、然る後に諸の世界に於て各各作佛せしむ。若しくは一國に於て次第に作佛し、或は異國に於て各自に作佛す。是を佛國を斷ぜずと名く。　復次に、菩薩の疾かに智慧を集め、具足して佛と作り、無量の衆生を度して、涅槃に入らんと欲し給ふ時、菩薩の爲に受記して、「我が滅度の後、汝次いで佛と作らん」と。展轉して、皆な悉く是の如くして斷絕せさらしむ。若し佛、菩薩に記せざれば、則ち佛國を斷ぜん。譬へば、王、太子を立て、展轉、是の如くなれば、國祚、斷ぜざるが如し。

問うて曰く、何を以てか有佛の世界を貴び、無佛の國を賤むや。

答へて曰く、是の事は問を致すべからず。佛は是れ十方世界を莊嚴するの主なり。何に況んや一國をや。若し有佛の國を離るれば、人天の樂を受くと雖も、而も是れは佛の恩力の致す所と知らず、畜生と異なること無けん。若し一切諸佛、世に出で給はずんば、則ち三乘涅槃の道なく、常に三界の獄に閉在して、永く出づる期なけん。若し世に佛あれば、衆生は三界の牢獄を出づることを得ん。譬へば、二國の間の日なき處の如し。是の中の衆生は、冥中より生じて、冥中へ死す。若し佛生れ給ふ時は、光明暫らく炤して、各各相見し、乃ち日月を見ん。炤らされたる衆生は、彼は大福たるを知る。我等は罪あることも是の如し。或時は、佛、光明を以て、遍ねく諸の佛國を照らし給ふに、無佛國の衆生は、佛の光明を見て、則ち大に歡喜し、念じて言く、「我等は黑闇なるに、彼は大明たり」と　復次に、有佛の國の衆生は、罪福あることを知り、人は三歸、五戒、八齋、及び出家、五衆等、種種甚深の禪定、智慧、四沙門果、有餘無餘涅槃等、是の如き種種の善法を受く。是の因緣を以ての故に、佛國を貴しと爲す。若し佛國の衆生は、佛を見たてまつらずと雖も、經法

にして利益の心は齊限あること無し。衆生は種種無量なるが故に、一佛一菩薩の盡く度すべき所に非ず。

問うて曰く、若し事心に稱(かな)はずんば何故に願を作すや。

答へて曰く、心願をして曠大清淨ならしめんと欲するが故なり。慈三昧を行ずるが如きは、衆生をして苦を離れしむること能はずと雖も、但だ自ら心をして曠大清淨ならしめ、利益の願を成ぜんと欲するが故なり。諸佛、大菩薩の力の如きは、皆な能く一切を度すれども、而も衆生の福縁未だ集らず、未だ智慧あらず、因縁會せざるが故に而も度することを得ず。大海水の如きは、一切衆生取り用ふれども、水は窮竭せず、但だ衆生の用ふるを得ること能はざるのみなり。餓鬼の衆生の如きは、自罪の因縁を以て、水を見ることを得ず。設ひ之を見ることを得るも、即時に乾れ竭き、或は洋銅と爲り、或は膿血と成る。佛も亦た是の如く、大慈悲、智慧あり、無量無邊にして、悉く能く衆生を滿足するも、而も衆生は罪業の因縁の故に、佛に値ひたてまつらず。設ひ佛に値ひ上つることを得るも、餘人と異なること無きが如く、或は瞋恚を生じ、或は誹謗を起す。是の因縁を以ての故に、佛の威相神力を見たてまつらず、佛に値ひ上つることを得と雖も、而も利益なし。　復次に二因、二縁あつて正見を發す。所謂、内因、外縁なり。佛は外の因縁を具足したまひて、三十二相、八十隨形好、無量の光明ありて、其の身を莊嚴し、種種の神力、種種の音聲あり、意に隨つて説法し、一切の疑を斷じたまふ。但だ衆生は内の因縁を具足せず、先に見佛の因縁を種ゑず、而も信敬せず、精進し持戒せず、鈍根深厚にして世樂に著す。是を以ての故に利益あること無きは、佛の咎たるに非ず。佛は衆を化度するの神器、利用、悉く皆な備足し給ふ。譬へば、日出づるに、目あれば即ち覩、盲者は見ざるが如し。設使(たとひ)目あるも、而も日なければ、則ち覩る所なし。是の故に日に咎なきなり。佛の明も亦た是の如し。

靂は、聾者は聞かざれども、雷聲は滅ずること無きが如し。佛も亦た是の如く、常に衆生の爲に說法し給ふこと、龍の大雷聲を震ふが如し。衆生は罪業を以て、自ら聞くことを得ず。今世の人の精進持戒する者の如きは、念佛三昧に於て、心定を得る時、罪垢障らず、即ち佛を見、佛の說法の音聲の淸了なるを聞くことを得。菩薩は、三種の音聲の中に於て、二種を得んと欲す。是の二種の音聲は、甚難だ希有なるが故なり、業果の音聲の如きは、自然に得べきが故なり。是を以ての故に「菩薩摩訶薩は一音を以て十方恒河沙等の世界をして、聲を聞かしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と說く。

【經】 復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、諸佛の世界をして、斷ぜざらしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】 佛の世界の不斷とは、菩薩は、國國をして相次ぎ、皆な衆生をして發心し、作佛せしめんと欲するなり。

問うて曰く、次第と言ふは、一國の前後の相次と爲すや。十方世界の次第と爲すや。若し一國の相次ならば、大悲普く一切衆生を覆ふ。何を以てか餘國に及ばざるや。若し十方一切世界の次第ならば、餘の佛菩薩は何の利益する所かあらん。

答へて曰く、菩薩の心願は、一切世界をして皆な悉く作佛せしめんと欲し、大心曠遠にして齊限あること無し。そは是の心は、諸の智慧、無量の福德、神通力を集むるを以ての故なり。又衆生の作佛の因緣を種うる者に隨ひ、是の菩薩は皆な悉く作(佛)せしむ。若し一切世界が皆な作佛の因緣を種ゑなば、餘の佛菩薩は應に益することあるべからず(と言はば)、但し、是の事は然らず。 復次に、十方世界は無量無邊なり。一菩薩にして盡く遍ねく諸の世界に、佛種を斷ぜざらしむることを得べからず。諸餘の菩薩も各因緣に隨つて皆な其の分あり。慈悲大なるを以ての故に、願も亦た無量

答へて曰く、菩薩の音聲には恒河沙等の數あるも、佛の音聲は到る所、限數あること無し。密跡經中の所説の如くんば、目連は、佛の音聲の極を試みんとして、西方に至るに、猶ほ佛音を聞くこと、若(あたか)も對面するが如くなりき。

問うて曰く、若し爾らば佛、常に國土聚落に在して、説法敎化し給ふに、閻浮提の內の人は、佛邊に至らざれば、則ち聞くことを得ず。何を以てか之を知る。多く遠方より來つて、説法を聽かんと欲する者あるが故なり。

答へて曰く、佛の音聲に二種あり。一を密中の音聲と爲し、二を不密の音聲と爲す。密の音聲は、先に已に說けり。不密の音聲は、佛邊に至つて乃ち聞く。是に亦た二種の弟子あり。一を出世の聖の聖人と爲し、二を世間の凡夫と爲す。出世の聖人は、目犍連等の如く、能く微密の音聲を聞き、凡夫の人は其の近づく所に隨つて乃ち聞く。復次に、諸の菩薩は、正位に入ることを得れば、生死の身を離れて、法性の眞形を得、能く十方無量の佛身、及び遍炤の光明を見、亦た能く諸佛の六十種の極めて遠き無量の音聲を聞くことを得。諸の大菩薩は、未だ佛の如き音聲を具足せずと雖も、佛の音聲の中に於て、普ねく其の分を得。

是の佛、菩薩の音聲に三種あり。一には先世に善き音聲の因緣を種うるが故に、咽喉の中に微妙の四大を得、能く種種の妙好遠近の音聲を出だす、所謂一里、二里、三里、十里、百千里、乃至三千大千世界に音聲遍滿す。二には神通力の故に、咽喉の四大より聲を出だし、遍ねく三千大千世界、及び十方恒河沙世界に滿つ。三には佛の音聲にして、常に能く十方虛空に遍滿す。

問うて曰く、若し佛の音聲は、常に能く遍滿せば、今の衆生は何を以てか、常に聞くことを得さるや。

答へて曰く、衆生は無量劫より以來、作す所の惡業に覆はる、是の故に聞かず。譬へば、雷電霹

唯だ佛菩薩のみ如意疾遍神通あり。金翅鳥の子の若きは、始めて鷇より出で一須彌より一須彌に至る。諸の菩薩も亦た是の如く、無生忍力を以ての故に、諸の煩惱の無明の鷇を破り、即時に一念の中に無量の身を作して、遍ねく十方に至る。　復次に、菩薩は一切無量世の罪、悉く已に消滅し、智慧の力を以ての故に、能く一切諸法を轉ず。所謂、小を能く大と爲し、大を能く小と爲し、能く千萬無量劫を以て一日と爲し、又能く一日を以て千萬劫と爲す。是の菩薩は、世間の主として、欲する所自在なり、何れの願か滿たさらん。毘摩羅詰經所說の如くんば、七夜を以て劫壽と爲す。是の因緣を以ての故に、菩薩は神通力に乘じて、能く速疾に十方世界を超越す。

問うて曰く、前の五不可思議の中には、菩薩あること無し。今何を以てか菩薩の不可思議を說くや。

答へて曰く、或時は因中に果を說く。日に百斤の金を食す(と言ふが)如きは、金は食す可らず。金に因つて食を得るが故に、金を食すと言ふ。是を因中に果を說くと爲す。或時は果中に因を說く。好畫を見て、是は好手なりと言ふが如し。是を果中に因を說くと爲す。諸の菩薩も亦た是の如く、菩薩を因と爲し、諸佛を果と爲す。若し佛力の不可思議を說かば、當に知るべし、已に菩薩を說くことを。是の故に「一たび意を發し、十方恒河沙世界に到らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と言ふ。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、一音を發して、十方如恒河沙等の世界をして、聲を聞かしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】菩薩は六神通を得て、梵聲の相を增長し、三千大千世界を過ぎて、十方恒河沙等の諸の世界に至る。

問うて曰く、若し爾らば、佛の音聲と何ぞ異らん。

意に增減なし。是の如きの菩薩は諸佛の讃じたまふ所なり。復次に、諸の菩薩あり、一時に發心する中に、疾かに成佛する者あれば、佛は則ち讃歎したまふ。大精進力あるが故なり。釋迦文尼佛の如きは、彌勒等の諸の菩薩と同時に發心し給ひしも釋迦文尼佛は、精進力の故に、九劫を超越し給へり。復次に、若し菩薩あり、菩薩の事、所謂十地、六波羅蜜、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法等、無量の淸淨の佛法を具足し、衆生の爲の故に、久しく生死に住して、阿耨多羅三藐三菩提を取らず、而して廣く衆生を度す。是の如きの菩薩は諸佛讃歎し給ふ。何者か是なる。文殊師利、毘摩羅詰、觀世音、大勢至、遍吉等の如き、諸の菩薩の上首なり。三界に出で、無央數の身を變化して生死に入る。そは衆生を敎化するが故なり。是の如き希有の事は皆な甚深般若波羅蜜より生ず。是の故に、「諸佛が其の名を稱歎することを得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と說く。

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は一たび意を發し、十方如恒河沙等の世界に至らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】菩薩は身に通變化の力を得て、十方恒河沙等の身と作り、十方恒河沙等の世界に、一時に能く到る。

問うて曰く、經に說くが如くんば、一彈指の頃に六十念あり。若し一念の中に、能く一方恒河沙等の世界に至るすら、尙ほ信ずべからず、何に況んや十方恒河沙等の世界は、時少くして、所到の處多きをや。

答へて曰く、經に五事の不可思議を說く。所謂、衆生の多少、業の果報、坐禪人の力、諸龍の力、諸佛の力なり。五不可思議の中に於て、佛力は最も不可思議なり。菩薩は深く禪定に入つて、不可思議の神通を生ずるが故に、一念の中に悉く十方諸佛の世界に到る。四種の神通の中に說くが如し。

す」と。

復次に、若し菩薩、未だ無生忍を得ず、未だ五神通を得ざるも、生死の肉身に大慈悲心あれば、能く衆生の爲の故に、內外の所有貴惜する所の者を、悉く能く施與す。外は、著する所の妻子、上妙の五欲、如意珠最上の妙寶、安隱の國土等を謂ひ。內は、身體・飢肉・皮膚・骨血・頭目・髓腦・耳鼻・手足を謂ふ。是の如き等の施は甚だ有り難しと爲す。是の故に諸佛は其の德を讚歎し給ふ。若し菩薩、法位に入つて神通を得れば、苦行を行ずれども、難しと爲すに足らず。是の菩薩は生身、肉眼なれど、志願弘曠にして、大悲心あり、佛道を愛樂して、是の如き事を行ずるを以て、甚だ希有と爲す。復次に、若し菩薩は持戒淸淨に具足して、持戒と破戒とを分別する所なく。一切諸法の畢竟不生常空なるに於て、法忍精進して、休まず息はず、著せず厭はず。精進と懈怠とは一相にして異ならず、無量・無邊・無數劫に、懃修し精進して、都て甚深の禪定を受行せんと欲し、依止する所なく、定と亂と異ならず、定より起たずして而も能く身を變ずること無量にして、遍ねく十方に至つて說法して人を度し、深智慧を行じて、一切法の不生不滅、非不生非不滅、亦非不生亦非不滅、非非不生非非不滅を觀じ、諸の語言を過ぎ、心行の處滅し、壞す可らず破すべからず、受く可らず著す可らず、諸聖の行處は淨なること涅槃の如し。亦た是の觀にも著せず、意も亦た沒せず、能く智慧を以て饒益す。是の如きの菩薩を諸佛は讚歎し給ふ。復次に、菩薩は未だ受記を得ず、未だ無生法忍を得ず、生れて佛に値はず、賢聖を見ず、(而も)正思惟を以ての故に、能く諸法の實相を觀じ、實相を觀ずと雖も、心亦た著せず。是の如き菩薩は、十方の諸佛皆な共に讚歎したまふ。

復次に、菩薩は、甚深無量無邊不可思議の佛法を聞き、自ら未だ得ず、智慧未だ及ばずと雖も、而も能く心を定めて信樂して、疑悔を生ぜず、若し魔、佛と作り來つて、誑つて其の意を說くも、

を見ること能はず。諸天・世人は智慧ありて、三毒薄き者と雖も亦た實の如くに讃ずることを得ること能はず。猶ほ謬失あり。一切智なきが故なり。結使を盡くさざるが故なり。聲聞辟支佛は三毒を盡くすと雖も、亦た實の如くに讃ずること能はず。猶ほ餘氣あつて未だ盡きず、又智慧具足せざるが故なり。唯だ佛一人のみ、三毒及び氣は永く盡きて、一切智を成就し給ふが故に、能く實の如くに讃じて不增不減なり。是を以ての故に、行者は諸佛の讃ずるところを得て、其の實德を知らんと欲し、餘人の稱讃を求めざるなり。

問うて曰く、若し諸佛は三界を出て世間に著せず、我及び我所あること無くんば、外道・惡人、大菩薩・阿羅漢を視ても、一等にして、異なること無けん。云何にして菩薩を讃歎するや。

答へて曰く、佛は吾我なく、憎愛あること無く、一切法に於て、心著し給ふ所なしと雖も、衆生を憐愍し、大悲心を以て、一切を引導し給ふが故に、善人を分別して、讃じ給ふ所あり。亦た惡魔を破壞せんと欲して願ふところ、佛は讃歎し給ふを以ての故に、無量の衆生は、菩薩を愛樂して恭敬し供養し、後に皆な佛道を成ず。是を以ての故に諸佛は菩薩を讃歎したまふ。

問うて曰く、云何に讃歎するや。

答へて曰く、佛は大衆の中に於て說法して、衆生をして甚深の法に入らしめんと欲し給ふが故に、是の菩薩を讃じたまふが如し。薩陀波崙等の如し。復次に、佛は菩薩を讃歎して言はく、「是の菩薩は能く諸法の畢竟空を觀じ、亦た能く衆生に於て大慈悲あり、能く生忍を行ずれども、亦た衆生を見ず、法忍を行ずと雖も、一切法に於て著を生ぜず、宿命の事を觀ずと雖も、始見に墮せず、衆生を觀ずと雖も、無餘涅槃に入つて、邊見に墮せず、涅槃は是れ無上の實法なりと知ると雖も、亦た能く身口意の善業を起し、生死の中に行くと雖も、而も深心に涅槃を樂しみ、三解脫門に住すと雖も、涅槃を觀じ亦た本願及び善行を斷ぜず、是の如き等の種種の奇特功德は甚だ有り難しと爲

解脫門（卽ち）空・無相・無作の如し。解脫の如きは畢竟空相なり、是の空解脫門より世間を觀ずるに亦た畢竟空なり。解脫の如きは無相の相なり。是の無相解脫門より世間を觀ずるに亦た無相の相なり。解脫の如きは、無作の相なり、是の無作解脫門より、世間を觀ずるに亦た無作の相なり。是を以ての故に「一善根を佛の福田に植ゑ、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、而も盡きざらんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と說く。

初品第四十七……「諸佛稱讃其名」釋論

【經】復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、十方の諸佛をして、其の名を稱讃せしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】問うて曰く、菩薩、若し諸法は畢竟空にして、內に吾我なきを觀じ、已に憍慢を破らば、云何なれば諸佛をして、其の名を稱讃せしめんと欲するや。又菩薩の法は應に諸佛を供養すべし、云何なれば、反つて諸佛の供養を求むるや。

答へて曰く、佛法に二門あり。一を第一義門と爲し、二を世俗法門と爲す。世俗門を以ての故に、諸佛をして讃歎せしめんと欲す。諸佛の爲に讃歎せらると雖も、而も我を見ず衆生相を取らず。世間の假名の故に說くなり。汝が「云何なれば反つて佛の供養を求むるや」と言へるは、後品の中の如し。佛の讃歎し給ふ所の菩薩は、畢竟ずるに阿鞞跋致阿耨多羅三藐三菩提なり。今是の菩薩は決定して是の阿鞞跋致を知ることを得んと欲すれども不を以てす。是を以ての故に佛の讃歎を求む、供養を求むるには非ず。　復次に、餘人・餘の衆生は、貪欲・瞋恚・愚癡、心を覆ふが故に、實の如く讃歎すること能はず。何となれば、偏に愛する所あれば、實の過を見ずして但だ功德のみを見る。若し偏に瞋る所あれば、但だ其の過のみを見て其の德を見ず。若し愚癡多ければ、實の如く其の好醜

「盡きず」とは、諸佛は無盡の功德を成就したまふが故に、中に於て福を植うるに、福は亦た盡きざるなり。　復次に、佛の功德は無量・無邊・無數・無等なるが故に、福を植うる者の福も亦た盡きず。　復次に、佛は菩薩たりし時、一切衆生を緣じ給へり。衆生の如きは、無量・無邊なるが故に、福も亦た無盡なり。　復次に、佛田は清淨にして、愛等の諸の煩惱の穢草を拔き、淨戒を平地と爲し、大慈悲を良美と爲し、諸の惡邪の鹹土を除き、三十七品を溝港と爲し、十力・四無所畏・四無礙智等を垣墻と爲して、能く三乘の涅槃の果を出生す。種を此の無上無比の田に植ゆる者は、其の福無盡なり。

問うて曰く、一切の有爲法は、無常相なるが故に、皆な「盡く」に歸す。福は因緣より生ず、何ぞ「盡きざる」を得んや。

答へて曰く、亦た常に「盡きず」とは言はず、自ら乃ち佛を得るに至るまでの中間に「盡きず」と言へり。　復次に、一切の有爲法は念念生滅すと雖も、相續して斷ぜず、果報を失はざるが故に、名けて「盡きず」と爲す。燈は、焰焰、生滅すと雖も名けて滅と爲さず、脂盡きて炷滅すれば、乃ち滅と稱すべきが如し。福も亦た是の如く、深心を良田に種うるが故に、乃至法盡くるも而も亦た盡きず。　復次に、菩薩は諸法實相は、涅槃の如く不盡なるを知る、福德は諸法實相に入るが故に而も亦た不盡なり。

問うて曰く、若し爾らば涅槃は不盡なれば、福德も亦た應に常に不盡なるべし。云何なれば乃ち佛に至るまでの中間は「盡きず」と言ふや。

答へて曰く、是の福德は智慧力を以ての故に、是の功德をして、涅槃の畢竟空、不生不滅なるが如くならしむ。是を以ての故に涅槃の如しと喩ふ、卽ち涅槃なるには非ず。若し是れ涅槃ならば喩と爲すべからず。若し是れ涅槃ならば、云何んぞ果報は、成佛して而も盡きざるあらんや。譬へば三

をして六波羅蜜に住せしむ。是の故に經に、「衆生をして、六波羅蜜に住せしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と言ふ。

【經】一善根を佛の福田の中に植ゑて、阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで、盡きざらんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】「善根」とは、三善根なり。無貪善根、無瞋善根、無癡善根なり。一切の諸の善法は、皆な三善根より生じ、增長すること、藥樹草木は根あるに因つての故に、生成し增長するを得るが如し。是を以ての故に名けて諸の善根と爲す。今善根と言ふは、善根の因緣なる供養の具にして、所謂、華香・燈明及び法供養・持戒・誦經等なり。因中に果を說くなり。何となれば、香華は不定なれども、善心を以て供養するが故に名けて善根と爲す。布施は即ち是れ福に非ざれども、但だ能く慳貪を破し、善法の門を開く善根なれば名けて福と爲す。針の縷を導いて衣を縫ふが如し。縫ふは針に非ざるなり。「一」とは、若しくは華、若しくは香、若しくは燈明、若しくは禮敬、若しくは誦經、持戒、若しくは禪定、若しくは智慧等の一一の供養、及び法供養をもて、諸佛の田中に植うるなり。「佛の田」とは、十方三世諸佛の若しくは佛の在世、若しくは形像、若しくは舍利、若しくは但だ佛を念ずるなり。「植う」とは、專心に堅著するなり。

問うて曰く、經には種種の福田と言ふ、今、何を以てか、獨り佛田に植うと言ふや。

答へて曰く、種種の福田ありと雖も佛を第一の福田と爲す。十力・四無畏・十八不共法、是の如き等の無量の佛法を具足したまふを以て、是の故に獨り福田に植うと說く。法寶は佛の師なりと雖も、若し佛、法を說き給はざれば無用と爲る。好藥ありと雖も、若し良醫なくんば、藥は則ち用なきが如し。是の故に法寶は上なりと雖も、而も前に佛寶を說く、何に況んや僧寶をや。　復次に、佛田は能く無量の果報を獲、餘は無量と言ふと雖も、而も差降あり。是の故に佛田は第一なり。

復次に、禪定は實智の初門と名く。智慧を澄清にして、能く諸法を照さしむ。燈の密室に在れば、其の明を用ふるを得るが如く、若し禪定に依れば、四無量・背捨・勝處・神通・辯才等の諸の甚深の功德を得、悉く皆な具ふることを得れば、能く瓦石を變じて如意珠と成らしむ。何に況んや餘事をや。意に隨つて爲す所、能く作さざるは無し。地に入ること水の如く、水を履むこと地の如く、手に日月を捉ふるに、身は焦冷せず、化して種種の禽獸の身と爲つて、而も其の法を受けず。或時は身を變じて虛空に充滿し、或時は身微塵の若く、或は輕きこと鴻毛の如く、或は重きこと太山の若し。或時は足指を以て地を按ずるに、天地大に動ずること草葉を動かすが如し。是の如き等の神通變化力は、皆な禪より得」と。衆生は是を聞き已つて、禪波羅蜜に於て立つ。

「般若波羅蜜に立つ」とは、菩薩は諸の衆生に敎へて、當に智慧を學すべし。智慧とは、其の明第一なるを名けて慧眼と爲す。若し慧眼なければ、肉眼ありと雖も、猶ほ故らに是れ盲なり。眼ありと云ふと雖も、畜生と異なること無し。若し智慧あれば、自ら好醜を別ち、他の敎に隨はず。若し智慧なければ、人に隨つて東西すること、牛、駱駝の鼻を穿たれて、人に隨ふが如し。一切有爲法の中にて智慧を上と爲す。聖の親愛する所なり。能く有爲法を破するが故なり。經中に說くが如くんば、諸寶の中に於て、智慧の寶を最と爲し、一切の利器の中にて、慧刀の利を最と爲す。智慧の山頂に住すれば、憂患あること無く、諸の苦惱の衆生を觀じて、悉く見ざること無し。智慧の刀は、能く無始の煩惱、生死の連鎖を斷ち、智慧力の故に、能く六波羅蜜を具し、不可思議無量の佛道を得、一切智を成ず。何に況んや、聲聞辟支佛及び世間の勝事をや。是の智慧增長して、淸淨にして、沮壞すべからざれば、名けて波羅蜜と爲す」と。衆生は聞き已つて、般若波羅蜜に住す。

復次に、菩薩は或時は口を以てせずして敎へ、或は神足光明を現じて、衆生をして六波羅蜜に住せしめ、或は種種の餘緣を現じ、乃至、夢中にても爲に因緣を作して、其をして覺悟せしめ、衆生

一切の法に於て無礙解脱す。是の如きを得る者は、一切衆生の中に最も尊上と爲し、應に一切世間の供養を受くべし。若し人但だ心に佛を念ずるすら、尙ほ無量無盡の福德を得、何に況んや精進・布施・持戒・供養・承事・禮拜する者をや」と。衆生に語げて言く、「佛事は是の如し。汝等當に無上道心を發すべし。精進を勤修し如法に行ずれば、之を得ること難からず」と。衆生は是を聞き已つて、便ち無上道心を發す。若し發心する者は、但だ空爾なるべからず。當に檀波羅蜜を行ずべし、檀波羅蜜を行じて、次に尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜を行ず。五波羅蜜を行ずれば、則ち是れ毘梨耶波羅蜜なり。若し大乘の心を發さざれば、當に辟支佛道を敎ゆべし。若し辟支佛道なければ、聲聞道を行ずることを敎へ。若し聲聞道なければ、敎へて色を離れて、無色定の寂滅安樂を受けしむ。若し無色定なければ、敎へて欲を離れて色界の種種の禪定の樂を受けしむ。若し禪なければ、敎へて十善道を修して人天中の種種の樂を受けしむ。自ら懈怠すること莫れ。空しくして所得なし。貧窮下賤にして、種種に勤苦するは、甚だ爲に患ふべし。懈怠の法は最も弊惡たり、今世・後世の利益善道を破壞す。衆生は聞き已つて諸の善法を集め、懃めて精進を行ず。

「禪に立つ」とは、菩薩は衆生の前に於て、禪定の淸淨の樂、內樂、自在樂、離罪樂、今世・後世の樂、聖の受くる所の樂、梵天王の樂、遍身に受くる樂、深厚妙樂を讃歎すらく、「汝諸の衆生は何を以てか、五欲不淨の樂に著し、畜生と同じく、諸の罪垢の樂を受けて、而も是の妙樂を捨つるや。若し汝能く小樂を捨つれば、則ち大樂を得ん。汝見ずや、田夫は少種子を棄てて、後に大果を獲ることを。人が王に少物を獻じて、大報を得るが如く、小なる鉤餌もて、而も大魚を得るが如く、捨つる所甚だ少くして獲る所大に多し。智者も亦た是の如く、能く世間の樂を捨てて、甚深の禪定の快樂を得。既に此の樂を得て、反つて欲樂を見れば、甚だ不淨たり。獄より出づるが如く、病疹差ゆるを得れば、更に樂を求めざるが如し。

く。罵者なく亦た受者なし。そは本末畢竟空なればなり。但だ顛倒虚誑の故に、凡夫の心著するのみ」と。是の如く思惟し已れば則ち衆生なし。衆生なければ、已に法の屬する所なし。但だ因緣の和合のみにして、自性あること無し。衆生の如きは、和合を强ひて衆生と名く。法も亦た是の如し。卽ち法忍を得。是の衆生忍と法忍とを得るが故に、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。何に況んや諸餘の利益をや」と。衆生は之を聞き已つて毘梨耶波羅蜜に住す。

「毘梨耶に立つ」とは、衆生に敎へて曰く、「汝懈怠すること莫れ。若し能く精進すれば、諸善功德悉く皆な得易し。若し懈怠すれば、木に火あるを見るも、而も得ること能はず、何に況んや餘事をや。是の故に勸めて精進せしむ。若し人、方便に隨つて精進すれば、願として得ざること無し。凡そ勝法を得ることは、因緣なきに非ず、皆な精進より生ず。精進に二相あり。一には能く進んで諸の善法を生し、二には能く諸の惡法を除く。復た三相あり。一には造事せんと欲す。二には精進して作す。三には休息せず。復た四相あり。已に生ぜる惡法は之を斷じて滅せしめ、未だ生ぜざる惡法は能く生ぜざらしめ、未だ生ぜざる善法は能く發生せしめ、已に生ぜる善法は能く增長せしむ。是の如き等を精進の相と名く。精進の故に能く一切の善法を助成すとは譬へば、火は風の助を得れば其の然ゆること乃ち熾なるが如く、又世間の勇健なる人が、能く山を越え海を渡るが如く、道法は精進して乃至、能く佛道を得。何に況んや餘事をや」と。衆生は聞き已つて、皆な精進波羅蜜に立つ。

復次に、菩薩は未だ阿耨多羅三藐三菩提を發さざる者あるを見れば、爲に、阿耨多羅三藐三菩提の法を讚歎して、「一切諸法の中に於て、最も第一たり、極めて尊貴たり。能く一切を饒益して、諸法の實相、不誑の法を得せしむ。大慈悲あり、一切智を具え、金色の身相は、第一微妙にして、三十二相、八十隨形好と、無量の光明あり、無量の戒・定・智慧・解脫・解脫知見ありて三達無礙なり。

「羼提に住す」とは、衆生の前に於て忍辱を讃歎して、「忍は一切出家の力たり、能く諸惡を伏し、能く衆中に於て奇特の事を現ず。忍は能く守護し、施・戒をして毀れざらしむ。忍は大鎧たり、衆兵加はらず。忘は良藥たり、能く惡毒を除く。忍は善勝たり、生死の險道に於て、安隱にして患なし。忍は大藏たり、貧苦の人に施せば、極りなきの大寶なり。忍は大舟たり、能く生死の此岸を渡つて、涅槃の彼岸に到る。忍は礠礶たり。能く瑩いて諸德を明かにす。若し人惡を加ふるも、猪が金山を揩れば、益その明を發するが如く、佛道を求め衆生を度するの利器なり。忍を最妙と爲す。行者は當に是念を作すべし、「我若し瞋を以て彼に報ぜば、則ち自ら害を爲す、又我先世に自ら是の罪あらば、意の如くなるを得ず、要必ず當に償ふべし。若し此の人に於て受けずんば、餘は亦た我を害せん。倶に免るるを得ず、云何んぞ瞋を起さん」と。　復次に、衆生は煩惱の爲に牽かれ、諸の惡事を爲して、自在なることを得ず。譬へば、人が非人の爲に持せられて、而して良醫を罵辱するが如し。良醫は是の時、但だ鬼を除くことのみを爲して、其の罵を嫌はず。行者も亦た是の如く、衆生の惡を加へて己に向ふとも、其の瞋を嫌はず、但だ結を除くことを爲す。

復次に、忍を行ずる人は、前に罵辱する者を視るも、父母の嬰孩を視るが如く、其の瞋り罵じるを見て、益益慈念を加へ、之を愛すること逾深し。又復た自ら念ずらく、「彼の人は惡を我に加ふ、是の業因緣は前世に自ら造るなり、今當に之を受くべし。若し瞋を以て報ぜば更に造つて後の苦は、何の時か解け已らん。若し今之を忍ばば、永く苦を離るることを得ん。是の故に瞋を起すべからず」と。是の如き種種の因緣もて瞋恚を呵し、慈悲を生じて衆生忍の中に入る。衆生忍の中に入り已つて、是の念を作さく、「十方諸佛の說きたまふ所の法は、皆な我ある無く、亦た我所もなし。但だ諸法和合して假に衆生と名く。機關木人の動くが如く、能く動作すと雖も內に主あること無し。身も亦た是の如く、但だ皮骨相持して、心風轉ずるに隨つて念念生滅し、無常空寂にして作者あること無

三樂を開く。天上と人中と涅槃の樂となり。何となれば好施の人は聲譽流布し、八方信樂して、愛敬せざるは無く、大衆の中に處して畏れ難かる所なく、死する時にも悔なきを以てなり。其人は自ら念ずらく、「我は財物を以て良き福田に植ゆ、人・天中の樂涅槃の門は我必ず之を得ん」。と何となれば、施は慳結を破り、受者を慈念し、瞋惱を滅除し、嫉妬の心息むを以てなり。受者を恭敬すれば、則ち憍慢を除き、決定心もて施せば疑網は自ら裂け、施の果報を知れば、則ち邪見を除き及び無明を滅す、是の如き等の諸の煩惱破るれば、則ち涅槃の門は開く。 復次に、但だに三樂を開くのみに非ず、乃ち能く無量の佛道、世尊の處を開く。何となれば六波羅蜜は、是れ佛道にして檀を初門と爲し、餘行は皆悉く隨從するを以てなり」と。是の如く等、布施に無量の功德あり。是の因緣を以ての故に、衆生をして檀波羅蜜に立たしむ。檀波羅蜜の義は先に檀の中に說くが如し。

「尸羅に立つ」とは、菩薩は衆生の前に於て戒行を讚說すらく、「汝、諸の衆生は、當に持戒を學すべし、持戒の德は、三惡趣及び人中の下賤を拔いて、天人の尊貴乃至佛道を得せしむ。戒は一切衆生の樂の根本なること、譬へば、大藏より諸の珍寶を出すが如し。戒は大護たり。能く衆怖を滅すること、譬へば、大軍の賊を破るが如し。戒は莊嚴たり、瓔珞を著くるが如し。戒は大船たり、能く生死の巨海を渡る。戒は大乘たり、能く重寶を致して涅槃城に至る。戒は良藥たり、能く結病を破る。戒は善知識たり、世世に隨逐して、相遠離せず、心をして安隱ならしむ。譬へば、井を穿つに、已に濕泥を見れば、喜慶して自ら歡び、復た憂患すること無きが如し。戒の能く諸行を利益し成就すること、譬へば、父母の衆子を長育するが如し。戒は智梯たり、能く無漏に入る。戒の能く諸結を驚怖せしむること、譬へば、師子の能く群獸をして攝伏せしむるが如し。戒を一切諸德の本、出家の要と爲す。淨戒を修むる者は、所願意に隨ふこと、譬へば、如意珠の念ずる時に得べきが如し」と。是の如く種種に、戒の德を讚じて、衆生をして歡喜し發心して、尸羅波羅蜜に住せしむ。

答へて曰く、人中にては出家受戒するを得て以て道に至る可し、阿修羅道は結使心を覆うて道を得ること甚だ難し。諸天は結使に隨ふと雖も、心直くして道を信ず。阿修羅の衆は心多く邪曲にして、時として道に近づかず、是を以ての故に阿修羅は天と相似すと雖も、その道に近づくこと難きを以ての故に、故らに人の下に在り。龍王、金翅鳥の如きは力勢は大なりと雖も、亦よく變化するが故に、畜生道の中に在り。阿修羅道も亦た是の如し。

問うて曰く、若し龍王と金翅鳥は力勢大なりと雖も、猶ほ畜生道の攝なりと爲さば、阿修羅も亦た應に餓鬼道の攝なるべし、何を以てか更に六道と作すや。

答へて曰く、是の龍王と金翅鳥は、復た樂を受くと雖も、傍行の形、畜生に同じきが故に畜生道に攝す。地獄餓鬼は、形は人に似たりと雖も、其の大苦を以ての故に人道に入らず。阿修羅は力勢既に大にして形は人・天に似たるが故に、別して六道を立つ。是れを略して欲界の衆生を說くと爲す。色・無色界の衆生は後品の中に說くが如し。

「檀波羅蜜に立つ」とは、菩薩、諸の衆生に語るらく、「當に布施を行ずべし、貧を大苦と爲す。無と貧との故に、諸の惡行を作りて三惡道に墮す。諸の惡行を作りて三惡道に墮すれば、則ち救ふべからず」と。衆生は聞き已つて、慳貪の心を捨てゝ、檀波羅蜜を行ず、後品の中に廣く說くが如し。

復次に、菩薩は衆生の前に於て、種種の因緣、種種の譬喩を以て、爲に法を說き、慳貪を毀呰す。「夫れ慳貪者は、自身の須ゐる所すら惜んで用ふる能はず、告げ求むる者を見れば、心濁り色變ず。即ち現身に於ては、聲色醜惡となり、後世の惡業を種うるが故に、形を受くること醜陋なり。先に布施の因緣を種ゑざるが故に、今身は貧賤にして財物を慳著し、多く求めて息まず。諸罪の門を開いて、專ら惡事を造るが故に、衆道の中に墮す。　復次に、生死輪に轉利益の業は、布施に過ぎたるは無し。今世・後世常に意に隨ひ、身を便ずるの事は、悉く施に從つて得。施を善導と爲す。能く

た）佛弟子と爲る。是の如き威力は、何ぞ餓鬼の攝する所たるを得んや。是の故に應に六道あるべし。　復次に、阿修羅・甄陀羅・乾沓婆・鳩槃茶・夜叉・羅刹・浮陀等の大神の如きは、是れ天の阿修羅の民衆にして、樂を受くること少しく諸天に減じ、威德あり、變化は意に隨つて作す所なり。是の故に人疑つて言く、是の修羅は修羅に非ず」と。〔修羅は秦に大と言ふなり。〕說く者の言く、是の阿修羅は修羅に非ず、阿修羅道は初めて名を得。餘の者と皆な同一道なりと。

問うて曰く、經には五道ありと說けり、云何なれば六道と言ふや。

答へて曰く、佛、去りてより久しくして、經の流れや遠し。法傳はりて五百年の後、多く別異あり、部部にて同じからず。或は五道と言ひ、或は六道と言ふ。若しくは五と說く者は、佛經に於て文を廻して五と說き、若しくは六と說く者は、佛經に於て文を廻して六と說く。又摩訶衍の中の法華經には、六趣の衆生ありと說けり、諸義の旨を見るに應に六道あるべし。　復次に、善惡を分別するが故に六道あり。善には上・中・下あるが故に三善道あり。天と人と阿修羅となり。惡には上・中・下あるが故に、地獄と畜生と餓鬼道となり。若し爾らずんば、惡に三果報あつて、而して善には二果あらん。是の事は相違す。若し六道あらば、義に於て違ふこと無し。

問うて曰く、善法にも亦た三果あり。下は人となり、中は天となり、上は涅槃なり。

答へて曰く、是の中に涅槃を說くべからず、但だ衆生の果報の住處のみを分別すべし。涅槃は法に非ざるが故なり。善法に二種あり。一に三十七品にして、能く涅槃に至る。二は能く後世の樂を生ず。今は但だ受身の善法を說き、涅槃に至る善法を說かず。世間の善に三品あり。上分の因緣の故に天道の果報あり、中分の因緣の故に人道の果報あり、下分の因緣の故に、阿修羅道の果報あり。

問うて曰く、汝は自ら、阿修羅は天と力等しく、受樂も、天と異ならずと說けり。云何なれば今ま善の下分を說いて阿修羅の果報と爲すや。

靜者は能はず。〔衆生に〕有色の衆生と無色の衆生、無足・二足・四足・多足の衆生、世間と出世間の衆生、大なる者と、小なる者、賢聖　凡夫、邪定・正定・不定の衆生、樂・苦・不苦、不樂の衆生、上・中・下樂の衆生、學・無學・非學非無學の衆生、有想・無想・非有想非無想の衆生、欲界・色界・無色界の衆生あり。欲界の衆生とは三種あり。善根に上中下あるを以ての故なり。上とは六欲天なり、中とは人中の富貴なり。下とは人中の卑賤なり。面類同じからざるを以ての故に、四天下別異なり。不善にも亦た三品あり。上は地獄、中は畜生、下は餓鬼なり。復次に、欲界の衆生に十種あり。三惡道と人と及び六天となり。地獄に三種あり、熱地獄、寒地獄、黑闇地獄なり。畜生に三種あり。空行と陸行と水行、晝行と夜行と晝夜行、是の如き等の差別あり。鬼に二種あり。弊鬼と餓鬼なり。弊鬼は天の如く樂を受く、但だ餓鬼と同住して、卽ち其の主と爲る。餓鬼は腹は山谷の如く、咽は針の如く、身に唯だ三事あり、黑皮と筋と骨となり。無數百歲に、飮食の名だも聞かず、何に況んや見ることを得んや。復た鬼あり。火口より出で、飛べる蛾は、火に投じて以て飮食と爲す。糞、涕唾、膿血、洗器の遺餘を食する有り。或は祭祀を得、或は產生の不淨を食す。是の如き等の種種の餓鬼あり。六欲天とは四王天等なり。六天の中間に於て、別に復た天あり。所謂持瓔珞天、戲忘天、心恚天、鳥足天、樂見天なり。此の諸天等は、皆な六天に攝する所なり。有人の言く、「欲界の衆生に應に十一種あるべし」と。先には五道を說けり、今阿修羅道を益す。

問うて曰く、阿修羅は卽ち五道の攝する所と爲す。是の阿修羅は天に非ず人に非ず、地獄の苦多く畜生の形と異なる。是の如きは應に鬼道の攝する所なるべし。

答へて曰く、然らず、阿修羅の力は三十三天と等し、何となれば或は諸天の爲に破られ、或時は能く諸天を破るを以てなり。經の中に說くが如くんば、釋提桓因は、阿修羅の爲に破られ、四種の兵衆は、藕根の孔に入つて以て自ら藏翳せり。（阿修羅は）五欲の樂を受くること天と相似し、（ま

已に今世の樂を得たり」と。復た更に思惟すらく、「後樂を得せしめん、若し世間の六波羅蜜を以て之に教へなば、則ち人天の中の樂を得るも、久しくして還た來つて生死に輪轉せん。當に復た出世間の六波羅蜜を以てして、無爲の常樂を得せしむべし」と。　復次に、先には衣服・華香等を以て其の身を莊嚴せり。今は功德を以　其の心を莊嚴す。若し三種の莊嚴あれば、具足と爲し、過ぐる者あること無し。（卽ち）一には衣服七寶等、二には福德、三には道法なり。菩薩は三種を具足して、衆生を莊嚴せんと欲するが故に先づ功德の果報を說き、今功德の因緣を說く。　復次に、前には、大施ありと雖も而も衆生は罪の故に、悉く得ること能はざることを說けり。餓鬼經に說くが如くんば、其の食を與ふと雖も而も噉ふべからず、變じて炭火・不淨の物と成ると。又菩薩は一切を捨てず、當に方便を作して衆生をして衣食の利益を得せしむべし、是の故に福を修するを教へて、自行自得せしむ。菩薩は善く因緣は彊ふ可らず、教を得て之を得せしむることを知る。是を以ての故に次第に衆生をして六波羅蜜に住せしむ。

問うて曰く、菩薩は、十方の一切衆生をして六波羅蜜に住せしめんことを志願す。何を以てか但だ「恒河の沙の如き世界の衆生」と說くや。

答へて曰く、聽法の者が、「恒河の沙」を聞くが爲の故なり。又新發意の菩薩に於ては、無量無邊を以てしては多しと爲す。多ければ則ち亂を致す。大菩薩の若きは恒河の沙を以て數と爲さず。復次に、「恒河の沙の如き」と說くは、是れ無邊無量の數なり。後品の中に說くが如し。　復次に、「恒河の沙の如き」とは、已に十方の諸の世界なりと說けり。此の中にも亦た一恒河の沙と言はず、難を爲すべからず。是の故に恒河の沙の如き世界と說くも、咎なし、恒河沙世界の義は先に說くが如し。

「衆生」とは、五衆・十八界・十二入・六種・十二因緣等の衆多の法の中に於て、假りに衆生と名く。是の天、是の人、是の牛、是の馬なり。衆生に二種あり。動者と靜者となり。動者は身口の業を生じ、

答へて曰く、華は常に有るに非ず、亦た速かに萎爛し、利益少なきが故に。是の故に說かず。燒香は、寒には則ち須ふる所なれども、熱時には患と爲す。塗香は寒熱に通用し、寒時には雜ゆるに沈水を以てし、熱時には雜ゆるに栴檀を以てし、以て其の身に塗る。是の故に但だ塗香のみを說く。

問うて曰く、若し檀波羅蜜を行ぜば、無量の果報を得て、能く一切衆生の所願を滿さん。何故に「衆生の願を滿さんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と言ふや。

答へて曰く、先に已に「般若波羅蜜を以て和合する故に、檀波羅蜜と名くることを得」と說けり。今當に更に說くべし。衆生の願を滿す可き所の者は、一國土・一閻浮提のみを謂ふに非ず、都て十方世界の、六趣の衆生の所願を滿さんと欲す。但だ布施の能く辨ずる所に非ざるが故に、般若波羅蜜を以て近遠の相を破し、一切衆生の相と非一切衆生の相とを破り。諸礙を除くが故に、彈指の頃に無量の身を化して、遍ねく十方に至り、能く一切衆生の所願を滿す。是の如きの神通利益は、要ず般若より出生す。是を以ての故に、菩薩は一切衆生の願を滿さんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【經】　復次に、舍利弗よ、菩薩摩訶薩は、恒河の沙等の如き、世界の衆生をして、檀波羅蜜に於て立ち、尸羅・羼提・毘梨耶・禪・般若波羅蜜に於て、立たしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】　問うて曰く、是の義の次第は何の因緣ありや。

答へて曰く、利に三種あり。今世の利、後世の利、畢竟利なり。復た三種の樂あり。今世と後世と出世の樂なり。前に今世の利樂を說けり、此には、後世出世の利樂を說く。是を以ての故に衆生をして、六波羅蜜に住せしむ。菩薩は衆生を愍念すること、父母の子を念ふにも過ぎ、慈悲の心は骨髓に徹す。先づ飲食を以て、其の身に充足して、飢渴の苦を除き、次に衣服を以て、其の身を莊嚴して、樂を受くること得せしむるも、菩薩の心は滿足せずして、復た是の念を作さく、「衆生は

所謂修陀甘露味、天果食等、摩頭陀婆槃等なり。衆生の各各食する所は、或は穀を食する者あり、或は肉を食する者あり、或は淨なるを食する者あり、不淨なる者あつて、來つて皆な飽滿す。

「衣服」とは、衣に二種あり。或は衆生より生ず、所謂る、綿・絹・毛・毳・皮韋等なり。或は草木より生ず、所謂布氈・樹皮等なり。諸の天衣あり、經緯あること無く、自然に樹より出で、光色輕軟なり。

「臥具」とは、床榻・被褥・幃帳・枕等なり。

「塗香」とは、二種あり。一には栴檀木等を摩して以て身に塗り、二には種種の雜香を擣いて以て末と爲し、以て其の身に塗り、及び衣服に熏じ並に地壁に塗る。

「乘」とは、所謂象・馬・車・輿等なり。

「房舍」とは、所謂土木實物を以て、成ずる所の樓閣・殿堂・宮觀等にして、以て寒熱・風雨・賊盜の屬を障ゆ。

「燈燭」とは、所謂脂膏・酥油・漆蠟・明珠等なり。

「諸物」とは、是れ一切衆生の須ふる所の物、具に說くべからざるが故に、略して諸物と言ふ。

問うて曰く、此中に何を以てか、燒香、妙華等を說かざるや。

答へて曰く、諸物を說けば、皆な已に之を攝す。

問うて曰く、若し爾らば但だ應に略して三種、所謂飮食・衣服・莊嚴の具を說くべし。

答へて曰く、此の諸物は是れ須要する所のものなり。若し衆生を慈念せば、飮食を以て先と爲し、次に衣服を以てし、身垢臭なるを以て、須ふるに塗香を以てし、次に臥具を以てし、寒雨には、房舍を須ゐ、黑暗には燈燭を須ふ。

問うて曰く、華香も亦よく臭を除く、何の故に說かざるや。

を滿すとは、應に度すべき者を謂ふなり。然るに菩薩の心は齊限なく、福德の果報も、亦た量あること無し、但だ衆生は無量阿僧祇劫の罪、厚く障ゆるが故に得ること能はず。舍利佛の弟子の、羅頻周比丘の如きは、持戒精進にして乞食し、六日にして而も得ること能はず、乃ち七日に至つて命在ること久しからず。同道の者あり、乞食して持ちて與ふるに、鳥、卽ち持ち去る。時に舍利弗、目揵連に語るらく、「汝、大神力を以て、此の食を守護して、彼をして之を得せしめよ」と。卽時に目連は食を持して、往いて與ふ。始めに(食)を口に向けんと欲するに、(食)變成して泥と爲る。又た舍利弗乞食して持ち與ふるに而も口自ら合せり。最後に佛來つて、食を持つて之を與へ給ふに、佛の福德の無量の因緣を以ての故に、彼をして食することを得せしむ。是の比丘、食し已つて心に歡喜を生じ、倍す信敬を加ふ。佛、比丘に告げたまはく、「有爲の法は皆な是れ苦相なり」と。爲に四諦を說きたまふに、卽時に比丘は漏盡き意解して阿羅漢道を得たり。薄福の衆生あり、罪此よりも甚じき者は、佛も救ひたまふこと能はず。又衆生は不可得なることを知るが故に、深く法性に達するが故に、諸佛は、是は度すべく、是は度すべからずと憶想分別したまふこと無く、心常に寂滅にして意に增減なし。是を以ての故に菩薩は、一切衆生の願を滿たさんと欲するも、彼に罪あるが故に、而も得ること能はざるも、菩薩に咎なし。

「飮食」とは、略說するに麁細の二種あり。餠飯等と百味の食となり。經には四食の衆生の久しく住するを說くと雖も、而も此には但だ摶食のみを說く。餘は無色にして相與ふべからず、若し摶食を施せば則ち三食を與ふ。何を以ての故に、摶食に因るが故に、三食を增益す。經の所說の如くんば、檀越、食を施して、則ち與ふるに、受者に五事の利益あり。飮は總じて二種を說く。一には草木酒、所謂る蒲桃、甘蔗等及び諸の穀酒なり。二には草木漿、甘蔗漿、蒲桃漿、石蜜漿、安石榴漿、梨棕漿、波盧沙菓漿等、及び諸の穀漿なり。是の如きを和合して人中に飮食し、及び天飮食す。

若し佛は悉く衆生の所願を滿たすこと能はずと言はば、是語は然らず。 復次に、釋迦文尼佛は、王宮に身を受け、人法を受くることを現じ、寒熱・飢渇・睡眠あり。 諸の誹謗・老病死等を受けたまふも、內心の智慧神德は、眞佛の正覺と異なること有ること無し。 衆生の所願を滿さんと欲し、悉く皆な能く滿すも、而も滿さざるは、無數世より來、常に衆生の衣食の願を滿すも、而も苦を免れざるを以て、今は但だ涅槃無爲の常樂を以て、之を益したまふ。人が所親を憐愍して、毒を雜へたる美食を與へざるが如し。是の如く世間の願は諸の結使を生じ、又復た離るる時は、心に大苦を生ず。是故に以て要と爲さず。 復次に、有人の言く、「釋迦牟尼佛は、已に衆生の所願を滿したまふも、而も衆生は自ら得ること能はず」と。毘摩羅詰經に說くが如くんば、佛、足の指を以て地を案じたまふに、卽時に國土は七寶もて莊嚴す。我が佛國は是の如し。怨害多き者の爲に、佛國の異なることを現じたまふ。又龍王等は心に雨を降らすに、人に在つては、水と爲り、餓鬼の身上には、皆な炭火と爲るが如し。

問うて曰く、若し能く一切衆生の願を滿たすとせば、則ち衆生は邊有れば、飢寒の苦を受くる者あること無かるべし。何となれば一切衆生は、皆な願ふ所願を滿たし、苦を離れ樂を得ることを願ふが故なり。

答へて曰はく、一切を滿すとは、名字の一切にして、實の一切に非ず、法句の偈に說くが如し。

『一切のものは皆な死を懼れ、杖痛を畏れざるもの莫し。己を恕して、譬へと爲すべし、殺すこと勿れ、杖を行ずること勿れ。』

一切は杖痛を畏ると言ふと雖も、無色(界)の衆生の如きは、身なきが故に則ち杖痛なく、色界の衆生は、身あるべしと雖も亦た杖痛なく、欲界の衆生も、亦た杖痛を受けざるあり。而も一切と言ふ。杖を得べき者を謂つて說いて一切と言ふも、實の一切に非ず。是を以ての故に菩薩が一切衆生の所願

食・衣被・臥具・寶物等を須ふることも、皆な亦た是の如く、衆生の欲する所を恣ままにし已つて、然る後に法を說き、四食を離れて皆な阿鞞跋致地に住せしむ。是の如き等の菩薩の神通力の故に能く衆生の願を滿す。

問うて曰く、佛在世の時すら衆生に尙ほ飢餓あり。天、雨を降らさず、衆生困弊せるに、佛は猶ほ一切衆生の願を滿たしたまふこと能はず、云何んぞ菩薩にして能く其の願を滿たさんや。

答へて曰く、菩薩は十地に住し、首楞嚴三昧に入り、三千大千世界に於て、或時は初發意を現じて、六波羅蜜を行じ、或は阿鞞跋致を現じ、或は一生補處を現じて兜率天上に於て諸天の爲に法を說き、或は兜率天上より來り下つて淨飯王の宮に生れ、或は出家して成佛するを現じ、或は大衆の中にて法輪を轉じて無量の衆生を度すことを現じ、或は涅槃に入つて七寶の塔を起し、遍ねく諸の國土の衆生をして舍利を供養せしむるを現じ、或時は法都て滅盡す。菩薩の利益、是の如し、何に況んや佛に於てをや。而して、佛身に二種あり、一には眞身、二には化身なり。衆生は、佛の眞身を見れば、願として滿たさざること無し。佛の眞身は虛空に滿ち、光明遍ねく十方を照らし、說法の音聲も亦た、遍十方無量恒河沙等の世界に遍ねくして中に滿つる、大衆は皆な共に法を聽き。法を說いて息まざれば、一時の頃、各聞く所に隨つて、解悟することを得。劫盡き已れば、衆生の行業の因緣の故に、大雨を澍ぎ下し、間に斷絕なく、三大も制する能はざる所、唯だ劫盡くるあれば十方に風起り、更に互に相對して能く此の水を持するが如し。是の如く、法性身の佛は說法する所あり。十住の菩薩を除けば、三乘の人は皆な持すること能はず、唯十住の菩薩の不可思議なる、方便智力あつて悉く能く聽受す。衆生、其法身の佛を見ること有れば、三毒あること無く、及び衆の煩惱・寒熱の諸苦、一切皆な滅し、願として滿ちざるは無し、如意珠の如きすら、尙ほ衆生をして、願に隨つて皆な得せしむ、豈に況んや佛に於てをや。珠は一切世間の願を與へ、佛は一切出世間の願を與ふ。

問うて曰く、菩薩は何を以ての故に、衆生に得易きの願を與へ、難き者を與へざるや。
答へて曰く、願に下・中・上あり。下願は、今世の樂の因緣を致さしめ、中願は、後世の樂の因緣を與へ、上願は、涅槃の樂の因緣を與ふ。是故に先づ下願、次に中願に及び、然る後に上願を與ふ。
復次に、衆生の多くは今の樂に著し、少きは後の樂を求め、涅槃を樂ふ者は轉た復た少きなり。若し多き者を說けば少きも亦た攝す。

復次に、此の經の前後には、多く後世の涅槃の道を說き、少しは今世の利事を說く。菩薩の法は、常に衆生に種種に利益を與へて、捨つること有るべからず。所以何んとなれば、初めの心には但だ諸の衆生をして、大乘の法を行ぜしめんと欲するも、化を受くるに堪へざるを以て、次に聲聞辟支佛の道を與へ、若し復た能はずんば、當に十善・四梵行等を與へて、福德を修せしむべく、若し衆生都て樂はざれば、是の如き衆生をも遺捨すべからず。當に今世の利益、所謂飲食等を與ふべきなり。 復次に、凡夫にして能く人に飲食等を與ふと雖も、彼の願を滿す者には皆因緣あり。若しくは今世の事、若しくは後世の事なり。聲聞辟支佛は因緣なくして、衆生の願を滿すと雖も、而も益する所甚だ少し。菩薩摩訶薩は、檀波羅蜜を行ずる業因緣の故に、國王と爲ることを得。或は大長者と爲り、財富無量にして、四方の衆生の若し來つて求むる者には、盡く之を滿足せしむ。頻頭居士の如きは、大檀越と爲り、七寶の大床に坐し、金剛を脚とし、敷くに天褥を以てし、赤眞珠を以て上に帳幔と爲し、左右に立侍するもの各八萬四千にして、皆な莊嚴琦妙なり。四大門を開き、恣ままに求むる所の者の（爲に）晝夜六時に鼓を鳴し、又光明を放つ。十方無量の衆生の鼓聲を聞き、光明身に觸ることある者は、悉く來らざる無し。種種の飲食を得んと欲すれば、長者は其の大集を見て、卽時に默然として、仰いで虛空を視る。時に空中より種種百味の食を雨ふらし、意に隨つて皆得。若し衆生の自ら取らざれば、左右、給使し、分與して之に與へ、足り滿つれば乃ち止む。飲

【論】問うて曰く、何の次第あつてか、一切衆生の願を滿さんと欲するや。

答へて曰く、菩薩の業に二種あり。一には諸佛を供養せんが爲なり、二には衆生を度脫せんが爲なり。以て諸佛を供養して、無量の福德を得、是の福德を持して衆生を利益す。所謂衆生の願を滿すなり。賈客の主の海に入つて寶を採り、安隱に出でて還り、所親及び知識等を利益するが如し。菩薩も是の如く、諸佛の法海に入つて無量の功德の寶を得、衆生を利益す。小王の大王を供養して、能く歡喜せしめ、其の願ふ所の職位、財帛を與へられて、其の本國に還り、人物を利益し、怨賊を除却するが如し。菩薩は、諸佛法王を供養するが故に、記別を受くることを得、無量の善根の珍寶を以て、無盡の智力を得、來つて衆生に入り、善人に供養し、貧者には、其の須ふる所に隨つて、之に給與し、魔民・邪見・外道の屬は、悉く皆な破壞す。是を諸佛を供養し、次いで衆生の所願を滿たすと爲す。

問うて曰く、菩薩は實に能く一切衆生の願を滿たすや不や。若し悉く衆生の願を滿たさば、餘の佛菩薩は何の利益する所かある。若し悉く滿たさずんば、是の中に何の故に、一切衆生の願を滿たさんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと說くや。

答へて曰く、二種の願あり。一には、可得の願、二には、不可得の願なり。不可得の願とは、人あつて、虛空を籌量して其の邊際を盡くさんと欲し、及び時と方との邊際を求むるも、小兒が水中の月、鏡中の像を求むるが如く、是の如き等の願は皆な不可得なり。可得の願とは、木を鑽つて火を求め、地を穿つて水を得、福を修して人天の中の生を得、及び阿羅漢・辟支佛の果を得、乃至諸佛法王を得。是の如き等は、皆な可得の願と名く。可得の願に二種あり、一には、謂はく世間、二には、謂はく出世間なり。是の中には、世間の願の故に、衆生の願を滿たす。云何にして知ることを得る、飲食牀臥より乃ち燈燭に至るまで、須ふる所の物を以て、皆な之を給與す。

養したてまつるに、福を得ること益多し、乃至寶物も亦た是の如し。　復次に、時の宜しき所に隨ふ。若し寒時には應に薪火・上衣・溫室・被褥を以てし及び飲食を以てすべく、熱時には應に氷水・扇蓋・涼室・生薄の服・上妙の食を以てすべく、風雨の時は就いて供具を送る。是の如く、時に隨つて供養す。又土地の宜き所に隨ひ、受者の須ふる所に隨つて、皆な持して供養す。

復次に、「意に隨つて供養す」とは、菩薩あり、佛は須ゐたまふ所無きことを知り、又諸物は虛誑にして幻の如く、一相にして所謂無相なるを知り、衆生を敎化せんが爲の故に、衆生國土の重んずる所に隨つて、引導するが故に供養す。　復た菩薩あり、甚深の禪定を得、菩薩の神通を生じ、神通力を以ての故に、飛んで十方の佛前に到り、或は佛國に於て、若し遍ねく天華を雨ふらすを須ゐて、即ち三千世界を滿して持つて佛を供養したてまつる。或は天栴檀を雨ふらし、或は眞珠の光相鮮發なるを雨ふらし、或は七寶を雨ふらし、或は如意珠の大さ須彌の如きを雨ふらし、或は妓樂の音聲淸妙なるを雨ふらし、或は身を以て須彌の如くし、以て燈炷と爲りて諸佛に供養したてまつる。是の如き等を名けて財の供養と爲す。　又菩薩は六波羅蜜を行じ、法を以て諸佛を供養したてまつる。或は菩薩あり、一地の法を行じて、諸佛を供養し、乃至十地に法を行じて、供養したてまつる。或時は菩薩は無生法忍を得て、自ら煩惱及び衆生の煩惱を除く。是れ法の供養なり。或時は菩薩は十地に住し、神力を以ての故に地獄の火を滅せしめ、餓鬼道に於て、皆な飽滿を得せしめ、畜生をして、恐怖を離るることを得せしめ、人天に生ぜるを漸く阿惟越致地に住せしむ。是の如き等の大功德力の故に、名げて、法の供養と爲す。是の故に「善根を成就することを得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と說く。

【經】　一切衆生の願ふ所の衣服・飲食・臥具・塗香・車乘・房舍・牀榻・燈燭等を滿さんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

問うて曰く、若し爾らば、何ぞ卽ち華香等を說いて、而も其の因を說かざるや。

答へて曰く、供養の具に二種あり。一には財の供養、二には法の供養なり。若し但だ華香等の供養のみを說けば、則ち法の供養を攝せず、今善根供養と說けば、當に知るべし。則ち財法倶に攝することを。

「供養」とは、諸佛の功德を若しくは見、若しくは聞いて心に敬ひ尊重し、迎逆し侍送し、旋遶し禮拜し、曲躬し合掌して、而して住すれば避けて安處に坐せしめ、飮食・華香・珍寶等を勸進し、種種に持戒・禪定・智慧の諸の功德を稱讃し、所說の法あれば教誨を信受す。是の如き善の身・口・意業、是を供養と爲す。

「尊重」とは、一切衆生の中にて、德は上に過る無きを知るが故に尊と言ひ、敬畏の心、父母・師長・君王よりも過ぎて、利益を重ずるが故に重と言ふ。

「恭敬」とは、謙遜し、畏れ、難かるが故に、恭と言ひ、其の智德を推すが故に、敬と言ふ。

「讃歎」とは、其の功德を美むるを讃と爲し、之を讃するも足らずして、又之を稱揚するが故に、歎と言ふ。

「意に隨つて成就す」とは、若し華を須ゐて供養せんに、意の如く卽ち至り、或は求めて得、或は求めずして得、自然に出づる者あり、或は變化して生ず、乃至伎樂供養の具、悉く皆な是の如し。

問うて曰く、菩薩は遇ひ得れば、便ち以て供養す。何を以てか意に隨つて求索するや。

答へて曰く、福德は心に從ふ、愛重する所に於て、持して供養に用ふれば、福を得ること益多し、阿育王の如きは、小兒たりし時、重んずる所の土を以て、持して佛に奉るに用ひ、閻浮提の王たることを得、一日の中に八萬の塔を起せり。若し大人が多くの土を以て、鉢に投ずと雖も而も所得なけん。重んずる所に非ざるが故なり。有人は偏に華を貴重し、其の尊ぶ所を以て、持して佛を供

卷の第三十

初品第四十六……善根供養

【經】諸の善根、供養を以て諸佛を恭敬し、尊重し、讃歎し、意に隨つて成就せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】菩薩、既に諸佛を離れざるを得ば、當に供養すべし。若し佛に値ひたてまつることを得て而も供具なければ甚だ悅ばずと爲す。須摩提菩薩〔秦に妙意と言ふ。〕の如きは然燈佛を見たてまつるに供養の具なく、周旋し求索して華を賣る女を見、五百の金錢を以て五莖の青蓮華を買得し、以て佛を供養したてまつれり。又薩陀波崙菩薩は、師を供養するが爲の故に、身の血肉を賣れり。是の如く菩薩は既に佛を見たてまつることを得て、心に供養せんことを欲し、若し供具なければ其心に礙ふること有り。譬へば庶民は君長に遇見するに禮貺を持せざれば則ち不敬と爲るが如し、是の故に諸の菩薩は供養の具を求めて諸佛を供養す。佛は須ゐ給はずと雖も菩薩の心は具足することを得。譬へば農夫の好良の田に遇うて而も種子なくんば、功を加へんと欲すと雖も、以て力を肆すこと無く、心大に愁憂するが如し。菩薩も亦た是の如く、諸佛に遇ひたてまつることを得て、而も供具なければ、設ひ餘物ありとも、其の意に稱はず、心に便ち礙あり。

「諸の善根」とは、所謂善根の果報・華香・瓔珞・衣服・幡蓋・種種の珍寶等なり。所以は何んとなれば、或時は因を以て果を說く、一月に千兩の金を食すと言ふが如し。金は食す可らず、金に因つて食を得るが故に、金を食すと言ふ。或る時は果を以て因を說く。好畫を見て、是は好手なりと言ふが如し。手は是れ畫に非ず、畫の妙なるを見るが故に、說いて好手と言ふ。善根の果報も亦た是の如く、善根の業因緣を以て、供養の具を得るを名けて善根と爲す。

に入れば、但だ身體の膖脹爛壞のみを見、乃至但だ骨人のみを見るに、この骨人は作者あること無く、亦た來去もなく、憶想を以ての故に見るが如し。菩薩摩訶薩が念佛三昧に入つて、悉く諸佛を見たてまつるも亦復た是の如し。攝心を以ての故に、心清淨なるが故に。譬へば、人が其の身を莊嚴して、淨水の鏡に照らすに、悉く見ざる無く、(而も)此の水鏡の中に亦た形相なく、明淨を以ての故に、其の身像を見るが如し。諸法は本より以來、常に自ら清淨なり。菩薩は善く清淨心を修するを以て、意に隨つて悉く諸佛を見、其の疑ふ所を問ふ。佛、所問に答へたまへば、佛の所說を聞いて、心大に歡喜し、三昧より起ちて是の念を作して言く、「佛は何の所より來り給ふや、我身も亦た去らず」と。卽時に便ち「諸佛は從來し給ふ所なく、我も亦去る所なし」と知つて、復た是の念を作さく、「三界の所有は皆な心の所作なり。何となれば心の念ずる所に隨つて、悉く皆な見ることを得ればなり。心を以て佛を見、心を以て佛を作る。心卽ち是れ佛にして、心は卽ち我身なり。心は自ら知らず、亦た自ら見ず。若し心相を取らば、悉く皆な無智心なり。亦た虛誑にして、皆な無明より出づ。是の心相に因つて、卽ち諸法實相に入る、所謂常空なり。是の如きの三昧と智慧とを得已つて、二行の力の故に、意の願ふところに隨つて諸佛を離れず、金翅鳥王が二翅を具足するが故に、虛空の中に於て、自在に至るが如し。菩薩は是の三昧智慧力を得るが故に、或は今身にて意に隨つて諸佛を供養したてまつり、命終すれば、亦復た諸佛に値遇したてまつる。是の故に、「菩薩は常に諸佛を離れざらんとせば、當に般若波羅蜜を學すべし」と說く。

を得るや。

答へて曰く、福德と智慧とを具足するが故に、乃ち應に佛をも得べし。何に況んや諸佛を離れざるをや。衆生は無量劫の罪の因緣あるを以ての故に、願の如く得ず。福德を行ずと雖も智慧薄少なり、智慧を行ずと雖も福德薄少なり。故に、所願は成ぜず。菩薩は佛道を求むるが故に、要ず二忍を行ず、生忍と法忍なり。生忍を行ずるが故に、一切衆生の中に慈悲心を發し、無量劫の罪を滅して無量の福德を得、法忍を行ずるが故に、諸法の無明を破して無量の智慧を得。二行和合するが故に何の願か得ざらん。是を以ての故に菩薩は世世に常に諸佛を離れず。復次に、菩薩は常に愛樂して佛を念ずるが故に身を捨つるも身を受くるも、恒に佛に値ひたてまつることを得。譬へば衆生の欲を習ふ心重きは婬鳥の身、所謂孔雀・鴛鴦等を受く。瞋恚を習ふこと偏多なれば毒虫の中、所謂、惡龍・羅刹・蜈蚣・毒蛇等に生るるが如し。是の菩薩は心に轉輪聖王、人天の福樂を貴ばずして但だ諸佛を念ず。是の故に心の重ずる所に隨つて身形を受く。復次に、菩薩は常に善く念佛三昧を修する因緣の故に、生るる所に常に諸佛に値ひたてまつる。般舟三昧の中に說くが如きは、菩薩は是の三昧に入れば、卽ち阿彌陀佛の國に生ずるを見る。便ち其の佛に何の業因緣の故に、彼の國に生ずることを得たるやと問ふに、佛卽ち答へて言はく、「善男子よ、常に念佛三昧を修し、憶念して廢せざるが故に、我國に生ずることを得たり」と。

問うて曰く、何か是れ念佛三昧にして、彼の國に生ずることを得る。

答へて曰く、念佛とは佛の三十二相、八十隨形好の金色身を念ずるに、身より光明を出だして、遍ねく十方に滿つること、閻浮檀金を融せるが如く、其の色明淨なり。又須彌山王が大海中に在つて、日光照す時、其の色、明を發するが如し。行者は是時、都て餘の色想、所謂、山地樹木等なく、但だ虛空の中に諸佛の身相を見るに、眞瑠璃の中より赤金、外に現ずるが如し。亦た比丘が不淨觀

薩未だ法位に入らずして、若し諸佛を遠離し、少功德を以て方便力なくして、衆生を化せんと欲すれば、少しく利益ありと雖も、反つて更に墜落せん。是の故に新學の菩薩は諸佛を遠離すべからず。

問うて曰く、若し爾らば何を以てか聲聞辟支佛を離れずと說かざるや。聲聞辟支佛も亦た能く菩薩を利益せん。

答へて曰く、菩薩は大心なり。聲聞辟支佛は涅槃の利益ありと雖も、一切智なきが故に、菩薩を敎導すること能はず。諸佛には一切種智あるが故に、能く菩薩を敎導し給ふ。象が泥に沒すれば象に非ずんば出だすこと能はざるが如し。菩薩も亦た是の如く、若し非道の中に入れば、唯だ佛のみ能く救ひ給ふ。大道を同うすればなり。是を以ての故に、「菩薩は常に諸佛に離れざらんと欲す」と說く。　復次に、菩薩は是の念を作さく、「我は未だ佛眼を得ざるが故に、盲と異なること無きが如し。若し佛の爲に引導せられずんば、則ち趣く所なく、錯つて餘道に入らん、設ひ佛法を聞くとも、異處にして行ぜば、未だ敎化の時節、行法の多少を知らず」と。　復次に、菩薩は佛を見たてまつれば、種種の利益を得。或は眼に見れば心清淨となり、若し所說を聞けば、心則ち法を樂んで大智慧を得、法に隨つて修行して解脫を得。是の如く佛に値ひたてまつれば無量の益利あり、豈に一心に求めて佛を見たてまつるを欲せざらんや。譬へば、嬰兒が母に離るべからざるが如く、又道を行くに糧食を離さざるが如く、大熱の時、涼風冷水を離れざるが如く、大寒の時、火を離るるを欲せざるが如く、深水を度るに、船を離るべからざるが如く、譬へば病人の良醫を離れざるが如し。菩薩の諸佛を離れざるは上の事よりも過ぎたり。何を以ての故に、父母・親屬・知識・人天・王等は皆な佛の如く利益すること能はず、佛の益利もて、諸の菩薩は諸の苦處を離れて世尊の地に住す、是の因緣を以ての故に菩薩は常に佛を離れず。

問うて曰く、有爲の法は欺誑不眞にして皆な信ず可らず、云何にして願の如く、諸佛を離れざる

問うて曰く、發心より已來、已に菩薩家に生ぜば、今云何んぞ菩薩家に生ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしといふや。

答へて曰く、二種の菩薩家あり。退轉家と不退轉家、名字家と實家、淨家と雜家あり、信堅固家と不堅固家あり。不退轉家、乃至、信堅固家の爲に、是の如き等の家を得んと欲するが爲の故に、「菩薩家に生ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と言ふ。

「[二]鳩摩羅伽地を得んと欲せば」とは、或は菩薩あり、初發心より婬欲を斷じ、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、常に菩薩道を行ず。是を鳩摩羅伽地と名く。　復次に、或は菩薩あり、願を作さく、「世世に童男として、出家して道を行じ、世間の愛欲を受けじ」と。是を名けて鳩摩羅伽地と爲す。

復次に、又王子を鳩摩羅伽と名くるが如し。佛は法王たり、菩薩は法の正位、乃至、十地に入るが故に、悉く王子と名け、皆な佛たるに任ず。文殊師利の如きは、十力四無所畏等、悉く佛事を具するが故に、鳩摩羅伽地に住して廣く衆生を度す。　復次に、又童子の四歳已上を過ぎ、未だ二十に滿たざるを、名けて鳩摩羅伽と爲すが如し。若し菩薩初めて菩薩家に生ずる者は嬰兒の如く、無生法忍乃至十住地を得て、諸の惡事を離るるを名けて、鳩摩羅伽地と爲す。是の如き地を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

「常に諸佛を離れざらんと欲す」とは、菩薩は世世、生ずる所に、常に諸佛に値ひたてまつるなり。

問うて曰く、菩薩は當に衆生を化すべし、何を以てか常に佛に値ひたてまつらんと欲するや。

答へて曰く、菩薩あり。未だ菩薩位に入らず、未だ阿鞞跋致を得て、記別を受けざるが故に、若し諸佛を遠離せば、便ち諸の善根を壞し、煩惱に沒在して、自ら能く度すること能はず、安んぞ能く人を度せんや。人の船に乘りて、中流にして壞敗せば、他人を度せんと欲すれば、反つて自ら水に沒するが如く、又少湯を大氷池に投ずるに、少處を消すと雖も、反つて更に氷と成るが如し。菩

【二】鳩摩羅伽地。(Kumāra-bhūta)童子地と譯す。通じては菩薩地の總稱、別しては、初地又は八地已上の菩薩を稱す。

むも畏れず。　復次に、菩薩は初發意より一心に願を作さく、「今日より復た諸の惡心に隨はず、但だ一切衆生を度脫せんと欲す、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と。　復次に、菩薩若し能く諸法實相の不生不滅を知れば、無生法忍を得、是より以往、常に菩薩道に住せん。佛、持心經の中に說きたまふ所の如し。「我錠光佛を見し時、諸法の無生忍を得、初めて六波羅蜜を具足せり。爾より前には都て布施持戒等なし」と。　復次に、若し菩薩は是の念を作さく「恒河沙等の如き劫を一日一夜と爲し、是の日夜三十日を用つて月と爲し、十二月を歲と爲し、是の如き歲數、百千萬億を過ぎて乃ち一佛あり、是の佛の所に於て、供養し持戒して諸の功德を集め、是の如き恒河沙等の諸佛ありて、然る後作佛を受記せられんに、菩薩の心は懈怠せず沒せず厭はず、悉く皆な樂んで行ぜん」と。　復次に、菩薩は諸の邪定、五逆の衆生、及び善根を斷ぜる衆生の中に於ても、而も慈悲を生じて正道に入らしめ恩報を求めず。　復次に、菩薩は初發心より以來、諸の煩惱の爲に覆はれず壞せられず。　復次に、菩薩は諸法の實相を見ると雖も、諸の觀心に於て亦た著を生ぜず。　復次に、菩薩は自然に常に口に實言し、乃至夢中にても亦た妄語せず。　復次に、菩薩の見る所の色あらば、皆な是れ佛色なり、念佛三昧力の故に、色に於ても亦た著せざるなり。　復次に、菩薩は一切衆生が生死の苦中に流轉するを見て、一切の衆中に心亦た著せず。但だ願を作して言く、「我及び衆生は何時か當に度すべし」と。　復次に、菩薩は一切の珍寶に於て、心に著を生ぜず、但だ三寶のみを樂ふ。　復次に、菩薩は常に婬欲を斷じ、乃至念想すら生ぜず、況んや實事あらんや。

復次に、衆生は眼に菩薩を見れば、即ち慈三昧を得。　復次に、菩薩は能く一切の法を悉く佛法と爲し、聲聞辟支佛の法、凡夫の法、種種の差別あること無からしむ。　復次に、菩薩は一切法を分別し、一切法の中に於て亦た法相を生ぜず、亦た非法相を生ぜず、是の如き等の無量の因緣、是を菩薩家に生ずと名く。

に、佛は常に大衆の中に於て、師子吼を作して言はく、「我は衆生の中に於て、一切の功德最も第一なり」と、若し佛の生身が相好を以て莊嚴せずんば、或は人あつて言はん、「身形醜陋なり、何ぞ能く知る所あらん」と。佛が三十二相、八十隨形好を以て其の身を莊嚴してすら衆生は猶ほ信ぜざる有り、何に況んや相好を以て莊嚴せざるをや。

復次に、佛法は甚深にして常寂滅の相なるが故に、狂愚の衆生は信ぜず受けずして謂はん、「身を滅盡すれば一も取る所なし」と。是の故に佛は廣長舌と、梵音聲と、身に放つ大光とを以て、種種の因緣を爲して、譬喩して上妙の法を說き給ふ。衆生は佛の身相の威德を見、又音聲を聞いて、皆な歡喜し信樂す。 復次に、莊嚴する物に內外あり、禪定・智慧・諸の功德等は是れ內の莊嚴にして、身相・威德・持戒の具足は是れ外の莊嚴なり。佛は內外を具足し給ふ。 復次に、佛は一切衆生を慇念にして、世に出興し給ひ、智慧等の諸の功德を以て、利根の衆生を饒益し、身相の莊嚴を以て、鈍根の衆生を饒益し給ふ。心の莊嚴は涅槃の門を開き、身の莊嚴は天人樂の門を開く。身の莊嚴の故に衆生を三福處に置き、心の莊嚴の故に衆生を置いて三解脫門に置入れしむ。身の莊嚴の故に衆生を三惡道より拔き、心の莊嚴の故に衆生を三界の獄より拔く。是の如き等の無量の利益因緣あるが故に、相好を以て生身を莊嚴す。

【經】菩薩の家に生れんことを欲し、鳩摩羅伽地を得んと欲し、諸佛を離れざることを得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】菩薩の家とは、若し衆生の中に於て甚深の大悲心を發せば是を菩薩の家に生ずと爲す。王の家に生ずれば敢て輕んずる者なく、亦た飢渴寒熱等を畏れざるが如し。菩道道の中に入り菩薩の家に生ずるも亦た是の如く、佛子なるを以ての故に諸天・龍・鬼神、諸の聖人等敢て輕んずる者なく、益恭敬を加ふ。(又)惡道・人天の賤處をも畏れず、聲聞・辟支佛の人・外道の論師來つて、其の心を沮

に三十二相は、一切衆生の中に於て最も殊勝と爲すことを知る。無相の法と言ふは、常・淨・樂相、我相、男・女・生死等の相を破せんが爲の故に是の如く說けり。是を以ての故に佛法は無相の相なりと雖も、而も三十二相を現じて衆生を引導す。佛は第一なりと知りて淨信を生ぜしめんが故に三十二相を說くも咎なし。

問うて曰く、何を以ての故に三十二相を說いて、多からず少からざるや。

答へて曰く、若しくは多を說き、若しくは少を說かば倶に難あるべし。復次に、佛身の丈六を若しくは少相に說かば、則ち周遍せず、莊嚴を具せず。若し三十二相に過ぐれば、則ち復た雜亂せん。譬へば嚴身の具は、復た富んで殊璣ありと雖も、重ねて瓔珞を著く可らざるが如し。是の故に三十二相は、多からず少からず、正しく其の中を得たり。復次に、若し少くして端嚴ならざれば、則ち八十隨形を留む、好處も過ぐれば則ち雜亂せん。

問うて曰く、若し八十隨形好を須ゐなば、何ぞ皆な名けて相と爲さずして、別に好と爲すや。

答へて曰く、相は大いに身を嚴にす。若し大を說けば則ち已に小を攝す。復次に、相は麁にして好は細なり。衆生の佛を見れば則ち相を見る。好は則ち見難きが故になり。又相は餘人と共に得。好は或は共にして、或は不共なり。是を以ての故に相と好とを別に說くなり。

問うて曰く、佛は畢竟じて衆生相、吾我相を斷じて、空法の相を具足し給ふ、何を以ての故に、相を以て莊嚴すること、相を取る者の法の如くなるや。

答へて曰く、若し佛が但だ妙法のみを以て、其の心身を莊嚴して、相好なくんば、或は度す可き衆生ありて、心に輕慢を生じて謂はん、「佛は身相を具せず、一心に樂んで佛法を受くること能はず」と。譬へば不淨器を以て、諸の美食を盛るも、人の喜ばざる所なるが如く、臭き皮嚢に諸の寶物を盛るも、取る者樂ばざるが如し。是を以ての故に佛は三十二相を以て、其の身を莊嚴し給ふ。復

莊嚴身を現じたまふ。

復次に、一切衆生の中に最勝なることを顯さんが爲の故に、三十二相を現じ、而も無相の法を破らず。菩薩の如きは、初め生れて七日の中にて、褁むに白氎を以てし、諸の相師に示すに、相師は古聖の相書を以て之を占ひ、以て王に答へて曰く、「我が讖記の法に、若し人三十二相あれば、在家ならば當に轉輪聖王たるべく、出家せば當に佛と作ることを得べし。唯だ此の二處にして三處あること無し」と。諸の相師出で已りて、菩薩寢息するに、復た仙人あり、阿私陀と名く。淨飯王に白して言さく、「我は天耳を以て、諸天鬼神が、淨飯王の生子には佛身の相ありと說くを聞くが故に、來つて見ることを請ふなり」と。王大に歡喜し、「此の人は仙聖なり。故に遠より來つて我が子を見んと欲す」と、諸の侍人に勅して、「太子を將ゐて出でよ」といふ。侍人王に答ふらく、「太子は小睡せり」と。是の時に阿私陀の言く、「聖王は常に一切を請じて施すに甘露を以てす、睡るべからざるなり」と。卽ち坐より起つて太子の所に詣り、臂上に抱著して上下に之を相し、相し已つて涕零して自ら勝ふること能はざりき。王大に悅ばずして、相師に問うて曰く、「何の不祥ありてか涕泣すること是の如くなるや」と。仙人答へて曰く、「假使、天より金剛大山を雨ふらすとも、其の一毛をも動かすこと能はず、豈に不祥あらんや。太子は必ず當に作佛すべし。我は今年已に晚暮なり。當に無色天上に生るべく、佛を見たてまつることを得ず、其の法を聞かざるが故に、自ら悲傷するのみ」と。王言く、「諸の相師の說は一事を定めず、若し在家ならば當に轉輪聖王と作るべく、若し出家せば當に作佛すべしと說けり」と。阿私陀言く、「諸の相師は世俗を以て比知す。天眼に非ず。諸聖相書を知れども又具足して遍ねく知らず。相に於て總觀すれども、明に審かなる能はず、是の故に或は在家ならば當に轉輪聖王と爲るべく、出家せば當に佛と爲るべしと言ふ。今太子の三十二相は正滿明徹にして甚深淨潔に具足せり。必ず當に佛と作るべし、轉輪聖王に非ざるなり」と。是を以ての故

を離るるが故に、梵聲の相を得。善心好眼をもて衆生を觀るが故に、眼睫紺青の相と、眼睫如牛王の相とを得。尊ぶ所を禮敬し、及び自ら戒を持し、戒を以て人に敎ふるが故に、肉髻の相を得、讃歎すべき所の者を讃歎するが故に、眉間白毫の相を得。是を聲聞法を用ふる三十二相の業因緣と爲す。

摩訶衍の中の三十二相の業因緣とは、

問うて曰く、十方の諸佛、及び三世の諸法は、皆な無相の相なり、今何を以ての故に、三十二相を說くや。一相すら尙ほ不實なり、何に況んや三十二をや。

答へて曰く、佛法に二諦あり、一には世諦、二には第一義諦なり。世諦の故に三十二相を說き、第一義諦の故に無相を說く。二種の道あり、一には衆生をして福を修せしむるの道、二には慧道なり。福道の故に三十二相を說き、慧道の故に無相を說く。生身の爲の故に三十二相と說き、法身の爲の故に無相を說く、佛身は三十二相、八十隨形好を以てして自ら法身を莊嚴し、十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法の諸の功德を以て、衆生を莊嚴し給ふ。二種の因緣あり。一には福德の因緣、二には智慧の因緣なり。福德の因緣もて、衆生を引導せんと欲するが故に、三十二相の身を用ゐ、智慧の因緣を以て、衆生を引導せんと欲するが故に、法身を用ふ。二種の衆生あり。一には諸法の假名を知り、二には名字に著す。名字に著する衆生の爲の故に、無相を說き、諸法の假名を知る衆生の爲の故に、三十二相を說く。

問うて曰く、是の十力、四無所畏の功德は亦た各々別相あり、云何なれば法身は無相なりと說くや。

答へて曰く、一切の無漏法は十六行、三三昧に相應するが故に皆な無相と名く。佛は衆生をして解せしめんと欲したまふが故に、種種に分別して說き、一切諸佛の法は、空・無相・無作の印を以ての故に、皆な如・法性・實際に入ると說き、而も色を見て歡喜して、道心を發す者の爲に、三十二相の

す。何等か是れ三十二相なる、一には足下安立相、餘は讃菩薩品の中に說くが如し。

問うて曰く、何の因緣を以てか足下安立相を得るや。

答へて曰く、佛は世世に一心堅固に戒を持し、亦た他をして戒を破らしめず、是の業因緣を以ての故に、是の初相を得給ふ。初相は自ら法の中に於て、能く動す者なし。若し轉輪聖王と作れば、自らの國土に於て能く侵す者なく、如法に人民及び出家沙門等を養護するを以て、是の業因緣を以ての故に、千輻輪の相を得、是れ轉法輪の初相なり。若し轉輪聖王と作れば、輪寶を轉ずることを得、殺生の業因緣を離るるが故に、長指の相を得。不與取の業因緣を離るるが故に、足跟滿相を得、四攝法を以て衆生を攝する業因緣の故に、手足縵網の相を得、上妙の衣服・飲食・臥具を以て、尊長を供養する業因緣の故に、手足柔軟相を得、福を修すること轉た增す業因緣の故に、足趺高相と、一一孔一毛生の相と、毛上向の相とを得。如法に福を爲さしむる和合の因緣、及び速疾に人を誨ふるが故に妙腨の相を得ること伊泥延鹿王の如し。如法に淨物を布施して受者を惱さざるが故に、平立手過膝の相と、方身の相を得ること、尼拘盧陀樹の如し。多く慚愧を修し、及び邪婬を斷じ、房舍・衣服・覆蓋の物を以て、布施に用ふるが故に、陰藏の相を得ること馬王の如し。慈三昧を修し信淨の心多く、及び好色の飲食・衣服・臥具を以て布施するが故に、金色の相と丈光の相とを得。常に好んで義を問ひ、尊ぶ所及び善人に供給するが故に、肌皮細軟の相を得、如法に事を斷じ自ら專執せず、委すに執政を以てするの故に、上身如師子の相と、腋下滿の相と、肩圓の相を得。尊長を恭敬し、迎逆侍送するが故に、身體直廣の相を得、布施を具足し充滿するが故に、七處滿の相を得。一切を捨施して遺惜する所なきが故に、方頰車相を得、兩舌を離るるが故に、四十齒の相と、齒齊の相と、齒密の相とを得。常に慈を修行し好く思惟するが故に、白牙無喩の相を得、妄語を離るるが故に、舌廣薄の相を得。美食を布施し、受者を惱まさざるが故に、得味中最上味の相を得、惡口

或は梵王の身と作り、或は聲聞身、辟支佛身、佛身と作る。首楞嚴經の中に、文殊師利自ら說くが如し。「七十二億にして反つて一緣覺と作つて般涅槃す。又作佛するを現じて、龍種の尊と號せし時、世に未だ佛あるべからずして、而も衆生は佛身を見、歡喜して化を受く」と。

問うて曰く、菩薩、若し能く佛身を作して說法し、衆生を度すとせば、佛と何の差別ありや。

答へて曰く、菩薩は大神力ありて十住地に住し、佛法を具足し、而も世間に住して、廣く衆生を度するが故に、涅槃を取らず、亦た幻師の如く、自ら身を變化して、人の爲に說法す、眞の佛身に非ず。爾りと雖も、衆生を度脫するに、量あり限あり、佛の度し給ふ所の者は無量無限なり。菩薩は佛身を作すと雖も、十方世界に遍滿すること能はず、佛身は普ねく能く無量世界に遍滿して、度す可き所の者には皆な佛身を現じ給ふ。亦た十四日の月の如きは、光明ありと雖も猶ほ十五日に如かず。是の如きの差別あり。或は菩薩あり、無生法忍、法性生身を得、七住地に在つて住し、五神通もて身を變ずること、佛の如くにして衆生を敎化す。或は初發意の菩薩は、六波羅蜜を行じ、行業の因緣にて、身相、佛に似ることを得て衆生を敎化す。

問うて曰く、三十二相は布施等の果報なり。般若波羅蜜は、無所有にして虛空の如し、云何なれば相好を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと說くや。

答へて曰く、三十二相に二種あり。一には、具足すること佛の如く、二には、具足せざること轉輪聖王、難陀等の如し。般若波羅蜜は布施と和合するが故に、能く相好を具足すること佛の如し。餘人は但だ布施等を行じて相は具足せず。

問うて曰く、云何なれば布施等は三十二相を得るや。

答へて曰く、檀越の布施する時の如きは、受者は色力等の五事を得て、身を益するが故に、施者は手足輪相を具す。檀波羅蜜の中に、廣く說くが如し。戒忍等も亦た是の如く、各各三十二相を具

餘根の用あるが如く、般若波羅蜜も亦た是の如し。五波羅蜜は、般若波羅蜜を得ざれば、則ち增長することを得ず、般若波羅蜜を得るが故に、餘の波羅蜜は增益し具足することを得。是の故に佛は「檀波羅蜜を行ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と言ふ。

【經】菩薩摩訶薩、世世の身體をして、佛と相似ならしめんと欲し、三十二相、八十隨形好を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】問うて曰く、聲聞經の中には、菩薩は三阿僧祇劫を過ぎて後、百劫の中に三十二相の因緣を修すと說けり、今云何んぞ世世に、佛の身體と相似て、三十二相、八十隨形好ありと說くや。

答へて曰く、迦旃延子の阿毘曇鞞婆娑の中に是の如き說あり、三藏の中の所說に非ず。何となれば三十二相は餘人にも亦た有り、何ぞ貴しと爲すに足らんや。難陀の如きは先世の時、一たび衆僧を浴せしめ、因に願を作して曰く、「我をして世世に端正淨潔ならしめよ」と。又異世に於て、辟支佛塔に値ひ、飾るに彩畫を以てし、辟支佛の像を莊嚴し、願を作して言く、「我をして世世に色相嚴身ならしめよ」と。是の因緣を以ての故に、世世に身相莊嚴なるを得て、乃至、後身に出家して沙門と爲るに、衆僧遙に見て其れ是を佛なりと謂ひ、悉く皆な起つて迎ふ。難陀は小乘にして、少功德を種ゆるすら尙ほ此の報を得、豈に況んや菩薩は無量阿僧祇劫の中に於て功德を修立す、世世形體、而も佛に似ざらんや、又、彌勒菩薩の如きは、白衣の時、師を婆跋犁と名く。三相あり。一に眉間白毫相、二に舌覆面相、三に陰藏相なり。是の如き等は是れ菩薩に非ずして亦た皆な相あり。菩薩、豈に三阿僧祇の後に乃ち相好を種うべけんや。　復次に、是の摩訶衍の中に菩薩あり。初發心より乃至阿耨多羅三藐三菩提まで、初より惡心を生ぜず、世世に報として五通を得、身體は佛に似たり。

問うて曰く、菩薩は未だ佛道を得ず、何んぞ身相佛の如くなるを得んや。

答へて曰く、菩薩は衆生を度せんが爲の故に、或は轉輪聖王の身と作り、或は帝釋の身と作り、

「我が怨憎すら施すが故に名を得て、是の如く我に勝れり、今當に廣く施さば、要必ず彼に勝るべし」と。報を貪るが故に施して、是の念を作さく、「我少物を施さば、千萬倍の報あり」と。是の故に布施す。名の爲の故に施して、是の念を作さく、「我今好施せば、人の爲に信ぜられ、人數の中に好まれん」と。人を攝せんが爲の故に施して、是の念を作さく、「我今之を施さば、人必ず我に歸せん」と。是の如き等の種種の雜結もて施を行ずる是を不淨と名く。　淨施とは是の雜事なく、但だ淨心を以て因緣果報を信じ、受者を敬愍して今の利を求めず、但だ後世の功德の爲にす。復た淨施あり、後世の利益を求めず、但だ修心を以て涅槃を求むるを助く。復た淨施あり。大悲心を生じて、衆生の爲にするが故に、自ら利して早く涅槃を得ることを求めず、但だ阿耨多羅三藐三菩提の爲にす、是を淨施と名く。般若波羅蜜の心を以ての故に、能く是の如く淨施す。是を以ての故に「檀波羅蜜を行ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と說く。　復次に般若波羅蜜の力の故に、諸法に著する心を捨つ。何に況んや我心を而も捨てざらんや。吾我の心を捨つるが故に、身及び妻子は、視ること草土の如くにして、戀惜する所なく、盡く以て布施す。是を以ての故に「檀波羅蜜を行ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と說く。餘の波羅蜜も亦た是の如し。般若波羅蜜の心を以て助成するが故なり。

復次に、諸餘の泥羅蜜は、般若波羅蜜を得ざれば、波羅蜜の名字を得ず、亦た牢固たらず。後品の中に說くが如し。五波羅蜜は、般若波羅蜜を得ざれば、波羅蜜の名字なし。又轉輪聖王に輪寶なければ、轉輪聖王と名けず、餘寶を以て名と爲さざるが如く。亦た群盲に導き無ければ、所至あること能はざるが如く、般若波羅蜜も亦た是の如し、五波羅蜜を導いて薩婆若に至らしむ。譬へば、大軍に健將なければ、其の事を成辦すること能はざるが如く、又人身は餘根を具すと雖も、若し眼なければ、至る所あること能はざるが如く、又人の命根なければ、則ち餘根皆な滅し、命根あるが故に、

てすら、無量無邊の功德を得、豈況んや大事をや。餘人は多くの財を捨て、身口意に苦を懃めて、福を得ること少なり」と。持戒、忍辱、精進、禪定、智慧も亦た是の如く、菩薩の少にして報大なるに及ばざることは先に說くが如し。譬へば、口氣もて聲を出だすに、聲は則ち遠からず、聲を角中に入るれば、聲則ち能く遠きが如し。是の如く布施等の因は少し。餘人が是を行じて得る所の福報は則ち少し。菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の方便力を以て廻向するが故に、無量無邊の福を得、是を以ての故に、「少施・少戒・少忍・少進・少禪・少智を行ぜんと欲せば」と說くなり。

【經】菩薩摩訶薩、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜を行ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】諸の波羅蜜の義は先に說くが如し。

問うて曰く、五波羅蜜の相は卽ち是れ般若波羅蜜の相なるや不や。若し是れ般若波羅蜜の相ならば、五名を差別すべからず、若し異ならば、何を以てか「檀波羅蜜を行ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と言ふや。

答へて曰く、亦は同にして、亦は異なり。異なりとは、般若波羅蜜は、諸法の實相を觀ずるが故に、一切の法を受けず著せざるに名け、檀は、內外一切の所有を捨て、般若波羅蜜の心を以て施を行ずるに名く。是の時、檀を波羅蜜と名くることを得、復次に、五波羅蜜は諸の功德を植ゑ、般若波羅蜜は其の著心邪見を除く。一人は穀を植ゑ、一人は衆穢を芸除して、果實を增長することを得せしむるが如し。餘の四波羅蜜を成就するも亦た是の如し。

問うて曰く、今云何なれば檀波羅蜜を行ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべきや。

答へて曰く、檀に二種あり。一には淨、二には不淨なり。不淨とは、憍慢の故に施して、是の念を作さく、「我に劣る者すら尙ほ與ふ、我豈能はざらんや」と。嫉妬の故に施して、是の念を作さく、

大忍と爲す。是の如く少忍を分別す。

少進とは二あり。身進と心進なり。身進を少と爲し、心進を大と爲す。外進を少と爲し、內進を大と爲す。身口進を少と爲し、意進を大と爲す。佛の說き給ふが如し。意業の大力の故に、大仙人の瞋る時の如きは、能く大國をして磨滅せしむ。　復次に、身口に五逆罪を作せる大果報は、一劫、阿鼻泥犂に在り、意業の力大なれば、非有想非無想に生ずることを得て、壽八萬大劫なり。亦た十方の佛國に在つて、壽命無量なり。是を以ての故に、身口の精進を少と爲し、意の精進を大と爲すことを知る。　復次に經に說くが如く、若し身口意の業、寂滅不動ならば、是を大精進と爲し、動けば少精進と爲す。是の如き等を名けて少精進と爲す。

少禪とは、欲界定の未到地にして、欲を離れざるが故に名けて少と爲す。亦た二禪より觀ずれば、初禪は則ち少なり。乃至滅盡定(も亦た是の如し)。有漏を少と爲し、無漏を大と爲す。未だ阿鞞跋致を得ず、未だ無生忍法を得ざる禪は是を少と爲し、阿鞞跋致を得、無生法忍を得る禪は是を大と爲す。(かくして)乃ち坐道場に至り、十六解脫相應の定は少と爲し、金剛三昧は大と爲す。　復次に、若し菩薩一切法を觀ずるに、常に定んで散亂なき者は、依止なく分別なし、是を大と爲し、餘は皆な少と爲す。

慧に二種あり。一には世間慧、二には出世間慧なり。世間慧を少と爲し、出世間慧を大と爲す。淨慧、雜慧、相慧、無相慧、分別慧、不分別慧、隨法慧、破法慧、爲生死慧、爲涅槃慧、爲自益慧、爲益一切衆生慧等も亦た是の如し。　復次に、聞慧を少と爲し、思慧を大と爲す。思慧を少となし、修慧を大と爲す。有漏慧を少と爲し、無漏慧を大と爲す。阿耨多羅三藐三菩提心を發す慧を少と無し、六度を修行する慧を大と爲す。修慧を少と爲し、方便慧を大と爲す。諸地の中に方便展轉して、大少有り、乃ち十地に至る。是の如き等に多少を分別す。佛は菩薩の奇特を嘆じて、少事の中に於

り。　復次に、是の福德は大慈悲を用ふ。大慈悲は無量無邊なるが故に、是の福德も亦た無量無邊なり。　復次に、菩薩の福德は諸法實相に和合するが故に三分清淨なり。(そは)受者、與者、財物は不可得なるが故なり。般若波羅蜜の、初め舍利弗の爲に菩薩の布施を說く時の如く、與者、受者、財物は不可得なるが故に般若波羅蜜を具足す。是の實相の智慧を用つて布施するが故に無量無邊の福德を得。　復次に、菩薩は皆な所有の福德を如相、法性相、實際相と念ずるが故に、如、法性、實際は無量無邊なるを以ての故に、是の福德も亦た無量無邊なり。

問うて曰く、若し菩薩摩訶薩は諸法實相を觀じ、如、法性、實際を知らば是れ無爲滅相なり、云何んぞ更に心を生じて而して福德を作さんや。

答へて曰く、菩薩は久しく大悲心を習ふが故に、大悲心その時に發起すらく、「衆生は是の諸法實相を知らず、當に是の實相を得せしむべし」と。精進波羅蜜の力を以ての故に、還たび福德業の因緣を行じ、精進波羅蜜を以て大悲心を助く。譬へば、火の滅せんとするに、風と薪とに遇得すれば、火則ち然ゆること熾なるが如し。　復次に、本願を念ずるが故に、亦た十方の佛來り語つて言く、「汝初發心の時を念ぜよ、又汝始めて是の一法門を得るも、是の如き無量の法門あり、汝未だ皆な得ず、當に還た諸の功德を集むべし」と。懺備經の七地の中に說くが如し。

問うて曰く、施の多少は爾るべし。戒の中に五戒、一日戒、十戒の少多あるは、亦た知る可し。色法は分別するを得べきが故なり。餘の四波羅蜜は、云何にして其の多少を知るや。

答へて曰く、是れ皆な知るべし。忍の如きは二種あり、一には身忍。二には心忍なり。身忍とは、身口は動かずと雖も心は起らざらしむること能はず、少忍の故に心を制すること能はず。心忍とは、身心倶に忍ずること猶ほ枯木の如きなり。　復次に、少忍とは、若し人撾罵すれども還た報ぜず。大忍とは、罵者、忍者忍法を、分別せず。　復次に、衆生の中の忍は是を少忍と爲し、法忍は是れ

病なく、末後の身に阿羅漢道を得たり。又沙門二十億耳の如きは、鞞婆尸佛の法の中に於て一の房舍を作りて、比丘僧に給し、一の羊皮を布き、僧をして上を蹈ましむ。是の因緣を以ての故に九十一劫中、足地を蹈まず、人・天中の無量の福樂を受け、末後の身に大長者の家に生れ、身を受くること端正に、足下に毛を生ずること長さ二寸、色は青瑠璃の如くして右に旋れり。初め生れし時、父は二十億兩の金を與ふ。後に世の五欲を厭ひて出家し得道せり。佛は精進なる比丘の第一なりと說きたまへり。又須漫耳比丘の如きは先世に鞞婆尸佛の塔を見て、耳上の須漫華を以て布施す。是の因緣を以ての故に、九十一劫の中に常に惡道に墮せず、天上・人中の樂を受け、末後の身生るる時、須漫耳に在つて香一室に滿つるが故に、字して須漫耳と爲す。後に世を厭ひ、出家して阿羅漢道を得たり。菩薩は是の如き等の本生の因緣もて、少施して大報を得。便ち所有の多少に隨つて布施す。

復次に、菩薩は亦た一定して常に少物のみを布施するならず、所有に隨つて多ければ則ち多く施し、少ければ則ち少しく施す。　復次に、佛は般若波羅蜜の功德の、大なることを讃ぜんと欲するが故に、少施して大果を得、功德無量なりと言ふ。

問うて曰く、薄拘羅阿羅漢等の如きは、亦た少施して大報を得たり。何んぞ般若波羅蜜を用ゐん。

答へて曰く、薄拘羅等は果報を得と雖も、劫數に限量あつて小道を得て涅槃に入れり。菩薩は般若波羅蜜の方便を以て廻向するが故に、少施するも福德は、無量無邊阿僧祇劫なり。

問うて曰く、何等か是れ方便廻向して、少布施を以て、無量無邊の功德を得るや。

答へて曰く、少布施なりと雖も、皆な阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。菩薩は是の念を作さく、「我は是の福德の因緣を以て、人・天中の王及び世間の樂を求めず、但だ阿耨多羅三藐三菩提のみを求む」と。阿耨多羅三藐三菩提の如きは無量無邊なれば、是の福德も亦た無量無邊なり。又是の福德を以て、一切衆生を度せんが爲にす。衆生の如きは、無量無邊なるが故に、是の福德も亦た無量無邊な

多物を布施することを求めず、但だ好心のみを求む。或は菩薩あり。是の念を作さく、「若し我多く財物を集むることを求めなば、戒を破し善心を失し、心散亂して多く衆生を惱まさん。若し衆生を惱まして、以て佛に供養したてまつるは、佛の許したまはざる所なり。法を破りて財を求むるが故なり。若し凡人に施さんに彼より奪ひて此に與へなば、平等の法に非ず。菩薩の法の如きは等心にして一切皆な兒子の如し」と。是を以ての故に少施す。

復次に、菩薩に二種あり。一には敗壞の菩薩、二には成就の菩薩なり。敗壞の菩薩とは、本と阿耨多羅三藐三菩提の心を發せども、善緣に遇はずして、五蓋、心を覆ひ、行雜し行轉じて身に大富貴を受け、或は國王、或は大鬼神王、龍王等と作り、本と身口意の惡業を造つて、淸淨ならざるを以ての故に、諸佛の前、天上、人中の無罪の處に生ずるを得ず。是を名けて敗壞の菩薩と爲す。是の如き人は、菩薩の心を失ふと雖も、先世の因緣の故に猶ほ布施を好み、多く衆生を惱まし、劫奪して非法に財を取るも、以て福を作すに用ふ。成就の菩薩とは、阿耨多羅三藐三菩提心を失せずして、衆生を慈愍す。或は在家にして五戒を受くる者あり、出家にして戒を受くる者あり。在家の菩薩は行業を成就すと雖も、先世の因緣あつて貧窮なり。「佛法に、二種の施あり。法施と財施なり。出家の人は多く法施すべく、在家の者は多く財施すべし」と聞いて、我今先世因緣を以ての故に富家に生ぜず、敗せる菩薩の輩が罪を作しつゝ布施するを見て心に喜樂せず。「佛は多財の布施を讃じたまはず、但だ心の淸淨なる施のみを美(よし)としたまふ」と聞いて、是を以ての故に所有の物に隨つて施す。又出家の菩薩は、戒を守護するが故に、財物を畜へず、又自ら戒の功德は布施に勝れたりと思惟す。是の因緣を以ての故に所有に隨つて施す。

復次に、菩薩は佛法の中の本生の因緣を聞いて、少施して果報を得ること多し。薄拘羅阿羅漢の如きは、一の呵梨勒菓藥を以て布施し、九十一劫惡道に墮せずして、天人の福樂を受け、身に常に

施持戒を若しくは見、若しくは聞いて、皆な知り、當に阿羅漢の隨喜心を得べし。此の人は諸法の實相を得て、三界を離ると言ふ。我が欲する所は、一切衆生の生老病死を度するにあり。彼は已に脫することを得たり、則ち是は我が事なり」と。是の如き等の種種の因緣もて隨喜す。是を以ての故に隨喜して咎なし。

[一]初品第四十五……「廻向」釋論

【經】菩薩摩訶薩、少施、少戒、少忍、少進、少禪、少智を行じ、方便力を以て廻向するが故に而も無量無邊の功德を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】問うて曰く、前に已に六波羅蜜を說けり、今何を以てか復た說くや。

答へて曰く、上には總相を說けり、此には別相を說かんと欲す。彼には因緣を說けり、此には果報を說く。

問うて曰く、爾らず、彼の中には六波羅蜜を說いて、廣く普ねく具足せり、此には少施乃至少智を言ふ。上の六波羅蜜の義に同じからざるに似たり。

答へて曰く、然らず。即ち是れ六波羅蜜なり。何となれば、六波羅蜜の義は、心に在つて事の多少に在らず。菩薩の行は、若しくは多く、若しくは少きも、皆な是れ波羅蜜なり。賢劫經に說くが如くんば、八萬四千の諸の波羅蜜あり。此の經の中にも亦た說けり。世間の檀波羅蜜あり、出世間の檀波羅蜜あり、乃至般若波羅蜜にも、亦た世間と出世間ありと。

問うて曰く、菩薩は何を以ての故に少施するや。

答へて曰く、種種の因緣あるが故に少施す。或は菩薩あり。初發意にして福德未だ集まらず、貧なるが故に少施す。或は菩薩あり、「施には多少なし、功德は心に在り」と聞いて、是を以ての故に、

【一】元本では、「卷二十九」は是より始まる。

阿羅漢は得難きが故に更に說くなり。　復次に、是の三昧・智慧・解脫・解脫知見は得難しと雖も、而も廣く周悉ならず直に涅槃の爲にす。此の間に阿羅漢は現世の禪定の樂を得んと欲するを明にす。所謂滅盡定・頂際禪・願智・無諍三昧等、是の如きの事は直に涅槃の爲に非ず、是を以ての故に更に廣說す。何となれば前者の如きは直に涅槃の爲にして、彼の中に解脫と解脫知見の相次を說くが故に、當に一向に直に涅槃の爲なることを知るべければなり。

問うて曰く、若し禪定解脫三昧は、得難きを以ての故に重ねて說くとせば、智慧は一切法の中に於て最も難く微妙なり、何を以てか重ねて說かざるや。

答へて曰く、上に「聲聞辟支佛の慧を過ぎんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と言ふ中に已に說けり。此の禪定は未だ說かざるが故に重ねて說く。禪定智慧の二法は最妙なり。此の二行あれば所願皆な得らる。鳥の兩翼あれば能く至る所あるが如し。解脫も此の二法に從つて得。解脫知見は即ち是れ智慧なり。布施持戒は是れ身口業にして、麁行にして、得易きが故に重ねて說かず。

問うて曰く、菩薩は隨喜心を以て、聲聞辟支佛の布施・持戒・智慧に勝ると云ふは爾る可し。所以いかんとなれば布施持戒は眼に見、耳に聞く、智慧も亦た是れ聞法なれば、隨喜心を生ずることを得べし。禪定解脫三昧の如きは、是れ見聞すべからざるの法なり、云何にして隨喜するや。

答へて曰く、菩薩は知他心智を以て隨喜す。

問うて曰く、知他心智の法として、有漏の知他心智は他の有漏心を知り、無漏の知他心智は他の無漏心を知る。菩薩は未だ成佛せずして、云何にして聲聞辟支佛の無漏心を知るや。

答へて曰く、汝の聲聞法の中にては爾なり、摩訶衍法の中にては、菩薩は無生忍法を得て諸の結使を斷じ、世世、常に六神通を失はず、有漏の他心智を以て能く無漏心を知る。何に況んや無漏の知他心智を以てするをや。復た有人の言く、「初發意の菩薩は未だ法性生身を得ず、聲聞辟支佛の布

巻の二十九

初品第四十四……「布施隨喜心過上」釋論の餘

【經】一切の聲聞辟支佛を求むる人の、諸の禪定・解脫三昧において、隨喜心を以て其の上に過ぎんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】禪定とは四禪、九次第定なり。解脫三昧とは八背捨、三解脫門、慧解脫、共解脫、時解脫、不時解脫、有爲解脫、無爲解脫等、有覺有觀三昧、無覺有觀三昧、無覺無觀三昧、空三昧、無相三昧、無作三昧、是の如き等の諸の三昧なり。

問うて曰く、上の六事の中の三昧は、卽ち是れ禪定・解脫三昧なり、今何を以てか復た說くや。

答へて曰く、二種の三昧あり、一種は慧解脫分、二種は共解脫分なり。前者は慧解脫分にして、禪定に入ること能はず、但だ未到地の中の三昧のみを說く。此の中には共解脫分を說けり、具には禪定・解脫三昧あり。彼は是れ略說、此は則ち廣說、彼は但だ名のみを說き、此の中には義を分別す。

復次に、前に勝りたる三昧とは、有人の謂く、「一二の三昧は深三昧に非ず、今此の中には具に禪定解脫甚深三昧を說く」と。　復次に、禪定解脫三昧に二種あり。一には離欲の時に得、二には求めて而して得。離欲のとき得るものは、前に已に說けり、求めて而して得るものは此の中に說く。

復次に、禪定解脫三昧は之を得ること甚だ難く、精懃して之を求むれば乃ち得。菩薩は但だ隨喜心を持つて、便ち得て其の上に過ぎたり。是を未だ嘗て有らざるの法と爲す。是の故に重ねて說けり。

問うて曰く、彼の中の三昧・智慧・解脫・解脫知見も亦た得難し、何を以てか此は得難しと爲すと言ふや。

答へて曰く、先に已に答へたり。是の慧解脫分は甚深の義を盡くさず、共解脫の阿羅漢、三明の

答へて曰く、勝るとは、但だ一事の中に於て、智慧・方便・心力を以ての故に、福を得ること多きに名く。譬へば、人は一華の中に於て但だ色香を取り、蜂は但だ味を取つて以て蜜と爲すが如し。亦た水を取るに器大なれば多く得、器小なれば少しく得るが如し。是の如きの喩は、知る可し。隨喜心は深利にして智慧相應するを以て、聲聞辟支佛の布施等の諸功德に勝れるなり。是の六法の初の布施は檀波羅蜜の義の中に、聲聞辟支佛の法を分別して說くが如し。持戒は尸羅波羅蜜義品の中に聲聞辟支佛の法を分別して說くが如し。三昧・智慧・解脫・解脫知見は念佛義の中に聲聞・辟支佛の法を分別して說くが如し。

答へて曰く、聲聞辟支佛の布施、持戒等の福德を以て菩薩の功德に比するならず、但だ隨喜心を以て能く勝れたり、何に況んや菩薩自ら功德を行ずるをや。聲聞辟支佛を求むる人は、身を懃めて功德を作して疲勞し、菩薩が默然として隨喜する智慧力の福德は其の上を過ぐ。譬へば、工匠は但だ智心を以て指授して去るに、斤斧を執る者は疲れ苦しむこと終日なれども、功を計り賞を受くるは匠者は三倍なるが如く、又征伐に鬪者は死を冒すに、主將は功を受くるが如し。

問うて曰く、若し隨喜心の故に、布施持戒より勝るとせば、何を以てか但だ菩薩の隨喜のみ勝ると說くや。

答へて曰く、凡夫人は煩惱、心を覆ひ、吾我未だ斷ぜず、世間の樂に著す。云何んぞ能く聲聞辟支佛を求むる者に勝らんや。聲聞辟支佛の利なるは鈍なるに勝ると雖も、同じく聲聞地に在るが故に說かず。

問うて曰く、聲聞辟支佛の功德法は甚だ多し、何を以ての故に、但だ[六]六事のみを說くや。

答へて曰く、此の六法の中に一切の聲聞辟支佛の法を攝す。若し布施を說けば、已に信聞等の功德を說けり。何となれば先づ聞き已つて能く信じ、信じ已つて布施すればなり。是の施に二種あり。財施と法施となり。持戒に三種の戒を攝す。律儀戒・禪戒・無漏戒なり。定に諸の禪定・解脫・三昧等を攝す。慧に諸の聞慧・思慧・修慧を攝す。解脫に二種の解脫を攝す。有爲解脫と無爲解脫となり。解脫知見に盡智を攝す。自ら已に漏盡きたると知りて、三界に於て解脫を得、是の中に於て了了に知見す。是の中の助道法、聖道法は已に說けり。　復次に、若し涅槃に向はざる功德は是の中に、上に過ぐと說かず。其の功德薄きを以ての故なり。

問うて曰く、勝るとは、力勢相奪ふに名く。今菩薩は聲聞辟支佛と競はず、云何んぞ勝ると言ふや。

【六】布施・持戒・三昧・智慧・解脫・解脫知見を意味す。

見る者の心も隨つて歡喜し、讃して善哉と言ふ。無常世界の中に在つて、癡闇の爲に蔽はるゝも、能く大心を弘め、此の福德を建つ。譬へば種種の妙香を一人は賣り、一人は買ふに、傍人邊に在れば亦た香氣を得、香に於て損なく、二主にも失なきが如し。是の如く、人の施を行ずるあり。人の受くる者あり。人の邊に在つて隨喜するあり。功德を倶に得れども、二主に失なし。是の如き相を名けて隨喜と爲す。是の故に菩薩は、但だ隨喜心を以てだにも、二乘を求むるの人の上に過ぐ、何に況んや自ら行ずるをや。

問うて曰く、菩薩は云何なれば能く隨喜心を以て、聲聞辟支佛の人の財を以て、布施する上に過ぐるや。

答へて曰く、聲聞辟支佛が是の布施を行ずるに、菩薩は傍に於て之を見、一心に念じて隨喜し、讃じて善哉と云ふ。此の隨喜の福德を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。そは一切の衆生を度せんが爲の故なり、此を以て無量の佛法を得るが爲の故なり。(此の)二種の功德を以て、聲聞辟支佛を求むる人の、行ずる所の布施の上に過ぐ。　復次に、諸法實相の智慧心を以て隨喜するが故に、聲聞辟支佛を求むる人の布施の上に過ぐ。　復次に、菩薩は隨喜の心を以て、福德の果報を生じ、廻向して三世十方の諸佛に供養して、聲聞辟支佛の布施の上に過ぐ。譬へば、人の少物を以て、國王に獻上するに、報を得ること甚だ多きが如く、又貝を吹くに氣を用ふること甚だ少なれども、其の音は甚だ大なるが如し。　復次に、菩薩は隨喜の功德を以て、無量の諸餘の功德を和合して、乃至、法滅するも亦た盡きず。譬へば、少水を大海の中に置けば、劫を窮めて乃ち盡くるが如く、持戒・三昧・智慧・解脫知見も亦た是の如し。

問うて曰く、諸佛の次第に菩薩あり。菩薩の次第に聲聞辟支佛あり。今菩薩は聲聞辟支佛を求むる人の、布施等を過ぎんと欲すと言ふ、何の奇特ありや。

小家に金銀なきことを問ふべからざるが如し。　復次に、聲聞は大に慇懃に諸の功德を集めず、但だ智慧を以て老病死の苦を脱せんことを求む。是を以ての故に聲聞の人は、陀羅尼を用ゐて、諸の功德を持せず。譬へば人の渇するに、一掬の水を得れば則ち足り、瓶器もて水を持つを須ゐず。若し大衆の人民を供するには、則ち瓶甕を須ゐて、水を持つが如し。菩薩は一切衆生の爲にするが故に、陀羅尼を須ゐて諸の功德を持す。

復次に、聲聞法の中には、多く諸法の生滅無常の相を說くが故に。諸の論議師の言く「諸法無常なり。若し無常相ならば則ち陀羅尼を須ゐず。何となれば、諸法は無常相ならば、則ち持するところなし。唯だ過去の行業因緣は失せず、未來の果報は、無なりと雖も必ず生ずるが如く、過去の行因緣も亦た是の如し」と。摩訶衍法にては、生滅の相も不實なり、不生不滅相もまた不實なり。諸觀、諸相を皆な滅する是を實と爲す。若し過去法を持するとも則ち咎なし。過去の善法・善根・諸の功德を持するを以ての故に陀羅尼を須ふ。陀羅尼は世世常に隨ふ。菩薩の諸の三昧は爾らず、或時は身を易ゆれば則ち失す。是の如く種種に、陀羅尼と諸の三昧とを分別す。是を以ての故に諸の陀羅尼、諸の三昧の門を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと言ふ。

初品第四十四……「布施隨喜心過上」釋論

【經】一切の聲聞辟支佛を求むる人の布施する時、隨喜心を以て、其の上に過ぎんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。一切の聲聞辟支佛を求むる人の戒を持する時、隨喜心を以て、其の上に過ぎんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。一切の聲聞辟支佛を求むる人の三昧・智慧・解脱・解脱知見において、隨喜心を以て、其の上に過ぎんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】隨喜心とは、隨喜品の中に說くが如し。　復次に、隨喜の名は、人あり、功德を作すに、

の三波羅蜜は、是の門の義ありと雖も遠門と名く。布施の因緣もて福德を得、福德の故に所願皆な得。所願の如きが故に心柔軟に、慈悲心あるが故に罪を畏るゝを知り、衆生を念じ、世間の空、無常を觀ずるが故に、心を攝し忍辱を行ずるが如し。忍辱も亦た是れ三昧の門なり。精進は五欲の中に於て心を制し、五蓋を除き、心を攝して亂さず、心去れば則ち攝して馳散せしめず、亦た是れ三昧の門なり。復次に、初地は、是れ二地の三昧の門なり。是の如く展轉して、乃至九地は是れ十地の三昧の門なり。十地は是れ無量の諸佛の三昧の門なり。是の如き等を名けて諸の三昧の門と爲す。

問うて曰く、陀羅尼門と三昧門とは、同と爲すや異と爲すや。若し同ならば、何を以てか重ねて說くや。若し異ならば何の義ありや。

答へて曰く、先に已に三昧門と陀羅尼門との異を說けり。今當に更に說くべし。三昧は但だ是れ心相應の法にして、陀羅尼は亦は是れ心相應、亦は是れ心不相應なり。

問うて曰く、云何にして陀羅尼は、是れ心不相應なりと知るや。

答へて曰く、人の聞持陀羅尼を得るが如きは、心瞋恚すと雖も亦た失せず、常に人に隨つて行くこと、影の形に隨ふが如し。是の三昧を修行し習ひ久しければ、後能く陀羅尼を成ず。衆生が久しく習つて、便ち其の性を成ぜんと欲するが如し。是の諸の三昧は、諸法實相の智慧と共に、能く陀羅尼を生ず。[五]坏瓶は火に燒かるゝことを得て、熟すれば能く水を持して失せず、亦た能く人をして河を渡ることを得せしむるが如く、禪定に智慧なきは亦た坏瓶の如し。若し實相の智慧を得ば、坏瓶の火に燒かるゝを得て成熟するが如く、能く菩薩の二世の無量の功德を持す。菩薩は亦た之に因り、度つて佛に至ることを得。是の如く、三昧と陀羅尼とは、種種の差別あり。

問うて曰く、聲聞法の中には、何を以てか是の陀羅尼の名なく、但だ大乘の中にのみ有るや。

答へて曰く、小法の中には大はなし、汝問を致すべからず、大法の中に小なければ則ち問ふべし。

【五】坏瓶。未だ燒かざる土壺。

三昧あり。

問うて曰く、是の三昧は卽ち是れ三昧の門なりや不や。

答へて曰く、三昧は卽ち此れ三昧の門なり。

問うて曰く、若し爾らば何を以てか、但だ三昧を說かずして、而も復た三昧門と說くや。

答へて曰く、佛の諸の三昧は無量無數なること、虛空の無邊なるが如し。菩薩は云何んぞ盡く得んや。菩薩是を聞けば心則ち退沒せん。是を以ての故に佛は三昧の門を說いて一門の中に無量の三昧を攝し入れたまへり。衣の一角を牽けば、衣を擧げて皆な得るが如く、亦た蜜蜂の王を得れば、餘の蜂を盡く攝するが如し。復次に、展轉するを門を爲す。持戒清淨にして、一心に精進し、初夜後夜に懃修し、思惟して五欲の樂を離れ、心を一處に繫け、是の方便を行じて、是の三昧を得るが如し。是を三昧の門と名く。

復次に、欲界繫三昧は、是れ未到地三昧の門なり。未到地三昧は是れ初禪の門なり。初禪及び二禪の邊地三昧は是れ二禪の三昧の門、乃至非有想非無想處三昧も亦た是の如し。煖法定は是れ頂法の三昧の門なり。頂法は是れ忍法の三昧の門なり。忍法は是れ世間第一法の三昧の門なり。世間第一法は是れ苦法忍の三昧の門なり。苦法忍は乃至金剛三昧の門なり。略して說くに一切の三昧に三相あり。入・住・出の相是なり。出相入相は名けて門と爲す。住相は是れ三昧の體なり。是の如き等の法は、是れ聲聞法の中の三昧門なり、摩訶衍法の中の三昧門は、禪波羅蜜の義の中に、諸の三昧を分別して廣く說くが如し。

復次に、尸羅波羅蜜は是れ三昧の門なり。何となれば三支は是れ佛道なればなり。所謂戒支・定支・慧支なり。淸淨なる戒支は是れ定支の門にして、能く是の定を生じ、定支は能く慧支を生じ、是の三支は能く煩惱を斷じ、能く涅槃を與ふ。是の故に尸羅波羅蜜及び智慧を三昧の近門と名く。餘

界繫、或は不繫なり。四念處、四正懃、四如意足も亦た是の如し。是の義を以ての故に、當に欲界に三昧あることを知るべし、若し散亂心ならば、云何んぞ此の上妙の法を得ん。是を以ての故に、是の三昧は十一地の中に在り」と。是の如き等の諸の三昧は、阿毘曇の中に廣く分別せり。

摩訶衍の三昧とは、首楞厳三昧、乃至、虛空際無所著解脫三昧なり。又見一切佛三昧。乃至一切如來解脫修觀師子嚬呻等の如し。無量阿僧祇の菩薩の三昧あり、三昧有り無量淨と名く。菩薩、是の三昧を得れば、能く一切淸淨の身を示現す。三昧あり、威相と名く、菩薩、是の三昧を得れば、能く日月の威德を奪ふ。三昧あり、炎山と名く、菩薩、是の三昧を得れば、諸の釋梵の威德を奪ふ。三昧あり、出塵と名く、菩薩、是の三昧を得れば、一切の大衆の三毒を滅す。三昧あり、無礙光と名く、菩薩、是の三昧を得れば、能く一切の佛國を照らす。三昧あり、不忘一切法と名く、菩薩、是の三昧を得れば一切諸佛の所說の法を皆な能く憶持し、復た他人の爲に佛語を講說す。三昧あり、聲如雷音と名く、菩薩、是の三昧を得れば能く梵聲を以て十方の佛國に滿つ。三昧あり、能娛樂一切衆生と名く。菩薩、是の三昧を得れば、能く一切をして深心に歡喜せしむ。三昧あり、喜見無厭と名く。菩薩、是の三昧を得れば、一切衆生は見聞喜樂して厭足あること無し。三昧あり、功德報不可思議一緣中樂と名く。菩薩、是の三昧を得れば、一切の神通を成就す。三昧あり、知一切音聲語言と名く、菩薩、是の三昧を得れば、能く一切の音聲語言を說き、一字の中に於て一切字を說き、一切字の中に於て一字を說く。三昧あり、集一切福富樂果報生と名く。若し菩薩、是の三昧を得れば、常に默然として禪定に入り、而して能く一切衆生をして佛法を聞かしめ、衆の聲聞辟支佛に六波羅蜜の聲を聞かしむ。而も是の菩薩は實に一言も無し。三昧あり、出高一切陀羅尼王と名く。菩薩は是の三昧を得れば、無量無邊の諸の陀羅尼に入ることを得。三昧あり、一切樂說と名く。菩薩、是の三昧を得れば、一切字、一切音聲語言、譬喩因緣を樂說するが如し。是の如き等の無量の力勢

とも亦た歡喜せず、音聲の生滅は響の相の如く、又鼓聲の作者あること無く、若し作者なければ是れ住處なく、畢竟空なるが故に、但だ愚夫の耳を誑はす如くなるを知る。是を音聲陀羅尼に入ると名く。

復次に、陀羅尼あり、是の四十二字を以て、一切の語言名字を攝す。何者か是れ四十二字なる。[四]阿・羅・波・遮・那等にして、阿提は、秦に初と言ひ、阿耨波奈は、秦に不生と言ふ。陀羅尼を行ずる菩薩は、是の阿字を聞いて、即時に一切法の初不生に入る。是の如き等の字字は、所聞に隨つて、皆な一切諸法の實相の中に入る。是を字入門陀羅尼と名く。摩訶衍品の中に諸字門を說くが如し。　復次に、菩薩は是の一切三世無礙明等の諸の三昧を得、一一の三昧の中に於て、無量阿僧祇の陀羅尼を得、是の如き等を和合して、名けて五百陀羅尼門と爲す。是を菩薩の善法功德藏と爲し、是の如きを名けて陀羅尼門と爲す。

諸の三昧門とは、三昧に二種あり。聲聞法の中の三昧と、摩訶衍法の中の三昧となり。

聲聞法の中の三昧とは所謂三三昧なり。　復次に、三三昧とは、空空三昧、無相無相三昧、無作無作三昧なり。復た三三昧あり。有覺有觀、無覺有觀、無覺無觀なり。復た五支三昧、五智三昧等あり、是を諸三昧と名く。　復次に、一切の禪定は亦は定と名け、亦は三昧と名く。四禪は亦は禪と名け、亦は定と名け、亦は三昧と名け、四禪を除いて、諸餘の定も亦た定と名け、亦た三昧と名くれども、名けて禪と爲さず。十地の中の定は名けて三昧と爲す。有人の言く、「欲界地にも亦た三昧あり。何となれば欲界の中に二十二道品あるが故に三昧あることを知る。若し三昧なくんば、是の深妙の功德を得べからず」と。

復次に、千問の中にも亦た是の問あり。「四聖種は幾か欲界繫、幾か色界繫、幾か無色界繫、幾か不繫なる」と、答へて曰く、「一切は當に四聖種に分別すべし。或は欲界繫、或は色界繫、或は無色

【四】阿・羅・波・遮・那。(a, ra, pa, ca, na.)。

し、法の如く行ず、是の如く智慧の因緣を具足するが故に、云何んぞ阿羅漢辟支佛に勝れざらんや。

復次に、菩薩の智慧は、五波羅蜜もて佐助し莊嚴し、方便力あり、一切衆生に於て、慈悲心あるが故に、邪見の爲に妨げられず、十地の中に住するが故に、智慧勢力深大なり。大因の故に聲聞辟支佛より勝り、大因を以ての故に、小なる者は自ら壞す。阿羅漢辟支佛には是の事なし。是の故に聲聞辟支佛の智慧に勝らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと言ふなり。

【經】諸の陀羅尼門、諸の三昧を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】[三]陀羅尼とは、讃菩薩品の中に說くが如し。門とは、陀羅尼を得る方便の諸法是れなり。三三昧を解脫門と名くるが如し。何か是れ方便なる。若し人、聞くところを皆な持つことを得んと欲せば、應當に一心に憶念して念をして增長せしむべし。先づ當に意を作して、相似の事に於て心を繫け、見ざる所の事を知らしむべし。周利槃陀迦の如きは、心を革屣を拭く物の中に繫けて、禪定を憶ふて、心の垢法をして除かしむ。是の如きを初學の聞持陀隣尼と名く。三たび聞いて能く得て、心根轉た利となり、再び聞いて能く成ずるを得ば、一たび聞いて能く得、得て忘れず。是を聞持陀隣尼の初方便と爲す。或時は菩薩は、禪定の中に入つて、不忘解脫を得、不忘解脫力の故に、一切の語言・說法を、乃至、一句一字すらも皆な能く忘れざるに至る。是を第二の方便と爲す。或時は神呪力の故に、陀羅尼を聞持することを得、或時は先世の行業の因緣もて、生を受けて聞く所皆な持ちて忘れず、是の如き等を聞持陀隣尼の門と名く。

復次に、菩薩は一切の音聲語言を聞いて本末を分別し、其の實相を觀じ、音聲語言の念念に生滅することを知る。音聲已に滅して、而も衆生は憶念して想を取り、是の已に滅せる語を念じて、是の念を作して言く、「是の人は我を罵れり」と。而して瞋恚を生ず、稱讃もまた是の如し。是の菩薩は能く是の如く衆生を觀じ、復た百千劫に罵詈すると雖も、瞋心を生ぜず、若しくは百千劫稱讃す

【三】陀羅尼(Dhāraṇi)陀隣尼も同じ、總持と譯す。

一切の凡夫は皆な是れ譚定なり。」舍利弗言く、「若し爾らば凡夫と聖人と差別あること無し。」普華言く、「我も亦た凡夫と聖人と差別あらしむることを欲せず、何となれば諸の聖人に滅法あること無く、凡夫も亦た生法なし。是の二は皆な法性の等しき相を出でず。」舍利弗言く、「善男子よ、何等か是れ法性の等相なるや。」答へて言く、「耆年の得道する時に知見する所の者是なり。」又問ふ、「聖法を生ずるや不や、凡夫の法を滅するや不や、聖法を得るや不や、凡夫人の法を見知するや不や、耆年は何の知見を以ての故に、聖道を得るや。」舍利弗言く、「凡夫人も如。比丘の解脱を得るも如。比丘の無餘涅槃に入るも如。是の如は一如にして如に別なし。」普華言く、「舍利弗よ、是を法性相の如、不壞の如、用是の如と名く。當に知るべし、一切法は皆な如なることを。」舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、譬へば大火聚の物として燒かざること無きが如し。是の諸の上人の所說も亦た是の如く、一切法は皆な法性に入る。」又毘摩羅詰經中に說くが如く、舍利弗等の諸の聲聞は皆な自ら說いて「我は彼に詣り疾を問ふに堪任ず」と言ひ、各各自ら「昔毘摩羅詰の爲に訶せらる」と說けり。是の如く處處の經中に、菩薩の智慧は聲聞辟支佛に勝ると說く。

問うて曰く、何の因緣の故に菩薩の智慧は聲聞辟支佛に勝るや。

答へて曰く、一本生經の中に說くが如くんば、菩薩の智慧は無量阿僧祇劫より已來、衆智を合集せり。無量劫の中に於て、苦として行ぜざる無く、難として爲さざる無く、法を求むるが爲の故に、火に赴き、巖に投じ、剝皮の苦を受け、骨を出だして筆と爲し、血を以て墨と爲し、皮を以て紙と爲して經法を書寫す。是の如き等、法の爲の故に無量の苦を受く。智慧を以ての故に、世世に其の師に供養し、之を視ること佛の如く、一切所有の經書は悉く皆な讀誦し解說し、無量阿僧祇劫に於て、常に思惟し籌量して、諸法の好醜・深淺・善不善・漏無漏・常不常・有無等を尋ね求めて、思惟し分別して問難す。智慧の爲の故に、諸佛及び菩薩聲聞を供養し、法を聽き、問難し、信受し、正しく憶念

を發せざる者あらんや」と。爾の時會中に普華菩薩あり、舍利弗に語るらく、「佛の說き給はく、耆年は諸の弟子の中に於て智慧第一なりと、今耆年は諸法の法性に於て得ざるや。何を以てか大智慧を以て自ら恣ままに樂んで法を說かざるや。」舍利弗言く、「諸の佛弟子は、其の境界の如く、則ち能く說く有り。」普華菩薩復た問ふ、「法性に境界ありや不や」と。舍利弗言く、「無し。」「若し法性に境界なければ、云何なれば耆年は其の境界の如く、則ち能く說くこと有りと言ふや。」舍利弗言く、「所得の法に隨つて說くなり。」普華復た問ふ、「耆年は無量の相の法相を以て證と爲すや。」舍利弗言く、「爾なり。」普華言く、「今云何んぞ所得に隨つて說くと言ふや、所得の法性は無量なるが如く、說も亦た應に無量なるべし、法性は無量にして量相に非ず。」舍利弗、普華に語げて言く、「法性は得相に非ず。」普華言く、「若し法性は得相に非ずんば、汝は法性を離れて解脫を得るや不や。」舍利弗言く、「不なり、何となれば法性は不壞相なればなり。」普華言く、「汝が得る所の聖智も亦た法性の如きや。」舍利弗言く、「我は法を聞かんと欲す、說く時には非ざるなり。」普華言く、「一切法は定んで法性の中に在り、聞者、說者ありや不や。」舍利弗言く、「無し。」普華言く、「汝は何を以てか我は法を聞かんと欲す、說く時に非ずと言ふや。」舍利弗言く、「佛說き給はく、二人は福を得ること無量なり、一心に說く者と一心に聽く者となり」と。普華言く、「汝は滅盡定の中に入つて、能く法を聽くや不や。」舍利弗言く、「善男子よ、滅盡定の中には、法を聽くこと無きなり。」普華言く、「汝は一切法は常滅相なるを信ずるや不や。」舍利弗言く、「是の事を信ず。」普華言く、「法性は常滅にして、法を聽くこと無し、何となれば諸法は常滅の相なるが故なり。」舍利弗言く、「汝は能く定より起たずして說法するや不や。」普華言く、「法あること無し、定相に非ざる者なり。」舍利弗言く、「若し爾らば今、一切の凡夫は皆な是れ禪定なりや。」普華言く、「爾なり、一切の凡夫は皆な是れ禪定なり。」舍利弗言く、「何等の禪定を以ての故に一切の凡夫は皆な是なるや。」普華言く、「法性三昧を壞せざるを以ての故に、

法の中には菩薩は佛に次いで、應に佛を供養するが如くなるべしと說く。能く是の如く諸の法相を觀ずるを福田と爲し、能く聲聞辟支佛に勝ること是の如し。摩訶衍經の中にては處處に菩薩摩訶薩の智慧は、聲聞辟支佛に勝れたるを讃す。寶頂經の中に說くが如くんば、轉輪聖王は、一を少いで千子に滿たされば、大力ありと雖も、諸天世人の貴重せざる所なり。眞の轉輪聖王種あれば、胎中に處在して、初め受くること七日にして、便ち諸天の爲に貴重せらる。所以いかんとなれば九百九十九人は轉輪聖王の種を嗣いで、世人をして二世の樂を得せしむること能はず、是(の一)は胎に在りと雖も、必ず能く聖王を紹冑す。是の故に恭敬するなり。諸の阿羅漢辟支佛は、根力・覺道・六神通・諸禪・智慧力を得、實際に於て證を得、衆生の福田と爲ると雖も、十方の諸佛の貴重したまはざる所なり。菩薩は諸の結使・煩惱の欲に縛せられ三毒の胎中にありと雖も、初め無上道の意を發し、未だ能く所作あること能はざるも、而も諸佛の爲に貴ばる。其れが漸漸に當に六波羅蜜を行じて、方便力を得、菩薩の位に入り乃至、一切種智を得て、無量の衆生を度して、佛種・法種・僧種を斷ぜず、天上、世間の淨樂の因緣を斷ぜざるを以ての故なり。又迦羅頻伽鳥は殼中に在つて未だ出でざるに、發聲微妙にして餘鳥に勝るるが如し。菩薩摩訶薩も亦た是の如く、未だ無明の殼を出でずと雖も、說法論議の音は聲聞辟支佛及び諸の外道に勝れたり。明網經の中に說くが如し。慧命舍利弗、佛に白して言さく、「世尊よ、是の諸の菩薩の所說を、若し能く解する者は大に功德を得ん。何となれば、是の諸の菩薩の、乃至其の名字を聞くことを得るすら大利益を得ればなり。何に況んや其の所說を聞くをや。世尊よ、譬へば人の樹を種うるに、地に依らずして其の根莖枝葉を得、其の果實を成ぜんと欲するも、是を得べきこと難きが如し。諸の菩薩の行相も亦た是の如く、一切の法に住せずして、而も現に生死に住し、諸佛の世界に在り、中に於て自ら恣まに樂んで智慧の法を說く。誰か是の大智慧もて遊戲して自ら恣まに樂んで法を說くを聞いて、而も阿耨多羅三藐三菩提の意

間に於て有する所の智慧は、盡く是れ聲聞の智慧なり。略說すれば世間を厭ひ、涅槃を念じ、三界を離れ、諸の煩惱を斷じ、最上法、所謂涅槃を得。是を聲聞の智慧と名く。復次に、般若波羅蜜義品の中に說くが如くんば、菩薩の智慧の相は聲聞の智慧と是は一の智慧なり。但だ方便なく、大誓の莊嚴なく、大慈大悲なく、一切の佛法を求めず、一切種智を以て、一切法を知ることを求めずして、但だ老病死を厭ひ、諸の愛繫を斷じて、直に涅槃に趣くを異となす。

問うて曰く、聲聞は是の如くんば、辟支佛の智慧は云何。

答へて曰く、聲聞の智慧は、卽ち是れ辟支佛の智慧なり。但だ時節と利根と福德とに差別あり。時とは佛世に在したまはず、亦た佛法もなきに名く。少因緣を以て、出家し得道するを辟支佛と名く、利根を異と名くるは、法相は是れ同じきも、但だ智慧深く入つて、辟支佛道を得るなり。福德は相あるに名く、或は一相二相より乃ち三十一相に至る。若しくは先佛の法の中に聖法を得、法滅して後阿羅漢を成ずるを名けて辟支佛と爲せども、身に相あること無し。辟支佛の第一に疾き者は、四世にして行き、久しき者は乃ち百劫に至つて行くもの有り、聲聞の如きは、疾き者は三世、久しき者は六十劫なり。此の義は先に已に廣く說けり。

問うて曰く、佛の說きたまふが如くんば、四種の沙門果、四種の聖人あり。須陀洹乃至阿羅漢なり。五種の佛子は、須陀洹乃至辟支佛なり。三種の菩提は、阿羅漢菩提・辟支佛菩提・佛菩提にして、果の中にも、聖の中にも、佛子の中にも菩提の中にも、皆な菩薩なし。云何んぞ菩薩は、一切の聲聞、辟支佛の智慧に勝ると言ふや。

答へて曰く、佛法に二種あり。一には聲聞辟支佛の法、二には摩訶衍法なり。聲聞法は小なるが故に、但だ聲聞の事を讃して菩薩の事を說かず。摩訶衍は廣大なるが故に、諸の菩薩摩訶薩の事を說く。(乃ち菩薩は)發心修行して十地に位に入り、佛の世界を淨め、衆生を成就して佛道を得。此の

世間を厭患し、即時に道を得たり。

復次に、十方衆生の無邊なることを聞くが故に、心に歡喜を生じ、不殺戒を受けて、無邊の福德を得。是の因緣を以ての故に、初發意の菩薩は、一切世間の衆生を皆な應に供養すべし。何となれば無邊の世界の衆生を度するが爲の故に、功德も亦た無邊なればなり。是の如き等の益あるが故に、無邊を說きたまへり。是の故に、悉く一切衆生の心の趣向する所を知つて、日の天下を照すや、一時に倶に至りて、遍ねく明かならざるなきが如しと說く。

【經】菩薩摩訶薩は、一切の聲聞辟支佛の智慧に勝れんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】問うて曰く、何等か是れ聲聞辟支佛の智慧なるや。

答へて曰く、總相・別相を以て、諸法の實相を觀ずるは、是れ聲聞の智慧なり。經の中に說くが如くんば、初に諸法を分別するに智慧を以てし、後には涅槃の智慧を用ゐて諸法を分別す。智慧は是れ別相、涅槃の智慧は是れ總相なり。

復次に、是の法は觧と爲し是の法は縛と爲す。是は流轉にして是は來還なり。是は生にして是は滅なり。是は味にして是は患なり。是は逆にして是は順なり。是は此岸にして是は彼岸なり。是は世間にして是は出世間なりと知り。是の如く二門の諸法を分別するを名けて、聲聞の智慧と爲す。

復次に、三種の智慧もて五受衆を知る。是の如きは集なり、是の如きは散なり、是の如きは出なりと。(又)是は味なり、是は患なり、是は離にして、三觧脫門相應の智なりと。是の如き等に、三門の諸法を分別す。　復次に、四種の智慧あり。四念處の智、法智、比智、他心智、世智、(又は)苦智、集智、滅智、道智、(又は)不淨智、無常智、苦智、無我智、(又は)無常智、苦智、空智、無我智、(又は)法智、比智、盡智、無生智なり。是の如き等に、四門の諸法を分別す。

復次に、苦法智忍の慧より、乃ち空空三昧、無相無相三昧、無作無作三昧智に至るまで、其の中

有邊無邊を言はば、此の二は佛法の中に於ては、是れ置答なり。是の十四事は虛妄無實にして益なきが故に、以て難と爲すべからず。

問うて曰く、若し有邊無邊の二は、倶に實ならずとするも、而も佛は處處に無邊を說きたまへり。衆生の如きは、癡愛あつてより已來、無始無邊にして、十方も亦た邊際なけん。

答へて曰く、衆生無邊なれば佛の智慧も無邊なり。是を實と爲す。若し人無邊に著せば、相を取つて戲論するが故に、佛は是を邪見なりと說き給へり。譬へば世間の常、無常の二の如きは、倶に顚倒にして十四難の中に入る。而も佛は多く無常を以て衆生を度し、少しく有常を用ゐ給へり。若し無常に著し、相を取つて戲論せば、佛は是を邪見虛妄と說きたまふ。若し無常に著せざれば、無常は卽ち是れ苦、苦は卽ち是れ無我、無我は卽ち是れ空なることを知る。能く是の如く無常に依つて、觀じて諸法の空に入らば、便ち是れ實なり。是を以ての故に無常を知れば眞諦の中に入る。是は實なり。十四難の中にては、因緣に著するを以ての故に、是を邪見と說く。是故に無常を說いて、以て無邊を明す、無邊なるが故に、衆生は生れて生死の長久なることを厭ふ。譬へば波梨國の四十の比丘の如きは、倶に十二の淨行を行じ、佛所に來り至るに、佛は爲に厭行を說きたまふ。佛、比丘に問ひたまはく、[二]「五河（卽ち）恒伽・藍牟那・薩羅由・阿脂羅婆提・摩醯の所來の處より、大海に流入するまで、其の中間の水を多少と爲すや」と、比丘の言く、「甚だ多し」と。佛の言はく、「但だ一人が一劫の中にて、畜生と作る時には、屠割剝刺され、或時には罪を犯して、其の手足を截られ、其の身首を斬られ、是の如き等の血は此の水よりも多し。是の如くして無邊の大劫の中に身を受け、血を流すことは、稱數す可らず。啼哭して流す淚、及び母乳を飮むことも亦た是の如し。一劫の中の一人の積骨を計るに、鞞浮羅大山（丹註に云ふ。此の山は天竺にて、人常に見るを以て、信じ易きなり。）よりも過ぎたり。是の如く無量劫の中に生死の苦を受く」と。諸の比丘は是を聞き已つて、

【二】恒伽 (Gaṅgā)
藍牟那 (Yamunā)
薩羅由 (Sarayu)
阿脂羅婆提 (Airāvatī)
摩醯 (Mahī)

無來無去の相なり。云何んぞ心に來去ありと言はん。又言く、諸法は生ずる時に從來する所なく、滅する時に去る所なしと。若し來去あらば卽ち常見に墮せん、諸法には定相あること無し。是を以ての故に但だ內の六情、外の六塵和合するを以て、六識を生じ、及び六受・六想・六思を生ず。是を以ての故に心は幻化の如し。能く一切衆生の心心數法を知るも、知る者あること無く、見る者あること無し。數摩訶衍品の中に言ふが如し。「若し一切衆生の、心心數法の性は實有にして、虛誑ならずとせば、佛は一切衆生の、心心數法を知りたまふこと能はず。一切衆生の心心數法の性は、實に虛誑にして、無來無去なるを以ての故に、佛は一切衆生の心心數法を知りたまふ。譬へば比丘の貪求するものは供養を得ず、貪求する所なければ、則ち乏短する所なきが如し。心も亦た是の如く、若し分別して相を取らば、則ち實法を得ず。實法を得ざるが故に、通達して一切衆生の心心數法を知ること能はず、若し相を取らず、分別する所なければ、則ち實法を得、實法を得るが故に、能く通達して一切衆生の心心數法を知り、罣礙する所なし」と。

問うて曰く、一切衆生の諸の心は悉く知ることを得べきや不や。若し悉く知らば、則ち衆生に邊あらん。若し知らずんば、何を以ての故に「一切衆生の心の趣向する所を知らんと欲す」と說くや。云何んぞ佛に一切種智あらんや。

答へて曰く、一切衆生の心心數法は、悉く知ることを得べし。何となれば經の中に說くが如くんば、一切の實語の中にて、佛は最も第一なればなり。若し悉く一切衆生の心を知つて、其の邊際を得たまふこと能はずんば、佛は何を以てか、「悉く知る」と言はん。亦た一切智人と名けず。而るに佛語は皆な實なり、必ず應に實に一切智人あるべし。　復次に、衆生は無邊なりと雖も、一切種智も亦た無邊なり。譬へば函大なれば、蓋も亦た大なるが如し。若し智慧有邊にして、衆生無邊ならば、應に是の難あるべし。今智慧及び衆生は俱に無邊なるが故に汝が難は非なり。　復次に、若し

【經】一切衆生の意の趣向する所を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】問うて曰く、六通の中に、已に知他心通を說けり、今何を以てか、重ねて說くや。

答へて曰く、知他心通は境界少なり、但だ欲界・色界の現在の衆生の、心心數法のみを知つて、過去・未來及び無色界の衆生の心心數法を知らず。凡夫の通は上は四禪地より、所得の通處に隨ひ、已下は遍ねく四天下の衆生の心心數法を知る、聲聞の通は、上は四禪地より所得の通處に隨ひ、已下は遍ねく千世界の、衆生の心心數法を知る。辟支佛の通は上は四禪地より、所得の通處に隨ひ、已下は遍ねく百千世界の、衆生の心心數法を知る、上地の鈍根の者は、下地の利根の者の心心數法を知ること能はず、凡夫は聲聞の心心數を知らず、聲聞は辟支佛の心心數法を知らず、辟支佛は佛の心心數法を知らず、是を以ての故に「一切衆生の心の趣向する所を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と說く。

問うて曰く、何の智を以てか、能く一切衆生の心心數法を知るや。

答へて曰く、諸佛は無礙解脫あり。是の解脫の中に入つて、能く一切衆生の心心數法を知り給ふ。諸の大菩薩は、相似の無礙解脫を得て、亦た能く一切衆生の心心數を知る。新學の菩薩は、是の大菩薩の無礙解脫、及び佛の無礙解脫を得んと欲し、此の無礙解脫を以て、一切衆生の心心數法を知る。大菩薩は、佛の無礙解脫を得んと欲す。是の故に、已に知他心通を說くと雖も、更に「一切衆生の、心の趣向する所を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と說く。

問うて曰く、心の趣向する所とは、心を去ると爲すや、去らずと爲すや。若し去らば此は則ち無心なること猶ほ死人の若く、若し去らずんば云何んぞ能く知らん。佛の言ふが如くんば、意に依つて法を緣じ、意識は意を生ず。若し去らずんば和合すること無からん。

答へて曰く、心は去らず住せずして而も能く知る。般若波羅蜜の中に說くが如くんば、一切法は

心を生じて卽ち入つて便ち得たまふ。神通を具足し、魔を降し已つて、自ら一身に云何にして大方便を得しかと念じ、便ち宿命明を求め、自ら世世に福德力を積めるが故なるを知り。中夜の時には魔は卽ち還り去つて、寂寞として聲なし。一切を慈愍したまふが故に、魔衆の聲を念じて、天耳神通、及び天眼明を生じ、是の天耳を用ゐて、十方五道の衆生の、苦樂の聲を聞き、聲を聞き已つて。其の形を見んと欲するに、而も障蔽を以て見ざるが故に、天眼を求め給ふ。後夜の時、旣に衆生の形を見、其の心を知らんと欲するが故に、他心智を求め、衆生の心は皆な苦を離れ、樂を求めんことを欲することを知る。是の故に菩薩は、漏盡神通を求め、諸樂の中に於て、漏盡は最勝なれば、衆生をして之を得せしめたまふ。

問うて曰く、菩薩は已に無生法忍を得、世世に常に果報神通を得。今何を以てか自ら疑ひ、旣に衆生を見て而も其の心を知らざるや。

答へて曰く、二種の菩薩あり。一には法性生身の菩薩なり。二には衆生を度せんが爲の故に、方便して人法を受け、身は淨飯王の家に生れ、四城門より出でて、老病死人を問ふ、是の菩薩は樹王下に坐して六神通を具す。　復次に、菩薩の神通は先より有れども、而も未だ具足せず、今三夜に於て得る所は、是れ佛の神通にして、人法を行ずるが故に、自ら疑ふも咎なし。

問うて曰く、六神通の次第は、常には初は天眼、後は漏盡通なり。亦た爾らざる時ありや。

答へて曰く、多くは先に天眼にして、後に漏盡智なり。或時は好む所に隨つて修し、或は天耳を先とし、或は神足を先とす。有人の言く、「初禪には天耳得易し、覺觀の四心あるが故なり。二禪には天眼得易し、眼識なきが故に、心攝して散ぜざるが故なり、三禪には如意通得易し、身に快樂を受くるが故なり。四禪には諸通みな得易し、一切安隱の處なるが故なり」と。宿命等の三神通の義は、十力の中に說くが如し。

が故に天耳通を求め、既に天眼、天耳を得て衆生の身形、音聲を見知するも、而も語言、種種の憂喜苦樂の辭を解せざるが故に、辭無礙智を求め。但だ其の辭のみを知つて、其の心を知らざるが故に、知他心智を求め。其の心を知り已れども、未だ本の從り來る所を知らざるが故に、宿命通を求め。既に來る所を知るも、其の心病を治せんと欲するが故に、漏盡通を求む。五通を具足するを得已れども、變化すること能はざるが故に、度する所未だ廣からず、邪見と大福德の人を降化すること能はず、是の故に如意神通を求む。應に是の如く次第すべし。何を以ての故に、先づ如意神通を求むるや。

答へて曰く、衆生の麁なる者は多く、細なる者は少し、是の故に先づ如意神通を以てす。如意神通は能く麁細を兼ね、人を度すること多きが故なり。是を以て先に說けり。 復次に、諸の神通は得法異なり數法異なる。得法の者は多くは先づ天眼を求む、得易きを以ての故なり。行者は日月宙宿珠火を用ゐて、是等の光明の相を取り、常に懃めて精進して、善く修習するが故に、晝夜の異なく、若しくは上、若しくは下、若しくは前、若しくは後を、等一に明徹して罣礙する所なし。是の時初めて天眼神通を得。餘は次第に得ること先に說けるが如し。 復次に、佛は自ら得る所の如く、人の爲に次第を說きたまふ。佛は初夜分に一通一明、所謂る如意通、宿命明を得たまひ。中夜分に天耳通、天眼明を得たまひ、後夜分に知他心智通、漏盡明を得たまふ。明の用を求むるに功重きが故に、後に在つて說き、通と明とは次第に得ること、四沙門果の如く、大なる者後に在り。

問うて曰く、若し天眼は得易きが故に前に在らば、菩薩は何を以てか、先づ天眼を得ざるや。

答へて曰く、菩薩は諸法に於て、皆な易くして難きもの無し。餘人は鈍根なるが故に難あり易あり。復次に、初夜の時、魔王來つて佛と戰はんと欲するに、菩薩は神通力を以て、種種に變化して、魔の兵器をして、皆な瓔珞たらしめ、魔を降し已つて、續いて神通を念じて、具足せしめんと欲し、

問うて曰く、一切入も亦た是れ大定なり。何を以てか是を實の水と作して、己身も他人も、皆な見せしむること能はざるや。

答へて曰く、一切入の觀ずる處は、廣くして但だ能く一切をして是の水相ならしむるも、而も實に是を水ならしむること能はず。神通は能く一切に遍ねからざれども、而も能く地をして、轉じて水と爲らしむれば、便ち是れ實の水なり。是を以ての故に二定の力は各各別なり。

問うて曰く、二定の變化の事は、實と爲すか虛と爲すか。若し實ならば、云何にして石を金と作し、地を水と作さん。若し虛ならば、云何なれば聖人にして、而も不實を行ずるや。

答へて曰く、皆な實なり。聖人には虛なし、三毒を已に拔くが故なり。一切法は、各各定相なきを以ての故に、地を轉じて或は水相と作す可し、酥・膠・蠟の如きは、是れ地の類なれども、火を得れば則ち消えて、水と爲り。卽ち濕相を成す。水は寒を得れば、則ち結んで氷となつて而して堅相を爲し、石汁は金と作り、金敗るれば銅と爲り、或は還つて石となる。衆生も亦た是の如く、惡は善と爲す可く、善は惡と爲す可し。是を以ての故に一切法は定相なきを知る。故に神通力を用ゐて變化するに、實にして誑ならず。若し本より各各定相なれば、則ち變ずべからず。

三に諸の賢聖の神通は、六塵の中に於て意に隨つて自在なり。好を見ては能く厭想を生じ、醜を見て能く樂想を生じ、亦た能く好醜の想を離れて捨心を行ず。是を三種の神通と名く。此の自在神通は、唯だ佛のみ具足し給へり。菩薩は是の神通を得て、諸の佛國に遊ぶに、諸の異國に於ては、語言同じからず、及び遠きに在る微細の衆生は聞えざるが故に、天耳通を求めて、常に種種多衆の大聲を憶念し、相を取つて修行し、常に修習するが故に、耳は色界四大造の清淨色を得、得已つて便ち遠く聞くことを得、天・人の音聲の麁細遠近に於て通達無礙なり。

問うて曰く、禪經の中に說くが如くんば、先きに天眼を得て衆生を見れども、其の聲を聞かざる

答へて曰く、阿羅漢には大慈悲なく、本と誓願して一切衆生を度すること無く、叉實際に證を作し、已に生死を離るるを以てなり。　復次に、先に已に二種の漏盡あることを答へたり。此の中には、菩薩は漏盡通を得と說かず、自ら「六神通を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と言へり。六神通の義は、後品の中に佛の說き給ふ所の如し。上の讃菩薩品にも、亦た已に菩薩の五神通の義を說けり。

問うて曰く、神通には何の次第ありや。

答へて曰く、菩薩は五欲を離れ、諸禪を得て、慈悲あるが故に、衆生の爲に神通を取つて、諸の希有奇特の事を現じ、衆生の心をして清淨ならしむ。何となれば、若し希有の事無くんば、多くの衆生をして得度せしむること能はざればなり。菩薩摩訶薩は是の念を作し已つて、心を身中の虛空に繫け、麁重の色相を滅して、常に空の輕相を取り、大欲精進心を發し、智慧もて籌量し、心力能く身を擧げ、未だ籌量し已らざるに、自ら心力大にして、能く其の身を擧することを知る。譬へば[一]趠を學ぶには、常に色の麁重の相を壞し、常に輕空の相を修すれば、是の時、便ち能く飛ぶが如し。

二には亦た能く諸物を變化す。地を水と作し、水を地と作し、風を火と作し、火を風と作し、是の如く諸大を皆な轉易せしむ。金を瓦礫と作し、瓦礫を金と作し、是の如きの諸物を各能く化せしむ。地を變じて水相と爲すには、常に修して水を念し、多く復た地相を憶念せざらしむれば、是の時地相は念の如く卽ち水と作る、是の如き等の諸物、皆なよく變化す。

問うて曰く、若し爾らば、一切入と何等の異なり有りや。

答へて曰く、一切入は是れ神通の初道なり。先きに已に一切入・背捨・勝處にて、其の心を柔伏すれば、然る後に易く神通に入る。　復次に、一切入の中にては、一身、自らは、地變じて水と爲るを見れども、餘人は見ず、神通は則ち然らず、自ら實に是の水を見、他人も亦た實の水を見る。

【一】趠。超の意味。

卷の第二十八

初品第四十三……「欲住大神通」釋論

【經】菩薩摩訶薩、六神通に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】問うて曰く、讃菩薩品の中の如くんば、諸の菩薩は皆な五神通を得と言ふ。今何を以てか、「六神通に住せんと欲す」と言ふや。

答へて曰く、五通は是れ菩薩の所得なり、今六神通に住せんと欲すと言ふは、是れ佛の所得なり。若し菩薩にして六神通を得ば、如來を難ず可し。

問うて曰く、往生品の中には、「菩薩は六神通に住して、諸の佛國に至る」と說けり。云何なれば皆な五通を得と言ふや。

答へて曰く、第六の漏盡神通に二種あり。一には漏と習と倶に盡く、二には漏は盡くせども習は盡きず。習盡きざるが故に、「皆な五通を得」と言ふも、漏を盡くすが故に、「六神通に住す」と言ふ。

問うて曰く、若し菩薩は漏を盡くさば、云何なれば復た生じ、云何なれば生を受くる。一切の受生は、皆な愛の相續に由るが故に有り。譬へば米は良田を得と雖も、時澤終れば生ずること能はざるが如し。諸の聖人は愛の糠は已に脫するが故に、有漏業生の因緣ありと雖も、生ずることを得ざるべし。

答へて曰く、先に已に說けり。菩薩は法位に入り、阿鞞跋致地に住し、末後の肉身盡きて、法性生身を得。諸の煩惱を斷ずと雖も、煩惱の習の因緣あるが故に、法性生身を受く、三界の生には非ざるなり。

問うて曰く、阿羅漢も、煩惱は已に盡くれども、習は亦た未だ盡きず、何を以てか生ぜざるや。

此は則ち清淨にして、末後の肉身盡きて法性生身を得、結使も礙へざる所にして教戒を須ゐず、大恆河の中の船は將御を須ゐずして、自ら大海に至るが如し。

復次に、初發意に大心を生じ、諸の煩惱を斷じ、諸法の實相を知つて便ち阿鞞跋致を得る有り。但だ檀波羅蜜のみを行じて、便ち六波羅蜜を具足するあり。乃至般若波羅蜜も亦是の如し。六波羅蜜を行じて、未だ阿鞞跋致を得ず、衆生の中に於て大悲心を生じ、是の時、便ち阿鞞跋致を得るもの有り。悲心を得て是の念を作すものあり。「若し諸法空なれば則ち衆生なし、誰か度す可き者ぞ」と。是の時、悲心は便ち弱し。或時は衆生を以て愍むべしとするも、諸法の空觀に於て弱し。若し方便力を得て此の二法に於て、等しくして遍黨なければ、大悲心は諸法實相を妨げず、諸法實相を得るも大悲を妨げず。是の如くして方便を生ず。是の時、便ち菩薩の法位に入り、阿鞞跋致地に住することを得。往生品の中に說くが如し。　復次に、阿鞞跋致のの相、後の阿鞞跋致の二品に說くが如し。

住することを得べし」と。是を以ての故に阿鞞跋致地に住すと說く。

問うて曰く、何等か是れ阿鞞跋致地なりや。

答へて曰く、若し菩薩は、能く一切法の不生不滅、不不生、不不滅、不共、非不共を觀じ、是の如く諸法を觀じて、三界に於て脫することを得、空を以てせず、非空を以てせず、一心に、十方諸佛の用ゐたまふ所の、實相の智慧を信忍して、能く壞する(者)なく、能く動ずる者なし、是を無生法忍と名く。無生法忍は、卽ち是れ阿鞞跋致地なり。復次に、菩薩位に入れば、是れ阿鞞跋致地なり。聲聞辟支佛地を過ぐるも、亦た阿鞞跋致地と名く。復次に、阿鞞跋致地に住すれば、世世に常に果報を得、神通を失はず退せざるなり。若し菩薩此の二法を得れば、諸法實相を得と雖も、而も大悲を以て一切衆生を捨てず。復た二法あり、一には淸淨智慧、二には方便智慧なり。復た二法あり。一には深心に涅槃を念じ、二には所作世間を離れず。譬へば大龍の尾は大海に在り頭は虛空に在り、震電雷霆して、大雨を降すが如し。復次に、阿鞞跋致の菩薩は、是の諸法實相の智慧を得て、世世に失はず、終に暫らくも離れず、諸佛の深經に於て終に疑はず、亦た礙を作さざるなり。何となれば、我未だ一切智慧を得ざるが故に、何の方便、何の因緣なるか知らざるが故に、是の如く說く、阿鞞跋致の菩薩は、常に深心を以て、終に惡を生ぜず、阿鞞跋致は、深心を以て、諸善を集め、淺心に諸の不善を作すと。

問うて曰く、若し阿鞞跋致の相は無生法忍を得るならば、云何なれば淺心もて諸の不善を作すや。

答へて曰く、二種の阿鞞跋致あり、一には無生法忍を得、二には未だ無生法忍を得ずと雖も、佛はそれが過去未來に作す所の因緣もて、必ず當に作佛すべきことを知りたまひ、傍人を利益するが爲の故に、其に受記を爲したまふ。是の菩薩は、生死の肉身の結使未だ斷ぜざるも、諸の凡夫の中に於て最も第一と爲す。是も亦た阿鞞跋致の相と名く。若し無生法忍を得て、諸の結使を斷ずれば、

法位に入れば、卽ち是れ阿羅漢、辟支佛地を過ぎて、阿鞞跋地に住するなり。　復次に、法位に入るに因るが故に、阿羅漢辟支佛地を過ぎて、阿鞞跋地に住することを得。

問うて曰く、法位の中に入つて老病死を過ぎ、及び諸の結使を斷じ三惡道を破る等は先に說くが如し。何を以てか但だ聲聞辟支佛地を過ぎて、亦た種種の功德に住すと說き、何を以ての故に但だ阿鞞跋致地に住すとのみ說くや。

答へて曰く、諸の惡事を捨てて諸の功德を得。後當に次第して說いて、所住の功德に及ぶべし。說法は當に須らく次第にすべく、一時に頓に說くべからず。　復次に、菩薩の初發意の時に怖畏すべき所は、聲聞辟支佛地に過ぎたるは無し。正しく地獄に墮せしむるも、是の如きの怖畏無し。永く大乘道を破らざらんが故なり。阿羅漢辟支佛は、此の大乘に於て以て永く滅すと爲す。譬へば空地に樹あり、舍摩梨と名くるが如きは、觚枝廣大にして、衆鳥集り宿る。一の鴿、後に至つて、一枝の上に住するに、其の枝及び觚、卽時に壓折す。澤神、樹神に問ふ、「大鳥たる鵰鷲を皆な能く住持せるに、何ぞ小鳥に至つて便ち自ら勝へざるや」と。樹神答へて言く、「此の鳥は我が怨家の尼倶盧樹上より來る。彼の樹果を食し、來つて我が上に栖まば、必ず當に糞を放つべし。(種)子地に墮つれば惡樹復た生じ、害を爲すこと必ず大ならん、是を以ての故に、此の一鴿に於て、大に憂畏を懷き、寧ろ一枝を捨てて全うする者を大ならしむ」と。菩薩摩訶薩も亦た是の如く、諸の外道、魔業及び諸の結使、惡業に於ては、是の如く畏るること阿羅漢辟支佛(に於ける)が如きこと無し。何となれば、聲聞辟支佛地は菩薩の邊に於て、亦た彼の鴿の如く、大乘心を壞取し、永く佛業を滅すればなり。是を以ての故に但だ聲聞辟支佛地を過ぐと說く。

阿鞞跋致地に住すとは、初發意より已來、常に喜樂して阿鞞跋致地に住す。諸の菩薩の多く退轉あることを聞くが故に、發意の時願を作さく、「何の時か當に聲聞辟支佛地を過ぎて、阿鞞跋致地に

王が普ねく諸龍の命の應に盡くべき者を觀、翅を以て海を搏ち、水をして兩に闢かしめて取つて之を食するが如し。佛も亦た是の如く、佛眼を以て十方世界五道の衆生の、誰か應に度を得べきかを觀じ、初めて神足を現はし、次に爲に其の心趣を示す。此の二事を以て三障礙を除き、爲に說法し、三界の衆生を拔きたまへり。佛力の無量の神通を得ることは、假令虛妄なりとも猶尙信ずべし、何に況んや實說をや。時を方便と名く。復次に、菩薩は般若波羅蜜を以て諸の法相を知り、其の本願を念じ、衆生を度せんと欲して、是の思惟を作さく、「諸法實相の中に衆生は不可得なり、當に云何にして度すべき」と。復た是の念を作さく、「諸法實相の中に衆生は不可得なりと雖も、而も衆生は是の諸の法相を知らざるが故に、是の實相を知らしめんと欲す」と。復次に、是の實法相は亦衆生を礙へず、實法相とは、名けて除壞せらるること無く、亦た所作なしと爲す。是を方便と名く。是の四法を具足して菩薩位に入ることを得。

【經】聲聞、辟支佛地を過ぎて、阿鞞跋致地に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】問うて曰く、菩薩は法位に入る時、卽ち已に聲聞辟支佛地を過ぎて、阿鞞跋致地に住す、何を以ての故に復た說くや。

答へて曰く、三事は一時なりと雖も、諸法の各各に相應して當に次第に讃すべし。一心中に一時に無漏の五根を得るも、而も各各分別して其の相を說くが如し。菩薩は法位に入る時、若干の結使を斷じ、若干の功德を得、是の地を過ぎて是の地に住す。唯だ佛のみ能く(是を)知り、亦た諸の菩薩を引導せんと欲したまふが故に、佛は種種に讃說したまへり。此の經の如きは、「始め佛は耆闍崛山に在して五千の比丘と倶なりき。皆な是れ阿羅漢にして、諸漏已に盡き、所作已に辦ずる等なり。」(と說けり。)阿羅漢は卽ち是れ漏盡なり。漏盡とは、卽ち是れ所作已に辦ずる等なれど、亦た餘人を引導し、心をして淸淨ならしめんが爲の故に、種種に讃說したまふも咎なし。此も亦た是の如し。

問うて曰く、修行には皆な四法を攝す、何を以ての故に差別して四と爲すや。

答へて曰く、初「發意」には修行ありと雖も、久しく修せざるが故に、修行と名けず。在家の如きは、終日は（家に）住せずと雖も、名けて行くと爲さず。復次に、發意の時は但だ意願のみ有り、行ずる時に造作して、財を以て人に與へ、禁戒を受持し、是の如き等の六波羅蜜を行ず、是を「修行」と名く。修行し已れば、般若波羅蜜を以て、諸法の實相を知り、「大悲」心を以て衆生を愍念す。是の諸法實相を知らざれば、世間虛誑の法に染著し、種種の身苦、心苦を受く。是は更に大悲の名を受くるが故に、修行とは名けず。「方便」とは、般若波羅蜜を具足するが故に諸法の空を知り、大悲心あるが故に衆生を憐愍し、是の二法に於て、方便力を以て染著を生ぜず、諸法の空を知ると雖も、方便力あるが故に亦た衆生を捨てず、衆生を捨てずと雖も、亦た諸法の實に空なることを知る。若し是の二事に於て等しければ、卽ち菩薩位に入ることを得。聲聞の人の如きは、定慧の二法に於て等しきが故に、是の時、卽ち正位に入ることを得。是の法には行ありと雖も、更に餘の名字あれば修行と名けず。初發意より乃ち道場に坐するに至るまで、其の中間に於て行ずる所は皆な修行と名くるも、小小差別して異なること有り、名字辨し易きが爲の故なり。譬へば人あり、初めて阿耨多羅三藐三菩提の意を發し、一切衆生の老病死等の身心の諸苦を度脫せんと欲し、大誓を作し、功德、慧明の二事を莊嚴する因緣の故に所願皆な滿ずるが如し。是の二事に六分の修行あり、名けて六波羅蜜と爲す。布施・持戒・忍辱は是れ功德分なり。精進・禪定・智慧は是れ慧明分なり。六波羅蜜を修行し、是の諸の法相を知るに、甚深微妙にして解し難く知り難し。是の念を作さく、「衆生は三界の諸法に著せり、何の因緣を以てか、衆生をして是の諸の法相を得せしめん。當に諸の功德を具足するを以て、清淨の智慧を具足すべし」と。佛身は三十二相、八十隨形好、光明具足し、神通無量なり。十力・四無所畏・十八不共法・四無礙智を以て、應に度す可き者を觀て說法開化す。譬へば金翅鳥

外空を見ず、外空の中に內空を見ず、外空の中に內外空を見ず、內外空の中に外空を見ず、乃至無法、有法も復た是の如し。　復次に、上位の菩薩は無等等の心を得て亦た自ら高ぶらず、心相の眞空を知り、諸の有無等の戲論滅す。

問うて曰く、何を以ての故に聲聞法の中にては、名けて正位と爲し、此の菩薩法の中の位にては、但だ位とのみ名くるや。

答へて曰く　若し正位と言ふも亦た咎なし。所以いかんとなれば若し菩薩法位と言はば、是は則ち正と爲せばなり。聲聞法の中には、但だ位と言つて聲聞位と言はず、是を以ての故に正位と言ふなり。　復次に、聲聞を學する人は大慈悲心なく、智慧利ならざるが故に、未だ厭心を生ぜず、多く諸法を求め、種種の邪見、疑悔を生ず。菩薩摩訶薩は大慈にして、一切を愍むが故に、多く衆生の老病死の苦を度脫せんことを求め、種種の戲論を分別することを求めず。譬へば長者に一子あり之を愛すること甚だ重し。其の子病を得れば、但だ良藥の能く病を差やす者を求め、諸藥の名字を分別し、之を取るの時節、合和分數を求めざるが如し。是れを以ての故に諸の菩薩は、果に從つて十二因緣を觀じ、因に從つて觀ぜず。見多き者は因に從つて觀じ、愛多き者は果に從つて觀ず。諸の聲聞人は、邪位に因るが故に正位あり、菩薩は邪位薄きが故に但だ菩薩位と名く。

問うて曰く、聲聞法の中にては、苦法忍より乃ち道比忍に至るを、名けて正位と爲す、經の中に說くが如くんば、三惡道の中には三事を得べからず。所謂正位・聖果・漏盡なり。破戒・邪見・五逆罪等も亦た是の如し。何の法を得てより、名けて菩薩位と爲すや。

答へて曰く、發意と修行と大悲と方便とを具足し、是の四法を行じて、菩薩位に入ることを得。聲聞法の中の如きは、先きに具に四種の善根なる煗法・頂法・忍法・世間第一法を說き、然して後に苦法忍の正位に入る。

是れ則ち實說なり。

【經】 復次に舍利弗よ、菩薩摩訶薩にして、菩薩位に上らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】 菩薩位とは無生法忍是なり。此の法忍を得て一切世間の空なることを觀ぜば、心に著する所なくして、諸法實相の中に住し、復た世間に染まず。 復次に、般舟般三昧は是れ菩薩位なり、是の般舟般三昧を得れば、悉く現在の十方の諸佛を見たてまつりて、諸佛より法を聞いて諸の疑網を斷ず。是の時、菩薩の心動搖せず、是を菩薩位と名く。 復次に、菩薩位とは、六波羅蜜を具足し、方便智を生じ、諸法實相に於ても亦た住せず、自知自證して他語に隨はず、若しくは魔、佛形と作つて來るも心亦た惑はず。 復次に、菩薩の法位に入る力の故に阿鞞跋致の菩薩と名くることを得。 復次に、菩薩摩訶薩は是の法位の中に入れば、復た凡夫の數に墮せず、名けて得道の人と爲す。一切世間の事、其の心を壞らんと欲すれども、動ぜしむること能はず、三惡趣の門を閉ぢ、諸の菩薩の數中に墮し。初めて菩薩の家に生れ、智慧清淨に成熟す。 復次に、頂に住して墮せざる、是を菩薩の法位と名く。學品の中に說くが如くんば、上位の菩薩は惡趣に墮せず、下賤の家に生れず、聲聞、辟支佛地に墮せず、亦た頂より墮せず。

問うて曰く、云何なるを頂より墮すと爲すや。

答へて曰く、須菩提が舍利弗に語れるが如し。若し菩薩摩訶薩、方便心なくして六波羅蜜を行ずれば、空・無相・無作の中に入るも、菩薩位に上ること能はず、亦た聲聞・辟支佛地にも墮せず、諸の功德法に愛著し、五衆の無常・苦・空・無我に於て、相を取りて心著し、是は道なり是は道に非ず。是は行ずべし是は行ずべからずと言ひ、是の如き等に相を取りて分別すれば、是の菩薩は、頂より墮するなり。 何等か是れ頂に住する。上の所說の如く、諸法の愛を斷じ、愛を斷ずるの法に於ても、亦た復た取らず。住頂の義の中に說くが如し。若し菩薩摩訶薩般若波羅蜜を行ずる時は、內空の中に

苦行を現じたまへり。汝が、「五人を瞋る」と言ふは、是を方便と爲す。亦た是れ瞋の習にして、煩惱に非ざるなり。今當に實の如くに說くべし。菩薩は無生法忍を得て、煩惱已に盡くるも、習氣を未だ除かざるが故に、習氣に因つて及び法性生身を受け、能く自在に化生す。大慈悲あつて衆生の爲の故に、亦た本願を滿つるが爲の故に、世間に還り來り、餘殘の佛法を具足し成就するが故に、十地滿ちて道場に坐し、無礙解脫力を以ての故に、一切智・一切種智を得て、煩惱の習を斷じたまへり。摩訶衍の人は言く、「無生法忍を得たる菩薩は、一切の煩惱、及び習を都て盡くす」と。亦た是も錯なり。若し都べて盡くさば、佛と異なること無く、亦た法性生身を受くべからず。是を以ての故に、菩薩は無生法忍を得、生身を捨てて法性生身を得。若し道場に坐するに至つて、一切の煩惱及び習を倶に斷ずと言はば、是の語も亦た非なり。所以いかんとなれば若し菩薩、具に三毒あらば、云何んぞ能く無量の佛法を集めん。譬へば毒瓶の如きは、甘露を著くと雖も、皆な食するに中らず。菩薩は諸の純淨の功德を集めて、乃ち佛と作ることを得。若し三毒を雜へば、云何んぞ能く淸淨の佛法を具足せんや。

問うて曰く、諸法實相を觀じ、及び悲心を修するが故に、能く三毒をして薄からしむ。薄きが故に能く淸淨の功德を集む。

答へて曰く、三毒を薄くすれば、轉輪聖王と諸天王身とを得べし。佛の功德身を得んと欲せば、是の事あること無し、三毒を斷ずれば、習未だ盡きさるも、諸の功德を集むることを得べし。復次に、薄とは、離欲の人の、下地の結を斷ずるも、猶ほ上地の煩惱あるが如きに名く。又須陀洹の見諦所斷の結盡くれども、思惟所斷の結未だ盡きざるが如き、是を名けて薄と爲す。佛の說きたまふが如くんば、三結を斷じて、婬・恚・癡を薄くするを名けて斯陀含と爲す。汝若し薄と言はば、應當に是れ斷なるべし。是の故に無生法忍を得る時、煩惱を斷じ、佛を得る時、煩惱の習を斷ずるは

り、內に結使の賊を滅し、外と內との賊を破するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を成じたまふに、人皆な信受して「是の人は能く是の事を爲す、我等も亦た當に是の事を學習すべし」と。若し久しきより來た、煩惱なく。若しくは然燈佛に從つて、無生法忍を得てより來た、煩惱を斷じ盡くすと言ふも、是れ亦た方便の說にして、諸の菩薩をして歡喜せしめんが故なり。若し菩薩久しく已に一切の煩惱を斷ぜば、成佛の時、復た何の爲す所かあらん。

問うて曰く、佛には種種の事あり、結使を斷ずるは是れ一事なり。餘に佛の國土を淨め、衆生を成就する等の事あれども未だ具はらず、衆事を具足するを以ての故に名けて佛と爲す。

答へて曰く、若し爾らば佛の言はく、「結使を斷ずるは末後の身なり」と、人若し都て結使なくんば、云何んぞ生ずることを得んや。

問うて曰く、無生法忍を得てより已來、常に法性生身を得て變化するや否や。

答へて曰く、化法には要らず化主あつて、然して後よく化す。若し無生法忍を得て、一切の結使を斷ぜば、死する時、是の肉身を捨して、實身あること無けん、誰か變化を爲さんや。是を以ての故に、無生を得てより已來、結使を盡くすべからざることを知る。復次に、聲聞の人は言ふ「菩薩は結使を斷ぜず、乃ち道場に坐するに至つて、然して後に斷ず」と。是は大なる錯と爲す。何となれば汝が法の中に、「菩薩は已に三阿僧祇劫を滿し、後更に百劫の中に有つて常に宿命智を得、自ら憶ふに迦葉佛の時に比丘と爲り、鬱多羅と名けて、佛法を修行す」と說けばなり。云何んぞ今六年苦行して、邪道の法を修し、日に一麻一米を食せん。後身の菩薩は一日すら、尙ほ應に謬るべからず、何に況んや六年をや。瞋も亦た是の如し。久遠世の時より毒蛇と作り、獵者生きながら其皮を剝ぐすら猶ほ瞋らず、云何んが最後身にして、而も五人を瞋らんや。是を以ての故に、聲聞人が佛の義を受くるは錯たることを知る。佛は方便力を以て、外道を破せんと欲するが故に、六年の

久しく熏ずるが故に、煩惱の習に於て復た餘氣なし。　復次に、佛は一切の諸の功德に於て、皆な已に播し盡し給ふが故に、乃ち諸の煩惱の習氣に至るまで、永く盡きて餘ること無し。何となれば諸の善法功德は、諸の煩惱を消すが故なり。諸の阿羅漢は此の功德に於て、盡く得ざるが故に、但だ世間の愛を斷じて直に涅槃に入る。　復次に、佛の結使を斷じたまふ智慧力は甚だ利なり、十力を用ゐて大力と爲し、無礙智を以て直に過ぎたまふが故に、諸の結使を斷じ盡くして、復た遺餘なし。譬へば人、重罪あり、國王大に瞋り、其の七世の根本を誅して、遺餘なからしむるが如し。佛も亦た是の如く、煩惱の重賊に於て、根本を誅拔して遺餘なからしめ給ふ。是れを以ての故に、一切種智を以て一切煩惱の習を斷ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべしと說くなり。

問うて曰く、但だ習を斷ずるや、亦は煩惱を除くや。

答へて曰く、有人の言く、「煩惱を斷じ及び習を俱に盡くす」と。先に習を盡くして餘なしと說くが如し。阿羅漢辟支佛は、但だ煩惱を斷じて、習を斷ずること能はず、菩薩は一切の煩惱、及び習を斷じて盡く餘なからしむ。有人の言く、「佛は久しく已に欲を遠かり給へり。佛の說きたまへるが如し、我れ定光佛を見たてまつりてより已來、已に欲を離れたり。方便力を以ての故に•生死•妻子•眷屬あることを現ず」と。有人の言く、「無生法忍を得てより來た、諸法實相を得るが故に、一切の煩惱及び習を盡くす」と。有人の言く、「佛は初發意より來た、煩惱あり、道場に坐するに至り、後夜の時に於て、一切の煩惱及び習を斷じたまへり」と。

問うて曰く、是の如き種種の說は、何者を實と爲すや。

答へて曰く、皆な是れ佛口づから說きたまふ所なるが故に、不實あること無し。聲聞法の中にては佛は方便力を以ての故に、現に人法を受け、生•老•病•寒熱•飢渴等あり。人は生れて而も煩惱なき者なし。是の故に、佛も亦た應に人の法に隨つて煩惱あるべし。樹王の下に於て外に先づ魔軍を破

の綩綖の如きも、亦た以て樂受と爲し給はず、大天王跽いて天食を奉れども、以て美と爲し給はず、毘蘭若國にて馬麥を食すれども以て惡と爲し給はず、諸大國王、上饌を供へ奉れども、以て得と爲し給はず、薩羅聚落に入つて、空鉢にして出づるも以て失と爲し給はず、提婆達多、耆闍崛山に於て、石を推して佛を壓すれども、佛は亦た憎み給はざりき。是の時、羅睺羅敬心を以て佛を讃すれども、佛は亦た愛し給はず、阿闍世、諸の醉象を縱つて、佛を害せしめんと欲するに、佛は亦た畏れずして狂象を降伏し給へり。王舍城の人、益恭敬を加へ、香華瓔珞を持つて、出でて佛を供養すれども、佛は亦た喜び給はず、九十六種の外道、一時に和合し議して言く、「我等も亦た皆な是れ一切智人なり」と。舍婆提より來つて、佛と共に論議せんと欲す。爾の時、佛は神足を以て臍より光を放ち給ふに、光の中に皆な化佛あり、國王波斯匿も亦た之に命じて其座上に來らしむるに、尙ほ動かすことを得ること能はざりき、何に況んや能く佛と論議するを得んや。佛は一切の外道の賊の來るを見れども、心亦た退き給ふこと無く、是の外道を破し給ひて、諸天世人、倍す恭敬供養を益せども、心亦た進みたまはざりき。是の如き等の種種の因緣にて、來つて佛を毀らんと欲するも、佛を動かす可らず。譬へば眞の閻浮檀金は、火に燒けども異ならず、槌もて打ち磨き斫れども、敗れず異ならざるが如し。佛も亦た是の如く、諸の毀辱誹謗論議を經れども、動ぜず、異ならず、是を以ての故に知る。佛は諸の煩惱の習都て盡きて、餘ること無きことを。

問うて曰く、諸の阿羅漢、辟支佛も、同じく無漏智を用ゐて、諸の煩惱の習を斷ず、何を以てか盡と不盡と有るや。

答へて曰く、先に已にその智慧の、力薄きこと世間の火の如く、諸佛の力の大なることは、劫盡の火の如しと說けり。今當に更に答ふべし。聲聞、辟支佛は、諸の功德、智慧を集むること久しからず、或は一世・二世・三世なり。佛の智慧功德は、無量阿僧祇劫に於て、廣く修し廣く習ひて善法

諸餘の賢聖は能く煩惱を斷ずと雖も、習を斷ずること能はず、難陀の如きは、婬欲の習あるが故に阿羅漢道を得と雖も、男女の大衆の中に於て坐するに、眼先づ女衆を視て與に言語し說法す。舍利弗の如きは瞋の習の故に、佛の「舍利弗は不淨食を食せり」と言ふを聞いて、即便ち食を吐いて、終に復た請を受けず。又舍利弗は自ら偈を說いて言く、

『罪に覆はれ、妄念ある人は、無智にして懈怠なり。終に此をして、妄りに來つて、我に近づいて住せしむることを欲せず。』

摩訶迦葉の如きは瞋の習あるが故に、佛の滅度の後に法を集むる時、勅して阿難をして八の突吉羅罪を懺悔せしめ、而して復た、自ら阿難の手を牽いて、出だして、「汝は漏未だ盡きざる不淨の人なり、集法を共にせず」と。畢陵伽婆蹉の如きは常に恆神を罵つて小婢と爲す。摩頭婆私咤の如きは、掉戲の習あるが故に、或時は衣架より踔えて梁に上り、梁より棚に至り、棚より閣に至る。憍梵鉢提の如きは、牛の業習あるが故に常に、食を吐いて呞む。是の如き等の諸の聖人は、漏を盡くすと雖も、而も煩惱の習あり、火が薪を焚き已りて灰炭は猶ほ在るも、火力薄きが故に盡きしむること能はざるが如し。劫盡くる時の火の若きは、三千大千世界を燒いて復た遺餘なし、火力大なるが故なり。佛の一切智の火も亦た是の如く、諸の煩惱を燒いて復た殘習なし。一婆羅門の如きは、五百種の惡口を以て、衆中にて佛を罵るに、佛は異色なく、亦た異心なし。此の婆羅門は心伏し、還たび五百種の語を以て佛を讃ずるに、佛は喜色なく、亦た悅心なく、此の毀譽に於て、心色變ずる無し。又復た栴遮婆羅門女は、盂を帶して佛を謗るに、佛は慚色なく、事情既に露れたれども佛は悅色なし。法輪を轉ずる時、讃美の聲十方に滿つれども、心亦た高ぶらず、孫陀利死して惡聲流布すれども心亦た下らず、阿羅毘國土は風寒く又蒺[六]藜多けれども、佛は中に於て坐臥して以て苦と爲し給はず、又天上の歡喜園の中に在つて、夏安居をなす時、劍婆石に坐し、柔輭淸潔なること、天

【六】蒺。蔓草してトゲのある角實を結ぶ。

たまふと雖も、而も未だ一切種智を用ゐたまはず。大國王が位を得る時には、境土、寶藏、皆な已に得るも、但だ未だ開用せざるが如し。

【經】一切種智を以て、煩惱の習を斷ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。舍利弗、菩薩摩訶薩は應に是の如く般若波羅蜜を學すべし。

【論】問うて曰く、一心の中に一切智、一切種智を得て、一切煩惱の習を斷ず、今云何なれば、一切智を以て、具足して一切種智を得、一切種智を以て、煩惱の習を斷ずと言ふや。

答へて曰く、實には一切は一時に得、此の中にては人をして、般若波羅蜜を信ぜしめんが爲の故に、次第に差別して說き、衆生をして清淨心を得せしめんと欲す。是の故に、是の如く說けり。

復次に、一心中に得と雖も、亦た初・中・後の次第あり。一心に三相あつて、生は住に因緣たり、住は滅に因緣たるが如し。又、心心數法、不相應諸行、及び身業、口業の如し。道智を以て一切智を具足し、一切智を以て一切種智を具足し、一切種智を以て煩惱の習を斷ずるも亦た是の如し。

先に「一切種智」は卽ち是れ一切智なり。道智は金剛三昧に名くと說けり。佛には初發心より卽ち是の一切智、一切種智あり、是の時煩惱の習を斷じ給ふ。一切智、一切種智の相は先に已に說けり。

「一切煩惱の習を斷ず」とは、煩惱の名は、略說すれば則ち三毒なり。廣說すれば則ち三界の九十八使なり。是を煩惱と名く。煩惱の習とは煩惱の殘氣に名く。若し身業口業が智慧に隨はざれば、煩惱より起るに似たり。他心を知らざる者は、其の起す所を見て、不淨心を起す。是れは實の煩惱に非ず。久習の煩惱なるが故に、是の如きの業を起す。譬へば、久しく脚に鎖せる人は、卒(にはか)に解脫を得れば行く時、鎖あること無しと雖も、猶ほ習あること有るが如く、乳母の衣は、久しきが故に垢著き、淳灰を以て淨く浣げば、垢あること無しと雖も、垢氣尙ほ衣に在るが如し。聖人の心垢の如きも、諸の煩惱の、智慧の水を以て浣ぐと雖も、煩惱の氣は尙ほ在るが如し。是の如きの習氣は、

すが如し。一切の人中にて、轉輪聖王は最も第一。一切の蓮華の中にては、青蓮華を第一と爲し。一切の陸生の華にては、須曼色は第一。一切の木香の中にては牛頭旃檀を第一と爲し、一切の珠の中にては、如意珠を第一と爲し、一切諸の戒の中にては、聖戒を第一と爲し、一切の解脫の中にては不壞解脫を最も第一と爲し、一切の淸淨の中にては、解脫を第一と爲し、一切諸の[四]觀の中にては、空觀を第一と爲し、一切諸法の中にては、涅槃を第一と爲す。是の如き等の無量は各各第一あり。佛も亦た是の如く、一切衆生の中に於て最も第一と爲す。第一なるが故に、獨り一切智を得たまふ。

復次に、佛は初發意より大誓を以て莊嚴し、一切衰沒の衆生を拯濟せんと欲するが故に、盡く遍く諸の善道を行じ、善として集めざる無く、苦として行ぜざる無く、皆な一切諸佛の功德を集めたまふ。是の如き等の種種無量の因緣の故に、佛は一切衆生の中に於て獨り第一なり。

問うて曰く、三世十方の諸佛も亦た是の功德あり。何を以ての故に、佛獨り第一なりと言ふや。

答へて曰く、諸佛を除いて、餘の衆生の爲の故に、佛獨り第一なりと言ふ。諸佛は等しく一切の功德あるなり。　復次に、[五]薩婆若多とは、薩婆は秦に一切と言ひ、若は秦に智と言ひ、多は秦に相と言ふ。一切は先に說くが如く、名色等の諸法なり。佛は是の一切法の一相・異相・漏相・非漏相・作相・非作相等の一切法の各各の相、各各の力、各各の因緣、各各の果報、各各の性、各各の得、各各の失を知り給ふ。一切智慧力の故に一切世、一切種を盡く遍ねく解知し給ふ。是れを以ての故に「道種智を以て、具足して一切智を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし、一切智を以て一切種智を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし」と說くなり。

問うて曰く、佛の佛道を得たまふ時の如きは、道智を以て、一切智、一切種智を具足するを得たまふ。今何を以てか、一切智を以て一切種智を具足することを得たまふと言ふや。

答へて曰く、佛の道を得たまふ時は、道智を以て具足して一切智を得、一切種智を具足するを得

【四】「觀」別本にては「諦」

【五】薩婆若多。Sarvajñāta

行法と無爲法、四諦及び無記無爲と、是の如き等の無量の五法門に、一切法を攝す。復次に、一切法は所謂五衆及び無爲、苦諦所斷の法と、集諦・滅諦・道諦・思惟所斷の法と不斷法と、是の如き等の無量の六法門に一切法を攝す。七八九十等の諸の法門は、是れ阿毘曇に義を分別せり。復次に、一切法は所謂有法と無法、空法と實法、所緣法と能緣法、聚法と散法等なり。復次に、一切法は、所謂有法と無法と亦有亦無法、空法と實法と非空非實法、所緣法と能緣法と非所緣非能緣法なり。

復次に、一切法は所謂有法・無法・亦有亦無法・非有非無法・空法・不空法・空不空法・非空非不空法・生法・滅法・生滅法・非生非滅法・不生不滅法・非不生非不滅法・不生不滅亦非不生非不滅法・非不生非不滅亦非不不生亦非不不滅法なり。復次に、一切法は所謂有法・無法・有無法・非有非無法の是の四句を捨す。法空・不空・生滅・不生・不滅の五句も皆な亦た是の如し。是の如き等の、種種無量阿僧祇の法門に、攝する所の諸法を、是の無礙の智慧を以て、盡く遍ねく上の諸法を知るを名けて、一切智、一切種智と爲す。

問うて曰く、一切衆生は皆な智慧を求む、云何なれば獨り佛一人のみ一切智を得給ふや。

答へて曰く、佛は一切衆生の中に於て、第一なるが故に、獨り一切智を得給ふ。佛の說きたまふ所の如し。「無足・二足・四足・多足、有色・無色・有想・無想・非有想・非無想等の一切の衆生の中、佛は最第一なり」と。譬へば須彌山は衆山の中に於いて自然に最第一なるが如く四大の中にて、火は最も有力にして能く照し能く燒くが如し。佛も亦た是の如く、一切衆生の中に於て、最も第一なるが故に、一切智を得るなり。

問うて曰く、佛は何を以てか、一切衆生の中に於て、獨り最第一なるや。

答へて曰く、先に答ふるが如く、一切智を得たまふが故なり。今當に更に說くべし。佛は自ら利益し亦た他を利益したまふが故に、衆生の中に於て最第一なり。一切の照す中にては日を第一と爲

答へて曰く、阿羅漢、辟支佛道は、自ら所行に於ては亦た辦ず。是の故に道智と名けず。道は是れ行相なればなり。　復次に、此の經の中に聲聞、辟支佛を說くも、聲聞の中には三道を攝せざるが故に此中に說かず。佛乘は大なるが故に名けて道智と爲し、聲聞、辟支佛道は小なるが故に、道智と名けず。　復次に、菩薩摩訶薩は自ら道を行じ、亦た衆生の各各に所行の道を示す。是を以ての故に、菩薩は道智を行じて、一切智を得と名くと說く。

問うて曰く、何等か是れ一切智が知る所の一切法なるや。

答へて曰く、佛、諸の比丘に告げたまふが如し。「汝が爲に一切法を說かん。何等か是れ一切法なる。所謂眼・色・耳・聲・鼻・香・舌・味・身・觸・意・法なり、是の十二入を一切法と名く」と。

復た一切法あり、所謂名・色なり。佛が利衆經の中の偈に說きたまふが如し。

『若し眞觀を求めんと欲せば、但だ名と色と有り。若し實知を審かにせんと欲せば、亦た當に名・色を知るべし。癡心、多想を[三]離れて諸法を分別するに、更に異事あつて、名・色を出づる者なし。』

復次に、一切法とは、所謂色と無色法、可見と不可見、有對と無對、有漏と無漏、有爲と無爲、心と非心、心相應と非心相應、共心生と不共心生、隨心行と不隨心行、從心因と不從心因、是の如き等の無量の二法門に一切法を攝す。阿毘曇攝法品の中に說くが如し。　復次に、一切法は、所謂善法と不善法と無記法、見諦所斷と思惟所斷と不斷法、有報法と無報法と非有報非無報法、是の如き等の無量の三法門に一切法を攝す。　復次に、一切法は、所謂過去法と未來法と現在法と非過去未來現在法、欲界繫法と色界繫法と無色界繫法と不繫法、從善因法と從不善因法と從無記因法と從非善非不善非無記因法、有緣緣法と無緣緣法と有緣緣亦無緣緣法と非有緣緣亦無緣緣法、是の如き等の無量の四法門に一切法を攝す。　復次に、一切法は、所謂色法と心法と心數法と心不相應の諸

【三】「離れて」は別本には「雖も」とあり。

を得、因つて道を得る、是の如き現事すら、尙ほ知ること能はず、何に況んや心心數法、所謂禪定・智慧等の諸法をや。佛は盡く諸法の總相・別相を知りたまふが故に、名けて一切種智と爲す。

　復次に、後品の中に、佛は自ら「一切智は是れ聲聞、辟支佛の事、道智は是れ諸の菩薩の事、一切種智は是れ佛事なり。」と說きたまふ。聲聞辟支佛は、但だ總の一切智のみあり、一切種智あること無し。　復次に、聲聞、辟支佛は、別相に於ても分ありと雖も、而も盡く知ること能はざるが故に、總相の名を受く。佛の一切智、一切種智は、皆な是れ眞實なり。聲聞、辟支佛は但だ名字のみ有り。一切智は譬へば畫の燈の如し。但だ燈の名のみ有つて、燈の用ある無し。聲聞、辟支佛の如きは、若し人あり、問難するに、或時は悉く答ふる能はず、疑を斷ずる能はず。佛の三問の如きは舍利弗にして而も答ふる能はず。若し一切智あらば、云何んぞ答ふる能はざらん。是れを以ての故に但だ一切智の名のみ有りて、凡夫に勝るも實あること無きなり。是の故に佛は是れ實の一切智、一切種智にして、是の如き無量の名字あり。或時は、佛を名けて一切智人と爲し、或時は、名けて一切種智の人と爲す。是の如き等は、略して一切智と一切種智との種々の差別を說けり。

　問うて曰く、經中に說くが如くんば、六波羅蜜・三十七品・十力・四無所畏等の諸法を行ずれば、一切智を得。何を以ての故に此の中には、但だ道種智のみを用ゐて、一切智を得と說くや。

　答へて曰く、汝が說く所の六波羅蜜等は卽ち是れ道なり。是の道を知り是の道を行じて一切智を得るに、何の疑ふ所かあらん。　復次に、初發心より乃至道場に坐するまで、其中間に於ける一切の善法は、盡く名けて道と爲す。此道の中に分別思惟して行ずる、是を道智と名く。此の經の後に說くが如く、道智は是れ菩薩の事なり。

　問うて曰く、佛道の事は已に備るが故に、道智と名けず、阿羅漢、辟支佛は、諸の功德未だ備はらず、何を以てか道智と名けざる。

出世間を觀ずるに實に見る可らず、世間が出世間と合するを見ず、亦た出世間が世間と合するを見ず。世間を離れて亦た出世間を見ず、出世間を離れて亦た世間を見ず。是の如くなれば、則ち二識を生ぜず。所謂世間と出世間となり。若し世間を捨てて、出世間を受けざる、是を出世間と名く。若し菩薩能く是の如く知れば、則ち能く衆生の爲に世間と出世間との道を分別す。有漏・無漏、一切の諸道も、亦た是の如く、一相に入る、是を道種慧と名く。

【經】道種慧を以て、一切智を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。一切智を以て。一切種智を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。

【論】問うて曰く、一切智と一切種智とに何の差別ありや。

答へて曰く、有人は言く、「差別なし、或時は一切智と言ひ、或時は一切種智と言ふ」と。有人は言く總相は是れ一切智にして、別相は是れ一切種智なり。因は是れ一切智にして、果は是れ一種種智なり。略說は一切智にして、廣說は一切種智なり。一切智は總じて一切法中の無明の闇を破り、一切種智は種種の法門を觀じて諸の無明を破す、一切智は譬へば四諦を說くが如く、一切種智は譬へば四諦の義を說くが如し。一切智は苦諦を說くが如く、一切種智は八苦の相を說くが如し。一切智は生苦を說くが如く、一切種智は種種の衆生の處處に生を受くるを說くが如し。復次に、一切法を眼色乃至意法と名く。是の諸の阿羅漢辟支佛は、亦た能く總相に、無常、苦、空、無我なり等と知る。是の十二入を知るが故に、名けて一切智と爲す。聲聞辟支佛は、尙ほ盡く別相に、一衆生の生處、好醜、事業、多少を知ること能はず。未來、現在世も亦た是の如し、何に況んや一切衆生をや。一閻浮提中の金の名字の如きすら、尙ほ知ること能はず、何に況んや三千大千世界の一物中の種種の名字、若しくは天語、若しくは龍語、是の如き等の種種の語言に於てをや。金を名くるすら尙ほ知ること能はず、何に況んや金の因緣、生處、好惡、貴賤を知らんや。因つて福を得、因つて罪

答へて曰く、是の道は皆な一道の中に入る。所謂諸法實相なり。初め學するには種種の別あるも後には皆な同一にして差別あること無し。譬へば劫盡きて燒くる時は、一切の所有皆な虛空に同じきが如し。 復次に、衆生を引導するが爲の故に、菩薩は分別して是の種種の道を說く。所謂世間道、出世間道等なり。

問うて曰く、云何なれば菩薩は一相無相の中に住して、是は世間道なり、是は出世間道なりと分別するや。

答へて曰く、世間の名は、但だ顚倒の憶想と虛誑の二法より生じ、幻の如く夢の如く轉火輪の如し。凡夫人は强ひて以て世間と爲す。是の世間は皆な虛妄の中より來る。今も亦た虛妄、本も亦た虛妄なり。其の實は無生無作にして、但だ內外の六情と六塵と和合する因緣より生ず。凡夫の著する所に隨ふが故に、爲に世間と說く。是の世間の種種の邪見の羅網は、亂絲の相著くが如し。常に生死の中に往來す、是の如く世間を知る。何等か是れ出世間道なる。如實に世間を知るは卽ち是れ出世間道なり。所以いかんとなれば智者は、世間と出世間とを求むるに、二事は不可得なればなり。若し不可得なれば、當に知るべし。假に名けて、世間と出世間と爲すことを。但だ世間を破せんが爲の故に、出世間を說くのみ。世間の相は卽ち是れ出世間なり。更に所として復た有ること無し。所以いかんとなれば世間の相は得べからず、是の世間是の出世間の相は、常に空にして、世間法の定相は不可得なるが故なり。是の如く行者は世間を得ず、亦た出世間にも著せず。若し世間を得ず亦た出世間にも著せざれば、愛慢を破するが故に、世間と共に諍はず。何となれば、行者は、久しく世間の空にして所有なく虛誑なることを知るが故に、憶想分別を爲さざればなり。世間を五衆と名く。五衆の相は、假令十方の諸佛之を求むれども、亦た不可得なり。來處なく、住處なく、亦た去處なし。若し五衆の來・住・去の相を得ざれば、卽ち是れ出世間なり。行者は爾の時、是の世間、

樂難道、樂易道なり。復た四修道あり。一には今世の樂の爲に修する道、二には生死の智を修する道、三には漏を盡さんが爲の故に修する道、四には分別の慧を修する道なり。復た四天道あり、所謂四禪なり。復た四種の道あり、天道、梵道、聖道、佛道なり。是の如き等の無量の四道の門あり。

復た五種の道あり、地獄道、畜生、餓鬼、人、天道なり。復た五無學衆道あり。無學戒衆道、乃至無學解脫知見衆道なり。復た五種の淨居天道あり。復た[二]五欲天道あり。復た五の如法語道あり。復た五の非法語道あり。復た五道あり。凡夫道、聲聞道、辟支佛道、菩薩道、佛道なり。復た五道あり、色法を分別するの道、心法を分別するの道、心數を分別するの道、心不相應行を分別するの道、無爲法を分別するの道なり。復た五種の道あり。苦諦所斷道、集諦所斷道、滅諦所斷道、道諦所斷道、思惟所斷道なり。是の如き等の無量の五法道門あり。　復た六種の道あり。地獄道、畜生、餓鬼、人、天、阿修羅道なり。復た六塵を捨する道あり。復た六和合〔舊に六種と云ふ。〕道、六神通道、六種阿羅漢道、六地修道、六定道、六波羅蜜道あり。一一の波羅蜜の各各に六道あり、是の如き等の無量の六道門あり。　復た七道あり、七覺意道、七地無漏道、七想定道、七淨道、七善人道、七財福道、七法福道、七助定道なり。是の如き等の無量の七道門あり。　復た八道あり、八正道八解脫道、八背捨道なり。是の如き等の無量の八道門あり。　復た九道あり、九次第道、九地無漏道、九見斷道、九阿羅漢道、九菩薩道なり。所謂六波羅蜜と方便、成就衆生淨佛世界となり。是の如き等の無量の九道門あり。　復た十道あり。所謂十無學道、十想道、十智道、十一切處道、十不善道、十善道なり。乃至一百六十二道あり。是の如き等の無量の道門あり。是の諸の道を知り、盡く知り遍ねく知る、是を道種慧と爲す。

問うて曰く、般若波羅蜜は是れ菩薩の第一道なり、一相にして、所謂無相なり。何を以てか是の種種の道を說くや。

【二】五治道。別本には「五欲天道」

【經】菩薩摩訶薩は、道慧を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。菩薩摩訶薩、道慧を以て、道種慧を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。

【論】道を一道に名く。一向に涅槃に趣き、善法の中に於て、一心にして放逸ならざれば、道は身念に隨ふ。　道に復た二道あり。惡道と善道、世間道と出世間道、定道と慧道、有漏道と無漏道、見道と修道、學道と無學道、信行道と法行道、向道と果道、無礙道と解脫道、信解脫道と見得道、慧解脫道と俱解脫道なり。是の如き無量の二道門あり。　復た三道あり。地獄道、畜生道、餓鬼道なり。三種の地獄あり、熱地獄、寒地獄、黑闇地獄なり。三種の畜生道あり。地行、水行、空行なり。三種の鬼道あり。餓鬼、食不淨鬼、神鬼なり。三種の善道あり。人道、天道、涅槃道なり。人に三種あり。罪を作る者、福を作す者、涅槃を求むる者なり。復三種の人あり。欲を受け惡を行ずる者、欲を受け惡を行ぜざる者、欲を受けず惡を行ぜざる者なり。天に三種あり。欲天、色天、無色天なり。涅槃道に三種あり。聲聞道、辟支佛道、佛道なり。聲聞道に三種あり。學道、無學道、非學非無學道なり。辟支佛道も亦た是の如し。佛道に三種あり。波羅蜜道、方便道、淨世界道なり。[一]佛に亦復た三道あり、初發意道、行諸善道、成就衆生道なり、復た三道あり。戒道、定道、慧道なり。是の如き等の無量の三道門あり。　復た四種の道あり。凡夫道、聲聞道、辟支佛道、佛道なり。復た四種の道あり。聲聞道、辟支佛道、菩薩道、佛道なり。聲聞道に四種あり。苦道、集道、滅道、道道なり。復た四の沙門果道あり。復た四種の道あり、身を觀ずる實相道、受・心・法を觀ずる實相道なり。復た四種の道あり。未生の惡不善を斷じて、生ぜざらしむるの道、已生の惡を斷じて疾かに滅せしむるの道、未生の善法をして生ぜしむるの道、已生の善法をして增長せしむるの道なり。復た四種の道あり、欲增上道、精進增上道、心增上道、慧增上道なり。復た四の聖種道あり。衣、食、臥具、醫藥を擇ばず、樂んで苦を斷じ、定を修するなり。復た四行道あり。苦難道、苦易道、

【一】淨世界道。別本にては「淨國土道」とす。後の九道に於ても同じ。

して慈悲を生ず、諸佛は能く衆生想を離れて而も慈悲を生じたまふ。所以いかんとなれば諸の阿羅漢、辟支佛の如きは、十方の衆生の相は不可得なるに、而も衆生相を取つて慈悲を生ず、今諸佛は十方に衆生を求むれども不可得なり、亦た衆生相を取らずして、而も能く慈悲を生じたまふを以てなり。無盡意經の中に説くが如し。「三種の慈悲あり、衆生緣、法緣、無緣なり」と。　復次に、一切衆生の中に、唯だ佛のみ盡く不諍法を行じたまふ。若し佛、衆生の中に於て、相を取つて、而して慈悲心を行ぜば、不諍法を行ずと名けず。何となれば衆生は畢竟不可得なるが故なり。聲聞、辟支佛は、名けて盡く不諍法を行ずと爲さず、故に聲聞、辟支佛は、衆生に於ても法に於ても、若しくは相を取るも、若しくは相を取らざるも、應に難ずべからず、そは悉く不諍法を行ぜざればなり。一切智もて能く一切の諸漏を斷じ、能く一切有漏法の中より出でて、能く無漏の因緣を作す、是の法は云何んぞ自ら是れ有漏ならんや。

問うて曰く、無漏智は各各所緣あつて、能く悉く一切法を緣ずる者あること無し。唯だ世俗智のみ有つて能く一切法を緣ず。是の故に一切智は、是れ有漏相なりと說く。

答へて曰く、汝が法中には是の說あらんも、佛法の中の所說に非ず。人の自ら斗を持つて市に入るに、官斗と相應せざれば、人の用ふる者なきが如し。汝も亦た是の如く、自ら汝が法を用ゐて佛法と相應せず、人の用ふる者なし。無漏の智慧は何を以ての故に、一切法を緣ずること能はざらんや。有漏智は、是れ假名虛誑にして、勢力少きが故に、眞實に一切法を緣ずべからず、汝が法中にてのみ、自ら能く一切法を緣ずと說く。　復次に、是の聲聞法の中に十智あり。摩訶衍法の中に十一智あり、名けて如實智と爲す。是の十智は、是の如實智の中に入れば、都て一智と爲る、所謂る無漏智なり。十方の水、大海水の中に入れば、都て一味と爲るが如し。是の大慈大悲は、佛の三昧王三昧、師子遊戲三昧に攝する所なり。是の如く略して大慈大悲の義を說けり。

稱して大と爲す。　復次に、智慧は得道の人乃ち能く信受し、大慈大悲の相は、一切の雜類皆な能く信を生ず。像を見、若しくは說を聞けば、皆な能く信受し、饒益する所多きが如し。故に名けて大慈大悲と爲す。　復次に、大智慧を捨相遠離相と名け、大慈大悲を憐愍利益相と爲す。是の憐愍利益の法は、一切衆生の愛樂する所なり。是を以ての故に名けて大と爲す。是の大慈大悲は持心經の中に說くが如し。大慈大悲に三十二種あり、衆生の中に於て行ず。是の大慈大悲の攝・相・緣は、四無量心に說くが如し。　復次に、佛の大慈大悲等の功德は一切に應ぜず、迦旃延の法の中に、分別して其の相を求むるが如し。上の諸の論議師は、迦旃延の法を用ゐて、分別顯示すと雖も、盡く信受すべからず。何となれば迦旃延は、「大慈大悲、一切の智慧は是れ有漏法、繫法、世間法なり」と說けども、是の事は爾らず。何となれば大慈大悲は名けて、一切佛法の根本と爲すが故なり。云何んぞ是を有漏法、繫法、世間法と言ふべき。

問うて曰く、大慈悲は是れ佛法の根本なりと雖も、故是れ有漏なり。淤泥の中より蓮華を生ずるに、泥も亦た妙なるべしと、言ふことを得ざるが如し。大慈大悲も亦た是の如く、是は佛法の根本なりと雖も、これ無漏なるべからず。

答へて曰く、菩薩の未だ佛を得ざる時の大慈悲を、若し有漏と言はば其の失尙ほ可なり。今佛は無礙解脫智を得たまふが故に、一切の諸法は皆な清淨にして、一切の煩惱及び習は盡したまふ。聲聞、辟支佛は無礙解脫智を得ざるが故に、煩惱の習盡きず、處處の中に疑を斷ぜざるが故に、心應に有漏なるべし。諸佛には是の事なし。何を以てか佛の大慈悲は、是れ有漏なるべしと說かんや。

問うて曰く、我れは敢へて敬はざるにあらざれど、佛は慈悲心を以て衆生の爲の故に生ず、應に是れ有漏なるべし。

答へて曰く、諸佛の力勢は不可思議なり。諸の聲聞、辟支佛は衆生想を離るること能はずして而

は力大なりと言はず、皆是れ衆獸が之に名くるなり。衆生は佛の種種の妙法を聞き、佛は衆生を祐け利せんが爲の故に、無量阿僧祇劫に於て、行じ難きを能く行じ給ふを知る。衆生は是の事を聞見して、而して此法を名けて大慈大悲と爲す。譬へば一人に二の親友あり、罪事の因緣を以ての故に之を囹圄に繫ぐに、一人は須ふる所を供給し、一人は代つて死するに、衆人は能く死に代る者を言つて、是を大慈悲と爲すが如し。佛も亦是の如し。世世に一切衆生の爲の故に、頭目髓腦を、盡く以て布施す。衆生は是の事を聞見して、即ち共に之を名けて大慈大悲と爲す。尸毘王の如きは、鴿を救はんが爲の故に、盡く身肉を以て、之に代るに猶ほ鴿と等しからず。復た手を以て稱(はかり)に攀ち、身を以て之に代へんと欲す。是の時、地は爲に六種に振動し、海水波盪し、諸天は香華を以て王に供養し、衆生は稱へて言はく、「一小鳥の爲に感ずる所乃ち爾なり。眞に是れ大慈大悲なり」と。佛は衆生の名くる所に因るが故に大慈大悲と言ふ。是の如き等の無量は、本生經の中に悉く應に廣く說くべし。

問うて曰く、禪定等の諸餘の功德は、人知らざるが故に、名けて大と爲さず。智慧說法等は能く人をして道を得せしむ、何を以てか稱して大と言はざるや。

答へて曰く、佛の智慧の能する所は、遍く知る者あること無し。大慈大悲の故に、世世に身命を惜まず、禪定の樂を捨てて、衆生を救護したまふは人皆な之を知る。佛の智慧に於ては比類して知るべく、了了と知ること能はず。慈悲心は眼に見、耳に聞き、處處に變化して、大師子吼したまふ、是の故に知るべし。　復次に、佛の智慧は細妙にして諸の菩薩、舍利弗等すら尙ほ知る能はず、何に況んや餘人をや。慈悲の相は眼に見、耳に聞く可きが故に、人能く信受す、智慧は深妙にして測り知るべからず。　復次に、是の大慈大悲は、一切衆生の愛樂する所なり。譬へば美藥は、人の服せんと樂(ねが)ふ所なりが如し。智慧は苦藥を服するが如く、人多く樂(ねが)はず、人多く樂ふが故に、慈悲を

諸佛の慈悲を乃ち名けて大と爲す。　復次に、大慈は大人の心中より生じ、十力・四所無畏・四無礙智・十八不共法は、大法の中より出でて能く三惡道の大苦を破り、能く三種の大樂なる、天の樂、人の樂、涅槃の樂を與ふ。　復次に、是の大慈は十方三世の衆生、乃至昆虫に遍滿し、慈は骨髓に徹し、心は三千大千世界の衆生の三惡道に墮せるを捨離せず。若しくは人の一一に皆代つて、其苦を受け、苦を脫することを得せしめ已つて、五の所欲の樂、禪定の樂、世間最上の樂を以て、自ら恣に之を與へて、皆滿足せしむるも、佛の慈悲に比すれば、千萬分の中の一分にも及ばず。何となれば、世間の樂は、欺誑不實にして、生死を離れざるを以ての故なり。

問うて曰く、法は佛心中に在つて皆な大なり。何を以ての故に、但だ慈悲のみを說いて大と爲すや。

答へて曰く、佛の所有したまふ功德法は、應に皆な大なるべきが故なり。

問うて曰く、若し爾らば、何を以てか但だ慈悲のみを說いて、大と爲すや。

答へて曰く、慈悲は是れ佛道の根本なり。所以いかんとなれば、菩薩は衆生が老病死の苦、身苦、心苦、今世後世の苦等の諸苦の惱むところを見て大慈悲を生じ、是の如きの苦を救うて、然る後に發心して、阿耨多羅三藐三菩提を求む。亦た大慈悲力を以ての故に、無量阿僧祇世の生死の中に於て心厭沒せず、大慈悲力を以ての故に、久しくして涅槃を得べくして而も證を取らず。是を以ての故に、一切諸佛の法の中にて慈悲を大と爲す。若し大慈大悲なければ便ち早く涅槃に入る。　復次に、佛道を得る時、無量甚深の禪定、解脫、諸の三昧を成就し、清淨の樂を生ずるも、棄捨して受けず、聚落城邑の中に入つて、種種の譬喩因緣もて說法し、其の身を變現し、無量の音聲もて一切を將迎し、諸の衆生の罵詈誹謗を忍び、乃至自ら伎樂を作す、皆な是れ大慈大悲の力なり。　復次に大慈大悲の大の名は、佛の作る所に非ず、衆生之に名けたるなり。譬へば師子の大力の如し。自ら

巻の第二十七

初品第四十二……大慈大悲

【經】大慈大悲にして、當に般若波羅蜜を習行すべし。

【論】大慈大悲は、四無量心の中に已に分別せり、今當に更に略說すべし。大慈は一切衆生に樂を與へ、大悲は一切衆生の苦を拔く。大慈は喜樂の因緣を以て衆生に與へ、大悲は離苦の因緣を以て衆生に與ふ。譬へば人の諸子有り。牢獄に繫在して、當に大罪を受くべし。其の父慈愍して、若干の方便を以て、苦を免るゝを得せしむるが如きは、是れ大悲なり、苦を離るゝことを得已つて、五の所欲を以て、諸子に給與するは是れ大慈なり、是の如く等、種種の差別あり。

問うて曰く、大慈・大悲は是の如し、何等か是れ小慈小悲にして、此の小に因つて名けて大と爲すや。

答へて曰く、四無量心の中の慈悲を名けて小と爲す。此の中の十八不共法に次第に說く、大慈悲を名けて大と爲す。　復次に、諸佛の心中の慈悲を名けて大と爲し、餘人の心中のを名けて小と爲す。

問うて曰く、若し爾らば何を以てか、菩薩は大慈大悲を行ずと言ふや。

答へて曰く、菩薩の大慈は、佛に於ては小と爲し、二乘に於ては大と爲す、此は是れ假に名けて大と爲す。佛の大慈大悲は、眞實に最大なり。　復次に、小慈は但だ心に衆生に樂を與ふるを念じて、實には樂事なし。小悲は衆生の種種の身苦、心苦を觀じて、憐愍するのみにして、脫せしむること能はざるに名け。大慈は衆生に樂を得せしめんと念じ、亦た樂事を與ふ。大悲は衆生の苦を憐愍して、亦た能く苦を脫せしむ。　復次に、凡夫人、聲聞、辟支佛、菩薩の慈悲を名けて小と爲し

論議を作れり。「頂を見ること無く」「足下柔軟なる」ことは有りと雖も、是の如きこと甚だ多し。十八不共法の中に有るべからず。不共法は皆智慧を以て義と爲す。是を以ての故に當に知るべし、十八不共法の中には、佛身の力は、十萬の白香象の力の如し（といふこと）、及び神通力等は皆說かず。是を以ての故に當に知るべし、十八不共法の中には、但だ智慧の功德等を說きて、自然の果報の法を說かざることを。　復次に、是の十八不共法は、阿毘曇の分別にして五衆に攝す。「身口に失なく」「身口は智慧に隨つて行ずる」は、是を色衆に攝す。「異想なき」は、是を想衆に攝す。「不定心なき」は、是を識衆に攝す。餘は行衆に攝し、皆四禪の中に在り。佛は四禪の中に道を得、涅槃を得給ふが故なり。有人の言く、四色不共法は色界と欲界の中に攝し、餘は九地の中に攝す。皆な是れ善、皆な是れ無漏法なり。四色法は二緣もて生ず、乃ち因緣と增上緣なり。餘殘の四は緣生なり。四は緣なく、十四は緣あるなり。四の隨心行は心と相應せず、十三は心と相應す。亦た隨心行の一は心と相應せず、亦た不隨心行なり。是の如き等の種種に、阿毘曇の中に分別して說けり。初めに是の如く分別すれど、般若波羅蜜の諸法實相の中に入ればば盡く皆一相なり。所謂る無相なり。佛心に入れば、皆な一寂滅相なり。

を以て、不共と爲すにあらず。聲聞、辟支佛は「常に失なき」の中に於ては分なし。復次に、諸の阿羅漢に力ありと說くも、是の處ある無し、不共法ありと說くも、汝は摩訶衍を信ぜざるが故に、眞の十八不共法を受けず、而も更に重ねて十力等を數ふ。是の事は不可なり。汝が信ずる所の八十種好の如きは、而も三藏の中に無し、何を以て更に說かざる。

問うて曰く、我等は十八不共法を分別して重ねて數へざるなり。何等か十八なる。一には諸法の實相を知るが故に一切智と名け、二には佛の諸の功德の相は解し難きが故に功德無量なり、三には深く心に衆生を愛念するが故に大悲と名く。四には無比智を得るが故に智慧の中に自在なり。五には善く心相を解するが故に定中に自在なり。六には衆生を度する方便を得るが故に變化自在なり。七には善く諸法の因緣を知るが故に記別無量なり。八には諸法の實相を說くが故に記別虛しからず。九には分別籌量して、說くが故に失なしと言ふ。十には十力を成就することを得て、智慧減ずること無し。十一には一切有爲法の中に但だ法聚の無我を觀ずるが故に常に施捨を行ず。十二には善く時と不時とを知る、三乘に安立して常に衆生を觀ずるが故なり。十三には常に一心なるが故に念を失せず。十四には無量阿僧祇劫に善心を深くするが故に煩惱の習なし。十五には眞淨の智を得るが故に、能く法の如くして、其の失を出だすこと有ることなし。十六には世世に敬重せられ尊ばるるが故に、能く頂を見るもの無し。十七には大慈悲心を修するが故に安庠として足を下し、足の下柔軟にして、衆生にして遇ふ者は卽時に樂を得。十八には神通波羅蜜を得るが故に、衆生の心を轉じて歡喜して得度せしむるが故に、入城の時の如きは神通力を現ず。

答へて曰く、是の如き十八不共法は三藏の中の說に非ず。亦た諸餘の經にも說かざる所なり。有人この法を求索するを以ての故に諸の聲聞の論議師の輩、處處より撰集して佛の功德を讚ず、「言に失なく」「慧減ずること無く」「念を失せず」の如きは、皆摩訶衍の十八不共法の中より取り、已つて

名けて十八不共法と爲すや。若し前に說ける十八不共法是れ眞義ならば、迦旃延尼子は何を以て〇故に是の如く說くや。

答へて曰く、是を以ての故に（之を）迦旃延尼子（の說と）名く。釋子の若き(ごと)は則ち是の說を作さず。釋子の說は是れ眞の不共法なり。佛法は無量なり。是の三十六法は、佛法の中に於て、大海の一渧の如し。法も亦た少からず、何を以てか、重ねて數へて十八と爲さん。復次に、諸の阿羅漢、辟支佛、菩薩も亦た能く是處不是處を知り、三世の業果報、及び諸の禪定、乃至漏盡智等を分別す、云何んぞ不共法と言はんや。

問うて曰く、聲聞、辟支佛、菩薩は、盡く知り遍ねく知ること能はず、但だ通明のみあつて力あること無し。獨り佛のみ盡く知り遍ねく知りたまふが故に不共と言ふ。十力の中に說くが如し。

答へて曰く、佛の十力の義を說くに、「盡く知り遍ねく知る」と言はず、直に是處不是處を知ると言ふ。「盡く知り遍ねく知る」と言ふは、是れ諸の論議師の說なり。

問うて曰く、汝は先に自ら摩訶衍經中に、佛自ら菩薩の爲の故に、自ら盡く知り、遍く知るを說きたまふと說くと言へり。

答へて曰く、摩訶衍經の中の說は何ぞ汝を益せん。汝は摩訶衍を信ぜず、以て證と爲すべからず。汝は自ら當に聲聞法を說いて證と爲すべし。　復次に、十力の佛は盡く知り遍く知り給ふと雖も、而も聲聞、辟支佛も少分あり。十八不共法の中には始終すべて分なし、是れを以ての故に眞の不共法と名く。

問うて曰く、十八不共法は、二乘も亦た應に分あるべし。但だ佛は身口念に常に失なく、二乘の身口念も、亦た失無きこと有り、是の如き等、皆應に分あるべし。

答へて曰く、然らず。所以いかんとなれば「常に失無き」が故に、名けて不共と爲す、「失せざる」

佛の智慧は、三世の中に於て、通達無礙なりと說く。空事の爲の故には說くにあらず。　復次に、有人は三世の中に於て、邪見を生じて謂く、「過去の法及び衆生は初ありて初なし」と。若し初あれば則ち新衆生あらん。諸法も亦た因なく緣なくして生ぜん。若し初なくんば亦た後なし。若し初なくんば後中なし、亦た初なきは中あり後ありと名け、前に後なきを初あり中ありと名け、後に中なきを初あり後ありと名く。若し衆生及び諸法に、初なくんば亦た中なく後なし、若し三世なければ、則ち都て所有なし。　復次に、若し初なければ、云何にして一切智人あらんとは、是の如き等の邪見を破するが故に、三世の諸法は一相なり、所謂る無相なりと說くなり。三世を破するは佛智慧と爲さず。

問うて曰く、無相は是を有邊と爲すや。

答へて曰く、若し無相なれば、卽ち是れ無邊なり。說くべからず、難ずべからざるの法なり。云何んぞ有邊と言はん。若し無相の中に相を取れば、是れ無相に非ず、是の無相を名けて、不可得空と爲す。是の中無相も亦た不可得、空も亦た不可得なり。是の故に不可得空と名く。　復次に、佛に二種の道あり。一には福德道なり。人あり、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法等を聞いて、恭敬信樂の心を生ず。二には智慧道なり。人あり、諸法は因緣和合して生ずるが故に、自性ある無しと說くを聞いて、便ち諸法を捨離し、空の中に於て心著せず。月の能く物を潤ほし、日の能く物を熟し、二事の因緣の故に、萬物成就するが如し。福德道と智慧道とも亦是の如く、福德道は能く諸の功德を生じ　智慧道は能く福德道の中に於て、諸の邪見の著を離る。是れを以ての故に佛は諸法は畢竟空なりと說くと雖も、亦三世に通達して無礙なりと說いて而も咎なし　是の如き等、略して佛の十八不共法を說けり。

問うて曰く、若し爾らば、迦旃延尼子は、何を以てか十力・四無所畏・大悲・三不共意止を言つて、

けん。何となれば若し現在惡心の中に住せば、過去に復た戒なし、是を比丘に非ずと爲す。又賢聖の人も心、世俗の中に在れば、是の時は應當に是れ凡夫なるべし。過去・未來・現在の道なければなり。是の如くならば、亦た五逆等の諸罪なく、是の凡夫は過去等の諸罪なけん。所以何んとなれば、是の五逆の罪業は已に過去して、死に及ぶの時、地獄に入るべければなり。是の五逆の罪の未來は業なきが故に報なけん。現在の身は逆罪を爲さず、若し過去することなければ、則ち逆罪なし、若し逆罪なければ何ぞ餘罪あらん。福も亦た是の如し。若し罪福なければ是れを邪見と爲す、禽獸と異なること無し。　復次に、我は過去未來は、現在の相の如くに有なりとは說かず。我は過去は滅すと雖も、憶想を生じて、能く心と心數法とを生ずべきを說けり。昨日の火滅して、今日は憶想念を生ずべく、憶想念を以ての故に、火は便ち有なるべからざるが如し。若し薪を積むを見れば、當に火を燃すべきを知り、亦た心想の念を生ず。明日の火も、過去の火の如し。今の心念の火を以て、火は便ち有りとすべからず、未來世の事も亦た是の如し。現在の心は、一念の時も住せずと雖も、相續して生ずるが故に、能く諸法を知る、內には現在の意を以て因と爲し、外には諸法を以て緣となし、是の因緣の中に意識の用を生ず。意識は自在にして過去・未來・現在の法を知り、但だ自ら現在の心心數法を知らず、餘は悉く知る。

問うて曰く、般若波羅蜜の如相品の中には、三世は一相なり、所謂る無相なりとす。云何なれば佛の智慧は、三世を知ること通達無礙なりと言ふや。

答へて曰く、諸佛に二種の說法あり。先きに諸法を分別して後、畢竟空を說きたまふ。若し三世の諸法に通達無礙なりと說くは、是れ分別の說なり。若し三世は一相にして無相なりと說かば、是は畢竟空を說くなり。　復次に、一切智人に非ずんば、三世の中の智慧に於て礙あり、乃至觀世音、文殊師利、彌勒、舍利弗等の諸の賢聖は、三世の中に於て智慧に皆礙あり。是の因緣を以ての故に、

ならんや。

ぜず未だ和合せず現在は、乃至一念の中にも、住する時なし。云何ぞ能く三世を知つて、通達無礙なりと說きたまへり、此の言豈に虛しからんや。

答へて曰く、佛は過去・未來・現在に、通達無礙なりと說きたまへり、此の言豈に虛しからんや。復次に、若し過去未來なくして、但だ現在の一念の頃のみあらば、佛は亦た無量の功德を成就したまふことを得ず。十種の智の如きは、是れ十力なり。是の時、亦た一心に十智あることを得ず。若し爾らば、佛は亦た十力を具足したまふことを得ず。是の因緣を以ての故に、過去・未來あることを知る。

問うて曰く、若し過去・未來・現在皆な有りとせば、何等か是れ無なるや。佛は四諦を說き、苦諦に無常等の相を觀じたまふ。無常とは、生滅敗壞して不可得なるに名く。若し過去の法、今實有ならば、名けて無常敗壞不可得と爲さず。復次に、若し過去・未來・現在皆な有ならば、便ち常に墮す。何となれば是の法は、未來世の中に在つて、定んで有ならば、轉じて現在に來り、現在より轉じて過去に入ること、人が一房より一房に入るを、「人を失ふ」とは名けざるが如し。

答へて曰く、若し失せずんば何の咎かある。

問うて曰く、若し無常なくんば、罪なく福なく、生なく死なく縛なく解なからん。罪は殺等の十不善道に名く。若し無常なくんば、殺等の罪はなし、分別邪見の中に說くが如し。「刀は身に在ること、七分の中を過ぐれば、惱害する所なし」と。福は不殺等の十善道に名け、無常は分別生死に名く。若し無常なくんば、亦た生死なく、亦た縛もなく、亦た解もなからん。是の如き等の無量の過咎あり。

答へて曰く、諸法は三世の各各に相あり。過去の法は過去の相あり。未來の法は未來の相あり、現在の法は現在の相あり。若し過去・未來に、現在の相ありとせば、應に是の難あるべし。而るに今、過去・未來・現在には各自らの相あり。　復次に、若し實に過去・未來なくんば、亦た出家の律儀な

ち二人と共に諍はん。所謂一切無の者と、半有半無の者となり。若し我一切無の見を受くれば、亦た二人と共に諍はん。所謂一切有の者と、半有半無の者となり。若し我半有半無を受くれば、亦た二人と共に諍はん。所謂一切無の者と一切有の者となり。鬪諍するが故に相謗り、相謗るが故に惱見を致し、是の諍ひ、謗り、惱みの故に、是の無の見を捨て、餘の見も亦た受けず、受けざるが故に即ち道に入る」と。若し一切諸法の空に著せず、心に諍を起さず、但だ結使を除かば、是を名けて實智と爲す。若し諸法の空相を取つて諍を起し、諸の結使を滅せず、是の智慧に依止するは、是を實智には非ずと爲す。佛の所説の如きは、衆生を度せんが爲の故に説くところあり。是れ實ならざること無し。但だ衆生は中に於て、著と不著とあるが故に、實と不實とあり。是の如き種種の因縁の故に、佛の身・口・意業は過失あること無し。是の故に佛の身口意は先きに知つて而して後智慧に隨つて行じたまふと説く。

問うて曰く、初に、身に失なく口に失なく念に失なしと説き、今は復た身・口・意業は智慧に隨つて行ずと説く。義に何の差別ありや。

答へて曰く、先の三種の失なきことは因縁を説かず、今は因縁を説き、智慧に隨つて行ずるが故に失せず、若し先きに籌量せずして、而も身・口・意業を起さば則ち失あらん。佛は先づ智慧を以て身・口・意業を起したまふが故に失なし。　復次に、佛は三種の淨業、三種の寂靜業、三の不護業を成就したまふ。有人は疑つて言く、「佛は何の因縁あつてか是の如き業を成就し給ふや」と。是の故に佛の言はく、「我が一切の身口意業は、先づ智慧を以てし、然る後に智慧に隨つて行ず」と。

「佛は智慧を以て、過去・未來・現在世を知りたまふこと、通達無礙なり」とは、此の三種の智慧は、三世に於て、通達無礙なるが故に、三業は智慧に隨つて行ずるなり。

問うて曰く、過去の諸法は、已に滅し已に盡きて復た有る所なく、未來世の諸法は、今來らず生

ざるが故に、先づ所得あることを求め、然して後に能く捨す、是の人の爲の故に、佛は諸の善法を說いて、諸の悪法を捨てしめたまふ。有る人は、信等の諸根を成就せるが故に、諸法に於て所得あるを求めず、但だ生死の道を遠離せんことを求む。是の人の爲の故に、佛は諸法は空にして、所有なしと說きたまふ。此の二は皆な實なり。無名指は亦た長く亦た短し、中指を觀ずれば即ち短く、小指を觀ずれば則ち長く、長短皆な實なるが如し。有と說き、無と說くも、亦た是の如く、有と說くは、或時は是れ世俗、或時は是れ第一義なり。無と說くも、或時は是れ世俗、或時は是れ第一義なり。佛は是の有我、無我は皆な是れ實なりと說き給へり。

問うて曰く、若し是の二事皆な實ならば、佛は何を以ての故に、多く空を讃歎して、有を毀訾し給ひしや。

答へて曰く、空にして所有なきは是れ十方諸佛・一切賢聖の法藏なり。般若波羅蜜囑累品の中に說くが如し。「般若波羅蜜は、是れ三世十方の諸佛の法藏なり。般若波羅蜜は即ち是れ無所有の空なり」と。佛が或時、法有りと說き給ひしは、衆生を敎化せんが爲の故なり。人は後に皆な當に無所有の法藏の中に入るべし。

問うて曰く、若し爾らば、云何なれば般若波羅蜜の中に、若し五衆は空にして、無所有なりと觀ずれば、是は道に非ずと言ふや。

答へて曰く、是の般若波羅蜜の中には、有も無も皆な無しと說く。長爪梵志經の中に說くが如くんば三種の邪見あり。一には一切は有なりとし、二には一切は無なりとし、三には半有半無なりとす。佛、長爪梵志に告げたまはく、「是の一切有の見は、欲染の爲に瞋恚・愚癡の縛する所と爲り。一切無の見は、不染・不瞋・不癡なるが故に縛せざる所たり、半有半無は有は、上の有縛に同じく、無は上の無縛に同じ」と。三種の見の中に於て聖弟子は是の念を作さく、「若し我一切有の見を受くれば、則

に說くや。

答へて曰く、然らず、佛法に二種の空あり、一には衆生空、二には法空なり。無我を說くは、衆生空を示し、我・所の法ある無しと說くは、法空を示す。有我を說くは、假名の相を知つて、我に著せざる者に示し、無我を說くは、五衆の中に於て、我相に著する者の、是の著我を破せんが爲の故に說く。但だ五衆あり、無常と苦と空と無我と寂滅涅槃となり、是は有と名く。 復次に、二種の斷見あり。一には後世に罪福の苦樂を受くることなし。（とする者には）爲に我有り、今世より後世に至るまで、罪福の果報を受くと說く、二には一切法は、皆な空にして著無しとす。是れ邪見なり。是の衆生の爲の故に、一切の法は有り、所謂有爲・無爲法なりと說く。 復次に、大利根ならざる衆生には、爲に無我と說き、利根にして深智の衆生には、諸法は本來空なりと說く、何となれば無我なれば、則ち諸法を捨すればなり。〔偈に〕說くが如し。

『若し無我を了知せる、是の如きの人あれば、 法は有りと聞くも喜ばず、法は無し（と聞くも）

亦た憂へざるなり。』

我と說けば、一切法の所依止の處なり、若し無我と說けば、一切法の依止する所なし。復次に、佛法に二種の說あり、若し了了として說けば、一切諸法は空なりと言ひ、若し方便して說けば、則ち無我なりと言ふ。是の二種の說法は、皆な般若波羅蜜の相の中に入る。是を以ての故に佛は經の中に說きたまはく、「涅槃の道に、趣くことは皆な同じく一向にして、異道あること無し」と。 復次に、我あり、法ありとは、多く在家の者の爲に、父母・罪福・大小の業報ありと說く。所以いかんとなれば在家の人は、多く涅槃を求めざるが故に、後世の果報に著すればなり。出家人の爲には、多く無我・無法を說く。所以いかんとなれば出家の人は、多く涅槃に向ふが故にして、涅槃を求むる者は、一切法を受けざるが故なり。自然滅は是れ涅槃なり。 復次に、有る人は、信等の諸根未だ成就せ

佛が處處に有我と說き、處處に無我と說き給へるは、若し人佛法の義を解して、假名を知る者には說いて有我と言ひ、若し人佛法の義を解せず、假名を知らざる者には無我と說き給ひしなり。復次に、佛は衆生の斷滅の見に墮せんとする者の爲には、說いて、「我あり後世の罪福を受く」と言ひ、若し人の常見に墮せんとする者には、爲に說いて、「我なく、作者、受者なく、是の五衆の假名を離れて、更に一法として自在なる者無し」と言ふ。

問うて曰く、若し爾らば何等をか實と爲すや。

答へて曰く、無我は是れ實なり。法印の中に說くが如し。「一切の作法は無常なり、一切法は無我なり、寂滅は是れ安隱なり、涅槃の法印を名けて、諸法實相と爲す」と。若し人善根未だ熟せず、智慧利からざれば、佛は爲に是の深き無我の法を說きたまはず、若し爲に說かば、衆生は即ち斷滅の見中に墮せん。

問うて曰く、若し爾らば、迦葉の問の中に佛の說き給へるが如くんば、「我も是れ一邊なり、無我も是れ一邊なり。此の二邊を離るるを名けて中道と爲す」と、今は云何なれば無我は是れ實にして有我は方便の爲に說くと言ふや。

答へて曰く、無我を說くに二種あり、一には無我の相を取つて無我に著す。二には我を破して取らず、無我にも亦た著せず、無我をも自然に捨離す。先に說く無我の如きは、則ち是れ邊なり、後に說く無我は是れ中道なり。　復次に、佛が有我・無我を說き給ふに二の因緣あり、一には世俗を用ひて說くが故に有我、二には第一實相を用ひて說くが故に無我なり。是の如き等、有我、無我を說くも咎なし。

佛が處處に諸法は有なりと說き、處處に諸法は無なりと說くは。

問うて曰く、有無を別說すべからず、有は即ち是れ有我、無は即ち是れ無我なり。何を以てか更

こと能はず。已に食して殘れる者を、佛與へたまへば、能く消す。是を以ての故に實には、食したまはずと雖も、人を度せんが爲の故に、食を受け鉢を畜ふることを現じたまふ。

佛は十四難に答へたまはずとは、佛に四種の答あり。一には定答、二には分別義答、三には反問答、四には置答なり。此の十四難の法は應に置答すべし、又復た若し利益する所の事あれば、則ち答へたまふ。外道の問ふところは涅槃の爲ならず、疑惑を增長するが故に置答を以てし給ふ。必ず所益ありと知れば分別して答を爲し、必ず所益なければ置いて答へたまはず。是の因緣を以ての故に、佛は是れ一切智人なることを知る。　復次に、若し佛は三種の法、(卽ち)有爲法と、無爲法と、不可說法とを說けば、則ち已に一切法を說き竟ると爲す。　復次に、是の諸の外道は、常見に依止し、滅見に依止するが故に、問うに常と滅とを以てするも、實相は無なるが故に、佛は答へたまはず。外道の所見たる、常相と無常相の如きは是の事なし。何となれば外道は相を取つて著す、是れ常(見)、滅(見)なるが故なり。佛は常、無常の相を說きたまふと雖も、但だ治の爲に用ふるが故のみ。　復次に、若し人說いて無なる者を有と爲し、有なる者を無と爲さば、是の如きの人は、卽ち是れ過罪なり、佛の答へ給はざるも、則ち咎なし。日の天下を照らせども、高き者を下からしめ、下き者を高からしむること能はず、但だ以て顯現するのみなるが如し。佛も亦た是の如く、諸法に於て所作なく、諸法の有なる者を有と說き、無なる者を無と說きたまふ。生は老死に因緣たり、乃至無明は諸行に因緣たりと說きたまふが如し。佛あるも佛なきも、是の因緣の法は相續して常に世間にあり。諸佛出世して、衆生の爲に、此の法を顯示し給ふのみ。　復次に、若し常(見)、滅(見)に答ふれば、則ち品ありと爲す。石女、黃門の兒の、[三]脩短黑白は、何の類ぞと問はば、此の問には、則ち答ふべからざるが如し。十四難も亦た是の如く、但だ常(見)、滅(見)を以て本と爲すが故に問ひ、常(見)、滅(見)なきが故に佛は答へたまはず。是の如き等の種種の因緣の故に、佛十四難に答へ給はざるも咎なし。

【三】 修短。長短の意。

じたまふも、其の實は食したまはず。

問うて曰く、云何なるが是れ方便なるや。

答へて曰く、佛は人を度せんと欲して、人法を行ずることを示し給ふ。若し爾らずんば、人は、「佛は人に非ざるを以て、我等云何んぞ能く其の法を行ぜん」と。　復次に、有人は、布施に因つて度を得。是の人の爲の故に、佛は其の食を受け給ふに、便ち是の念を作さく、「我が食は佛身を助益することを得たり」と、心大に歡喜し、歡喜を以ての故に佛語を信受す。大國王が臣下を請食せしむるに、王は須ゐずと雖も、彼の人を攝するが爲に、多少の食を爲して、其をして歡喜せしむるが如し。是の如き等の因緣もて、佛は食を受くることを現じたまへり。

問うて曰く、若し佛食したまはずんば、受くる所の者は何處に在るや。

答へて曰く、佛事は不可思議なり、問を致すべからず。　復次に、有人は、佛の食を得て度する者あり。聲を聞き、色を見、身に觸れ、香を聞いて度を得るあり。食を須ゐて度を得る者には、佛は食を以て之に與へ給ふ。密迹金剛經に說くが如し、「佛は食を以て口中に著けたまふに、天に佛道を求むる者あり、持ちて十方に至つて之を施す」と。

問うて曰く、若し爾らば、念僧の中に、佛の食は衆生の能く食する者あること無しと說けり、此の義云何。

答へて曰く、佛與へたまはざれば、能く食すること有ること無し、今は佛之を施したまふ、是の故に食することを得。何を以てか之を知るやと云ふに、佛が馬麥を食したまふ時は、食を以て阿難に與へ給ふ。又沙門二十億耳は、好羹を以て佛に上つるに、佛は殘羹を以て、頻婆娑羅王に與へ給へり。是の故に佛受け已つて、與へたまへば食することを得、與へ給はざれば、則ち消すること能はざるを知る。　復次に、佛の爲に食を設けたてまつるに、佛未だ食したまはずんば、人は消する

價亦た十萬兩金に直いせり。佛、阿難に勅して、此の衣を持ち去り、割截して僧伽梨を作らしめ、作り已れば、佛、受けて著したまへり。是を異れりと爲す。

問うて曰く、佛は是に因みて諸の比丘に告げ給はく、「今日より若し比丘あり、一心に涅槃を求め、世間を背捨する者、若し著するを欲せば、價直十萬兩金の衣を著することを聽さん。百味を食することを聽さん」と。食衣は異れども、而も後に聽したまひ、鉢のみ獨り聽したまはざりき。

答へて曰く、我先に已に石鉢の因緣を說けり、今當に更に說くべし。佛鉢は人より受けたまはず、佛初めて道を得て、食時に器を須ゐんと欲したまふに、四天王は、佛の心念を知り、四鉢を持ち佛に上つれり。三世諸佛の法は、皆な應に四天王あつて鉢を上るべし。爾の時に、未だ衆僧あらず、云何んぞ聽すと言はん。後若し聽したまふとするも、人の石鉢を與ふること無し。又閻浮提は、石鉢を好まざるが故に、人の與ふる無し。　復次に、佛說き給はく、「比丘は常に當に功德を覆ふべし」と。若し石鉢を受けば、人は、「天龍の邊より得る」と謂ん。若し人をして作らしめば其の工既に難し。又恐らくは人言はん、「此の比丘は佛と功を齊しうせんと欲す」と。衣を聽す所以は、若しくは人有りて、「佛は僧中に在つて、檀越の好衣を受け、獨り著て而して比丘には聽し給はず」と言はん。是の故に佛は比丘に著ることを聽し給へり。亦た自ら著たまふこと無くんば、施者は有り難く、著る者は得難きを以ての故なり。若し不清淨の比丘ならば、人の與へざる所、清淨の比丘は、少欲知足なるが故に著せず。佛は人の疑を斷ずるが故に著衣を聽し、鉢の中には望なきより是の故に聽し給はざりき。

問うて曰く、經中に說くが如くんば、「佛の金剛身は仰食を恃まず」と。何を以てか鉢を畜ふるや、

答へて曰く、佛法には二道あり、一には聲聞道、二には佛道なり。聲聞法の中にては、佛は人の法に隨つて食噉し給ふ所あり、摩訶衍法の中には、方便もて人と爲るが故に、噉ふ所あることを現

ることを得ず、亦た若し淨施を作して得とも畜ふることを得ず。價を用ふるは貴からざるが故なり。木鉢は垢膩を受けて不淨なるが故に、畜ふることを聽さず、三種の鉢には是の如き事なし。

問うて曰く、瓦と鐵との鉢も皆な亦た垢膩を受くること、木鉢と異なること無し、何を以てか畜ふることを聽すや。

答へて曰く、瓦・鐵の鉢も熏ぜざれば亦た聽さず、熏ずれば垢膩を受けざるを以ての故なり。石には麁細あり、細なる者は垢膩を受けざるが故に、世尊は自ら畜へ給へり。比丘に畜ふることを聽したまはざる所以は、其の重きを以ての故なり。佛の乳哺の力は、一萬の白香象に勝れり、是の故に以て重しと爲したまはず。諸の比丘を慈愍するが故に聽したまはざりしなり。

問うて曰く、侍者の[八]羅陀、[九]彌喜迦、須那[一〇]剎羅多、[一一]那伽婆婆羅、阿難等は、常に世尊に侍從して、應器を執持せり、何を以てか憐愍せざりしや。

答へて曰く、侍從は佛鉢を執持すと雖も、佛の威德力を以ての故に、又佛を恭敬し尊重したてまつるが故に、重しと爲すを覺らず。又阿難は身力も亦た大なればなり。復次に、細なる石鉢は得難きを以ての故に、麁なる者は垢膩を受くるが故に、用ふることを聽し給はざりき。佛鉢は四天王四山の頭より自然に生ずるが故なり。餘人は此の自然の鉢なく、若し求め作ることは甚だ難く、妨げ廢せらるること多し、是の故に聽し給はざりき。又佛を弟子と異らしめんと欲するが故に、佛は石鉢を用ゐ給へり。又國王の如きは人に尊重せられ、食器も亦た異る。人ありて佛鉢の異るを見て、倍倍尊重を加へ、供養し、信心淸淨なり。

問うて曰く、若し鉢にして應に異るべくば、衣は何を以てか同じきや。

答へて曰く、佛衣も亦た異れり。佛は初めて成道したまひし時、迦葉の衣は應に佛の著する所なるべきことを知り給へり。迦葉の衣は價直十萬兩金なり。次で後に[一二]耆域は佛に深摩羯籤衣を上れり、

【八】羅陀。(Rādha)舍衞城の貧しき老衰せる婆羅門にして、舍利弗、昔一匙の施を受けたるを思ひて出家を許す。

【九】彌喜迦(Meghika)釋迦族の王の子、出家して佛の侍者となる。

【一〇】須那剎羅多。(Sunakṣatra)羅多は多羅の誤なるべし。論二十四、三十三、及び百に、須那剎多羅と出づ。善宿と譯す。既註。

【一一】那伽婆婆羅。(Nāgasamāla)象護又は龍護等に譯す。釋種にして佛の侍者たりし事あり。

【一二】耆域(Jīvaka-Komārabhṛtya)耆域藥王といふ。佛の病を治し、貴衣を獻ず。

て之を念ひ給ふことを知らず、是の故に佛語を受けず。是を以ての故に佛は、「汝は是れ狂愚人なり」と言ひしなり。　復次に、有人は苦切の語を得て、便ち歡喜して言く、「親しく我を愛し給ふが故に是の如く言ふ」と。是を以ての故に佛は狂愚人と言ひしなり。

佛は提婆達に、「汝は狂人・死人・嗽唾人なり」と語げ給へり。狂人とは、提婆達は罪重くして當に阿鼻地獄に入るべきを以ての故に、三種の苦切語あり。死人とは、人に似て而も諸の善法を集むること能はざるが故なり。亦た提婆達の剃頭法服は、聖人の如くに似たるも、內に慧命なきを以ての故に死人と名く。死人の如き種種に莊嚴するとも轉轉に爛壞して、終に活かしむ可らず。提婆達も亦た是の如く、佛は日日種種に敎化し給へども、惡心轉た劇しく、惡不善法日日に轉た增し、乃至三逆罪を作せり。是を以ての故に名けて死人と爲す。嗽唾人とは、提婆達は利養を貪るが故に、化して天身の小兒と作り、阿闍世王の抱中に在り。王は其の口を嗚ばせ、唾を與へて嗽がしむ。是を以ての故に嗽唾人と名く。

問うて曰く、提婆達は禪定を得て已に欲を離る、云何なれば復た他の唾にて嗽ぐや。

答へて曰く、是の人は惡心亦た深く、其の根も亦た利なり、欲を離るるが故によく變化す。唾を嗽ぐ時は便ち利根を失せるが故なり。求むる時は便ち得、是を以ての故に嗽唾人と名く。狂の義は先に說くが如し。　復次に、提婆達、佛に白さく、「佛は已に老い、常に閑靜を樂ひたまふ、林中に入つて禪を以て自ら娛とし、僧は我に付したまふべし」と。佛の言はく、「舍利弗目揵連等の大智慧ある、善軟清淨の人にすら尙ほ僧を屬せしめず、何に況んや汝、狂人・死人・嗽唾人をや」と。是の如き等の因緣の故に、佛は諸法に於て著する所なしと雖も、敎化の爲の故に苦切語を現じ給ふ。

佛が比丘に八種の鉢を用ふることを聽したまはざるは、金銀等の寶鉢は寶物なるを以て、人貪るが故に、得難きが故に、貪著するが故に、此の寶物を畜ふることを聽さず、乃至手もて名寶を擧ぐ

し。　復次に、苦切の語に五種あり。一には但だ綺語し、二には惡口し亦た綺語し、三には惡口し亦た綺語し妄語し、四には惡口し亦た綺語し妄語し兩舌す。五には煩惱なき心の苦切の語にして、弟子に善と不善法とを分別することを敎へんが爲の故なり、衆生を苦難の地より拔かんが故なり。四種の惡語を具する者はその罪重し、三二一は轉轉して輕微なり、佛弟子、白衣にして初道若しくは二道を得れば奴婢を使令するが故に、惡口すること有るも不善道に非ず。攝律儀に二種あり、若しくは綺語、若しくは惡口綺語なり。阿那含、阿羅漢は煩惱なくして惡口を起す。但だ淨心を以て惡言を須ゐて敎化するが故に惡口綺語す。阿那含、阿羅漢すら尙ほ煩惱の起す所の惡口なし、何に況んや佛をや。

復次に、佛に若し苦切の語あるも應に疑ふべからず、難じて「佛は惡心もて苦切の語を起こす」と謂ふべからず。所以いかんとなれば佛は惡心久しく已に滅し、但だ深心を以て衆生を念すること、慈父の子を敎ふるが如し。苦言ありと雖も、子を成就せしめんが爲の故にして、是れ惡心に非ず。佛は菩薩たりし時、三毒未だ盡きず、仙人と作り、羼提と名けき、惡王に其の耳鼻手足を截られて、而も惡心を生ぜず、惡言を出さず。爾の時未だ得道せざるにすら尙ほ惡心なし、何に況んや、阿耨多羅三藐三菩提を得、三毒已に盡き、一切衆生に於て、大慈悲を具足し給ふに、云何んぞ佛に惡心の苦切語ありと疑はんや。　復次に、佛若し狂愚人と言ふも、是は軟語實語なり。所以いかんとなれば、三毒發るが故に、名けて狂愚と爲し、亦た善事を以て利益するも、而も肯受せず、佛心を解せず、佛語を受けざる、是を狂愚と爲すを以てなり。　復次に、佛は內に常に無我の智慧を行じ、外に常に諸法の空を觀じたまふ。是の如くの者に云何んぞ惡口あらん。是の衆生は、佛心を解せざるが故に、佛語の短を求むるなり。若し衆生、佛が深心を以て憐愍し給ふことを解せば、假令大火に入ることを敎へたまふとも、即時に歡喜して入ること、人の熱悶する時、淸涼の池に入るが如くならん。何に況んや但だ語るを而も受けざらんや。衆生は惡魔の爲に覆はるるが故に、佛の深心を以

たまふ。是に因つて外道は大に信向を得て皆な佛法の中に入れり。是れ智慧の因縁に身業隨つて行ずるなり。

佛が舌相、陰藏相を現したまふは、有人、佛身の二相を疑ひ、而も是の人は得道すべくして、疑ふが故に得ず、是の故に二相を現じたまふ。舌を出だして面を覆ひ、舌大なりと雖も、還たび口中に入り、而も亦た妨なく、見る者疑を斷ぜり。有人は、出舌の相を見て、若しくは輕慢心を生ず。（是の故に）舌を出だすこと、小兒の相の如くし、還た口に入れて、法を說き、妨なきことを見せしむるに、恭敬を起し、未曾有なりと歎ず。有人疑ふらく、「佛の陰藏は現ぜず」と。爾の時に世尊は寶象、寶馬を化作し、之を指示して、「陰藏の相の現ぜざること正に是の如し」と言へり。有人の言く、「佛は陰藏の相を出して、但だ一人に示せり。其は疑を斷ずるが故なり」と。論議師の輩の言く、「佛は大慈悲なり、若し人ありて佛の陰藏の相を見ば、能く善根を集め、阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、及び能く大に歡喜せん、信敬の心を生ずる者には皆な見ることを得せしめて、其の疑心を斷ず。是を除いては皆な見ることを得ず」と。佛は大悲を以て衆生を度せんが爲の故に、三種の覆ひより出でて。暫らく現ずること電光の如し。是の衆生は、見已つて、佛に大悲心あることを信じ、實に戒法に於て取らず、著せず。是の如き等の因緣の故に、二相を現じたまふ、戲に非ず、羞なきに非ざるなり。

佛は苦切の語もて、諸の比丘に「汝は狂愚人なり」と〔宣へるは〕。苦切の語に二種あり、一には垢心にして瞋り罵り、二には衆生を憐愍し敎化せんと欲するが故なり。離欲の人には垢心にして瞋り罵ること有ること無し、何に況んや佛をや。佛は憐愍し敎化したまふが故に苦切の語めり。衆生あり、軟語もて、善く敎ゆれども道に入らざれば、檢要して苦切の麁敎を須ひ、乃ち法に入ることを得。良馬は鞭影を見て便ち去り、鈍驢は痛手を得て乃ち行くが如し。亦た瘡に、軟藥唾呪を得て便ち差ゆる有り。瘡に刀にて其の惡肉を破出し、塗るに惡藥を以てすれば、乃ち愈ゆる者有るが如

求むれども、而も僞に說かず」と。又此の經の如きは、佛、外道の衆中に往いて說法したまふに、信受せざりきと言はず、佛は遙に外道が大會して高聲に論議するを見、餘處に至らんと欲して廻往して之に趣きたまふに、論議師の輩は、遙に佛の來りたまふを見て、自ら其の衆に語るらく、「汝等皆な默せよ、佛は是れ寂靜を樂しむ人なり。汝等が靜默なるを見ば、或は能く此の中に來らん」と。衆即ち默然たり。佛は其の衆に入つて婆羅門の三諦[七]を說きたまふに、外道の衆は皆な默然たり。佛是の念を作したまはく、「狂人輩、皆な惡魔の爲に覆はる、是の法は微妙なり、乃至一人として、試に弟子と作る者あること無し」と。是の念を作し已つて座より去りたまふ。是の人は魔の蔽ふより離るることを得て、便ち自ら念ずらく、「我等は妙法を聞くことを得たり、云何んぞ以て自ら利せざらん」と。即ち皆な佛所に往詣して、佛弟子と爲り、道を得て苦を離れき。復次に、外道の弟子は、其の師を難かるが故に敢へて佛所に到らず。是の故に佛は自ら、其の衆中に入り給ふに、衆は法を聞くことを得て信受堅固となり。復た師を難からずして弟子と爲ることを得、或は道跡を得。是の如き等の種種の智慧因緣あり、この故に往いて外道の衆に入り給ふ。

復次に、薩遮祇尼揵子は銅鍱を腹に絡き自ら誓つて言く、「人にして我が難(問)を得て、汗を流さず、破壞する者あること無し。大象乃至樹木瓦石も、我が難聲を聞かば、亦た皆な汗を流さん」と。是の誓を作し已つて、佛所に來至し、佛と論議す。佛之に質問し給ふに皆な答ふるを得ること能はず、汗流れて地を淹ひ、體を擧げて、漬るが如し。佛、尼揵に告げたまはく、「汝は先に誓言すらく、我が難を聞く者にして、而も汗を流さざるものあること無し」と。汝は今汗流れて地を淹へり、汝試みに觀よ。佛に汗相あるや、不やを」と。佛は時に鬱多羅僧を脫いで之に示して言はく、「汗何處にか在る」と。復次に、有人の言く、「或は頭は汗するも、身には汗せざる者あり、佛は頭には汗せずと雖も、身には必らず汗あらん」と。是を以ての故に、佛は鬱多羅僧を脫いで其の身を示し

【七】婆羅門三諦。喜、憂、闇の三。

行ずと言ふ。聲聞、辟支佛には是の事なく、心に故らに善を作し、然る後身・口・業は善なり、意業は或時は無記なり、智慧に隨はずして自ら生ず、何に況んや餘人をや。憍梵波提比丘の如きは阿羅漢を得と雖も、自ら食せるを吐いて更に食せり。是の業は智慧に隨はず。又[六]摩頭波斯吒比丘阿羅漢の如きは梁棚、或は壁上・樹上に跳び上れり。又畢陵伽婆蹉の如きは恒神を罵つて小婢と言へり。是の如き等の身・口の業は先に智慧なく、亦又智慧に隨つて行ぜざるなり。佛には是の事なし。

問うて曰く、若し爾りとせば、佛の或時の身・口業は、亦た智慧に隨つて行ぜざるに似たり。何となれば、外道の衆中に入つて說法するに、都て信受する者なく、又復た、一時大衆の中に在つて說法するに、胸臆を現はして尼揵子に示せり。又復た、人の二相を見ざるを疑ふが爲の故に、大衆の中に在つて、舌相と陰藏相とを現はせり、又復た、諸の弟子を「汝は狂愚の人なり」と罵り、提婆達を「汝は是れ狂人・死人・嗽唾人なり」と罵れり、佛は結戒して八種の鉢は蓄ふべからず、比丘には二種の鉢(即ち)若しくは瓦、若しくは鐵を用ふることを聽し、而も自らは石鉢を用ふ。有時は、外道難問するに、佛は默然として答へず、又佛は處處に有我と說き、處處に無我と說き、處處に「諸法有り」と說き、處處に「諸法無し」と說けり。是の如き等の身口業は智慧に隨つて行ぜざるに似たり。身口業は意業を離れず、意業も亦た智慧に隨つて行ぜざること有るべし、云何んぞ常に智慧に隨つて行ずと言ふや。

答へて曰く、是の事は然らず。是の諸事に於て皆な先に智慧あり、然る後諸業は智慧に隨つて行じたまふ。何となれば、佛は外道の衆中に入るに(彼等は)今世には信ぜず受けざるを知り給ふと雖も、後世の大因緣を種うるを以ての故に、又復た、外道が謗つて、佛は自ら高憍なりと言ふを止めんが爲に是を以ての故に、自ら往いて其の衆中に入り給ふ。又外道の言く、「佛は自ら大悲あつて普ねく一切を濟ふと言ひつゝ而も但だ自らの四衆の爲にのみ說法す。我等も亦た是れ出家にして道を

【六】摩頭波斯吒。(Madhuvasiṣṭha)最勝蜜と記す。論二十七、の摩頭婆和吒。八十四の蜜婆和吒と同じ。

は、八忍、世間の正見、五邪見なり。亦た知亦た見なる有りとは、餘殘の諸の慧なり。若し知を說けば則ち見を攝せず、若し見を說けば則ち知を攝せず、是の故に知と見と則ち具足すと說く。復次に、人に從つて誦讀し分別し籌量するが如きは是を知と名け、自身に證を得るは是を見と名く。譬へば耳に其の事を聞き、猶尙疑あるは是を知と名く。親しく自ら目に覩て、了了にして疑なき、是を見と名くるが如し。解脫の中の知と見とも亦た是の如く差別す。復次に、有人の言く、「阿羅漢にして自ら解脫の中に於て、疑つて自ら了ること能はずんば、是の阿羅漢は、阿羅漢に非ず」と。是を以て、佛は是の如きの邪見を破せんが爲の故に、諸の聖人は解脫の中に於て、亦た知亦た見と說きたまふ。諸の阿羅漢は解脫知見を得と雖も、解脫知見に減あり。一切智を得ざるが故なり。上上の智慧根を成就せざるが故なり。諸法の念念に生滅する時、別相の分別を知らざるが故なり。佛は上上の智慧根成就し、諸法の念念の別相の生滅を知りたまふが故に、解脫知見減ずること無し。復次に、法眼淸淨に具足し成就したまふが故なり。法眼の義の中に說くが如くんば、是の衆生は空解脫門より涅槃に入り、是の衆生は、無相解脫門より涅槃に入り、是の衆生は、無作解脫門より涅槃に入ると知り、是の衆生は五衆門、十二入、十八界を觀じ、是の如き種種の法門もて解脫を得と知る。佛は解脫知見に於て盡く知り遍ねく知りたまふ。是の故に佛の解脫知見は減ずること無しと名く。

「一切の身業、一切の口業、一切の意業、智慧に隨つて行ず」とは、佛は一切の身・口・意業を先づ知り、然して後智慧に隨つて行じたまふ。諸佛の身・口・意業の一切の行は、衆生を利益せざる無きが故に、先づ知り然して後、智に隨つて行ずと名く。經の中に說くが如くんば、諸佛は乃至、出息・入息にすら衆生を利益す。何に況んや身・口・意業を故らに作して而も利益せざらんや、諸の怨惡の衆生は佛の出入の息の氣香を聞いて、皆な信心淸淨なることを得て佛を愛樂す、諸天は佛の氣息の香を聞いて、亦た皆な五欲を捨てて發心して善を修す。是を以ての故に、身・口・意の業、智慧に隨つて

きが故に、解脫滅ずること無し。 復次に、漏盡力の中に說くが如くんば、佛と聲聞とは解脫に差別あり。佛は漏盡力を得たまふが故に、解脫滅じたまふこと無く、二乘はなきが故に、滅ずること有り。

「解脫知見滅ずること無し」とは、佛は諸の解脫の中に於て、智慧無量無邊にして淸淨なるが故に、解脫知見滅ずること無しと名く。

問うて曰く、佛は一切法中にて滅ずる無し、何を以ての故に、但だ六事の中にのみ滅ずること無きや。

答へて曰く、一切の自利他利の中に、四事を能く具足す、欲は一切の善法を求むるの根本なり、精進は能く行じ、念は能く守護すること、守門の人が善者は入ることを聽し惡者は遮るが如し。慧は一切の法門を照して一切の煩惱を斷ず。是の四法を用ゐて事を成辦するを得。是の四法の果報に二種あり、一には解脫、二には解脫智見なり。解脫の義は先に說くが如し。解脫知見とは、是の解脫知見を用ゐて、是の二種の解脫の相なる、有爲・無爲の解脫を知り、諸の解脫の相を知る。所謂、時解脫と不時解脫と慧解脫と俱解脫と壞解脫と不壞解脫と、八解脫と不可思議解脫と無礙解脫と等なり。諸の解脫の相の牢固と不牢固とを分別する、是を「解脫知見滅ずること無し」と名く。念佛の中に佛は五無學衆を成就する(を說く)が如し。解脫知見衆は、此の中に應に廣く說くべし。

問うて曰く、解脫知見とは但だ知のみを言ふ、何を以てか復た見を言ふや。

答へて曰く、知を言ひ、見を言へば、事牢固なることを得。譬へば繩は二つを合して一と爲せば則ち牢固たるが如し。 復次に、若し但だ知のみを說けば則ち一切の慧を攝せず。阿毘曇に說く所の如くんば、慧に三種あり、知にして見に非ざる有り、見にして知に非ざる有り、亦た見亦た知なる有り。知にして見に非ざる有りとは、盡智、無生智、五識相應の智なり。見にして知に非ざる有りと

「慧減ずること無し」とは、佛は一切の智慧を得たまふが故に、慧減ずること無し、三世の智慧無礙なるが故に、慧減ずること無し。　復次に、十力・四無所畏・四無礙智を成したまふが故に、慧減ずること無し。　復次に、譬へば酥油豐饒なれば燈炷淨淨にして、光明も亦た盛なるが如し、佛も亦た是の如く、三昧王等の諸の三昧禪定の油念減ずること無く、淸淨の炷あり、是の因緣の故に慧の光明は無量にして減ずることなし。　復次に、初發心より無量阿僧祇劫に、一切の智慧を集むるが故に、深心に法の爲にするが故に、頭目髓腦を悉く捨し、內外に有する所を而も布施し、火に入り山に投じ、皮を剝ぎ身を釘づけにし、是の如き等、苦として受けざるもの無く、一心に智慧を集むることを爲すが故に、慧は減ずること無し。　復次に、佛の智慧は、一切の功德・持戒・禪定等を以て助成するが故に、慧は減ずること無し。　復次に、世世に一切の經書を求め、世俗法・佛法・麁細の善不善、悉く皆な學び知るが故に、慧は減ずること無し。　復次に、十方無量の諸佛より、聞く所の法を讀誦し思惟し修習し問難するが故に、慧は減ずること無し。　復次に、一切衆生の爲の故に、一切の善法を增益するが爲の故に、一切處の無明を破するが故に、慧は減ずること無し。　復次に、是の智慧は、實に諸法の相の不生不滅、不淨不垢、無作無行を知り、是智・非智を分別せず。諸法は一等に淸淨なること、虛空の如く無染無著なるを知る。二法を以てせざるが故に、不二入の法相を得。不二入の法相は無量無邊なり。是の故に慧減ずること無し。是の如き等の種種の因緣の故に慧減ずること無し。

「解脫減ずること無し」とは、解脫に二種あり、有爲解脫と無爲解脫となり。有爲解脫は無漏の智慧に相應する解脫に名け、無爲解脫は一切煩惱の習、都く盡くして餘なきに名く。佛は二解脫に於て減ずることなし。何となれば聲聞辟支佛は、智慧大利ならざるが故に、煩惱を悉く盡くさざるが故に、智慧減ずること有り、佛は智慧第一に、利なるが故に、煩惱の習、永く盡くして餘すこと無

皮肉盡く壞るれども、慈愍の力を以て、之を忍んで死に至る。最後に一の兎來る、氣力已に竭くれども、自强努力して、忍んで過ぐることを得せしむるに、過ぎ已れば、脊折れ水に墮ちて死せり。是の如きもの久しく有り、但だに今のみに非ず。前に得度せる者は今の諸弟子なり、最後の一兎は須跋陀是れなり」と。佛は世世に樂んで精進を行じ、今も猶ほ息みたまはず。是の故に精進滅ずること無しと言ふ。

「念滅ずること無し」とは、三世の諸法に於て、一切の智慧相應するが故に、念滿足して滅ずること無きなり。

問うて曰く、先に已に、念に失なきことを說き、今復た念滅ずること無しと說く。念に失なきと、念滅ずることなしと、一となすか、異となすか。若し一ならば、今何を以てか重ねて說くや。若し異ならば、何の差別ありや。

答へて曰く、失念は誤錯に名け、滅は「及ばざる」に名く。失念は威儀・俯仰・去來の法の中に念を失するに名け、無滅は禪定・神通の念に住し、過去・現在世に通達無礙なるに名く。

問うて曰く、何を以ての故、念滅ずること無きは、獨り是れ佛の法なるや。

答へて曰く、聲聞、辟支佛は、善く四念處に住するが故に念牢固なり。牢固なりと雖も、猶ほ亦た滅少し礙へて通達せず。宿命智力の中に說くが如し。「聲聞、辟支佛は宿命を念ずること、極めて多きも八萬劫、廣さに於て滅あり、亦た見諦道の中に於て念念に分別すること能はず。佛は念念の中に於て、皆な三相を分別したまふ。佛心は一法として念ぜざるもの有ること無し。是の故に獨り佛にのみ念滅ぜざること有るなり。 復次に、宿命智力は念に隨つて知る。佛は是の中に於て力あり、聲聞、辟支佛すら尙ほ是の念力なし、何に況んや餘人をや。 復次に、佛は一切智無礙解脫を以て念を守護したまふ。是の故に滅ずること無し。是の如き等の因緣の故に、佛は念は滅ずること無し。

我、背痛む、小らく息まん」と。爾の時、世尊は四褺の鬱多羅僧を下に敷き、僧伽梨を以て、頭に枕して臥したまふ。是の時、阿難は七覺の義を說きて、精進覺に至るに、佛は驚き起きて坐し、阿難に告げたまはく、「汝は精進の義を讚するや」。阿難言さく「讚す」と。是の如くして三たびに至る。佛の言はく、「善哉、善哉、善く精進を修せば、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得るに至らん」と。何に況んや餘道をや。是の義を以ての故に、佛は精進滅ずることなし、病時すら猶尚息まず、何に況んや病みたまはざるをや。

復次に、佛は衆生を度せんが爲の故に、甚深の禪定の樂を捨て、種種の身、種種の語言、種種の方便力もて衆生を度脫したまひ、或時は惡險の道を過ぎ、或は惡食を食し、或時は寒熱を受け、或時は諸の邪なる難問、惡口、罵詈に値ひ、忍んで受けて厭ひ給はず。佛世尊は諸法の中に於て、自在にして、是の事を行じたまふと雖も、懈怠を生じたまはず。佛が衆生を度し已つて、薩羅林中の雙樹の下に於て臥したまふ(時の)如きは、梵志須跋陀、阿難に語るらく、「我は一切智人が今夜當に滅度すべしと聞けり、我佛に見えんと欲す」と。阿難は之を止めて言く、「佛は衆人の爲に廣く說法して疲極したまへり」と。佛は遙かに之を聞き、阿難に告げたまはく、「須跋陀の入るを聽せよ、是れ我が末後の弟子なり」と。須跋陀は入ることを得て、佛に疑ふ所を問ひたてまつるに、佛は意に隨つて說法したまひければ疑を斷じ、道を得て、佛に先だつて無餘涅槃に入れり。諸の比丘、佛に白して言さく、「世尊よ。甚だ希有と爲す。乃至末後に外道の梵志を憐愍して共に語言したまふ」と。佛の言はく、「我は但だ今世のみ末後に度するに非ず、先世に未だ道を得ざる時にも亦た末後に度せり。乃ち過去を往いて無量阿僧祇劫に大林樹あり、諸の禽獸多し。野火來つて燒くに三邊に俱に起る。唯だ一邊のみ有り、而も一水を隔つ。衆獸窮逼して命を逃るるに地なし。我、爾の時、大身多力の鹿たり。前の脚を以て一岸に跨け、後の脚を以て一岸を距み、衆獸をして脊上を蹈んで渡らしむ。

答へて曰く、衆生を度するに二種あり。或は現前の得度あり、或は滅後の得度あり。法華經の中に說くが如し。「藥師は諸子の爲に藥を合せて之を與へ、而して捨す」と、是の故に涅槃に入る。復次に、衆生あり、鈍根にして德薄きが故に大事を成ずること能はず、但だ福德の因緣を種ゆべし。是の故に涅槃に入りたまふ。

問うて曰く、佛の滅度の後にも亦た阿羅漢を得るものあり、何を以てか但だ福德の因緣を種ゆべしと言ふや。

答へて曰く、阿羅漢を得る者ありと雖も少なくして言ふに足らず。佛の一たび說法したまふ時の如きは、十方無量阿僧祇の衆生、道を得。佛の滅後には爾らず。譬へば大國の征伐に、少しく所得ありと雖も、名けて得と爲さざるが如し。是を以ての故に衆生は未だ盡くさずと雖も而も涅槃に入りたまふ。復次に、摩訶衍首楞嚴經の中に、「佛は莊嚴世界に於ては、壽七百阿僧祇劫にして衆生を度脫す」と說く。是を以ての故に佛は欲滅ずること無しと說く。

精進減ずること無しとは、欲の中に「欲の義は卽ち是れ精進なり」と說くが如し。

問うて曰く、若し爾らば十八不共法あること無けん。復次に、欲と精進とは、心數法の中にて、各別なり、云何なれば欲は卽ち是れ精進なりと言ふや。

答へて曰く、欲を初行と爲し、欲の增長するを精進と名く。佛の說きたまふが如く、一切法は欲を根本と爲す。欲は人の渴して飮を得んと欲するが如く、精進は因緣方便もて飮を求むるが如し。欲は心に得んと欲すと爲し、精進は其の事を成ぜんと爲す。欲は意業に屬し、精進は三業に屬す。欲は內と爲し、精進は外と爲す。是の如き等の差別あり。復次に、是の精進は諸佛の樂ひたまふ所なり。釋迦牟尼佛の如きは、精進力の故に九劫を超越して、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。復次に、說くが如くんば、一時佛、阿難に告げたまはく、「汝、諸の比丘の爲に法を說け、

如きは、目闇くして、自ら僧伽梨を縫ふに、針の袵を脫す。諸人に語つて言く、「誰か福德を樂欲する者ぞ、我が爲に針に袵せよ」と。爾の時、佛は其前に現じて語げて言はく、「我は是れ福德を樂欲して厭足なき人なり、汝が針を持ち來れ」と。是の比丘は斐亹として佛の光明を見、又佛の音聲を識つて、佛に白して言さく、「佛は無量の功德海を皆其の邊底を盡くしたまへり、云何なれば厭足なきや」と。佛比丘に告げたまはく、「功德の果報は甚深にして、我が如く恩分を知る者あること無し。我は復た其の邊底を盡くすと雖も、我本心に厭足なきを欲するを以ての故に佛を得たり。是故に今も猶ほ息まず。更に功德の得べき無しと雖も、我が欲心は亦た休まず」と諸天・世人驚悟すらく、「佛すら功德に於て尙ほ厭足なし、何に況んや餘人をや」と。佛は比丘の爲に說法したまふに、是の時、肉眼卽ち明らかにして慧眼成就せり。

問うて曰く、佛の如きは嘗て、一切善法の中に欲を斷ぜり。今云何なれば欲滅ずること無しと言ふや。

答へて曰く、一切善法の中に欲を斷ずと言ふは、是れは未だ得ざるを得んと欲し、得已れば增さんと欲することなり。佛に是の如きの欲はなし。佛は一切の功德を具足して得ざる者なく、亦た增益すること無し。今欲と言ふは、先に說くが如く、佛は具に一切の功德を得ると雖も、欲心猶ほ息まず、譬へば馬寶の至る處に到ると雖も、去心息まず。死に至るも已まざるが如く、佛寶も亦た是の如し。又劫盡の大火は三千大千世界を燒きて悉く盡くせども、火勢は（その）故に息まざるが如し。佛の智慧の火も亦た是の如く、一切の煩惱を燒き、諸法を照し已るも、智慧に相應する欲は亦た盡きず。　復次に、佛は一切善法の功德を滿足すと雖も、衆生は未だ盡くさざるが故に度せんと欲して息まざるなり。

問うて曰く、若し佛は衆生を度せんと欲して未だ息まざれば、何を以てか涅槃に入りたまひしや。

【五】斐亹。文采ある貌。

中にて生む。得道の時は、漚樓頻螺林の中に獨り樹下に在して成佛し、初轉法輪の時も、亦た仙人住處の鹿林の中に在し、涅槃に入りたまふ時は、沙羅林雙樹の下に在つて、長夜に樂んで遠離を行じたまふ。是を以ての故に佛は禪定に入りたまふ。復次に、佛は常に捨心を成就したまふが故に禪定に入りたまふ。復次に、佛は憒閙及び雜語の處を遠離し、亦自ら諸佛の功德藏を觀じ、亦た第一清淨の樂を受くるが故に禪定に入りたまふ。復次に、佛は法を說き已れば、常に諸の比丘に「當に坐禪すべし、後悔せしむることなかれ」と敎へたまへり。口の說く所、身も亦自ら行ふが故に、禪定に入りたまふ。復次に、惡供養を厭ひたまふが故に、衆生の應に得度すべき者を知つて、禪定に入り、化人と作り、住いて度したまふ。復次に、衆生にして、定少く慧多き者有らば、身に行禪を示し、以て之を敎化したまふ。復次に、有人は、常に佛を見れば厭く想ひを生ずるが故に、小らく遠離したまふ。其をして飢虛せしめんが故なり。復次に、佛は諸天の爲に、說法せんと欲するが故に、閑靜の處に在したまふ。復次に、佛は後世の作法の爲の故に、坐禪したまふ。

又佛は自ら法輪を轉じ已り、事を以て弟子に付したまふが故に、禪定に入りたまふ。復次に、二種の道を現じて衆生を攝するが故なり。一には禪定、二には智慧なり。佛、大衆に在つて法を說き給ふは智慧を現さんが爲にして、靜處に心を攝したまふは、禪定を現さんが爲なり。復次に、衆生は六塵の中に於て、三種の行あり。好色を見ては喜樂を生じ、惡色を見ては憂苦を生じ、不苦不樂色を見ては捨心を生ず。乃至、法も亦た是の如し。佛は六塵の中に於て自在にして、喜樂・憂苦の處に於ても能く捨心を生じたまふ。聖如意の中に說くが如し。是の如き等の種種の因緣の故に禪定に入りたまふ。知り已つて捨せざるには非ず。

「欲滅ずる無し」とは、佛は善法の恩を知りたまふが故に、諸の善法を集めんと欲し給ふが故に、欲滅ずること無し。諸の善法を修習し、厭足なきが故に、欲滅ずること無し。譬へば一長老比丘の

答へて曰く、不苦不樂即ち是れ捨なり。二處の捨も亦是れ捨なり。何となれば餘人は不苦不樂受の中に於て、念念の中に生時、住時、滅時を覺せず、久遠は乃ち覺す。佛は、念念の中に盡く皆な知したまふ。七覺の中の捨は、若し心正等にして沒せず、掉せざれば是の時應に捨すべし。若し沒する時は精進の想を行じ、若し掉する時は攝心の想を行ず。諸の聲聞辟支佛は、或時は攝心・掉心を錯り、未だ平等に便ち捨せず。佛は念念心中の麁細深淺に於て悉く知り、知り已つて捨せざるはなし。

問うて曰く、若し爾らば、佛は何を以てか難陀の爲に說き、諸の比丘に、「難陀は諸受の、生時を覺し、住時を覺し、滅時を覺す。諸想諸覺も亦是の如し」と告げ給ひしや。

答へて曰く、覺に二種あり。一には心中を覺す。苦受生ずれば、苦受の生ずることを知り、苦受住すれば、苦受の住することを知り、苦受滅すれば、苦受の滅することを知り、樂受生ずれば、樂受の生ずることを知り、樂受住すれば、樂受の住することを知り、樂受滅すれば、樂受の滅することを知る、不苦不樂受も亦た是の如し。但だ能く是の總相を知つて別相を知ること能はず。二には念念の中の苦・樂・不苦不樂受の中を悉く覺し悉く知り、念念の中の心數法にして知らずして過ぐるもの無し、是の故に佛は知り已つて捨ざる無しと說く。復次に、佛は或時、衆生を捨てて甚深の禪定に入り給ふこと一月、二月なり。有人疑ふらく、「佛は衆生を度せんが爲の故に出世したまふ、何を以ての故に常に定に入りたまふや」と。佛の言はく、「我種種の因緣を知るが故に捨す、是れ知り已ること無くして捨するには非ず」と。

問うて曰く、何等か是れ知り已つて、捨するの因緣なりや。

答へて曰く、大衆の中に於て、疲厭するが故に小息したまふ。復次に、佛は世世に常に遠離の行を愛したまふ。若し菩薩母胎に在れば母も亦遠離の行を樂み、城を去ること四十里の嵐鞞尼林の

中に疑なしと雖も、一切法の中には處處に疑あり、佛は一切法の中に於て常に定にして疑なし、不定の智慧なきが故なり。　復次に、聲聞は諸の煩惱の習氣あるが故に、退法あるが故に、散亂す。佛は一切智處の中に於て智滿ずるが故に亂なし。瓶中の水は滿つれども則ち聲なく動なきが如し。

復次に、唯佛一人のみ不誑法と名け、三堅固人の中に最上にして、苦樂の心異ならず。一相、異相、生滅相、斷常相、來去相、是の如き等の諸の法相は、皆是れ誑法なり。虛妄なる和合の作法なるが故なり。佛は諸法の實相の中に安立し給ふが故に心に不定なく、不定なきが故に心異ならず。

復次に、[四]五種の不可思議法の中に、佛は最も不可思議なり。是れ十八不共法にして、是れ佛の甚深藏なり、誰か能く思議する者ぞ。是を以ての故に佛に不定心なきは、事必ず當に爾るべし。佛は常に定に入つて覺觀の麁心なしと雖も、不可思議の智慧あるが故に亦よく說法したまふ。譬へば天樂は天の好む所の種種の聲に隨ひ、是の亦た無心にして、亦た無識の法に應ずるが如し。諸天の福德の因緣を以ての故に、是の天樂の如きは無心無識にして能く物に應ずる有り、何に況んや佛は有心にして、而も說法し給はざる。是の故に佛には不定心なしと說く。

「知り已つて捨てざる無し」とは、衆生に三種の受あり、苦受・樂受・不苦不樂受なり。苦受は瞋を生じ、樂受は愛を生じ、不苦不樂受は愚癡を生ず。是の三種の受にて、苦受は、苦を生じ苦に住して樂を滅す。樂受は、樂を生じ樂に住して苦を滅す。不苦不樂受は、苦と爲すことを知らず、樂と爲すことを知らず。餘人は鈍根の故に、多く苦受・樂受を覺し、不苦不樂受の中に於ては、不覺不知にして捨心あり、是を癡使の爲に使はるとなす。佛は不苦不樂受の中に於て、覺の生ずる時、覺の住する時、覺の滅する時を知りたまふ。是の故に佛は知り已つて捨てざるの心無しと言ふ。

問うて曰く、此の中に何等をか捨と爲すや、不苦不樂卽ち是れ捨なりや、七覺の中の捨と爲すや、四無量心の中の捨と爲すや。

[四] 五種不可思議法。論三十の五事不可思議法參照。

二法にして、二法は即ち是れ邪道なり。佛は是れ諍法無きの人なり。諍法は行ずべからず、常に不二入法門を行ず。諍法は即ち是れ異相なり。是の如き等を異想なしと名く。

「不定心無し」とは、定は一心不亂に名く。亂心の中にては、實事を見るを得ること能はず、水波蕩なれば、面を見ることを得ざるが如く、風中の燈は、好く照らすことを得ざるが如し。是を以ての故に佛には不定心無しと說く。

問うて曰く、定とは未到地、乃至滅盡定に名く。此の定中に入れば、身業・口業を起すこと能はず。佛は若し常に定にして不定心なくんば、云何にして諸國に遊行し、四威儀を具し、大衆の爲に種種の因緣、譬喩もて說法することを得ん。是の如き事は、欲界繫の心及び梵世にして、定に入らずして是の事ある可し。

答へて曰く、不定心なしとは種種の義あり。定とは、常に心を攝して善法の中に住するに名く。佛は諸法實相の中に於て、定んで不退不失なり、是を不定心なしと名く。　復次に、欲界の中に定あり、是の定中に入りつゝ、說法すべし。是を以ての故に阿毘曇の中に欲界繫の四聖種、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、無諍三昧、願智、四無礙智を說く。是の如き等の妙功德有りて、佛は欲界の中の定に入りたまふが故に不定心なしと名く　諸の聲聞、辟支佛は定より起つて、若しくは無記心に入り、若しくは善心に入り、或ば退いて垢心に入る。佛は定より起つて欲界定に入りたまひ、初より心を散亂する時なし。是の故に不定心なしと名く。　復次に、聲聞法の如きは、化人法を說けば化主は說かず、化主說けば化人は說かず。佛は則ち爾らず。化主・化人倶に能く法を說く。定心も亦た應に異るべし。聲聞は定に入れば則ち說くこと無し、佛は定に在つても亦よく法を說き、亦よく遊行したまふ。密迹經の心密の中に說くが如し、「諸佛は心常に定中に在るも、心は亦た說法すべし」と。　復次に、散亂の心法、諸の結使・疑悔等は佛には皆なし。阿羅漢は四諦の

如き等を名けて念に失なしと爲す。天問經の中に説くが如し。

『何人か過失なき。何人か失念せざる、何人か常に心を一にして、應に作すべき者を能く作せる。正しく一切法を知り、一切の障を脱するを得て、諸の功德を成就せるは、唯、佛一人のみ有り。』

「異想なし」とは、佛は一切衆生に於て分別なく、遠近の異想なし。是は貴なり爲に説くべし、是は賤なり爲に説くべからずと(の異想なし)。日の出でて普ねく萬物を照すが如く、佛の大悲の光明は、一切を憐愍して等しく度し給ふ。恭敬する者も、恭敬せざる者も、怨親貴賤悉く等し。客の糞を除く人にして[二]尼陀と名くるが如きを、佛は之を化度して大阿羅漢を得せしめ給へり。亦た[三]德護居士の如きは、火坑・毒飯を以て佛を害せんと欲せるに、卽ち其の日を以て、其の三毒を除き、邪見の火を滅し給ふ、是の如く等うして異想あること無し。復次に、佛は舍利弗・彌勒菩薩等の、佛法に順じて行ずるに於ても、亦た愛し給はず、提婆達多・富樓那・外道六師の邪見等をも、亦憎み給はず。是れ佛は無量阿僧祇劫より、心を修熏し給ふが爲の故なり。是れ衆生の中の寶なり。眞金の如くして異ならしむべからず。復次に、佛は佛眼を以て、一日一夜各三時に、一切衆生を觀じたまひ、誰か度すべき者ぞ、時を失せしむること無らんと、等しく衆生を觀じたまふが故に、異想あること無きなり。復次に、佛は種種の因緣もて善法を讃じ、種種の因緣もて不善法を訶したまふに、亦た善に於ても、惡に於ても、心に增減なく、但だ衆生を度せんが爲の故に是の分別あり、是を異想あること無しと爲す。復次に、一切不行經の中に説くが如くんば、佛は一切衆生を觀じたまふこと、已身の如く、所作已に辦じ、始めなく、中なく、無終なし、是を異想なしと名く。復次に、佛は一切衆生及び諸法を觀じ給ひ、本より已來、不生・不滅、常に清淨にして、涅槃の如きに至る。是を異想なしと名く。復次に、不二入の法門は是の諸法實相の門なり。異相は卽ち是れ

【二】尼陀 (Nidha) 自ら下賤を恥ぢて、佛の前より常に隱れ人とするを、佛は、その前に立ちて敎化し、出家せしむ。

【三】德護 (Śrigupta) 他傳には、佛を陷れ人とせしは、その友人にして尼乾陀の弟子たる Gavahadinna の所爲とす。

舍利弗等の如きは、極めて多きも六十劫にして、久しく戒を習はざるが故に失あり。佛は無量阿僧祇劫に諸の淸淨戒を集め成就したまふが故に、常に甚深の禪定を行じたまふが故に、一切の微妙の智慧を得たまふが故に、善く大悲心を修したまふが故に、失あること無し。　復次に、佛は諸の罪根の因緣を拔き給ふが故に、失あること無し。罪の根本の因緣に四種あり。一には貪欲の因緣、二には瞋恚の因緣、三には怖畏の因緣、四には愚癡の因緣なり。是の罪根の因緣及び習を皆な已に拔き給ふ。阿羅漢辟支佛は罪の因緣を拔くと雖も、習を盡くさゞるが故に、或時は失あり、佛は一切法中に於て智慧を遍滿し、常に成就し給ふが故に(失なし)。(阿羅漢等は)若しくは不知の故に失あり、舍利弗の如きは、五百の比丘と遊行し、一の空寺に至つて宿す。是の時は說戒の日なり、內界外界の事を知らずして佛に白す、佛の言はく、「住處乃至一宿を棄捨すれば則ち界なし」と。又異時に舍利弗、目犍連は五百の比丘を將ゐて還れり、時に高聲大聲せしが故に、佛は驅遣して出でしめ給へり。是を口失と爲す。又舍利弗の如きは、等食法を知らず。佛は、「不淨食を食せり」と言へり。是の如き等の身口の失あり。佛は諸の煩惱の習を盡くし給ふが故に、是の如きの失なし。　復次に、佛の一切の身口の業は、智慧に隨つて行じたまふが故に、身に失なく、口に失なし。是の如き等の種種の因緣の故に、身に失なく口に失なし。

「念に失なし」とは、四念處の心を長夜に善く修するが故なり。善く甚深の禪定を修して心散亂せざるが故なり。善く欲愛及び法愛を斷じて諸法の中に心著せざるが故なり。第一心安隱の處を得るが故なり。若し心慌(あわた)だしく忽忽なれば、念に忘失あり。佛は心には得失なし、是の故に失なし。　復次に、佛は宿命通・明・力の三種もて念を莊嚴するが故に、念則ち成就して失なし、念は多く過去に在つて用ふるが故なり。　復次に、念の根力無邊無盡なるが故に念に失なし。　復次に、佛の一切の意業は智慧に隨つて行じたまふが故に念に失なし、一一の念は意に隨つて行ずるが故なり。是の

卷の第二十六

初品第四十一……「十八不共法」釋論

十八不共法とは一には諸佛は身に失なし、二には口に失なし、三には念に失なし、四には異想なし、五には不定心なし、六には知り已つて、捨てざる無し、七には欲減すること無し、八には精進減すること無し、九には念減すること無し、十には慧減すること無し、十一には解脱減すること無し、十二には解脱知見減すること無し、十三には一切の身業は智慧に隨つて行ず。十四には一切の口業は智慧に隨つて行ず、十五には一切の意業は智慧に隨つて行ず、十六には智慧もて過去世を知ること無礙なり、十七には智慧もて未來世を知ること無礙なり、十八には智慧もて現在世を知ること無礙なり。

問うて曰く、是の三十六法は皆是れ佛法なり、何を以ての故に、獨り十八を以て不共と爲すや。

答へて曰く、前の十八の中には聲聞、辟支佛の分あり、後の十八の中に於ては分なし。舍利弗の如きは能く諸法を分別し、一句を暢演するに通達無礙なり。佛は讃じて、「善く法性に通ず」と言へり。阿泥盧豆は天眼第一なり。是の如き等の諸の聲聞は皆四無所畏に於て分あり。分ありとは、佛の説きたまふが如し。「弟子の中の能く師子吼第一なるは、[一]賓徒羅巨羅埵逝なり」と。舍利弗も亦た自ら誓つて言く、「我は七日七夜、能く一義を演暢すれども、四分別の慧を窮盡すること無からしむ」と。諸の阿羅漢・舍利弗・目犍連・富樓那・阿難・迦旃延等も亦た是の義・名字・語言・樂説を知る。是を以て前の十八を不共と名けず。

問うて曰く、何を以ての故に、佛は身に失なく口に失なきや。

答へて曰く、佛は無量阿僧祇劫より來、持戒清淨なるが故に身口の業に失なし。餘の諸の阿羅漢、

【一】賓徒羅叵羅埵逝。(Piṇ=dola-Bhāradvāja)略して、賓頭盧と言ふ。

菩薩は是の無礙智を用ゐて、若しくは一劫若しくは半劫、各各説法を莊嚴して亦諸法の性相を壞せず、是の菩薩は或は身を隱して現ぜず。而も衆生の爲に一切の毛孔を用ゐて説法し、其所應に隨つて本行を失せず。是の菩薩の智慧は無量なり、一切の論議師も窮め盡くすこと能はず、亦壞すること能はず。是の菩薩は是の無礙智を得て身を轉じて生を受くる時、一切の五通の仙人の有する所の經書・呪術・智慧・伎能を自然に悉く知る。所謂四韋陀、[三七]六鴦伽・呪術と日月・五星經・原夢經・地動・鬼語・鳥語・獸語・四足獸鬼の人に著く語を知り、國王の相占、豐儉、日月五星の鬪相、醫藥草・算數・卜・歌舞・伎樂。是の如き等の工巧伎術・諸經を盡く知り、明かに達して、一切の人及び諸の外道に過ぎ、亦た自ら高ぶらず、亦た他を惱まさず、是の俗事を知るも、涅槃の爲にせず、是の菩薩は四無礙智を成就するが故に色力光明は諸梵に殊り、諸梵は恭敬愛樂尊重すれども心に著する所なく、是の如き等の一切諸天の爲に尊重恭敬せらるるも亦著する所なく、但無常・苦・空・無我の心を生じ、亦神通を以て諸天を發起し、心に渴仰せしめ而して爲に法を說き、盡くること無く、壞すること無く疑悔を斷除して阿耨多羅三藐三菩提に住せしむ。是を摩訶衍の中の菩薩の四無礙智力と名り、能く衆生を度する、是を四無礙智の義と名く。

【三七】鴦伽（Aṅga）身分または支。十八大經中の六吠陀分を六鴦伽と云ふ。

智とは、語言を以て名字の義を說き、種種に語言を莊嚴し、其所應に隨つて能く解を得せしむ。所謂天語、龍・夜叉・揵闥婆・阿修羅・迦樓羅・摩睺羅迦等の非人の語、釋・梵・四天王等の世主の語、人語、一語・二語・多語、略語・廣語、女語・男語、過去・未來・現在語、是の如き等の語言もて能く各各解を得せしめ、自語他語に毀譽する所なし。所以は何んとなれば、是の一切法は語中にあらず、語は是れ實義に非ざればなり。若し語これ實義ならば、善語を以て不善を說くべからず。但だ涅槃に入らしめんが爲の故に說き、解をして語言に著すること莫らしむ。復次に、是の語言を用ゐて能く衆生をして法義に隨つて行はしむ。所以いかんとなれば、言語は皆諸法實相の中に入ればなり。是を辭無礙智と名く。樂說無礙智とは、菩薩は一字の中に、能く一切の字を說き、一語の中に能く一切の語を說き、一法の中に能く一切法を說く。是の中に說く所は皆是れ法、皆これ實、皆是れ眞、皆度すべき者に隨つて益するところあり。所謂[三六]修妬路を樂ふ者には爲に修妬路を說き、祇夜を樂ふ者には爲に祇夜を說き、弊迦蘭那を樂ふ者には爲に弊迦蘭那を說き、伽陀、優陀那、尼陀那、阿波陀那、一筑多、闍陀、爲頭離、頞浮陀達摩、優波提舍を樂ふ者には皆爲に是の經を說く。一切衆生の根樂に隨つて說き、若し信を好む者には爲に信根を說き、精進を好む者には爲に精進根を說き、憶念を好む者には爲に念根を說き、攝心を好む者には爲に定根を說き、智慧を好む者には爲に慧根を說く。五根等の如く、一切の善根も亦た是の如し。

復次に、二萬一千の婬欲の人根あり。是の根の爲の故に佛は八萬四千の治法の根を說き給ふ。是の諸根の樂に隨つて、治法の次第を說くは、菩薩の樂說なり。二萬一千の愚癡の人根あり。是の根の爲の故に、佛は八萬四千の治法の根を說き給ふ。是諸根の樂に隨つて、治法の次第を說くは、菩薩の樂說なり。二萬一千の等分の人根あり。是の根の爲の故に、佛は八萬四千の治法根を說き給ふ。是の諸根の樂に隨つて、治法の次第を說くは、菩薩の樂說なり。是を樂說無礙智と名く。復次に、

【三六】修妬路（Sūtra）經。
祇夜（Geya）應頌
弊迦蘭那（Vyākaraṇa）記莂
伽陀（Gāthā）諷頌
優陀那（Udāna）自說
尼陀那（Nidāna）因緣
阿波陀那（Avadāna）譬喩
一筑多（Itivuttaka）本事
闍陀（Jātaka 本生）
爲頭離（Vaipulya）方廣
頞浮陀達摩（Adbhutadharma）希注
優波提舍（Upadeśa）論議

第一は十智なり。第四は九智なり。是の無礙に三種の上中下あり、上は諸佛、中は大菩薩、下は大阿羅漢なり。

問うて曰く、力、無所畏、無礙は皆是れ智慧にして、内に力あり外に畏るる所なければ、則ち具足す、何を以てか、復た無礙を説くや。

答へて曰く、力と無畏は已に分別せり、有人は無所畏にして、大衆の中に在つて説法すと雖も、而も礙あり、是の故に四無礙智を説く、是の無礙智を得て四無所畏を莊嚴し、四無所畏は十力を莊嚴す。　復次に、無所畏を説けば、或は疑ふ者あつて言はん、「云何にして一人にして、大衆の中に在つて無所畏を得ん」と。佛は前に十力あり、後に四無礙智あるを以て、是の故に大衆の中に在つて、説法したまふに畏るる所なきなり。是の如く、四無礙智を分別す。

問うて曰く、摩訶衍の中にては、菩薩の四無礙智ありや否や。

答へて曰く、有り。何をか是れなる。義無礙とは、義は諸法實相に名け言説すべからず、義・名字・語言は別異ならず。前後中、亦た是の如し。是を義と名くるも、名字語言を離れて別に義あるべからず、三事等しきが故に名けて義と爲す。　復次に、一切諸法の義を了了に知つて通達無礙なる、是を義無礙智と名く。　法無礙智とは、法は一切の義に名く。名字は義を知るが爲の故なり。

復次に、菩薩は是の法無礙智の中に入り、常に法を信じて人を信ぜず。常に法に依つて非法に依らず。法に依るとは非法の事なきなり。何となれば、是の人は一切の諸の名字及び語言は自相を離るることを知るを以ての故なり。　復次に、是の法無礙智を以て三乘を分別す。三乘を分別すと雖も、而も法性を壞らず、所以いかんとなれば、法性は一相にして所謂無相なればなり。是の菩薩は是の語言を用ゐて説法するも、語言の空を知ること、響の相の如く、所説の法を衆生に示して、同じく法性を信知せしめ、所説の名字・言語に通達して滯ること無し、是を法無礙智と名く。　辭無礙

四には恣ままに一切の人來つて問難する者に、一一皆答へて能く疑惑を斷じ、大衆の中に在つて、說法して畏るる所なし、是を菩薩の四無所畏と爲す。

（四無礙智）

四無礙智とは、義無礙智と法無礙智と辭無礙智と樂說無礙智となり。義無礙智とは名字言語を用ひて說く所の事、各各諸法の相なり。所謂堅相は地なり。此の中、地の堅相は是れ義なり。地の名字は是れ法なり。言語を以て地を說くは、是れ辭なり。三種の智の中に於て、樂說自在なるは是れ樂說なり。此の四事の中に於て通達して滯ること無き、是を無礙智と名く。濕相は水、熱相は火、動相は風、心の思相、五衆の無常相、五受衆の無常・苦・空相、一切法の無我相、是の如き等の總相・別相あり。諸法を分別することも亦た是の如し、是を義無礙智と名く。法無礙智とは是の義と名字を知り、堅相を名けて地と爲す。是の如き等の一切の名字の分別の中に滯ること無き、是を名けて法無礙智と爲す。何となれば名字を離れて義は得べからず、義は必ず名に由ると知るを以てなり。是を以ての故に義に次いで法あり。

問うて曰く、義と名とは合と爲すや離と爲すや。若し名と合せば、火を說く時、應に口を燒くべし、若し離るれば、火を說く時、應に水を得べし。

答へて曰く、亦は不合、亦は不離なり。古人は假に爲に名を立てて以て諸法と名け、後人は是の各字に因つて是の事を識り、是の如くして各各名字あり。是を法と爲す。

是の名字及び義は、云何にして衆生をして解するを得せざるや。當に言辭を以て分別莊嚴して、能く人の解をして通達無滯ならしむべし。是れを辭無礙智と名く。說くに道理あれば開演無盡なり。亦た諸の禪定の中に於て、自在を得て滯ること無し。是を樂說無礙智と名く。第一第四の無礙智は九地の中に在り。第二第三の無礙智は、欲界及び梵天の上にあり。第一第三の無礙は世智なり。

復次に、聲聞人の爲には十力・四無所畏を說くに、四諦十二因緣等を合說す。諸の聲聞法は皆涅槃に到らんが爲なり。今摩訶衍の中に十力・四無所畏を說くは、大悲を合して、諸法實相の不生不滅なるを說く。

問うて曰く、佛に十力・四無所畏あり、菩薩も有りや不や。

答へて曰く、有り。何をか是れなる。一には一切智心を發して堅深牢固なる力あり。二には大慈を具足するが故に一切衆生を捨てざる力あり。三には一切の供養恭敬の利を須ひざるが故に大悲を具足する力あり。四には一切の佛法を信じ具足して一切の佛法を生じ、及び心に厭はざるが故に大精進力あり。四には一心に慧行して威儀を壞せざるが故に禪定力あり。六には二邊を除くが故に、十二因緣に隨つて行ずるが故に、一切の邪見を斷ずるが故に、一切の憶想・分別・戲論を滅するが故に、智慧を具足するの力あり。七には一切衆生を成就するが故に、無量の生死を受くるが故に、諸の善根を集めて厭足すること無きが故に、一切世間は夢の如しと知るが故に、生死を厭はざるの力あり、八には諸法實相を觀ずるが故に、吾我はなく衆生はなしと知るが故に、諸法の不出不生を信解するが故に、無生法忍の力あり。九には空・無相・無作の解脫門の觀に入るが故に、聲聞辟支佛の解脫を知見するが故に、解脫を得るの力あり。十には深法に自在なるが故に、一切衆生の心行の趣く所を知るが故に、無礙を具足するの力あり。是を菩薩の十力と爲す。　何等を菩薩の四無所畏と爲す。一には一切を聞持するが故に、諸の陀羅尼を得るが故に、憶念して忘れざるが故に、衆(中)に在つて說法して畏るる所なし。二には一切法の中に解脫を得るが故に、一切の法藥を分別して知り用ふるが故に、一切衆生の根を知るが故に、大衆の中に在り、(所)應に隨つて、說法して畏るる所なし。三には菩薩は常に一切の衆畏を離れて、是念を作さず、「十方より來つて我を難ずる者あらんに、我は答ふること能はざらん」と。是の相を見ず、大衆の中に在つて、說法して畏るる所なし。

問うて曰く、般若波羅蜜の中に說くが如くんば、五衆乃至十力・四無所畏・十八不共法は皆空なり。今云何なれば分別して其相を說くや。

答へて曰く、佛法の中の不可得空は諸法に於て礙ふる所なし。是の不可得空に因つて、一切の佛法の十二部經を說く。譬へば虛空には所有なけれども、而も一切の物は皆な依つて以て長成するが如し。復次に、是の十力・四無所畏は、相を取る著心を以て、分別せざるが故なり。但だ衆生を度せんが爲にす。衆生は是の因緣に從つて、解脫を得ることを知る。譬へば、藥草は但だ病を差やさんが爲にして、藥草の相を求めんが爲にあらざるが如し。[三五]中論の中に說くが如し。

『若し諸法の空なるを信ずれば、是は則ち理に順ず。若し法の空なるを信ぜざれば、一切皆違失せん。若し以て是の空は無しとせば、造作すべき所なく、未だ作さざるに、已に業あり、作さざるに作者あらん。

是の如き諸法の相は、誰か能く思量する者ぞ。唯だ淨直なる心ありて、所說に依止すること無く、有無の見より離るれば、心自然に內に滅せん。』

問うて曰く、聲聞法に、十力・四無所畏を說くことは是の如し。摩訶衍に十方・四無所畏を分別することは復た云何。

答へて曰く、是の十力・四無所畏の中に、盡く知り、遍ねく知る。是れ摩訶衍の中に說く十力・四無所畏なり。

問うて曰く、聲聞法の中にも、亦た盡知・遍知を說く、云何んぞ摩訶衍の中にては、盡知・遍知を說くと言ふや。

答へて曰く、諸の論議師が「佛は盡く知り、遍ねく知り給ふ」と說くは、佛の自說には非ず。今摩訶衍の中に、十力・四無所畏を說くが故に、佛は自ら「我は盡く知り遍ねく知る」と說き給ふなり。

【三五】この偈の前半に相應すべきは、中論觀四諦品第三十七偈なり。卽ち若破於空義、卽應無所作無作而有作、不作名作者。後半は相應する偈なし。

するが故に梵輪と名く、復次に、佛は波羅奈に在して法輪を轉じたまふに、阿若憍陳如得道の聲、梵天に徹せるが故に梵輪と名く。　復次に、人の梵天を貴ぶ有り。歡喜せしめんと欲するが故に梵輪と名く。是の故に梵輪と名く。

問うて曰く、佛は或時は法輪と名け、或時は梵輪と名けたまふ、何等の異なりか有る。

答へて曰く、梵輪と、法輪とを說くも異なり無し。　復次に、有人の言く、「梵輪と說くは、四無量心を現はし、法輪と說くは四諦の法を示す」と。　復次に、梵輪は、四無量心に因つて道を得、是を梵輪と名け、餘法に依つて道を得る、是を法輪と名く。梵輪は四禪を示し、法輪は三十七品を示す。梵輪は、禪定を修する聖道を示し、法輪は、智慧を修する聖道を示す。是の如き等に、梵輪・法輪の差別なぞ分別す。

問うて曰く、何の法か是れ無畏の性なりや。

答へて曰く、佛、初めて得道したまひし時、一切の佛法・十力・四無所畏等を得たまふ。此の中、未來世に、四無所畏の智に相應する法を得るを無所畏と名く。布施する時は、心中の思に相應の捨法生ずるが如く、又た四無量心に相應するを、慈法の門と名くるが如し。

問うて曰く、是の四無畏の中に何の次第ありや。

答へて曰く、初めに無畏の中に、人に示して一切法を知らしめ、一切法を知るが故に、我漏を盡くす。漏を盡くすが故に、漏の盡くるを障ふる法を知り、是の障法を斷ずるが故に道を說く。　復次に、初の無畏は藥師が一切の藥草を示し、第二には一切の病の滅するを示し、第三には禁忌を知り、第四は所應の食を示すが如し。　復次に、初の無畏の中に一切種智を說き、第二の無畏の中に一切の煩惱の習なきことを說き、第三の無畏の中に法に謬失なきことを說き、第四の無畏の中に說くところの事を辯じて、涅槃に至ることを得。

なり。是を相似と爲す。　復次に、佛は轉輪聖王よりも殊勝あり。轉輪聖王は諸の煩惱を離れざれど、佛は已に、永く諸の煩惱を離れたまふ。轉輪聖王は恩愛の僕と爲れども佛は已に出離したまふ。轉輪聖王は老死の泥に沒在すれども、佛は已に過ぎ出でたまふ。轉輪聖王は生死の險道の中を行けども、佛は已に過ぎ度りたまふ。轉輪聖王は愚癡の闇中に在れども、佛は第一光明の中に住したまふ。轉輪聖王の極は四天下を自在にするにあれど、佛は無量無邊の世界を自在にしたまふ。轉輪聖王は財寶自在なるも佛は心寶自在なり。轉輪聖王は天樂を渴愛すれど、佛は乃至有頂の樂をも已に離れたまふ。轉輪聖王は他より樂を求むれど佛は自心に樂を生じたまふ。是を以ての故に佛は轉輪聖王よりも最も殊勝なりとす。復次に、轉輪聖王は手づから、寶輪を空中に轉ずること無礙なるも、佛は法輪を一切世間天及び人中に轉じたまふこと無礙・無遮なり。其の寶輪を見る者は衆毒皆な滅し、佛の法輪に遇へば、一切の煩惱の毒皆な滅す。寶輪を見る者は諸の災惡害皆な滅し、佛の法輪に遇へば、一切の邪見・疑悔・災害皆な悉く消滅す。王は是の輪を以て四天下を治め、佛は法輪を以て一切世間天及び人を治め、法を得ること自在ならしめたまふ。是を相似と爲す。　復次に、法輪は寶輪より大に殊勝あり。寶輪は欺誑にして、法輪は堅實なり。寶輪は三毒の火を長くし、法輪は三毒の火を滅す。寶輪は有漏にして、法輪は無漏なり。寶輪は五欲の樂を樂み、法輪は法樂を樂む。寶輪は結使の處なるも、法輪は結使の處に非ず。寶輪は有量の處に行き、法輪は無量の國に行く。寶輪は一心清淨に、布施するを以ての故に世世に得べく、法輪は無量阿僧祇劫に、一切の善業の因緣及び智慧を集むるが故に得。寶輪は王死すれば後更に轉ぜず。佛滅度の後にも法輪は猶ほ轉ず。寶輪は一人に在り、法輪は一切の度すべき者に在り。

　復次に、梵とは廣きに名く、佛の轉法輪は、遍ねからずといふこと無きが故に、廣と名く。　復次に、四梵行心を說くが故に梵輪と名く。　復次に、佛初めて得道したまふ時、梵天王轉法輪を請

佛の說きたまふ所を受くる者は法に隨つて、行ずる、是を轉と名く。是の輪は四念處の具足を以て轂と爲し、五根五力を輻と爲し、四如意足を堅牢の輞と爲し、四正勤を密合輪と爲し、三解脫を楯と爲し、禪定智慧を調適と爲し、無漏戒を輪に塗るの香と爲し、七覺意を雜華瓔珞と爲し、正見を右に隨つて轉ずる輪と爲し、信心淸淨を可愛喜と爲し、正精進を疾去と爲し、無畏の師子吼を妙聲と爲し能く魔輪を怖れしむ。十二因緣の節を解く輪を破り、生死の輪を壞し、煩惱の輪を離れ、業輪を斷じ、世間の輪を障へ、苦輪を破し、能く行者をして歡喜せしめ、天人をして敬慕せしむ。是の輪は能く轉ずる者なく、是の輪は佛法を持す。是の故に梵輪を轉ずと名く。復次に、佛の法輪を轉じたまふことは、轉輪聖王の寶輪を轉ずるが如し。

問うて曰く、佛と轉輪聖王とは何の相似すること有りや。

答へて曰く、王の如きは淸淨なる不雜種の中に生じ、姓に隨つて家業を成就し、衆相もて身を莊嚴し。王德を具足して能く寶輪を轉じ、香湯を頂に灌いで王位を受け、四天下の首に於て、一切の賊法を壞除して、敢へて違ふこと無からしむ。寶藏は豐溢し、軍容は七寶を以て校飾と爲し、四攝法を以て衆生を攝取し、善く王法を用ゐて貴姓に委任し、主兵大臣、以て國政を治め、妙上の珍寶、樂んで以て布施し、知念する所あれば、終始、異なること無し。佛法王も亦た是の如く、釋迦牟尼・然燈・寶華等の佛は、諸佛の淸淨なる姓の中に生れ、先佛の威儀行業たる三十二相を具足し、以て自ら莊嚴し、聖主の威德備に具はり、眞の法輪を轉じ、智慧の甘露味を智首に灌ぎ、三界の中に於て尊たり。一切煩惱の賊を破壞し、學・無學の衆歡喜し、結ぶところの禁戒に敢へて違ふ者なく、無量の法寶藏を具足し、七覺分の寶莊嚴、八萬四千の法衆の軍、出世間の四攝法は以て衆生を攝し、方便を知つて四聖諦の法を說き、法王の儀を爲し、舍利弗、彌勒等の大將は、善く佛國の法を治め、諸の無漏の根・力・覺の種種の妙寶を、樂んで以て布施し、深く一切衆生の善事を求め、所念堅固

物は聞くを喜ばず、生死を怖畏し、佛の師子吼は、其の聲柔軟にして、聞く者に厭心なく、皆な深く樂み、普遍に遠く聞えて、能く二種の樂、(卽ち)生天の樂と涅槃の樂とを與ふ。是を差別と爲す。

問うて曰く、佛の師子吼も亦た聞く者をして怖を生ぜしむ、師子の吼ると何等の異なりか有る。

答へて曰く、佛の師子吼を聞けば、當時は少しく怖るるも、後に大なる利益あり。吾我の心に著する者、世間の樂を渇愛する人、常に顚倒して邪見の心に縛せらるる者は、怖畏を生ず。經中に言ふが如し。「佛四諦を說き給ふに、乃ち上は諸天に至るまで、悉く皆な怖畏して是の念を作す。我等は無常相、苦相、無我相、空相なり、何んぞ顚倒心の爲の故に、常樂の相に著せんや」と。是を差別と爲す。　復次に、師子の吼るを聞く者は、離欲の人を除けば、餘は皆な怖畏し、佛の師子吼は、涅槃を求むる離欲の人も、不離欲の人も皆な怖る。師子の吼るは、善人・不善人皆な恐れ、佛の師子吼は但だ善人のみ怖る。　復次に、師子の吼るは、一切時に怖畏し、佛の師子吼は、小しく怖畏すと雖も、衆生に世間の惡罪を示し。世間の生を樂まざらしめ、涅槃の功德利益を觀じて、能く世間の種種の怖畏を除き、惡趣を閉ぢて善道を開き、能く人をして涅槃の城に到らしむ。

復次に、二十事の故に佛語を師子吼と名く。所謂十力に依止するが故に、不縮の故に、不畏の故に、梵音の故に、未曾有の故に、能く大衆を引くが故に、惡魔驚怖するが故に、魔民を擾亂するが故に、諸天歡喜するが故に、魔網を出づることを得るが故に、魔縛を斷ずるが故に、魔鈎を破するが故に、魔界を過ぐるが故に、自法增長するが故に、他法を減損するが故に、果報を誑はさざるが故に、說法空しからざるが故に、凡夫人、聖道に入るが故に、聖道に入る者、漏盡を具足することを得るが故に、所應に隨つて三乘を得るが故に、是の故に佛語を師子吼と名く。是を師子吼の總相・別相の義と名く。

梵輪を轉ずとは、清淨なるが故に梵と名け、佛の智慧及び智慧に相應する法、是れを輪と名け、

麞鹿・熊羆・虎豹・野猪の屬を威し、諸の久睡を覺し、高强にして力勢ある者を降伏し、自ら行路を開いて大に哮吼す。是の如く吼ゆる時、其を聞くことある者は、或は喜び、或は怖れ、穴處の者は隱れ縮み、水居の者は深く入り、山に藏るる者は潛伏し、厩の象は鎖を振りて狂逸して去り、鳥は空中を飛んで高く翔つて遠く逝る。佛師子も亦た是の如し。六波羅蜜より、古の四聖種の大姓の中に生れ、寂滅の大山して深[三四]濬の、禪定の谷の中に住し、一切種智を得て頭とし、諸の善根を集めて頬とし、無漏の正見を脩して目には光澤あり、定慧等しく行じて、眉は廣高に、四無所畏の牙は白く利く、無礙解脫の具足せる口、四正勤を堅滿せる頤、三十七品の齒は、密齊にして利く、不淨觀を修して赤白の舌を吐き、念慧の耳は高上に、十八不共法の髦髮は光潤鮮白に、三解脫門の上身の肉は堅く著き、三示現を脩めたる脊あり、明行具足して腹は現はれず、忍辱の腰は纖細に、遠離行の尾は長く、四如意の足は安立し、無學五根の爪利く、十種の力勢は無量に、無漏法衆を身に具足せり。諸佛三昧王等の住處より出でて、四無礙智もて嚬呻し、諸法の地中に無礙解脫の口を著け是の十力に依つて、廣く衆生を度して時を過たず。一切の世間、天及び人に晨朝の相を示し。諸の法王の德を顯して、諸の外道の論議師黨の邪見の屬を威し、諸の衆生の四諦の中に睡れるを覺し、吾我もて五衆に著せる者の憍慢力を降伏し、異學の論議、諸の邪見の道を開き、邪を行ずる者は怖畏し、正を信ずる者は歡喜し、鈍者を利ならしめ、弟子を安慰し、外道を破壞し、長壽の諸天は久しく天樂を受くれども則ち無常を知る。是の如く、衆生は四諦の師子吼を聞いて、皆な厭心を生じ厭心の故に離るるを得、離るるを得るが故に涅槃に入る、是を衆中に師子の如くに吼ゆと名く。

復次に、佛の師子吼と及び師子の吼ゆるとは差別あり。師子の吼ゆるは衆獸驚き怖れて、若しくは死し、若しくは死に近づいて苦しみ、佛の師子吼は死の畏を免るることを得。師子の吼るは、世世、死苦を怖れ、佛の師子吼は但だ今世に死して、更に後の苦なし。師子の吼るは、其の聲麁惡にして

【三四】濬。シュン、幽深の意。

益せば、是を以ての故に至誠に、「我は阿黎沙の住處に安住す」と言ふ。　復次に、佛は自ら惡を滅し、亦た衆生の惡を滅す。二惡を滅するが故に、第一清淨にして妙に法を説き給ふ故に阿黎沙の住處に安立す。　復次に、四聖諦、[三二]三轉、[三三]十二行を能く轉じ、能く分別して顯示し敷演したまふが故に、至誠に、「我は阿黎沙の住處に安立す」と言ふ。　復次に、一切の疑悔邪見を能く除却するが故に、一切の甚深の問難を悉く能く解釋するが故に、「阿黎沙の住處に安立す」と名く。「阿黎沙は第一最上極高にして、不退・不却・不沒なり。　功德を具足して、減少する所なし、是を阿黎沙の住處と名く。」是の如き等の因緣功德力の故に至誠に「我は阿黎沙の住處に安立す」と言ふ。

「衆中に師子吼し給ふ」とは、衆は、八衆に名く、沙門衆、婆羅門衆、刹利衆、天衆、四天王衆、三十三天衆、魔衆、梵衆なり。衆生は此の八衆に於て智慧を希望す、是の故に經中には但だ是の八衆を説く。此の中に佛師子吼したまふも、亦た一切の衆中に在り。是の故に此の經の中に、「若しくは復た餘衆」と言ふ。何となれば、佛の音聲を聞く者は、盡く皆な是れ衆なればなり。　復次に、有人の言く、「佛は獨り屏處にて法を説きたまふ。是を以ての故に衆中に在つて說くには、是の至誠の言を作さく、「我に十力、四無所畏あり」と。是を「衆中に吼子吼すと名く」と。　復次に、佛は「我は是に至誠に言ふ。我は一切世間の師にして、一切智人たり。諸の疑有りて信ぜざる者は悉く來れ、我當に解釋すべし」と示したまふ。是れを以ての故に衆中に師子吼すと言ふ。師子吼とは、師子王の如きは、清淨種の中に生れ、深山大谷の中に住し、方頰大骨にして身肉肥滿し、頭大にして眼長く、光澤明淨にして眉高く、廣牙は利にして白淨に、口鼻は方大厚實堅滿に、齒は密にして齊しく利く、赤白の舌を吐き、雙耳は高く上り、髦髮は光潤に、上身は廣大、膚肉は堅著、脩背細腰にして其の腹現れず、長尾利爪にして其の足安立し、巨身大力にして、住處より出でて脊を偃(なび)かせて嚬呻(ひんしん)し、口を以て地を扣(たた)いて大威勢を現はし、食は時を過ぎず、晨朝に相を顯はし、師子王の力を表はし、以て

【三二】三轉。三轉法輪にして、示、勸、證。
【三三】十二行。三轉に各、眼、智、明、覺、の四智を生じ、合して十二となる。

しくは現事を以てし、若しくは因緣を以て難ずるなり。「乃至是に微の畏相すら見ず」とは、相は因緣に名く。我は小小の因緣にして、如法に能く來つて我を破する者を見ず。見ざるを以ての故に至誠に、[三]阿黎沙〔秦に聖主と言ふ〕の住處に安立すと言ふ。

佛は至誠に言はく、「我は一切の漏を盡くせり。若し人ありて、是の漏を盡さずと言ふも畏ることと有ること無し」と。何等か是れ漏なる。漏とは三漏に名く。欲漏と有漏と無明漏となり。復次に、漏は六情の中より出で、垢心に相應する心數法に名く。復次に、一切漏障經の中には分別して七漏を說けり。

道を障ゆるの法とは諸の有漏業及び一切の煩惱、惡道の報障と、世間の僞の故に、布施持戒し、十善道を修して、諸の味禪を受くるに名く。略說すれば、若し能く涅槃を障ゆる、若しくは善、若しくは不善、若しくは無記、是を道を障ゆるの法と名く。

有人の言く、「道とは二法に名く。聖定と聖慧にして、是の二事は等しく涅槃に達到す」と。有人の言く、「三聖道(卽ち)無漏の戒定慧なり。」有人の言く、「四法あり、所謂四聖諦なり。」有人の言く、「出世間の五根なり。」有が言く、「六出性なり。」有が言く、「七覺意なり。」有が言く、「八聖道にして涅槃に達到す。」論議師等の言く、「一切の無漏道にして涅槃に達到す」と。是の中に若し沙門婆羅門等の來るありて、如實には、斯の事は爾らずと言ふも、乃至微の畏相すら見ず。見ざるを以ての故に、至誠に阿黎沙の住處〔秦に聖主と言ふ〕に安立すと言ふ。

問うて曰く、何を以ての故に佛は至誠に阿黎沙の住處に安立すと言ふや。

答へて曰く、自ら功德を具足し、亦衆生をして安樂利益を得せしめたまふ。若し佛自ら安樂の住處を得ても衆生を利益すること能はずんば、阿黎沙の住處と名けず。若し但だ衆生を利益するのみにして、自ら功德を具足せずんば、亦た阿黎沙の住處と名けず。若し自ら功德あり、亦た衆生を利

【三】阿黎沙。Ārṣa.

問うて曰く、佛の十力の中に無所畏ありや不や。若し無所畏あらば但だに四とのみ言ふべからず、若し所畏あらば云何んぞ無畏成就すと言ふや。

答へて曰く、一智の十處に在るを名けて佛と爲す。十力を成就するは、一人にして十事を知り、事に隨つて名を受くるが如し。是の十力が四處に出用する、是れ無所畏なり。是處不是處力、漏盡力は卽ち是れ初の二無畏なり。八力は廣しと雖も、是れ第三第四の無畏を說くなり。是れを以ての故に十力の中に無畏ありと雖も、別說するも亦た失なし。正遍知とは一切の法を知つて顚倒せず、正にして邪ならず、餘の過去の諸佛の如し。是を三藐三佛陀と名く。佛、阿難に告げたまふが如し、「一切の世間、天及び人の知ること能はざる所を、佛は遍ねく知りたまふが故に、三藐三佛陀と名く」と。

有人の若き[二八]は、「是の法を知らず」と、言ふ。

問うて曰く、是は何人ぞや。

答へて曰く、是の中に佛の說きたまはく、「若しくは沙門、婆羅門、若しくは天、若しくは魔、若しくは梵、乃至佛と與に論ぜんと欲する者なり」と 何等の法を論ずるや。有人の言く、「佛の說きたまはざる所の外の諸の經書にして、弊迦蘭那[二九]、僧佉[三〇]、韋陀等の十八種の大經書なり」と。有人の言く、「須彌山の斤兩、大地の深淺、一切の草木の頭數なり」と。有人は、「是は常か無常か、有邊か無邊かの十四の難に佛答ふること能はず」と言ふ。有人は、「是の法は色法か無色法か、可見か不可見か、有對か無對か、有漏か無漏か、有爲か無爲か等なり。佛は但だ一種の道事因緣のみを知りたまひ、是の異法の種種の因緣は、佛或は悉く知りたまはず」と言ふ。「沙門」とは、出家の人を說き、「婆羅門」とは、在家の有智の人を說き、「天」とは地天、虛空天を說き、「魔」とは六欲天を說き、「梵」とは梵天王を首と爲し、及び一切の色界を說き、「餘」とは此を除いて更に餘人あり。「如實」とは若

【一八】 鞞摩質帝隷(Vemacitra)。紋身と譯す。阿修羅の王。
【一九】 頂生王(Māndhātṛ)。曼陀多。持養と譯す。頂生は其の異名なり、卽ち、父長淨王の頂より生ずればなり。
【二〇】 快見王 (Sudarśana)。この世界の二十五世王。
【二一】 婆竭王。Sāgara 大海と譯す。十五世王。
【二二】 摩訶提婆王。Mahhāde=va 大天と譯す。
【二三】 安陀羅(Andhra)。南憍薩羅國より南行九百餘里にして達す。
【二四】 兜呿羅(Tukhāra)。
【二五】 脩利。不詳なれど珠利耶 (Cola)。か。
【二六】 安息 (Baktonia)。
【二七】 大秦 (Persia)。
【二八】 蹇吃。どもる。
【二九】 弊迦蘭那(Vyākaraṇa)。聲明記論。
【三〇】 僧佉(Sāṁkhya)。數論。

功德は亦た能く及ぶ者なし、所畏の法の一切を已に根本を拔くが故なり。所畏の法とは、弊家生と弊生處と惡色と無威儀と麁惡語等なり。弊家生とは首陀羅の如き、所謂死人を擔ひ、糞を除き、鷄猪を養ひ、捕獵、屠殺、酤酒、兵伍等の、卑賤の小家にして、若し、大衆の中に在れば、則ち怖畏多し。佛は本より已來、常に轉輪聖王の種の中に生じたまふ。所謂る、[一九]頂生王、[二〇]快見王、[二一]婆婆竭王、[二二]摩訶提婆王、是の如き等の日王の種と名くる家の中に生じ、亦た是を以ての故に畏るる所なし。弊生處とは、[二三]安陀羅、舍婆羅〔裸國なり〕、[二四]兜呿羅〔小月氏〕、[二五]脩利、[二六]安息、[二七]大秦國等の此の邊國の中に在つて生ずれば、若し大衆の中に在れば則ち怖畏多し。佛は迦毘羅婆の中國に在つて生れたまふが故に畏れたまふ所なし。惡色とは、人ありて、身色枯乾し羸痩すれば、人は見ることを喜ばず、若し大衆に在つては、則ち亦た畏あり。佛は金色の光潤ふこと、火が赤金山を照すが如し。是の如きの好色あるが故に畏れたまふ所なし。無威儀とは、進止・行步・坐起に人の儀あること無ければ則ち怖畏あり、佛には是の事なし。麁惡語とは、人ありて、惡音聲、[二八]蹇吃、重語して、次第あること無きは、人の喜ばざる所にして則ち怖畏多し、佛には是の畏なし。所以いかんとなれば佛語は眞實柔軟にして次第を了じ易く、疾からず、遲からず、少からず、多からず、沒せず、垢ならず、調戲せず、迦陵毘伽鳥の音に勝り、辭義分明にして物を中傷せず、欲を離れたまふが故に染なく、瞋を滅したまふが故に礙なく、愚を除きたまふが故に解し易く、法喜を增長するが故に愛す可く、罪を遮したまふが故に安隱なり、他心に隨つて解說したふに義は深く語は妙なり。因緣あるが故に言に理あり、譬喩あるが故に善く顯示したまひ、事訖るが故に善く事を會し、種種に衆生の心を觀じたまふが故に雜說し、久久しくして皆な涅槃に入るが故に一味なり。是の如き等の種種無量の莊嚴なる語なるが故に、佛は語中に於て畏れたまふ所なし。佛は但だ是の如き等の世間の法を以てすら、尙畏れたまふ所なし、何に況んや出世間の法をや。是を以ての故に佛には四無所畏ありと說くなり。

彌城の王、摩犍提の夫。

【二〇】弗迦羅婆利王(Pukkusāti)。弗迦沙と略書す。德差伊羅國の王、出家して歸佛す。牛に突かれて死すといふ。

【二一】梵摩達王(Brahmadatta)。梵授王。古譚中の王にてベナレスを領す。

【二二】梵摩喩。Brahmāyu 蜜絺羅の有名なる婆羅門、佛陀來るや弟子を遣して三十二相を撿せしめ、厚き歸依をなす。

【二三】鳩羅檀陀(Kūṭadanta)。摩揭陀國にて一村を王より與へられたる有名な婆羅門。佛陀來るや、供犧のことを問うて歸佛す。

【二四】阿羅婆迦(Āḷavaka)。曠野夜叉(Āḷavī)。王、林にて、この夜叉に捕へられ、毎日一人の供犧を約して放たる。王の子供に當りし時、佛陀之を調伏し、その王子歸佛す。

【二五】韓沙迦。毘沙門に屬する八大夜叉將の一。

【二六】阿波羅羅(Apalāla)。無稻芋と譯す。もと一呪術師にして龍を鎮めしより、民の稅租を受けしが、後送らざるより怒りて自ら龍となり。雹を降して稻芋を害す。佛に化せらる。

【二七】伊羅鉢多羅(Airāvaṇa)。守地子と譯す。

答へて曰く、若し畏る所あれば、大衆を將ゐ御して、能く攝し、能く捨し、能く苦切もて治し、或は軟語もて教ふること能はず、佛の如きは一時に能く舍利弗、目連等を驅遣し、還たび復た憐愍の心を以て受けたまふ。「若し忌難する所あれば」とは、諸の論議師の輩、憍慢の山頂に住し、外の智慧を以て心狂醉し、皆な天下に唯だ我一人あつて更に餘人なしと言ひ、自ら經書に於て決定して知るが故に他の經書を破し、論議して惡口を以て呰毀すること、狂象の護惜する所なきが如し。是の如きの狂人たる[四]菴跋吒、長爪、[五]薩遮祇、尼揵、[六]蜫盧祇等の諸の大論議師皆な降伏せり。若し、畏る所あれば則ち爾ること能はず。及び、憍陳如等の五出家人、漚樓頻螺迦葉等の千の結髮の仙人、舍利弗、目犍連、摩訶迦葉等は、佛法の中に於て出家し、及び百千の釋子、並に諸の閻浮提の大王なる[七]波斯尼示王、頻婆娑羅王、[八]旃陀波殊提王、[九]優塡王、[一〇]弗迦羅娑利王、[一一]梵摩達王等皆な弟子と爲り、諸の在家の婆羅門を皆な度し、一切世間の智慧となり、大國王の爲に師として仰がれたまひ、[一二]梵摩喩、弗迦羅婆利、[一三]鳩羅檀陀等皆な弟子と爲り、初道を得るあり。第二・第三・第四道を得るあり、諸の大鬼神、[一四]阿羅婆迦、[一五]鞞沙迦等、諸の大龍王、[一六]阿波羅羅、[一七]伊羅鉢多羅等、鴦群梨摩羅の諸の惡人等皆な降化歸伏す。若し畏る所あらば、獨り樹下の師子座處に在つて坐すること能はず、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲する時、魔王の軍衆は化して、師子・虎・狼・熊・羆の首と作り、或は一眼、或は多眼、或は一耳、或は多耳にして、山を擔ひ、火を吐きて、四邊を圍遶するに、佛、手指を以て地を按じたまへば、胸息の頃に卽ち皆な消滅し、諸天、阿修羅、[一八]鞞摩質帝隷、釋提婆那民、梵天王等を其の心を引導して皆な弟子と爲す。若し畏る所あらば、此の大衆の中に在つて說法すること能はず。無所畏を以ての故に、能く是の如く、諸天、鬼神のために大衆の中にて法を說きたまふ、故に無所畏と名く。　復次に、佛は一切衆生に於て最尊最上にして、盡く一切法の彼岸に到り、大名聞を得たまふが故に、自ら無所畏と說きたまふ。　復次に、且らく是の佛の功德を置くも、佛の一切世間の

【四】菴跋陀(Āmraṣṭha)。愛敬母と譯す。憍薩羅の婆羅門にして師の命により、佛陀を訪ひて謗るに却て教化せられ、歸りて師に叱らる。

【五】薩遮祇尼犍。論一に出づる薩遮迦と同じ。(Satyaka-Nagaṇtha putra)。有名なる尼乾子外道。

【六】蜫盧祇。(巴) Pilotika 論三の蜫盧提迦と同じ。婆羅門にて舍衞城にて佛より法を聞き、歸途、友人に佛を讃じて歸佛せしむ。

【七】波斯尼示王。(Prasenajit)所謂、波斯匿王なり。舍衞國王、にして末利夫人の夫。

【八】旃陀波殊提王。(Caṇḍapradyota)。猛光と譯す。論三十三に出づる。旃陀波周陀王と同じ。嗢逝尼 Ujjeni 王。暴酒にして兇暴、後、佛門に歸す。

【九】優塡王(Udyana)。憍賞

畏と名く。自ら智慧あるが故に力と名け、能く壞する者無きが故に無畏と名く。智慧猛健なるは是れ力にして、問難を受くるに堪ゆるは是れ無畏なり、諸の智慧を集むるは是を力と名け、智慧を外に用ふるは是れ無畏なり。譬へば轉輪聖王の如し、七寶を成就するは是れ力にして、是の七寶を得已つて四天下を周り、降伏せざるは無きは是を無畏と名く、又良醫の善く藥方を知るが如きは是を力と名け、諸藥を合和して人に與ふるは是を無畏と名く。自ら利益するは是を力と名け、他を利益するは是れ無畏なり。自ら煩惱を除くは是を力と名け、他の煩惱を除くは是れ無畏なり。能く沮壞なきは是を力と名け、難からず退かざるは是れ無畏なり。自ら已が善を成ずるは是を力と名け、能く他の善を成ずるは是れ無畏なり。巧便智は是を力と名け、巧智を用ふるは是れ無畏なり。一切智・一切種智は是を力と名け、一切智・一切種智を顯發するは是れ無畏なり。十八不共法は是を力と名け、十八不共法を外に顯發するは是れ無畏なり。遍ねく法性に通達するは是を力と名け、若し種種の問難あるも、復た思惟せずして即時に能く答ふるは是れ無畏なり、佛眼を得るは力と名け、佛眼もて已に度すべき者を見、僞に法を說くは是れ無畏なり。三無礙智を得るは是を力と名け、應辯無礙なるを得るは是れ無畏なり。義無礙智は是を力と名け、樂說無礙智は是れ無畏なり。一切智に自在なるは是を力と名け、種種の譬喩、種種の因緣、莊嚴の語言もて、說法するは是れ無畏なり。魔衆を破るは是を力と名け、諸の外道の論議師を破するは是れ無畏なり。是の如き等の種種の因緣もて、力と無畏とを分別せり。

問うて曰く、何等か無所畏と名くるや。

答へて曰く、疑ふ所なきを得て、忌難する所なく。智慧却かず沒せず、衣毛竪たず、在在の法の中にて說くが如くに卽ち作すは、是れ無畏なり。

問うて曰く、云何にしてか當に佛の無所畏を知るべきや。

な復た供養を得ず。供養の利を失ふが故に、便ち妄語して、佛及び佛弟子を謗る。孫陀利經の中に說くが如し。自ら[二]孫陀利を殺して而して佛を謗り、衆人に語つて言く、「世間の弊人すら尙ほ是を爲さず、是の人は世間の禮法すら尙ほ知る能はず、何に況んや涅槃をや」と。佛は是の如き等の誹謗を滅せんと欲したまふが故に、自ら實の功德、四無所畏を說いて言はく「我のみ獨り是れ一切智人なり。能く如實に、佛は能く知らずと言ひ能ふもの有ることとなし。我は是の事を畏れず。我は獨り一切諸の漏及び習を盡くせり。能く如實に、佛は漏未だ盡くさずと言ひ能ふもの有ることとなし。我は是の事を畏れず。我は涅槃の道を遮ぎる法を說けり。能く如實に、是の法は涅槃を遮ぎること能はずと言ひ能ふもの有ることとなし。佛は是の事を畏れず。佛は苦を盡すの道は涅槃に到達すと說けり。能く如實に、是の道は涅槃に到ること能はずと言ひ能ふもの有ることとなし。佛は是の事を畏れず」と。

略して是の四無所畏の體を說くに、一には正しく一切法を知り、二には一切の漏及び習を盡し、三には一切の道を障ゆるの法を說き、四には苦を盡すの道を說く。是の四法の中、若し如實に盡く遍ねく知ること能はずと言ふものあらんも、佛は是の事を畏れたまはず。何となれば、正しく遍ねく知りて了了なるが故なり。初の二無畏は自らの功德を具足するが爲の故にして、後の二無畏は具足して衆生を利益するが爲の故なり。　復次に、初の[三]第一、第三の無畏の中には智を說き、第二、第四の無畏の中には斷を說き、智と斷とを具足するが故に爲すところの事畢る。

問うて曰く、十力は皆な智に名く、四無所畏も亦た是れ智なり、何等の異あるや。

答へて曰く、廣く佛の諸の功德を說かば是れ力にして、略して說かば是れ無畏なり。復次に、能く所作あるは是れ力にして、疑難する所なきは是れ無畏なり。智慧、集まるが故に力と名け、諸の無明を散ずるが故に無畏と名く。諸の善法を集むるが故に力と名け、諸の不善法を滅するが故に無

【二】舍衞城にて、佛の名聲盛んとなるや、外道は、美女孫陀利 Sundarī をして佛に關係あるが如く、云ひ觸らさしめ、後、更に孫陀利を殺して屍體を祇園精舍の傍に埋め、佛が自ら罪を蔽はんが爲に殺せりと宣傳せり。

【三】別本では、「初の第三、第四の無畏の中には智を說き、第二の無畏中には斷を說く」とある。

道を行ずれども、世間を出づること能はず、苦を盡すこと能はずと言はんも、乃至是に微の畏、相だに見ず。是の故に我は安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住すること牛王の如く、大衆の中に在つて、師子吼して能く梵輪を轉ず。諸の沙門、婆羅門、若しくは天、若しくは魔、若しくは梵、若しくは復た餘衆は、實に轉ずること能はず」と。（これ）四の無畏なり。

問うて曰く、何事を以ての故に四無所畏を說きたまひしや。

答へて曰く、有人は言はん、「佛は自ら一切智、一切見と稱したまふも、世間の一切の經書・技術・智巧・方便は甚だ多くして無量なり、若し一切衆生が共になるも、一切事を知ることは猶尙難し、況んや佛一人にて一切智あらんや」と。或は「是の事には（知見する）あるも是の事には難しとする有り」と。佛は將に畏あること無くして、是の疑妄を斷じ、是の難を斷ぜんと欲したまふが故に、佛は四無所畏を說きたまへり。　復次に、若し佛未だ世間に出でたまはざれば、外道等は種種の因緣を以て、求道・求福の人を欺誑し、或は種種の果を食し、或は種種の菜を食し、或は種種の草根を食し、或は牛屎を食し、或は稗稗を食し、或は日に一たび食し、或は二日、或は十日、一月、二月に一たび食し、或は風を嗡ひ、水を飮み、或は水衣を食し、是の如き等、種種に食し或は樹皮・樹葉・草衣・鹿皮を衣、或は板木を衣、或は地に在つて臥し、或は杵上、枝上、灰上、棘上に臥し、或は寒時に水に入り、或は熱時に五熱して自ら灸し、或は水に入つて死し、火に入つて死し、巖に投じて死し、食を斷じて死す。是の如き等の種種の苦行法の中に、天上を求め、涅槃を求め、亦た弟子に敎へて是の法を捨てざらしむ。是の如く少智の衆生を引致して、以て供養を得。譬へば螢火蟲の如し。日未だ出でざる時は、少多能く照せども、若し日出づる時、千光明照すれば月及び衆星は皆な明あることなし、豈に況んや螢火をや。若し佛未だ出世したまはざれば、諸の外道の輩の小明は世を照して供養を得れども、佛出世したまふ時は、大智の光明を以て、諸の外道及び其の弟子を滅し、皆

【一】水衣。青苔なり。

巻の第二十五

初品第四十……「四無畏」義

四無所畏とは、佛は誠言を作したまはく、「我は是れ、一切正智の人なり。若し、沙門、婆羅門、若しくは天、若しくは魔、若しくは梵、若しくは復た餘衆ありて、實の如くに此の法を知らずと言はんも、乃至是に微の畏、相だに見ず。是を以ての故に我は安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住すること牛王の如く、大衆の中に在つて、師子吼して能く梵輪を轉ず。諸の沙門、婆羅門、若しくは天、若しくは魔、若しくは梵、若しくは復た餘衆は實に轉ずること能はず」と。(これ)一の無畏なり。佛は誠言を作したまはく、「我は一切の漏を盡せり。若し、沙門、婆羅門、若しくは天、若しくは魔、若しくは梵、若しくは復た餘衆ありて、如實に是の漏を盡くさずと言はんも、乃至是に微の畏相だに見ず。是を以ての故に、我は安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住すること牛王の如く、大衆の中に在つて師子吼して能く梵輪を轉ず。諸の沙門、婆羅門、若しくは天、若しくは魔、若しくは梵、若しくは復た餘衆は、實に轉ずること能はず」と。(これ)二の無畏なり。佛は誠言を作したまはく、「我は(道を)障ゆる法を說くに、若し、沙門、婆羅門、若しくは天、若しくは魔、若しくは梵、若しくは復た餘衆ありて、如實に是の障ゆる法を受くれども道を障へずと言はんも、乃至是に微の畏、相だに見ず、是の故に我は安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住すること、牛王の如く、大衆の中に在つて、師子吼して能く梵輪を轉ず。諸の沙門、婆羅門、若しくは天、若しくは魔、若しくは梵、若しくは復た餘衆は實に轉ずること能はず」と。(これ)三の無畏なり。佛は誠言を作したまはく、「我が說く所の聖道は、能く世間を出で、是の道に隨つて能く諸の苦を盡す。若し、沙門、婆羅門、若しくは天、若しくは魔、若しくは梵、若しくは復た餘衆ありて、如實に是の

たまへり。　復次に、度すべき者あれば必ず應に爲に說くべく、說くべき所の中に次第に應に十力を說くべし。若し說かずんば彼は度することを得ず。是の故に自ら說きたまへり。譬へば日・月の出づる時、是の念を作さざるが如し、「我、天下を照して當に名稱あるべし」と、日月は旣に出づれば、必ず自ら名あり、佛も亦た是の如く、自ら念じて名稱あるを爲さざるが故に、自ら功德を說きたまふ。佛の淸淨の語言もて說法したまへば光明は衆生の愚闇を破つて、自然に大名稱あり、是を以ての故に佛は自ら十力等の諸の功德を說きたまふも失有ること無し。力とは能く辨ずる所あるに名く。是の十種の力を用ゐて智慧を增益するが故に、能く論議師を破り是の十種の力を用ゐて智慧を增益するが故に、能好く說法し是の十種の力を用ゐて智慧を增益するが故に、能く不順を摧伏し是の十種の力を用ゐて智慧を增益するが故に、諸法の中に於て自在を得ること、大國王が臣民大衆の中に於て自在を得るが如し。是を聲聞法を以て略して十力の義を說くと爲す。

事を辦じて涅槃を得るが故に」と。論者は言ふ、「是の十力は皆な無礙解脫を以て根本と爲し、無礙解脫を以て增上と爲す」と。

問うて曰く、若し是の十力は獨り是れ佛のみの事ならば、弟子は今世に人として能く得ること無けん。佛は何を以ての故に說き給ひしや。

答へて曰く、人の十力の中の疑を斷ずるが故に、無智の人の心を決定して堅牢ならしむるが故に、四衆をして歡喜せしめ、言く、「我等の大師は獨り是の如きの力あり、一切の衆生と共ぜず」と。又諸の外道の輩の言く、「憍曇氏沙門は常に寂靜處に住して智慧縮沒せり」と。是を以ての故に至誠の言を發したまはく、「我は十種の智力・四無所畏に安立し具足す」と。大衆の中に在つて具足せる智慧を說き衆生を教化したまふこと、師子の吼ゆるが如し。梵輪を轉ずるに、一切の外道及び天、世人の能く轉ずる者なし、是の謗を止めんが爲の故に是の十力を說きたまふなり。

問うて曰く、好き人の法として一事の、智慧すら、尙ほ自ら讚すべからず、何に況んや無我・無所著の人にして、而も自ら十力を讚せんや、說くが如くんば、

『自ら讚し、自ら毀り、他を讚じ、他を毀る、是の如きの四種を智者は行ぜず』と

答へて曰く、佛は無我・無所著なりと雖も、無量の力あつて大悲もて衆生を度せんが爲の故に但だ十力を說きたまふのみ。自讚を爲したまはず。譬へば好き賈客の導師が諸の惡賊が諸の賈客を誑はし、示すに非道を以てするを見るや、導師は、愍念するが故に諸の賈客に、「我は是れ實語の人なり、汝は誑惑の者に隨ふこと莫れ」と。語るが如し。又諸の弊醫等が諸の病人を誑はすに。良醫は之を愍んで衆の病者に、「我に良藥あり、能く汝が病を除く、欺誑を信じて以て自ら苦困すること莫れ」と語るが如し。復次に、佛の功德は深遠なり。若し佛自ら說きたまはずんば、知る者あること無けん。衆生の爲に說かるる所は益する所甚だ多し。是を以ての故に佛は自ら是の十力を說き

聲聞辟支佛と何等の異あるや。

答へて曰く、漏盡は是れ同じと雖も、智慧の分別は大に差別あり。聲聞は、極大力にて思惟して斷ずるところの結は生分・住分・滅分の三時に斷ずれども、佛は則ち爾らず。一の生分の時に盡く斷ず。聲聞の人は、見諦所斷の結使は生時に斷じ、思惟所斷は三時に滅すれども、佛は則ち見諦所斷と思惟所斷と異なること無し。聲聞の人は初めて聖道に入る時、入る時と達する時とは異なれども、佛は則ち一心中にして亦た入り亦た達し、一心中に一切智を得、一心中に一切の障を壞し、一心中に一切の佛法を得たまふ。復次に、諸の聲聞の人に二種の解脫あり、煩惱解脫と法障解脫となり。佛は一切の煩惱解脫あり、亦た一切の法障解脫あり。佛は自然に智慧を得たまひ、諸の聲聞の人は敎道に隨つて行得す。復た有る人言く、「若し佛は智慧を以て一切衆生の煩惱を斷じたまふに、其の智も亦た耗せず滅ぜず、譬へば熱鐵丸を少綿の上に著くるに此の綿を燒くと雖も、而も火熱の勢滅ぜざるが如し。佛の智慧も亦た是の如く、一切の煩惱を燒くに、智力亦た滅ぜず」と。復次に、聲聞は但だ自ら漏を盡くすことのみを知り、諸佛は自ら漏を盡くすことを知り、亦た他人の漏を盡くすことを知りたまふ。淨經の中に說くが如し。復次に、佛のみ獨り衆生の心中の分別に九十八使、一百九十六纒あることを知りたまひ、佛を除いては知る者あること無し。佛は亦た獨り苦法智、苦比智中に斷ずる、爾所の結使の性を知りたまふ。乃至道比智も亦た是の如く、思惟所斷の九解脫道の中も亦た爾なり。佛は悉く遍ねく一切衆生の是の如き事を知りたまふ。聲聞の若しくは少しく知り、少しく說くは皆な佛語に隨ふ。佛の是の如き漏盡の智慧刀勢は能く壞するものなく、能く勝るものなし、是を第十力と名く。

問うて曰く、是の十力は何か最勝なるや。

答へて曰く、各各自らの事の中に於ては、大なること水の能く潰し、火の能く燒くが如く、各各自ら力あり。有る人の言く、「初力を大と爲す、能く十力を攝するが故に」と。或は言く、「漏盡力大なり

因縁は、更に悉く遍ねく知りたまふところなり。是を力と爲す能く壞するものなく、能く勝るものなし。是を第八力と名く。

生死智力とは、佛は天眼を用ゐて、衆生の生死の處を見たまふ。凡夫人は是の天眼を用ゐて、極めて多くして四天下のみを見、聲聞の人は極めて多くとも、傍に小千界を見、上下亦た遍ねく見る。

問うて曰く、大梵王も亦た能く千世界を見る、何等の異ありや。

答へて曰く、大梵王は自ら千世界に於て、立てば則ち遍ねく見れども、若し邊に在つて立てば、則ち餘處を見ず。聲聞の人は則ち爾らず、所住の處に在つて、常に千世界を見、辟支佛は百千世界を見、諸佛は無量無邊の諸の世界を見る。凡夫人の天眼智は、是れ通にして明に非ざるも亦た是の如く、但だ所有の事を見て、業因縁に隨つて生を受くることを見ること能はず、宿命の中に説けるが如し。

復次に、天眼を得たる人の中、最も第一なる者は、阿泥盧豆にして、色界の四大の造色に、半頭清淨なるが、是の天眼なれども佛の天眼は、四大の造色に、遍頭清淨なり。是を差別と爲す。復次に、聲聞の人は、住する所の三昧の中に於て天眼を得、卽ち住するところの三昧の中にて能く見るにして、若しくは有覺有觀三昧、若しくは無覺有觀三昧、若しくは無覺無觀三昧なり。佛は隨所に三昧の中に入りて住し、見んと欲せば盡く見たまふ。若しくは無覺無觀三昧の中に依つて天眼を得、有覺有觀三昧、若しくは無覺有觀三昧の中に入りて亦た能く見たまふ。　復次に、聲聞の人は、是の天眼を用ゐて見る時、住するところの三昧の中の心、餘の三昧に入れば、天眼は則ち滅す。佛は則ち爾らず、心は餘の三昧に入ると雖も、天眼は滅せず。是の智慧もて遍ねく一切衆生の生死の趣く所を知りたまひ、能く壞するものなく、能く勝るものなし、是を第九の力と名く。

漏盡智力とは、問うて曰く、九力は智慧の分別には差別あり、漏を盡すことは則ち同じ、一切の

宿命智力とは、宿命に三種あり、有通、有明、有力なり。凡夫人は但だ通のみ有り。聲聞の人は亦た通もあり亦た明もあり、佛は亦た通もあり、亦た明もあり、亦た力もあり、所以いかんとなれば、凡夫人は、但だ宿命の經る所を知つて、業因緣の相續を知らず、是を以ての故に凡夫人は、但だ通のみ有つて明あること無し。聲聞の人は集諦を知るが故に、了了に業因緣の相續生を知る。是を以ての故に聲聞の人は亦た通もあり亦た明もあり。佛弟子の若きは、先づ凡夫人の時に宿命智を得、見諦道の中に入つて集の因緣を知り、第八の無漏心に見を斷ずることを得るが故に、通、變じて明と爲る。所以いかんとなれば、明は見の根本に名くるを以てなり。佛弟子の若きは先きに聖道を得て、後に宿命智を生じ、亦た集の因緣力を知るが故に、通、變じて明と爲るなり。

問うて曰く、佛の若きは、本、菩薩たりし時、先づ宿命智を得たまひ、諸の菩薩は、無所有處の煩惱を離れて、後に聖道に入りたまふが故に、云何んぞ佛は、「我初夜に初めて明を得たり」と說きたまひしや。

答へて曰く、是の時は明に非ず、佛の若きは衆中に在つて、「我れ彼の時是の明を得たり」と說きたまひ、衆人に示して言く、「是の明は初夜に得たり」と言へり。譬へば國王の未だ王とならざる時、子を生み、後に王と作りし時、人あり、王子は何の時に生れしや」と。問へば、答へて、「王子は某時に生ぜり」と言ふが如し。是の生ぜし時には未だ王と作らず、今は是れ王なるを以ての故に、彼を以て王子と爲し、王子は彼の時に生ぜりと言ふなり。佛も亦た是の如く、宿命智生ぜしも、爾の時は未だ是れ明にあらず、但だ通と名く。後夜の時に集因緣を知りたまふが故に、通、變じて明と爲る。後、衆中に在つて說いて言はく、「我は初夜の時に是の明を得たり」と。

問うて曰く、通・明の義は是の如し、云何なれば力と爲すや。

答へて曰く、佛は是の明を用ゐて、已身及び衆生を知りたまふこと、無量無邊なり、世中の宿命

多く、是は慧を覆ひ、[一四]是は衣裓の慧なり。是は廣慧なり。是の人は善く五衆の相、十二入、十八界、十二因縁、是處、非是處、苦集滅道を知り、善く入定、出定、住定を知ると知りたまふ。 復次に、佛は、是は欲界の衆生、是は色界、是は無色界の衆生、是は地獄、畜生、餓鬼、人天、是は卵生、胎生、濕生、化生、是は有色、是は無色、是は有想、是は無想、是は短命、是は長命、是は但だの凡夫人にして未だ欲を離れず、是は凡夫人にして下地の欲を離るゝも、未だ禪欲を離れずと、是の如くにして乃ち非有想非無想に至り、是は道に向ひ、是は果を得、是は辟支佛、是は諸佛の無礙解脱なりと知りたまふ。是の如く種種に、五道・四生・三聚・假名・障・衆・入・界・善根・不善根、諸の結使・地・業・果を分別し、是は度すべく、是な度すべからず智を滅すと分別したまふ。是の如き等、分別して、世間の種種なる別異の性を知りて、[一五]無礙解脱を得、是の如き等の種種の別異を、佛は悉く遍ねく知り、能く壞するものなく、能く勝るものなし、是を第六力と名く。

一切至處道智力とは、有る人の言く、「業は卽ち是れ道なり、所以いかんとなれば業因緣の故に、遍ねく五道に行く。業あり、能く業を斷じて能く至る所あり。所謂三聖道分及び無漏の思なり。是を以ての故に諸業は是れ一切至る處の道なり」と。復次に、有る人の言く、「五分五智三昧〔丹に云ふ。無漏三昧禪五支〕は一切處に住して利益の事を辦ず」と。復た有る人の言く、「第四禪卽ち是なり。何となれば第四禪は一切諸定の至る處なればなり。諸經の中に說くが如し。是の善心、定心、不亂心は、心を攝して皆な第四禪の中に入る」と、復次に、有人の言く、「身念處の如きは卽ち是れ至處の道なり、是れ諸道の利益の本なり」と。復た有る人の言く、「一切の聖道是れなり。是の聖道を用ゐて、意に隨つて利益を得」と。復た有る論者の言く、「一切の善道、一切の惡道、一切の聖道、各各諸道の至る處を知るなり。毛竪經の中に說くが如し。佛は悉く遍ねく知りたまひ、能く壞するものなく、能く勝るものなし、是を第七の力と名く。

【一四】別本にては、是は「略慧なり」とあり。衣裓とは形函の如く花を盛りて献ぐる具なり。飾られたる慧の意味。

【一五】別本にては「無礙解脱を得、是の如き等の種種の別異を」を缺如す。

念に隨つて行を發し、行を發するに隨つて業を作し、業を作すに隨つて果報あることを。復次に、佛は是の種種の性智力を用ゐて、是の衆生は度すべく、是は度すべからず、是は今世に度すべく、是は後世に度すべく、是は卽時に度すべく、是は異時に度すべく、是は現前に度すべく、是は眼に見ずして度すべく、是の人は佛能く度せん、是の人は聲聞能く度せん、是の人は共に度すべく、是の人は必ず度すべく、是の人は必ず度す可らず、是の人は略說して度すべく、是の人は廣說して度すべく、是の人は略廣說して度すべく、是の人は讃歎して度すべく、是の人は折伏して度すべく、是の人は將に迎へて度すべく、是の人は棄捨して度すべく、是の人は細法もて度すべく、是の人は麁法もて度すべく、是の人は苦切して度すべく、是の人は軟語もて度すべく、是の人は苦と軟とをもて度すべく、是は邪見なり、是は正見なり、是は過去に著し、是は未來に著し、是は斷滅に著し、是は常に著し、是は有の見に著し、是は無の見に著し、是は生を欲し、是は生を厭ひ、是は富貴の樂を求め、是は厚く邪見に著し、是は因なく緣なしと說き、是は邪なる因緣を說き、是は正しき因緣を說き、是は無作業を說き、是は邪なる作業を說き、是は正しき作業を說き、是は不求を說き、是は邪求を說き、是は正求を說き、是は我を貴び、是は五欲を貴び、是は利を得るを貴び、是は飮食を貴び、是は戲樂の事を說くを貴び、是は衆を樂しみ、是は憒閙を樂しみ、是は遠離を樂しみ、是は多く愛を行じ、是は多く見を行じ、是は信を好み、是は慧を好み、是は應に守護すべく、是は應に捨つべく、是は持戒を貴び、是は禪定を貴び、是は智慧を貴び、是は悟り易く、是は講說せば乃ち悟らん、是は引導すべく、是は句句を解せん、是は利根なり、是は鈍根なり、是は中根なり、是は出で易く拔き易く、是は出で難く拔き難く、是は罪を畏れ、是は重罪なり、是は生死を畏れ、是は生死を畏れず、是は多欲、是は多瞋、是は多癡、是は多欲にして瞋、是は多欲にして癡、是は多瞋にして癡、是は多欲にして瞋あり癡あり、是は煩惱薄く、是は煩惱厚く、是は垢少く、是は垢

に、佛は是の人の多欲・多瞋・多癡なることを知りたまふ。

問うて曰く、何等か是れ多婬・多瞋・多癡の相なるや。

答へて曰く、禪經の中に說くが如く、三毒の相は是の中に應に廣く說くべし。是の如きの相を知り已つて、婬欲多き人は不淨法門にて治し、瞋多き人は慈心法門にて治し、愚癡多き人は因緣法門にて治す。是の如く欲する所に隨つて法を說く。所謂善欲には心に隨つて爲に說くこと、船の流に順ずるが如し。惡欲には苦切の語を以て敎ふること、楔を以て楔を出すが如し。是の欲智の中を、佛は悉く遍知し、能く壞するものなく、能く勝るものなし。是を第五の力と名く。

性智力とは、佛は世間の種種なる別異の性を知りたまふ。性は積習に名く。相は性より生じ、欲は性に隨つて行を作す。或時は欲に從つて性を爲し、欲を習うて性を成す。性とは[一二]深心に事を爲すに名け、欲とは緣に隨つて起るに名く。是を欲と性との分別と爲す。世間の種種の別異とは、各各の性多く、性は無量にして數ふ可らず。是を世間の別異と名く。二種の世間あり、世界世間と衆生世間となり。此の中にては但だ衆生世間のみを說く。佛は、衆生に是の如きの性あり、是の如きの欲あり、是の處より來り、若しくは、善根、不善根を成就し、度すべし、度すべからず、定なり、不定なり、必なり、不必なり、何の行を行じ、何の處に生じ、何の地に在るかを知りたまふ。復次に、佛は是の衆生の種種の性相は、所謂趣向する所に隨つて、是の如く偏へに多きを知りたまふ。(卽ち)是の如きの貴あり、是の如きの深心の事あり、是の如きの欲あり、是の如きの業あり、是の如きの行あり、是の如きの煩惱あり、是の如きの禮法あり、是の如きの定あり、是の如きの威儀あり、是の如きの知あり、是の如きの見あり、是の如きの憶想分別あり、爾所(そくばく)の結使は生じ、爾所の結使は未だ生ぜず、著する所に隨つて欲を生じ、欲に隨つて[一三]染心あり、*染心に隨つて趣向し、趣向に隨つて貴重し、貴重 隨つて常に覺觀し、覺觀に隨つて戲論を爲し、戲論に隨つて常に念じ、

城の婆羅門。佛、Musalaka山に到り給ふに、この山に跋迦梨仙、住み、世尊を信樂して下山して佛弟子となる、佛は、弟子中信解第一なりと宣ふ。

【九】羅睺羅。佛子なれども誇らず、持戒に熱心なり、比丘具足戒を受けざれば、具足比丘に同宿する能はざる制戒を守らんため、便所に眠りしことあり、佛陀、それにより。

【一〇】施跋羅(Sivali)拘利王の姫の子、七年胎中にあり、佛陀の語によりて出生す。舍利弗により出家す。佛姑甘露女とはAmṛtāで、耶輸陀羅と提婆の母であるが、起世經では一子Sivaliを生むとある。この論三では甘露味と云ふ。

【一一】隷跋多(Revata-khadiravaniya)舍利弗の弟、出家して林中に困苦に堪へて禪行せるより賞さらる。

【一二】深心。別本にては「染心」に作る。

【一三】染心。別本にては「深心」に作る。

て教へたまふ。佛は亦た分別したまはく、「是の人は餘根あり、應に信根を增生せしむべし。是の人は應に精進・念・定・慧根を生ぜしむべし。是の人は信根を用ゐて正位に入り、是の人は慧根を用ゐて正位に入り、是の人は利根なれども結使の爲め遮へらる。[四]鴦群梨摩羅等の如し。是の人は利根にして結使の爲に遮へられず。舍利弗・目連等の如きは根は鈍なりと雖も、而も遮ゆること無し。周利般陀伽の如きは、根鈍にして遮ゆる者あり。是の人は見諦所斷には根鈍なるも思惟所斷には根利なり。思惟所斷には鈍なるも見諦所斷には利なり。是の人は一切の根同じく鈍にして、同じく利なり。是の人は一切の根同じく鈍ならずして、同じく利ならず。是の人は先きの因の力大なり、是の人は今の緣の力大なり。是の人は縛を欲して解を得、是の人は解を欲して縛を得と知りたまふ。譬へば鴦群梨摩羅が、母を殺し、佛を害せんと欲して、解脫を得るが如く、一比丘の四禪を得たるも、增上慢の故に還つて地獄に入るが如し。是の人は必ず惡道に墮し、是の人は出づること難く、是の人は出づること易く、是の人は疾く出で、是の人は久久にして乃ち出づと知りたまふ。是の如き等の一切の衆生の上下根の相を皆な悉く遍ねく知り、能く壞するものなく、能く勝るものなし、是を第四の力と名く。

「衆生の種種の欲を知る智力」とは、欲は信と喜と好と樂とに名く。五欲を好むは[五]孫陀羅難陀等の如く、名聞を好むことは提婆達等の如く、世間の財利を好むことは[六]須彌刹多羅等の如く、出家を好むことは[七]耶舍等の如く、信を好むことは[八]跋迦梨等の如く、持戒を好むことは[九]羅睺羅等の如く、施を好むことは[一〇]施跋羅〔丹註に云ふ。佛姑甘露女の生む所なりと〕の如く、頭陀、遠離を好むことは摩訶迦葉の如く、坐禪を好むことは[一一]隷跋多等の如く、慧慧を好むことは舍利弗等の如く、多聞を好むことと阿難等の如く、毘尼を知ることを好むことは優婆離等の如し。是の如く佛弟子は、各各好む所あり、凡夫人も亦た各各喜ぶ所あり。或は婬欲を憙ぶあり、或は瞋恚を憙ぶあり。復次

【四】鴦群梨摩羅（Aṅgulimālya）指鬘と譯す。

【五】孫陀羅難陀（Sundarananda）美貌にして姻婦に迷ひ、家に歸れず、出家す。その後にも亦た不淨を行ず。

【六】須彌刹多羅（Sunakṣatra）善宿と譯す。初め佛の侍者たりしが、後に佛の教を捨て、還俗して惡口す。

【七】耶舍（Yaśa）ベナレスの富者の子なりしが、榮華の生活の空虛を感じて出家す。

【八】跋迦梨（Vakkali）舍衛

を用ゐて諸法を分別し、沒心の中にて心を攝せんと欲するが如し。若し爾らざる者をば不轉治と名く。是の定中に應に時及び住處を分別すべし。若し身瘦羸せば、是れ定を行ずる時に非ず。菩薩が苦行せし時の如きは、是の念を作さく、「我は今禪定を生ずること能はず」と。若しくは多人の處は、亦た定を行ずる處に非ず。

復次に、佛は是の[三]禪定の失と、是の禪の住と、是の禪の增益と、是の禪の到涅槃とを知りたまふ。復次に、佛は是の人は、定に入り難くして、定を出で難し。(また)入り易くして出で易し。入り易くして出で難し。入り難くして出で易しと知りたまふ。佛は、是の人は是の如きの禪を得べきことを知り、是の人は禪を失して五欲を受けんことを知り、是の人の五欲を受け已つて、還た禪を得、是の禪に依つて阿羅漢を得ることを知りたまふ。是の如き等の一切の諸の禪定解脫は、卽ち是れ三昧なり。是の禪定を佛は甚深の智慧を以て盡く知りたまひ、能く壞するものなく、能く勝るものなし。是を第三の力と名く。

「衆生の上下根を知る智力」とは、佛は衆生の是は利根・鈍根・中根と知りたまふ。利智を名けて上と爲し、鈍智を名けて下と爲す。佛は是の上下根の智力を用ゐて、一切の衆生を分別すらく、「是は利根、是は中根、是は鈍根。是の人は是の如きの根にして、今世に但だ能く初果のみを得、更に餘を得ること能はず。是の人は但だ能く第二第三第四の果を得。是の人は但だ能く初禪のみを得、是の人は但だ能く第二第三第四の禪を得、乃至滅盡定も亦た是の如し。是の人は當に時解脫の證を得べし。是の人は當に不時解脫の證を作すべし。是の人は能く聲聞の中に於て第一たるを得、是の人は能く辟支佛の中に於て第一たるを得、是の人は六波羅蜜を具足して、能く阿耨多羅三藐三菩提を得」と。是の如く知り已つて、或は略說を爲して度を得せしめ、或は廣說を爲して度を得せしめ、或は略廣の說を爲して度を得せしめ、或は軟語を以て敎へ、或は苦語を以て敎へ、或は軟苦語を以

【三】別本には「是の禪は失を爲する故に、是の禪は住を爲す故に是の禪は增益を爲す故に、是の禪は、到涅槃に達すると爲すを知りたまふ」とあり。

ず、宿世の善業已に熟す、是の因緣を以ての故に今惡を爲すと雖も、而も好處に生ず。或は死に臨む時、善の心心數法生じ、是の因緣の故に亦た好處に生ず。善を行ずる人惡處に生ずとは、今生の善未だ熟せざるに、過去の惡已に熟す、是の因緣を以ての故に、今善を爲すと雖も而も惡處に生ず、或は死に臨むの時、不善の心心數法生じ、是の因緣の故に亦た惡處に生ず。

問うて曰く、熟不熟の義は爾るべし、死に臨むの時の、少許の時の心、云何んぞ能く終身の行力に勝るや。

答へて曰く、是の心は時頃少なしと雖も心力猛利なり、火の如く毒の如し、少なしと雖も能く大事を爲す。是の死に垂んとする時の心は、決定して猛健なるが故に、百歲の行力に勝る。是の後心を名けて大心と爲す。身及び諸根を捨つる、事急なるが故なり。人の陣に入つて、身命を惜まざるを、名けて健と爲すが如し。阿羅漢の如きは是の身の著を捨つるが故に阿羅漢道を得。是の如き等種種の罪福の業報が。報を轉ずることも、亦た是の如くなるべし。聲聞の人の如きは、但だ惡業の罪報、善業の福報のみを知つて、是の如く細に分別すること能はず。佛は悉く遍ねく是の業及び業報を知りたまふ、智慧の勢力の無礙無盡にして、能く壞することなきが故なり。是を第二の力と名く。禪定解脫三昧淨垢分別智力とは、禪は四禪に名く佛は是の禪の佐助の道法、名相・義分・次第・熏習・有漏・無漏・學・無學・淨垢・味・不味・深淺・分別等を知りたまふ。八解脫は禪の中に相を分別して說くが如し。禪に一切の色界定を攝し、解脫を說いて一切の定、禪波羅蜜を攝す。即ち是の諸の解脫禪定三昧、解脫定三昧を皆な名けて定と爲し、定を名けて心の不散亂と爲す。垢を愛・見・慢等の諸の煩惱に名け、淨を、眞の禪定は、愛・見・慢等の煩惱を雜へざること眞金の如くなるに名け。分別は諸定の中に一心行・不一心行・常行・不常行・難入・易入・難出・易出・別取相・總取相・轉治・不轉治あるに名く。轉治とは、婬欲の中の慈心、瞋人の不淨觀、愚癡の人が邊無邊を思惟し、掉戲の心の中に智慧

知りたまふ。所謂刀杖か、教勅して殺せる等か、自殺か、人を遣りて殺さしめたるかなり。諸餘の惡業も亦た是の如く、善業も亦た是の如し。是の如く、布施・持戒・修善も、施中に施す所は、何等の土地、房舍、衣服、飮食、醫藥、臥具、七寶、財物なるか。戒中の受けたる戒は自然戒か、心生戒か、口言戒か、一行戒か、少分戒か、多分戒か、滿分戒か、一日戒か、七善道戒か、十戒か、具足戒か、定共戒か。善福の中の修は、初禪二三四禪なるか、慈心か、悲喜捨心なるかを知りたまふ。是の如き等の善業の因緣。若しくは慳貪、若しくは瞋恚、若しくは怖畏、若しくは邪見、若しくは惡知識等の種種の惡業の因緣。福業の因緣、若しくは信、若しくは憐愍、若しくは恭敬、若しくは禪定、若しくは智慧、若しくは善知識等の種種の善業の因緣あり。是の諸業は自在にして、一切の天、及び人にして、是の諸の業相を能く轉ずる者なし。億千萬世に於て常に衆生を隨逐して捨てざること、債主の人に隨ふが如し。因緣具足することを得れば、便ち果報を與ふること、地中の種子の因緣時節の和合を得れば、便ち生ずが如し。是の業は能く衆生をして、六道の中に生を受けしむること、箭よりも駛疾(すみやか)なり。一切衆生は皆な諸の業報の分あること、父母の財を遺せば、諸子皆な分を得べきが如し。是の業の果報は、時到れば遮止すべからざること、劫盡の火の如し。衆生の生ずべき處に隨つて、處處に安置すること、大國王が其の所應に隨つて官職を與ふるが如し。人の命終の時には、是の業來つて、其の心を蔭覆すること、大山の物を映ずるが如し。是の業は能く種種の身を與ふること、工畫師の種種の像を作るが如し。若し人[二]正行を以てせば業は、則ち好報を與へ、若し邪行を以てせば業は、則ち惡法を與ふること、人の王に事ふるに、事に隨つて報を得るが如し。是の如く、諸の業相果報を分別す。

　復次に、分別業經の中に、佛、阿難に告げたまへるが如し。「惡を行ずる人、好處に生じ、善を行ずる人惡處に生ず」と。阿難の言さく、「是の事は云何」と。佛の言はく、「惡人は今世の罪業未だ熟せ

【二】別本には「若し人、正行を以て、業を御し、善法を將つて發へば、還つて好報を與へ。若し邪行を以て、業を御し、不善を將つて發へば、還つて惡報を與ふ。」とある。

必受報業は離るることを得べからず、或は時を待ち、人を待ち、處を待つて報を受く。福人の如きは應に轉輪聖王と共に福を受くべし、轉輪聖王の好世を待ち、是の時に出でて乃ち受くるは、是を時を待つと爲す。人を待つとは、人は卽ち是れ轉輪聖王なり、處を待つとは、轉輪聖王の出づるところの處なり。　復次に、是の必受報の業は伎能功勳を待たず、若しくは醜に、若しくは好に、求めずして自ら來る。天上に生るゝの人には福樂自ら至り、地獄の中の人には罪苦自ら追ふが如く、因緣を待たず、此の業は深重なるが故なり。　復次に、必受報の業は、毘瑠璃の軍が、七萬二千の諸の得道の人、及び無量の五戒の優婆塞を殺すに、目連等の如き大神通人も救ふこと能はざる所なるが如く、薄拘羅が後母に、火中・湯中・水中に投著せらるれども死せざるが如し。佛の諸國に遊び給ふに、出家して行乞し、膳供を須ゐ給はずと雖も、而も五百乘の車に王の所食を載せ、葉中に粳米を生じ、飯に隨つて百味の羹あるが如し。是の如き等の善惡の業は必ず受け、餘者は必ず受けず。欲界は三種の業報を受くる處なり。(所謂)樂受業、苦受業、不苦不樂受業なり。色界は二種の業報を受くる處なり。(所謂)樂受業、不苦不樂受業なり。無色界は一種の業報を受くる處なり。(所謂)不苦不樂受業なり。或は事を待つとは、是の事に依つて業報を受くることを得るなり。弗迦羅婆王の池中に千葉の金色の蓮華を生じ、大さ車輪の如く、是に因つて大會は快樂にして、多くの人出家得道せるが如し。佛は一切衆生の諸業を造る處は、或は欲界・色界・無色界にして、欲界にては何の道中に在り、若しくは天道にては何の天中に在り、若しくは人中にては何の天下に在り、若しくは閻浮提にては何の國に在り、若しくは是の國にては何の城、何の聚落、何の精舍、何の土地にあり、若しくは是の城にては何の里、何の巷に在り、何の舍にて何の處に在りと知りたまふ。(又)是の業は何等の時作れるかを知りたまふこと、過去一世二世乃至百千萬世なり。是の業の果報は、幾か已に受け、幾か未だ受けず、幾かは必ず受け、幾かは必ずしも受けず(と知りたまふ。)(又)善・不善の用ふる所の事物を

ぜず。但だ五識衆の中にて著して相續あり。但だ五識衆のみ能く緣ずるを能緣の相と名け、能く無色法を緣じ、能く過去未來を緣じ、能く三世を離るるの法を緣じ。但だ五識衆の中のみに增觸、明觸あり、禪定を修し、若くは善律儀・不善律儀を受け、若しくは憂喜し、鼻識・[一]舌識に隱沒の無記あり、若しくは有覺無觀あり、若しくは諸根を增益すとせば皆な是の處なし。凡夫人の第六識は、我を離れて行ずとせば是の處なし。是の如き等の無量は是の處なし。是處も亦是の如し。佛は是處不是處を知つて分別籌量し、度すべき者には爲に法を說き、度すべからざる者には爲に因緣を作したまふ。譬へば良醫の病の治すべきと治すべからざるとを知るが如し。聲聞、辟支佛は知る所少少なるが故に、或は度すべからざる者を度せんと欲す、首羅の度すべきを度せざるが如く、舍利弗の（度すべくして）度せざる所の者の如し。是の佛は是の事なし、能く壞するものなく、能く勝るものなし、悉く遍知したまふが故なり。是を初力と名く。業報智力とは、身口の作るところの業と、及び此の生の無作の業、受くる所の戒の業、亦は惡業にして、日夜に隨つて業用を生じ罪福の業を生ず。是の業を佛は略して三處の攝と說きたまふ、是を一切業相と名く。佛は一切衆生に、業は過去にして報も亦た過去なる有り、業は過去にして報は現在に在る有り、業は過去にして報は未來に在る有り、業は過去にして報は過去と現在とに在る有り、業は過去にして報は過去と未來とに在る有り、業は過去にして報は現在と未來とに在る有り、業は過去にして報は過去と未來と現在とに在る有るを知りたまふ。現在の業も亦た是の如し。　復次に、善心の中に善・不善・無記の業報を受く、不善心・無記心も亦た是の如し。　復次に、樂業の因緣の故に樂報を受け、苦業の因緣の故に苦報を受け、不苦不樂業の因緣の故に不苦不樂の報を受け、現報業の因緣の故に現報を受け、生報業の因緣の故に生報を受け、後報業の因緣の故に後報を受け、不淨業の因緣の故に惱報を受け、淨業の因緣の故に無惱報を受け、雜業の因緣の故に雜報を受く。　復次に、二種の業あり、必受報業と不必受報業なり。

【一】「鼻識舌識に隱沒の無記あり」は別本には次下の、「是の處なし」。と「凡夫人」との間にあり。

自ら說きたまふ。諸の論議師の輩は是の佛語に依つて、更に廣く是處・不是處を說けり。若し、佛に闕失、罪過あり（と言ひ）、若しくは諸の賢聖は外道の師を求め、若しくは諸の賢聖は自ら我は是れ佛なりと言ひ、若しくは諸の賢聖は惡道に墮し、若しくは見諦所斷の結使を更に生じ、若しくは諸の賢聖は罪を覆藏し、若しくは須陀洹は二十五有なりと言はば、皆な是の處なし。賢聖の分別の、中に廣く說くが如し。五逆の人、五種の黃門、四惡道に墮するの衆生、鬱多羅越の人、魔の眷屬は三障に遮へらるゝも、若し道を得と言はば皆な是の處なし。說法を輕んずる者、法を輕んじ自ら輕んじ、戒を破り愚癡にして、若し法喜を具足し得と言はば亦た是の處なし。自ら、我は是れ佛なりと言ひ、此の身口の惡を悔いずして佛を見たてまつらんと欲し、若しくは破僧罪を悔いずして、佛を見たてまつらんと欲し、邪定より正定に入り、正定より邪定に入り、正定より不定に入り、佛法を除いて別に眞の得道ありとし、人は應に得道すれば、身は若しくは死すべしとせば皆な是の處なし。因緣生を除いて識は名色を出して更に法ありとせば是の處なし。佛は使を遣りたまふに、事未だ訖らざるに遮礙せらるれば是の處なし。慈三昧に入れるに、若しくは他の因緣にして死して滅盡定に入り、見諦道の中に在るに、若しくは死すとせば是の處なし。若し佛及び佛母を害することは是の處なし。轉輪聖王の女寶、象馬、主藏の臣、主兵の臣は若しくは胎中に在つて死し、母子夭喪することは是の處なし。鬱多羅越の人・女寶・佛母は命終して、次の身に惡道に入ることは皆なこの處なし。有爲は常にして涅槃は無常なり、凡夫の人能く非有想非無想の結使を斷じ、一切の相を取る、禪定の中に聖道を修む。無漏道は有漏の因なり、若し地は濕相、水は堅相火は、冷相、風は住相とせば皆な是の處なし。無明は諸行を生ずること能はず、乃至生は老死を生ずること能はずとせば是の處なし。一心は一時に五識衆を生じ、能く分別して相を取りて、若しくは著し、若しくは離れ。若しくは眠りて能く身業口業を起し、若しくは眠りて能く禪定に入るとせば是の處あること無し。但だ五識のみ相續して生じて、意識を生

種種に別異するを、佛は悉く遍知したまふが故に力と名く。二種の欲は二種性の因緣に由るが故に、遍ねく衆生の深心の所趣を知りたまふが故に力と名く。一切衆生は種種の性の因緣の故に二種の道を行ず、所謂善道と惡道となり。種種の門の至るところの處を、佛は悉く遍知したまふが故に力と名く。過去未來世中の、因緣果報に智慧無礙なる、是を宿命生死智力と名け、過去未來の因果を知り。已に悉く知り、方便して因緣果報の相續を壞する、是を漏盡力と名く。佛は三世の中の二種の因緣を知り、衆生の根・欲の性を分別・籌量して、漏を盡くさんが爲の故に、法を說きたまふ、是れ漏盡力なり。

問うて曰く、何等をか是處・不是處力と爲すや。

答へて曰く、佛は一切諸法の因緣果報の定相、(卽ち)是の因緣よりは、是の如きの果報を生じ、是の因緣よりは、是の如きの果報を生ぜざることを知りたまふ。何となれば、多性經の中に說くが如くんば、是處・不是處の相とは、女身にして轉輪聖王と作ることは是の處(ことわり)なし。何となれば一切の女人は、皆な男子に屬して自在を得ざればなり。女人は尙ほ轉輪聖王と作ることすら得ず、何に況んや佛と作るをや。若し女人が解脫涅槃を得れば亦た男子に因つて得、自然に道を得ること有ること無し。二の轉輪聖王が一時に出世するは是の處(ことわり)なし。何となれば怨業を成就することなきが故なり。二の轉輪聖王すら尙ほ世を同じうせず。何に況んや二佛をや。惡業が樂報を受くるを得るは是の處なし、惡業は尙ほ世間の樂すら得ること能はず、何に況んや出世の樂をや。若し惡行して天に生ぜば是の處なし、惡行は尙ほ生天すら得ること能はず、何に況んや涅槃をや。五蓋は心を覆うて散亂し、七覺を修することを離れて、而も涅槃を得ることは是の處なし、五蓋、心を覆ひ、七覺を修することを離れては、尙ほ聲聞道すら得ること能はず。何に況んや佛道をや。心に覆蓋なくんば佛道を得べし、何に況んや聲聞道をや。是の如き等の是處・不是處は多性經の中に、佛口づから

問うて曰く、佛は無量の力あり、何を以ての故に但だ十力のみを說くや。

答へて曰く、諸佛には無量の力ありと雖も、人を度する因緣の故に、十力を說けば其の事を成辦するに足る。是處と不是處との智力を以て、衆生の是は度すべく、是は度すべからずと分別し籌量し、業報智力を以て、是の人は業障、是の人は報障、是の人の無障と分別・籌量し、禪定解脫三昧智力を以て、是の人は味に著せり、是の人は味に著せずと分別・籌量し、上下根智力を以て、衆生の智力の多少を分別・籌量し、種種欲智力を以て、衆生の樂とする所を分別・籌量し、種種性智力を以て、衆生の深心の趣く所を分別籌量し、一切至處道智力を以て、衆生の解脫門を分別籌量し、宿命智力を以て、衆生の先に從來する所を分別し、生死智力を以て、衆生の生處の好醜を分別し、漏盡智力を以て、衆生の涅槃を得ることを分別・籌量したまふ。佛は是の十種の力を用ゐて、衆生を度脫したまふこと、審諦にして錯らず、皆な具足することを得、是を以ての故に佛には無量の力ありと雖も、但だ此の十力を說くなり。　復次に、是處・不是處力は定んで是の因緣より、是の果報を出すことを知り、是の中に總べて九力を攝す。衆生を度せんと欲するが爲の故に、初力の中に於て分別するに九種あり。何となれば是の世間の衆生は、現前に穀が種より出づるを見れども、而も知ること能はず、何に況んや心心數法の因緣をや。佛は內外の因緣果報に於て、了了に遍ねく知りたまふが故に、名けて力と爲す。佛は是の衆生が業煩惱の因緣の故に縛せられ、淨き禪定・三昧・解脫の因緣の故に解かるることを知りたまふ。佛は是の一切衆生の三世の三種の諸業、諸の煩惱の輕重・深淺・麁細を、悉く遍知したまふが故に力と名く。佛は一切衆生の諸の禪定・解脫・三昧の大小深淺、解脫の因緣を、悉く遍ねく知りたまふが故に力と名く。衆生の鈍根なるは、後身の爲の故に、罪福業の因緣を作り、利根の人は、生ぜざらんが爲の故に、諸業を集む。佛は悉く此の上下根の好醜の相を知りたまふが故に力と名く。一切衆生の二種の欲は、上下根の因緣を作り、二種の欲は善惡の

故に應に佛を念ずべし。是を以ての故に菩薩摩訶薩は、佛の十力・四無所畏・十八不共法を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

復次に、佛、王舍城の耆闍崛山の中に在して、是の般若波羅蜜を說きたまふ時、佛の四部衆、及び諸の外道の在家・出家、諸の天龍鬼神等、種種の大衆集會せり。佛は三昧王三昧に入り、大光明を放ち、遍ねく恒河沙等の世界を照したまふに、地は六種に震動す。(時に)是の般若波羅蜜、六波羅蜜、乃至三無漏根を說きたまへり。是の中に衆生あつて疑ふらく、「何等の力あり、幾種の力あるが故に、能く是の如き不可思議の感動利益を作したまふや」と。佛は、衆生の心に、是の如きの疑あることを知りたまふが故に言はく、「我に諸法實相の智力あり。是の力に十種の用あり。是の十種の智の故に、能く是の如きの感動變化を作す。亦た能く是に作せるところに過ぎたり」と。是を以ての故に言ふ。十力を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと。　復次に、佛弟子にして世世に善根を植うるも、少罪の緣を以ての故に、外道に墮つるなり。諸の外道は常に言く、「佛は實に功德力を有するに非ず、是は幻術の力にて、人心を誑惑するなり」と。佛弟子の外道に墮せる者は、心に疑ふらく、「若し爾れば佛は大人に非ず」と。是の惡謗を滅せんと欲したまふが故に言はく、「我は實に十力、四無所畏を有するが故に、衆生を度す、是れ幻誑に非ざるなり」と。　復次に、諸の菩薩は菩薩の道を修するに、苦行の事は辦じ難く、成じ難きが故に懈息せんと欲す。是の故に佛の言はく、「是の十力を行へば當に無量の果報を得べし」と。譬へば估客の主が商人を慰喩して言ふが如し。「汝等愼んで疲倦すること勿れ、精勤し努力せば、寶山に至ることを得て、當に七寶の如意寶珠を得べし」と。佛も亦是の如く、諸の菩薩を安慰して言はく、「疲厭するを得ること無く、當に勤めて精進して、菩薩の道を修すべし。是の十力を行ぜば、當に無量の果報を得べし」と。是の如き等の種種の利益、因緣の故に十力等を說きたまへり。

問うて曰く、是の十力は菩薩も未だ得ず、聲聞辟支佛も得る能はざる所なり。今何を以てか說くや。

答へて曰く、聲聞の人は得ること能はずと雖も、若し是の十力の功德を聞かば、是の念を作さん、「佛は是の如きの大功德あり」と。自ら慶びて言く、「我等は善利にして、益を蒙ること少からず」と。信心淸淨なることを得て、盡苦の道に入らん。菩薩之を聞かば、菩薩の道を懃修し、當に是の如き十力等の大功德の果を得べし。復次に、聲聞の人及び菩薩ありて、念佛三昧を修するに、但だに佛身を念ずるのみに非ず、當に佛の種種の功德、法身を念ずべく、應に是の念佛を作すべし。一切の種と、一切の法とを能く解するが故に、一切智人と名け、一切法を如實に善く分別して說くが故に、一切見人と名け、一切法を現前に知るが故に、一切知見無礙人と名け、心、一切衆生に等しきが故に、大慈悲人と名け、大慈悲あるが故に、名けて世救と爲し、如實の道より來たまふが故に、名けて如來と爲し、一切世間の供養を受くべきが故に、名けて應供人と爲し、不顚倒の智慧を成就したまふが故に、正遍知と名け、戒定慧の智を成就したまふが故に、明行と名け、成じて復た還りたまはざるが故に、善逝と名け、世間の總相別相を知りたまふが故に、世間解と名け、善く出世間安隱の道を說きたまふが故に、無上調御師と名け、三種の敎法を以て、衆生を度したまふが故に、天人師と名け、一切世間の煩惱の睡より能く自ら覺め、亦よく人を覺したまふが故に、名けて覺人と爲し、一切の所願を具足したまふが故に、有德と名け、十力を成就したまふが故に、堅誓と名け、四無畏を得たまふが故に、人師子と名け、無量甚深の智を得たまふが故に、大功德海と名け、一切を記說したまふこと無礙なるが故に、如風と名け、一切の好醜に憎愛なきが故に、如地と名け、一切結使の薪を燒きたまふが故に、如火と言ひ、善く一切煩惱の習を斷じたまふが故に、具足解脫と名け、最上の處に住したまふが故に、名けて世尊と爲す。佛は是の如き等の諸の功德を有したまふ。

を差すこと、病を差す藥を知らざることも、亦た是の如し。二には四種の中に於て、悉く皆な遍ねく知り、遍ねく藥を知り、遍ねく病を知る。聲聞の人は、小醫の遍ねく知ること能はざるが如く、菩薩摩訶薩は、大醫の病として知らざる無く、藥として識らざる無きが如し。是を以ての故に、聲聞法は應に具足すべく、菩薩法は當に學すべし。

佛の十力とは、是處と不是處とを實の如く知るは一の力なり。衆生の過去・未來・現在の諸の業、諸の受法を知り、造業の處を知り、因緣を知り、果報を知るは二の力なり。諸の禪と解脫と三昧と定を知り、垢淨の分別の相を實の如く知るは三の力なり。他の衆生の諸根を知り上下の相を實の如く知るは四の力なり。他の衆生の種種の欲を知るは五の力なり。世間の種種の無數の性を知るは六の力なり。一切の道の至る處の相を知るは七の力なり。種種の宿命、共相共因緣、一世二世乃至百千世、劫初、劫盡に(於いて)、我彼の衆生の中に在つては、是の如きの姓名、飲食、苦樂、壽命の長短なりき、彼の中に死して是の間に生じ、此の間に死して還た是の間に生じ、此の間の生の名姓、飲食、苦樂、壽命の長短も、亦た是の如しと知るは、八の力なり。佛の天眼の淨きことは諸の天人の眼に過ぎたり。衆生の死時・生時、端正・醜陋、若しくは大、若しくは小、若しくは惡道に墮ち、若しくは善道に墮ち、是の如きの業因緣にして報を受け、是の諸の衆生は。惡の身業を成就し、惡の口業を成就し、惡の意業を成就し、聖人を誹毀する邪見もて、邪見の業を成就し、是の因緣の故に身壞して死する時、惡道に入り地獄の中に生ず。是の諸の衆生は善の身業を成就し、善の口業を成就し、善の意業を成就し、聖人を誹らざる正見もて、正見の業を成就し、是の因緣の故に身壞死する時、善道に入り、天上に生ずるを見たまふは、九の力なり。佛は諸の漏盡くるが故に、無漏心解脫と、無漏智慧解脫とをもて、現在の法の中に自ら「我が生は已に盡き、持戒已に作り、後有盡きたり」と識知する如實の知は、十の力なり。

問うて曰く、若し菩薩は三十七品の諸法を具足せば、云何んぞ聲聞法の位に入らざるや。

答へて曰く、具足とは具足して觀知するにして、而も證を取らず、了了に觀知するが故に、具足と名く。佛の說きたまふが如し。

『一切のものは杖痛を畏れ、壽命を惜まざるはなし。己を恕して喩と爲すべく、杖を群生に加へざれ。』

一切は杖痛を畏ると言ふと雖も、無色界の衆生は身なく、色界には身ありと雖も、而も鞭杖なし。欲界の中、諸佛、轉輪聖王、夜摩天已上は皆な杖楚を畏れず。杖處を得ることを畏る者の爲の故に、一切と言ふ。具足も亦た是の如く、證を求め、法に著することを爲さざるが故に、具足と言ふ。復次に、我は先に說けり衆生を捨てず、不可得空智を以て和合するが故に、聲聞地に墮せずと。

問うて曰く、六波羅蜜より三無漏根に至るまで、但だ具足すべしと言へり。此より以後、何を以ての故に皆な、是の事を得んと欲し、知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべしと言ふや。

答へて曰く、聲聞法には量あり限あるが故に、應に具足すべしと言ふ。此より已下は、是れ諸佛の法にして、甚深無量なり。菩薩は未だ得ざるが故に、「是の事を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と言ふなり。復次に、聲聞の法は解し易く知り易きが故に具足と言ひ、菩薩の法と佛の法とは、解し難く知り難きが故に、當に學すべしと言ふ。復次に、聲聞の法は總相にして、但だ苦を知り、苦の因を知り、苦の盡を知り、苦を盡すの道を知るなり。譬へば二種の醫の如し。一は但だ病を知り、病の因を知り、病を差すことを知り、病を差す藥を知る。而も、一切の病を知らず、一切の病の因を知らず、一切の病を差すことを知らず、一切の病を差す藥を知らず。若しくは復た但だ人の病を治するを知つて、畜生の病を治することを知らず。或は能く一國土を治するも、餘の國土を治すること能はず。能く數十種の病を治する有るも、悉く四百四種の病と病の因と、病

卷の第二十四

初品第三十九……「十力」釋論

【經】 舍利弗よ、菩薩摩訶薩、遍ねく、佛の十力と四無所畏と四無礙智と十八不共法と大慈大悲を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。

【論】 問うて曰く、是の十力と四無所畏等は是れ佛の無上法なり、應當に前に說くべし、何を以ての故に先きに九相八念等を說けるや。

答へて曰く、六波羅蜜は是れ菩薩の用ふべき所なれば先に已に說けり、三十七品乃至三無漏根は、是れ聲聞法なり。菩薩は是の六波羅蜜を行じて力を得るが故に、聲聞辟支佛地を過ぎんと欲し、亦た聲聞辟支佛に向へる人を敎化して、佛道に入らしめんと欲す、是の故に是の小乘の法が、一切衆生を捨てて利益する所なきを呵するに、諸の聲聞人の若きは言はん。「汝は是れ凡夫人なり、未だ結使を斷ぜず、是の法を行ずること能はず」と。是の故に空しく呵す。是の故に佛の言はく、「菩薩は應に三十七品等を具足すべし」と。諸の聲聞の法は不可得なるが故に、是の諸法を行ずと雖も不可得なるを以ての故に、衆生は邪行を行ずるが爲の故に、此の正行を行じ、是の諸法の不可得空を捨てず、亦た疾く涅槃の證を取らず。若し菩薩、是の小乘を解せず行ぜずして、而も但だ呵すれば、誰が當に肯へて信ずべき。譬へば釋迦牟尼佛の如きは、若し先づ六年の苦行を行ぜずして、呵して非道と言はば、人の信受すること無けん。是の故に自ら苦行を行ずること餘人に過ぎ。佛道を成ずる時、是の苦行道を呵するに、人皆な信受す。是の故に六波羅蜜の後に次第に聲聞法を行ず。 復次に、此れは但だ是の聲聞法のみに非ず、是の法の中には和合して、衆生の意を捨てず、一切の佛法を具足し、不可得空智を以ての故に、菩薩法と名く。

入り、乃至未だ無生法忍の果を得ず、是を未知欲知根と名く。此の中に諸法實相を知ること、了了なるが故に知根と名く。是より無生法忍の果を得、阿鞞跋致地に住して、受記を得、乃至十地を滿てて、道場に坐して金剛三昧を得、其の中間に於て名けて知根と爲す。一切の煩惱の習を斷じ、阿耨多羅三藐三菩提を得、一切の知る可きの法に智慧遍滿するが故に、名けて知已根と爲す。〔丹云ふ。三根竟ると。〕

意根あり、三受の中には必ず一受あり、是の故に但だ三根を說く。　復次に、二十二根には、善あり、不善あり、無記ありて雜す、是の故に應に具足すべしと說かず。是の三根は受衆行衆識衆に攝す。未知欲知根は六地に在り。知根と知已根とは九地に在り。三根は四諦を緣じ六想と相應す。未知欲知根は三根の因、知根は二根の因、知已根は但だ知已根の因なり。未知欲知根は次第に二根を生じ、知根は次第に或は有漏根を生じ、或は知根を生じ、或は知已根を生ず。知已根は或は有漏根を生じ。或は知已根を生ず。是の如き等は阿毘曇門を以て廣く分別して說けり。　復次に、未知欲知根を諸法實相と名く。未知欲知の故に信等の五根を生じ、是の五根の力の故に能く諸法實相を得。人の初めて胎中に入りて二根(即ち)身根と命根とを得るが如し。爾の時に段肉未だ具せず、諸根未だ別知する所あること能はず。五根を成就すれば能く五塵を知るが如し。菩薩も亦た是の如し。初め發心して佛に作らんと欲すれども、未だ是の五根を具足せず、願ありて諸法實相を知らんと欲すと雖も、知ることを得ること能はず。菩薩はこの信等の五根を生ずれば、則ち能く諸法實相を知る、眼の如きは四大及び四大造色の和合するを名けて眼と爲す。先きに四大と四大造色ありと雖も、未だ清淨ならざるが故に眼根と名けず、善根を斷ぜざるの人は信ありと雖も、未だ清淨ならざるが故に名けて根と爲さず。若し菩薩、是の信等の五根を得れば、是の時能く諸法の相は不生不滅、不垢不淨、非有非無、非取非捨、常寂滅にして眞淨なること、虛空の如く、示す可らず、說く可らず、一切語言の道過ぎ、一切の心・心數法の所行を出づること、涅槃の如し。是れ則ち佛法なりと信ず。菩薩は信根の力を以ての故に、能く精進根の力を受くるが故に、懃行して不退不轉なり。念根の力の故に、不善法をして入らしめず、諸の善法を攝す。定根の力の故に、心の五欲の中に散ずるを能く實相の中に攝し、慧根の力の故に、佛智慧の中に於て、少多の義味を得て壞す可らず。五根所依の意根は必ず受と具して、若しくは喜、若しくは樂、若しくは捨なり。是の根に依つて菩薩の位に

觀と相應する法にして、若しくは善、若しくは無記なり。無覺無觀法とは、覺觀の法を離れたる一切の色、心不相應行及び無爲法なり。有覺有觀地とは、欲界・未到地・梵世なり。無覺有觀地とは、禪の中間にして、善く是の地を修すれば大梵王と作る。無覺無觀地とは、一切の光音と、一切の遍淨と、一切の廣果と、一切の無色地となり。中に於て上妙なる者は是れ三三昧なり。何等か是れ三昧なる。空等の三三昧、乃至金剛及び阿羅漢、辟支佛の諸の三昧。觀十方佛三昧、乃至首楞嚴三昧。斷一切疑三昧より乃至三昧王等の諸佛の三昧あり。是の如く種種に分別す。略して三三昧の義を說き竟んぬ。

【經】三根とは未知欲知根と、知根と、知已根となり。

【論】未知欲知根とは、無漏の九根の和合せる信行法行の人の、見諦道の中に於けるを未知欲知根と名く。所謂信等の五根と喜(根)樂(根)捨根と意根となり。信解見得の人の思惟道の中にて、是の九根轉ずるを知根と名け、無學道の中の是の九根を知已根と名く。

問うて曰く、何を以ての故に二十二根の中に於て但だ是の三根のみを取るや。

答へて曰く、利解了了自在なるの相、是を名けて根と爲す、餘の十九根は根相を具足せざるが故に取らず。是の三根は利くして、能く直入して涅槃に至り、諸の有爲法の中の主なるが故に自在を得、能く諸根に勝れたり。復次に、十根は但だ有漏自得にして利益する所なきが故に、九根は不定にして、或は有漏、或は無漏なるが故に菩薩は應に具足すべしと說かず。

問うて曰く、十想は亦は有漏、亦は無漏なり、何を以ての故に應に具足すべしと說くや。

答へて曰く、十想は皆な是れ助道にして、涅槃を求むる法なり。信等の五根は是れ善法なりと雖も、盡く涅槃を求めず、阿毘曇の中に說くが如し。「誰か信等の根を成就して善根を斷ぜざる者ある」と。復次に、若し五根清淨なれば、變じて無漏と爲り、三根の中に、已に攝す。是の三根の中には必ず

に曲れるも、竹筒の中に入るれば則ち直きが如し。是の三昧に三種あり。欲界と未到地と、初禪とは覺と觀とに相應するが故に、有覺有觀禪と名け、二禪の中間は但だ觀と相應するが故に、無覺有觀と名け、第二禪より乃至有頂地は、覺と觀とに相應せざるが故に、無覺無觀と名く。

問うて曰く、三昧と相應する心數法は乃ち二十に至る、何を以てか但だ覺と觀とを說くや。

答へて曰く、是の覺と觀とは三昧を撓亂す、是を以ての故に是の一事を說くなり。(こは)善なりと雖も、而も是れ三昧の賊にして、捨離すべきこと難し。有る人の言く、「心に覺觀あれば三昧なし」と。是を以ての故に、佛、說きたまはく、有覺有觀三昧は、但だ牢固ならず。覺觀の力小微なれば、是の時三昧あることを得べしと。是の覺觀は能く三昧を生じ、亦た能く三昧を壞す。譬へば風は能く雨を生じ、亦た能く雨を壞するが如し。三種の善の覺觀は能く初禪を生ず。初禪を得る時、大歡喜の覺觀を發するが故に、心散じて還つて失す、是を以ての故に、但だ覺觀を說く。

問うて曰く、覺と觀とには何の差別あるや。

答へて曰く、麁なる心相を覺と名け、細なる心相を觀と名く。初め緣中に心發するの相を覺と名け、後好醜を分別し籌量するを觀と名く。三種の麁覺あり、欲覺と瞋覺と惱覺となり。三種の善覺あり、出要覺と無瞋覺と無惱覺となり。三種の細覺あり、親里覺と國土覺と不死覺となり。六種の覺は三昧を妨げ、三種の善覺は能く三昧の門を開く、若し覺觀過多なれば、還つて三昧を失す。風は能く船を使ふも、風過(多)なれば則ち船を壞るが如し。是の如く種種に覺觀を分別す。

問うて曰く、經に三種の法を說けり、有覺有觀法・無覺有觀法・無覺無觀法と、有覺有觀地・無覺有觀地・無覺無觀地となり。今は何を以てか但だ三種の三昧を說くや。

答へて曰く、妙にして用ふべき者を取るなり。有覺有觀法とは、欲界・未倒地・初禪の中の覺觀と相應する法にして、若しくは善、若しくは不善、若しくは無記なり。無覺有觀法とは、禪の中間の

常・空・無我の中には、衆生は大に畏れざるが故に說かず。　復次に、佛の說法の中に五受衆に異名あり、名けて苦と爲す。是の故に但だ苦智を說く。是の苦智は或は有漏、或は無漏なり。若し煖法と頂法と忍法と、世間第一法とに在つては、是れ有漏なるも、若し見諦道に入れば、是れ無漏なり。何となれば煖法より、世間第一法の中に至るまで、四種に苦を觀ずるが故なり。集智・滅智・道智も亦た是の如し。

復次に、苦智は、苦相の實に生ぜざるを知るに名け、集智は、一切法は離れて和合すること有るなきを知るに名け、滅智は、諸法の常に寂滅にして、涅槃の如きを知るに名け、道智は、一切法の常に淸淨にして、正も無く邪も無きことを知るに名け、盡智は、一切法の所有なきことを知るに名け、無生智は、一切の生法は、不實不定の故に、不生なることを知るに名く。如實智は、十種の智の知る能はざる所を、如實智を以ての故に、能く十智の各各の相、各各の緣、各各の別異、各各の有する觀法を如る（に名く）。是の如實智の中には、相なく、緣なく、別なく、諸の觀法を滅して、亦た觀ずること有らず。十智の中には法眼と慧眼とあり。如實智の中には唯だ佛眼のみ有り。十智は阿羅漢・辟支佛・菩薩も共に有すれども、如實智は唯だ獨り佛のみ有す。所以いかんとなれば獨り佛のみ不誑法を有したまふを以てなり。是を以ての故に如實智は、獨り佛のみに有ることを知る。復次に、是の十智は、如實智の中に入れば、本の名字を失して、唯だ一實智のみあり。譬へば十方の諸流水は、皆な大海に入れば、本の名字を捨てて、但だ大海と名くるが如し。是の如く種種に、十一智の義を分別す。此の中には略說せり。〔丹云ふ。十一智竟ると〕

【經】　三三昧とは、有覺有觀三昧と、無覺有觀三昧と、無覺無觀三昧となり。

【論】　一切の禪定にて心を攝するは、皆な名けて三摩提と爲す。秦に正心行處と言ふ。是の心は、無始世界より來、常に曲つて端ならず、是の正心行處を得れば、心則ち端直なり。譬へば蛇行は常

種は、阿毘曇門に廣く分別するが如し。如實智の分別の相は、此を般若波羅蜜の後品に廣く說けり。

復次に、有る人の言く、「法智とは欲界の五衆の、無常・苦・空・無我なるを知り、諸法は因緣の和合より生ずるを知る。所謂る無明の因緣もて諸行あり、乃至生の因緣もて老死あり。佛、須尸摩梵志の爲に說きたまへるが如し。「先づ法智を用ゐて諸法を分別し、後に涅槃智を用ふ」と。比智とは現在の五受衆の無常空苦無我を知るなり。過去・未來、及び色・無色界の中の、五受衆の無常苦空無我も亦た是の如し。譬へば現在の火の熱して能く燒くを見て、此を以て過去未來、及び餘國の火も亦た是の如きを比知するが如し。他心智とは他の衆生の心・心數法を知るなり。

問うて曰く、若し他の心・心數法を知らば、何を以ての故に、但だ他心を知ると名くるや。

答へて曰く、心は是れ主なるが故に、但だ他心を知ると名く。若し心を說けば、已に心數法を說けるを知るべし。世智とは、名けて假智と爲す。聖人は實法の中に於て知り、凡夫人は但だ假名の中にのみ知る。是の故に假智と名く。棟梁椽壁を名けて、屋と爲すが如く、但だ是の事のみを知つて、實義を知らず。是を世智と名く。苦智とは、苦慧を用ゐて五受衆を呵するなり。

問うて曰く、五受衆は亦た無常、亦た苦、亦た空、亦た無我なり、何を以ての故に但だ苦智を說いて、無常空無我智を說かざるや。

答へて曰く、苦諦の爲の故に苦智と說き、集諦の故に集智と說き、滅諦の故に滅智と說き、道諦の故に道智と說くなり。

問うて曰く、五受衆には種種の惡あり、何を以ての故に、但だ苦諦のみを說いて、無常諦・空・無我諦を說かざるや。

答へて曰く、若し無常・空・無我諦と說くも、亦法相を壞せず、衆生は多く樂に著して、苦を畏るるを以ての故に、佛は、「世間は一切皆な是れ苦なり」と呵し、捨離せしめんと欲したまふが故なり。無

は、無常想・苦想・無我想と相應し、世智は、中の四想と相應し、法智・比智・滅智・盡智・無生智は、後の三想と相應す。有る人の言く、「世智は或は離想と相應し、法智は九智を緣じて比智を除く、比智も亦た是の如し」と。世智・他心智・盡智・無生智は十智を緣じ、苦智・集智は世智及び有漏の他心智を緣じ、滅智・無生智は道智を緣じ、九智を緣じて世智を說く。法智・比智は十六相、他心智は四相、苦集滅道は各各四相、盡智・無生智は倶に十四相にして、空相・無我相を除き、煖法・頂法・忍法の中の世智は十六相、世間第一法の中の世智は、四相にして無相を除く。〔相を轉じ相を觀ずるなり。舊に十六聖行と言ふ。〕初に無漏心に入つて一の世智を成就し、第二心に苦智・法智を增し、第四心に比智を增し、第六心に集智を增し、第十心に滅智を增し、第十四心に道智を增す。若し欲を離るる者は他心智を增し、無學道に盡智を增して不壞解脫を得、無生智を增す。初め無漏心の中に智を修せされば、第二心の中に現在未來に二智を修し、第四心の中に現在に二智を修し、未來に三智を修し、第六心の中に現在未來に二智を修し、第八心の中に現在に二智を修し、未來の三智を修し、第十心の中に現在未來に二智を修し、第十二心の中に現在に二智を修し、未來に三智を修し、第十四心の中に現在未來に二智を修し、第十六心の中に現在に二智を修し、未來に六智を修し、若し欲を離るれば七智を修す。須陀洹に欲界の結使を離れんと欲し、十七心の中に七智を修す、他心智・盡智・無生智を除く。第九の解脫心の中に八智を修す、盡智・無生智を除く。信解脫の人は見得と作し、雙道の中に六智を修して、他心智・世智・盡智・無生智を除く。七地の欲を離るる時、無礙道の中に七智を修して、他心智・盡智・無生智を除く。解脫道の中に八智を修して盡智・無生智を除く。有頂の欲を離るる時、無礙道の中に六智を修して他心智・世智・盡智・無生智を除く。八解脫道の中に七智を修して世智・盡智・無生智を除く。無學の初心、第九の解脫、不時解脫の人は、十智及び一切の有漏、無漏の善根を修す。若し時解脫の人は、九智及び一切の有漏、無漏の善根を修す。是の如き等の種

慧なり。　苦智とは、五受衆の無常、苦、空、無我を觀ずる時に得る無漏智なり。　集智とは、有漏法の因因集まつて緣を生ずるを觀ずる時の無漏智なり。　滅智とは、滅止妙出を觀ずる時の無漏智なり。　道智とは、道正行達を觀ずる時の無漏智なり。　盡智とは、我は苦を見已り、集を斷じ已り、證を盡し已り、道を修し已れりと。是の如く念ずる時、無漏の智慧の見明かに覺するなり。

無生智とは、我は苦を見已つて復た更に見ず、集を斷じ已つて復た更に斷ぜず、證を盡くし已つて復た更に證せず、道を修し已つて復た更に修せずと、是の如く念ずる時、無漏の智慧の見明かに覺するなり。　如實智とは、一切法の總相と別相とを如實に正しく知つて、罣礙あること無きなり。

是の法智は、欲界繋の法、及び欲界繋の法の因、欲界繋の法の滅を緣じて、欲界繋の法を斷ずと爲す。道比智も亦た是の如し。世智は一切法を緣じ、他心智は他心の有漏無漏の心・心數の法を緣じ、苦智と集智とは、五受衆を緣じ、滅智は智を緣じ、盡を緣じ、道智は無漏の五衆を緣じ、盡智と無生智とは倶に四諦を緣ず。　十智のうち、一は有漏、八は無漏、一は當に分別すべし。他心智は有漏の心を緣じ、是の有漏は無漏の心を緣ず。是の無漏の法智に、法智及び他心智と、苦智と集智と滅智と道智と、盡智と無生智の少分とを攝す。比智も亦た是の如し。世智には、世智と及び他心智の少分を攝し、他心智には、他心智と及び法智と、比智を世智と道智と、盡智と無生智の少分とを攝し、苦智には、苦智と及び法智と、比智と盡智と、無生智の少分とを攝す。集智と滅智とも亦た是の如し。道智には、道智と及び法智と、比智と他心智と、盡智と無生智の少分とを攝し、盡智には、盡智と及び法智と、比智と他心智と、苦智と集智と、滅智と道智の少分を攝す。無生智も亦た是の如し。九智は八根と相應して、慧根・憂根・苦根を除き、世智と十根と相應して慧根を除く。法智・比智・苦智は、空三昧と相應し、法智・比智・滅智・盡智・無生智は、無相三昧と相應し、法智・比智・他心智・苦智・集智・道智・盡智・無生智は、無作三昧と相應し、法智・比智・世智・苦智・盡智・無生智

不浄想とは、身念處の中に說くが如し。

斷想と離想と盡想とは、涅槃の相を緣じて諸の結使を斷ずるが故に斷想と名け、結使を離るるが故に離想と名け、諸の結使を盡くすが故に盡想と名く。

問うて曰く、若し爾らば一想にして便ち足れり、何を以てか三を說くや。

答へて曰く、前に一法を三種に(卽ち)無常は卽ち是れ苦、苦は卽ち是れ無我と說けるが如し。此も亦た是の如く、一切世間の罪惡は、深重なるが故に、三種に呵す。大樹を伐るに、一下を以て斷ず可らざるが如し。涅槃微妙の法は、昔未だ得ざる所、是の故に種種に讃ずるなり。名けて斷想・離想・盡想と爲す。　復次に、三毒を斷ずるが故に、名けて斷と爲し、愛を離るるが故に、名けて離と爲し、一切の苦を滅して、更に生ぜざるが故に、名けて盡と爲す。　復次に、行者の煖法と頂法と忍法と世間第一法との、正智慧の觀に於て、諸の煩惱を遠ざくる、是を離想と名け、無漏道を得て、諸の結使を斷ずる、是を斷想と名け、涅槃に入る時、五受衆を滅して、復た相續せざる、是を盡想と名く。斷想は有餘涅槃、盡想は無餘涅槃、離想は二涅槃の方便門なり。是の三想は、有漏と無漏との故に、一切地の中に攝す。〔十想竟る〕

初品第三十八……「十一智」[一]釋論

【經】十一智とは、法智、比智、他心智、世智、苦智、集智、滅智、道智、盡智、無生智、如實智なり。

【論】法智とは、欲界繫の法の中の無漏智なり。欲界繫の因の中の無漏智は、欲界繫の法の滅の中の無漏智にして、欲界繫の法を斷ずと爲し、道の中の無漏智、及び法智品の中の無漏智なり。

比智とは、色無色界の中に於ける無漏智なること、亦た是の如し。　他心智とは、欲界色界の繫の現在の、他の心・心數の法と及び無漏の心・心數法の少分を知るなり。　世智とは、諸の有漏の智

【一】割註あり「丹に三三昧義と三根の義を合す」と。卽ち、此の卷は、「十一智」を表題とすれど、三三昧と三根とを併せ釋す。

易す。或は善心柔軟なるを見ては、便ち共に輕陵し蹋蹴し、理を以て遇せず。若しくは持戒清淨なる者を見ては、便ち所行矯異なりと謂つて、輕賤すること數ならず。是の如き等、衆生は弊惡にして、一も樂しむべき無し。

土地の惡とは、一切の土地は衰多くして吉なし。寒熱、飢渇、疾病、惡疫、毒氣侵害、老病死の畏、處として有らざるなく、身の去るところの處には衆苦之に隨ひ、處として免るるを得ること無し。好國にして、豐樂安隱なる有りと雖も、多く諸の煩惱の爲に惱まされて、則ち樂土とは名けず。一切は皆な二種の苦あり、身苦と心苦とにして、國として有らざるは無し。說くが如し。

『有る國土は多寒なり。或は有る國は多熱なり。有る國は救護なく、或は有る國は多惡なり。有る國は常に飢餓し、或は有る國は多病なり、有る國は福を修せず、是の如くして樂處なし。』

衆生と土地には是の如きの惡あり、世間を思惟するに、一として樂しむ可き無く、欲界の惡き事是の如し。上二界は、死する時と退する時とに、大に懊惱を生ずること、下界よりも甚だし。譬へば極めて高き處より墮つれば、摧碎し爛壞するが如し。

問うて曰く、無常想、苦想、無我想、一切世間不可樂想には、何等の異あつて、而して別に說くや。

答へて曰く、二種の觀あり、總觀と別觀となり。前を總觀と爲す、此の中は別觀なり。復た二種の觀あり、法觀と衆生觀となり。前は一切法を呵するの觀と爲す。此の中にては衆生の罪惡の不同を觀ずるなり。復次に、前者は無漏道にして、此の中は有漏道なり。前は見諦道にして、今は思惟道なり。是の如き等の種種の差別は、一切地中の攝にして、三界の法を緣ず。是を一切世間不可樂想と名く。

死想とは、死念の中に說くが如し。

に、食厭等の四想を説けり。

一切世間不可樂想とは、若し世間の色欲、滋味、車乘、服飾、廬觀、園宅の種種の樂事を念ずれば、則ち樂想を生じ、若し世間の衆惡罪事を念ずれば、則ち心に厭想を生ず。何等か惡事なる。惡事に二種あり、一には衆生、二には土地なり。

衆生に八苦の患あり、生と老と病と死と、恩愛別離と、怨憎同處と、所求不得となり。略して之を言へば、五受衆の苦なり。衆生の罪は、婬欲多きが故に、好醜を別たず、父母師長の教誨に隨はず、慚愧あること無く、禽獸と異なること無し。瞋恚多きが故に輕重を別たず、瞋毒狂發し、乃至佛語を受けず、法を聞くことを欲せず、惡道を畏れず、杖楚を横ままに加へて、他の苦を知らず、大闇中に入つて都て見る所なし。愚癡多きが故に、求むる所に道を以てせず、事の緣を識らず、角を搆つて乳を求むるが如く、無明覆ふが故に、日照を蒙ると雖も、永く見る所なし。慳貪多きが故に其の舍は塚の如く、人は之に向はず。憍慢多きが故に賢聖を敬はず、父母に孝ならず、憍逸にして自ら壞し、永く直き所なし。邪見多きが故に今世・後世を信ぜず、罪福を信ぜず、共に處す可らず。是の如き等の諸の煩惱多きが故に、弊敗して直き所なし。惡業多きが故に、無間の罪を造り、或は父得を殺し、或は賢聖を傷害し、或は時の榮貴を要し、忠貞を讒賊し、親戚を殘害す。復次に、世間の衆生は、善好の者は少く、弊惡の者は多し。或時は善行ありと雖も、貧賤鄙陋なり。或は富貴端正なりと雖も、而も所行は不善なり。或は布施を好むと雖も、而も貧乏にして財なく、或は富んで財賓ありと雖も、而も慳惜貪著して布施を肯ぜず、或は、人の思ふ所ありて默して所說なきを見ては、便ち憍高にして自ら畜へ、下つて物に接せずと謂ひ。或は好く下つて物に接し、恩惠普く潤ふを見ては、便ち欺誑諂飾すと謂ひ、或は能く語り善く論ずるを見ては、便ち是れ小智を恃んで、以て憍慢を爲すと謂ひ、或は質直なる好人を見ては、便ち共に欺誑し、調捉し、引挽し陵

を見て、之に語つて言く、「我は因緣あつて此に住すること百日なり、常に此の餠を作つて送り來れ、當に多く價を與ふべし」と。老母は日日に餠を作つて之に送る。婆羅門は貪著して飽食し歡喜す。老母は餠を作るに、初の時は白淨なりしが、後轉た色なく味なし、卽ち老母に問ふ、「何に緣つて爾るや」と。母言く、「癰瘡差ゆるが故なり」と。婆羅門問ふ、「此の言は何の謂ぞ」と。母言く、「我が大家の夫人、隱處に癰を生ず、麨酥甘草を以て之に拊くれば、癰熟し膿出でて蘇餠を和合す。日日是の如し。此を以て餠を作り汝に與ふ、是を以て餠は好きなり。今や夫人の癰は差えたり、我當に何處にか更に得べき」と。婆羅門は之を聞きて、兩拳もて頭を打ち胸を搥いて吁嘔し、「我當に云何にかすべき、此の淨は破れたり、我、了らんとす」と。緣事を棄捨して馳せて本國に還れり。行者も亦た是の如く、是の飮食に著して歡喜し樂噉し、其の好色、細滑、香美の口に可なるを見て不淨を觀ぜず、後に苦報を受けて悔ゆとも將た何ぞ及ばん。若し能く食の本末を觀じ、是の如くして、惡厭の心を生ずれば、食欲を離るることに因つて、四欲皆な捨て、欲界の中の樂に於て悉く皆な捨離し、此の五欲を斷じ、五下分結に於て亦た斷ず。是の如き等の種種の因緣の惡罪に復た樂著せざる、是を食厭想と名く。

問うて曰く、無常・苦・無我想は、無漏の智慧と相應し、食厭等の四想は有漏の智慧と相應す、次第の法として應に前に在るべし、今何を以てか後に說くや。

答へて曰く、佛法に二種の道あり。見道と修道なり。見道の中にて是の三想を用ゐて諸の邪見等を破して聖果を得れども、猶ほ未だ欲を離れず、欲を離れんが爲の故に三想の次第に是の食厭等の四想を說き、婬欲等の諸の煩惱を離るることを得。初の三想は見諦道を示し、中の四想は修道を學するを示し、後の三想は無學道を示さんが爲なり。初め身念處を習ふ中に、食厭想ありと雖も、功用少きが故に佛は說きたまはず。今、須陀洹、斯陀含の爲に欲を度するが故に、無我想の次第

蟲の住處と爲す。酥乳酪の如きは血の變じて成る所、爛膿と異なること無し。厨人の汗垢、種種の不淨あり。若し口中に著くれば、腦に爛涎あり。二道より流れ下つて唾と和合し、然して後、味を成ず。其の狀吐くが如し。腹門より入つて、地は持ち、水は爛れ、風は動き、火は煮ること、釜の糜を熟するに、滓濁は下に沈み、淸き者は上に在るが如し。譬へば酒を釀すに滓濁は屎と爲り、淸き者は尿と爲るが如し。腰に三孔あり、風吹き、膩汁は散じて百脈に入り、先きの血と和合し、凝り變じて肉と爲り、新肉より脂・骨・髓を生じ、是の中より身根を生ず。新舊の肉の合するより五情根を生じ、五根より五識を生じ、五識は次第に意識を生じ、分別して相を取り、好醜を籌量し、然る後に我・我所の心を生じ、等しく諸の煩惱及び諸の罪業を生ず。食は是の如く、本末の因緣、種種に不淨なるを觀ず。內の四大と、外の四大と異なることなし。但だ我見を以ての故に强ひて我ありと爲すことを知る。

　復次に、思惟すらく、「此の食は墾植し、耘除し、收穫し、蹂治し、舂磨し、洮汰し、炊煮して即ち成ず、功を用ふること甚だ重し。一鉢の飯を計るに、作夫の流汗集合せり。之を量るに食は少く汗は多し。此の食は之を作るに功重く、辛苦あること是の如し。口に入れて之を食すれば、即ち不淨と成り、一も直きところなく、宿昔の間に變じて屎尿と爲る。本是れ美味にして、人の嗜む所なるも、變じて不淨と成れば、惡んで見ることを欲せず」と。行者自ら思へらく、「此の如きの弊食に、我若し食著せば、當に地獄に墮して、燒けたる鐵丸を噉ふべく、地獄より出でては、當に畜生の牛羊駱駝となりて、其の宿債を償ふべく、或は猪狗と作つて常に糞除を噉はん」と。是の如く食を觀ずれば、則ち厭想を生ず。食を厭ふに因るが故に、五欲の中に於て皆厭ふ。譬へば一婆羅門の如し。淨潔の法を修し、事の緣あるが故に不淨國に到り、自ら思へらく、「我は當に云何にして此の不淨を免るることを得べき、唯だ當に乾食すれば、淸淨なることを得べし」と。一老婆の白髓餠を賣る

無けん。』

是の如く、我及び知者・不知者、作者・不作者は、檀波羅蜜の中に說くが如し。是の我相を得ざるが故に、一切法中に我なきことを知る。若し一切法中に我なきことを知れば、則ち我心を生ずべからず。若し我なくんば亦た我所の心なく、我と我所とを離るるが故に、則ち縛あること無し。若し縛なければ、則ち是れ涅槃なり。是の故に行者は應に無我想を行ずべし。

問うて曰く、是の無常と苦と無我とは、一事とするや、三事とするや。若し是れ一事ならば、三を說くべからず。若し三事ならば、佛は何を以ての故に、無常なれば卽ち是れ苦、苦なれば卽ち是れ無我なりと說きたまひしや。

答へて曰く、是は一事なり。所謂有漏の法を受くるなり。觀門分別する故に三種の異あり。無常の行相は應に是れ無常想なるべく、苦の行相は應に是れ苦想なるべく、無我の行相は應に是れ無我想なるべし。無常は三界に入らしめず、苦は三界の罪過を知らしめ、無我は則ち世間を捨てしむ。復次に、無常は厭心を生じ、苦は畏怖を生じ、無我は拔出して解脫せしむ。無常とは、佛は、「五受衆は是れ無常なり」と說き。苦とは、佛は、「無常は則ち是れ苦なり」と說き、無我とは、佛は、「苦は卽ち是れ無我なり」と說きたまへり。無常とは、佛は、「五受衆の盡滅する相なり」と示したまひ、苦とは、佛は、「箭の心に入るが如し」と示したまひ、無我とは、佛は「捨離の相なり」と示したまへり。無常は愛を斷ずるを示し、苦は我習慢を斷ずるを示し、無我は邪見を斷ずるを示す。無常は常見を遮し、苦は今世の涅槃の樂見を遮し、無我は著處を遮す。無常とは世間の著す可き所の常法是なり。苦とは世間の樂處と計する是なり。無我とは世間の我と計す可き所の牢固なる者是なり。是を三相分別の想と爲す。無我想の緣は種種に攝す、苦想の中に說くが如し。

食厭想とは、是の食は不淨の因緣より生ずと觀ずるなり。肉の如きは精血水道より生ず、是を膿

んや。當に知るべし。我有りて内に在つて、動發するが故なることを。壽命も心も亦た是れ我法なり。若し無我ならば牛の御(者)なきが如し。我あるが故に能く心を制して法に入り、放逸を爲さゞるなり。若し無我ならば、誰か心を制御せん。苦樂を受くる者は是れ我なり。若し無我ならば、樹木の如くにして、則ち苦樂を別つべからずと爲す。愛憎、精懃も亦た是の如し。我は微細にして、五情を以て知るべからずと雖も、是の相に因るが故に、有と爲すことを知るべし。

答へて曰く、是の諸相は皆なこれ識相なり。識あれば則ち入出の息、視眴壽命等あり。若し識、身を離るれば則ち無し。汝等の我は常にして遍なるが故に、死人にも亦た應に視眴・入出の息・壽命等あるべし。　復次に、出入の息等は、是れ色法にして、心の風力に隨ふが故に動發す。此は是れ識相にして、我相に非ず、壽命は是れ心不相應行にして、亦た是れ識相なり。

問うて曰く、若しくは無心定の中に入り、或は睡つて夢なき時も、息亦た出入して壽命あり、何を以ての故に、皆な是れ識相なりと言ふや。

答へて曰く、無心定等には、識暫く無しと雖も、久しからずして必ず還た識を生ず。身を捨てざるが故なり。識ある時は多く、識なき時は少し。是の故に識相と名く。人の出で行くに、其の家に主なしと言ふことを得ざるが如し。苦樂・憎愛・精懃等は、是れ心相應の共緣にして、心行に隨ふ。心有なるが故に便ち有なり、心無なるが故に便ち無なり。是の故に是は識相にして我相に非ず。復次に、若し我あらば、我に二種めり。若しくは常、若しくは無常なり。說くが如し。

『若し我は是れ常ならば、則ち後身なけん。常ならば不生なるが故に亦た解脫なし。亦た妄なく作なし。是を以ての故に當に知るべし、罪福を作る者なく、亦た受くる者もあること無きを。我及び我所を捨てゝ、然して後に涅槃を得、若し實に我ありとせば、應に我心を捨つべからず。若し我は無常ならば、則ち應に身に隨つて滅すべし、大岸の水に墮るが如く、亦た罪福あること

浴池以て志を娛ましむ。
又獄火來つて身を燒くこと、大火の竹林を焚くが如きに似たるを見る。是の時、天上の樂を見ると雖も、徒に自ら感結して益する所なし。』

是の苦想に攝する緣は、無常想の如し。是の如く種種に、苦を分別するを名けて、苦想と爲す。

無我想とは、苦なれば則ち是れ無我なり。所以いかんとなれば、五受衆の中は、盡く皆な是れ苦相にして自在あること無し。若し自在なくんば、是れ則ち無我なるが故なり。若し我に自在あらば、身をして苦あらしむべからず。說くところの如し。

『諸の無智の人あり、身心は是れ我なりと計し、漸やく堅著に近づくが故に、無常の法なることを知らず。

是の身は作者なく、亦た受者あること無し。是の身は無生たり。而も種種の事を作すは、六情と(六)塵との因緣もて、六種の識生ずることを得ればなり。

この三事和合の因緣從り觸法生じ、觸法の因緣に從つて、受念の業法生ず。

珠と日と草薪と和合するが故に、火生ずるが如く、情と塵と識と和合して所作の事業成る。相續の相似の有は、種に芽莖あるが如し。』

復次に、我相は不可得なるが故に無我なり。一切法は相あるが故に、則ち有なることを知る。煙を見、熱を覺ゆるが故に、火あるを知るが如し。五塵の中に於ては、各各別異なり。故に知んぬ、有情は種種に諸法を思惟し、籌量するが故に、有なりと知ることを。心心數法には、此の我は無相なり、かるが故に無我なりと知る。

問うて曰く、出入の氣あるは則ち是れ我の相なり。視眴と、壽命と、心の苦樂・愛憎・精懃等は是れ我の相なり。若し無我ならば、誰か是の出入の息と、視眴と壽命と、心の苦樂・愛憎・精懃等あら

苦の因緣に非ざることを。故に名けて苦と爲さず。但だ五受衆は是れ苦なり。何となれば愛著するが故なり。無常敗壞するが故なり。受念處の中の苦義の如し。此の中に應に廣く說くべし。

復次に、苦とは、身には常に是の苦あるも、癡に覆はるゝが故に覺らず。說くが如し。

『騎乘して疲れ極るが故に、住立の處を求索し、住立して疲れ極るが故に、坐息する處を求索し、坐久くして、疲れ極るが故に、安臥の處を求索す。

衆の極は作に由つて生ず、初め樂なれば後には則ち苦なり。視眴・息の出入・屈伸・坐臥・起・行・立及び去來、此の事にして苦ならざるは無し。』

問うて曰く、是の五受衆は一切皆な苦と爲す、苦想觀の爲の故に苦なり。若し一切皆な苦ならば、佛は云何んぞ、「三種の受(卽ち)苦受・樂受・不苦不樂受あり」と說きたまひしや。若し苦想を以ての故に苦ならば、云何んぞ苦諦を實苦と爲すと說きたまひしや。

答へて曰く、五受衆は一切皆な苦なり。凡夫人は、四顚倒の因緣もて、欲の爲に逼られ、五欲を以て樂と爲す。人が瘡を塗れば、大痛息むが故に、以て樂と爲すが如し。瘡は樂に非ざるなり。佛が三種の受を說き給ひしは、世間の爲の故にして、實法の中に於ては是れ樂に非ざるなり。若し五受衆の中に實に樂あらば、何ぞ以て佛は、「五受衆を滅するを名けて、樂と爲す」と說きたまはんや。

復次に、其の嗜む所に隨つて、樂心則ち生ずるも、樂に定なきなり。樂若し實に定らば心の著するを待たず、火が實に熱すれば、著るゝを待たずして熱きが如し。樂には定なきを以ての故に名けて苦と爲す。　復次に、世間顚倒の樂は、能く今世・後世に無量の苦の果報を得るが故に名けて苦と爲す。譬へば大河水の中に少毒を著くるも、水をして異ならしむること能はざるが如く、世間顚倒の毒樂は、一切大苦の中に於て則ち現れず。說くが如し。

『天より下つて地獄に生ずる時、本の天上の歡樂の事を憶へば、宮觀・婇女目前に滿ち、園苑・

何んぞ、聖人は但だ身苦のみを受くと言ふや。

答へて曰く、凡夫人は苦を受くる時、心に愁惱を生じ、瞋使の爲に使はれ、心は但だ五欲に向ふ。佛の所說の如くんば、凡夫人は五欲を除いて、更に苦を出づるの法あることを知らず、樂受の中に於て貪欲使に使はれ、不苦不樂受の中にて無明使に使はる。凡夫人は苦を受くる時、內に三毒の苦を受け、外に寒熱・鞭杖等を受く。人の內熱盛なれば外熱も亦た盛なるが如し。經に說くが如くんば、凡夫人は、愛する所の物を失へば、身心倶に苦を受くること、二箭を雙べ射るが如し。諸の賢聖の人は、憂愁の苦なく、但だ身苦のみあつて、更に餘の苦なきなり。復次に、五識相應の苦、及び外の因緣なる杖楚寒熱等の苦、是を身苦と名け、餘殘を心苦と名く。復次に、我は言ふ。有爲無漏の法に、著せざるが故に、苦に非ずと。聖人の身は是れ有漏なり、有漏の法は則ち苦なること、何の咎か有らん。是の末後の身は、受くる所の苦も亦た微少なり。

問うて曰く、若し無常卽ち是れ苦ならば、道も亦た是れ苦なり、云何んぞ苦を以て苦を離れんや。

答へて曰く、無常は卽ち是れ苦なりとは、五受衆の爲の故に說く。道は作法の故に無常なりと雖も、名けて苦と爲さず。所以いかんとなれば、是は能く苦を滅して、諸の著を生ぜず、空・無我等の諸智と和合するを以てなり、但だ是は無常なるのみにして苦に非ず、諸の阿羅漢の得道の時、偈を說いて言へるが如し。

『我等は生を貪らず、亦復た死を樂はず、一心及び智慧もて、時の至るを待つて去るのみ。』

佛の涅槃を取りたまひし時、阿難等の諸の未だ欲を離れざる人は、未だ善く八聖道を修せざるが故に皆な涕泣憂愁し、諸の離欲の阿那含は皆な驚愕し、諸の漏盡の阿羅漢は其の心を變ぜず、但だ世間の眼の滅すること疾しと言へるのみ。得道の力を以ての故に、佛に從つて大利益を得、佛の無量の功德を重んずることを知ると雖も、而も苦を生ぜず。是の故に知りぬ、道は無常なりと雖も、

或は四諦と言ひ、或は無常想と言へり。經の中に說くが如し、「善く無常想を修せば、能く一切の欲愛・色愛・無色愛・掉慢を斷じ、無明盡き、能く三界の結使を除く、是の故に卽ち名けて道と爲す」と。是の無常想は或は有漏、或は無漏なり。正しく無常を得るは是れ無漏、初めて無常を學するは是れ有漏なり。摩訶衍の中の諸の菩薩は、心廣大にして、種種に一切衆生を敎化するが故に、是の無常想も、亦は有漏、亦は無漏なり。若しくは無漏ならば九地あり、若しくは有漏ならば十一地あり、三界の五受衆を緣じ、四根相應して苦根を除く。凡夫・聖人は、是の如き等の種種の因緣を得て、無常の功德を說く。

苦想とは、行者、是の念を作さく、「一切の有爲法は無常なるが故に苦なり」と。

問うて曰く、若し有爲法は無常なるが故に苦なりとせば、諸の賢聖の人の有爲無漏法も亦た應當に苦なるべし。

答へて曰く、諸法は無常なりと雖も、愛著すれば苦を生じ、著する所なき者は苦なし。

問うて曰く、諸の聖人あり、著する所なしと雖も亦た皆な苦あり。舍利弗に風熱の病苦あり。畢陵伽婆蹉に眼痛の苦あり。羅婆那跋提〔音聲第一なり〕に痔病の苦あるが如し。云何んぞ苦なしと言ふや。

答へて曰く、二種の苦あり。一には身苦、二には心苦なり。是の諸の聖人は、智慧力を以ての故に、復た憂愁・嫉妬・瞋恚等の心苦なきも、已に先世の業因緣たる、四大造の身を受け、老病・飢渇・寒熱等の身苦あり、身苦の中に於ても亦復た薄少なり。人が了了と他に債を負ふことを知れば、之を償ひて以て苦を爲さず、若し人債を負ふことを憶えざれば、債主に彊奪せられ、瞋り惱んで、苦を生ずるが如し。

問うて曰く、苦受は是れ心・心數の法なり。身は草木の如く、心を離るれば則ち覺する所なし。云

の相は不可得なればなり。生の時は住・滅あることを得ず、住の時は生・滅あることを得ず、滅の時は生・滅あることを得ず、生住滅は相性相違せるが故に無なり。是の無の故に無常も亦た無なり。

問うて曰く、若し無常なくんば、佛は何を以てか、苦諦の中に無常を説きたまひしや。

答へて曰く、凡夫人は邪見を生ずるが故に、世間は是れ常なりと謂へり。是の常見を滅除せんが爲の故に無常と説く。無常は是れ實なりと爲るが故に説くにあらず。復次に、佛未だ出世したまはざれば、凡夫人は但だ世俗の道を用ゐて諸の煩惱を遮す。今は諸の煩惱の根本を拔かんと欲するが故に、是の無常を説く。復次に、諸の外道の法は、但だ形を以て五欲を離れ、是を解脱と謂ふ。佛説きたまはく、「邪相の因縁の故に縛せられ、無常の正相を觀ずるが故に解脱す」と。復た二種の無常を觀ずるの相あり。一には有餘、二には無餘なり。佛の説きたまふが如くんば、一切の人と物とを滅盡して唯だ名のみ在るあり、是を有餘と名け、若し人と物とを滅盡し、名をも亦た滅する、是を無餘と名く。復た二種の無常を觀ずるの相あり、一には身死して盡く滅すると、二には新新に生滅するとなり。

復次に、有が言く、「持戒を重しと爲す。所以いかんとなれば戒の因縁に依るが故に、次第に漏盡くることを得ればなり」と。有が言く、「多聞を重しと爲す。所以いかんとなれば智慧に依るが故に、能く所得あればなり」と。有が言く、「禪定を重しと爲す、佛の所説の如くんば、定は能く道を得ればなり」と。有が言く、「十二頭陀を以て重しと爲す、所以いかんとなれば能く戒行を淨むるが故なり」と。是の如く各各所行を以て貴しと爲し、更に復た涅槃を懃求せず。佛の言はく、「是の諸の功德は皆な是れ涅槃に趣くの分なり。若し諸法の無常を觀ずれば、是を眞の涅槃道と爲す」と。是の如き等の種種の因縁の故に、諸法は空なりと雖も、而も是の無常想を説くなり。

復次に、無常想は卽ち是れ聖道の別名なり。佛は種種の異名もて道を説き、或は四念處と言ひ、

皆な常なきが故に、名けて無常と爲す。

問うて曰く、菩薩は何を以ての故に、是の無常想を行ずるや。

答へて曰く、衆生は常顚倒に著して、衆苦を受くるが故に、生死を免るゝことを得ず。行者は是の無常想を得て、衆生を敎化して言く、『諸法は皆な無常なり、汝常顚倒に著して、行道の時を失ふこと莫れ』と。諸佛の上妙の法は所謂四眞諦なり。四諦の中には苦諦を初とし、苦の四行の中には無常行を初と爲す、是の故に菩薩は無常想を行ず。

問うて曰く、有人は無常の事の至るを見て、轉た更に堅著す。（ある）國王の如し（その）夫人寳女は、地中より生ぜる十頭の羅刹の爲に將ゐられて大海を度れり。王大に憂愁す。智臣諫めて言く、「王は智力具足せり、夫人の還た在ることは久しからず、何を以てか憂を懷くや」と。答へて言く、「我が憂ふる所以の者は、我が婦を得叵きを慮るにあらず、但だ壯時の過ぎ易きことを恐るゝのみ」と。亦た人の好華好菓を見る時、過ぎんと欲して、便ち大に著を生ずるが如し。是の如く無常を知つて、乃ち更に諸の結使を生ず。云何んぞ無常は能く心に厭ひ、諸の結使を破らしむと言ふや。

答へて曰く、是の如く無常を見るは、是れ無常の少分を知つて、具足せずと爲す。禽獸の無常を見ると異なること無し。是の故に佛、舍利弗に告げたまはく、「當に具足して、無常想を修すべし」と。

問うて曰く、何等か是れ無常想を具足するや。

答へて曰く、有爲法の、念念に生滅するを觀ずること、風の塵を吹くが如く、山上より水の流るるが如く、火炎の隨つて滅するが如し。一切有爲の法は、牢なく強なく、取る可らず、著す可らず。幻化の如く、凡夫を誑惑すと爲し、是の無常に因つて、空門に入ることを得。是の空の中にては、一切の法は不可得なるが故に、無常も亦た不可得なり。所以いかんとなれば、一念の中に、生住滅

巻の第二十三

初品第三十七……「十想」釋論

【經】十想とは、無常想、苦想、無我想、食不淨想、一切世間不可樂想、死想、不淨想、斷想、離欲想、盡想なり。

【論】問うて曰く、是の一切の行法は何を以ての故に、或時は名けて智と爲し、或時は名けて念と爲し、或時は名けて想と爲すや。

答へて曰く、初めに善法を習つて失せざるが爲の故に、但だ念と名け。能く相を轉じ心を轉ずるが故に、名けて想と爲し、決定して知り疑ふ所なきが故に、名けて智と爲す。

一切有爲の法の無常を觀ずる智慧に相應するの相、是を無常想と名く。一切有爲の法は無常なりとは、新新に生滅するが故に、因緣に屬するが故に、增積せざるが故なり。復次に、生ずる時來處なく、滅するにも亦た去處なし。是の故に無常と名く。復次に、二種の世間は、常なきが故に、無常と說く。一には衆生無常、二には世界無常なり。說くが如し。

『大地草木は皆な磨滅し、須彌巨海も亦た崩れ竭き、諸天の住處も皆な燒け盡くす。爾の時世界に何物か常なる。十力の世尊は身光を具したまひ、智慧の明照も亦た無量なり。一切の諸の衆生を度脫し、名聞普遍して十方に滿ち、今日廓然として悉く安在す。何んぞ智者の感傷せざるあらんや。』

是の如く舍利弗・目犍連・須菩提等の諸の聖人・轉輪聖王・諸の國王・常樂天王・及び諸天の聖德尊貴も皆な亦た盡き、大火焰明も忽然として滅し、世間は轉壞すること、風中の燈の如く、險岸の樹の如く、漏器に水を盛れば、久しからずして空竭するが如し。是の如く一切衆生、及び衆生の住處は、

般を念じて能く諸の惡覺を滅するは、雨の塵を淹(うるほ)すが如し。息の出入を見て身の危脆を知り、息の入出に由つて身存立することを得、是の故に入出の息を念じ、次第に死を念ず。復次に、行者は或時には七念を有することを恃み、此の功德に著して、懈怠の心生ぜん。是の時には當に死を念ずべし。死事は常に前に在り、云何んぞ懈怠して此の法愛に著すべけんや。阿那律、佛の滅度したまふ時、說けるが如し。

『有爲の法は雲の如し、智者は信ずべからず、無常の金剛は來つて、聖主山王を破す。』

是を八念の次第と名く。

問うて曰く、是を聲聞の八念を說く、菩薩の八念と何の差別ありや。

答へて曰く、聲聞は身の爲の故にして菩薩は一切衆生の爲の故なり。聲聞は但だ老病死を脫せんが爲の故にして、菩薩は遍ねく一切の功德を具足せんが爲の故なり。是を差別と爲す。復次に、佛は是の中に亦た說いて舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は不住法を以て般若波羅蜜の中に住し、應に檀波羅蜜を具足すべく、乃至八念を具足すべし。不可得の故なり」と。初に不住あつて後に不可得あり。此の二印あるを以て、是を以ての故に異なる。不住、不可得の義は先に說くが如し。[九]

【九】 劉註あり「丹註に云ふ。八念竟ると」

が故なり。譬へば雪山の中に寶山あり、寶山の頂には如意寶珠ありて、種種の寶物多し。人あり上らんと欲して、或は半道より還る者あり、近づきて而も還る者あり、一の大德の國王あつて衆生を憐愍して爲に大梯を作らんに、人民は大小乃至七歲の小兒まで皆な山に上ることを得、意に隨つて如意珠等の種種の寶物を取るが如し。佛も亦た是の如し。世間の諸法實相の寶山は、九十六種の異道は皆な得ること能はず、乃至梵天王も諸法實相を求むるも亦た得ること能はず、何に況んや餘人をや。佛は大慈悲を以て衆生を憐愍したまふが故に、六波羅蜜を具足し、一切智慧方便を得、十二部經、八萬四千法聚の梯を說きたまふに、阿若憍陳如、舍利弗、目揵連、摩訶迦葉、乃至七歲の沙彌蘇摩等は皆な諸の無漏法、根力覺道・實相を得き。實相は微妙なりと雖も、一切衆生は皆な佛恩を蒙るが故に法を得。是を以ての故に念佛は前に在り。次第に法を念じ、次第に僧を念ず。僧は佛語に隨つて能く法を解するが故に第三なり。餘人は解する能はず、僧は能く解することを得、是を以ての故に稱して寶と爲す。人中の寶は是れ佛なり、九十六種の道法の中の寶は是れ佛法なり、一切衆の中の寶は是れ僧なり。　復次に、佛の因緣を以ての故に法は世間に出で、法の因緣を以ての故に僧あり。行者は念ずらく、「我は云何にして當に法寶を得べき」と。得るには僧數の中に在つて當に一切の麁細の身口の惡業を除却すべし、是の故に次第に持戒を說く。

　復次に、云何に分別して七衆あるや。戒有るを以ての故に、心の惡を除かんと欲し。慳貪を破するが故に捨を念じ、受者をして樂を得せしめんと欲するが故に瞋恚を破し、福の果報を得ることを信ずるが故に邪見を破し、持戒・布施の法の中に住すれば、則ち十善道の中に住して、十不善道を離るると爲す。十善道に二種の果あり、若し上行は淨天の中に生ずることを得、中行は天に生ずることを得。是を以ての故に戒・施に次第して天を念ず。禪定を行ずるが故に、二種の天を得、諸の惡覺を滅して但だ善法を集め、心を一處に攝す。是の故に天を念じ、次第に安那般那を念ず。安那那

死す。

亦た果の熟する時、種種の因緣にて墮つるが如し。當に此の死怨の惡賊より免離することを求むべし。是の賊は信ずべきこと難し、捨つる時は卽ち安隱なり。

假使大智人にして威德力無上なるも、前となく亦た後となく、今に於ても脫する者なし。

亦た巧辭にても謝すること無く、請求するも脫を得ること無く、亦た捍捂する處にて以て、免るることを得べき者なし。

亦た淨戒を持ち、精進して以て脫すべきにも非ず、死賊には憐愍なし。來る時は避くる處なし。』

是の故に行者は無常危脆の命の中に於て、而も信じて活を望むべからず。佛が比丘の爲に死相の義を說きたまひしが如し。一比丘あり偏袒して佛に白さく、「我能く是の死相を修せん」と。佛の言はく、「汝云何にか修する」と。比丘の言く、「我七歲を過ぎて活きんことを望まず」と。佛の言はく、「汝は放逸に死相を修す」と。比丘ありて言く、「我は七月を過ぎて活することを望まず」と。比丘ありて言く、「七日」と。有が言く、「六・五・四・三・二・一日活く」と。佛の言はく、「汝等は皆な是れ放逸に死相を修するなり」と。有が言く、「旦より食時に至る」と。有が言く、「一食の頃」と。佛の言はく、「汝等も亦た是れ放逸に死相を修す」と。一比丘偏袒して佛に白さく、「我は出氣に於て入を望まず、入氣に於て出を望まず」と。佛の言はく、「眞に是れ死相を修して放逸ならずと爲す。比丘よ、一切有爲の法は、念念生滅して住する時は甚だ少く、其れは猶ほ幻の如し、無智の行者を欺誑す」と。是の如き等の種種の因緣もて死相を念ず。

問うて曰く、法は是れ三世諸佛の師なり、何を以ての故に念佛は前に在るや。是の八念は云何んぞ次第あるや。

答へて曰く、是の法は是れ十方三世諸佛の師なりと雖も、佛は能く是の法を演出し、其功大なる

卽ち六欲天の中に生ず、是の中には妙細清淨の五欲あり。佛は人をして更に生じて、五欲を受けしむるを欲したまはずと雖も、衆生の涅槃に入るに任へざるあり、是の衆生の爲の故に念天を說きたまふ。國王の子、高危の處に在つて立つが如し。救護すべからず、自ら地に投ぜんと欲するに、王は人をして厚き綿褥を敷かしむれば、墮つるに則ち死せず、差して地に墮つるが故なり。

復次に、四種の天あり、名天、生天、淨天、生淨天なり。名天とは今の國王を天子と名くるが如し。生天とは四天王より乃ち非有想非無想天に至る。淨天とは人中に生れし諸の聖人なり。生淨天とは三界の天中に生ずる諸の聖人なり。所謂須陀洹、家家、斯陀含、一種なり。或は天上に於て阿那含、阿羅漢道を得。生淨天は、色界の中には五種の阿那含あり、是の間に還らずして卽ち彼に於て阿羅漢を得。無色界の中にては一種と阿那含あり、色界を離れて無色界に生じ、是の中に無漏道を修し、阿羅漢を得て涅槃に入る。是の二種の天、(卽ち)生天と生淨天と是の如き等の天を念ず。是を念天と名く。

念安那般那とは禪經の中に說くが如し。

念死とは二種の死あり、一には自死、二には他因緣死なり。是の二種の死を行者は常に念ずらく、「是の身は若し他が殺さざるも、必ず當に自ら死すべし、是の如き有爲法の中にては、彈指の頃も、不死を信ずる心を生ずべからず、是の身は一切時の中に、皆な死あつて老を待たず、是の種種の憂惱凶衰の身を恃み、心を生じて安隱不死を望むべからず。是の心は癡人の生ずる所なり、身中の四大は各各相害すること、人が毒蛇の篋を持するが如し、云何んぞ智人は以て安隱なりと爲ん。若し出氣は當に還り入るべしと保し、入息は出づと保し、睡眠して復た還たび覺するを得ることを保するは、是れ皆な必し難し、何となれば是の身の內外には、怨多きが故なり。說くが如し。

『或は胎中にて死するあり、或は生ずる時に死するあり、或は年壯の時死し、或は老至るの時

惱を捨つることを念ずるも亦た念法の中に入る。
問うて曰く、若し念法の中に入らば今何を以てか更に說くや。
答へて曰く、諸の煩惱を捨する、是の法は微妙にして得難く無上無量なり、是の故に更に別に說く。復次に、念法と念捨とは異なれり。念法は佛法の微妙にして諸法の中の第一なるを念じ。念捨は諸の煩惱の罪惡は之を捨てて快に爲すことを念ず。行相別なり、是を異なりと爲す。是の如き等の種種の因緣により行者は當に捨を念ずべし。念捨とは是れ初めて禪智を學ぶ中に、增上慢を生ずることを畏る。
念天とは、四天王天、乃至他化自在天あり。
問うて曰く、佛弟子は應に一心に、佛及び佛法を念ずべし、何を以てか天を念ずるや。
答へて曰く、布施の業因業の果報の故に天上の富樂を受くることを知る、是の因緣を以ての故に天を念ず。復次に、是の八念は佛自ら因緣を說きたまふ。「念天とは應に是の念を作すべし、四天王天あり、是の天は五の善法の因緣の故に彼の中に生ず、(卽ち)罪福を信じ、戒を受持し、善法を聞き、布施を修し、智慧を擧するなり。我にも亦た是の五法あり」と。是を以ての故に歡喜して言く、「天は是の五法を以ての故に富樂の處に生ず、我にも亦た是あり、我、彼に生ぜんと欲せば、亦た生ずることを得べし。我は天の福の無常なるを以ての故に受けず、乃至他化自在天も亦た是の如し」と。
問うて曰く、三界の中に淸淨なる天多し、何を以ての故に但だ欲天のみを念ずるや。
答へて曰く、聲聞法の中には欲界天を念ずるを說き、摩訶衍の中には一切三界の天を念ずるを說く。行者の未だ道を得ざる時には、或は心人間の五欲に著す、是を以ての故に佛は念天を說きたまへり。若し能く婬欲を斷ずれば、則ち上二界の天の中に生ず。若し婬欲を斷ずること能はざれば、

施は但だよく諸の飢渇寒熱等の病を救ふのみなれど、法施は能く九十八の諸の煩惱等の病を除く。是の如く種種の因緣によりて財施と法施とを分別す、行者は應に法施を念ずべし。

問うて曰く、何等か是れ法施なるや。

答へて曰く、佛の說きたまふ所の十二部經を、淸淨の心もて、福德の爲に他に說く、是を法施と名く。復た神通力を以て、人をして道を得せしむる有り、亦た法施と名く。綱明菩薩經の中に說くが如し。人の、佛の光明を見たてまつりて得道する者あり、生天する者あり。是の如き等は口に說かずと雖も、他をして法を得せしむるが故に亦た法施と名く。是の法施は應に衆生の心性の煩惱の多少、智慧の利鈍を觀ずべく、應に利益する所に隨つて爲に說法すべし。譬へば病に隨つて藥を服すれば則ち益あるが如し。婬欲重きあり、瞋恚重きあり、愚癡重きあり、兩兩雜り、三三雜るあり。婬重き者には爲に不淨觀を說き、瞋重き者には爲に慈心を說き、癡重き者には爲に深き因緣を說き、兩ながら雜る者には兩觀を說き、三つ雜る者には三觀を說く。若し人病相を知らず、錯つて藥を投ぜば、病は則ち爲に增さん。若し衆生の相に著する者には、爲に但だ五衆あつて此の中には我なしと說く。若し衆生相なしと言はば、卽ち爲に五衆相續して有なることを說く、斷滅に墮せしめざるが故なり。富樂を求むる者には爲に布施を說き、生天を欲する者には爲に持戒を說き、人中の多くの貧乏する所の者には爲に天上の事を說き、惱患せる居家の者には爲に出家の法を說き、錢財に著する居家の者には爲に在家の五戒の法を說き、若し世間を樂まざるものには爲に三法印たる無常、無我、涅槃たるを說き、經法に依隨して自ら義理を演作す、譬喩莊嚴して法施し衆生の爲に說く、是の如き等の種種の利益あるが故に當に法施を念ずべし。

「煩惱を捨す」とは、三結乃至九十八使等を皆な斷じて除却す、是を名けて捨と爲す。是の法を捨するを念ずること、毒蛇を捨つるが如く、桎梏を捨つるが如くにして、安隱歡喜を得。復次に、煩

慳を凶衰の相と爲す、之が爲に憂畏を生ず。之を洗ふに施水を以てすれば、則ち福利を生ぜん。
慳惜して衣食せずんば、身を終るまで歡樂なく、財物ありと云ふと雖も、貧困と異なること無し。
慳人の室宅は、譬へば丘塚墓の如く、求むる者は遠く之を避け、終に向ふ者あること無し。
是の如き慳貪の人は、智者に擯棄せられ、命氣未だ盡きずと雖も、死と等しうて異なること無し。
慳人には福慧なく、施に於て堅要なく、當に死坑に墮せんとするに臨んで、戀惜して懊恨を生じ。
涕泣して當に獨り去るべく、憂悔の火身を燒く。
好施の者は安樂にして、終に是の苦あること無く、人の布施を修する者は、名聞十方に滿つ。
智者に愛敬せられ、衆に入つて畏る所なく、命終して天上に生じ、久しくして後必ず涅槃を得ん。』

是の如き等、種種に慳貪を訶し、布施を讚ず。是を財施を念ずと名く。

云何に法施を念ずるや。行者は是の念を作さく、「法施は利益甚大なり、法施の因緣の故に、一切の佛弟子等は道を得たり」と。　復次に、佛は二種の施を說きたまふ中に法施を第一と爲したまふ。何となれば、財施の果報は有量なれど、法施の果報は無量なり、財施は欲界の報にして、法施は三界の報、亦た出三界の報なり。若し名聞、財利、力勢を求めず、但だ佛道を學ばんが爲に、弘大の慈悲もて、衆生の生老病死の苦を度するは是を淸淨の法施と名く。若し爾らずんば市易の法の如しと爲す。　復次に、財施は施すこと多ければ財物減少す、法施は施すこと多ければ法は更に報益す。財施は是れ無量世中の舊法なり、法施は聖法にして初めて來つて未だ得ず、名けて新法と爲す。財

以ての故に是の四念を得る」と。則ち是れ先世・今世に三寶の中に於て少しく布施の因緣あるが故なり。所以いかんとなれば、衆生は無始の世界の中に於て三寶の中に布施するを知らざるが故に、福は皆な盡く滅す、是の三寶には無量の法あり、是の故に施も亦た盡きずして必ず涅槃を得。　復次に、過去の諸佛は初發心の時、皆な少多の布施を以て因緣と爲したまふ。佛の說きたまふが如くんば、「是の布施は是れ初め助道の因緣なり」と。　復次に、人命は無常なり、財物は電の如し、人乞はずとも猶尚與ふべし。何に況んや、乞はれて而も施さざらんや。是を以て應に施しては助道の因緣を作すべし。　復次に、財物は是れ種種の煩惱罪業の因緣なり。持戒、禪定、智慧、種種の善法の若きは是れ涅槃の因緣なり、是を以ての故に財物は倘ほ應に自ら棄つべし。何に況んや。好福田の中にして而も布施せざらんや。譬へば兄弟二人有り、各十斤の金を擔つて道中を行くに、更に餘伴なきが如し。兄は是の念を作さく、「我は何を以てか、弟を殺して金を取らざる、此の曠路の中には人の知る者なし」と。弟も復た念を生じて、兄を殺して念を取らんと欲す、兄弟各惡心あれば語言、視瞻、皆な異なる。兄弟卽ち自ら悟り、還つて悔心を生ず、「我等は人に非ず、禽獸と何ぞ異ならん。同じく兄弟と生れて、而も少金の爲の故に惡心を生ず」と。兄弟共に深水の邊に至るに、兄は金を以て水中に投著す。弟言く、「善哉、善哉」と。弟も尋いで復た金を水中に棄つ。兄は復た言く、「善哉、善哉」と。兄弟更互に相問ふ、「何を以ての故に善哉と言ふや」と。各答へて言く、「我は此の金を以ての故に、不善心を生じ、相危害せんと欲す。今之を棄つることを得るが故に、善哉と言ふ」と。二辭各爾なり。是を以ての故に財は惡心の因緣なるを知る、常に應に自ら捨つべし、何に況んや施せば、大福を得るに、而も施さざらんや。偈に說くが如し。

『施を行寶藏と爲し、亦た善き親友と爲す。始終相利益し、能く壞する者あること無し。
施を好き密蓋と爲す、能く飢渴の雨を遮す。施を堅牢の船と爲す、能く貧窮の海を度る。

是の正見を用ゐて四諦を觀じ、常に念じて妄念せず。一切の煩惱は是れ賊なり、應當に捨つべし。正見等は是れ我が眞の伴なり、應當に隨ふべしと。是を正念と名く。四諦の中に於て心を攝して散ぜず、色無色定の中に向はしめず、一心に涅槃に向ふ、是を正定と名く。是に初めて善の有漏を得たるを名けて煖法、頂法、忍法の中の義と爲す。次第に增進して初中後の心、無漏心の中に入り、疾かに一心の中に具し、前後分別次第あること無し。正見は正思惟・正方便・正念・正定と相應し、三種の戒は是の五分に隨つて行ず。正見は好醜を分別して利益を事とし、正思惟は正見を發動するを事とし、正語等は是の智慧、諸の功德を持つて散失せしめず、正方便は驅策して速に進んで息まざらしめ、正念は七事所應の行者憶して忘れず、正定は心を淸淨にして不濁・不亂ならしめ、正見をして七分を成ずることを得せしむること、風なき房中に燈せば則ち照明了了なるが如し。是の如く無漏戒は八聖道の中に在り、亦た智者の爲に讃せらる。

問うて曰く、無漏戒は應に智者の爲に讃せらるべし、有漏戒は何を以て讃するや。

答へて曰く、有漏戒は無漏に似、無漏に隨つて同じく因緣を行ず、是の故に智者は合せ讃ず。賊中に人あつて叛き來つて我に歸するが如し。彼も是れ賊なりと雖も、今來つて我に向へり、我當に之に由つて以て賊を破すべし、何ぞ諸の煩惱の賊は、三界の城中に在つて住することを、念はさる可けんや。有漏戒の善根、若しくは煖法、頂法、忍法、世間第一法は、餘の有漏法と異なるが故に、行者は受用し、是の因緣を以ての故に諸の結使の賊を破して、苦法忍なる無漏の法財を得　是を以ての故に智者の讃ずる所なり、是を念戒と名く。

念捨とは、二種の捨あり、一には施捨、二には諸の煩惱を捨するなり。施捨に二種あり、一には財施、二には法施なり。この三種の捨の和合するを名けて捨と爲す。財施は是れ一切善法の根本なるが故に、行者は是の念を作さく、「上の四念の因緣の故に煩惱の病を差すことを得、今何の因緣を

而も復た金鎖の爲に繫がるるが如し。人が恩愛の煩惱の爲に繫がるるは、牢獄に在るが如く、出家することを得と雖も、禁戒に愛著すること金鎖を著くるが如し。行者若し戒は是れ無漏の因緣なりと知つて而も著を生ぜずんば、是は則ち解脫して繫縛せらるること無し、是を不著戒と名く。諸佛・菩薩・辟支佛及び聲聞の讃する所の戒を若し是の戒を行じ、是の戒を用ふれば、是を智(者)所讃戒と名く。外道の戒とは、牛戒、鹿戒、狗戒、羅刹鬼戒、啞戒、聾戒なり。是の如き等の戒は智の讃ぜざる所なり、唐しく苦んで善報なし。復次に、智所讃とは三種の戒の中に於て無漏戒なり、破らず壞せず、此の戒に依つて實智慧を得、是れ聖の讃ずる所の戒なり。無漏戒に三種あり、佛の說きたまふ如く、正語・正業・正命、是の三業なり。義は八聖道の中に說くが如し。是の中に應に廣く說くべし。

問うて曰く、若し持戒は是れ禪定の因緣にして、禪定は是れ智慧の因緣ならば、八聖道の中に何を以てか慧は前に在り、戒は中に在り、定は後に在るや。

答へて曰く、路を行くの法は應に先づ眼を以て道を見て、而して後行くべし、行く時は當に精勤なるべし、精勤にして行く時には、常に導師の敎ふる所の如く念じ、念じ已つて一心に路を進めば非道に順はざるなり。正見も亦た是の如く、先づ正智慧を以て觀ずれば、五受衆は皆な苦なり。是を苦と名く。苦は愛等の諸の結使の和合するより生ず、是を集と名く。愛等の結使滅すれば是を涅槃と名く。是の如き等の八分を觀ずるを名けて道と爲し、是を正見と名く。行者は是の時、心に定んで世間の虛妄の棄つべく、涅槃の實法の取る可きことを知つて、是の事を決定す、是を正見と名く。是の事を知見するの心力、未だ大ならず、未だ發行すること能はず、思惟籌量して、正見を發動して力を得せしむ、是を正思惟と名く。智慧既に發し、言を以て宣べんと欲するが故に正語を次にし、正業・正命にして戒を行ふ時、精進して懈らず、色・無色定の中に住せしめず、是を正方便と名く。

念戒とは、戒に二種あり、有漏戒と無漏戒となり。有漏に復た二種あり、一には律儀戒、二には定共戒なり。行者の初學は、是の三種の戒を念じ、三種を學し已れば、但だ無漏戒を念ず、是の律儀戒は能く諸惡をして自在なることを得ざらしめ、枯朽し折滅す。禪定戒は能く諸の煩惱を遮す、何となれば內樂を得るが故に、世間の樂を求めざればなり。無漏戒は能く諸の惡煩惱の根本を拔く。

問うて曰く、云何に戒を念ずるや。

答へて曰く、先に念僧の中に說くが如く、佛は醫王の如く、法は良藥の如く、僧は病を瞻る人の如く、戒は服藥、禁忌の如し。行者は自ら念ずらく、「我若し禁忌に隨はずんば、三寶は我に於て所益なからん。又導師の好道を指示するが如し、行者の用ゐざるも導師に咎なし、是を以ての故に我應に戒を念ずべし」と。 復次に、是の戒は一切善法の所住の處なり。譬へば百穀藥木は地に依つて生ずるが如し。持戒淸淨なれば能く諸の深き禪定、實相の智慧を生長す。亦是れは出家人の初門、一切の出家人の依仗する所、涅槃に到るの初因緣なり。

說くが如くんば戒を持つが故に心悔いず、乃至解脫涅槃を得。行者は淸淨戒を念ず、(卽ち)不缺戒、不破戒、不穿戒、不雜戒、自在戒、不著戒、智者所讚戒にして諸の瑕隙なし。名けて淸淨戒と爲す。云何なるを不缺戒と名くるや。五衆の戒の中にて、四重戒を除いて諸餘の重を犯す者は是を缺犯と名け、餘の罪は是を破と爲す。復次に、身罪を缺と名け、口罪を破と名く。復次に、大罪を缺と名け、小罪を破と名く。善心にして涅槃に廻向し、結使種種の惡しき覺・觀をして、入ることを得せしめざる、是を不穿と名く。 涅槃の爲と世間の爲との二處に向ふ、是を名けて雜隨戒と爲す。外緣に隨はざること自在なる人の繫屬せらるところ無きが如く、是の淨戒を持つに愛結の爲に拘はれざる、是を自在戒と爲す。戒に於て愛慢等の諸の結使を生ぜず、戒の實相を知り、亦是の戒を取らず。若し是の戒を取らば、譬へば人の囹圄に在つて桎梏に拘はれ、赦を蒙ることを得と雖も、

んば、以て僧力の大なることを知ること無けん。若し佛の爲に物を施すすら僧は受くるを得るならば、便ち僧の力の大なるを知る。譬へば藥師は毒藥を試みんと欲し、先づ以て鷄に與へ、鷄卽時に死すれば、然る後に自ら服して、乃ち藥の威力の大なることを知るが如し。是の故に檀越、當に知るべし、

『若し人佛を愛敬せば、亦た當に僧を愛敬すべし、當に分別あるべからず、同じく皆な寶なるが故なり。』

爾の時に檀越は是の事を說くを聞いて、歡喜して言く、「我某甲、今日より若し僧數の中に入ること有らば、若しくは小なるも、若しくは大なるも、一心に信敬して敢へて分別せざらん」と。諸の沙彌の言く、「汝は心に無上の福田を信敬す、久しからずして當に道を得べし。何を以ての故に、

『多聞及び持戒、智な慧・禪定は、皆僧數の中に入ること、萬川の海に歸するが如し。譬へば衆の藥草は、雪山に依止し、百穀、諸の草木は、皆な地に依止するが如く、一切の諸の善人は、皆な僧數の中に在り。』

復次に、汝等曾つて佛の長鬼神將軍の爲に、[八]三善男子の阿泥盧陀、難提、迦剡彌羅を讚したまへるを聞くや不や。佛の言はく、「若し一切世間の天及び人、一心に三善男子を念ぜば、長夜に無量の利益を得ん」と。是の事を以ての故に倍す僧を信敬すべし。是の三人は僧と名けず。佛說き給はく、「三人を念ずるすら是の如きの果報あり、何に況んや、一心淸淨に僧を念ずるをや」と。是故に檀越、當に力に任せて僧の名を念ずべし、偈に說くが如し。

『是の諸の聖人衆は、則ち雄猛の軍と爲つて、魔王の賊を摧滅す。是を伴うて涅槃に至る。』

諸の沙彌は檀越の爲に種種に僧の聖功德を說き、檀越は聞き已り、家を擧げて大小(の者)、皆な四諦を見、須陀洹道を得だり。是の因緣を以ての故に、應當に一心に僧を念ずべし。

【八】Aniruddha Nandika, Kimbila

く、「佛寶の中に於て信心淸淨なると、僧寶の中に於て信心淸淨なると、何者か福勝れたるや。」答へて言く、『我等は初より僧寶と佛寶とに增減あることを見ず、何となれば、佛、一時、舍婆提に乞食したまふ。一婆羅門の姓は婆羅埵逝なるものあり。佛は數數其家に到つて食を乞ひたまふに、心に是念を作さく、「是の沙門は何を以てか來ること數數なる。其の債を負ふが如し」と。佛時に偈を說きたまはく、

『時雨數數墮つれば、五穀數數成り、數數福業を修すれば、數數果報を受く。數數生法を受くるが故に、數數死を受く、聖法數數成ぜば、誰か數數生死せん。』

婆羅門は是の偈を聞き已つて是の念を作さく、「佛は大聖人なり。具に我が心を知れり。」慚愧して鉢を取り、舍に入つて美食を盛滿して、以て佛に奉上するに、佛は受けずして、是の言を作し給ふ。「我は偈を說くが爲の故に此食を得たり。我、食せざる也」と。婆羅門の言さく、「是の食は當に誰にか與ふべき」と。佛の言はく、「我は天及び人の能く是の食を消せん者を見ず、汝は持ち去つて、少草地若しくは蟲なき水中に置け」と。即ち佛の敎の如く食を持して、蟲なき水中に著くるに、水即ち大に沸き、烟火俱に出でて、大熱鐵を投ずるが如し。婆羅門は見已つて、驚怖して言さく、「未曾有なり、乃至食中の神力是の如し」と。還たび佛所に到り、頭面に佛足を禮して、懺悔し出家して戒を受けんことを乞へり。佛、「善來」と言へば、即時に鬚髮自ら墮ちて便ち沙門と成り、漸漸に結を斷じて阿羅漢道を得たり。復た摩訶憍曇彌あり、金色の上下の寶衣を以て佛に奉れり。佛は衆僧が受用に堪能なることを知ろしめし、憍曇彌に告げたまはく、「此の上下の衣を以て衆僧に與へよ」と。是の故に佛寶と僧寶とに、福に多少なきを知る。』檀越言く、「若し佛の爲に布施するを僧は能く消し、能く受けなば、何を以ての故に、婆羅埵逝婆羅門の食を、佛は僧をして食せしめたまはざるや」と。諸の沙彌答ふらく、「僧の大力を顯はさん爲の故なり。若し食が水中に在つて大神力あるを見ず

若し僧を毀らんと欲せば、是れ則ち自ら毀るなり。汝は大なる失を爲せり。已に過ぎたる事は追ふ可らず、方に善心を來して、諸の疑悔を除去し、我が說く所の偈を聽くべし。

『聖衆は量る可らず、威儀を以て知ること難し、族姓を以てす可らず、亦た多聞を以てせず、亦た威德を以てせず、又耆年を以てせず、亦た嚴容を以てせず、復た辯舌を以てせず、聖衆の大海水は、功德の故に甚だ深し。

佛は百事を以て是の僧を讚したまふ、之に施すに少なりと雖も、報を得ること多く、是の第[六]三寶は聲遠く聞ゆ、是を以ての故に應に僧を供養すべし。

是れの老少・多知・少聞及び明・闇を分別すべからず、人の林を觀るに伊蘭・瞻蔔及び[七]薩羅を分別せざるが如し。汝僧を念ぜんと欲せば當に是の如くすべし。

愚を以て聖を分別すべからず、摩訶迦葉の出家せし時には、納衣の價直は十萬金なりしが、乞人下賤の服を作らんと欲して、更に麁弊なるを求むるに得ること能はざりき。聖衆の僧の中も亦た是の如く、最も下小の福田を求索するも、能く施者に報ゆること十萬倍なり。更に如かざるを求むるも得べからず。衆僧の大海の中にては、結戒を畔際と爲す、若し戒を破る者あれば、終に僧數に在らず、譬へば大海水は死屍と共に宿らざるが如し。』

檀越は是の事を聞き、是の神通力を見て、身驚き毛竪ち、合掌して諸の沙彌に白して言さく、「諸の聖人よ、我今懺悔す、我は是れ凡夫の人にして、心に常に罪を懷く、我に少疑あり、今請問せんと欲す」と。偈を說いて言く、

『大德よ、已に疑を過ぎぬ、我、今遭遇することを得たり、若し復た諸問せずんば、則ち是れ愚中の愚ならん。』

諸の沙彌の言く、「汝問はんと欲せば便ち問へ、我當に聞く所を以て答ふべし」と。檀越問うて曰

【六】第三寶。三寶の第三、僧寶を意味す。

【七】薩羅。Sāla.

し。檀越は此の輩を見て歡喜し、迎へ入れて坐せしむ。坐し已つて須臾の頃に、還た年少の形に復す。檀越は驚怖して言く、

『是の如きの耆老の相、還た變じて少身と成る、還年の藥を服するが如し、是の事は何に由つて然るや。』

諸の沙彌は言く、汝疑畏を生ずること莫れ、我等は非人に非ず。汝は僧を平量せんと欲す、是の事は甚だ傷むべし。我等相憐愍するが故に是の如きの化を現ず。汝は當に深く之を識るべし、聖業は量るべからずと。說くが如くんば、

『譬へば蚊の觜を以て、猶海底を測るべきが如く、一切の天と人には、能く僧を量る者なし。
僧の功德の貴きを以てすら、猶尚分別せず、而るに汝は年歲を以て、諸大德を稱量す。
大小は智に生じて老少に在らず、智ありて懃めて精進なれば、少なりと雖も而も是れ老なり。
懈怠にして智慧なくんば、老なりと雖も、而も是れ少なり。』

汝今僧を平量す、是れ則ち大なる失たり。一指を以て大海の底を測り知らんと欲するが如し。智者の爲に笑はる。汝は佛が四事は小なりと雖も輕んず可らざるを、說きたまふを聞かずや。太子は小なりと雖も當に國王と爲るべし、是れ輕んず可らず。蛇の子は小なりと雖も毒よく人を殺す、亦た輕んず可らず。小火は微なりと雖も能く山野を燒く、又輕んず可らざるなり。沙彌は小なりと雖も聖なる神通を得、最も輕んず可らずと。又四種の人あり、菴羅菓の、生にして熟に似、熟にして生に似、生にして生に似、熟にして熟に似たるが如し。佛弟子も亦た是の如し。聖なる功德は成就すれど、而も威儀語言は善人に似ざる有り。威儀語言は善人に似れども、而も聖なる功德は成就せざる有り。威儀語言は善人に似ず、聖なる功德は未だ成就せざる有り。威儀語言は善人に似て、而も聖なる功德は成就せる有り。汝云何なれば是の言を念はずして而も僧を稱量せんとするや。汝

を以ての故に沙彌を聽さざるや」と。答へて言く、「檀越は年少を請することを喜ばざるを以ての故なり」と。便ち偈を說いて言く、

『鬚髮白きこと雪の如く、齒は落ち、皮肉は皺み、僂步して形體羸せたる、是の如きの輩を請することを樂む。』

諸の沙彌等は皆な是れ大阿羅漢なり。師子の頭を打つが如く、欻然として坐より起ち、偈を說いて言く、

『檀越の無智の人は、形を見て德を取らず、是の少年の相を捨てて但だ老い瘦せ黑みたるを取る。』

上尊耆年の相とは、佛の偈に說きたまへるが如し。

『所謂の長老の相は、必ずしも年耆い、形瘦せ、鬚髮白く、空しく老いて、内に德なきを以てせず、能く罪福の果を捨て、精進に梵行を行じ、已に一切の法を離れたる、是を名けて長老と爲す。』

是の時、諸の沙彌は復た是の念を作さく、「我等は此の檀越の、僧の好惡を品量するを坐觀すべからず」と。即ち復た偈を說く、

『讃歎・呵罵の中に、我等の心は一なりと雖も、是の人は佛法を毀る。應に教誨せざるべからず、當に疾く其の舍に到り、法を以て之に教へ語るべし。我等(彼を)度せずんば、是れ則ち物を棄つると爲す。』

即時に諸の沙彌は、自ら其身を變じて、皆な老年と成り、鬚髮白きこと雪の如く、秀眉は垂れて眼を覆ひ、皮の皺は波浪の如く、其の脊は曲ること弓の如く、兩手を杖に負はせて行き、次第に請を受け、身を擧げて皆振掉し、行止自ら安からざること、譬へば白楊樹の風に隨つて動搖するが如

父、見て歡喜し二十億兩の金を與ふ。佛を見たてまつり法を聞いて阿羅漢を得、諸の弟子の中に於て精進第一なりき。是の如く等、少施にして大果報を得。是の故に世間無上の福田と名く。「僧中に[三]四雙八輩あり」とは、佛が世間無上の福田を說きたまふ所以は、此の八輩の聖人あるを以ての故に無上の福田と名くるなり。

問うて曰く、佛の給孤獨居士に告げたまふ如くんば、「世間の福田にして供養に應ずる者に二種あり。若しくは學人、若しくは無學人なり。學人に[四]十八、無學人に[五]九あり」と。今此の中に何を以ての故に但だ八を說くや。

答へて曰く、彼は廣く說くが故に十八及び九なり、今此は略して說くが故に八なり。彼の二十七聖人は皆此の八に攝す。信行・法行は或は向須陀洹に攝し、或は向斯陀含に攝し、或は向阿那含に攝す。家家は向斯陀含に攝し、一種は向阿那含に攝し、五阿那含は向阿羅漢に攝し、信行法行の思惟道に入るを信解脫見得と名く。是の信解脫見得に十五の學人を攝し、九種の福田に阿羅漢を攝す。

復次に、行者は應に僧を念ずべし、僧は是れ我が涅槃に趣く眞の伴なり。一戒一見も是の如し、應に歡喜して一心に恭敬順從して違ふこと無かるべし。我は先に種種の衆惡・妻子・奴婢・人民等を伴とす。是れ三惡道に入るの伴なり。今聖人の伴を得、安隱にして涅槃に至る。佛は醫王の如く、法は良藥の如く、僧は病を瞻る人の如し。我は當に淸淨の持戒、正憶念を得べし。佛の說きたまふ所の法藥の如きは、我當に順從すべし。僧は是れ我が諸の結病を斷ずる中の一因緣なり。所謂病を瞻るの人なり、是の故に當に僧を念ずべし。

復次に、僧には無量の戒・禪定・智慧等ありて具足し、其の德は測量すべからず。一の富貴の長者の如きは僧を信樂し、僧の執事の人に白す、「我は次第に僧を請し、舍に於て食せしめん」と。日日に次請して、乃ち沙彌に至るに、執事は沙彌の請を受くること聽さず。諸の沙彌の言く、「何の意

【三】四雙八輩。四向四果である。四向とは、一、須陀洹(預流)向、二、斯陀含(一來)向、三阿那含(不還)向、四、阿羅漢向、四果はそれぞれの果である。向果を一雙とし、四種の一雙が八輩となる。

【四】學人十八。信行、法行、信解、見至到、自證、家家、一種、須陀洹向、須陀洹果、斯陀含向、斯陀含果、阿那含向、阿那含果、阿羅漢向これに五種不還を加ふ。

【五】無學九、退法、思法、護法、安住法、堪達法不動、不退、慧解脫、俱解脫の九種羅漢。

佛の得たまふ所を讃ずるが如きは、是れを實の具足と名く。　復次に、外道の出家衆、在家衆に異なることを欲するが爲の故に是の如きの讃を作す。外道の在家の衆は其の富貴・豪尊・勢力を讃じ、出家衆は其の邪見・苦行・染著・智慧・執論・諍競を讃す。念僧衆を念ずる中に或は持戒・禪定・智慧等少くして稱するに足らざる有り。此を以ての故に、佛は自ら弟子衆の一切功德の根本の住處たる戒衆の具足、乃至解脫知見衆の具足を讃したまふ。是の戒衆の中に住して傾動せず、禪定の弓を引いて智慧の箭を放ち、諸の煩惱の賊を破つて解脫を得、是の解脫の中に於て知見を生ず。譬へば健人の先づ足を安じて弓を挽き、箭を放つて能く怨敵を破し、二怖を出すことを得、罪を王に免れ、難を陣に拔き、決了して、賊は已に破滅するを知見して心に歡喜を生ずるが如し。是の故に五衆を以て讃す。「供養すべし」とは、五衆の功德を具足せるが故なり。富貴豪勢の人は人の宗敬する所なるが如く、佛弟子衆も亦た是の如く、淨戒・禪定・智慧の財富み、解脫・解脫知見の勢力を有するが故に供養・恭敬・合掌の禮事に應ず。「世間無上の福田」とは、施主に二種あり、貧者と富者となり。貧者は禮事・恭敬・迎送して果報を得、富者も亦よく恭敬・禮事・迎送し、又財物を以て供養して果報を得、是の故に名けて世間無上の福田と爲す。譬へば良田は耕治し調柔し、時を以て種を下し、灌漑豐渥すれば獲る所必ず多きが如し。衆僧の福田も亦復た是の如く、智慧の犂を以て結使の根を耕出し、四無量心を以て摩治調柔し、諸の檀越、信施の穀子を下し、漑ぐに念施・恭敬い清淨の心水を以てすれば、若しくは今世、若しくは後世に無量の世間の樂を得、及び三乘の果を得。薄拘羅比丘の如きは、鞞婆尸佛の時、一の呵梨勒果[二]を以て衆僧に供養し、九十一劫(の間)、天上、人中に福樂の果を得、常に疾病なく、今は釋迦牟尼佛に値ひたてまつり、出家し、漏を盡くして阿羅漢を得。沙門の二十億耳の如きは鞞婆尸佛の時、一の房舍を作り、物を以て地を覆ひて衆僧を供養し、九十一劫(の間)、天上、人中に福樂の果を得、足は地を蹈まず、生ずる時足下の毛の長さ二寸にして柔軟淨好なり。

【二】 呵梨勒果。Haritaki 天主將來と譯す。大さ棗大にして酸甘。五藥の一。

り。無常は卽ち是れ苦諦、集諦、道諦の說、無我は則ち一切法の說、寂滅涅槃は卽ち是れ盡諦なり。

復次に、有爲の法は無常にして、念念に生滅するが故に皆な因緣に屬して、自在あること無し、自在あること無きが故に無我なり、無常・無我・無相なるが故に心著せず、無相にして著せざるが故に、卽ち是れ寂滅涅槃なり。是を以ての故に摩訶衍の法の中に、一切の法は不生不滅にして、一相所謂無相を說くと雖も、無相は卽ち寂滅涅槃なり。是の念法三昧は、智に緣じ盡に緣じ、諸菩薩及び辟支佛の功德なり。

問うて曰く、何を以ての故に、念佛には、但だ佛身中の無學の諸の功德を緣じ、念僧三昧には佛弟子の身中の諸の學無學の法を緣じ、餘殘の善無漏の法は皆な念佛三昧の緣ずる所なるや。

答へて曰く、迦旃延尼子は是の如く說けり。「摩訶衍の人は說く、三世十方の諸佛及び諸佛の初發意より、乃至法盡まで、其中間に於て所作するところの功德神力、皆な是れ念佛三昧の所緣なり」と。佛の所說及び所說の法義經の如くんば、「一句一偈より乃至八萬四千の法衆、信・戒・捨・聞・定・智慧等の諸の善法乃至無餘涅槃は、皆な是れ念佛三昧の所緣なり。諸の菩薩辟支佛及び聲聞衆、佛を除いて餘殘の一切の聖衆及び諸の功德は、是れ念僧三昧の所緣なり。」

念僧とは是れ佛弟子衆の[一]戒衆の具足、禪定衆、智慧衆、解脫衆、解脫知見衆の具足せるなり。四雙八輩は應に供養、恭敬の禮事を受くべし、是れ世間無上の福田なり。行者は應に念ずべし、佛の讃じたまふ所の僧の如くんば、若しくは聲聞僧、若しくは辟支佛僧、若しくは菩薩僧の功德は是れ聖僧なり。五衆の具足は上に說くが如し。

問うて曰く、先に已に五衆を以て佛を讃せり、云何なれば復た五衆を以て僧を讃するや。

答へて曰く、弟子の得る所の五衆に隨つて具足を讃す、具足に二種あり、一には實の具足、二には名の具足なり。佛弟子の應に得べき所の者を盡く得たるを讃ずるが如きは是れを名の具足と名く。

【一】以下を合して五衆。

なりと雖も亦た人をして畏難せしめず。遍ねく到る所ありと雖も、凡小の人は亦た解すること能はず。佛語には是の如く種種希有の事あつて、能く人の衣毛をして竪たしめ、流汗し、氣は身體に滿ちて戰懼せしめ、亦よく諸天をして心厭はしめ、聲は十方に滿ち、六種に地を振はしめ、亦よく人の、無始より世界に堅著する所の者をしては能く捨てしめ、堅著ならざる所の者をして能く樂しましむ。佛語は、罪惡の人之を聞けば自ら罪あるが故に憂怖熱惱し。善く一心に精進して道に入る人聞けば、甘露味を服するが如く、初も亦た好く中も亦た好く、後も亦た好し。　復次に、多くの會衆の中、各各聞く所あらんと欲するに、佛は一言を以て答へたまふに、各各解を得、各各自ら佛は獨り我が爲にのみ說きたまふと見る。大衆の中に於て遠近ありと雖も、聞く者には聲に增減なく、三千大千世界乃至十方無量の世界に滿ちて、度すべき者は聞き、度すべからざる者は聞かず。譬へば雷霆地に震へども聾者は聽かず、聰者は悟り得るが如し。是の如く種種に佛の言語を念ず。

何等か是れ法義なるや。信戒捨聞定慧等を道と爲す。諸の善法及び三法印は通達の中に說くが如し。一切有爲法は無常、一切法は無我、寂滅涅槃、是を佛法の義と名く。是三印は一切の論議師も壞する能はざる所なり。種種に多く所說ありと雖も、亦た能く諸法の性を轉ずる者なし。冷相は能く轉じて熱からしむること無きが如し。諸法の性は壞す可らず。假使人をして能く虛空を傷けしむるも、是諸法印は如法にして壞す可らず。聖人は是の三種の法相を知りて、一切の依止する邪見、各鬪諍する處により離るゝことを得。譬へば目有る人は、群盲が種種に色相を諍ふを見て、愍んで之を笑ひ、與共(とも)に諍はざるが如し。

問うて曰く、佛は聲聞法には四種の實あり、摩訶衍の中には一實ありと說きたまふ。今何を以て三實を說くや。

答へて曰く、佛は三種の實法印を說きたまふに、廣く說けば則ち四種、略して說けば則ち一種な

罪なく福なければ、則ち道俗の法亂る。　復次に、生滅の相は常に作法に隨つて住する時あること無し、若し住する時あれば則ち生滅なし。是を以ての故に現在の色は住すること有ること無し。住の中には亦た生滅あり。（そは）是の一念の中の住も亦た是れ有爲法なるが故なり。是を通達無礙と名く。是の如く應に法を念ずべし。

復次に、法に二種あり。一には佛の演說したまふ所の三藏十二部・八萬四千の法聚なり。二には佛の說きたまふ所の法義、所謂持戒・禪定・智慧・八聖道及び解脫果・涅槃等なり。行者は先づ當に佛の演說したまふ所を念ずべく、次に當に法義を念ずべし。　佛の演說したまふ所を念ずとは、佛語は美妙にして皆な眞實にして、大饒益あり、佛の演說したまふ所は亦は深く亦は淺し。實相を觀ずるが故に深く、巧に說くが故に淺し。重語して失なし。各各義あるが故なり。佛の演說したまふ所は四處に住し、四種の功德莊嚴あり。一には慧處、二には諦處、三には捨處、四には滅處なり。四種の答あるが故に壞す可らず。一には定答、二には解答、三には反問答、四には置答なり。佛の演說したまふ所は、或時は聽いて遮し、或時は遮して聽き、或は聽いて遮せず、或は遮して聽かず、此の四は皆順從して違ふこと無し。佛說は諸の法相を得るが故に戲論なく、義理あつて說くが故に有無の論を破る。佛の演說は第一義に隨順し、世間の法を說くと雖も、亦た咎なし。二諦と相違せざるが故なり。利益に隨順して說き、清淨の人の中に於ては美妙と爲し、不淨人の中に於ては苦惡と爲す。美語・苦語の中に於ても亦た過非なし。佛法は皆善法に隨ふも、亦た善法に著せず、是の垢法、怨家と雖も、亦た以て高ふることを爲さず、種種に訶する所ありと雖も、亦た訶の罪あること無く、種種に法を讚ずと雖も亦た依止する所なし。佛の言說の中には亦た增なく減なく、或は略、或は廣なり。佛語は初め善く、久久に研求するも亦た善し。佛語は多しと雖も義味薄からず、種種に雜語すと雖も義は亦た亂れず。能く人心を引くと雖も亦た人をして愛著を生ぜしめず、殊畏高顯

我を說けば內の我法を破す。我と我所とを破するが故に、是を寂滅涅槃と名く。行者は作法の無常なるを觀ずれば便ち厭を生じ、世苦を厭ふ。既に苦を厭ふことを知れど、著を存じて主を觀じて、「能く是の觀を作す」と謂ふ。是を以ての故に第二の法印ありて一切は無我なりと知り、五衆、十二入、十八界、十二因緣の中に於て、內外を分別し推求して、主を觀ずるに不可得なり。不可得なるが故に、是の一切法には我作なし。是の如く知り已つて戲論を作さず、依止する所なく、但だ滅に歸す、是を以ての故に寂滅涅槃印を說く。

問うて曰く、摩訶衍の中にては、諸法は不生不滅にして、一相は所謂無相なりと說く、此の中には云何なれば一切有爲の作法の無常なるを、名けて法印と爲すと說くや。二法は云何んぞ相違せざるや。

答へて曰く、無常を觀ずるは卽ち是れ空を觀ずるの因緣なり。色は念念に無常なりと觀ずれば卽ち空たるを知るが如し。過去の色は壞滅して見る可らざるが故に色相なく、未來の色は生ぜず無作無用、不可見の故に色相なく、現在の色も亦た住すること無く、見る可らず、分別して知る可らざるが故に色相なし。色相なくんば卽ち是れ空なり。空なれば卽ち是れ無生無滅なり。無生無滅及び生滅は、其の實は是れ一にして說くに廣略あるのみ。

問うて曰く、過去未來の色は見る可らざるが故に色相なきも、現在の色は住する時には見る可し、云何んぞ色相なしと言ふや。

答へて曰く、現在の色も亦た住する時なし。四念處の中に說くが如し。若し法が後に壞相を見さば、當に初生の時より壞相あるを知るべし。(壞相の)隨逐するが微細なるを以ての故に識らざるのみ。人の屐を著くるが如し。若し初日に新にして、故きこと有ること無くんば、後にも常に新なるべく、故きこと有るべからず。若し故きこと無くんば是れ常なるべく、常なるが故に罪なく福なく、

「通達無礙」とは、佛の法印を得るが故に、通達無礙なり、王の印を得れば、則ち留難する所無きが如し。

問うて曰く、何等か是れ佛法の印なる。

答へて曰く、佛法の印に三種あり、一には一切有爲の法は念念に生滅して皆な無常なり。二には一切法は無我なり、三には寂滅涅槃なり、行者は三界は皆これ有爲の生滅の作法にして、先に有りて、今は無く、今は有りて後には無く、念念に生滅相續して相似を生ずるを知るが故に、見知するを得べし。流水・燈焰・長風の如く、相似て相續するが故に、人は以て一と爲す。衆生は無常法の中に於て常に顚倒する故に、去る者を謂つて是れ常住なりとす。是を一切作法無常の印と名く。一切法無我とは、諸法は內に主なく作者なく、知なく見なく、生者なく、造業者なく、一切の法は皆な因緣に屬す。因緣に屬するが故に自在ならず、自在ならざるが故に無我なり、（そは）我相を得べからざるが故なり、破我品の中に說くが如し。是を無我印と名く。

問うて曰く、何を以ての故に但だ作法のみは無常にして、一切法は無我なりと云ふや。

答へて曰く、不作法は因なく緣なきが故に不生不滅なり、不生不滅なるが故に名けて無常と爲さず。復次に、不作法の中には、心著顚倒を生ぜず、是を以ての故に是を無常と說かされども、說いて無我とは言ふ可し。有人の說に、「神は是れ常遍知の相なり、是を以ての故に一切法の中に無我を說く」と。

寂滅とは是れ涅槃なり。三毒、三衰の火滅するが故に、名けて寂滅の印と爲す。

問うて曰く、寂滅印の中には何を以てか但だ一法のみにして多く說かざるや。

答へて曰く、初印の中に五衆を說き、二印の中に一切法の皆無我なることを說き、第三印の中に二印の果を說く、是を寂滅印と名く。一切の作法無常ならば則ち我所の外の五欲等を破す、若し無

時を待つこと無し、八聖道を修する時に隨つて便ち涅槃を得。譬へば火が薪を得れば便ち然ゆるが如く、無漏の智慧の生ずる時、便ち能く諸の煩惱を燒いて時を待たざるなり。若し人善根未熟なれば、時を待つて得べし、何を以てか時なしと言ふや。

問うて曰く、佛の說きたまふが如くんば、時藥・時衣・時食あり。

答へて曰く、比時は世俗の法に隨ふ、佛法久住の爲の故に時戒を結す。若し道を修し、涅槃及び諸の禪定・智慧微妙の法を得るが爲には時を待たざるなり。諸の外道の法は皆時節を待つ。佛法は但だ因緣の具足を待つのみ。若し持戒禪定すと雖も、而も智慧未だ成就せざれば道を成ずること能はず。若し持戒・禪定・智慧・皆成就すれば便ち果を得、復た時を待たず。復次に、久久にして果を得るを名けて時と爲し、卽時に得るは時と名けず。譬へば好染は一び入るれば便ち成ずるが如く、心淨き人も亦た是の如し。法を聞けば卽ち染りて法眼淨を得、是を時を待たずと名く。

能く善處に到るとは、是の三十七の無漏の道法は能く人を將ゐて涅槃に到る。譬へば恒河に入れば必ず大海に至るを得るが如し。諸餘の外道の法は一切智人の所說に非ず、邪見を雜ふるが故に將ゐて惡處に至り、或は將ゐて天上に至り、還たび墮して苦を受く。皆な無常なるが故に善處とは名けず。

問うて曰く、將ゐ去る者あること無し、云何んぞ將ゐて善處に至るを得るや。

答へて曰く、將ゐ去る者なしと雖も、但だ諸法は能く諸法を將ゐて去る。無漏善は五衆を斷ず。五衆の中に強ひて衆生と名くるを、將ゐ去つて涅槃に入る。風の塵を吹くが如く、水の草を漂はすが如く、將ゐ去る者なしと雖も而も去ること有る可し。復次に、因緣の和合にして、作あること無く、亦た將ゐ去る者あること無し。而も果報は因緣に屬して自在を得ず、是を卽ち名けて去ると爲す。

「我は是の如きの辛苦を受けたれども竟に所得なし、今佛を見たてまつり法を聞くことを得て、出家して三日にして所作の事を辦じ、阿羅漢を得るには如かず」と。是を以ての故に佛法は今世の果を得ることを知る。

問うて曰く、若し佛法は今世の果を得ば、何を以ての故に佛の諸の弟子に所得なき者あるや。

答へて曰く、行者能く佛の所說の如く、次第に修行せば報を得ざること無し。病人が良醫の敎に隨つて、和治の法を將ゆれば病の差えざること無きが如し。若し佛の敎に隨はず次第に行ぜず、破戒亂心の故に所得なきは、法の不良なるには非ざるなり。復次に、諸の未だ道を得ざる者は、今世に涅槃を得ずと雖も、後世に福樂を受くることを得、漸次に涅槃を得べく、終に虛しからざるなり。佛の說きたまふ所の如し、「其れ出家ありて涅槃の爲にする者は、若しくは遲く若しくは疾く、皆な當に涅槃を得べし」と。是の如き等、能く今世の果を得るなり。

「熱惱無し」とは、熱惱に二種あり、身惱と心惱となり。身惱とは繫縛・牢獄・拷掠・刑戮等にして、心惱とは婬欲・瞋恚・慳貪・嫉妬の因緣の故に憂愁、怖畏等を生ずるなり。此の佛法の中には持戒淸淨なるが故に、身に是の繫縛・牢獄・拷掠・刑戮等の惱なく、心は五欲を離れ五蓋を除き實道を得るが故に、是の婬欲・瞋恚・慳貪・嫉妬・邪疑等の惱なし、惱なきが故に熱なし。復次に、無漏の禪定は喜樂を生じ、遍身に受くるが故に諸熱則ち除く。譬へば人の大に熱悶するも、淸涼池の中に入ることを得れば、冷然として淸了して復た熱惱なきが如し。復次に、諸の煩惱の、若しくは見に屬し、若しくは愛に屬する、是を熱と名く。佛法の中には此れ無きが故に熱惱無しと名く。

「時を待たず」とは、佛法は時を待たずして行じ、亦た時を待たずして果を與ふ。外道の法にては日未だ出でざる時に法を受け、日出づる時には法を受けず、或は日出づる時に受け、日未だ出でざれば受けざる有り。晝受けて夜受けざる有り、夜受けて晝受けざる有り。佛法の中にては受くるに

巻の第二十二

初品第三十六……八念の餘

念法とは佛の演説したまへるが如し。行者應に念ずべし、「是の法は巧に出せり、今世の果を得て熱惱なく、時を待たずして能く善處に到り、通達無礙なり」と。

「巧に出だす」とは二諦に相違せざるが故なり、所謂世諦と第一義諦となり。是れ智者も壞すること能はず、愚者も諍を起さざるが故なり。是の法は亦た二邊を離る。所謂、若しくは五欲の樂を受くるか、若しくは苦行を受くるかなり。復た二邊を離る。若しくは常、若しくは斷、若しくは我、若しくは無我、若しくは有、若しくは無なり。是の如き等の二邊に著せざる、是を巧出と名く。諸の外道の輩は自ら其の法を貴んで、他の法を毀賤するが故に巧出なること能はず。

「今世の果を得」とは、愛の因緣、世間の種種の苦を離れ、邪見の因緣、種種の論議鬪諍を離れて、身心安樂なることを得るなり。佛の說きたまへるが如し。

『持戒の者は安樂にして、身心熱惱せず、臥するも安く、覺むるも亦た安く、名聲も亦た遠く聞ゆ。』

復次に、此の佛法の中にては、因緣展轉して果を生ず、所謂持戒淸淨なるが故に、心に悔いず、心に悔いざるが故に、法歡喜を生じ、法歡喜の故に身心快樂なり。身心快樂なるが故に、能く心を攝す。心を攝するが故に實の如くに知り、實の如くに知るが故に厭ふことを得。厭ふことを得るが故に欲を離れ、欲を離るゝが故に解脫を得、解脫の果報を得るが故に涅槃を得。是を今世の果を得と名く。外道の法は空しく空を行じて所得なし。閻浮阿羅漢が道を得たる時、自ら說けるが如し。

『我昔外道と作り、五十有五年、但だ乾ける牛屎を食し、裸形にして棘上に臥したりき。』

復次に、佛の解脱知見衆を具足したまふを念ず。解脱知見衆に二種あり、一には佛は諸の煩惱を解脱する中に於て盡智を用ゐて自ら證知したまふ。苦を知り已り、集を斷じ已り、盡を證し已り、道を修し已る、是を盡智と爲す。解脱知見衆は苦を知り已つて復た更に知らず、乃至道を修し已つて復た更に修せず、是を無生智解脱知見衆と爲す。二には佛は知りたまふ。是の人は空門に入つて解脱を得、是の人は無相門にして解脱を得、是の人は無作門にして解脱を得、是の人は方便なくして解脱せしむべく、是の人は久久にして解脱を得、是の人は久しからずして解脱を得、是の人は即時に解脱を得、是の人は軟語もて解脱を得、是の人は苦敎もて解脱を得、是の人は雜語もて解脱を得、是の人は神通力を見て解脱を得、是の人は說法もて解脱を得、是の人は婬欲多し、爲に婬欲を増して解脱を得、是の人は瞋恚多し、爲に瞋恚を增して解脱を得と。難陀、優樓頻騾龍の如き是なり。是の如き等の種種の因緣によりて解脱を得。法眼の中に說くが如し。是の諸の解脱の中に於て、了了に知見す。是を解脱知見衆を具足すと名く。

復次に、佛の一切智、一切知見、大慈大悲、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法等を念じ、佛の知りたまふ所の如き、無量不可思議の諸の功德を念ず、是を念佛と名く。是の念は七地の中に在り、或は有漏、或は無漏なり。有漏は有報にして、無漏は無報なり。三根相應の樂、喜、捨根は、行得と亦た果報得となり。行得とは、此の間の國中にて、念佛三昧を學ぶが如く、果報得とは、無量壽佛國の人の、生るれば便ち自然に能く佛を念ずるが如し。是の如き等は阿毘曇の中に廣く分別するが如し。

に龍の力の大なることを知る」と。佛も亦た是の如く、甚深の智慧は、眼の見るに非ずと雖も、大法雨を雨らして、諸大論師及び釋梵天王は皆な以て降伏せり。是を以て佛の智慧の多きことを知る可し。　復次に、諸佛は無礙解脫を得たまふが故に、一切の法の中に於て、智慧無礙なり。　復次に、佛の此の智慧は皆な清淨にして諸觀の上に出で、諸法の常相・無常相、有邊相・無邊相、有去相・無去相、有相・無相、有漏相・無漏相、有爲相・無爲相、生滅相・不生滅相、空相・不空相を觀ぜず。常に清淨にして無量なること虛空の如し、是を以ての故に無礙なり。若し生滅を觀ずれば不生滅を觀ずることを得ず、不生滅を觀ずれば生滅を觀ずることを得ず。若し不生滅が實ならば生滅は不實なり。若し生滅が實ならば不生滅は不實なり、是の如き等にして諸觀は皆な爾り。無礙智を得るが故に、佛は慧衆を具足したまふことを知る。

復次に、佛の解脫衆を具足したまふことを念ず。佛は諸の煩惱及び習を解脫し、根本を拔きたまふが故に、解脫は眞にして壞す可らず、一切の智慧を成就するが故に、名けて無礙解脫と爲し、八解脫を成就し、甚深にして遍ねく得るが故に、名けて具足解脫と爲す。　復次に、時解脫及び慧解脫を離るるが故に便ち具足して共解脫を成就す。是の如き等の解脫を成就するが故に、解脫衆を具足すと名く。　復次に、魔軍を破るが故に解脫を得、煩惱を離るるが故に解脫を得、諸の禪法を離遮するが故に解脫を得。(そは)諸の禪定に於て入出自在無礙なるが故なり。　復次に、菩薩は見諦道の中に於て、深く十六解脫を得たまふ。一には苦法智相應の有爲解脫、二には苦諦もて十結を斷じ盡くして無爲解脫を得、是の如くして乃ち道比智に至る。思惟道の中に十八解脫を得たまふ。一には或は比智、或は法智に相應する有爲解脫、二には無色界の三思惟結を斷ずるが故に無爲解脫を得、是の如くして乃ち第十八盡智相應の有爲解脫に至り、及び一切の結使を盡して無爲解脫を得。是の如く諸の解脫和合するを名けて解脫衆を具足すと爲す。

めて三昧より起ちて阿難に告げ給はく、「是の事を見るや不や、是の事を聞くや否や。」阿難言さく、「佛の威神を蒙つて已に見、已に聞けり。」佛の言はく、「佛には是の如きの力あり、能く佛事を究竟するや不や」と。阿難言さく、「世尊よ、若し衆生十方恒河沙等の世界の中に滿つとも、佛壽一日にして是の如き力を用ひて、必ず能く究竟して佛事を施作せん。」阿難歎じて言さく、「未曾有なり、世尊よ、諸佛の法は無量不可思議なり。」是を以ての故に佛は禪定を具足したまふことを知る。

復次に、佛は慧衆を具足したまふ。初發心より阿僧祇劫の中に於て法として行ぜざるなく、世世諸の功德を集め、一心專精にして身命を惜まず、以て智慧を求めたまふこと、[一七]薩陀波崙菩薩の如し。復次に、善く大悲の智慧を修するを以ての故に慧衆を具足す。餘人は是の大悲なく、智慧ありと雖も大悲を具足することを得ず、衆生を度せんと欲して、種種の智慧を求むるが故なり。及び法愛を斷じ、六十二の邪見を滅し、二邊に墮せず。(卽ち)若しくは五欲の樂を受くるか若しくは身苦の道を修し、若しくは斷滅か若しくは計常、若しくは有か若しくは無等、是の如く諸法の邊(に墮せざる)なり。

復次に、佛慧の無上徹鑒なること無比なり。甚深の禪定の中より生ずるが故に、諸の麁細の煩惱も動かす能はざるが故に、善く三十七品、四禪、四無量心、四無色定、八背捨、九次第定等の諸の功德を修するが故に、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法あつて無礙不可思議解脫を得るが故に、佛は慧衆を具足したまふ。　復次に、能く外道の大論議師を降伏したまふ。所謂優樓頻螺迦葉、摩訶迦葉、舍利弗、目犍連、薩遮尼犍子、婆蹉首羅、長爪等の大論議師の輩皆な降伏せり。是の故に佛は慧衆を具足したまふことを知る。　復次に、佛は三藏、十二部經、八萬四千の法聚の是の語言多きを見たまふが故に、智慧も亦た大なることを知る。譬へば一居士の如きは淸朝に大雨せる處を見て衆人に語つて言く、「昨夜の雨龍は、其の力甚だ大なり」と。衆人言く、「汝は何を以て之を知るや」と。答へて言く、「我は地濕り、泥多く山崩れ、樹折れ、諸の鳥獸を殺すを見る。此を以ての故

【一七】薩陀波崙菩(薩Sadāpralāpa)常啼菩薩。

に說きたまはく、「我が禪定の相は甚深なり」と。經の中に說くが如くんば、佛、阿頭摩國の林樹の下に在つて坐して禪定に入りたまひき。是の時大雨あり、雷電霹靂す。四の特牛と耕者二人あり、聲を聞いて怖れ死せり。須臾にして便ち晴れ、佛は起ちて經行し給ふ。一の居士あり、佛の足を禮し已つて、佛の後に隨從し、佛に白して言さく、「世尊よ、向に雷電霹靂せるに、四の特牛と耕者二人あり、聲を聞いて怖死せり。世尊は聞きたまひしや不や」。佛の言はく、「聞かず」。居士言く、「佛は時に睡りたまひしや」。佛の言はく、「睡らず」。問ふて曰く、「無心想定に入りたまふや」。佛の言はく、「不なり、我は心想ありき、但だ定に入れるのみ」。居士言く、「未曾有なり、諸佛の禪定は大に甚深たり。心想有つて禪定に在り、是の如きの大聲を、覺めて而も聞かず」と。餘經の中の如くんば、佛諸の比丘に告げたまふに、佛は諸の定に入出したまふも、舍利弗目犍連すら尙ほ其の名を聞かず、何に況んや能く何者か是を知らんや。三昧・王三昧・師子遊戲三昧等の如きは、佛は其の中に入つて、能く十方世界をして六種に震動せしめ、大光明を放ち、化して無量の諸佛と爲り十方に遍滿したまふ。阿難の如きは一時心に念を生ずらく、「過去の燃燈佛の時は時世好く人壽長く、化度し易し、今の釋迦牟尼佛は、時世惡く人壽短く、敎化し難し、佛事未だ訖らずして涅槃に入りたまふや」と。淸旦に是の事を以て佛に白して言す。已に日出でて、佛は時に日出三昧に入りたまふに、日出でゝ光明、閻浮提を照すが如く、佛身も是の如く、毛孔より普ねく光明を出して、遍ねく十方恒河沙等の世界を照し、一一の光の中より、七寶の千葉の蓮華を出し、一一の華の上に皆な坐佛あり、一一の諸佛皆な無量の光明を放ち、一一の光の中より皆な七寶の千葉の蓮華を出し、一一の華上に皆な坐佛あり、是の諸佛等は十方恒河沙等の世界に遍滿して衆生を敎化し、或は說法する有り、或は默然たるあり、或は經行を以てし、或は神通變化して身より水火を出したまふ。是の如き等の種種の方便もて十方五道の衆生を度脫したまふ。阿難、佛の威神を承けて悉く是の事を見る。佛は神足を攝

紅色にして天の蓮華の如く、梵聲は深遠にして聞く者悅樂し、聽いて厭足することなし。身色の妙好なることは閻浮檀金に勝り、大光は身を周り、種種の雜色は妙好にして比なし。是の如き等の三十二相を具足するを以て、是の人は久しからずして出家せば一切智を得て佛と成らん」と。佛身の功德は是の如し、應當に佛を念ずべきなり。　復次に、佛身の功德は、身力は十萬の白香象寶に勝る、是を父母遺體の力と爲す。神通功德力の若きは無量無限なり。佛身は三十二相、八十隨形好を以て莊嚴し、内に無量の佛法の功德あるが故に、之を視るに厭くこと無し。佛身を見る者は世の五欲を忘れ、萬事を憶はず。若し佛身を見れば、一處を愛樂して厭くこと無く、移り觀ること能はず。佛身の功德は是の如し、應當に佛を念ずべし。

復次に、佛は持戒具足して淸淨なり。初發心より戒を修して增積すること、無量なれども、憐愍の心と倶にして果報を求めたまはず、聲聞・辟支佛の道に向はず、諸の結使を雜えず。但だ自心淸淨にして衆生を惱まさゞらんが爲の故に世世に戒を持ちたまふ。此の故に佛道を成ずる時、戒を具足することを得。應に是の如く佛の戒衆を念ずべし。

復次に、佛は定衆具足す。

問うて曰く、持戒は身口業の淸淨なるを以ての故に知るべし、智慧は分別して法を說き、能く衆の疑を除くを以ての故に知るべし。定は餘人の定を修することすら尙ほ知るべからず、何に況んや佛に於て、云何んぞ知るを得んや。

答へて曰く、大智慧を具足するが故に、當に禪定は必ず具足することを知るべし。譬へば蓮華の大なるを見ては、必ず池も亦た深大なるを知るが如く、又燈明大なれば、必ず蘇油も亦た多きを知るが如し。亦た佛の神通變化力は無量無比なるを以ての故に、禪定力も亦た具足することを知る。亦た果の大なるを見るが故に、因も亦た必ず大なりと知るか如し。　復次に、有る時、佛自ら人の爲

間の盡くるを知り、世間の盡道を知りたまふ。故に名けて[九]路迦憊と爲す。世間を知り已つて衆生を調御し、種種の師の中に於て、最も無上たり。是を以ての故に[一〇]阿耨多羅富樓沙曇藐婆羅提と名く。能く三種の道を以て三毒を滅し、衆生をして三乘の道を行かしむ。是を以ての故に[一一]貰多提婆魔㝹舍と名く。有(人)の若きは言はん、「何事を以ての故に能く自ら利益すること無量にして能く他人を利益する無量なるや」と。佛は一切の智慧を成就したまふが故に、過去・未來・現在の盡・不盡、動・不動の一切の世間を、了了に悉く知り給ふが故に名けて[一二]佛陀と爲す。是の九種の名號を得、大名稱あつて十方に遍滿す、是を以ての故に[一三]婆伽婆と名く。經の中に佛自ら說きたはく、「是の如き名號もて應當に是の念佛を作すべし」と。

復次に、一切種種の功德は盡く佛に在り、佛は是れ劫初の轉輪聖王、[一四]摩訶三磨陀等の種にして閻浮提の中に智慧威德ある諸釋子の中の、貴姓憍曇氏に生れたまふ。時に光明は三千大千世界を遍照し、梵天王は寶蓋を持ち、釋提桓因は天の寶衣を以て承接し、[一五]阿那婆蹋多龍王、婆伽多龍王は妙香の湯を以て澡浴す。生れたまふ時、地は六種に動じ、行くこと七步に至つて、安詳として象王の如く四方を觀視して師子吼を作さく、「我は是れ末後の身、當に一切衆生を度すべし」と。阿私陀仙人之を相して淨飯王に告ぐらく、「是の人の足下の千輻輪相、指合縵網は當に自ら法の中に於て安平にして立つべし、能く動すもの無く能く壞する者なし。手中の[一六]德字の縵網莊嚴は當に此の手を以て、衆生を安慰して畏るる所なからしむべし。是の如くして乃至肉骨髻相は青珠山頂の如く、靑色の光明は四邊より出づ、頭中の頂相は能く上を見ること無く、若しくは天、若しくは人にして勝る者あること無し。白毫は眉間に踦ち、白光は頗梨を踰え、淨眼は長廣にして其の色紺青なり。鼻は高く直好にして甚だ愛樂すべく、口には四十の齒あり、白淨にして利好に、四牙の上は白く其の光は最勝なり。脣は上下等しくして大ならず小ならず、長からず短からず。舌は薄くして大に軟く、赤

【九】世間解。
【一〇】無上師、調御丈夫。
【一一】天人師。
【一二】覺者。
【一三】世尊。
【一四】摩訶三磨陀(Mahāsammata)大等意と譯す。大平等王と云ふ。諸刹帝種はこの後に出づと傳ふ。
【一五】阿那婆蹋多。Anavatapta 八大龍王の一。池名より出づ、無熱を譯す。
【一六】德字。卍字にして、所謂萬字なり、羅什は之を德字と譯せり。

他の功德を念じて、以て恐怖を除くは則ち難し。自ら己が事を念じて以て恐怖を除くは、則ち易し。是を以ての故に佛は說きたまはず。

問うて曰く、云何なるが是れ佛を念ずるなるや。

答へて曰く、行者は一心に佛を念ずれば、如實の智慧を得、大慈大悲成就す。是の故に言に錯謬なく、麁細・多少・深淺・皆な實ならざる無し、皆な是れ實なるが故に[四]多陀阿伽度と名く。亦た過去・未來・現在の十方の諸佛の如きは、衆生の中に於て大悲心を起し、六波羅蜜を行じて、諸法の相を得、來つて阿耨多羅三藐三菩提の中に至る。此の佛も亦た是の如し。是を多陀阿伽度と名く。三世十方の諸の佛身の如きは、大光明を放つて遍ねく十方を照し、諸の黑暗を破り、心より智慧の光明を出して、衆生の無明の闇冥を破り、功德名聞は亦た遍ねく十方に滿ち、去つて涅槃の中に至る、此の佛も亦た是の如く去りたまふ。是を以ての故に亦た多陀阿伽度と名く。是の如き功德あるが故に應に一切諸天世人の最上の供養を受くべし。是の故に[五]阿羅呵と名く。有人の若きは言く、「何故に但だ佛のみ實の如しと說くや。如來如去の故に、應に最上の供養を受くべし。佛は正遍智慧を得たまふを以ての故なり」と、正は諸法の不動不壞の相に名け、遍は、一法二法の爲にせざるが故に名く。悉く一切法を知り、餘として盡さざる無きを以て、是れを[六]三藐三佛陀と名く。是の正遍の智慧は、無因より得ず、亦た無緣より得ず、是の中、智慧持戒を具足するに依るが故に正遍の智慧を得。智慧とは菩薩の初發意より乃ち金剛三昧に至る相應の智慧に名く。持戒とは菩薩の初發意より乃ち金剛三昧に至り、身業・口業清淨にして、意に隨つて行じ已るに名く。是の故に[七]鞞闍遮羅那三般那若と名く。是の二行を行ずれば善く去ることを得、車に兩輪有りて善く去る者の如し。先佛の所去の處の如く、佛も亦た是の如く去りたまふが故に[八]修伽陀と名く。有(人)の若きは言はん、「佛は自ら其の法を修すれば、我等が事を知りたまはず」と。是を以ての故に世間を知り、世間の因を知り、世

【四】佛の十號は既註なれど譯語を擧ぐべし。多陀阿伽度—如來、如去。
【五】應供。
【六】無上正遍知。
【七】明行足。
【八】善逝。

子衆は正道を修し法に隨つて行ず。僧の中に阿羅漢向・阿羅漢・乃至須陀洹向・須陀洹の四雙・八輩あり。是の佛弟子衆は、應に供養し合掌し恭敬し禮拜し迎送すべき世間無上の福田なり」と。是の如く僧を念ずることを作さば恐怖即ち滅せん。佛、諸の比丘に告げたまはく、「釋提桓因は阿修羅と鬪ふの大陣中に在る時、諸天衆に告ぐらく、汝阿修羅と鬪ふ時、設し恐怖あらば、當に我が七寶の幢を念ずべし、恐怖即ち滅せん。若し我が幢を念ぜずんば、當に伊舍那天子〔帝釋の左面の天王也〕の寶幢を念ずべし、恐怖即ち除かん。若し伊舍那の寶幢を念ぜずんば、當に婆樓那天子〔右面の天子〕の寶幢を念ずべし、恐怖即ち除かん」と。是を以ての故に恐怖を除く因緣の爲の故に、次第に八念を說くことを知る。

問うて曰く、經の中に三念の因緣が恐怖を除くことを說く、五念は復た云何んぞ能く恐怖を除くや。

答へて曰く、是の比丘は自ら布施・持戒の功德を念ぜば怖畏は亦た除く。所以いかんとなれば、若し破戒せば、心に地獄に墮せんことを畏れ、若し慳貪なれば心は餓鬼及び貧窮の中に墮せんことを畏る。自ら念ずらく、「我には是の淨戒布施あり」と。若しくは淨戒を念じ、若しくは布施を念ぜば、心則ち歡喜して是の言を作さく、「若し我命未だ盡きずんば、當に更に功德を增進すべし、若し當に命終するとも、惡道に墮することを畏れず」と。是の故に戒施を念ずれば、亦た能く怖畏の念を生ぜざらしむ。上の諸天を念ずるに、皆な是れ布施持戒の果報なり。此の諸天は福德の因緣を以ての故に彼に生ず。我も亦た是の福德あり、是を以ての故に天を念ずれば、亦た能く怖畏を生ぜざらしむ。十六行に[三]安那般那を念ずる時には、細覺も尙ほ滅す、何に況んや恐怖の麁覺をや。死を念ずるとは五衆の身は念念に生滅して、生より已來常に死と俱なるを念ずれば、今何を以てか死を畏れんや。是の五念は、佛は說きたまはずと雖も、亦た當に能く恐怖を除くべし。所以いかんとなれば

【三】安那般那。既註するところの數息觀なり。隨つて、ここは「出入の息を念ず」の項の說明に當る。猶、十六行は、既出の、苦法智忍等の十六觀法なり。

り生じて自性あること無く、皆な空相に歸す。我今是の因緣和合して生ぜる自性なき不淨の法を取るべからず。疾かに涅槃に入らんと欲す」と。經の中に亦た是の說あり、「若し色の中に味相なくんば衆生は色に著すべからず。色の中に味あるを以ての故に、衆生は著を起す。若し色に過罪なくんば衆生も亦た色を厭ふ者なし。色には實に過罪あるを以ての故に、色を觀ずれば則ち厭ふ。若し色の中に出相なければ、衆生も亦た色に於て解脫を得ること能はず、色に出相あるを以ての故に、衆生は色に於て解脫を得。味は是れ淨相の因緣なり、是を以ての故に菩薩は不淨の中に於て沒して、早く涅槃を取らず」と。九相の義を分別し竟んぬ。

初品第三十六……八念

【經】佛を念じ、法を念じ、僧を念じ、戒を念じ、捨を念じ、天を念じ、入出の息を念じ、死を念ず。

【論】問うて曰く、何を以ての故に、九相の次第に八念あるや。

答へて曰く、佛弟子は、阿蘭若處・空舍・塚間・山林・曠野に於て、善く九相內外の不淨觀を修し、其の身を厭患して而も是の念を作さく、「我は云何んぞ是の底下の不淨なる屎尿囊を擔つて、自ら隨つて憍然として驚怖し、及び惡魔の種種の惡事を作して、來るが爲に、之を恐怖し、其をして退かしめんと欲するや」と。是の故に佛は次第して爲に八念を說きたまへり。經の中に說くが如し。佛、諸の比丘に告げたまはく、「若しくは阿蘭若處・空舍・塚間・山林・曠野に於て、中に在つて思惟するに、若し怖畏して衣毛爲に竪たば、爾の時當に佛を念ずべし。「佛は是れ多陀阿伽度なり、阿羅漢なり、三藐三佛陀なり、乃至婆伽婆なり」と。恐怖則ち滅せん。若し佛を念ぜずんば、當に疾かに法を念ずべし、「佛法は清淨にして巧に善說を出し、今世の報を得、指示し開發し、有智の人の、心力は能く解す」と。是の如く法を念ずれば怖畏則ち除く。若し法を念ぜずんば則ち當に僧を念ずべし、「佛弟

界に攝し、或は初禪、二禪、四禪に攝し、未だ欲を離れざる散心の人は欲界繋を得、欲を離れたる人心は色界繋を得。膖脹等の八相は欲界、初禪、二禪の中に攝し、淨骨相は欲界、初禪、二禪、四禪の中に攝す。三禪の中には樂多きが故に是の相なし。是の九相は是れ身念處門を開き、身念處門は三念處門を開き、是の四念處は三十七品門を開き、三十七品門は涅槃の城門を開く。涅槃に入りて、一切の憂惱、諸の苦を離れ、五衆の因緣生を滅するが故に涅槃の常樂を受く。

問うて曰く、聲聞の人は是の如く、心の厭離を觀じて、疾かに涅槃に入らんと欲す。菩薩は一切衆生を憐愍し、一切の佛法を集め、一切衆生を度し、疾かに涅槃に入ることを求めざるが故に、是の九相を觀ず。云何にして二乘の證に墮せざるや。

答へて曰く、菩薩は衆生に於て心に憐愍を生じ、衆生は三毒の因緣を以ての故に、今世・後世に身生じて苦痛を受くと知る。是の三毒は終に自ら滅せず、亦た餘の理を以て滅を得べからず、但だ著する所の內外の身相を觀じて然して後除くべし。是を以ての故に、菩薩は是の婬欲の毒を滅せんと欲するが故に是の九相を觀ず。人の病者を憐愍し、諸藥を合和して以て之を療ずるが如し。菩薩も亦た是の如く色に著する衆生の爲に是の靑瘀相等を說き、其の著する所に隨つて、諸相を分別すること先に說くが如し。是を菩薩は九相觀を行ずと爲すなり。

復次に、菩薩は大慈悲心を以て、是の九相を行じ、是の念を作さく、「我未だ一切の佛法を具足せず、涅槃に入らず、是を一法門と爲す。我は此の一法門に住すべからず、我當に一切の法門を學すべし」と。是を以ての故に菩薩は九相を行ずるに妨ぐる所なし。菩薩は是の九相を行ずるに、或時は厭患の心起る。是の如きの不淨の身、惡むべく患ふ可し、疾かに涅槃を取らんと欲す。爾の時に菩薩は是の念を作さく、「十方の諸佛は、一切の法相は空なり、空の中に無常なしと說きたまふ、何に況んや、不淨あらんや。但だ淨顚倒を破らんが爲の故に不淨を習行す。是の不淨は皆な因緣の和合よ

り」と。是の九相は人の七種の染著を除く。或は人あり色に染著す。若しくは赤、若しくは白、若しくは赤白、若しくは黃、若しくは黑なり。或は人あり、色に著せず、但だ形容に染著す。細膚、纎指、脩目、高眉なり。或は人あり、容色に著せず、但だ威儀に染著す。進止、坐起、行住、禮拜、俯仰、揚眉、頓睫、親近、按摩なり。或は人あり、容色威儀に著せず、但だ言語に染著す。軟聲、美辭、時に隨つて說き、意に應じ旨を承けて能く人心を動かすなり。或は人あり、容色・威儀・軟聲に著せず、但だ細滑・柔膚・軟肌にして、熱時には身涼、寒時には體溫なるに染著す。或は人あり、皆な五事に著し、或は人あり、都て五事に著せず、但だ人相に染著す。若しくは男、若しくは女なり。上の六種の欲を得と雖も所著の人を得ず、猶解する所なく、世の重んずる所の五種の欲樂を捨て而して其の死に隨ふ。死相は多く威儀語言の愛を除き、膖脹相、壞相、噉相、散相は多く形容の愛を除き、血塗相、青瘀相、膿爛相は多く色愛を除き、骨相、燒相は多く細滑の愛を除き、九相は雜愛、及び所著人の愛を除き、噉相、散相、骨相は遍ねく人愛を除き、噉殘離散せる白骨の中に人の著す可きあるを見ず。是の九相を以て觀じて愛心を離れ、瞋癡も亦た微薄なり、不淨の中の淨顚倒は、癡の故に是の身に著す。今は是の九相を以て身內を披折し、是の身相を見れば癡心薄し。癡心薄ければ則ち貪欲薄く、貪欲薄ければ則ち瞋も亦た薄し。所以いかんとなれば、人は身を貪るを以ての故に瞋を生ず、今身の不淨を觀じ心に厭ふが故に復た身を貪らず、身を貪らざるが故に復た瞋を生ぜず、三毒薄きが故に一切の九十八使の山皆な動き、漸漸に其の道を增進し、金剛三昧を以て結の山を摧碎す。九相は是れ不淨觀なりと雖も、是に依つて能く大事を成ず。譬へば大海中にては臭屍溺人も、依つて以て渡るを得るが如し。

問うて曰く、是の九相は何の性、何の所緣あつて、何の處にか攝するや。

答へて曰く、取相の性と緣は、欲界の身色にして相衆に攝す。亦た身念處の少分にして、或は欲

須臾にして本相都て失せ、一切の有身皆な無常に歸す、我も亦た是の如し」と。是の九相を觀るに、諸の煩惱を斷じ、婬欲を滅すに於て最も勝る。婬欲を滅さんが爲の故に是の九相を說く。

問うて曰く、無常等の十想は、何事を滅せんが爲の故に說くや。

答へて曰く、亦た婬欲等の三毒を滅せん爲なり。

問うて曰く、若し爾らば二相は、何等の異ありや。

答へて曰く、九相は未だ禪定を得ずして、婬欲の爲に覆はるるを、遮らんが爲の故にして、十想は能く婬欲等の三毒を除滅す。九相は賊を縛するが如く、十想は斬殺するが如し。九相は初學の爲にして、十想は成就の爲なり。　復次に、是の十想の中の不淨想に九相を攝す。有る人の言く、十想の中の不淨想と食不淨想と世間不可樂想とに、九相を攝すと。復た有る人の言く、十想九相は同じく離欲の爲なり、倶に涅槃の爲なり。所以いかんとなれば、初の死相は、動轉して言語し須臾の間に忽然として已に死し、身體膖脹し爛壞し分散し各各變異す、是れ則ち無常なり。若し此の法に著すれば、無常の壞時、是を卽ち苦と爲す。若し無常苦ならば自在を得る者なし、是れ則ち無我なり。不淨にして無常、苦にして無我なれば則ち樂なる可らず、身を觀ずること是の如し。食口に在りと雖も、腦涎流れ下り、唾と和合して味を成し、而も咽むと吐くと異なることなし、下つて腹の中に入る。卽ち是れ食不淨想なり。此の九相を以て身を觀ずるに、無常變異して念念に皆な滅す、卽ち是れ死想なり。是の九相を以て世間の樂を厭ひ、煩惱を斷ずれば則ち安隱寂靜なりと知る、卽ち是れ斷相なり。是の九相を以て諸の煩惱を遮するは、卽ち是れ離想、是の九想を以て世間を厭ふが故に、此の五衆滅して更に復た生ぜず、是の處は安隱なるを知る、卽ち是れ盡想なり。　復次に、九相を因と爲し十想を果と爲す。是の故に九相を先にし、十想を後にす。　復次に、九相を外門と爲し十想を內門と爲す、是の故に經に言く、「二を甘露門と爲す、一には不淨門、二には安那般那門な

皆な是の如し。　死屍已に壊すれば、肉血塗漫す。　或は杖楚して死する者の青瘀黄赤なるを見、或は日に曝されて瘀黒なるあり。具に是の相を取りて観ずるに、(先きに)著する所の者は、若しくは赤白の色にして淨潔端正なるも、此と何ぞ異ならん。既に青瘀黄赤を見れば鳥獸も食はず。　埋めず藏さゞれば、久しからずして膿爛して種種の蟲生ず。行者は見已つて、此の死屍の本有の好色を念ずるに、好香を身に塗り、衣るに上服を以てし、飾るに華綵を以てせり。今は但だ臭壞膿爛塗染す。此は是れ其の實分にして、先に飾綵する所は皆な是れ假借なり。　若し燒かず埋めずして之を曠野に棄つれば、鳥獸の爲に食はる。烏は其の眼を挑り、狗は其の手脚を分ち、虎狼は腹を刳きて分擘胍裂し、殘藉地に在り、盡きて盡きざるあり。行者は見已つて心に厭想を生じ、思惟すらく、「此の屍の未だ壞せざる時は、人の所著の處たり、而るに今は壞敗して復た本の相なく、但だ殘藉のみを見る」と。　鳥獸の食ふ處、甚だ惡み畏るべし。　鳥獸已に去つて、風日飄曝し、筋斷え、骨離れて各各處を異にす。行者は思惟すらく、「本と身法を見るに和合して而して身相あり、男女皆な分別すべし。今は已に離散して各異處に在り、和合の法滅すれば、身相も亦た無く、皆な本に異なり、愛著す可き所、今何處にか在る」と。　身既に離散して處處に白骨あり、鳥獸食し已つて唯だ骨の在るあるのみ、是の骨人を觀ずる是を骨相と爲す。骨相に二種あり、一には骨人の筋骨相連る、二には骨節分離して筋骨相連る。男女・長短・好色・細滑の相を破り、骨節分離して衆生の根本實相を破る。骨相に復た二種あり、一には淨、二には不淨なり。淨とは久骨は白淨にして、血なく膩なく、色白雪の如し。不淨とは餘血塗染し、膏膩未だ盡きず。　行者は屍林の中に到り、或は多くの草木を積んで死屍を焚燒するを見るに、腹破れ眼出で、皮色は燋黑にして甚だ惡み畏るべく、須臾の間にして變じて灰燼と爲る。行者は是の燒相を取つて思惟すらく、「此の身未だ死せざる前は香華に沐浴し、五欲を自ら恣ままにせり。今火に燒かるゝ兵刄よりも甚だし。此の屍初め死せるは形は猶人に似たり、火燒けば

かるべし。我は今五欲に貪著し、死の至るを覺らずして、牛羊に同じうすべからず、牛羊禽獸は死者を見ると雖も、跳騰哮吼して、自ら覺悟せず、我は既に人身を得て好醜を識別す、當に甘露不死の法を求むべし。說くが如し。

『六情の身は完く具はり、智鑒も亦た明利なるに、而も道法を求めずんば、唐らに身と智慧とを受くるなり。

禽獸も亦た皆な、欲樂以て自ら恣まゝにすることは知る、而れども方便して、道の爲に善事を修することは知らず。

既已に人身を得て、而も但だ自ら放恣にして、善事を修することを知らずんば、彼と亦た何ぞ異ならん。

三惡道の衆生は道業を修するを得ず。已に此の人身を得たり、當に勉めて自ら益利すべし。』

行者は死屍の邊に到りて、死屍膖脹して、韋囊に風を盛るが如く、本の相と異なるを見て、心に厭畏を生じ、「我身も亦た當に是の如くなるべし、未だ此の法を脫せず、身の中にて、識を主として、此の身を役御し、視聽、言語して、罪を作し福を作す、此を以て自ら貴ぶも何の所趣と爲ん、而も今は但だ空舍の此に在るを見るのみ。是の身の好相・細腰・姝媚・長眼・直鼻・平額・高眉、是の如きの好は人心をして惑はしむ。今は但だ膖脹を見るのみ、好は何の處にか在る、男女の相も亦た識る可らず」と。此の觀を作し已つて、著欲の心を呵す。此の臭屎囊、膖脹すれば惡む可し、何ぞ貪著するに足らん。死屍は風熱轉た大なれば裂壞して地に在り、五藏より屎尿膿血流出し惡露已に現ず。行者は是の壞相を取り、以て己の身に況ふ。「我も亦た是の如く、皆な是の物あり、此と何ぞ異ならん。我甚だしく惑を爲し、此の屎囊薄皮の爲めに誑さるゝこと、燈蛾の火に投ずるが如し。但だ明色を貪つて、身を燒くを知らず」と。已に裂壞して男女の相の滅せるを見、我が著する所の者も亦た

又此の大功德は邊地に在らず、是の故に次第なし。八背捨、八勝處、十一切處、九次第定は聲聞法の中に略說せり。

初品第三十五……九相

【經】九相とは脹相、壞相、血塗相、膿爛相、青相、噉相、散相、骨相、燒相なり。

【論】問うて曰く、應當に先に九相を習つて欲を離れ、然る後に諸禪を得べし、何を以ての故に、諸の禪定の後に方に九相を說かんとするや。

答へて曰く、先に果報を讚じて、行者の心をして樂しましむ。九相は是れ不淨なりと雖も、人其の果報を貪るが故に必ず習行す。

問うて曰く、行者は云何に是の脹相等の九事を觀ずるや。

答へて曰く、行者は先づ持戒清淨にして、心をして悔いさらしむるが故に、易く觀法を受け、能く婬欲諸の煩惱の賊を破る。人の初めて死するの日を觀るに、辭訣する言語の息出でて反らず、奄忽、已に死し、室家驚慟し號哭して天を呼んで言說すらく、「方に爾く、奄便ち那んぞ去るや。氣滅し、身冷かにして覺識する所なし」と。此を大畏と爲し、免る可き處なきを觀ず。譬へば劫盡の火燒くに遺脫あること無きが如し。說くが如し。

『死至れば貧富なく、勤修する善惡なく、貴なく亦た賤なく、老少の免るる者なし。
祈請して救ふ可きなく、亦た欺誑しても離るること無く、捍挌すとも脫するを得ること無く、一切免るる處なし。』

死の法は名けて「永く恩愛を離るる處」と爲す。一切有生の惡む所のもの、甚だ之を惡むと雖も脫することを得る者なし。我身は久しからずして必ず當に是の如く、木石に同じうして別知する所な

答へて曰く、是の得解の心は、安隱快樂、廣大にして無量無邊なる虛空處なり。是れ佛の說きたまふ所、一切處の中には皆識あり、能く疾かに一切法を緣ずるが故に、一切法の中に皆識ありと見るなり。是を以ての故に、二處に一切處を立つ。無所有の中には、物として廣むべき無く亦た快樂を得ず、佛も亦、是の無所有は無邊無量なりと說きたまはず。非有想非無想處は、心鈍にして相を取つて廣大ならしむるを得ること難し。復次に、虛空處は色界に近く亦た能く色を緣じ、識處は能く緣じて色を緣ず。又識處は起つて能く第四禪に超入し、第四禪は起つて識處に超入す。無所有處、非有想非無想處は無色の因緣に遠きが故に一切處に非ず。是の三種の法は皆な行じて勝處を得。一切處は是れ有漏なり。初の三背捨、第七第八の背捨は是れ有漏、餘殘は或は有漏、或は無漏なり。初の二背捨、初の四勝處は初禪、二禪の中に攝し、淨背捨、後の四勝處、八の一切處は第四禪の中に攝す。二の一切處を卽ち名けて空處と說く。空處は識處を攝し、識處は前の三背捨、八勝處、八の一切處を攝し、皆な欲界を緣ず。後の四背捨は無色界、及び無漏法の諸の妙功德を緣じ、根本の中に在つて善なり。無色の根本は下地を緣ぜざればなり。滅受想定は心心數法に非ざるが故に緣なく、非有想非無想處の背捨は但だ無色の四陰、及び無漏法を緣ず。

九次第定とは初禪の心より起つて次第に第二禪に入り、餘心をして入ることを得せしめず、若しくは善、若しくは垢なり。是の如くして乃ち滅受想定に至る。

問うて曰く、餘にも亦た次第あり、何を以てか但だ九次第定と稱するや。

答へて曰く、餘の功德は皆な異心の間に生ずることあるが故に次第に非ず、此の中には深心にして智慧利き行者、自ら其の心を試み、一禪心より起つて次に二禪に入り、異念をして入ることを得せしめず。此の功德に於て心柔軟にして、善く法愛を斷ずるが故に能く心心相次ぐ。是の次第は、二は是れ有漏、七は或は有漏、或は無漏禪なり、中間、未到地は牢固ならず、又是れ聖人の得る所なり。

如く受けて、身は是れ骨人なりと觀ず。若し心外に散ずれば、還たび骨人緣の中に攝す。何となればば是の人は初めて行を習ひ、未だ細緣を觀ずること能はざればなり。是を「少色」と名く。行者の觀道轉た深く增長すれば、此の一骨人を以て、遍ねく閻浮提は皆な是れ骨人なりと觀ず。是を名けて「多」と爲し、還たび復た念を攝して一骨人を觀ず。是の故に「勝知・勝見」と名く。復次に、意に隨つて五欲の中の男女の相、淨潔の相に、能く勝るが故に名けて勝處と爲す。譬へば健なる人の、馬に乘つて賊を擊つに、能く破るが如し。是を名けて勝と爲す。又能く其の馬を制御するは、是を亦た勝と名く。行者も亦た是の如く、能く自ら不淨觀の中に於て、少を能く多とし、多を能く少とす、是を勝處と爲す。亦た能く五欲の賊を破るを亦た勝處と名く。內に、未だ壞ること能はず、外に、色を觀ずるに、若しくは多、若しくは少、若しくは好、若しくは醜なる、是れ初と第二の勝處なり。內に身を壞して色相なく、外色を觀ずるに、若しくは多若しくは少、若しくは好若しくは醜なるは、是れ第三と第四の勝處なり。心を攝して深く定中に入り、內身を壞して、外に淨緣の青は青色、黃・赤・白は、白色なりと觀ずる、是を後の四勝處と爲す。

問うて曰く、是の後の四勝處は、十一切處の中の青等の四處と、何等の異あるや。

答へて曰く、青の一切處は、能く普ねく一切を緣じて青ならしむ。是の勝處は若しくは多、若しくは少と、意に隨つて觀じて、異心をして奪はしめず、勝れて是の緣を觀ずるを名けて勝處と爲す。譬へば轉輪聖王は遍く四天下に勝れ、閻浮提の王は一天下のみに勝れて已むが如し。一切處は普遍く一切の緣に勝れ、勝處は但だ少色を觀じて、能く勝れ、一切緣に遍きこと能はず。是の如き等は略して八勝處を說けり。

十一切處とは、背捨・勝處に已に說けり。此れは緣に遍滿するを以ての故に一切處と名く。

問うて曰く、何を以てか無所有處、非有想非無想處を一切處と名けざるや。

譬へば鹿遊は未調なれば、遠く放つには中らざるが如し。「若しくは好、若しくは醜」とは、初學は心を緣中に繫くに、若しくは眉間、若しくは額上、若しくは鼻端なり。內身の不淨相、內身の中の不淨相、外の諸色の善業報を觀ずるが故に好と名け、不善業報の故に醜と名く。　復次に、行者は師從り受くる所の如く、外緣の種種の不淨を觀ずる、是を醜色と名け、行者、或時は憶念を忘るるが故に、淨相を生じ淨色を觀ずる、是を好色と名く。　復次に、行者は自ら身中に心を一處に繫け、欲界の中の色を觀ずるに二種あり、一には能く婬欲を生じ、二には能く瞋恚を生ず。能く婬欲を生ずるは、是れ淨色なり、名けて好と爲す。能く瞋恚を生ずるは、是れ不淨色なり、名けて醜と爲す。緣中に於て自在に勝れて知り、勝れて見る。行者は能く婬欲を生ずる端正の色の中に於て婬欲を生ぜず、能く瞋恚を生ずる惡色の中に於て瞋恚を生ぜず、但だ色は四大の因緣和合して生じ、水沫の如く堅固ならずと觀ず。是を若しくは好、若しくは醜と名く。「勝處」とは行者、是の不淨門の中に住するに、婬欲・瞋恚等の諸の結使、來れども能く隨はず、是を勝處と名く。是れ不淨中の淨顚倒等の諸の煩惱の賊に勝つが故なり。

問うて曰く、行者は云何に內に、色相、外に、色を觀ずるや。

答へて曰く、是の八勝處は深く定に入り、心調柔なる者にして得べし。行者は或時は內身の不淨を見、亦た外色の不淨を見る。不淨觀に二種あり。一には三十六物等の種種の不淨、二には內外の皮肉五藏を除いて、但だ白骨を觀ること珂の如く雪の如し。三十六物等を觀ずる、是を醜と名け、珂の如く雪の如しと觀ずる、是を好と名く。行者は內外を觀ずる時、心散亂して禪に入り難く、自身の相を除いて但だ外色のみを觀ず。阿毘曇の中に說くが如し。行者は觧脫觀を得るを以て、是の身の死を見る、死し已れば轝して塚間に出だし、若しくは火にて燒き、若しくは蟲噉つて皆已に滅盡す。是の時但だ蟲と火を見て身を見ず、是を「內に色相なく、外に色を觀ず」と名く。行者は敎の

答へて曰く、實觀あり、亦た得解觀あり。身相は實に是れ不淨なり、是を實觀と爲す。外法の中に淨相に種種の色相あり、是を實の淨觀と爲し、淨不淨は是を實觀と爲す。(また)此の少許の淨を以て、廣く一切皆是れ淨なりと觀じ、是の一水を取つて、遍ねく一切皆な是れ水なりと觀じ、是の少許の青相を取つて、遍ねく一切皆な是れ青なりとす。是の如き等は是を得解觀と爲す。實(觀)に非ず。四無色の背捨は、四無色定の中の觀の如く、胎捨を得んと欲して先づ無色定に入る。無色定は是れ背捨の初門なり、色緣を背捨すれば無量虛空處なり。

問うて曰く、無色定も亦た爾なり、何等の異あるや。

答へて曰く、凡夫人は是の無色定を得ば是を無色と爲す、聖人は深く心に無色定を得て一向に廻せず、是を背捨と名く。餘殘の識處、無所有處、非有想非無想處も亦た是の如く、受想の諸の心心數法を背滅する、是を滅受想背捨と名く。

問うて曰く、無想定は何を以てか背捨と名けざるや。

答へて曰く、邪見の者は諸法の過失を審かにせず、直に定中に入つて是を涅槃と謂ひ、定より起つ時、還つて悔心を生じて、邪見に墮在す。是の故に背捨に非ず。滅受想は散亂の心を患厭するが故に、定に入つて休息すること涅槃の法に似たり、身中に著はして身に得るが故に身證と名く。

八勝處とは、內に色相あり、外に色の少なきを觀ず、若しくは好、若しくは醜、是の色を勝知し勝觀する、是を初勝處と名く。內に色相あり、外に色の多きを觀ず、若しくは好、若しくは醜、是の色を勝れて知り、勝れて觀ずる、是を第二勝處と名く。第三第四も亦是の如し。但だ內に色相なく外に色を觀ずるを以て異と爲し、內に亦た色相なく外に諸色の青黃赤白を觀ず、是を八勝處と爲す。「內に色相あり外に色を觀ず」とは、內身を壞せず外緣の少なる者を見るなり。緣少きが故に少と名く、觀道未だ增長せざるが故に少因緣を觀る。多を觀ずれば攝すること難きを畏るるが故なり。

除却すれば、唯だ、白骨のみ有つて心を骨人に繋く。若し外に馳散すれば之を攝して還らしむ。深く心を攝するが故に白骨の流光が[一]珂の如く、貝の如く、能く內外の諸物を照らすを見る。是を淨背捨の初門と爲す。然して後に骨人の散滅を觀じ、但だ骨光を見、外の淨潔の色相を取る。復次に、若しくは金剛・眞珠・金・銀・寶物、若しくは淸淨地若しくは淨水、無烟無薪の淨潔の火の如き、若しくは淸風の塵なき、諸の靑色の金精山の如き、諸の黃色の瞻蔔華の如き、諸の赤色の赤蓮華の如き、諸の白色の白雲の如き等、是の相を取つて心を繫けて淨觀するに、是の諸色に隨つて各淸淨の光耀あり。是時、行者は喜樂を受くることを得て、身中に遍滿す、是を淨背捨と名く。淨を緣ずるが故に名けて淨背捨と爲し、遍身に樂を受くるが故に名けて身證と爲し、是の心樂を得て五欲を背捨し、復た喜樂せざる是を背捨と名く。未だ漏盡きざるが故に、中間に或は結使の心生じて、隨つて淨色に著し、復た勤め精進して、此の著を斷ずるが故なり。是の如きの淨觀は心想より生ず。譬へば幻主が所幻の物を觀じて、已より出るを知り、心に著を生ぜず、能く所緣に隨はざるが如し。

是の時に背捨は變じて勝處と名く。淨觀に於て勝ると雖も、未だ廣大なること能はず、是の時行者は、還つて淨相を取り背捨の力、及び勝處の力を用ふるが故に、是の淨地の相を取り、漸漸に十方虛空に遍滿す。水火風も亦た爾なり。靑相を取つて漸やく廣大ならしめ、亦た十方虛空に遍からしむ。黃赤白も亦た是の如し。是時、勝處は復た變じて一切處と爲る、是の三事は一義なり、轉變して三名あるなり。

問うて曰く、是の三背捨、八勝處、十一切處は是れ實觀なりや。是れ得解の觀なりや。若し實觀ならば、身に皮肉あり何を以てか但だ白骨を見るや。また[二]三十六物合して身法と爲る、何を以てか分別して散觀するや。四大には各自ら相あり、何を以てか三大を滅して、但だ一の地大のみを觀ずるや。四色は盡く是れ靑に非ず、何を以てか都て靑觀を作すや。

【一】珂。白瑪瑙。

【二】三十六物。人身には三十六の不淨物あり。卽ち髮、毛、爪、齒、眵・涙、涎、唾、屎、溺、垢、汗(外相十二)皮、膚、血、肉、筋、脈、骨、髓、肪、膏、腦、膜(身器十二)肝、膽、腸、胃、脾、腎、心、肺、生藏、熟藏、赤痰、白痰(內含十二)

るや。

答へて曰く、行者は眼に是の身に死相有るを見、是の未來の死相を取つて、以て今の身を況ふ。外の四大は滅相を見ざるが故に、無と觀ず可きこと難きが故に、外色の壞を說かざるなり。　復次に、色界を離るゝ時、是の時は亦た外色をも見ず。

淨き背捨を身にて證を作すとは不淨の中の淨觀なり。八勝處に說くが如し。前八の一切處に淸淨の地水火風及び靑黃赤白を觀じ、靑色を觀ずること、靑蓮華の如く、金精山の如く、優摩伽華の如く、眞靑の婆羅捺衣の如く。黃赤白を觀じて、各色に隨ふことも亦た復た是の如し。總じて淨背捨と名く。

問うて曰く、若し總て是れ淨背捨ならば應に一切處を說くべからず。

答へて曰く、背捨は是れ初行の者、勝處は是れ中行、一切處は是れ久行なり。不淨觀に二種あり、一には不淨、二には淨なり。不淨觀の中に二背捨、四勝處あり、淨觀の中に一背捨、四勝處、八一切處あり。

問うて曰く、行者が不淨を以て淨と爲さば名けて顚倒と爲す、淨背捨觀は云何なれば顚倒ならざるや。

答へて曰く、女色の不淨なるを妄に見て淨と爲すは是を顚倒と名く。淨背捨は一切は實に靑色なりと觀じ、廣大なるが故に顚倒ならず。　復次に、心を調ふが爲の故に、淨觀は以て久しく習ひ、不淨觀は心に厭ふ、是の故に淨觀を習ふは顚倒に非ず。亦た是の中に著せざるが故なり。　復次に、行者は先づ身の不淨を觀じ、身法の有ゆる內外の不淨に隨つて心を觀中に繫く、是の時に厭を生じ婬・恚・癡薄し。即ち自ら驚悟すらく、「我は目無かりき、此身是の如し、云何んぞ著を生ぜん」と。心を攝して實に觀じて復た錯らしむること無し。心旣に調柔なれば身の皮肉血髓の不淨を想ひて、

初品第三十四……八背捨*

八背捨とは、內に色あり外に亦た色を觀ずる是れ初背捨なり。內に色なく外に色を觀ずる是れ第二の背捨なり。淨き背捨を身もて證を作すは第三の背捨なり、四無色定、及び滅受想定、是の五を合して八背捨と爲す。背とは是れ五欲を淨潔にするなり。是の著心を離るゝが故に背捨と名く。內外の色を壞らず、內外に色相を滅せず、是の不淨心を以て色を觀ずる是を初背捨と名く。內色を壞し內色の相を滅し、外色を壞らず外色の相を滅せず、是の不淨心を以て外色を觀ずる、是れ第二の背捨なり。是の二は皆な不淨を觀ず。一には內を觀じ外を觀じ、二には內を見ずして、但だ外を見る、何となれば衆生に二分の行あり、愛行と見行となり。愛多き者は樂に著して、多く縛は外の諸結使の行に在り、見多き者は多く身見等の諸見に著して、內に結使の爲に縛せらる。是を以ての故に、愛多き者は外色の不淨を觀じ、見多き者は自身の不淨を觀じて壞敗するが故なり。復次に行者初めには心は未だ細かに攝せず、心を一處に繫すること難し。故に內外の觀漸く習ひ調柔にして能く內の色相を壞して、但だ外を觀ず。

問うて曰く、若し內に色相なくんば、誰か當に外を觀ずべきや。

答へて曰く、是を得解の道と爲す、實道に非ず。行者は、未來に死して火に燒かれ、蟲に噉はれ、土中に埋著さるれば、皆磨滅するを念じ、現在の若きも亦、是の身を分別して、乃ち微塵に至り、皆無なりと觀ず。是を內に色相なく外に色を觀ずと名く。

問うて曰く、二勝處は內外の色を見、六勝處は但だ外色を見る。一背捨は內外の色を見、二背捨は但だ外色を見る。何を以ての故に、但だ內に色相を壞する有つて、外色は能く壞すること能はざ

(*)八背捨と題すれど八勝處、十一切處、九次第定を併せ釋す。

識處、無所有處も、亦た是の如し。非有想非無想處は、或は次第にして次第緣に與みせず、或は次第にせずとは、未來世の中に生ぜんと欲する心心數法の非有想非無想處、及び阿羅漢の、過去現在の最後滅の時の心心數の非有想非無想處、及び滅受想の若しくは生じ、若しくは生ぜんと欲するなり。次第にして亦た次第緣に與みすとは、過去現在の阿羅漢、最後滅の時の心心數の非有想非無想處を除いて、餘殘の過去現在の心心數の非有想非無想なり。次第に非ず亦た次第緣に與みするに非ずとは、未來世の中に生ぜんと欲する心心數の非有想非無想處を除いて、餘殘の未來世の中の心心數の非有想非無想處と、心次第、心不相應の諸行を除いて、餘殘の心不相應の諸行と、四無色の中に攝する諸の心心數の法と有緣と亦た緣緣となり。四無色には心不相應の諸行と、非緣と緣緣とを攝す。四無色は皆な是れ增上にして亦增上緣と與みす。是の如く種種に、四無色を分別することは、阿毘曇分の中に說くが如し。此の中に應に廣く說くべし。

問うて曰く、摩訶衍の中の四無色とは云何。

答へて曰く、諸法實相と共に智慧を行ずる、是れ摩訶衍の中の四無色なり。

問うて曰く、何等か是れ諸法實相なるや。

答へて曰く、諸法が諸法の自性を空ずるなり。

問うて曰く、色法は和合・分別・因緣の故に空なり。此の無色の中に云何んぞ空なるや。

答へて曰く、色は是れ眼見、耳聞、麁事なるすら能く空ならしむ、何に況んや不可見にして對ある無く、苦樂を覺せずして而も空ぜざらんや。復次に、色法は分別するに、乃至微塵にいたるも、皆散滅して空に歸す。是の心心數の法は、日月・時節・須臾の頃、乃至一念の中に在るも不可得なり。是を四無色定の義と名く。是の如き等、種種に略して四無色を說く。

垢の非有想非無想處、四無色の中に攝する心不相應の諸行なり。是は心法に非ず、心數法に非ず、心相應に非ず。受聚、想聚、及び此の相應行衆なり、是の心數法は、亦た心相應の心意識、獨心なり。四無色は、或は隨心行にして、受相應に非ざる有り、或は受相應にして隨心行に非ず、或は隨心行にして亦た受相應なり、或は隨心行に非ず受相應に非ざるあり。隨心行にして受相應に非ずとは、隨心行、心不相應の諸行、及び受なり。受相應にして隨心行にあらずとは、心是なり。隨心行にして亦た受相應とは、想衆、及び此に相應する行衆なり。隨心行に非ず受相應に非ずとは、隨心行と心不相應の諸行とを除いて、餘殘の心不相應の諸行、想相應、行相應なり。亦た應に是の如く說くべし。

虛空處は、或は身見の因に從つて還つて身見と與に因と作らず、或は身見の因に從ひ、亦た還つて身見と與に因を作す、或は身見の因に從はず、亦た還つて身見と與に因と作らず。身見の因に從ひ、還つて身見と與に因と作らずとは、過去現在の見苦斷の諸使、及び此と相應する虛空處を除き、亦た過去現在の見集斷の諸の邊結、及び此に相應する虛空處を除き、及び未來世の中の、身見に相應する虛空處を除き、亦た身見・生・老・住・滅を除いて、餘殘の有垢の虛空處なり。身見の因に從ひ亦た還つて身見と與に因と作るとは、上に除く所の者是なり。亦た身見の因に從はず亦た還つて身見と與に因と作らずとは、無垢の虛空處なり。識處・無所有處・非有想非無想處も亦た是の如し。四無色定は一切因緣を有し亦た因緣に與みす。處空處は或は次第にして次第緣に與みせず、或は次第にして亦た次第緣に與みし、或は次第に非ず亦た次第緣に與みするに非ず。次第にして次第緣に與みせずとは、未來世の中に生きんと欲する心心數の虛空處、及び阿羅漢の過去現在の最後滅の時の心心數の虛空處なり。次第にして亦た次第緣に與みすとは、過去現在の阿羅漢、最後滅の時の心心數の虛空處を除いて、餘殘の過去現在の心心數の虛空處なり。次第に非ず亦た次第緣に與みせずとは、未來世の中に生きんと欲する心心數の虛空處を除いて、餘殘の未來世の中の心心數の虛空處、及び心不相應の諸行なり。

無色に非ず、或は四無色にして漏に非ず、或は漏にして亦四無色なり、或は漏に非ず亦四無色に非ず。漏にして四無色に非ずとは、一漏及び二漏の少分なり。四無色にして漏に非ずとは、漏に攝せざる四無色なり。亦た漏にして亦四無色とは、二漏の少分なり。漏に非ず四無色に非ずとは、色衆及び漏・無色に攝せざる四衆・及び無爲法なり。或は有漏にして四無色に非ず、或は四無色にして有漏に非ず、或は有漏にして亦四無色なり、或は有漏に非ず四無色に非ず。有漏にして四無色に非ずとは、有漏の色衆、及び無色に攝せざる有漏の四衆なり。四無色にして有漏に非ずとは、三無色の少分なり。亦た有漏にして亦四無色とは、一無色、及び三無色の少分なり。亦た有漏に非ず四無色に非ずとは、無漏の色衆、無色に攝せざる無漏の四衆、及び三無爲なり。或は無漏にして四無色に非ず、或は四無色にして無漏に非ず、或は無漏にして亦四無色、或は無漏に非ず亦四無色に非ず。無漏にして四無色に非ずとは、無漏の色衆、及び無色に攝せざる無漏の四衆、及び三無爲なり。四無色にして無漏に非ずとは、一無色と及び三無色の少分なり。亦たは無漏亦たは四無色とは、三無色の少分なり。無漏に非ず四無色に非ずとは、有漏の色衆、及び無色に攝せざる有漏の四衆なり。　虛空處は、或は見諦斷、或は思惟斷、或は不斷なり。見諦斷とは、信行法行の人、見諦を用ゐて忍斷するなり。何となれば是れ二十八使、及び二十八使相應の虛空處、及び此に起る心不相應の諸行なればなり。思惟斷とは見道を學し、思惟を用ゐて斷ず、何となれば是れ思惟の所斷の三使、及び此の相應の虛空處、及び此に起る心不相應の諸行、及び無垢有漏の虛空處なればなり。不斷とは、無漏の虛空處なり。識處・無所有處も亦た是の如し。非有想非無想處は或は見諦斷、或は思惟斷なり。見諦斷とは信行、法行の人、見諦を用ゐて忍斷す。何となれば是れ二十八使、及び此に相應する非有想非無想處、及び此に起る心不相應の諸行なればなり。思惟斷とは、見道を學し、思惟を用ゐて斷ず。何をか是れ思惟所斷なる。三使、及び此に相應する非有想非無想處、及び此に起る心不相應の諸行、及び無

故に色を過ぐと名く。耳聲・鼻香・舌味・身觸は壞するが故に有對相を過ぐ、二種の餘色に於て色を種種に分別せしむる無きが故に異相と名く。是の如く觀じて、色界の中の染を離れ、無邊虛空處を得。三無色を得る因緣方便は禪波羅蜜品の中に說くが如し。

是の四無色は一は常有漏、三は當に分別すべし。虛空處は或は有漏或は無漏なり。有漏とは虛空處に攝する有漏の四衆なり、無漏とは虛空處に攝する無漏の四衆なり、識處・無所有處も亦た是の如し。一切は皆な有爲の善なり、有漏の虛空處は是れ有報・無記なり、及び無漏の虛空處は是れ無報なり。識處・無所有處も亦た是の如し、善の非有想非無想處は有報無記あり、非有想非無想處は是れ無報なり。善の四無色定は是れ可修無記・四無色定は、可修に非ず。隱沒は、是れ有垢なり、不隱沒は是れ無垢なり。一は三の中にあり。有漏は是れ有、無漏は是れ非有にして、四無色定の攝なり。心心數法は是れ相應因、心不相應の諸行は是れ非相應因なり。善法にして四無色の中に非ざる有り、四無色の中にして善法に非ざる有り、亦た善法にして亦た四無色の中なる有り、善法に非ず亦た四無色の中に非ざる有り。善法にして四無色に非ざる有りとは、一切善の色衆、及び四無色に攝せざる善の四衆及び智緣盡なり。四無色の中にして善法に非ざる有りとは、無記の四無色なり。亦た善法にして亦た四無色なる有りとは善の四無色なり。善法に非ず亦た四無色に非ざる有りとは一切不善の五衆、及び無記の色衆及び四無色に攝せざる無記の四衆、虛空及び非智緣盡なり。不善法の中に相攝せず。無記法にして四無色に非ざる有り、四無色にして無記法に非ざる有り、亦無記法にして亦た四無色なる有り、無記に非ず亦た四無色に非ざる有り。無記法にして四無色に非ざる有りとは、無記の色衆及び四無色に攝せざる無記の四衆、虛空及び非智緣盡なり。四無色の中にして無記法に非ざる有りとは、善の四無色なり。亦た無記法にして亦た四無色とは無記の四無色なり。亦た無記法にも非ず亦た四無色にも非ずとは、不善の五衆・善の色衆・無色に攝せざる善の四衆及び智緣盡なり。或は漏にして四

無量心を說く。

四無色定とは虛空處・識處・無所有處・非有想非無想處なり。是の四無色に三種あり。一には有垢、二には生得、三には行得なり。有垢とは、無色の中に三十一結及び此の結使の中に起る心相應行を攝し。生得とは、是の四無色定を行じて、業報の因緣の故に無色界に生じ、不隱沒なる無記の四衆を得るなり。行得とは、是の色の麁惡・重苦・老病・殺害等の種種の苦惱の因緣は、重病の如く、癰瘡の如く、毒刺の如く、皆な是れ虛誑妄語なり、應當に除却すべしと觀じ、是の如く思惟し已つて、一切の色相を過ぎ、一切の有對相を滅し、一切の異相を念ぜず、無邊虛空處定に入るなり。

問うて曰く、云何にして能く是の三種の相を滅するや。

答へて曰く、是の三種の相は皆な因緣和合より生ずるが故に自性なし、自性なきが故に是の三種は虛誑無實にして滅するを得べきこと易し。復次に、是の色は分別するに、分分に破散し、後に皆な無なり。是を以ての故に若し後に無なれば今も亦た無なり。衆生は顚倒の故に、和合色の中に於て一相・異相を取り、心色相に著す。我は今愚人に隨つて學ぶべからず、當に實事を求むべし、實事の中には是の一相・異相なし。復次に、行者は是念を作さく、「我れ若し諸法を除却して離れば利を得るを深しと爲す。我は先づ財物妻子を捨て、出家して清淨なる持戒を得、心安隱にして怖ぢず畏れず、諸の欲を離れ諸の惡不善法を離れて、喜樂を生じて初禪を得、覺觀を離れて內淸淨なるが故に、第二禪の中の大喜樂を得、喜を離れて第三禪地に在り、諸樂の中に於て最も第一なり。是の樂を捨てて念捨淸淨なる第四禪を得、今是の四禪を捨てて應に更に妙定を得べし。是を以ての故に是の色相を過ぎて有對の相を滅し異相を念ぜず」と。佛は三種の色を說きたまふ。有色可見有對と、有色不可見有對と、有色不可見無對となり。色相を過ぐとは是れ可見有對色なり。有對相を滅すとは是れ不可見有對色なり。異相を念ぜずとは是れ不可見無對色なり。復次に、眼に色の壞するを見るが

【八】四無色定の釋。

ふや。

答へて曰く、諸佛法は思議すべからず。衆生の度すべき者に隨つて是の如く說きたまふ。復次に、慈定より起つて、第三禪に廻向するは易く、悲定より起つて虛空處に向ひ、喜定より起つて識處に入り、捨定より起つて、無所有處に入るは易きが故なり。 復次に、慈心もて衆生をして樂を得せしめんと願はば此の果報にて自らも應に樂を受くべし。三界の中にては遍淨(天)を最も樂と爲すが故に、福は遍淨に極ると言ふ。悲心もて衆生の老病殘害苦行の者を觀て憐愍の心生じて云何にして苦を離るることを得せしめんとするに、若し內苦を除かんとすれば外苦復た來り、若し外苦を除かんとすれば內苦復た來る。行者思惟すらく、身あれば必ず苦あり、唯だ身無きこと有れば、乃ち苦無きことを得、虛空は能く色を破す。是の故に福は虛空處に極る。喜心もて衆生に心識の樂を與へんと欲す。心識の樂とは、心は身を離るることを得ること鳥の籠を出づるが如し。虛空處の心は身を出づることを得と雖も、猶ほ心を虛空識處の無量に繋け、一切法の中に於て、皆心識あつて、識自在無邊なることを得、是を以ての故に喜福の極まりは識處に在り。捨心とは、衆生の中の苦樂を捨つるなり。苦樂を捨つるが故に眞の捨法を得、所謂無所有處なり。是を以ての故に捨心の福は無所有處に極まる。是の如く四無量は但だ聖人の所得にして凡夫には非ず。復次に、佛は未來世の諸弟子は鈍根なるが故に分別して諸法に著し、錯(あやま)つて四無量の相を說いて「是の四無量心は衆生緣なるが故に但だ是れ有漏なり。但だ欲界を緣ずるが故に無色界の中には無し、何となれば無色界は欲界を緣ぜざればなり」とするを知りたまひ、是の如き人の妄見を斷ぜんが爲の故に、四無量心を無色界の中に說く。佛は四無量心を以て普く十方の衆生を緣じたまふが故に、亦た無色界の中にも緣ずべし。無盡意菩薩の問の中に說くが如くんば、慈に三種あり、衆生緣・法緣・無緣なり。論者の言く「衆生緣は是れ有漏、無緣は是れ無漏、法緣は或は有漏或は無漏なり」と、是の如く種種に略して四

行ずれば梵天に生ずと說く。　復次に、婬欲を斷ずる人を皆な名けて梵と爲し、梵と說けば皆な色界を攝す。是を以ての故に婬欲を斷ずる法を名けて梵行と爲す。欲を離るるも亦た梵と名く。若し梵を說けば、則ち四禪・四無色定を攝す。　復次に、骨觀は滅し難きが故に上地の名を說かず、譬へば五戒の中の口律儀の如きは、但だ一種の不妄語のみを說けば則ち三事を攝す。

問うて曰く、慈に五功德あり、悲・喜・捨は何を以てか功德ありと說かざるや。

答へて曰く、上の譬喩の如く、一を說けば則ち三事を攝す。此も亦た是の如く、若し慈を說けば、則ち已に悲・喜・捨を說く。　復次に、慈は是れ眞の無量なり。慈は王の如く餘の三は隨從すること人民の如しと爲す。所以いかんとなれば先づ慈心を以て、衆生をして樂を得せしめんと欲し、樂を得ざる者あるを見るが故に悲心を生じ、衆生をして苦心を離れて、法樂を得せしめんと欲するが故に喜心を生じ、三事の中に於て、憎なく愛なく貪なく憂なきが故に捨心を生ずればなり。　復次に、慈は樂を以て衆生に與ふるが故なり。增一阿含の中に、五の功德ある悲心を說き、摩訶衍經に於ても、處處に其の功德を說けり。明網菩薩經の中に說くが如し、「菩薩は衆生の中に處して三十二種の悲を行じ、漸漸增廣して轉た大悲を成ず。大悲は是れ一切の諸佛菩薩の功德の根本なり、是れ般若波羅蜜の母なり、諸佛の祖母なり。菩薩は大悲心を以ての故に般若波羅蜜を得、般若波羅蜜を得るが故に佛と作ることを得」と。是の如き等、種種に大悲を讃す、喜捨の心は餘處にも亦た讃するあり。慈悲の二事は遍く大なるが故に、佛は其の功德を讃したまふ。慈は功德有り難きを以ての故に、悲は以て能く大業を成ずるを以ての故なり。

問うて曰く、佛は四無量の功德を說きたまふに、慈心は好く善を修し福を修するも遍淨天に極り、悲心は好く善を修し福を修するも虛空處に極り、喜心は好く善を修し福を修するも識處に極り、捨心は好く善を修し福を修するも無所有處に極れりとす。云何んぞ慈の果報は梵天上に生ずべしと言

問うて曰く、若し樂に二分ありて、慈心と喜心とならば、悲心もて苦を觀ずるに何を以てか二分を作さざるや。

答へて曰く、樂は是れ一切衆生の愛重する所なるが故に二分と作す。是の苦は愛せず念ぜざるが故に二分と作さず。又樂を受くる時は心歡なるも、苦を受くる時は心堅し。阿育王の弟、[七]違陀輸の如きは、七日、閻浮提の王と作り、上妙を得て自ら五欲を恣にす。七日を過ぎ已つて阿育王、問うて曰く、「閻浮提の主として樂を受け歡暢せるや不や」。答へて言く、「我は見ず、聞かず、覺せざりき。何となれば旃陀羅、日日に鈴を振り高聲に唱ふらく、七日の中、已に爾許の日過ぎぬ、七日を過ぎ已らば汝當に死すべしと、我、是の聲を聞くより、閻浮提の王として上妙の五欲を作すと雖も憂苦深きが故に聞かず見ず」と。是を以ての故に知りぬ、苦の力は多く樂の力は弱し。若し人、遍身に樂を受くるも一處に針を刺すことを得ば、衆樂皆な失して但だ刺の苦のみを覺えん。樂の力は弱きが故に二分すれば乃ち強く、苦の力は多きが故に一處にして足ること明なり。

問うて曰く、是の四無量心を行ずれば何等の果報を得るや。

答へて曰く、佛說きたまはく、「是の慈三昧に入れば、現在に五の功德を得。火に入れども燒けず、毒に中(あた)れども死せず、兵刃にも傷かず、終に橫死せず、善神擁護す、無量の衆生を利益するを以ての故に是の無量の福德を得、是の有漏の無量心を以て衆生を緣ずるが故に淸淨處に生ず、所謂色界なり」と。

問うて曰く、何を以ての故に佛は慈の報は梵天上に生ずと說きたまふや。

答へて曰く、梵天は衆生の尊貴する所なるは、皆聞き皆識るを以ての故なり。佛は天竺國に在す。天竺國には常に婆羅門多し。婆羅門の法にては、所有の福德は、盡く梵天に生ぜんことを願ふ。若し衆生が慈を行ずれば梵天に生ずと聞けば、皆な多く信向して慈法を行ぜん。是を以ての故に慈を

【七】違陀輸 Vitasoka 除憂と譯す。阿育王の同母弟、母の憂 Soka の去りたる時に生れたる故、この名あり。阿育王、違陀輸をして七日間、王位に即け、七日終らば切るべしと令す。死期を目前にして樂しむ能はず、出家す。

無量の衆生を度すべからず。大力士の弓は勢大なりと雖も、箭は遠くして必ず墮つるが如く、亦た劫盡の大火は、三千世界を燒きて、明に照すこと無量にして久しと雖も必ず滅するが如し。菩薩の成佛も亦た是の如く、初發意より精進の弓を執り、智慧の箭を用ゐて深く佛法に入り、大に佛事を作すも亦た必ず當に滅すべし。菩薩は一切種智を得る時、身より光明を出だして無量の世界を照し、一一の光明は變じて無量の身を化作して、十方無量の衆生を度し、涅槃の後、八萬四千の法聚・舍利もて、衆生を化度するも、劫盡の火の照ること久しければ、亦た復たび滅するが如し。

問うて曰く、汝は自ら光明變じて無量の身を化作し、十方無量の衆生を度すと言ふ。今何を以てか有量の因緣の故に、度する所も亦た有量なりと言ふや。

答へてて曰く、無量に二種あり。一には實の無量にして、諸の聖人も量ること能はざる所なり。譬へば虛空・涅槃・衆生性の如し、是は量る可らず。二には法の量る可き有れども、但だ力の劣れる者は量ること能はず。譬へば須彌山・大海水の斤兩・渧數の多少の如く、諸佛菩薩は能く知れども、諸天世人は知る能はざる所なり。佛の衆生を度したまふも亦た是の如く、諸佛は能く知りたまふも、但だ汝等が及ぶ所に非ざるが故に無量と言ふ。復次に、諸法は因緣和合して生ずるが故に自性あること無し。自性なきが故に常に空なり。常に空なる中の衆生は不可得なり。佛の說きたまふが如し。

『我道場に坐する時、智慧は不可得なり。空拳もて小兒を誑して、以て一切を度す。
諸法實相は則ち是れ衆生の相なり。若し衆生の相を取れば、則ち實道を遠離す。
常に常空の相を念ずる、是の人は道を行ずるに非ず。不生滅の法の中に、而も分別の相を作せばなり。
若し分別憶想すれば、則ち是れ魔羅の網なり。動ぜず、依止せざる、是を則ち法印と爲す。』

益す。聲聞が是の四無量を行ずるは、自調、自利の爲なるが故に、亦た但だ衆生を空念するのみ。諸の菩薩が是の慈心を行ずるは、衆生をして苦を離れ樂を得せしめんと欲するにして、此の慈心の因緣に從つて、亦た自ら福德を作し、亦た他を敎えて福德を作さしめ、果報を受くる時には、或は轉輪聖王と作つて、饒益する所多し。菩薩は或時は出家して禪を行じ、衆生を引導して、敎へて禪を行ぜしめ、淸淨界に生じて、無量の心樂を受くることを得しめ、若し佛と作る時は、無量阿僧祇の衆生と共に、無餘涅槃に入る。空心にして益を願ふに比するに、是は大利と爲す。乃至舍利餘法をもて饒益する所多し。復次に、若し一佛盡く一切衆生を度せば、餘佛は則ち復た度する所なけん。是れ則ち未來の佛を無にし、佛種を斷ずと爲すなり。是の如き等の過あり、是を以ての故に一佛は一切衆生を度せず。復次に、是の衆生の性は癡に從つて有り、實に定まれる法に非ず。三世十方の諸佛も衆生を求むるに實に不可得なり、云何んぞ盡く一切を度せん。

問うて曰く、若し空にして盡く度することを得可らずとせば、少も亦た倶に空なり、何を以てか少を度するや。

答へて曰く、我は言ふ。三世十方の佛は、一切衆生を求むるに、不可得なるが故に、度する所なしと。汝は難じて、何を以て盡く度せずやと言ふ。是を負處に墮すと爲す。汝は負處に於て自ら拔くこと能はず、而も難じて、衆生の中に多少の一種なし、何を以てか少を度するやと言ふ。是を重ねて負處に墮すと爲す。復次に、諸法實相の第一義の中には、即ち衆生もなく亦た度もなし。但だ世俗の法を以ての故に、說いて度すること有りと言ふ。汝は世俗の中に於て第一義を求む、是の事は不可得なり。譬へば瓦石の中に珍寶を求むるも得べからざるが如し。復次に、諸佛の初發心より、乃至法盡くるまで、其の中間に於て有する所の功德は、皆な是れ作法にして限あり量あり初あり後あるが故に、度する所の衆生も亦た應に量あるべし、以て因緣果報の有量の法に隨つて、盡く

問うて曰く、若し爾らば何を以てか慈喜と次第せざるや。

答へて曰く、慈心を行ずる時、衆生を愛すること兒子の如く、樂を與へんことを願つて、慈三昧を出すが故に、衆生の種種の苦を受くるを見て深く愛心を發し、衆生を憐愍して深樂を得せしむ。譬へば父母は常に子を愛すと雖も、若し病を得ること急なれば、是の時愛心轉た重きが如し。菩薩も亦た是の如く、悲心に入つて衆生の苦を觀じ、憐愍の心生じて便ち深き樂を與ふ。是を以ての故に悲心は中に在り。

問うて曰く、若し是の如く深く衆生を愛せば、復た何を以てか捨心を行ずるや。

答へて曰く、行者は是の如く觀じて、常に衆生を捨てず、但だ是の三種の心のみを捨するなり。何となれば餘法を妨げ廢するを以ての故なり。亦た是の慈心を以て、衆生をして樂ならしめんと欲すれど、而も樂を得せしむること能はず。悲心は衆生をして苦を離れしめんと欲すれども、亦た苦を離るることを得せしむること能はず。喜心を行ずる時も、亦た衆生をして大喜を得せしむること能はず。此は但だ憶想のみにして未だ實事あらず。衆生をして實事を得せしめんと欲せば、當に發心して佛と作るべし。六波羅蜜を行じて、佛法を具足すれば、衆生をして是の實樂を得せしむ。是を以ての故に是の三心を捨てて、是の捨心に入る。 復次に、慈・悲・喜の心の如きは愛深きが故に、衆生を捨すること難し。是の捨心に入るが故に易く出離するを得。

問うて曰く、菩薩は六波羅蜜を行じ、乃至成佛するまで、亦た一切衆生をして、苦を離れて樂を得せしむること能はず、何を以ての故に、但だ是の三心は、憶想して心に生ずるのみにして實事あること無しと言ふや。

答へて曰く、是の菩薩は佛と作る時、一切衆生をして樂を得せしむること能はずと雖も、但だ菩薩は大誓願を發し、是の大願に從つて、大福德の果報を得、大報を得るが故に、能く大に凡夫を饒

答へて曰く、行者は是の念を作さく、「一切の衆生は、樂を離るる時は苦を得、苦の時は即ち是れ苦なり。不苦不樂を得れば、則ち安隱なり」と、是を以て饒益す。行者は、慈喜心を行じて或る時は貪著の心生じ、悲心を行じて、或る時は憂愁の心生ず。是の貪と憂とを以ての故に心亂るれば、是の捨心に入つて此の貪憂を除く、貪憂を除くが故に名けて捨心と爲す。

問うて曰く、悲心と捨心とは別あることを知る可し。慈心は衆生をして樂ならしめ、喜心は衆生をして喜ばしむ。樂と喜と何等の異あるや。

答へて曰く、身の樂を樂と名け、心の樂を喜と名く。五識相應の樂を樂と名け、意識相應の樂を喜と名く。五塵の中に生ずる樂を樂と名け、法塵の中に生ずる樂を喜と名く。先きに樂の願を求めて、衆生をして樂に從ふことを得せしめ、因つて衆生をして喜を得せしむ。人の貧人を憐愍して先づ寶物を施す、是を樂と名け、後賣買せしめて五欲の樂を受くるを得せしむ、是を喜と名く。復次に、欲界の樂を願つて、衆生をして得せしむ、是を樂と名け、色界の樂を願つて、衆生をして得せしむ、是を喜と名く。復次に、欲界の中の五識相應の樂、初禪の中の三識相應の樂、三禪の中の一切の樂は、是を樂と名け、欲界及び初禪の意識相應の樂、二禪の中の一切の樂は、是を喜と名く。麁なる樂を樂と名け、細なる樂を喜と名く、因の時を樂と名け、果の時を喜と名く。初めに樂を得る時は、是を樂と名け、歡心内に發し、樂相外に現はれ歌舞踊躍する、是を喜と名く。譬へば初めに藥を服する時は、是を樂と名け、藥(くすり)發して身に遍ねき時は、是を喜と名くるが如し。

問うて曰く、若し爾れば何を以てか、二心を和合して一無量と作さずして、分別して二法と爲すや。

答へて曰く、行者、初めは心未だ攝せず未だ深く愛すること能はざるが故に、但だ樂を與へ、心を攝して深く衆生を愛するが故に喜を與ふ。是を以ての故に樂を先とし喜を後にす。

に、或は財物を與へ、或は金銀寶物を與へ、或は如意眞珠を與ふるが如し。衆生緣、法緣、無緣も亦復た是の如し。是れを略して慈心の義を說くと爲す。

悲心も亦た是の如く、憐愍の心を以て遍ねく十方の衆生の苦を觀じて、是の念を作さく「衆生は愍む可し、是の種種の苦を受けしむること莫れ」と。無瞋・無恨・無怨・無惱の心、乃至十方も亦た是の如し。

問うて曰く、三種の衆生あり。樂を受くる有り、諸天及び人の少分の如し。苦を受くる有り、三惡道及び人中の少分の如し。不苦不樂を受くる有り、五道の中の少分なり。云何なれば慈を行ずる者は一切衆生は皆な樂を受くと觀じ、悲を行ずる者は、一切衆生は皆な苦を受くと觀ずるや。

答へて曰く、行者は是の慈無量心を學せんと欲する時、先づ願を作さく「願はくは衆生をして種種の樂を受けしめん」と。受樂の人の相を取り、心を攝して禪に入るに、是の相漸漸に增廣して、卽ち衆生は皆な樂を受くるを見る。譬へば火を鑽るには、先づ軟草、乾牛屎を以てし、火勢轉た大にして、能く大なる濕木をも燒くが如し。慈三昧も亦た是の如く、初めに慈願を生ずる時は、唯だ諸の親族知識に及ぼし、慈心轉た廣くして、怨親同等、皆な樂を得るを見る。是れ慈禪定の增長し成就せるが故なり。悲・喜・捨の心も亦た是の如し。

問うて曰く、悲心の中にては、受苦の人の相を取り、喜心の中にては受喜の人の相を取る。捨心の中には何等の相を取るや。

答へて曰く、不苦不樂を受くる人の相を取るなり。行者は是の心を以て漸漸に增廣し、盡く一切の不苦不樂を受くるを見る。

問うて曰く、是の三種の心の中には應に福德あるべし。是の捨心は衆生の不苦不樂に於て何等の饒益あるや。

れを廣心と名け、愛する所の衆生の中に於て、慈念廣くして念に於て已るを以ての故に、名けて廣心と爲し、中の人を慈念するを以て、是を大心を名け、怨憎を慈念して、其功德多きを以ての故に無量心と名く。　復次に、狹緣心の爲の故に名けて廣と爲し、小緣心の爲の故に名けて大と爲し、有量心の爲の故に名けて無量と爲す。是の如き等に義を分別す。

「善く修す」とは、是の慈心牢固たるなり。初めに慈心を得るも、名けて修と爲さず。但だ愛念するの衆生の中のみに非ず、但だ好き衆生の中のみに非ず、但だ己を益する衆生の中のみに非ず、但だ一方の衆生の中に非ざるを名けて善く修すと爲す。久しく行ずれば得ること深く、愛樂・愛憎及び中の三種の衆生は、正等にして異なることなし。十方五道の衆生の中にて一慈心を以て之を視ること、父の如く母の如く、兄弟姉妹子姪・知識の如くし、常に好事を求め利益安隱を得せしめんことを欲し、是の如く心、遍ねく十方の衆生の中に滿つ。是の如き慈心を衆生緣と名け、多くは凡夫人の行處、或は有學の人の未だ漏盡せざる者に在り。

法緣を行ずとは、諸の漏盡の阿羅漢・辟支佛・諸佛、是の諸の聖人は、吾我の相を破し、一異の相を滅するが故に、但だ因緣の相續に從つて諸欲を生ずるを觀じ、以て衆生を慈念する時、和合の因緣の相續して生ずるより但だ空なり。五衆は卽ち是れ衆生なり。是の五衆を念ずるに慈念を以てす。衆生は是の法の空なるを知らず、而も常に一心に樂を得んことを欲す。聖人は之を愍み、意に隨つて樂を得せしむ、世俗の法の爲の故なり。名けて法緣と爲す。

無緣とは、是の慈は但だ諸佛のみ有り。何となれば、諸佛の心は有爲無爲の性中に住せず、過去世・未來・現在世に依止せず、諸緣は不實にして、顚倒虛誑なりと知りたまふが故に、心に所緣なし。佛は、衆生が是の諸法實相を知らず、五道に往來し心諸法に著して、分別し取捨するを以て、是の諸法實相の智慧を以て、衆生をして之を得せしめたまふ。是を無緣と名く。譬へば貧人に給賜する

「怨なく惱なし」とは、恨は卽ち是れ怨なり。初に嫌ふを恨と爲し、恨久しうして怨と成り、身口業の害を加ふる、是を惱と名く。　復次に、初めて瞋結を生ずるを名けて瞋と爲し、瞋増長し、籌量して、著を持するも、心中未だ決了せざる、是を恨と名け、亦は怨と名く。若し心已に定まつて畏忌する所なき、是を惱と名く。慈心の力を以て除捨して、此の三事を離るる、是を瞋なく恨なく怨なく、惱なしと名く。此れ無瞋無恨無怨無惱なり。佛は是を以て慈心を讃嘆したまふ。一切衆生は皆な苦を畏れて樂に貪著す。瞋は苦の因緣と爲し、慈は是れ樂の因緣なり。衆生は是の慈三昧を聞きて、能く苦を除き、能く樂を與ふるが故に一心に精進を懃め、是の三昧を行ず。是を以ての故に無瞋無恨無怨無惱なり。

「廣大無量」とは、一の大心なり。分別するに三名あり、廣は一方に名け、大は高遠に名け、無量は下方及び九方に名く。　復次に、下は廣と名け、中は大と名け、上は無量と名く。　復次に、四方の衆生の心に緣ずるは是を廣と名け、四維の衆生の心に緣ずるは、是を大と名け、上下方の衆生の心に緣ずるは是を無量と名く。　復次に、瞋恨心を破る、是を廣と名け、怨心を破る、是を大と名け、惱心を破る、是を無量と名く。　復次に、一切の煩惱心、小人の所行は小事を生ずるが故に、名けて小と爲し、復た此より小なるが故に、瞋恨怨惱と名け、是の小中の小を破るは、是を廣大無量と名く。所以いかんとなれば、大の因緣は、常に能く小事を破すればなり。廣心とは、罪を畏れ地獄に墮するを畏るるが故に、心中の惡法を除くなり。大心とは、福德の果報を信樂し惡心を除くなり。無量心とは涅槃を得んと欲するが爲の故に惡心を除くなり。　復次に、行者は持戒淸淨の故に是の心廣く、禪定を具足するが故に是の心大に、智慧を成就するが故に是の心無量なり。是の慈心を以て得道の聖人を念ずるは、是を無量心と名け、無量の法を用ゐて聖人を分別するが故に、諸天及び人の尊貴の處を念ずるが故に、名けて大心と爲し、諸餘の下賤の衆生及び三惡道を念ずる、是

解を得ること能はざるには、爲に十一切處を說く、若し十方の衆生を念じて、樂を得せしむる時、心數法の中に生ずる法は名けて慈と爲し、是の慈に相應する受と想と行と識との衆は、是を心數法と名け、身業・口業及び心不相應諸行を起すに、是の法の和合するを、皆な名けて慈と爲す。慈を爲すが故なり。是の法生ずれば、慈を以て主と爲す。是の故に慈のみ名を得。譬へば一切の心・心數法の如きは、皆な是れ後世の業因緣なりと雖も、而も但だ思のみ名を得、作業の中に於て、思は最も力あるが故なり。悲・喜・捨も亦た是の如し。是の慈は色界に在つては、或は有漏、或は無漏、或は斷ず可く、或は斷ず可らず。亦は根本禪の中に、亦は禪中間に在つては、三根相應して、苦根憂根を除く。是の如き等は阿毘曇に分別して說けり。衆生の相を取るが故に有漏なり。相を取り已つて諸法の實相に入るが故に無漏なり。是を以ての故に無盡意菩薩の問の中に說く、「慈に三種あり、一には衆生緣、二には法緣、三には無緣なり」と。

問うて曰く、是の四無量心は云何にか行ずる。

答へて曰く、佛處處の經の中に說きたまふが如し。「比丘あり慈相應の心を以て、恚なく、恨なく、怨なく、惱なく、廣大無量にして、善く慈心を修し、解を得て遍滿す。東方世界の衆生も慈心にして解を得て遍滿し、南西北方、四維上下、十方の世界の衆生の悲・喜・捨相應の心を以てするも亦た是の如し」と。

「慈相應の心」とは、慈は心數法に名け、能く心中の憒濁、所謂る瞋恨慳貪等の煩惱を除く。譬へば淨水珠を濁水の中に著けば、水は卽ち淸きが如し。

「恚恨無し」とは、衆生の中に於て、若しくは因緣あり若しくは因緣なくして瞋り、若しくは惡口・罵言・殺害・劫奪せんと欲する、是を瞋と名け、時節を待つて處を得、所有の勢力もて、當に害を加へんとす、是を恨と名く。慈を以て此の二事を除くが故に瞋恨なしと名く。

らば、云何んぞ能く禪を得ん」と言ふべからず。

復次に、是の菩薩は、相を取つて以て愛著せざるが故に、禪を行ず。人の藥を服して、以て病を除かんと欲するに、以て美とせざるが如し。戒を清淨にし智慧を成就せんが爲の故に禪を行ず。菩薩は一一の禪の中に於て大慈を行じ、空を觀じ、禪に於て依止する所なく、五欲の麁なる誑顚倒を以ての故に、細なる微妙の虚妄の法を以て治す。譬へば毒有れど能く諸毒を治するが如し。

初品第三十三……四無量[六]

四無量心とは慈、悲、喜、捨なり。慈は衆生を愛念して、常に安隱の樂事を求めて、以て之を饒益するに名く。悲は衆生を愍念して五道の中に種種の身苦と心苦とを受くるに名く。喜は衆生をして樂に從ひ、歡喜を得せしめんと欲するに名く。捨は三種の心を捨て、但だ衆生を念じて、憎まず愛せざるに名く。慈心を修するは、衆生の中の瞋覺を除かん爲の故なり。悲心を修するは、衆生の中の惱覺を除かん爲の故なり。喜心を修するは、衆生の不悅樂を除かん爲の故なり。捨心を修するは、衆生の中の愛憎を除かん爲の故なり。

問うて曰く、四禪の中に已に四無量心、乃至十一切處あり。今何を以ての故に別に說くや。

答へて曰く、四禪の中に皆な有りと雖も、是の法は若し別に名字を說かずんば、則ち其の功德を知らず。譬へば嚢中の寶物は、開いて出さずんば、則ち人の知らざるが如し。若し大福德を得んと欲する者には爲に四無量心を說き、色を患厭すること牢獄に在るが如きには、爲に四無色定を說き、緣中に於て自在を得、意に隨つて所緣を觀ずること能はざるには、爲に八勝處を說き、若し道を遮る有つて通達することを得ざるには、爲に八背捨を說き、心調柔ならず、禪より起ちて、次第に禪に入ること能はざるには、爲に九次第定を說き、一切の緣を遍ねく照すことを得て、意に隨つて

【六】四無色定をも併せ釋す。

らずとは、未來世に生ぜんと欲する心・心數法を除いて、餘殘の未來世の中の心・心數法、身業・口業及び心不相應諸行なり。第二第三禪も亦た是の如し。第四禪は次第にして次第緣に與らずとは、未來世の中に生ぜんと欲する、心・心數法、及び無想定にして、若しくは生じ若しくは生ぜんと欲す。次第にして亦た次第緣に與るとは、過去現在の心・心數法なり、次第に非ず亦た次第緣に與るに非ずとは、未來世の中に生ぜんと欲する心・心數法を除いて、餘殘の未來世の心・心數法なり。心の次第の心不相應諸行を除いて、餘殘の心不相應の諸行、及び身業・口業なり。四禪の中に身業・口業・心不相應の諸行、是の緣に與ると、緣に非ざると、餘殘の亦は緣じ、亦は緣に與るとを攝す。是の四禪は亦は增上緣、亦は增上緣に與みす。是の如き等は阿毘曇分の中に廣く分別す。菩薩は禪方便及び禪相、禪支を得ることは、禪波羅蜜多の中に、已に廣く說けり。

問うて曰く、是の般若波羅蜜の論議の中には、但だ諸法の相の空を說く、菩薩は云何にして空法の中に於て、能く禪定を起すや。

答へて曰く、菩薩は諸の五欲及び五蓋は、因緣より生じて自性なく空にして所有なきことを知れば、之を捨つること甚だ易し。衆生は顚倒の因緣の故に、此の少弊の樂に著して、而も禪中の深妙の樂を離る。菩薩は是の衆生の爲の故に、大悲心を起し禪定を修行して心を緣中に繫け、五欲を離れ、五蓋を除き、大喜の初禪に入り、覺觀を滅し、心を攝して深く內淸淨に入り、微妙の喜を得て第二禪に入る。深喜は定を散ずるを以ての故に一切の喜を離れ遍滿の樂を得て第三禪に入る。一切の苦樂を離れ一切の憂喜及び出入の息を除き、淸淨微妙の捨を以て而も自ら莊嚴して、第四禪に入る。是の菩薩は、諸法は空無相なりと知ると雖も、衆生は知らざるを以ての故に禪相を以て衆生を教化す。若し實に諸法の空あらば、是を名けて空と爲さず、亦た五欲を捨てゝ而して禪を得べからず、捨も無く得も無きが故なり。今諸法の空相も亦た得べからず。是の難を作して、「若し諸法空な

[五]四禪に二種あり、一には淨禪、二には無漏禪なり。云何なるを淨禪と名くるや。有漏善の五衆是れなり。云何なるを無漏と名くるや。無漏の五衆なり。是れ四禪の中に攝する所の身口業は是れ色法なり。餘殘の非色法は、一切不可見・無對なり。或は有漏或は無漏なり。有漏とは善有漏の五衆にして、無漏とは無漏の五衆なり。皆な是れ有爲なり。有漏は色界繫にして、無漏は不繫なり。禪は身・口業・及び心不相應の諸行を攝す。是れ心に非ず。心數法に非ず、心相應に非ず。禪は受衆・想衆、及び相應行衆を攝す。是の心數法も亦た心相應なり。禪は心意識を攝す。但だ心なり。四禪は、或は隨心行にありて受相應に非ず。或は受相應にして隨心行に非ず。或は隨心行にして亦た受相應なり、或は隨心行にも非ず受相應にも非ず。隨心行にして受相應に非ずとは、四禪は身業・口業・隨心行と心不相應の諸行、及び受を攝す。受相應にして隨心行に非ずとは、四禪は心意識を攝す。隨心行にして亦た受相應とは、四禪は想衆及び相應行衆を攝す。隨心行に非ず亦た受相應に非ずとは、四禪の中に攝する、隨心行と心不相應諸行とを除き、餘殘の心不相應なり。諸の行と想と行相應も亦た是の如し。四禪三禪中の二禪は、隨覺行に非ず、亦た觀相應に非ず、初禪は或は隨覺行あつて觀相應に非ず、或は觀相應にして隨覺行に非ず、或は隨覺行あり亦た觀相應なり。或は隨覺行に非ず觀相應に非ざるあり。隨覺行にして觀相應に非ずとは、初禪を身業・口業・及び隨覺行・心不相應の諸行・及び觀に攝す。觀相應にして隨覺行に非ずとは諸覺なり。隨覺行にして亦た觀相應とは、覺觀に相應する諸の心心數の法なり。隨覺行に非ず亦た觀相應に非ずとは、隨覺行心不相應諸行を除いて、餘殘の心不相應諸行なり。四禪は皆な因緣あり、亦た因緣と與なり、四禪の中の初禪は、或は次第にして次第緣に與かるに非ず、或は次第にして亦た次第緣に與かり、或は次第に非ず亦た次第緣に與かるに非ず。次第にして次第緣に與るに非ずとは、未來世の中に生ぜんと欲する心・心數法なり。次第にして亦た次第緣に與るとは、過去現在の心・心數法なり。次第に非ず亦た次第緣に與

【五】以下、四禪を釋す。

ずる、是を空と名け、空の中に於て相を取る可らず、是の時、空轉ずるを無相と名け、無相の中に所作あつて、三界に生ずることを爲すべからず、是の時、無相轉ずるを無作と名く。譬へば城に三門あり、一人の身は、一時に三門より入ることを得ず、若し入るには、則ち一門よりするが如し。諸法の實相は是れ涅槃城なり。城に三門あり、空と無相と無作となり。若し人空門に入つて是の空を得ず、亦た相を取らざれば、是の人は直に入りて事を辦ずるが故に、二門を須ゐず。若し是の空門に入り、相を取つて是の空を得ば、是の人に於ては、名けて門と爲さず、通塗更に塞れり。若し空相を除かば、是の時無相門より入る。若し無相の相に於て、心著して戲論を生ぜば、是の時無相の相を取るを除いて、無作門に入る。阿毘曇の義の中には、是の空解脫門は苦諦を緣じ、五衆を攝す。無相解脫門は一法を緣じ、所謂數緣盡く。無作解脫門は三諦を緣じ、五衆を攝す。摩訶衍の義の中には、是の三解脫門は諸法の實相を緣じ、是の三解脫門を以て、世間は卽ち是れ涅槃と觀ず。何となれば涅槃は空・無相・無作にして、世間も亦た是の如くなればなり。

問うて曰く、經に說くが如くんば、涅槃は一門なり、今何を以てか三と說くや。

答へて曰く、先に已に說けり、法は一なりと雖も而も義に三あり。復次に、應に度すべき者に三種あり。愛多き者と、見多き者と、愛と見と等しき者となり。見多き者には、爲に空解脫門を說く。一切の諸法を見るに、因緣より生じて自性あること無し。自性有ることなきが故に空なり、空の故に諸見滅す。愛多き者には、爲に無作解脫門を說く。一切法の無常苦にして、因緣より生ずるを見、見已つて心、愛を厭離して卽ち道に入ることを得。愛と見と等しき者には、爲に無相解脫門を說く。是の男女等の相は無なりと聞くが故に愛を斷じ、一異等の相は無なるが故に見を斷ず、佛は或は一時に二門を說き、或は一時に三門を說きたまふ。菩薩は應に遍ねく學して、一切の道を知るべきが故に三門を說く。更に餘事を說かんと欲するが故に、三解脫門の義を略說す。

福なきが故に何ぞ學道を用ゐんや。

答へて曰く、法空あるが故に罪福あり、若し法空なくんば罪福ある可らず。何となれば、若し諸法實に自性あらば、則ち壞す可き無く、性相は因緣より生ぜず。若し因緣より生ずれば、是れ作法なり。若し法性は是れ作法ならば則ち破すべし。若し法性は作る可く、破す可しと言はば、是の事は然らず。性は不作法に名け、因緣を待つて有らず。諸法に自性有り、自性あれば則ち生ずる者なし、性は先より有るが故なり。若し生なければ則ち滅なく、生滅なきが故に罪福なし。罪福なきが故に何ぞ學道を用ゐん。若し衆生に眞性あらば、則ち能く害する無く、能く利する無し。自性定るが故なり。是の如き等の人は、則ち恩義を知らず、業の果報を破る。法空の中には、亦た法空の相もなし、汝は法空を得て心著するが故に是の難を生ず。是の法空は、諸佛憐愍の心を以て、愛結を斷じ、邪見を除かん爲の故に說きたまへり。 復次に、諸法の實相は能く諸苦を滅し、諸の聖人の眞實の行處なり。若し是の法空に性あらば、一切法の空を說く時、云何んぞ亦た自ら空ぜん。若し法空の性なくんば、汝何の難ずる所かあらん。是の二空を以て、能く諸法の空を觀じ、心諸法を離るゝことを得、世間の虛誑にして幻の如きを知る。是の如く空を觀じ、若し是の諸法の空相を取らば、是の因緣より憍慢等の諸の結使を生じて言く、「我能く諸法の實相を知る」と。是の時應に無相門を學すべし、そは空相を取るを滅するを以ての故なり。若し無相の中に於て戲論を生ぜば、分別して所作あらんことを欲し、是の無相に著す。是の時復た自ら思惟すらく、「我は謬錯を爲す。諸法の空無相の中に、云何んぞ相を得、相を取つて戲論を作さん。是の時應に空無相に隨つて、身口意を行ずべし。所作あるべからず。應に無作相を觀じて三毒を滅すべし。身口意の業を起すべからず。三界の中に生身を求むるべからず」と、是の如く思惟する時、還つて無作の解脫門に入る。是の三解脫門は、摩訶衍の中にては是れ一法なり。行の因緣を以ての故に三種ありと說く。諸法は空なりと觀

共に生じ、共に住し、共に滅し、共に事を成じ、互ひに相利益す。是の空三昧には二行あり。一には、五受衆は一相も異相も無きが故に空なりと觀ず、二には、我・我所の法は不可得なるが故に無我なりと觀ず。無相三昧には四行あり。涅槃を觀じて種種の苦盡くるが故に名けて盡と爲し、三毒等の諸の煩惱の火滅するが故に名けて滅と爲し、一切法の中に第一なるが故に名けて妙と爲し、無間を離るるが故に名けて出と爲す。無作三昧には二行あり。五受衆を觀ずるに、因緣生なるが故に無常なり、身心は惱むが故に苦なり。五受衆の因を觀ずるに、四行あり。煩惱・有漏業和合して能く苦果を生ずるが故に名けて集と爲す。六因を以て苦果を生ずるが故に名けて因と爲す。四緣は苦果を生ずるが故に名けて緣と爲す。多からず少からざる等の因緣は、果を生ずるが故に名けて生と爲す。五不受衆を觀ずるに四行あり。是の八聖道分は能く涅槃に到るが故に道なり。顚倒せざるが故に正なり。一切聖人の去處なるが故に迹なり。愛見の煩惱も遮らざるが故に必ず到る。是の三解脫門は九地の中にあり。四禪・未到地・禪中間・三無色これなり、無漏の性なればなり。或は說く者あり、「三解脫門は一向に無漏なり。三三昧は或は有漏或は無漏なり。是を以ての故に三昧と解脫との二名あるなり」と。是の如く說けば十一地に在り、六地と三無色と欲界と及び有頂地となり。若し有漏ならば繫つて十一地に在り、無漏ならば不繫なり。喜根・樂根、捨根に相應する初學は欲界の中に在り。成就は色無色界の中に在り。是の如き等の成就・不成就・修・不修は、阿毘曇の中に廣く說くが如し。　復次に、二種の空義あつて、一切法の空なるを觀ず、所謂衆生空と法空となり。衆生空は上に說くが如し。法空とは諸法の自相は空なり。佛、須菩提に告げたまふが如きは、「色と色相とは空なり、受・想・行・識と識相は空なり」と。

問うて曰く、衆生は空にして法は不空なるは是れ信ず可し。法の自相の空なるは是れ信ず可らず。何となれば、若し法の自相空なれば則ち生なく滅なし、生なく滅なきが故に罪なく福なし。罪なく

問うて曰く、是の三種は、智慧を以て空を觀じ、無相を觀じ、無作を觀ず。是の智慧は何を以ての故に三昧と名くるや。

答へて曰く、是の三種の智慧は、若し定中に住せざれば、則ち是れ狂慧にして多く邪疑に墮し、能く作す所無し。若し定中に住せば、則ち能く諸の煩惱を破し、諸法の實相を得。復次に、是の道は一切世間と異なり、世間と相違す。諸　聖人は、定中に在つて、實相を得て說けり、是れ狂心の語に非ず。復次に、諸の禪定の中に、此の三法なければ名けて三昧と爲さず。何となれば、還つて退失して生死に墮すればなり。佛の說きたまふが如し。

『能く淨戒を持つを比丘と名け、能く空を觀ずるを定を行ずるの人と名け、一心に常に懃めて精進する者、是を眞實行道の人と名く。

諸樂の中に於て第一なる者なり。諸の渴愛を斷じ狂法を滅し、五衆の身及び道法を捨つ。是を常樂にして涅槃を得と爲す。』

是を以ての故に三解脫門を佛は說いて名けて三昧と爲したまへり。

問うて曰く、今何を以ての故に、解脫門と名くるや。

答へて曰く、是の法を行ずる時、解脫を得て無餘涅槃に到る。是を以ての故に解脫門と名く。無餘涅槃は是れ眞の解脫なり。身心の苦より脫することを得るは、有餘涅槃にして爲作門なり。此の三法は涅槃に非ずと雖も涅槃の因なるが故に名けて涅槃と爲す。世間に因中に果を說き、果中に因を說くあり。是の空と無相と無作とは是れ定の性なり。是の定相は心心數法に應じて、身業口業に隨行す。此の中に起る心不相應の諸行の和合は皆な名けて三昧と爲す。譬へば王來るや必ず大臣營從あるが如し。三昧は王の如く、智慧は大臣の如く、餘法は營從の如し。餘法の名は說かずと雖も、必ず應に有るべし。何となれば定力は獨り生ぜず、獨り所作あること能はざればなり。是の諸法は

して身あればなり。若し身は分分に諸分の中に在らば、是の身は分と異なること有ること無し。分有る者は諸分に隨ふが故なり。

問うて曰く、若し、足等の身分は分を有するものと異ならば是れ咎あり。今足等の身分は分を有する身法と異ならざるが故に咎なし。

答へて曰く、若し足等の身分と分を有するものと異ならずんば、頭は卽ち是れ足なり。何となれば、二事は是れ身にして異ならざればなり。又身分は多く分を有するは一なり。多を一と作し、一を多と作すべからず。復次に、因なきが故に果は無し。果なきが故に因なきに非ず。身分と分を有するものと異ならずんば、果なきが故に因も無なるべし。何となれば因果一なるを以てなり。若しくは一若しくは異の中に身を求むるに得べからず、身は無なるが故なり。何の處にか男女あらん。若し男女あらば卽ち是れ身とやせん身と異るとや爲ん。身は則ち不可得なり。若し餘の法に在らば、餘法は色に非るが故に男女の別なし。但だ二世の因緣和合し、顚倒の心を以てする故に謂つて男女と爲す。偈に說くが如し。

『俯仰・屈伸・立・去來・視瞻・語言の中に實なし。風は識に依るが故に所作あり、是の識滅すれば相は念念に無なり。

彼・此男・女は我心有つて智慧なきが故に妄見して有り。骨鎖相連り皮肉覆ひ、機關の動作すること木人の如し。

內に實なしと雖も外は人に似たり。譬へば洋金を水中に投ずるが如く、亦た野火の竹林を焚くが如く、因緣合するが故に聲あつて出づ。』

是の如き等の諸相は先に說くが如し。此の中に應に廣く說くべし。是を無相門と名く。

[四]無作とは、旣に無相を知れば都て所作なし。是を無作門と名く。

【四】無作三昧の項。

あること無しと觀ず。是を空門と名く。　復次に、空門は忍智品の中に說くが如し。是の我・我所なきを知り已らば、衆生は云何にして諸法の中に於て心著するや。行者は思惟して是の念を作さく、「諸法は因緣より生じて實法あること無く、但だ相のみあり。而るに諸の衆生は、是の相を取つて我・我所に著す。我は今當に是の相の實に得べきもの有りや不やを觀ずべし」と。審諦に之を觀ずるに都て不可得なり。若しくは男相・女相、一・異相等、是の相は實に皆な不可得なり。何となれば、諸法は我・我所なきが故に空なり。空なるが故に男なく女なし。一・異等の法は、我・我所の中の名字にして、是れは一、是れは異なり。是を以ての故に、男・女・一・異の法は實に不可得なり。

復次に、四大及び造色は虛空を圍むが故に、名けて身と爲す。是の中に、內外入の因緣和合して識種身を生じ、是の種の和合を得て、種種の事・言語・坐起・去來を作す。空の六種の和合の中に於て、强いて名けて男と爲し、强いて名けて女と爲す。若し六種是れ男ならば應に六男あるべし。一を以て六と作し六を一と作す可らず。亦た地種の中に於て男女の相なし。乃至識種にも亦た男女の相なし。若し各各の中に無ならば、和合の中にも亦た無なり。六狗の各各師子を生ずること能はず、和合するも亦た生ずること能はざるが如し。無性なるが故なり。

問うて曰く、何を以ての故に、男女なきや。神には別あること無しと雖も、卽ち身は分別して、男女の異あり。是の身は身分を離るることを得ず、身分も亦た身を離るゝことを得ず。身分の足を見て、身分を有する法あつて、名けて身と爲すことを知るが如し。足等は身分にして、身に異なる身は卽ち是れ男女の相なり。

答へて曰く、神を已に先に破すれば身相も亦た壞る。今當に重ねて說くべし。若し是の分を有するを身と名けなば、各各の分の中に、具足して（身は）有りと爲すか、身は分分に諸分の中にありと爲すかなり。若し諸分の中に具足して身あらば、頭の中に應に脚あるべし。何となれば、頭中に具足

【三】無相三昧の項。

卷の第二十

初品第三十二……三三昧[一]

【經】空三昧、無相三昧、無作三昧、四禪、四無量心、四無色定、八背捨、八勝處、九次第定、十一切處。

【論】問うて曰く、何を以ての故に三十七品に次いで、後に八種の法を說くや。

答へて曰く、三十七品は是れ涅槃に趣くの道なり。是の道を行じ已れば、涅槃の城に到ることを得。涅槃の城に三門あり。所謂空と無相と無作となり。已に道を說く、次に應に到るところの門を說くべし。四禪等は是れ開門を助くるの法なり。　復次に、三十七品は、是れ上妙の法なり。欲界は心散亂す。行者は何の地に依つてか、何の方便を得ん。當に色界・無色界の諸の禪定に依り、四無量心・八背捨・八勝處・九次第定・十一切處の中に於て、心を試み、柔軟自在に意に隨ふや不やを知得すべし。譬へば御者の馬を試み、曲折意に隨へば、然る後に陣に入るが如し。十一切處も亦た是の如く、少許の青色を觀取して、一切の物を視、皆な能く青ならしむ。一切の黃、一切の赤、一切の白も皆な是の如し。　復次に八勝處の緣の中に於て自在なり。初二の背捨は身の不淨を觀じ、第三の背捨は身を觀じて還つて淨ならしめ、四無量心は、慈は衆生の皆樂しむを觀じ、悲は衆生の皆苦しむを觀じ、喜は衆生の皆喜べるを觀じ、捨は是れ三心に、但だ衆生を觀じて憎愛あること無し。

復次に、二種の觀あり、一には得解觀、二には實觀なり。實觀とは、是の三十七品なり。實觀を以て得難きが故に、次第に得解觀を說く。得解觀の中には心柔軟にして、實觀を得易し。實觀を用ゐて、三涅槃門に入ることを得。

問うて曰く[二]、何等か空涅槃門なる。

答へて曰く、諸法には我・我所なく空なり、諸法は因緣の和合より生じ、作者あること無く、受者

【一】三三昧（空、無相、無作）と題すれども四禪、を併せ釋す。

【二】空三昧の項。

いては則ち去業なく、去業を除いては則ち今去る處なし。是は相與共に緣ずるが故に、但だ今去る處に「去」有りとのみ言ふことを得ず。　復次に、若し今去る處に去業あらば、去業を離れて、應當に處あるべく、今去る處を離れて、應當に去業あるべし。

問うて曰く、若し爾れば何の咎あるや。

答へて曰く、一時に二の去業あるが故なり。若し二の去者あれば、則ち二の去る者あり。何となれば去る者を除けば則ち「去」無く、若し去る者を除けば今去る處は得べからず。今去る處なきが故に亦た去る者なし。　復次に、去らざる者も亦た去らざるが故に去業なし。若し去者不去者を除いては、更に第三の去者なし。

問うて曰く、不去者の去らざるは、應に爾るべし。何を以てか去る者を去らずと言ふや。

答へて曰く、去業を除いて去る者は得べからず。去る者を除いて去業は得べからず。是の如き等の一切の業の空なる、是を正業と名く。諸の菩薩は一切諸業の平等に入り、邪業を以て惡と爲さず。正業を以て善と爲さず、所作なく正業を作さず邪業を作さず、是を實智慧と名く、即ち是れ正業なり。　復次に、諸法等中には、正なく邪なし。如實に諸業を知り、如實に己を知り、造らず休まず、是の如く智人は、常に正業あつて邪業なし、是を名けて菩薩の正業と爲す。　正命とは、一切の資生活命の具は、悉く正にして邪ならず。不戲論の智の中に住して、正命を取らず、邪命を捨てず、亦正法の中に住せず、亦た邪法の中にも住せず、常に清淨智の中に住し、平等の正命に入り、命を見ず、非命を見ず、是の如きの實智慧を行ず、是を以ての故に正命と名く。若し菩薩摩訶薩、能く是の三十七品を觀ずれば、聲聞辟支佛地を過ぐることを得、菩薩位の中に入りて、漸漸に一切種智を成ずることを得。

一切の思惟分別を斷ずる、是を正思惟と名くるが故なり。諸の思惟分別は、皆從つて不實・虛誑・顚倒に從ふが故に有り、分別思惟の相は皆な無なり。菩薩は是の如きの正思惟の中に住し、是れは正是れは邪と見ず、諸の思惟分別を過ぐ、是を正思惟と爲す。一切の思惟分別は、皆悉く平等なり。悉く平等なるが故に心著せず、是の如き等を名けて、菩薩の正思惟の相と爲す。　正語とは、菩薩は一切の語は皆從つて虛妄・不實・顚倒に從て相を取り分別して生ずるを知る。是の時、菩薩は是の念を作さく、「語の中に語相なし。一切の口業滅して、諸語の實相を知る、是を正語と爲す。是の諸語は從來する所なく、滅して亦た去る所なし」と。是の菩薩は正語の法を行じ、諸有の所語は皆な實相の中に住して說く。是を以ての故に諸經に說かく、「菩薩は正語の中に住し、能く淸淨の口業を作し、一切の語言の眞相を知り、所說ありと雖も邪語に墮せず」と。　正業とは、菩薩は一切の業は、邪相・虛妄・無實にして、皆な作相なしと知る。何となれば一業として、定相を得べきもの有ること無ければなり。

問うて曰く、若し一切の業皆な空ならば、云何んぞ佛は、「布施等は是れ善業、殺害等は是れ不善業、餘事の動作は是れ無記の業なり」と說きたまふや。

答へて曰く、諸業の中に尙ほ一あることすら無し。何に況んや三あらんや。何となれば、行ふ時の如き、已に過ぐれば則ち去業なく、未だ至らざるも亦た去業なく、現在去る時も亦た去業なし。是を以ての故に去業なければなり。

問うて曰く、已に過ぐる處は則ち無かるべく、未だ到らざる處も亦た無かるべきも、今去る處には是れ「去」有るべし。

答へて曰く、今去る處も亦た「去」無し。何となれば去業を除いて、今去る處は得べからず。若し去業を除いて今去る處を得べくんば、是の中に應に「去」有るべし。而も然らず、今去る處を除

分と名け、一切法の中に於て、心緣を除いて不可得なるが故に、是を除覺分と名け、一切法は常に定相、亂れず散ぜずと知る、是を定覺分と名け、一切法に於て、著せず、依止せず、亦た是の捨心を見ざる、是を捨覺分と名く。菩薩は七覺分の空を觀ずること是の如し。

問うて曰く、此の七覺分は何を以てか略說するや。

答へて曰く、七覺分の中の、念と慧と精進と定とは上に已に廣く說けり。三覺は今當に說くべし。菩薩は喜覺分を行じ、是の喜の非實なるを觀ず。何となれば、是の喜は因緣より生じ、作法、有法、無常法、可著法なり。若し著を生ぜば、是れ無常相にして、變壞して則ち憂を生ず。凡夫人は顚倒を以ての故に心著す。若し諸法の實に空なるを知れば、是の時、心悔い、「我は則ち虛誑を受く。人が闇中に飢渴に逼られて不淨物を食し、晝日に觀知して、乃ち其の非を覺るが如し」と。若し是の如く觀じて、實智慧の中に於て喜を生ず、是を眞喜と爲す。是の眞喜を得て、先づ身の麁を除き、次に心の麁を除き、然る後に一切の法相を除き、快樂身心中に遍きを得る、是を除覺分と爲す。既に喜を得て諸の觀行を除捨す。所謂無常觀・苦觀・空無我觀・生滅觀・不生不滅觀・有觀・無觀・非有非無觀なり。是の如きの戲論を盡く捨す。何となれば、無相無緣無作無戲論にして常寂滅なるは、是れ實の法相なればなり。若し捨を行ぜざれば便ち諸諍あり。若し有を以て實と爲さば則ち無を以て虛となし。若し無を以て虛と爲さば則ち有を以て虛と爲し。若し、非有非無を以て實と爲さば、則ち有無を以て虛と爲し。實に於ては愛著し、虛に於ては恚惱して、憂喜の處を生ず。云何んぞ捨せざらん。是の如きの喜を除捨するを得ば七覺分は則ち具足し滿つるなり。

八正道分とは、正見・正方便・正念・正定は、上に已に說けり。正思惟は今當に說くべし。菩薩は諸法の空にして無所得なるに於て住す。是の如きの正見の中に、正思惟の相を觀じ、一切の思惟は、皆これ邪思惟なりと知る。乃至涅槃を思惟し、佛を思惟するも皆亦た是の如し。何となれば

於て依る所なく、意に隨ふと五欲の中に於て心常に之を離れ、慧根力の故に無量の功德を積聚し、諸法の實相に於て、利く入つて無疑無難に、世間に於て憂ふること無く、涅槃に於て喜ぶこと無く、自在の智慧を得るが故に名けて慧根と爲す。　菩薩は是の五根を得て。善く衆生の諸根の相を知り、染欲の衆生の根を知り、離欲の衆生の根を知り瞋恚の衆生の根を知り、亦た瞋恚を離るる衆生の根を知り、愚癡の衆生の根を知り、亦た愚癡を離るる衆生の根を知り、惡道に墮せんと欲する衆生の根を知り、人中に生ぜんとする衆生の根を知り、天上に生ぜんとする衆生の根を知り、鈍なる衆生の根を知り、利なる衆生の根を知り、上中下の衆生の根を知り、罪の衆生の根を知り、罪なき衆生の根を知り、逆順の衆生の根を知り、常に、欲界・色界・無色界に生ずる衆生の根を知り、厚き善根薄き善根の衆生の根を知り、正定・邪定・不定の衆生の根を知り、輕躁なる衆生の根を知り、持重の衆生の根を知り、慳貪なる衆生の根を知り、能く捨する衆生の根を知り、恭敬の衆生の根を知り、恭敬ならざる衆生の根を知り、淨戒、不淨戒の衆生の根を知り、瞋恚と忍辱との衆生の根を知り、精進と懈怠との衆生の根を知り、亂心、攝心、愚癡、智慧の衆生の根を知り、無畏と有畏との衆生の根を知り、增上慢と不增上慢との衆生の根を知り、正道と邪道との衆生の根を知り、根を守ると根を守らざるとの衆生の根を知り、聲聞を求むる衆生の根を知り、辟支佛を求むる衆生の根を知り、佛道を求むる衆生の根を知り、衆生の根を知る中に於て、自在方便力を得るが故に、名けて根を知ると爲す。

菩薩は是の五根を行じ、增長して能く煩惱を破し、衆生を度し、無生法忍を得、是を五力と名く。

復次に、天魔外道も沮壞すること能はず。是を名けて力と爲す。

七覺分とは、菩薩の一切法に於て憶はず念ぜざる、是を念覺分と名け、一切法の中にて善法・不善法無記法を求索するに不可得なる、是を擇法覺分と名け、三界に入らずして、諸界の相を破壞する、是を精進覺分と名け、一切の作法に於て、樂著を生ぜず、憂喜の相を壞するが故に、是を喜覺

と爲して善く持戒に住し、持戒に住し已つて、信心・動ぜず轉ぜず、一心に業果報に依ることを信じ、諸の邪見は離れて更に餘語を信ぜず、但だ佛法を受け、衆僧を信じて、實道の中に住し、直心柔軟にして能く忍び、通達・無礙にして不動・不壞にして、力自在なることを得、是を信根と名く。

精進根とは、晝夜常に精進を行じて、五蓋を除却し五根を攝護し、諸の深き經法を得んと欲し、知らんと欲し、行ぜんと欲し、誦せんと欲し、讀まんと欲し、乃至聞かんと欲す。若し諸の不善惡法起れば、疾かに滅せしめ、未だ生ぜざる者は生ぜざらしめ、未だ生ぜざる諸の善法を生ぜしめ、已に生ぜるは增廣ならしめ、亦た不善法を惡まず、亦た善法を愛せず、等精進を得、直進して轉ぜず、正精進を得、定心の故に名けて精進根と爲す。　念根とは、菩薩は常に一心に念じて、布施・持戒・禪定・智慧・解脫を具足せんと欲し、身口意の業を淨めんと欲し、諸法の生滅・住異を、智の中に常に一心に苦集盡道を念じ、一心に念じて。根・力・覺道・禪定・解脫・生滅・入出を分別し、一心に諸法の不生・不滅・無作・無說を念じ、無生の智慧を得て、諸の佛法を具足せんが故に、一心に念じて、聲聞、辟支佛の心に入ることを得せしめず、常に念じて忘れず。是の如く諸法の甚深淸淨の觀行を得るが故に、是の如き自在の念を得。是を念根と名く。　定根とは、菩薩は善く定相を取り、能く種種の禪定を生じて、了了に定門を知り、善く入定を知り、善く住定を知り、善く出定を知り、定に於いて不著・不味にして、依止を作さず、善く所緣を知り。善く壞緣を知り、自在に諸の禪定に遊戲し、亦た無緣定を知り、他語に隨はず、專ら禪定に隨はず、行くに自在にして、出入無礙なる、是を名けて定根と爲す。　慧根とは、菩薩は苦を盡す爲に、聖智慧を成就す、是の智慧を諸法を離ると爲し、涅槃と爲す。智慧を以て、一切の三界は無常にして、三衰三毒の火の爲に燒ると觀じ、觀じ已つて、三界の中に於て智慧にも亦た著せず、一切の三界を轉じて、空・無相・無作・解脫門と爲し、一心に佛法を求めんが爲に、頭然を救ふが如し。是の菩薩の智慧は能く壞る者なく、三界に

菩薩は云何に法念處を觀ずるや。一切法を觀ずるに、內に在らず、外に在らず、中間に在らず、過去・未來・現在世の中にあらず、但だ因緣和合して妄見より生ず。實に定まれるもの有ること無く、是の法は是れ誰が法といふこと有ること無く、諸法の中に法相は不可得なり。亦た法は若しくは合し若しくは散ずること無く、一切の法は所有なきこと虛空の如く、一切の法は虛誑なること幻の如く、諸法の性は淨にして、相汚染せず。諸法は受くる所なし、諸受は所有なければなり。諸法は所知なし、心・心數法は虛誑なればなり。是の如く觀ずる時、法の若しくは一相若しくは異相あることを見ず、一切の法は空無我なりと觀ず。是の時に是の念を作さく、「一切の諸法は、因緣生の故に自性あること無し、是を實空と爲す。實空の故に相あること無し。相あること無きが故に無作なり。無作なるが故に、法の若しくは生じ若くは滅し住することを見ず。是の智慧の中より無生法忍の門に入る。爾の時に諸法の生滅を觀ずと雖も、亦た無相門に入る。何となれば、一切の法が諸相を離るるは、智者の解する所なればなり。是の如く觀ずる時、心を緣中に繫け、諸法の相に隨順し、身受心法を念ぜず、是の四法の處る所無きことを知る、是を內の法念處と爲す。外の法念處、內外の法然處も亦た是の如し。

四正懃、四如意足も亦た是の如く分別し、空にして處る所なきを觀ずべし。

云何なるを菩薩の行ずるところの五根と爲すや。菩薩摩訶薩は、五根を觀じ、五根を修す。信根とは、一切の法は因緣より生じ、顚倒妄見の心生ずること旋火輪の如く夢の如く幻の如しと信じ。諸法は不淨・無常・苦・空・無我にして、病の如く癰の如く刺の如く、災變敗壞すと信じ。諸法は所有なきこと、空拳もて小兒を誑すが如しと信じ。諸法は過去に在らず、未來に在らず、現在に在らず、從來する所なく、滅して至る所なしと信じ。諸法は空・無相・無作・不生・不滅・無作・無相なりと信じ。而して持戒・禪定・智慧・解脫・解脫知見を信じ、是の信根を得るが故に復た退轉せず、信根を以て首

らず、現在に在らず。是の諸の受は、空にして我なく、我所なく、無常破壞の法なるを知る。是の三世の諸受は、空・無相・無作なるを觀じて、解脫門に入り、亦た諸の受の生滅を觀じ、亦た諸受の不合・不散・不生・不滅を知り、是の如くにして不生門に入る。諸受の不生を知るが故に無相なり、無相の故に不生なり、是の如く知り已つて、心を緣中に繫くれば、若し苦樂、不苦不樂來ること有るも、心は受けず著せず、依止を作さず、是の如き等の因緣もて諸受を觀ず。是を受念處と名く。外受を觀じ、內外受を觀ずるも亦た是の如し。

菩薩は云何に心念處を觀ずるや。菩薩は內心を觀ずるに、是の內心に三相あり。生・住・滅なり。是の念を作さく、「是の心は從來する所なく、滅して亦た至る所なく、但だ內外の因緣の和合するより生ず。是の心は、定んで實相あること無く、亦た實の生・住・滅無く、亦た過去・未來・現在世の中に在らず。是の心は內に在らず、外に在らず、中間に在らず。是の心は、亦た性なく相なく、亦た生ずる者なく、生ぜしむる者なし。外に種種の雜なる六塵の因緣あり、內に顚倒の心想あつて、生滅相續するが故に、强ひて名けて心と爲す」と、是の如く心中には、實に心相は不可得なり。是の心性は不生不滅にして、常に是れ淨相なり。客塵煩惱の相著しきが故に、名けて不淨心と爲す。心は自ら知らず、何となれば、是の心は心相空なるが故なり。是心は本來實法あること無し。是心は諸法と合すること無く、散ずること無く、亦た前際・後際・中際なく、無色・無形・無對なり。但だ顚倒虛誑にして生ず。是の心は空にして我なく我所なく、無常にして無實なり。是を隨順心觀と名く。心相の無生を知れば無生法の中に入る。何となれば、是の心は無生・無性無相なるを以ての故なり。智者は能く知り、智者は是の心生滅の相を觀ずと雖も、亦た實の生滅の法を得ず、垢淨を分別せず、而も心の淸淨を得。是の心、淸淨なるを以ての故に、客塵煩惱の爲に染せられず、是の如くに內心を觀じ、外心を觀ず。內外心を觀ずることも亦是の如し。

して造り、水沫聚の虚しくして堅固なること無きが如く、是の身は無常にして、久しくして必ず破壞し、是の身相は身中に得べからず、亦た外に在らず、亦た中間に在らず。身は自ら覺せず、無知、無作なること、墻壁瓦石の如く、是の身中に定まれる身相なく、是の身を作る者あること無く、亦た作らしむる者もなし。是の身は先際・後際・中際・皆な得べからず。八萬の戸蟲無量の諸病、及び諸の飢渇・寒熱・刑殘等は常に此の身を惱ます。菩薩摩訶薩は身を觀ずること是の如く、我が身に非ず、亦た他の有に非ず、自在を得ず、(能)作及び所(作)あつて是の身を作るにあらず。身相は空にして、虚妄の因縁より生じ、是の身は假に有つて、本業の因縁に屬すと知る。菩薩は自ら念ずらく、「我は身命を惜むべからず、何となれば是の身相は、合せず散ぜず、來らず去らず、生ぜず滅せず、依猗せざればなり。身を循つて觀ずるに、是の身は我なく、我所なきが故に空なり。空の故に男女等の諸相なし。相なきが故に願を作さず」と。是の如く觀ずれば、無作智門に入ることを得て、身の無作なることを知る。無作とは、但だ諸法の因縁和合より生ずるなり。是の諸の因縁の是の身を作す者も、亦た虚妄顚倒によるが故に有り。是の因縁の中に亦た因縁の相なく、是の因縁生にも亦た生相なし。是の如く思惟すれば、是の身は本より以來、生相あること無きを知り、是の身は無相の故に取る可き無く、無生の故に相無く、無相の故に無生にして、但だ誑へる凡夫の故に、名けて身と爲すことを知る。菩薩は是の如く、身の實相を觀ずる時、諸の染欲著心を離れ、常に念を繫けて身に在き、身を循つて觀ず。是の如きを名けて、菩薩の身念處と爲す。外身を觀じ、內外身を觀ずることも亦た是の如し。

菩薩は云何に諸受を觀ずるや。內受を觀ずるに、是の受に三種あり、若しくは苦、若しくは樂、若しくは不苦不樂なり。是の諸受は從來する所なく、滅して至る所なく、但だ虚誑顚倒の妄想より生ず。是の報果は先世の業因縁に屬す。是の菩薩は、是の如く諸受を求むるに、過去に在らず、未來に在

を說く。三には利養の爲の故に、吉凶を占相して、人の爲に說く。四には利養の爲の故に高聲に威を現じ、人をして畏敬せしむ。五には利養の爲の故に得る所の供養を稱說し、以て人心を動かし、邪因緣にして活命するが故に、是を邪命と爲す。

是の八正道に三分あり。三種を戒分と爲し、三種を定分と爲し、二種を慧分と爲す。慧分と定分の分別は、先に說くが如し。戒分は今當に說くべし。戒分は是れ、色性・不可見・無對・無漏・有爲・無報・因緣生・三世の攝、色の攝なり。名の攝、外入の攝に非ず、慧は見を斷ずるに非ず、斷ず可らざることを知る。修法は無垢法なり。是れ果にして、亦た有果なり。受法、四大造、有上法、非有法に非ず。相應因に非ず。一善分を三正に攝し、三正を一善分に攝し、不善、無記法、有漏は相攝せず。無漏の一法は三正に攝し、三正も亦た無漏の一法に攝す。是の如き等の種種の分別は、阿毘曇に廣く說くが如し。是の三十七品は初禪地には具に有り、未到地の中には三十六あり、喜覺を除く。第二禪の中にも亦た三十六あり、正行を除く。禪の中間、第三第四禪には三十五あり、喜覺を除き、正行を除く。三無色定の中には三十二あり、喜覺・正行・正語・正業・正命を除く。有頂の中には二十二あり、七覺分、八聖道分を除く。欲界の中の二十二も亦た是の如し。是を聲聞法の中に分別の義と爲す。

問うて曰く、摩訶衍に說く所の三十七品の義は云何。

答へて曰く、菩薩摩訶薩は、四念處を行じて是の內身を觀ずるに、無常苦にして、病の如く癰の如く、肉聚は敗壞し、不淨は充滿して、九孔より流出し、是を行厠と爲す。是の如き身の惡露を觀ずるに、一として淨處なし。骨幹、肉塗、筋纏、皮裹は先世の有漏業の因緣より受け、今世には沐浴、華香、衣服、飲食、臥具、醫藥等の成ずる所なり。車の兩輪あつて、牛力の牽くが故に、能く至る所あるが如く、二世の因緣を以て身車を成じ、識牛に牽かれて周旋往反す。是の身は四大和合

根と名く。

是の五根增長して煩惱の爲に壞られざる、是を名けて力と爲す。五根の中に說くが如し。是の五根五力は、行衆の中の攝にして、常に共に相應し、心行心數法に隨ひ、心と共に生じ、心と共に住し、心と共に滅す。若し是の法あれば必ず正定に隨ひ、若し是の法なければ、必ず邪定に墮す。

七覺とは先に義を說くが如し。

問うて曰く、先に義を說くと雖も、阿毘曇の法を以て說けるに非ず。

答へて曰く、今當に更に說くべし。四念處の如きは、義は是れ七覺分なり。無色、不可見、無對、無漏、有爲、因緣生、三世の攝。名の攝、外入の攝なり。慧は見を斷ずるに非ず、斷ず可からずと知る。修法は無垢の法なり。是れ果にして、亦た有果なり。受法に非ず、四大造に非ず、有上法にして、相應因有るに非ず。二善分は七覺分に攝し、七覺分は二善分に攝す。不善、無記法、有漏法は相攝せず。無漏の二分は七覺分を攝し、七覺分は無漏の二分を攝す。是の如き等の種種は、千難の中に廣く說くが如し。

八聖道分は先に說くが如し。正見は是れ智慧なり。四念處、慧根、慧力、擇法覺の中に說くが如し。正思惟は、四諦を觀ずる時、無漏心と相應し、思惟、動發して覺知し籌量す。正方便は、四正懃、精進根、精進力、精進覺の中に說くが如し。正念は、念根、念力、念覺の中に說くが如し。正定は、如意足、定根、定力、定覺の中に說くが如し。正語、正業、正命は、今當に說くべし。四種の邪命を除いて、口業に攝す。無漏の智慧を以て除捨し、餘の口の邪業を離るゝは、是を正語正業と名く。亦た是の如く、五種の邪命を無漏の智慧を以て除捨し、是を離るゝを正命と爲す。

問うて曰く、何等か是れ五種の邪命なるや。

答へて曰く、一には若し行者利養の爲の故に詐つて奇特を現ず。二には利養の爲の故に自ら功德

問うて曰く、何を以ての故に七種の法の中に於て、此の四を正勤と名け、後の八を正道と名け、餘は正と名けざるや。

答へて曰く、四種の精進は、心、勇んで發動し、錯誤を畏るるが故に正勤と言ひ、道趣の法を行ずるが故に、邪法に墮することを畏るるが故に、正道と言ふ。性とは四種の精進の性なり。共とは四種の精進の性を首と爲す。因緣生の道は、若くは有漏、若くは無漏、若くは色、若くは無色なり。上に說くが如し。

四正勤を行ずる時、心小しく散ずるが故に、定を以て心を攝するが故に、如意足と名く。譬へば美食に鹽少なければ、則ち味なく、鹽を得れば則ち味足ること、意の如くなるが如し。又人の二足あるも復た好馬好車を得れば、意の如く至る所あるが如し。行者も是の如く、四念處の實智慧、四正勤の中の正精進を得れば、精進の故に智慧增多けれども定力小弱なり。四種の定を得て心を攝するが故に、智と定との力等しく願ふ所皆な得るが故に、如意足と名く。

問うて曰く、四念處、四正勤の中に已に定あり。何を以ての故に如意足と名けざるや。

答へて曰く、彼に定ありと雖も、智慧精進力多くして、定力弱きが故に、行者は意の如く願を得ず。四種の定とは、欲を主と爲して定を得、精進を主と爲して定を得。定の因緣は道を生ず、若しくは有漏若しくは無漏の心を主と爲して定を得、思惟を主と爲して定を得。定の因緣は道を生じ、若しくは有漏、若しくは無漏の、善の五衆を共にするを、名けて共如意と爲し、欲・主・等の四種の定を、名けて性如意と爲す。四正勤四如意足は、性念處・共念處の中に、廣く分別して說くが如し。

五根とは信道及び助道の善法は、是を信根と名け、是の道を行じ、道法を助くる時、勤求して息まざるは、是を精進根と名け、道及び助道の法を念じて、更に他念なきは、是を命根と名け、一心に念じて散ぜざるは、是を定根と名け、道及び助道法の爲に、無常等の十六行を觀ずるは、是を慧

一には王者、已に勝れるもの、惡賊・師子・虎狼・蚖蛇等の逼害なり。二には風雨・寒熱・雷電・礔礰等なり。是二種の苦を名けて外受と爲す。樂受、不苦・不樂受も亦た是の如し。 復次に、內法を緣ずるは、是を內受と爲し、外法を緣ずるは是を外受と爲す。 復次に、一百八受は是を內受と爲し、餘殘は是れ外受なり。

問うて曰く、心は是れ內入の攝なり。云何んぞ外心を觀ずと言ふや。

答へて曰く、心は內入に攝すと雖も、外法を緣ずるが故に名けて外心と爲し、內心を緣ずるが故に是を內心と爲す。意識は是れ內心にして、五識は是れ外心なり。心を攝して禪に入るは是れ內心にして、散亂の心は是れ外心なり。內の五蓋、內の七覺に相應する心は是を內心と爲し、外の五蓋、外の七覺に相應する心は是を外心と爲す。是の如き等の種種に內外を分別し、是を內外心と爲す、

問うて曰く、法念處は是れ外入に攝す、云何んぞ內法を觀ずと言ふや。

答へて曰く、受を除ける餘の心數法の、能く內法を緣ずる心數法は、是れ內法にして、外法を緣ずるの心數法、及び無爲と心不相應行は是を外法と爲す。 復次に、意識所緣の法は是を名けて(內)法と爲す。佛の說きたまふが如くんば、「緣に依つて意識を生ず。是の中、受を除いて餘の心數法は、是を內法と爲し、餘の心不相應行、及び無爲法は、是を外法と爲す」と。

四正懃に二種あり。一には性正懃。二には共正懃なり。性正懃とは、道の爲の故に四種の精進あり。(即ち)二種の不善法を遮し、二種の善法を集む。四念處觀の時、若し懈怠の心あれば、五蓋等の煩惱心を覆ひ、五種の信等の善根を離るゝ時、不善法若し已に生ぜば斷ぜんが爲の故に、未だ生ぜざれば生ぜしめざらんがための故に、精進を懃む。信等の善根、未だ生ぜざれば、生ぜんが爲の故に、已に生ぜば、增長せしめんが爲の故に、精進を懃む。精進の法は四念處に於て多きが故に、正懃と名くることを得。

亦た此の如きの相、是の如きの事は、我未だ此の法を離れず。死屍は是れ外身、行者の身は是れ内身なり。行者或る時は端正の女人を見て、心著すれば、卽時に其の身の不淨を觀ずるが如し、是を外と爲す。自ら我が身を知ることも亦た爾なり。是を内と爲す。　復次に、眼等の五情を内身と爲し、色等の五塵を外身と爲す。四大を内身と爲し、四大の造色を外身と爲す。苦樂の處を覺るを内身と爲し、苦樂の處を覺らざるを外身と爲す。自身及び眼等の諸根は、是を内身と爲し、妻子財寶田宅所有の物は是を外身と爲す。所以いかんとなれば、一切の色法は、盡く是れ身念處なるが故なり。行者は是の内身に淨常樂我を求め、審かに悉く之を求むるも都て得べからず。先に觀法を說くが如く、内を觀ずるに得ず。外には或は當に有るべきや。何となれば外物は是れ一切衆生の著する處なればなり。（然るに）外身を觀ずる時亦た不可得なり。復た是の念を作さく、「我は内觀して得ず、外に或は有らんか」と、外觀も亦復た得ず。（されば）自ら念ずらく、「我は或は誤錯ならん。今當に總じて内外を觀ずべし」と。内を觀じ、外を觀ず、是を別相と爲し、一時に俱に觀ずる。是れ總相と爲す。總觀し、別觀するに、了に得べからず、所觀已に竟る。

問うて曰く、身念處は内外を得べく、諸受は是れ外入の攝なり。云何にして内受外受あることを分別するや。

答へて曰く、佛は二種の受あるを說きたまふ。身受と心受となり。身受は是れ外、心受は是れ内なり。復た五識相應の受あり、是れ外にして、意識相應の受は是れ内なり。十二入の因緣の故に諸受生ず。内の六入の分に生ずる受は、是を内と爲し、外の六入分に生ずる受は、是を外と爲す。麁受は是を外と爲し、細受は是を内と爲す。二種の苦あり、内苦と外苦なり。内苦に二種あり、身苦と心苦となり。身苦とは身痛・頭痛等の四百四種の病にして是を身苦と爲す。心苦とは憂愁・瞋怖・嫉妬・疑、是の如き等にして是を心苦と爲す。二苦の和合せるは是を内苦と爲す。外苦に二種あり、

身念處は、善は應に修すべく、不善及び無記は修すべからず。受心念處も亦是の如し。法念處は有爲の善法は修すべく、不善及び無記、及び數緣盡は修すべからず。垢は當に分別すべし。身念處の隱沒は是れ垢にして、不隱沒は垢に非ず。受心法念處も亦た是の如し。三念處は是れ果にして亦た有果なり。一は當に分別すべし。法念處は或は果にして、果あるに非ず、或は果にして亦た果有り。或は果に非ず。果あるに非ず。數緣盡は是れ果にして、有果に非ず。有爲の法念處は是れ果にして、亦た有果なり。虛空の非數緣盡は是れ果に非ず、果あるに非ず。三は不受なり、一は當に分別すべし。身念處の身數に墮するは是れ受にして、身數に墮せざるは受に非ず。三は四大造に非ず、一は當に分別すべし。身念處の九入、及び二入の少分は四大造にして、一入の少分は四大造に非ず。三念處の有上の一は當に分別すべし。法念處の有爲及び虛空非數緣盡は是れ有上にして、涅槃は是れ無上なり。四念處は若くは有漏にして是れ有、若くは無漏にして是れ有に非ず。二念處は相應因にして、一念處は不相應因、一は當に分別すべし。受念處と心念處とは相應因にして、身念處は不相應因なり。法念處の想衆及び相應行衆は是れ相應因にして、餘殘は是れ不相應因なり。四念處分を六善法を攝し、六善法を亦四念處分に攝す。不善分、無記分も亦た是の如く、種に隨つて相攝す。三漏を一念處分に攝し、一念處分を亦た三漏に攝す。有漏を四念處分に攝し、四念處分を亦た有漏に攝す。無漏を四念處分に攝し、四念處分を亦た無漏に攝す。是の如き等の義は、千難の中に廣く說けり。

問うて曰く、何等をか內身と爲し、何等をか外身と爲すや。內外身の如きは皆な已に攝し盡せり、何を以てか復た內外身觀を說くや。

答へて曰く、內を自身と名け、外を他身と名く。自身に二種あり、一には身內の不淨、二には身外の皮・毛・爪・髮等なり。復次に、行者は死屍の胮脹爛壞を觀じ、是の相を取つて自ら身を觀ず。

四念處あり有漏に非ずとは、無漏の四念處なり。有漏にして四念處に非ずとは、有漏の四念處を除いて、餘殘の有漏法なり。四念處あり亦た有漏なりとは、有漏の四念處なり。四念處に非ず有漏に非ずとは、虛空の數緣盡き、非數緣盡くるなり。或は四念處あり無漏に非ず。或は無漏あり四念處に非ず。或は四念處あり無漏あり。或は四念處に非ず、無漏に非ず。四念處あり無漏に非ずとは、有漏の四念處なり。無漏あり四念處に非ずとは、三無爲法なり。四念處あり亦た無漏なりとは、無漏の四念處なり。四念處に非ず無漏に非ずとは、有漏の四念處を除き、餘殘の有漏法なり。是れ緣念處なり。緣念處の中の一念處は是れ色にして、三念處は色に非ず。三は不可見なり、一は當に分別すべし。身念處に可見あり、不可見あり。可見は一入、不可見は九入及び一入の少分なり。三は無對なり、一は當に分別すべし。身念處の有對は十入、無對は一入の少分なり。身念處の有漏は十入及び一入の少分にして、無漏は一入の少分なり。受念處は有漏、意相應にして是れ有漏、無漏の意相應は是れ無漏なり。心念處も亦た是の如し。法念處は有漏、相衆・行衆は是れ有漏にして、無漏の相衆・行衆及び無爲法は是れ無漏なり。三は是れ有漏なり、一は當に分別すべし。法念處の想衆と行衆は是れ有爲にして、三無爲法は是れ無爲なり。不善の身念處、及び善有漏の身念處は是れ有報にして、無記の身念處と及び無漏は是れ無報なり。受念處、心念處、法念處も亦た是の如し。三は因緣より生ず、一は當に分別すべし。法念處の有爲は因緣より生じ、無爲は因緣より生ぜず。三は三世に攝せられ、一は當に分別すべし。法念處の有爲は是れ三世に攝し、無爲は三世の攝に非ず。一念處は色に攝し、三は名に攝す。一念處は內入に攝せられ、受念處、法念處は外入に攝せらる、一は當に分別すべし。身念處は、或は內入に攝せられ、或は外入に攝せらる。五の內入は是れ內入の攝なり、五の外入、及び一入の少分は是れ外入の攝なり。慧を以て、有漏は是れ斷見にして、無漏は斷見に非ず、有漏は斷ず可く、無漏は斷ず可きに非ざることを知る。修は當に分別すべし。

の故に無色なり不可見にして、無對なり、或は有漏或は無漏なり。有漏は有報、無漏は無報なり、皆な有爲の因緣生にして、三世の攝、名の攝、外入の攝なり。慧を以て、有漏は是れ斷なることを知り、無漏は斷に非ざることを知り、有漏は是れ斷ず可く、無漏は斷ず可きに非ざることを知る。是の修法は是れ無垢なり、是れ果にして亦た有果なり。一切は受法に非ず、四大造に非ず。有上法にして有漏念處なり、是は無漏念處あり。是は皆是れ相應因有るに非ず、四念處は、六種善の中の一種なる行衆善の分に攝し、行衆善の分は四念處を攝す。不善、無記漏の中に相攝せず。或は四念處ありて有漏に非ず。或は有漏にして四念處に非ず。或は四念處あり亦た有漏なり。或は四念處に非ず亦た有漏に非ず。「四念處あり、有漏に非ず」とは、是れ無漏性の四念處なり。「有漏にして四念處に非ず」とは、有漏性の四念處を除き、餘殘の有漏分なり。「四念處にして亦た有漏法」とは、有漏性の四念處なり。「四念處に非ず、有漏法に非ず」とは、無漏性の四念處を除き、餘殘の無漏法なり。無漏の四句も亦た是の如し。　共念處は、是の共念處の中の身業口業、是を色と爲す、餘殘は色に非ず。一切不可見にして皆な無對なり。或は有漏、或は無漏にして皆な有爲なり。有漏の念處は有報、無漏の念處は無報なり。因緣生にして三世の攝なり、身口の業は色に攝せられ、餘殘は名に攝せられ、心意識は内入に攝せられ、餘殘は外入に攝せらる。慧を以て有漏は是れ斷なることを知り、無漏は斷に非ざることを知り、有漏は斷ずべく無漏は斷ず可きに非ることを知る。皆の修法は皆な無垢なり。是れ果にして亦た有果なり。一切は受法に非ず、身口業は是れ四大造にして、餘殘は四大造に非ず、皆な有上法にして有漏の念なり。是に無漏の念處あり、是れは身口業及び心不相應の諸行あるに非ず、是れ相應因に非ず、餘殘は是れ相應因なり。五善分は四念處を攝し、四念處は亦た五善分を攝し、餘殘は相攝せず。不善無記は漏法に攝せず。或は四念處あり有漏に非ず。或は有漏にして四念處に非ず、或は四念處あり亦た有漏なり。或は四念處に非ず亦た有漏に非ず。

等を以て神の相と爲さんと欲すと雖も、是の事は然らず。何となれば出入息等は是れ身相にして、苦樂を受くる等は是れ心相なり、云何んぞ身心を以て神相と爲ん。　復次に、或時は火は自ら能く燒いて人を待たず。但だ名を以ての故に名けて人燒くと爲す。汝が論は負處に墮す。何となれば、神は則ち是れ人なり。人を以て人に喩ふべからざればなり。又復た汝は「各各我心あるが故に、實に我あることを知る。若し但だ身心顚倒あるが故に我を計すとせば、何を以てか他身中に我を起さざるや」と言ふ。汝は有我・無我に於て未だ了せずして、而も「何を以てか他の身中に我を起さざるや」と問へり。自身も他身も皆な我に從つて有なるも、我は亦不可得なり。若しくは色相か、若しくは無色相、若しくは常か無常、有邊か無邊、去者あるか不去者か、知者あるか不知者か、作者あるか不作者か、自在者あるか不自在者か、是の如き等の我相は、皆な不可得なり。上の我聞品の中に說くが如し。是の如き等の種種の因緣により、諸法は和合因緣の生にして、實法あり我あること無しと觀ず。是を法念處と名く。

是の四念處に三種あり。性念處と共念處と緣念處となり。　云何なるを性念處と爲すや。身を觀ずるの智慧は是れ身念處、諸受を觀ずるの智慧は是を受念處と名け、諸心を觀ずる智慧は是を心念處と名け、諸法を觀ずるの智慧は、是を法念處と名け、是を性念處と爲す。　云何なるを共念處と名くるや。　身を觀ずるを首と爲し、因緣生の道の、若しくは有漏、若しくは無漏なる(を觀ず)、是は身念處なり。受を觀じ、心を觀じ、法を觀ずるを首と爲し、因緣生の道の、若しくは有漏、若しくは無漏なる(を觀ず)、是を受心法念處と名け、是を共念處と爲す。　云何なるを緣念處と爲すや。一切の色法、所謂十入及び法入の少分は是を身念處と名け、六種の受、(卽ち)眼觸の受を生じ、耳・鼻・舌・身・意・觸の受を生ずる、是を受念處と名け、六種の識なる、眼・耳・鼻・舌・身・意識、是を心念處と名け、[三]想衆・行衆及び三無爲、是を法念處と名く。是を緣念處と名く。　是の性念處は、智慧性

【三】五衆の中より色・受・識を除けるもの。

念に停らず、生ぜんと欲して異に生じ、滅せんと欲して異に滅す。幻事の如くして、實相は得べからず。是の如き無量の因緣の故に、心の無常なるを知る。是を心念處と名く。

行者思惟すらく、「是の心は誰にか屬し、誰か是の心を使ふ」と、觀じ已るに主あることを見ず。一切の法は因緣和合の故に自在ならず、自在ならざるが故に自性なく、自性なきが故に我なし。若し我なくんば誰か當に是の心を使ふべけん。

問うて曰く、應に我あるべし。何となれば、心は能く身を使ひ、亦た我は能く心を使ふこと有るべし。譬へば國主は將を使ひ、將は兵を使ふが如し。是の如く應に我あつて心を使ひ、心あつて身を使ふべし。そは五欲の樂を受けんが爲の故なり。復次に、各各我心あるが故に、實に我あることを知る。若し但だ身心顚倒あるが故に我を計すならば、何を以ての故に他の身中に我を起さゞるや是の相を以ての故に各各我あるを知る。

答へて曰く、若し心は身を使ひ、我は心を使ふこと有らば、應に更に我を使ふ者あるべきなり。若し更に我を使ふ者あらば、是れ則ち無窮なり。又更に我を使ふ者あらば、則ち兩つの神あらん。若し更に我なしとせば、但だ我が能く心を使ひ、亦た應に但だ心は能く身を使ふべきなり。若し汝心を以て神に屬せば、心を除けば則ち神は知る所なけん。若し知る所なくんば、云何が能く心を使はん。若し神に知るの相あらば、復た何の用ぞ心は爲さん。是を以ての故に、但だ心は是れ識相の故に、自ら能く身を使ひ、神を待たざることを知るなり。火性の能く物を燒くに、人を假らざるが如し。

問うて曰く、火は燒力を有すと雖も、人に非ずんば用ゐず。心は識相ありと雖も、神に非ずんば使はず。

答へて曰く、諸法は相あるが故に有なり。是の神は相なきが故に無なり。汝は氣息の出入、苦樂

が故に住する時なし。若し心一念に住せば、第二の念の時も亦た住すべし。是は、常住たり、滅相あること無けん。佛の說きたまふが如くんば、一切の有爲法の三相の住の中にも亦た滅相あり。若し滅なくんば、是れ有爲相なるべからず。　復次に、若し法が後に滅あるならば、當に初めに已に滅あることを知るべし。譬へば人の新衣を著るが如し、初めて著る日に若し故くならされば、第二日も亦故くなるべからず。是の如くして乃至十歲なるも、應に常に新なるべく、故くなるべからず。而るに實には已に故し。當に知るべし。新と俱に有る、微に故きは覺せず、故き事已に成れば、方に乃ち覺知することを。是を以ての故に、諸法は住時あること無きを知る。云何んぞ心住する時、樂を受くることを得んや。若し住すること無くして、樂を受くとせば、是の事は然らず。是を以ての故に、實に樂を受くる者あること無きを知る。但だ世俗の法は、諸心の相續するを以ての故に、謂つて一相にして樂を受くと爲すのみ。

問うて曰く、云何に一切の有爲法は無常なりと知るべきや。

答へて曰く、我先に已に說けり。今當に更に答ふべし。是の有爲法は一切因緣に屬するが故に無常なり。先に無くして今有るが故に、今有りて後に無きが故に、無常なり。　復次に、無常の相は常に有爲法に隨逐するが故に、有爲法は增損有ること無きが故に、一切の有爲法は相侵刻するが故に無常なり。　復次に、有爲法には、二種の老ありて常に隨逐するが故に（無常なり）。一に將老、二に壞老なり。二種の死ありて、常に逐ふが故に（無常なり）。一には自ら死し、二には他に殺さる。是の故に一切の有爲法は皆な無常なることを知る。有爲法の中に於て、心の無常なるは最も知り易し。佛の說きたまふが如くんば、凡夫人は或時は身の無常を知つて、心の無常を知ること能はず。若し凡夫は身は常ありと言ひ、猶差へば心を以て常となす、是れ大なる惑なり。何となれば、身の住することは十歲二十歲なれど、是の心は日・月・時・頃に、須臾にして過ぎ去り、生滅各異なり、念

應に重かるべく、豈に草木と同じならんや。

答へて曰く、無漏の樂は上妙にして智慧多し。智慧多きが故に能く此の著を離る。有漏の樂の中には愛等の結使多し、愛は著の本たり。實智慧は能く離る。是を以ての故に著せず。　復次に、無漏の智慧は、常に一切の無常を觀ず。無常を觀ずるが故に、愛等の諸の結使を生ぜず。譬へば羊が虎に近けば、好草美水を得と雖も、肥ること能はざるが如し。是の如く諸の聖人は、無漏の樂を受くと雖も、無常空を觀ずるが故に、染著の脂を生ぜず。　復次に、無漏の樂は三三昧十六聖行を離れず、常に衆生相なし。若し衆生相あれば、則ち著心を生ず。是を以ての故に、無漏の樂は復た上妙なりと雖も、而も著を生ぜず。是の如き種種の因緣により、世間の樂受は是れ苦なりと觀ず。苦受を觀ずること箭の如く、不苦不樂受は、無常壞敗の相を觀ず。是の如ければ、則ち、樂受の中に欲著を生ぜず、苦受の中に恚を生ぜず、不苦不樂受の中に愚癡を生ぜず、是を受念處と名く。

行者は思惟すらく、「樂を以ての故に身を貪るも、誰か是の樂を受く」と。思惟し已つて、心に從つて受くることを知る。衆生の心は、狂顚倒の故に、而も此の樂を受く。當に、是の心は無常生滅の相にして、一念も住せず、樂を受く可きものなしと觀ずべし。人は顚倒を以ての故に、受樂を得と謂ふ。何となれば、初めに樂を受けんと欲する時の心は異を生じ、樂生ずる時の心は異なりて、各各相及ばず、云何んぞ心、樂を受くと言はん。過去の心は已に滅せるが故に樂を受けず。未來の心は生ぜざるが故に樂を受けず。現在の心は一念にして住すること疾きが故に樂を受くることを覺せざればなり。

問うて曰く、過去・未來は樂を受くべからず。現在の心は一念住する時、應に樂を受くべし。云何んぞ受けずと言ふや。

答へて曰く、我已に去ること疾きが故に、受樂を覺せずと說けり。　復次に、諸法は無常相なる

行者は是の樂受を觀じ、實を以て之を知れば、樂あること無く、但だ苦のみあり。何となれば樂を實樂に名けなば、顚倒あること無ければなり。一切世間の樂受は皆な顚倒より生じて、實なる者あること無し。　復次に、是の樂受は、樂を求めんと欲すと雖も、能く大苦を得。偈に說くが如し。

『若し人、海に入つて惡風に遭へば、海浪崛起して黑山の如くならん。若し大陣鬪戰の中に入らば、大嶮道、惡山の間を經るべし。豪貴の長者も身を降し屈すれば、小人に親近して色欲を爲す。是の如き種種の大苦事は、皆な樂に著する貪心の爲の故なり。』

是を以ての故に樂受は能く種種の苦を生ずることを知る。　復次に、佛は三種の受に樂受ありと說きたまふと雖も、樂小なきが故に名けて苦と爲す。一斗の蜜は、之を大河に投ずれば、則ち氣味を失ふが如し。

問うて曰く、若し世間の樂は、顚倒の因緣の故に苦ならば、諸の聖人の禪定は無漏の樂を生ず、應に是れ實樂なるべし。何となれば、此樂は愚癡顚倒に從つて有らざるが故なり。此は云何んぞ是れ苦なるや。

答へて曰く、是は苦に非ざるなり。佛は、無常は卽ち是れ苦なりと說きたまふと雖も、有漏法の爲の故に苦と說きたまふ。何となれば、凡夫人は有漏法の中に於て心著す、有漏法は無常にして失壞するを以ての故に苦を生ずればなり。無漏法は心著せざるが故に、無常なりと雖も憂悲苦惱等を生ずること能はざるが故に名けて苦と爲さず。亦た諸使に使はれざるが故なり。　復次に、若し無漏の樂是れ苦ならば、佛は別に道諦を說きたまはざらん、苦諦に攝すればなり。

問うて曰く、二種の樂あり、有漏の樂と無漏の樂となり。有漏の樂は下賤弊惡にして、無漏の樂は上妙なり。何を以ての故に、下賤の樂の中に於て著を生じ、上妙の樂の中にして、而も著を生ぜざるや。上妙の樂の中にては、著を生ずること應に多かるべし。金銀寶物の如きは、貪著すること

樂なれども、久しければ亦た苦と爲るが如し。屈伸・俯仰・視眴・喘息の苦は、常に身に隨ふ。初の受胎・出生より、死に至るまで、樂時あること無し。汝婬欲を受くるを以て樂と爲すが若き、婬病重きが故に外の女色を求め、之を得ること愈多ければ、患の至ること愈重きこと、疥病を患つて火に向ふが如し。揩で灸する當時は少しく樂なれども、大に痛むこと轉た深し。是の如く小樂も、亦た是れ病因緣の故に有るにして是れ實樂に非ず、病無きもの之を觀れば爲に慈愍を生ず。離欲の人が婬欲の者を觀ずるも、亦復た是の如く、此の狂惑の欲火の爲に燒かれ、多く受け多く苦しむことを愍む。是の如き等の種種の因緣により、身の苦相と苦の因とを知る。行者は、身は、但だ是れ不淨・無常・苦なる物と知るも、已むを得ずして之を養育す。譬へば父母の子を生むに、子は復た弊暴なれども、已より生ずるを以ての故に、要らず當に養育し成就すべきが如し。身には實には我なし。何となれば自在ならざるが故なり。譬へば病風の人は、俯・仰・行・來すること能はず。咽塞るを病む者は、語言すること能はざるが如し。是を以ての故に身は自在ならざることを知る。人が物を有して意に隨つて取り用ふるが如く、身は爾ることを得ず。自在ならざるが故に審かに無我を知る。行者は是の身は、是の如く不淨・無常・苦・空・無我なり。是の如き等の無量の過惡ありと思惟す。是の如き等、種種に身を觀ずるは、是を身念處と名く。

　是の身念處觀を得已つて、復た思惟すらく衆生は何の因緣を以ての故に、此の身に貪著するやと。樂受を以ての故なり。所以いかんとなれば、內の六情と外の六塵との和合に從ふが故に、六種の識を生じ、六種の識の中より三種の受を生ず。苦受と樂受と不苦不樂受となり。是の樂受は、一切衆生の欲する所、苦受は一切衆生の欲せざる所、不苦不樂受は、取らず棄てず。偈に說くが如し。

　『若し惡を作す人及び出家、諸天・世人及び蠕動、一切十方五道の中にて、樂を好んで、苦を惡まざるは無し。狂惑・顚倒・無智なるが故なり。涅槃常樂の處を知らず。』

に食はる。一切の死屍の中にて人身は最も不淨なり。不淨の法は九想の中に當に廣く說くべし。偈に說くが如し。

『審諦に此の身を觀ずるに、終は必ず死處に歸し、御し難くして反復すること無く、恩に背くは、小人の如し。』

是を究竟不淨と名く。

復次に、是の身の生ずる時、死する時は身に近づくところの物、身の安かる處は皆な不淨となる。香美の淨水も、百川の流に隨つて、旣に大海に入れば、變じて鹹苦と成るが如し。身の食噉する所の、種種の美味・好色・好香・細滑の上饌も、腹海の中に入れば、變じて不淨と成る。是の身は是の如く、生より終に至るまで、常に不淨あり、甚だ患厭す可し。行者は是の身を思惟するに、復た不淨なりと雖も、少らく常なる者あるが若きも、猶差ひて復た無常なり。復た不淨にして無常なりと雖も、少しく樂しき者あるも、猶差ひて復た大に苦なり。是の身は是れ衆苦の生ずる處なり。水の地より生じ、風の空より出で、火の木に因つて有るが如く、是の身も是の如く、內外の諸苦は皆な身より出づ。內苦を老病死等と名け、外苦を刀杖・寒熱・飢渴等と名く。此の身あるが故に、是の苦あり。

問うて曰く、身は但だ是れ苦性なるのみに非ず、亦た身に從つて樂あり。若し身の意に隨ふもの無からしめば、五欲は誰か當に受くべき者ぞ。

答へて曰く、四聖諦の苦は、聖人は實に是れ苦なりと知る。愚夫は之を謂つて樂と爲す。聖は實にして依る可く、愚は惑にして宜しく棄つべし。是の身は實に苦なり、大苦を止むるを以ての故に、小苦を以て樂と爲す。譬へば死すべき人の、刑罰を命に代ふるを得ば、甚だ大に歡喜するが如し、罰は實には苦と爲すも、死に代るの故を以て、之を謂つて樂と爲す。復次に、新苦を樂と爲し、故苦を苦と爲す。初め坐する時は樂なれども、久しければ則ち苦を生ず。初め行・立・臥するは亦た

云何なるを生處不淨と名くる。頭・足・腹・脊・脇・肌の諸の不淨物の和合せるを、名けて女身と爲し、內に生藏・熟藏・屎尿の不淨あり、外に煩惱、業因緣の風あつて、識種を吹いて、二藏の中間に入らしめ、若しくは八月、若しくは九月、屎坑の中に在るが如し。說くが如くんば、

『是の身を臭穢と爲す、花間より生ぜず、亦、[二]瞻蔔よりぜず、又、寶山より出でず』

是を生處不淨と名く。種子不淨とは、父母は妄想、邪憶の念風を以て婬欲の火を吹くが故に、血髓の膏流れ、熱變じて精と爲り、宿業行の因緣の識種子は、赤白の精の中に在つて住す、是を身種子と名く。偈に說くが如し。

『是の身種は不淨にして、餘の妙寶物に非ず、淨白より生せず、但だ、尿道より出づ』

是を種子不淨と名く。自性不淨とは、足より頂に至るまで、四邊、薄皮にして、其の中に所有の不淨充滿す。飾るに衣服・澡浴・花香を以てし、食するに上饌の衆味の餚饍を以てするも、經宿の間に皆な不淨と爲る。假令衣るに天衣を以てし、食するに天食を以てすとも、身の性を以ての故に、亦た不淨と爲る。何に況んや人の衣食をや、偈に說くが如し。

『地水火風の質は、能く不淨を變除すとして、海を傾けて此の身を淨むとも、香潔ならしむること能はず。』

是を自性不淨と名く。自相不淨とは、是の身の九孔は常に不淨を流す。眼は眵淚を流し、耳は結聹を出し、鼻の中より洟流れ、口は涎吐を出し、厠道水道は常に屎尿を出し、及び諸の毛孔より汗流れて不淨なること、偈に說くが如し。

『種種の不淨の物、身內に充滿し、常に流出して止まず。漏囊に物を盛るが如し。』

是を自相不淨と名く。究竟不淨とは、是の身は若し火に投ずれば則ち灰と爲り、若し蟲食へば則ち屎と爲り、地に在れば則ち腐れ壞れて土と爲り、水に在れば則ち膖脹し、爛壞し、或は水蟲の爲

【二】瞻蔔（Campaka）金色花樹、其花香氣ありて遠く薫ず。

こと、大樹の力能く水を遮るが如し。是の五根増長する時は、能く深法に轉入す、是を名けて力と爲す。力を得已つて道法を分別するに三分あり、擇法覺と精進覺と喜覺となり。此の三法は道を行ずる時、若し心沒すれば、能く除覺・定覺・捨覺を起らしめ、此の三法は、若し道を行ずる時心動散すれば、能く攝して定念覺をして二處に在らしめ、能く善法を集め、能く惡法を遮る。門を守るの人の、有利の者を入らしめ、無益の者を除却するが如し。若し心沒する時は、念の三法起り、若し心散ずる時は、念の三法は無覺・實覺に攝す。此の七事能く到るが故に、名けて分と爲し、是の法を得、安隱に具足し已つて、涅槃無爲の城に入らんと欲するが故に、是の諸法を行ず、是の時を名けて道と爲す。

問うて曰く、何等か是れ四念處なるや。

答へて曰く、身念處と、受と心と法の念處と、是を四念處と爲す。四法四種を觀ず。身は不淨なりと觀じ、受は是れ苦なりと觀じ、心は無常なりと觀じ、法は無我なりと觀ず。是の四法に各四種ありと雖も、身には多く不淨を觀じ、受には多く苦を觀じ、心には多く無常を觀じ、法には多く無我を觀ずべし。何となれば凡夫人は、未だ道に入らざる時、是の四法の中に邪行して、四顚倒を起す。(卽ち)諸の不淨法の中にては淨顚倒を、苦の中にては樂顚倒を、無常の中にては常顚倒を、無我の中にては我顚倒(を起す。)是の四顚倒を破するが故に、是の四念處を說く。淨倒を破するが故に身念處を說き、樂倒を破するが故に受念處を說き、常倒を破するが故に心念處を說き、我倒を破するが故に法念處を說く。是を以ての故に、四を說くことは、少からず、多からず。

問うて曰く、云何にして是の四念處を得るや。

答へて曰く、行者は淨戒に依つて住し、一心に精進を行じて身の五種の不淨相を觀ず。何等か五なる。一には生處不淨、二には種子不淨、三には自性不淨、四には自相不淨、五には究竟不淨なり。

に三十七品を說くを爲したまふ。若し異なれる法道門、十想等を說くも、皆な三十七品の中に攝在す。是の三十七品の衆藥は和合して、一切衆生の病を療ずるに足れり。是の故に多く說くことを用ゐず。佛の如きは無量の力ありと雖も、但だ十力のみを說く。衆生を度するに於て、事足れり。是の三十七品は十法を根本と爲す。何等か十なる。信・戒・思惟・精進・念・定・慧・除・喜・捨なり。信とは信根と信力となり。戒とは正語と正業と正命となり。精進とは四正懃と精進根と精進力と精進覺と正精進となり。念とは念根と念力と念覺と正念となり。定とは四如意足と定根と定力と定覺と正定となり。慧とは、四念處と慧根と慧力と擇法覺と正見となり。是の諸の法念智慧に隨順して緣の中に正住する、是の時を念處と名け、邪法を破り正道の中に行ずるが故に正懃と名け、心を安隱に緣中に於て攝するが故に如意足と名け、軟智を心に得るが故に根利と名け、智を心に得るが故に力と名け、修道の用の故に覺と名け、見道の用の故に道と名く。

問うて曰く、應に先きに道を說くべし。何となれば道を行じて、然して後に諸の善法を得るが故なり。譬へば人の先に道を行きて、然る後に所至の處を得るが如し。今、何を以てか顚倒して先きに四念處を說き、後に八正道を說くや。

答へて曰く、顚倒せざるなり。三十七品は是れ初めて道に入らんと欲する時の名字なり。行者、師の所に到り、道法を聽く時の如し。先きに念を用ゐて是の法を持す、是時を念處と名く。持し已つて、法中より果を求むるが故に、精進を行ず、是時を正懃と名く。多く精進するが故に、心散亂す、心を攝して、調柔ならしむるが故に、如意足と名く。心調柔し已つて五根を生ず。諸法の實相は甚深にして難解なり、信根の故に能く信ずる、是を信根と名く。身命を惜まず、一心に道を求むる、是を精進根と名く。常に佛道を念じて餘事を念ぜざる、是を念根と名く。常に心を攝して道に在る、是を定根と名く。四諦の實相を觀ずる、是を慧根と名く。是の五根增長して、能く煩惱を遮る

菩薩摩訶薩は是實相を得るが故に、世間を厭はず、涅槃を樂はず。三十七品は是れ實智の地なり。

問うて曰く、四念處は則ち能く具足せば道を得とせば、何を以てか三十七を說くや。若し汝「略說するを以ての故に四念處にして、廣說するが故に三十七なり」と云はば、此は則ち然らず。何となれば若し廣くせば應に無量となるべきが故なり。

答へて曰く、四念處は具足すれば能く道を得と雖も、亦た應に四正勤等の諸法を說くべし。何となれば衆生の心は種種不同にして、結使も亦た種種にして、樂ふ所を解する所の法も、亦た種種なればなり。佛法は一實一相なりと雖も、衆生の爲の故に十二部經、八萬四千の法聚に於て、是の分別說を作す。若し爾らずんば初轉法輪に四諦を說けば則ち足る、餘法を須ゐず。衆生の苦を厭ひ樂に著する有るを以て、是の衆生の爲に四諦を說きて、「身心等の諸法は、皆なこれ苦にして、樂あること無し。是の苦の因緣は愛等の諸の煩惱に由る。是の苦の盡されたる處を涅槃と名け、方便して涅槃に至る、是を名けて道と爲す」とす。衆生あり、多念・亂心・顚倒の故に、此の身・受・心・法の中に著して邪行を作す。是人の爲の故に四念處を說く。是の如き等の諸の道法は、各各衆生の爲に說くなり。譬へば藥師は一藥を以て衆病を治することを得ず。衆病同じからざれば、藥も亦た一ならざるが如し。佛も亦た是の如く、衆生の心病の種々なるに隨つて、衆藥を以て之を治し、或は一法を說いて衆生を度したまふこと。佛、一比丘に告たまふが如し。「汝の物に非れば取ること莫れ」と。比丘言く、「知り已れり世尊よ」と。佛の言はく、「云何にか知る」と。比丘言く、「諸法は我が物に非ず、取るべからず」と。或は二法を以て衆生を度す、定と及び慧となり。或は三法を以てす、戒と定と慧となり。或は四法を以てす、四念處なり。是の故に四念處もて道を得べしと雖も、餘法の行異なり、分別多少異なれば、觀も亦た異なる。是を以ての故に應に四正勤等の諸の餘法を說くべし。

復次に、諸の菩薩摩訶薩は、信力大なるが故に、一切衆生を度せんが爲の故に、是中に佛は一時

し。是を以ての故に（三十七品は）菩薩の道に非ざることを知る。

答へて曰く、菩薩は久しく生死の中に住すと雖も、亦應に實道と非實道、是は世間是は涅槃と知るべし。是を知り已つて大願を立て、「衆生は愍むべし、我當に拔出して無爲處に著くべし」と。是の實法を以て、諸の波羅蜜を行じ、能く佛道に到る。菩薩は學すと雖も、是の法を知ると雖も、未だ六波羅蜜を具足せざるが故に、證を取らず。佛の說きたまふが如し。「譬へば仰いで空中を射るに箭箭相拄へて、地に落ちしめざるが如し」と。菩薩摩訶薩も亦た是の如く、般若波羅蜜の箭を以て、三解脫門の空中を射、復た方便の箭を以て、般若の箭を射て、涅槃の地に墮ちざらしむ。

復次に、若し汝が說く所の如く、菩薩は久しく生死の中に住し應に種種の身心の苦惱を受くべしとせば、若し實智を得ずんば、云何にしてか能く是の事を忍ばん。是を以ての故に菩薩摩訶薩は是の道品の實智を求むる時、般若波羅蜜の力を以ての故に、能く世間を轉じて道果の涅槃と爲す。何となれば三界の世間は皆和合より生ず。和合より生ずる者は自性あること無し。自性なきが故に是れ則ち空と爲す。空の故に取る可らず、取る可らざるの相は是れ涅槃なればなり。是を以ての故に菩薩摩訶薩は不住の法を以て般若波羅蜜の中に住し、不生の故に應に四念處を具足すべしと說く。

復次に、聲聞辟支佛の法の中には、世間は卽ち是れ涅槃なりと說かず。何となれば智慧深く諸法に入らざるを以ての故なり。菩薩の法の中には、世間は卽ち是れ涅槃なりと說く。智慧深く諸法に入るが故なり。佛、須菩提に、「色は卽ち是れ空なり、空は卽ち是れ色なり。受・想・行・識は卽ち是れ空なり、空は卽ち是れ受・想・行・識なり、空は卽ち是れ涅槃なり。涅槃は卽ち是れ空なり」と告げたまへるが如し。中論の中に亦た說く。

『[一]涅槃は世間と異ならず、世間は涅槃と異ならず、涅槃の際と世間の際とは、一際にして異なり有ること無きが故に。』

【一】中論。觀涅槃品第二十偈「涅槃之實際、及與世間際、如是二際者、無毫釐差別」に相當するが如し。

卷の第十九

初品第三十一……三十七品

【經】菩薩摩訶薩は、不住の法を以て、般若波羅蜜の中に住し、不生の故に應に四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八聖道分を具足すべし。

【論】問うて曰く、三十七品は是れ聲聞辟支佛の道なり。六波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の道なり。何を以ての故に菩薩道の中に於て、聲聞法を說くや。

答へて曰く、菩薩摩訶薩は、應に一切の善法、一切の道を學すべし。佛、須菩提に告げたまふが如し。「菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずるに、悉く一切の善法と一切の道とを學す。謂ゆる乾慧地乃至佛地なり」。是九地は應に學して而も證を取らざるべし。佛地は亦た學し亦た證す。

復次に、何の處にか三十七品は、但だ是れ聲聞、辟支佛の法にして、菩薩の道に非ずと說くや。是の般若波羅蜜摩訶衍品の中に、佛は四念處乃至八聖道分を說きたまひ、是の摩訶衍三藏の中にも亦三十七品は獨り是れ小乘の法なりと說かず。佛は大慈を以ての故に三十七品の涅槃の道を說きたまふ。衆生の願に隨ひ、衆生の因緣に隨つて、各其の道を得。聲聞を求めんと欲する人は聲聞の道を得、辟支佛の善根を種うる人は辟支佛道を得、佛道を求むる者は佛道を得。其の本願と諸根の利鈍に隨つて大悲あり、(或は) 大悲なし。譬へば龍王の雨を降らすに普ねく天下に雨らし、雨に差別なきも、大樹大草は根大なるが故に多く受け、小樹小草は根小なるが故に少しく受くるが如し。

問うて曰く、三十七品は處としては、獨り是れ聲聞辟支佛道にして、菩薩の道に非ずと說くこと無しと雖も、義を以て之を推すに、菩薩は生死に久しく住して、五道に往來し、疾かに涅槃を取らず。是の三十七品は、但だ涅槃の法のみを說きて、波羅蜜を說かず、亦た大悲を說かざることを知るべ

善根を增益すること無きには非ず。凡夫の人の如きは、世間の法を分別するが故に所得あり。諸の善功德も亦た是の如し。世間の心に隨ふが故に所得ありと說けども、諸佛の心中には則ち所得なし。是く略して、般若波羅蜜の義を說けり。後に當に廣く說くべし。

六波羅蜜多を說く。一人の爲に非ざるが故なり。

復次に、若し菩薩、一切法を行ぜざれば、一切法を得ざるが故に、般若波羅蜜を得。所以いかんとなれば諸行は皆虛妄にして實ならざるを以てなり。

或は近く過あり、或は遠く過あり、不善法の如きは近く過罪あり。善法は久しうして後變異ある時、著者は能く憂苦を生ず、是れ遠く過罪あるなり。譬へば美食惡食の倶に毒を雜うるが如し。惡食を食すれば卽時に悅ばず、美食を食すれば卽時には甘悅なれども、久しうして後倶に命を奪ふ。故に二つながら食すべからず。善惡の諸行も亦復た是の如し。

問うて曰く、若し爾らば佛は何を以てか、三行卽ち梵行・天行・聖行を說きたまひしや。

答へて曰く、無行を行ずるが故に名けて聖行と爲す。何となれば一切聖行の中にては、[九]三解脫門を離れざるが故なり。梵行・天行は中にては衆生の相を取るに因るが故に生ず。行ずる時は過なしと雖も、後には皆失あり。又、卽今實を求むるも、皆是れ虛妄なり。若し賢聖が、無著の心を以て、此の二行を行ずれば則ち咎なし。若し能く是の如く、無行の法を行ずれば、皆無所得なり。顚倒せる虛妄の煩惱の、畢竟して不生なること、虛空の淸淨なるが如きが故に、諸法の實相を得るに、無所得を以て得と爲す。無所得とは、般若の中に說くが如し。色等の法は空ずるを以ての故に空なるに非らず、本より已來、常に自ら空なり。色等の法は、智慧を以て及ばざるが故に無所得なるにあらず。本より已來常に自ら無所得なり。是の故に幾の波羅蜜を行ずれば、般若波羅蜜を得るかと問ふべからず。諸佛は衆生を憐愍して、俗に隨ふが故に、行を說きたまふも、第一義には非ず。

問うて曰く、若し所得なく、所行なくんば、行者は何を以てか之を求むるや。

答へて曰く、無所得は二種あり。一には世間の欲にして求むる所あれども意の如くならず、是れ無所得なり。二には諸法實相の中に、決定相は不可得なるが故に無所得と名く。福德智慧あつて、

[九] 三解脫門。空、無相、無願の三三昧。

へば囚が杖楚を畏れて、死苦に就くが如し。是の因縁を以ての故に、當に法忍を生ずべし。打者、罵者あること無く、亦た受者もなし。但だ先世の顚倒の果報の、因縁に從るが故に、名けて受くと爲す。是の時是の忍事と忍とを分別せず。法忍とは、深く畢竟空に入るが故に是を法忍と名く。是の法忍を得れば、常に復た衆生を瞋惱せず。法忍に相應するの慧は、是れ般若波羅蜜なり。精進して常に一切の善法の中に在つて、能く一切の善法を成就す。若し智慧もて諸法を籌量し分別し法性に通達すれば、是の時精進は智慧を助成す。又精進の實相は、身心を離れ、如實に不動なりと知る。是の如きの精進は能く般若波羅蜜を生ず。餘の精進は幻の如く夢の如く、虛誑にして實に非ず。是の故に說かず。若し深心に念を攝すれば、能く如實に諸法の實相を見る。諸法の實相を見る。諸法の實相とは、見聞念知を以て能く得べからず。何となれば六情六塵は、皆是れ虛誑の因緣果報なり。是の中に知る所見る所は、皆亦た虛誑にして、是の虛誑の知は都て信ず可らざればなり。信ず可き所の者は、唯諸佛が阿僧祇劫に於て得る所の實相の智慧あるのみ。是の智慧を以て、禪定に依つて一心に諸法の實相を觀ず。是を禪定の中に般若波羅蜜を生ずと名く。或は五波羅蜜を離れ、但聞き讀誦し、思惟し籌量して諸法の實相に通達し、是の方便智の中より般若波羅蜜を生ずる有り。或は二の、或は三四の波羅蜜より般若波羅蜜を生ず。一諦を說くを聞いて而も道果を成じ、或は二三四諦を聞いて而して道果を得るが如し。人あり、苦諦に於て多く惑ふが故に、爲に苦諦を說けば道を得。餘の三諦も亦是の如し。或は都て四諦に惑ふもの有るが故に、爲に四諦を說きて道を得。佛の比丘に語りたまふが如し。「汝若し能く貪欲を斷ぜば、我汝が阿那含道を得ることを保(證)せん」と。若し貪欲を斷ぜば、當に知るべし。恚癡も亦斷ずることを。六波羅蜜の中も亦是の如し。多く慳貪を破せんが爲の故に、布施の法を說くも、當に餘惡も亦破することを知るべし。雜惡を破せんが爲の故に、具さに爲に六を說く。是の故に或は一一に行じ、合して行じ、普ねく一切の人の爲の故に

辱も亦た難しと爲さず。是を以ての故に上の三度の中に精進を說かず。今は般若波羅蜜の實相の爲に、心より定を求む。是の事は難きが故に、應に須らく精進すべし。是の如く行ずれば能く般若波羅蜜を得るなり。

問うて曰く、要ず五波羅蜜を行じて、然る後に般若波羅蜜を得るや、亦は一二の波羅蜜を行ずること有つて般若波羅蜜を得るや。

答へて曰く、諸の波羅蜜に二種あり。一には一波羅蜜の中に、相應し隨行して諸の波羅蜜を具し二には時に隨つて別に波羅蜜を行じ、多き者名を受く。譬へば四大共に合して相離れずと雖も、多き者を以て名と爲すが如し。相應し隨行するとは、一波羅蜜の中に五波羅蜜を具するなり。是は五波羅蜜を離れずして、般若波羅蜜を得。時に隨つて名を得るとは、或は一に因り、二に因つて、般若波羅蜜を得るなり。若し人阿耨多羅三藐三菩提の心を發して布施せんに、是の時布施の相を求めば、一ならず異ならず、常に非ず無常に非ず、有に非ず無に非さる等なり。「布施を破する」中に、說くが如く、布施に因つて實相を解す。一切の法も亦た是の如し。是を布施に因つて、般若波羅蜜を得と名く。或は戒を持ち、衆生を惱まさず、心に悔いあること無きものあるも、若し相を取りて著を生ぜば、則ち諍競を起す。是の人は先に衆生を瞋らずと雖も、法に於て憎愛の心あるが故に而も衆生を瞋る。是の故に若し衆生を惱まさざらんと欲せば、當に諸法の平等を行ずべし。若し、是れは罪、是れは罪無しと分別すれば、則ち尸羅波羅蜜を行ずるに非ず。何となれば罪を憎んで、不罪を愛すれば、心則ち自ら高うして、還つて衆生を惱ます道の中に墮すればなり。是の故に菩薩は罪者と不罪者とを觀じて心に憎愛なし。是の如く觀ずる者は、是を但だ尸羅波羅蜜を行じて、般若波羅蜜を得と爲す。菩薩は是の念を作さく、「若し法忍を得されば、則ち常に忍ぶこと能はず」と。一切衆生は、未だ逼迫して能く忍ぶことあらず。苦來つて已に切なれば、則ち忍ぶこと能はず。譬

すべし」と。布施等の五波羅蜜を行じ、財施の因縁の故に大富を得、法施の因縁の故に大智慧を得。能く此の二施を以て、貧窮の衆生を引導して、三乘道に入らしむ。持戒の因縁を以ての故に、人天の尊貴に生れ、自ら三惡道を脫し、亦た衆生をして三惡道を免れしむ。忍辱の因縁を以ての故に、瞋恚の毒を障へ、身色端正威德第一なることを得、見る者歡喜し敬信し心伏す。況んや復た說法するをや。精進の因縁を以ての故に、能く今世後世の福德、道法の懈怠を破して、金剛身不動心を得。是身心を以て凡夫の憍慢を破り、涅槃を得せしむ。禪定の因縁を以ての故に散亂の心を破し、五欲の罪を離れ、樂んで能く衆生の爲に離欲の法を說く。禪は是れ般若波羅蜜の依止處なり。是の禪に依て、般若波羅蜜は自然に生ず。經の中に「比丘は、一心に定を專らにして、能く諸法の實相を觀ず」と說くが如し。

　復次に、欲界の中には、多く慳・貪の罪業を以て、諸の善門を閉づることを知つて、檀波羅蜜を行ずる時、是の二事を破して、諸の善門を開き、常に開かしめんと欲するが故に十善道を行ず。尸羅波羅蜜は、未だ禪定の智慧を得ざれば、未だ欲を離れざるが故に、尸羅波羅蜜を破る。是を以ての故に忍辱を行じ、上の三事の能く福門を開くことを知り、又是の福德の果報は無常にして、天人の中に樂を受くるも、還たび復た苦に墮することを知り、是の無常の福德を厭ふが故に、實相の般若波羅蜜を求む。是れは云何にしてか當に得べき。必ず一心を以て乃ち當に得べし。龍王の寶珠を貫くに、一心に觀察して能く龍に觸れざれば、則ち價直閻浮提なるを得るが如し。一心に禪定すれば、五欲五蓋を除却す。心の樂を得んと欲せば、大に精進を用ゆ。是故に忍辱に次いで、精進波羅蜜を說く、經の中に說くが如し。行者端身直坐して、念を繫けて前に在り、專精にして定を求め、正に肌骨をして枯朽せしむるも、終に退かざるべし」。是の故に精進して禪を修す。若し財あつて施すは、難しと爲すに足らず。惡道に墮することを畏れ、好名を失することを恐るればなり、持戒・忍

りと雖も、無常、苦、空、無我を以て、諸法の實相を觀じ、智慧具足せず、利ならざるを以て、一切衆生の爲にすること能はず、佛法を得んが爲にせざるが故に、實智慧ありと雖も、般若波羅蜜と名けず。說くが如くんば、佛は諸の三昧に入出したまへども、舍利弗等は乃至其名だも聞かず、何に況んや能く知ることをや。何となれば、諸の阿羅漢辟支佛には、初發心の時、大願なく、大慈大悲なく、一切の諸の功德を求めず、一切三世十方の佛を供養したてまつらず、審諦に諸法の實相を知ることを求めず但、但だ老病死苦を脫するを求めんと欲するのみなるが故なり。諸の菩薩は初發心より弘く大に誓願し、大慈悲あつて一切の諸の功德を求め、一切の三世十方の諸佛を供養し、大利智あつて諸法の實相を求め、種種の諸觀謂ゆる淨觀と不淨觀と、常觀と無常觀と、樂觀と苦觀と、空觀と實觀と、我觀と無我觀を除く。是の如き等の妄見の心力の諸觀を捨て、但だ外緣の中の實相の淨に非ず不淨に非ず。常に非ず非常に非ず、樂に非ず苦に非ず、空に非ず實に非ず、我に非ず無我に非ざるを觀ず。是の如き等の諸觀に不著不得なり。世俗の法の故に、第一義に非ず。周遍淸淨にして不破・不壞なる。諸の聖人の行處は、是を般若波羅蜜と名く。

問うて曰く、已に般若の體相は是れ無相無得の法なることを知れり。行者は云何にして能く是の法を得るや。

答へて曰く、佛は、方便を以て法を說きたまふ。行者は、所說の如く行ずれば則ち得るなり。譬へば絕崖嶮道は、假に梯して能く上るが如く、又深水は船に因つて渡ることを得るが如く、初發心の菩薩は、若しくは佛從り聞き、若しくは弟子從り聞き、若しくは經の中に於て聞く。「一切の法は、畢竟空にして、決定の性の、取る可く著す可き有ること無し。第一の實法は諸の戲論を滅し、涅槃の相は是れ最も安隱なり。我は一切衆生を度脫せんと欲す。云何んが獨り涅槃を取らんや。我は今福德・智慧・神通力を未だ具足せざるが故に、衆生を引導すること能はず、當に是の諸の因緣を具足

復た十一助聖道の法を知り、復た十二因緣の法を知る。復た十三出法、十四變化心、十五心見諦道、十六安那般那行、十七聖行、十八不共法、十九離を地知る。思惟道の中に、一百六十二道あり、思惟道は能く煩惱の賊を破る。百七十八の沙門果あり。八十九は有爲果にして、八十九は無爲果なり。是の如き等の種種無量の異相の法の、生滅、增減、得失、垢淨、悉く能く之を知る。菩薩摩訶薩は、是の諸法を知り已つて、能く諸法をして自性空に入らしめ、而も諸法に於て著する所なく、聲聞、辟支佛地を過ぎて菩薩位の中に入り、菩薩位の中に入り已つて、大悲憐愍を以ての故に、方便力を以て諸法の種種の名字を分別し、衆生を度して三乘を得せしむ。譬へば工巧が金人の藥力を以ての故に、能く銀を變じて金と爲し、金を變じて銀と爲らしむるが如し。

問うて曰く、若し諸の法性眞空ならば、云何んぞ諸法の種種の名字を分別し、何を以てか但だ眞空の性のみを說かざる。

答へて曰く、菩薩摩訶薩は、空は是れ可得、可著と說かず。若し可得、可著ならば、諸法の種種の異相を說くべからず。不可得の空は、罣礙する所なし。若し罣礙あらば、是を可得と爲す、不可得の空に非ず。菩薩摩訶薩の若きは、不可得の空を知つて、還つて能く諸法を分別し、衆生を憐愍し度脫す、是れ般若波羅蜜の力と爲す。要を取つて之を言へば、諸法の實相は、是れ般若波羅蜜なり。

問うて曰く、一切の世俗の經書、及び九十六種の出家の經の中に、皆諸法實相ありと說く。又、聲聞法の三藏の中にも亦た諸法實相あり。何を以てか名けて般若波羅蜜と爲さず、而も此の經の中の諸法實相のみを、獨り般若波羅蜜と名くるや。

答へて曰く、世俗の經書の中は、國を安んじ、家を全うし、身命の壽樂の爲の故なれば、實に非ず。外道の出家は邪見の法の中に墮し、心愛著するが故に、是も亦た實に非ず、聲聞法の中に四諦あ

滿足せざるの名也」となり。三乘あり、佛乘と辟支迦佛乘と聲聞乘となり。三歸依あり、佛と法と僧となり。三住あり、梵住と天住と聖住となり。三增上あり、自增上と他增上と法增上となり。諸佛の三不護あり、身業不護と口業不護と意業不護となり。三福處あり、施と戒と善心となり。三器杖あり、聞器杖と離欲器杖と慧器杖となり。三輪あり、變化輪と示他心輪と敎化輪となり。三解脫門あり、空解脫門と無相解脫門と無作解脫門となり、是の如き等の無量の三法門あり。

復た四法を知る。四念處、四正勤、四如意足、四聖諦、四聖種、四沙門果、四知、四信、四道、四攝法、四依、四通達善根、四道、四天人輪、四堅法、四無所畏、四無量心なり。是の如き等の無量の四法門あり。

復た五無學衆、五出性、五解脫處、五根、五力、五大施、五智、五阿那含、五淨居天處、五治道、五智三昧、五聖分支三昧、五如法語道、是の如き等の無量の五法門あることを知る。

復た六捨法、六愛敬法、六神通、六種阿羅漢、六地見諦道、六隨順念、六三昧、六定、六波羅蜜、是の如き等の無量の六法門あることを知る。

復た七覺意、七財、七依止、七想定、七妙法、七知、七善人去處、七淨、七財福、七非財福、七助定法、是の如き等の無量の七法門あることを知る。

復た八聖道分、八背捨、八勝處、八大人念、八種精進、八丈夫、八阿羅漢力、是の如き等の無量の八法門あることを知る。

復た九次第定、九名色等滅「名色より生死に至り九を爲す」、九無漏智「盡智を得るが故に等智を除く也」九無漏地「六禪と三無色」、九地思惟道、是の如き等の無量の九法門あることを知る。

復た十無學法、十想、十智、十一切入、十善(十)大地佛、十力、是の如き等の無量の十法門あることを知る。

無ければ、則ち一切法の相を破す可らず。何となれば無相無きが故なり。若し是の無相有らば、則ち一切法は無相なりと言ふべからず。

答へて曰く、無相を以て諸の法相を破す。若し無相の相あらば、則ち諸の法相中に墮す。若し諸法の相の中に入らずんば、則ち無相を難ずべからず、皆諸法の相を破するも亦た自ら相を滅す。譬へば火を前むる木の如し。諸の薪を然し已れば、亦復た自らも然ゆ。是の故に聖人は無相を行ず。無相三昧は無相を破するが故なり。

復次に、菩薩は、一切の法は不合・不散・無色・無形・無對・無示・無說の一相なりと觀ず。所謂無相なり。是の如き等諸法は一相なり。

云何にしてか種種相を觀じて、一切法を二法の中に攝入せん。所謂名と色、色と無色、可見と不可見、有對と無對、有漏と無漏、有爲と無爲等、二百二の法門は、千難品の中に說くが如し。復次に、二法あり、忍辱と柔和となり。又二法あり、親敬と供養となり。二施あり、財施と法施となり。二力あり、慧分別力と修道力となり。二具足あり、戒具足と正見具足となり。二相あり、質直相と柔軟相となり。二法あり、定と智となり。二法あり、明と解脫となり。二法あり、世間法と第一義法となり。二法あり、念と巧慧となり。二諦あり、世諦と第一義諦となり。二解脫あり、待時解脫と不壞心解脫となり。二種の涅槃あり、有餘涅槃と無餘涅槃となり。二究竟あり、事究竟と願究竟となり。二見あり、知見と斷見となり。二具足あり、義具足と語具足となり。二法あり、少欲と知足となり。二法あり、易養と易滿となり。二法あり、法隨と法行となり。二智あり、盡智と無生智となり。是の如き等の無量の二法門あり。

復次に、知る。三道あり、見道と修道と無學道となり。三性あり、斷性と離性と滅性となり。三修あり、戒修と定修と慧修となり。三菩提あり、佛菩提と辟支迦佛菩提と聲聞菩提〔更に復た學智

る。地若し此の四法と異なるならば、應に更に異根異識あつて知るべきなり。若し更に異根異識の知る無くんば、則ち地あることなけん。

問うて曰く、若し上に地相を說けるに失あらば、應に阿毘曇の如くに、地相を說くべし。地を四大の造る色と名く。但だ地種は此れ堅相にして、地は是れ可見の色なり。

答へて曰く、若し地は但だ是れ色なりとせば。先に已に(その)失を說けり。又地を堅相と爲すは、但だ眼見の色ならば、水中の月、鏡中の像、草木の影の如きは則ち堅相なし。堅相は身根が觸れて知るが故なり。

復次に、若し眼見の色は、是れ地の堅相ならば、是の地種も、眼見の色なるべし。亦是の水火の濕熱の相は、是れ水火の種なるべし。若し爾らば風と風種とを、亦應に分別すべし、而も分別せず。說くが如くんば、何等か是れ風と風種なる、何等か風種と風なる、若し是れ一物ならば、二種と作すべからず。　答ふ、若し是れ異ならずんば、地及び地種も異なるべからず。

問うて曰く、是の四大は各各相離れず。地中に四種あり、水火風の各にも四種あり、但だ地中には地多きが故に、地を以て名と爲す。水火風も亦た爾なり。

答へて曰く、然らず。何を以ての故に、若し火中に四大あらば、應に都て是れ熱すべし、熱せざる火はなきが故なり。若し三大、火中に在つて熱せざれば、卽ち名けて火と爲さず。若し熱すれば則ち自性を捨て、皆名けて火と爲す。若し細なるが故に知る可らずと謂はゞ、則ち無と異なること無し。若し麁にして得べきもの有らば、則ち細あることを知る。若し麁なければ亦た細もなし。是の如き種種の因緣もて、地相は不可得なり。若し地の相不可得ならば。一切法の相も亦た不可得なり。是の故に一切の法は皆一相なり。

問うて曰く、無相と言ふべからず、何となれば諸法に於て無相ならば卽ち是れ相なり。若し無相

復次に、一切の諸法は所因無きが故に有なり。人身の無常なるが如し、生滅すればなり。生滅に因るが故に無常を知る。此の因には復た應に因あるべし。是の如くんば則ち無窮なり。若し無窮なれば則ち因なし。若し是の因、更に因なければ、是れ無常なり。因も亦た因に非ず。是の如き等にして一切は無因なり。

復次に、菩薩は一切法を有相なりと觀ず。法として無相なる者あることなし。地は堅重の相、水は冷濕の相、火は熱照の相、風は輕動の相、虛空は容受の相あり、分別・覺知は是れ識相と爲し、此にあり彼にあるは是れ方相と爲し、久しきあり近きあるは、是れ時相と爲す。濁惡心の衆生を惱ますは、是を罪相と爲し、淨善心の衆生は愍むは、是を福相と爲す。諸法に著するは是を縛相と爲し諸法に著せざるは是を解脫相と爲す。現前に一切法の無礙なるを知るは是を佛相と爲す。是の如き等、一切に各各相有り。

復次に、菩薩は一切の法は皆な無相なりと觀ず。是の諸相は、因緣の和合より生じ、自性なきが故に無なり。地の如きは、色香味觸の四法和合するが故に地と名け、但だ色の故に地と名けず。亦た但だ香、但だ味、但だ觸の故に名けて地と爲さず。何となれば若し但だ色是れ地ならば、餘の三は則ち是れ地なるべからず。地には即ち香味觸なきことなるが故なり、香味觸も亦た是の如し。

復次に、是の四法を云何んぞ一法と爲さん。一法を云何んぞ四法と爲さん。是を以ての故に、四を以て地と爲すことを得ず、亦四を離れて地と爲すことを得ず。

問うて曰く、我は四を以て地と爲さず、但だ四法に因るが故に地法生ず、此の地は四法の中に在て住するなり。

答へて曰く、若し四法より地を生ずとせば、地は四法と異なる。父母の子を生ずるに、子は則ち父母と異なるが如し。若し爾りとせば、今眼に色を見、鼻に香を知り、舌に味を知り、身に觸を知

れ般若波羅蜜の力、一切の法に於て罣礙する所なければなり。若し般若波羅蜜の法を得ずして、阿毘曇門に入れば則ち有の中に墮し、若し空門に入れば則ち無の中に墮し、若し蜫勒門に入れば則ち有無の中に墮す。

復次に、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じて、諸法の一相なるを知ると雖も、亦た能く一切法の種種相を知る。諸法の種種相を知ると雖も、亦た能く一切法の一相なるを知る。菩薩の是の如きの智慧を名けて般若波羅蜜と爲す。

問うて曰く、菩薩摩訶薩は、云何に一切法の種種相を知り、云何に一切法の一相なるを知るや。答へて曰く、菩薩は諸法の相を觀ずとは、所謂有相なり、是の有に因つて諸法の中に有心生ず。是の如き等にして一切は有なり。

問うて曰く、無法の中に、云何にして有心を生ずるや。

答へて曰く、若し無と言はゞ、是の事は卽ち是れ有法なり。

復次に、菩薩は一切法の一相なるを觀ずとは、所謂無相なり。牛の中には羊の相なく、羊の中には牛の相なきが如し。是の如き等にして諸法の中には、各各他相なし。先に有に因るが故に、有心生ずと言ふが如きも、是の法は有に異なる、異なるが故に應に無なるべし。若し有法是れ牛ならば羊も亦た應に是れ牛なるべし。何となれば、有法は異らざればなり。若し異れば則ち無なり、是の如き等にして一切は皆無なり。

復次に、菩薩は一切の法は一なりと觀ず。是の一の法に因つて、諸法の中に一心生ず。諸法は各各一相あり、衆くの一を合するが故に名けて二と爲し、三と爲す。一を實と爲し、二三を虛と爲す。

復次に、菩薩は、諸法は所因有るが故に有なりと觀ず。人身の無常なるが如し、何となれば生滅の相なるが故なり。一切の法は皆是の如く。所因あるが故に有なり。

ぜず、一切の結使も生處に復た生ぜざるなり。譬へば虚空は煙火も染むる能はず、大雨も濕す能はざるが如し。是の如く空を觀ずれば、種種の煩惱は復た其心に著せず。

復次に、邪見の人は所有なしと言ふも、愛の因緣より出でず。眞空の名は愛の因緣より生ず。是を異れりと爲す。四無量心・諸の淸淨の法は所緣實ならざるを以ての故に、猶尙ほ眞空の智慧と等しからず、何に況んや此の邪見をや。

復次に、是の見を名けて邪見と爲し、眞空の見を名けて正見と爲す。邪見を行ずる人は、今世には弊惡の人と爲り、後世には當に地獄に入るべし。眞空の智慧を行ずる人は、今世には譽を致し、後世には佛と作ることを得。譬へば水火の異なるが如く、亦甘露と毒藥、天食[八]須陀を以て臭糞に比するが如し。

復次に、眞空の中には空空三昧あり。邪見の空は、空ありと雖も而も空空三昧なし。

復次に、眞空を觀ずる人は、先に無量の布施・持戒・禪定あり。其の心柔軟にして諸の結使薄く、然して後眞空を得。邪見の中には此の事なく、唯だ憶想分別の邪心を以て空を取らんと欲す。譬へば田舍人の如きは初め鹽を識らず、貴人の鹽を以て種種の肉菜の中に著けて食するを見て、問うて言く、「何を以ての故に爾るや」と。語つて言く、「此の鹽は能く諸物の味をして美ならしむるが故に」と。此の人便ち念ずらく、「此の鹽は能く諸物をして美ならしむ。（鹽）自らの味は必ず多からん」と。便ち空しく鹽を抄つて、口に滿てて之を食するに、鹹苦にして口を傷む。問うて言く、「汝は何を以てか、鹽は能く美を作すと言ふや」と。貴人言く、「癡人よ。此れは當に多少を籌量して、之に和して美ならしむ。云何んぞ純ら鹽を食するや」と。無智の人は、空解脫門を聞いて、諸の功德を行ぜず。但だ空を得んと欲す。是れ邪見と爲す。諸の善根を斷ず。是の如き等の義を名けて空門と爲す。若し人此の三門に入れば、則ち佛法の義を知つて相違背せず。能く是の事を知るは、卽ち是

【八】須陀（Sudhā）天の甘露味。

して身の內外に有する所の自相は、皆空なるを觀ずるを知らざるなり。是を以て異れりと爲す。
復次に、邪見の人は、多く衆惡を行じて、諸の善事を斷ず。空を觀ずるの人は、善法すら尙ほ作すことを欲せず、何に況んや惡を作すことをや。
問うて曰く、邪見に二種あり。有は因を破り果を破り、有は果を破りて因を破らず。汝が說く所の如きは、果を破つて因を破らず。果を破り因を破るとは、因なく緣なく罪なく福なしと言ふ。則ち是れ因を破するものなり。今世・後世に罪福の報なしとするは、是れ則ち果を破するものなり。空を觀ずるの人は皆空なりと言ふ、則ち罪福も因果も皆無なり。此と何等の異りか有らん。
答へて曰く、邪見の人は諸法に於て斷滅して空ならしめ、摩訶衍の人は諸法は眞空にして破れず壞せざることを知る。
問うて曰く、是の邪見に三種あり。一には罪福の報を破して罪福を破せず、因緣の果報を破して因緣を破せず、後世を破して今世を破せず。二には罪福の報を破して亦た罪福をも破し、因緣の果報を破して亦た因緣をも破し、後世を破して亦た今世をも破し、一切法は破せず。三には一切法を破して皆所有なからしむ。空を觀ずる人も、亦た眞空にして所有なしと言ふ。第三の邪見人と何等の異なること有りや。
答へて曰く、邪見は諸法を破して空ならしむ。空を觀ずる人は、諸法の眞空にして、破れず壞せざることを知る。
復次に、邪見の人は、諸法皆空にして所有なしと言つて、諸法の空相を取つて戲論すれども、觀空の人は諸法の空を知つて、相を取らず、戲論せず。
復次に、邪見の人は、口に一切は空なりと說くと雖も、然も愛處に於て愛を生じ、瞋處に瞋を生じ、慢處に慢を生じ、癡處に癡を生じ、自ら其身を誑はす、佛弟子の如きは、實に空を知つて心動

佛、梵志に問ひたまはく、「[七]鹿頭梵志は、道を得るや不や」と。答へて言く、「一切の得道の中に、是を第一と爲す」と。是時、長老・鹿頭梵志比丘は、佛の後に在つて佛を扇げり。佛、梵志に問ひたまはく、「汝、是の比丘を識るや不や」と。梵志は之を識りて、慚愧し低頭す。是の時、佛は義品の偈を說きたまはく、

『各各究竟と謂つて而も各自ら愛著し、各自らを是として、彼を非とす、是れは皆究竟に非ず。
是の人、論衆に入つて義理を辯明する時、各各相是非し、勝負して憂喜を懷く。
勝者は憍坑に墮し、負者は憂獄に墮ち、是の故に智ある者は、此の二法に隨はず。
論力よ、汝當に知るべし、我が諸の弟子の法は、虛なく、亦た實なし。汝は何の所求をか欲するや。
汝は、我が論を壞せんと欲するも。終に已に此の處なし。一切智には勝ち難し、適(たまたま)自ら毀壞するに足るのみ。』

是の如き等處處の聲聞經の中に、諸法の空を說きたまふ。

摩訶衍の空門は、一切の諸法の性は、常に自ら空にして、智慧方便を以て觀ずるが故に空なるにあらず。佛、須菩提の爲に說きたまふが如し。「色は色自ら空なり、受想行識は識自ら空なり、十二入・十八界・十二因緣・三十七品・十力・四無所畏・十八不共法・大慈大悲・薩婆若・乃至阿耨多羅三藐三菩提も、皆自ら空なり」と。

問うて曰く、若し一切諸法の性は、常に自ら空にして、眞空にして所有なくんば、云何んぞ邪見に墮せざらん。邪見とは無罪無福にして今世後世なしとするに名く。(今は此と異なること無けん。

答へて曰く、無罪無福の人は今世なしとは言はず、但だ後世のみ無しとす。草木の類の自生し、自滅するが如く、或は人の生れ、或は人を殺すも、現在に止まりて、更に後世の生なしと言ふ。而

【七】鹿頭梵志。憍薩羅國の婆羅門種、遍歷して頭蓋骨を見て其行衞を言ひ當てゝ生活す。舍衞城にて佛に值ひ、入涅槃の人の行衞を知ること能はず、出家して比丘となる。

來至し、佛に白して言さく、「是の迦毘羅の人衆は殷多なり。我は或は奔車・逸馬・狂象・鬪人に値ふ時、卽ち念佛の心を失ふ。是の時自ら念ずらく、「今若し死せば、當に何の處にか生ずべき」と。佛、摩訶男に告げたまはく、「汝、怖るる勿れ、畏るる勿れ、汝は是の時、惡趣に生ぜず、必ず善趣に至らん。譬へば樹の常に東に向つて曲るを、若し斫る者有れば、必ず當に東に倒るべきが如し。善人も亦た是の如く、若し身壞れ死する時は、善心の意識は長夜に信・戒・聞・施・慧を心に熏ずるを以ての故に、必ず利益を得て、上つて天上に生ず」と。若し一切の法、念念に生滅して無常ならば、佛は云何んぞ諸の功德、心に熏ずるが故に、必ず上生することを得」と言はんや。是を以ての故に、無常の性に非ざることを知る。

問うて曰く、若し無常は不實ならば、佛は何を以てか無常を說きたまふや。

答へて曰く、佛は衆生の應ずる所に隨つて說法したまふ。佛は常顚倒を破せんが故に、無常を說きたまひ、人の後世を知らず、信ぜざるを以ての故に、心去つて後世に、上つて天上に生ず。罪福業の因緣は、百千萬劫に失せずと說き給ふ。是れ對治悉檀にして第一義悉檀に非ず。諸法の實相は常に非ず、無常に非ず。佛も亦た處處に諸法は空なりと說きたまふ。諸法の空の中には亦た無常なし。是を以ての故に世間は無常なりといふは、是れ邪見なりと說く。是の故に名けて法空と爲す。

復次に、毘耶離の梵志は論力と名く。諸の[六]梨昌等、大に其に寶物を雇ふて佛と與に論ぜしむ。其の雇を取り已つて、卽ち其の夜を以て、五百の難を思撰し、明旦諸の梨昌と佛の所に至り、佛に問うて言く、「一の究意道とや爲ん、衆多の求竟道とや爲ん」と佛の言はく、「一の究竟道にして衆多なし」と。梵志の言く、「佛は一道と說くも、諸の外道の師は各各に究竟の道あり、是れ衆多と爲す、一に非ず」と。佛の言はく、「是は各衆多有りと雖も、皆實道に非ず、何となれば一切皆邪見を以て著するが故に、究竟道と名けず」と。

【六】梨昌（Licchavi）また離車とも書く。毘舍離城の刹帝利種の名である。

愛・觸・六入・名色・識・行・無明も亦た是の如し。若し人あり、身は卽ち是れ神と言ひ、若しは身は神と異なると言はば、是の二は異なれりと雖も、同じく邪見と爲す」と。佛の言はく、「身は卽ち是れ神なりと(言はば)、是の如きは邪見にして我が弟子に非ず、身は神と異なりと(云ふも)、亦た是れ邪見にして我が弟子に非ず」と。是經の中に、佛、法空を說きたまふが如し。若し誰か老死すと說かば、當に知るべし、是は虛妄なることを。是を生空と名く。若し是れは老死なりと說かば、當に知るべし、是は虛妄なることを、是を法空と名く。乃至無明も亦た是の如し。

復次に、佛は梵網經の中に、六十二見を說きたまふ。若し人あり、神は常なり、世間も亦た常なりと言はば、是を邪見と爲す。若し神は無常なり。世間は無常なりと言はゞ、是も亦た邪見なり。神及び世間は、常にして亦た無常なり。神及び世間は常に非ず、亦た常に非ざるにも非ずといふも皆是れ邪見なり。是を以ての故に知る。諸法は皆空なり、是を實と爲すことを。

問うて曰く、若し神は常なりと言はば、應に是れ邪見なるべし。何となれば神性は無なるが故なり。若し世間は常なりと言はば、亦た應に是れも邪見なるべし。何となれば世間は實には皆な無常なり。顚倒の故に有常と言ふを以ての故なり。若し神は無常なりと言はば、亦た應に是れも邪見なるべし。何となれば神性は無なるが故に、無常と言ふべからざればなり。若し世間は無常なりと言はば、應に是れは邪見なるべからず。何となれば一切の有爲法の性は、實に皆無常なればなり。

答へて曰く、若し一切の法は實に皆無常ならば、佛は云何んぞ世間の無常を說いて、是を邪見と名けん。是の故に實には是れ無常に非ざることを知る可し。

問うて曰く、佛は處處に有爲法は無常・苦・空・無我なるを觀ずれば、人をして道を得せしむと說きたまふ。云何なれば無常は邪見に墮すと言ふや。

答へて曰く、佛は處處に無常と說き、處處に不滅と說きたまふ。[五]摩訶男釋王の如きは、佛の所に

【五】摩訶男釋王 (Mahānāma) 世尊の叔父、甘露飯王の子。

恚の毒、十五種の無明は是れ愚癡の毒なり。諸の邪見・憍慢・疑は無明に屬す。是の如く一切の結使は皆な三毒に入る。何を以てか之を滅せん。三分・八正道なり、若し三分・八正道を說けば、當に知るべし已に一切三十七品を說けるを。是の如き等の種種の相を名けて對治門と爲し、是等の諸法を名けて蜫勒門と爲す。

云何なるを阿毘曇門と名くるや。或は佛、自ら諸法の義を說きたまひ、或は佛、自ら諸法の名を說きたまひしを、諸の弟子、種種に集述して其の義を解するなり。佛の說きたまへるが如くんば、若し比丘あり、諸の有爲法に於て、正しく憶念すること能はずして、世間第一法を得んと欲せば、是の處あること無し。若し世間第一法を得ずして、正位の中に入らんと欲せば、是の處あること無し。若し正位に入らずして、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢を得んと欲せば、是の處あること無し。比丘あり、諸の有爲法に於て、正しく憶念して世間第一法を得ば、斯れ是の處あり。若し世間第一法を得て正位に入り、正位に入りて、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢を得ば、必ず是の處あり。佛の直說の如くんば、世間第一の法は相の義を說かず。何界の繫なるか、何の因なるか、何の緣なるか、何の果報なるか、世間第一法より、種種聲聞の所行の法、乃至無餘涅槃を、一一に相の義を分別する、是を阿毘曇門と名く。

空門とは、生空と法空となり。頻婆娑羅王迎經の中に、佛、大王に告げたまへるが如し。「色生ずる時は但だ空のみ生じ、色滅する時は但だ空のみ滅す。諸行生ずる時は但だ空のみ生じ、滅する時は但だ空のみ滅す。是中に吾我なく、人なく、神なく、人は今世より後世に至る、因緣の和合、名字等を除いて衆生なし。凡夫、愚人は名を逐ふて實を求む」と。是の如き等、經中に、佛は生空を說きたまへり。法空とは、佛、大空經の中に說きたまふが如し。「十二因緣は無明乃至老死なり。若し人あり、是れは老死なりと言ひ、若しくは誰か老死すと言はば、皆これ邪見なり。生・有・取・受・

と爲す。若し人蜫勒門に入つて論議すれば、則ち窮りなし。其の中に隨相門、對治門等の種種の諸門あり。隨相門とは、佛の偈に說きたまへるが如し。

『諸の惡を作すこと莫く、佛の善を奉行して、自ら其の意を淨ふする、是れ諸佛の敎なり。』

是の中に心數法は盡く應に說くべし。今は但だ自ら其の意を淨ふすることを說けば、則ち諸の心數法を已に說くことを知る。何となれば同相同緣なるを以てなり。佛の四念處を說きたまふ如きは、是の中に四正勤、四如意足、五根、五力を離れず。何となれば四念處の中の四種の精進は、則ち是れ四正勤にして、四種の定は是れ四如意足たり、五種の善法は是れ五根、五力たればなり。佛は餘門を說かして、但だ四念處のみを說きたまふと雖も、當に已に餘門を說きたまふことを知るべし。佛、四諦の中に於て、或は一諦、或は二、或は三を說きたまふが如し。[四]馬星比丘が舍利弗の爲に偈を說くが如し。

『諸法は緣より生ず、是法の緣及び盡、我が師・大聖主は、是の義是の如く說きたまへり。』

此の偈は但だ三諦を說く。當に知るべし。道諦は已に中に在ることを（そは）相離れざるが故なり。譬へば一人事を犯せば、家を擧げて、罪を受くるが如し。是の如き等を名けて隨相門と爲す。

對治門とは、佛が但だ四顚倒を說きたまへるが如し、常顚倒と樂顚倒と我顚倒と淨顚倒となり、是の中に四念處を說かずと雖も、當に已に四念處の義あることを知るべし。譬へば藥を說けば、已に其の病を知り、病を說けば則ち其の藥を知るが如し。若し四念處を說けば、則ち已に四倒を說くことを知る。四倒は則ち是れ邪相なり。若し四倒を說けば、則ち已に諸結を說く。所以いかんとなれば其の根本を說けば、則ち枝條皆得ることを知ればなり。佛の「一切世間に三毒あり」と說きたまふが如し。三毒を說けば、當に知るべし、已に三分・八正道を說けるを、若し三毒を說けば、當に知るべし、已に一切の諸の煩惱の毒を說けることを。十五種の愛は是れ貪欲の毒、十五種の瞋は是れ瞋

【四】馬星。Aśvaka。初轉法輪五比丘の一人にして、舍利弗入道の機緣となりし人。

復次に、外道の經の中に、殺・盜・婬・妄語・飲酒を聽すこと有り。言く、「天祠の爲に呪して殺せば罪なし。行道の爲の故に若し急難に遭うて、自ら身を全ふせんと欲して小人を殺すは罪なし。又急難あらば行道の爲の故に、金を除いて餘のものは盜み取ることを得、以て自ら全濟し、後まさに此の殃罪を除くべし。師の婦と國王の夫人と善知識の妻と童女とを除き、餘は急難に逼迫すれば邪婬することを得。師及び父母の爲め、牛の爲め、身の爲め、媒(介)の爲の故には妄語を聽す。寒鄉にては石蜜酒を飲むことを聽し、天祠の中にては、或は一滴二滴の酒を甞むることを聽す」と。佛法の中には則ち然らず。一切衆生に於て、慈心もて等視し、乃至蟻子をも亦た命を奪はず、何に況んや人を殺すをや。一針一縷をも取らず、何に況んや多物の無主なるをや。婬女には指を以ても觸れず、何に況んや人の婦女をや。戲笑にも妄語することを得ず、何に況んや故らに妄語を作さんや。一切の酒は一切の時に常に飲むことを得ず、何に況んや寒鄉天祠をや。汝等外道は佛法と懸に殊なること、天地の如き有り。汝等外道の法は是れ諸の煩惱を生ずる處、佛法は則ち是れ諸の煩惱を滅する處なり、是を大に異なれりと爲す。諸の佛法は無量にして大海の若くなる有り、衆生の意に隨ふが故に種種に法を說き、或は有と說き、或は無と說き、或は常と說き、或は無常と說き、或は苦と說き、或は樂と說き、或は我と說き、或は無我と說き、或は三業を懃行して諸の善法を攝するを說き、或は一切の諸法は無作の相なりと說く。是の如き等の種種に異りて說く。無智は之を聞いて、謂つて乖錯せりと爲すも、智者は三種の法門に入りて、一切の佛語を觀ずれば、皆なこれ實法にして相違背せず。何等か是れ三門なる、一には蜫勒門、二には阿毘曇門、三には空門なり。

問うて曰く、云何なるを蜫勒と名け、云何なるを阿毘曇と名け、云何なるを空門と名くるや。

答へて曰く、蜫勒に三百二十萬言あり、佛の在世の時、大迦旃延の造る所なり。佛の滅度の後、人壽轉た減じ、憶識の力少なくして廣く誦すること能はず。諸の得道の人、撰んで三十八萬四千言

問うて曰く、汝は外道は空を觀ずと言へり。空を觀ずれば則ち一切の法を捨つ。云何んぞ一切の法を捨てざるが故に、實智慧あること無しと言ふや。

答へて曰く、外道は空を觀ずと雖も、而も空相を取り、諸法の空なることを知ると雖も、而も自ら我の空なることを知らず、觀空の智慧に愛著するが故なり。

問うて曰く、外道には無想定あれば、心・心數法は都て滅せん。都て滅するが故に、相を取り、智慧に愛著するの咎あること無けん。

答へて曰く、無想定の力にて、强いて心をして滅せしむれども實智慧の力に非ず。又此の中に於て涅槃の想を生じ、是は和合して法を作すことを知らず。是を以ての故に顚倒の中に墮す。是の中に心暫らくは滅すと雖も、因緣を得れば還たび生ず。譬へば人の夢なくして睡る時は、心想行ぜざれども、悟むれば則ち還たび有るが如し。

問うて曰く、無想定は其の失是の如し。更に非有想非無想定あり、是の中には一切の妄想なく、亦た强いて無想定を作して、想を滅するが如くならず。是の中は智慧の力を以ての故に無想なり。

答へて曰く、是の中にも想あり。細微なるが故に覺らざるなり。若し無想ならば、佛弟子は復た何に緣つてか更に實智慧を求めん。佛法の中にては、是の非有想非無想の中の識は四衆に依つて住す。是の四衆は因緣に屬するが故に無常なり、無常なるが故に苦なり、苦なるが故に空なり、空なるが故に無我なり、空にして無我なるが故に捨つべし。汝等は智慧に愛著するが故に、涅槃を得ず。譬へば尺蠖の屈して後足を安じ、然して後、前足を進むるが如し。所緣盡くれば、復た進處無くして還る。外道は初禪に依止して下地の欲を捨て、乃至、非有想非無想處に依つて無所有處を捨て、上に復た依る所なきが故に、則ち非有想非無想を捨つること能はず。更に依處なきを以て我を失ふことを恐懼す。無所得の中に墮せんことを畏るるが故なり。

能く知り盡くして其の邊に到る、是を以ての故に「智慧の邊に到る」と言ふ。

問うて曰く、若し所說の如くんば、一切の智慧は盡く、若しくは世間、若しくは出世間に入るべし。何を以てか但だ三乘の智慧は盡く其の邊に到ると言つて、餘の智を說かざるや。

答へて曰く、三乘は是れ實智慧にして、餘は皆なこれ虛妄なればなり。菩薩は知ると雖も、而も專ら行ぜず。摩黎山を除いては、一切、栴檀木を出すこと無きが如し。若し餘處に或は好語あらば、皆な佛法の中より得たるにして、自ら佛法に非ず。初めて聞けば好きに似れども、久しければ則ち妙ならず。譬へば牛乳と驢乳との如し。其色は同じと雖も、牛乳を攢むれば則ち酥と成り、驢乳を攢むれば則ち尿と成る。佛法の語及び外道の語は、「殺さず」、「盜まず」、「衆生を慈愍し」、「心を攝し」、「欲を離れ」、「空を觀ず」(といふ)は同じと雖も、然も外道の語は、初は妙なるに似たりと雖も、窮め盡せば、歸する所は則ち虛誑と爲る。(何となれば)一切の外道は皆な我見に著す。若し實に我あらば、應に二種に墮すべし。若しくは壞相、若しくは不壞相なり。若し壞相ならば、應に牛皮の如くなるべく、若し不壞相ならば、應に虛空の如くなるべし。此の二處には、殺罪なく、不殺の福なし。若し虛空の如くならば、雨露も潤すこと能はず、風熱も乾かすこと能はず、是れ則ち常相に墮す。若し常ならば、苦も惱ますこと能はず、樂も悅ばすこと能はざらん。若し苦樂を受けずんば、禍を避け福に就くべからず。若し牛皮の如くなれば、風雨の爲に壞られん。若し壞ならば則ち無常に墮す。若し無常なれば則ち罪福なし。外道の語、若し實に是の如くならば、何ぞ不殺は福と爲り、殺生は罪と爲ること有らんや。

問うて曰く、外道の戒福の失する所は是の如しとせば、其の禪定智慧は復た云何。

答へて曰く、外道は我心を以て禪を逐ふが故に、愛・見・慢多きが故に、一切の法を捨てざるが故に、實智慧あること無し。

答へて曰く、道は一種なりと雖も、而も智を用ふるに異あり。若し諸佛出でたまはずして、佛法已に滅せば、是の人は先世の因縁の故に獨り智慧を出し、他より聞かずして自ら智慧を以て道を得。一國王の如し。出でて園中に在つて遊戲せるに、淸朝に林樹の華菓蔚茂して甚だ愛樂す可きを見、王は食し已つて臥せり。王の諸の夫人婇女は皆な共に華を取りて、林樹を毀折す。王は覺め已つて、林の毀壞せるを見て、自ら覺悟すらく、「一切世間の無常にして變壞するも皆な亦た是の如し」と。思惟是に已つて無漏道の心生じ、諸の結使を斷じて辟支佛道を得、六神通を具し、卽ち飛んで閑靜の林間に到る。是の如き等の因縁は、先世の福德願行の果報にして、今世に少因縁を見て辟支佛の道を成ず。是の如きを異と爲す。

復次に、辟支佛に二種あり、一を獨覺と名け、二を因縁覺と名く。因縁覺は上に說くが如し。獨覺とは、是の人は今世に道を成じ、自ら覺りて他より聞かず、是を獨覺の辟支迦佛と名く。獨覺の辟支迦佛に二種あり。一には本と是れ學人にして、人中に在つて生ず。是の時に佛なく、佛法滅せり。是の須陀洹は已に七生を滿し、第八生に自ら成道することを得べからず。是の人を佛と名けず、阿羅漢と名けず、名けて小辟支迦佛と爲す。阿羅漢と異なること無く、或は舍利弗等の大阿羅漢に如かざる者あり。二には大辟支佛にして、一百劫の中に於て功德を作り、智慧を增長し、三十二相の分を得、或は三十一相あり、或は三十相、或は二十九相、乃至一相あり。九種の阿羅漢の中に於て、智慧利勝にして、諸の深法の中の總相、別相に於て能く入り、久しく定を修習し、常に獨處を樂しむ。是の如きの相を名けて大辟支迦佛と爲す、是を以て異と爲す。佛道を求むる者は、初發心より願を作し、「願はくは我、佛と作つて衆生を度脫し、一切の佛法を得、六波羅蜜を行じ、魔の軍衆、及び諸の煩惱を破つて一切智を得、佛道を成じ、無餘涅槃に入らん」と、本願に隨つて行ず。是の中間より有ゆる智慧は總相・別相・一切を盡く知る。是を佛道の智慧と名く。是の三種の智慧を盡く

般若は讃じ叵しと雖も、我は今能く讃するを得、未だ死地を脫せずと雖も、則ち已に出づることを得と爲す。』

初品第三十……般若相義

問うて曰く、何を以てか獨り般若波羅蜜を稱して摩訶と爲し、五波羅蜜を(摩訶と)稱せざるや。

答へて曰く、摩訶は秦に大と言ひ、般若を慧と言ひ、波羅蜜を到彼岸と言ふ。其の能く智慧の大海の彼岸に到り、諸の一切智慧の邊に到り、其の極を窮盡するを以ての故に到彼岸と名く。一切世間の中にて、十方三世の諸佛は第一に大なり。次に、菩薩・辟支佛・聲聞あり。是の四大人は皆な般若波羅蜜の中より生ず、是の故に名けて大と爲す。

復次に、能く衆生の大果報を與へ、無量無盡にして常に變異せず、所謂涅槃なり。餘の五波羅蜜は爾ること能はず。布施等は、般若波羅蜜を離るれば、但だ能く世間の果報を與ふるのみ。是の故に大と名くることを得ず。

問うて曰く、何者か是れ智慧なる。

答へて曰く、般若波羅蜜は一切の智慧を攝す。所以いかんとなれば菩薩は佛道を求むるに、應に一切法を學し、一切の智慧を得べし。所謂聲聞・辟支佛・佛の智慧なり。是の智慧に三種あり。學と無學と非學非無學となり。非學非無學智とは、[一]乾慧地・[二]不淨・[三]安那般那・欲界繫・四念處・煖法・頂法・忍法・世間第一法等の如し。學智とは、苦法智忍の慧乃至向阿羅漢の第九無礙道の中の金剛三昧の慧なり。無學智とは、阿羅漢の第九の解脫智なり。是より已後、一切の無學智は、盡智と無生智等との如し。辟支佛道を求むるの智慧も亦た是の如し。

問うて曰く、若し辟支佛道も亦た是の如くならば、云何に聲聞と辟支佛とを分別するや。

【一】乾慧地。菩薩十地の第一。
【二】不淨。不淨觀。
【三】安那般那。數息觀。

般若は是れ一法なり。佛は種種の名を說き、諸の衆生の力に隨つて、之が爲に異字を立てたまへり。

若し人般若を得れば、議論の心皆な滅す。譬へば日出づる時、朝露の一時に失するが如し。

般若の威德は、能く二種の人を動かす、無智の者は恐怖し、有智の者は歡喜す。

若し人般若を得て、則ち般若の主と爲らば、般若の中にすら著せず、何に況んや、餘法に於てをや。

般若は來る所なく、亦復た去る所なし、智者が一切の處に、之を求むれども得ること能はず。

若し般若を見ざれば、是は則ち縛せらると爲す。若し人般若を見なば、是れも亦た縛せらると名く。

若し人般若を見れば、是れ則ち解脫を得、若し般若を見ざるも、是も亦た解脫を得。

是の事は希有と爲す、甚深にして大名あり。譬へば幻化の物は、見れども、而も見る可らざるが如し。

諸佛及び菩薩、聲聞、辟支佛の解脫涅槃の道は、皆な般若に從つて得らる。

言說は世俗の爲なり、一切を憐愍するが故に、假に名けて諸法と說く、說くと雖も、而も說かざるなり。

般若波羅蜜は、譬へば大火炎の如し。四邊取る可らず、取も亦た不取も無し。

一切取り已つて捨つ、是を取る可らずと名く。取る可らずして而も取る、是れ卽ち名けて取ると爲す。

般若には壞相なく、一切の言語を過ぎて、適くとして依止する所なし、誰か能く其の德を讚ぜん。

ば、皆悉く分了なり、更に大燈あれば、益す復た明審なるが如し。則ち知る。後燈の破る所の闇は前燈と合住せり、前燈は闇と共に住すと雖も、而も亦た能く物を照す。若し前燈に闇なくんば、則ち後燈の增益する所なきことを。諸佛菩薩の智慧も亦た是の如し、菩薩の智慧は煩惱・習と合すと雖も、而も能く諸法實相を得ること、前燈も亦た能く物を照すが如し。佛の智慧は、諸の煩惱・習を盡し、亦た諸法の實相を得ること、後燈の倍復た明了なるが如し。

問うて曰く、云何なるが是れ諸法實相なるや。

答へて曰く、衆人は各各諸法實相を說いて、自ら以て實と爲す。此の中に實相は破壞す可からず、常住にして異ならず、能く作る者無し。後の品中に佛須菩提に語りたまへるが如し。「若し菩薩、一切法は、常に非ず、無常に非ず、苦に非ず、樂に非ず、我に非ず、無我に非ず、有に非ず、無に非ず等と觀じて、亦た是の觀を作さざれ」と。是を菩薩の般若波羅蜜を行ずと名く。是義は一切の觀を捨て、一切の言語を滅し、諸の心行を離れ、本より已來不生不滅なること、涅槃の相の如し。一切諸法の相も亦た是の如し。是を諸法實相と名く。般若波羅蜜を讃するの偈に說くが如し。

『般若波羅蜜は、實法にして顚倒せず、念・想・觀を已に除き、言語の法も亦た滅す。
無量の衆罪を除き、淸淨にして心常に一なり、是の如き尊妙の人は、則ち能く般若を見ん。
虛空の染なきが如く、戲なく、文字なし、若し能く是の如く觀ずれば、是れ卽ち佛を見たてまつると爲す。
若し法の如く、佛・般若・及び涅槃を觀ずれば、是の三は則ち一相なり、其は實に異あること無し。
諸佛及び菩薩は能く一切を利益す。般若は之が爲に母たり、能く出生し養育す。
佛は衆生の父たり、般若は能く佛を生ず、是れ則ち一切衆生の祖母たり。

卷の第十八

初品第二十九……般若波羅蜜

【經】一切法に於て著せざるが故に、應に般若波羅蜜を具足すべし。

【論】問うて曰く、云何なるを般若波羅蜜と名くるや。

答へて曰く、諸の菩薩は初發心より一切種智を求め、其の中間に於て、諸法の實相を知る慧は、是れ般若波羅蜜なり。

問うて曰く、若し爾らば名けて波羅蜜と爲すべからず。何となれば未だ智慧の邊に到らざるを以ての故なり。

答へて曰く、佛の得たまふ所の智慧は、是れ實に波羅蜜なり。是の波羅蜜に因るが故に、菩薩の行ずるところを亦た波羅蜜と名く。因中に果を説くが故なり。是の般若波羅蜜は、佛心の中に在りては、名を變じて一切種智と爲す。菩薩は智慧を行じ、彼岸に度らんことを求むるが故に、波羅蜜と名け、佛は已に彼岸に度りたまふが故に、一切種智と名く。

問うて曰く、佛は一切の諸の煩惱及び習を已に斷じて、智慧の眼淨く、應に實の如く諸法實相を得たまふべし。諸法實相は卽ち是れ般若波羅蜜なり。菩薩は未だ諸の漏を盡さず、慧眼未だ淨からず、云何んぞ能く諸法實相を得るや。

答へて曰く、此の義は後の品中に當に廣く説くべし。今は但だ略説するに、人の海に入るが如し。始めて入る者あり、其の源底を盡す者あり、深淺は異なりと雖も、倶に名けて「入る」と爲す。佛菩薩も亦た是の如く、佛は則ち其の底を窮盡し、菩薩は未だ諸の煩惱の習を斷ぜず、勢力少きが故に、深く入ること能はず。後の品中に譬喩を説くが如し。人の闇室に於て燈を然して、諸の器物を照せ

復次に、菩薩は禪波羅蜜の中に入り、天眼を以て十方の五道の中の衆生を觀、色界の中に生ずる者は、禪定の樂味を受けて、還つて禽獸の中に墮して種種の苦を受くるを見、復た欲界の諸天は七寶の池の中の華香を自ら娛しみ、後、鹹沸屎地獄の中に墮するを見、又た人中の多聞、世智辯聰は、道を得ざるが故に、還つて猪羊畜獸の中に墮して、別つ所なきを見る。是の如き等、種種に大樂を失して大苦を得、大利を失して大衰を得、尊貴を失して卑賤を得るを知つて、此の衆生に於て悲心を生じ、漸漸に增廣して大悲を成ずることを得、身命を惜まず、衆生の爲の故に、懃行精進して以て佛道を求む。復次に、不亂不味の故に禪波羅蜜と名く。佛、舍利弗に告げたまふが如く、菩薩は、般若波羅蜜の中に住して禪波羅蜜を具足す。不亂不味なるが故なり。

問うて曰く、云何なるを亂と名くるや。

答ふ、亂に二種あり、一には微、二には麁なり。微に三種あり、一には愛多く、二には慢多く、三には見多し。云何に愛多きや。禪定の樂を得て、其の心樂著して味を愛す。云何に慢多きや。禪定を得るの時、自ら難事已に得と謂つて、以て自ら高うす。云何に見多きや。我見等を以て禪定に入り、分別して相を取り、是は實、餘は妄と語る。是の三を名けて微細の亂と爲す。是の因緣によつて、禪定に於て退して三毒を起す、是を麁亂と爲す。味とは初めて禪定を得て、一心に愛著す、是を味と爲す。

問うて曰く、一切の煩惱は皆な能く染著す、何を以ての故に但だ愛のみを名けて味と爲すや。

答へて曰く、愛と禪とは相似たり。何となれば禪は則ち心を攝して堅住なり。愛も亦た專ら著して捨て難く、又初めて禪を求むる時は、心專ら得んことを欲して、之を愛するを性と爲し、欲樂して專ら求め、欲と禪定と相違せざればなり。既に禪定を得るも、深く著して捨てざれば、則ち禪定を壞す。譬へば人に物を施すに、必ず現報を望めば、則ち福德なきが如し。禪に於て味を愛し、禪に愛著するも、亦復た是の如し。是の故に但だ愛を以て味と名け、餘の結を以て味と爲さず。

是の事は然らず。何を以ての故に、若し先に生あつて後に貪欲あらば、是の中に貪欲生ずべからず、未だ貪欲あらざるが故なり。若し後に生あつて先に貪欲あらば、則ち生は生ずる所なし。若し一時に生ぜば、則ち生者なく、生處なし。生者と生處とは分別なきが故なり。

復次に、是の貪欲と貪欲者とは、一にあらず異にあらず、何となれば貪欲を離れては貪欲者は得べからず、貪欲者を離れては貪欲は得べからざればなり。是は但だ和合の因緣より生ず。和合の因緣より生ずる法は、卽ち是れ自性空なり。是の如く貪欲と貪欲する者とは、異ならば不可得なり。若し一ならば、貪欲と貪欲者とは、則ち分別なし。是の如き等の種種の因緣を以て、貪欲の生は不可得なり。若し法が生ずる無くんば、是の法は亦た滅することも無し。生ぜず滅せざるが故に、則ち定なく亂なきなり。是の如く貪欲蓋を觀ずれば、則ち禪と一と爲る。餘の蓋も亦た是の如し。若し諸法の實相を得て、五蓋を觀ずれば、則ち所有なし。是の時、便ち五蓋の實相は、卽ち是れ禪の實相、禪の實相は卽ち是れ五蓋なるを知る。菩薩は是の如く能く五欲及び五蓋、禪定及び支は一相なることを知り、無所依にして禪定に入る、是を禪波羅蜜と爲す。

復次に、若し菩薩が禪波羅蜜を行ずる時は、五波羅蜜は和合して助成す、是を禪波羅蜜と名く。

復次に、菩薩は禪波羅蜜の力を以て神通を得、一念の頃に定を起たずして、能く十方の諸佛を供養し、華香珍寶、種種に供養す。

復次に、菩薩は禪波羅蜜の力を以て、身を變ずること無數にして、遍ねく五道に入り、三乘の法を以て衆生を敎化す。

復次に、菩薩は禪波羅蜜の中に入り、諸の惡不善の法を除き、初禪乃至非有想非無想定に入り、其の心調柔にして、一一の禪の中に大慈大悲を行じ、慈悲の因緣を以て無量劫中の罪を拔き、諸法實相の智を得るが故に、十方の諸佛及び大菩薩の爲に念ぜらる。

ひ、便ち阿鼻泥犁の中陰の相を見、命終つて即ち阿鼻地獄に生ぜり。諸の比丘、佛に問ひたてまつりて、「某甲比丘、阿蘭若に命終せり、何の處に生ずるや」と。佛の言はく、「是の人は阿鼻泥犁の中に生ぜり」と。諸の比丘、皆な大に驚き怪しみて。「此の人は坐禪持戒せり、所由爾るや」と。佛の言はく、「此の人は增上慢にして、四禪を得たる時、四道を得と謂ふが故に、命終の時に臨み、四禪の中陰の相を見て、便ち邪見を生じて謂へらく、涅槃はなし、我は是れ阿羅漢なるに、今還たび復た生ず、佛、虛狂を爲すと。是の時即ち阿鼻泥犁の中陰の相を見、命終るや即ち阿鼻地獄の中に生ず」と。是の時佛偈を說いて言はく、

『多聞・持戒・禪は、未だ無漏法を得ず、此の功德ありと雖も、此の事は信ず可らず。』

是の比丘は、是の惡道の苦を受く。此の故に知る。亂相を取れば、能く瞋等の煩惱を生じ、定相を取れば、能く著を生ずることを。菩薩は亂相を取らず、亦た禪定の相も取らず、亂と定の相一なるが故に、是を禪波羅蜜と名く。初禪の相の如きは、欲を離れ、蓋を除き、心を一處に攝す。是の菩薩は利根にして智慧もて觀ずるが故に、五蓋に於て捨つる所なく、禪定の相に於て取る所なし。(そは)諸法の相は空なるが故なり。云何なれば五蓋に於て捨つる所なきや。貪欲蓋は、內に非ず、外に非ず、亦た兩の中間ならず、何となれば、若し內に法有るならば、外に生ずるを待つべからず、若し外に法有るならば、我に於て亦た患なからん。若し兩の中間に有るならば、兩の間は則ち處なければなり。亦た先世より來らず。何となれば一切の法は來ること無きを以ての故なり。童子の欲あること無きが如し。若し先世に有るならば、(童子は)小なりとも亦た有るべし、是を以ての故に知る。先世より來らず。亦た後世に至らず、諸方より來らず、亦た常に自ら有るにあらず、一分の中ならず、遍身の中に非ず、亦た五塵より來らず、亦た五情より出でず、從りて生ずる所なく、從りて滅する所なきことを。此の貪欲は、若しくは先に生じ、若しくは後に生じ、若しくは一時に生ずとは、

が、常に自ら聲を出し、意に隨つて作して、人の彈ずる者なきが如し。此れも亦た散心なく、亦た攝心もなし。是れ福德の報生なるが故に、人の意に隨つて聲を出すなり。法身の菩薩も亦た是の如く、分別する所なく、亦た散心もなく、亦た說法の相もなし。是れ無量の福德・禪定・智慧の因緣の故に、是の法身の菩薩は、種種の法音を應ずるに隨つて出だすなり。慳貪の心は多く布施の聲を說くと聞き、破戒・瞋恚・懈怠・亂心・愚癡の人は、各各持戒・忍辱・禪定・智慧の聲を說くと聞き、是の法を聞き已つて、各各思惟し、漸く三乘を以て度脫することを得るなり。

復次に、菩薩は一切の法を觀ずるに、若しくは亂、若しくは定も、皆な是れ不二の相なり。餘人は亂を除いて定を求む。何となれば亂法の中に瞋想を起し、定法の中に於て著想を生ずるを以ての故なり。鬱陀羅伽仙人の如きは、五通を得て日日に王宮の中に飛び到つて食す。王の大夫人は、其の國法の如く足を捉えて禮するに、夫人の手觸るゝや卽ち神通を失ひ、王より車を求め、駕に乘つて而して出でて其の本處に還り、林樹の間に入つて更に五通を求め、一心に專ら至り、當に得んと垂(なんな)んとする時、鳥あり樹上に在つて、急に鳴いて以て其の意を亂す。樹を捨てて水邊に至つて定を求むるに、復た魚の鬪つて水を動かすの聲を聞く。此の人は禪を求めて得ず、卽ち瞋恚を生ず、「我當に盡く魚鳥を殺すべし」と。此の人は久しうして後、思惟して定を得、非有想非無想處に生じ、彼に於て壽盡きて下生するや、飛狸と作つて諸の魚鳥を殺し、無量の罪を作つて三惡道に墮せり。是を禪定の中の著心の因緣と爲す。外道は此の如し。佛弟子の中にも亦た一比丘あり、四禪を得て增上慢を生じて四道を得たりと謂へり。(卽ち)初禪を得たる時は、是を須陀洹なりと謂ひ、第二禪の時には、是を斯陀含と謂ひ、第三禪の時には、是を阿那含と謂ひ、第四禪の時は、阿羅漢を得と謂ひ、是を恃んで、止まつて復た進むことを求めず、命盡きんと欲する時、四禪の中陰の相來るあるを見るや、便ち邪見を生じ、涅槃は無し、佛、我を欺けりと謂つて、惡邪を生ぜしが故に、四禪の中陰を失

るに、入る時と出る時との足跡は見る可し。水中に在る時は、知るを得べからざるが如し。若し初禪を得んに、同じく初禪を得たる人は能く知れども、而も菩薩が初禪に入るを知ること能はず。人あり、二禪を得て、觀知して初禪の心を了了に知ることを得れども、菩薩が初禪に入る心を知ること能はず、乃至非有想非無想處も亦た是の如し。

復次に、超越三昧の中にては、初禪より起つて第三禪に入り、三禪の中より起つて虛空處に入り、虛空處より起つて無所有處に入る。二乘は唯能く一を超ゆるも、二を超ゆること能はず。菩薩は自在に超えて、初禪より起つて、或は三禪に入ること常法の如く、或時は第四禪に入り、或は空處、識處、無所有處或は非有想非無想處に入り、或は滅受想定に入り、滅受想定より起つて、或は無所有處、或は識處、空處、四禪乃至初禪に入り、或る時は一を超え、或る時は二を超え、乃至九を超ゆ。聲聞は二を超ゆること能はず、何となれば智慧・功德・禪定の力薄きを以ての故なり。譬へば二種の師子の如し。一は黃師子、二は白髮の師子なり。黃師子は亦た能く超ゆと雖も、白髮の師子王に如かず。是の如き等の種種の因緣によりて禪波羅蜜を分別す。

復次に、爾の時に菩薩は常に禪定に入り、心を攝して動ぜず、覺觀を生ぜず亦た能く十方一切の衆生の爲の故に、無量の音聲を以て、法を說いて之を度脫す、是を禪波羅蜜と名く。

問うて曰く、經の中に說くが如くんば、先づ覺・觀の思惟あつて、然して後能く說法す、禪定の中に入つて、語るの覺觀なければ、說法するを得べからず。汝今云何んぞ常に禪定の中に在つて、覺觀を生ぜずして、而も衆生の爲に說法すと言ふや。

答へて曰く、生死の人の法は、禪定に入り、先づ語の覺觀を以て、然して後に說法す。法身の菩薩は、生死の身を離れ、一切の諸法を知り、常住なること禪定の相の如く、亂あることを見ず。法身の菩薩は、無量の身を變化して衆生の爲に說法す、而も菩薩の心は分別する所なし。阿修羅の琴

つて坐し、兀然として動ぜず、鳥は此の如きを見て、之を謂つて木と爲し、卽ち髻中に於て卵を生む。是の菩薩は禪より覺めて、頂上に鳥の卵あることを知り、卽ち自ら思惟すらく、「若し我起動せば、鳥母は必ず復た來らざらん、鳥母來らずんば、鳥の卵は必ず壞せん」と。卽ち還たび禪に入り、鳥の子の飛び去るに至つて、爾して乃ち起てり。

復次に、菩薩を除いて餘人は欲界の心より次第に禪に入ることを得ず。菩薩は禪波羅蜜を行じ、欲界の心より次第に禪に入る。何となれば菩薩は世世の諸の功德を修し、結使の心薄く、心柔軟なるを以ての故なり。

復次に、餘人は、總相の智慧を得て能く欲を離るること、無常觀・苦觀・不淨觀の如し。菩薩は一切法の中に於て、能く別相を分別して欲を離る。五百の仙人の如きは、飛行する時、緊那羅女が歌聲を聞き、心著して、狂醉して皆な神足を失ひ、一時に地に墮つ。聲聞の如きは、緊那羅王屯崙摩が琴を彈じて歌聲し、諸法實相を以て佛を讚ずるを聞くに、是の時に、須彌山及び諸の樹木は皆動じ、大迦葉等の諸の大弟子は皆座上に於て自ら安んずること能はず。天須菩薩、大迦葉に問ふ、「汝は最も耆年にして、頭陀を行ふこと第一なり。今、何故に心を制して自ら安んずる能はざるや」と。大迦葉答へて曰く、「我は人天の諸欲に於ては心傾動せず、是は菩薩の無量の功德の報聲なり。又復た智慧を以て變化して、聲を作す、忍ぶ能はざる所なり」と。若し八方より風起るも、須彌山をして動ぜしむること能はざれど劫盡くるの時、毘藍風至れば、須彌山を吹いて腐草の如くならしむ。是を以ての故に知る。菩薩は一切法の中に於て、別相を觀じて諸欲を離るることを得、諸の餘人等は但だ禪の名のみを得て、波羅蜜を得ざることを。

復次に、餘人は菩薩の入出の禪心を知るも、住禪心の緣ずる所、到る所を知り諸法の深淺を知ること能はず。阿羅漢、辟支佛すら尙ほ知ること能はず、何に況んや餘人をや。譬へば象王の水を度

の法の中に心動ぜず。毘摩羅詰經の中に、舍利弗の爲に宴坐の法を說くが如し。「身に依らず、心に依らず、三界に依らず、三界の中に於て身心を得ざる、是を宴坐と爲す」と。

復次に、若し人禪定の樂は人天の樂に勝れたりと聞いて、便ち欲樂を捨てて禪定を求めなば、是れ自ら樂利を求むと爲す。奇とするに足らず。菩薩は則ち然らず。但だ衆生の爲に、慈悲心をして淨ならしめんと欲し、衆生を捨てざるは菩薩の禪なり。禪の中に皆な大悲心を發す。禪に極妙の內樂あり。而も衆生は之を捨てて外樂を求む。譬へば大富の盲人が、多く伏藏あるに、知らず見ざれば、乞求を行ずるが如し。智者は其人の自ら妙物あるも、知見すること能はずして他從り乞ふことを愍む。衆生も亦た是の如く、心中に自ら種種の禪定の樂あり、而も發することを知らず、反つて外樂を求む。

復次に、菩薩は諸法の實相を知るが故に、禪の中に入つて、心安隱にして味に著せず。諸餘の外道は禪定に入ると雖も、心安隱ならず、諸法の實を知らざるが故に禪味に著す。

問うて曰く、阿羅漢と辟支佛とは、倶に味に著せず、何を以てか禪波羅蜜を得ざるや。

答へて曰く、阿羅漢と辟支佛とは、味に著せずと雖も、大悲心なし。故に禪波羅蜜と名けず。又復た盡く諸禪を行ずること能はず。菩薩は盡く諸禪を行じ、麁細・大小・深淺・內緣・外緣・一切を盡く行ず。是を以ての故に、菩薩の心中は禪波羅蜜と名け、餘人は但だ禪とのみ名く。

復次に、外道も聲聞も菩薩も皆な禪定を得れども、而も外道禪の中には三種の患あり。或は味著、或は邪見、或は憍慢なり。聲聞禪の中には、慈悲薄く、諸法の中に於いて利智を以て諸法の實相を貫達せず。獨り其の身を善くし、諸の佛種を斷ず。菩薩禪の中には此の事なく、一切諸佛の法を集めんと欲するが故に、諸禪の中に於て、衆生乃至昆虫をも忘せず、常に慈念を加ふ。釋迦文尼佛の如きは、本と[三]螺髻仙人となり、尙闍梨と名く。常に第四禪を行じ、出入の息斷え、一樹の下に在

【三】螺髻仙人（Jaṭita）。髮を螺の如く結びし仙人。

心をして諍を起さざらしむ。五處の攝にして欲界及び四禪なり。
　問うて曰く、諸禪を得て更に餘法ありや。
　答へて曰く、味定は生ずるも亦た得、退くも亦た得。淨禪は生ずる時得、欲を離るる時は無漏を得、欲を離るる時得、退く時は九地の無漏定を得。四禪三無色定、未到地禪、中間は能く結使を斷じ。未到地の禪、中間は捨根と相應す。若し人禪を成就すれば、下地の變化心も亦た成就す。初禪に成就するが如きは二種の變化心あり。一には初禪、二には欲界なり。二禪には三種、三禪には四種、四禪には五種あり。若し二禪・三禪・四禪の中に、聞・見・觸を欲する時は皆な梵世の識を用ひ、識滅する時は則ち止む。四無量意、五神通、八背捨、八勝處、十一切入、九次第定[二九]、九想[三〇]、十想[三一]、三三昧、三解脫門、三無漏根、三十七品、是の如き等の諸の功德は皆な禪波羅蜜の中より生ず。是の中に應に廣く說くべし。
　問うて曰く、應に禪波羅蜜を說くべし、何を以て但だ禪のみを說くや。
　答へて曰く、禪は是れ波羅蜜の本なり。是の禪を得已つて憐愍して、衆生は內、心中に種種の禪定妙樂あるを、而も求むることを知らず、乃ち外法の不淨苦の中に在つて樂を求む」と。是の如く觀じ已つて、大悲心を生じ、弘誓の願を立つ「我當に衆生をして、皆な禪定の內樂を得て、不淨の樂を離れしむべし」と。此の禪樂に依り已つて、次いで佛道の樂を得せしむ、是の時の禪定を波羅蜜と名くることを得。
　復次に、此の禪の中に於ては、味を受けず、報を求めず、報の生に隨はず、心を調へんが爲の故に禪に入り、智慧方便を以て還つて欲界に生じ、一切の衆生を度脫す、是の時の禪を名けて、波羅蜜と爲す。
　復次に、菩薩は深き禪定に入り、一切の天人は其の心を知ること能はず。所依・所緣・見聞・覺知

【二九】九次第定。四禪、四無色、滅受想定の九種の定を他心を雜えず、一定より一定へと入る法なり。卽ち、初禪、二禪、三禪、四禪、空處、識處、無所有處、非想非非想處、滅受想の九次第定である。猶、論二十一卷參照。
【三〇】九想。また九相とも云ふ。人の屍相における九種の觀想なり。論二十一に說明あり。
【三一】十想。論第二十三參照。

無漏定は、次第に九種を生ず。自他の二と下地の四と上地の三となり。無所有處の無漏定は次第に七種を生ず、自地の二と下地の四と上地の一となり。非有想非無想處は、次第に六心を生ず、自地の二と下地の四となり。諸の淨地も亦た是の如く、又皆な自地の味を益す、初禪の味、次に第二種の味淨、乃至非想非非相處味も亦た是の如し。淨無漏禪は、一切處に味禪を緣じ、自地の中の味を緣じ、亦た淨愛を緣ず。無漏緣なきが故に、無漏を緣ぜず。淨無漏、根本無色定は、下地の有漏を緣ぜず。名因と增上緣とは、一切の四無量心・三背捨・八勝處に通じ、八一切處は皆な欲界の五神通を緣じ、欲・色界を緣ず、餘は各各所緣に隨ふ。滅受想定は所緣なし。四禪の中に練法あり、無漏を以て有漏を練るが故に、四禪に心自在なることを得。能く無漏の第四禪を以て、有漏の第四禪を練り、然る後第三・第二・第一禪は皆自地の無漏を以て、自地の有漏を練る。

問うて曰く、何を以てか練禪と名くるや。

答へて曰く、諸の聖人は、無漏定を樂み、有漏を樂まず。欲を離るる時、淨有漏を樂まずして自得し、今其の滓穢を除かんと欲するが故に、無漏を以て之を練る。譬へば金を練つて其穢を去る如し。無漏もて有漏を練るも亦復た是の如し。無漏禪より起つて、淨禪に入り、是の如く數數す。是を名けて練ると爲す。

復次に、諸禪の中に頂禪あり、何を以ての故に、頂と名くるや。二種あり、阿羅漢の壞法と不壞法となり。不壞法の阿羅漢は、一切の深き禪定に於て自在を得、能く頂禪を起す。是の頂禪を得れば、能く壽を轉じて富と爲し、富を轉じて壽と爲す。

復た、願智・四辯・無淨三昧あり。願智とは、願つて三世の事を知らんと欲し、所願に隨つて則ち知る。此の願智は二處の攝なり、欲界と第四禪となり。四辯とは法辯と辭辯とは、二處に攝す。欲界と初禪となり。餘の二辯は九地に攝す。欲界と、四禪と、四無色定となり。無諍三昧とは、他の

現在に有漏道を修し、未來に有漏無漏道を修す。第九解脱道の中に、未到地に於て、現在に有漏道を修し、未來に未到地の有漏無漏道、及び初禪邊地の有漏を修す。若し無漏道に（於て）初禪に得んと欲するも亦た是の如し。若し有漏道に依つて初禪の欲を離るゝは第二禪の邊地に於て、九無礙道、八解脱道の中に、現在に二禪邊地の有漏を修し、未來に二禪邊地の有漏道を修し、亦た無漏初禪の無漏及び[二八]眷屬を修し、第九の解脱道の中に第二禪邊地に於て、現在二禪邊地の有漏道を修し、未來に二禪邊地、初禪の無漏及び眷屬、二禪の淨無漏を修す。若し無漏道にて初禪の欲を離るるは、九無礙道、八解脱道の中に、現在に自地の無漏道を修し、未來に初禪及び眷族の有漏無漏道を修し、第九解脱道の中に、現在に自地の無漏道を修し、未來に初禪及び眷屬の有漏、無漏道を修するなり。及び二禪の淨無漏、乃至無所有處の離欲を修する時も亦た是の如し。非有想非無想處に欲を離るる時は、九無礙道、八解脱道の中に但だ一切無漏道を修し、第九解脱道の中に三界の善根無漏道を修し、無心定を除く。修に二種あり、一には得修、二には行修なり。得修とは、本と得ざる所を今得るに名け、未來世に自の事を修し、亦た餘事を修す。行修とは、曾つて得たるを現前に於て修すと名く。未來も亦た爾なり、餘を修せず。是の如き等の種種を、諸の禪定の中に修す。

復次に、禪定の相を略說するに、二十三種あり。八味と八淨と七無漏となり。復た六因あり、相應因と共因と相似因と遍因と報因と名因となり。一々の無漏、七無漏の因は是れ相似因なり。自地の中にて、相應因、共有因、初味定、初味定因、乃至、後味定、後味定因を增す。淨も亦た是の如し。四緣あり、因緣と次第緣と、緣緣と增上緣となり。因緣は上に說くが如し。初禪の無漏定は、次第に六種の定を生ず、一に初禪の淨に二無漏あり、二禪三禪も亦た是の如し。二禪の無漏定は、次第に八種の定を生ず、自地淨無漏と初禪淨無漏となり、三禪四禪も亦た是の如し。三禪の無漏定は、次第に十種を生ず。自地の二と下地の四と上地の四となり。第四禪の空處も亦た是の如く、識處の

【二八】 眷屬。初禪に入るの時、八觸と十眷屬とを生ず。十眷屬とは、空、明、定、智、善心、柔軟、喜、樂、解脱、境界相應の十なり。これは初禪のみにありて二禪以上なし。

無邊なり。識を以て之を緣ずるに、識多ければ則ち散じて、能く定を破る。行者は是の緣識を觀じて、受想行識は病の如く、癰の如く、瘡の如く、刺の如く、無常・苦・空・無我なり、欺誑に和合して而も有なれど、實有に非ざる也と。是の如く觀じ已つて、則ち識相を破る。是く識處を呵し、無所有處を讃し、諸の識相を破り、心を繫けて無所有の中に在く、是を無所有處定と名く。無處有處に受想行識を緣じて、病の如く、癰の如く、瘡の如く、刺の如く、無常・苦・空・無我なり、欺誑に和合して有なり、實有に非ざるなりと、是の如く思惟す。無想處は癰の如く、有想處は病の如く、癰の如く、瘡の如く、刺の如く、第一の妙處は是れ非有想非無想處なり。

問うて曰く、非有想非無想處に受想行識あり、云何なれば非有想、非無想と言ふや。

答へて曰く、是の中の有想は微細にして覺し難きが故に、謂つて非有想と爲す。有想の故に非無想なり。凡夫は心に、諸法實相を得るを謂つて、是を涅槃と爲す。佛法の中には、有想を知ると雖も、其の本名に因つて、名けて非有想非無想處と爲す。

問うて曰く、云何なるが是れ無想なる。

答へて曰く、無想に三種あり。一には無想定、二には滅受定、三には無想天なり。凡夫人は心を滅して無想定に入らんと欲し、佛弟子は心を滅して滅受定に入らんと欲す。是の諸の禪定に二種あり。若しくは有漏、若しくは無漏なり。有漏は卽ち是れ凡夫の行ずる所にして上に說くが如く、無漏は十六聖行を行ず。有漏道の若きは、上地の邊に依つて、下地の欲を離れ、無漏道の若きは、自地の欲及び上地を離る。是故に凡夫は有頂處に於て欲を離るることを得ず、更に上地の邊なきが故なり。佛弟子の若きは、欲界の欲、欲界の煩惱を離れんと欲し、思惟して九種の上中下なる上の上、上の中、上の下、中の上、中の中、中の下、下の上、下の中、下の下を斷ず。此の九種を斷ずるが故に、佛弟子は若し有漏道に依つて初禪を得んと欲せば、是の時未到地に於て、[二七]九無礙道・八解脫道の中、

【二七】九無礙道、九解脫道。三界に九地あり、九地の一一に見惑修惑あり、その修惑を一地每に九品に分ち斷ず、その一品の修惑と斷ずる每に、無礙道（無間道とも云ふ）と解脫道の二節あり、惑を斷ずる位を無礙道、斷じ畢りて解脫を得たる位を解脫道と名く。

復た悔いざるなり。念智とは、三禪の中の樂を得て、樂に於て患を生ぜしめざるなり。身樂を受くとは、是れ三禪の樂にして、遍身皆受く。聖人は能く得、能く捨つとは、此の樂は世間第一にして、能く心の著を生ずればなり。凡夫は能く捨つる者少し。是の故に佛說きたまはく、「慈を行ずるの果報は、還淨地の中の第一なり」と。行者の樂の失を觀ずることも亦た歡喜の如く、心の不動處を知るを、最も第一と爲す。若し動處あれば是れ則ち苦あり。行者は第三禪の樂動くを以ての故に不動の處を求め、以て苦樂を斷ず。先づ憂喜を滅するが故に、不苦不樂・捨・念・清淨にして第四禪に入る。是の四禪の中には、苦なく、樂なく、但だ不動の智慧のみ有り。是の故に第四禪は捨と念と清淨なりと說き、第三禪は、樂動くが故に苦なりと說く。是の故に第四禪の中には、苦樂を斷ずと說く。佛の說きたまふが如くんば、一切の色相を過ぎ、別相を念ぜず、有對の相を滅して、無邊虛空處に入ることを得。行者是の念を作し、若し色無ければ則ち飢渴寒熱の苦無し。是の身色は麁重・弊惡・虛誑にして實に非ず。先世の因緣の和合せる報として此の身を得、種種の苦惱の所住の處なり。云何んぞ當に此の身の患を免るることを得べき。[二六]當に此の身中は虛空なるを觀ずべし。常に身の空なること、籠の如く、甑の如しと觀じ。常に念じて捨てざれば、則ち色を度することを得て、復た身を見ず。內身の空なるが如く、外色も亦た爾なり。是の時、能く無量無邊の空を觀ず。此の觀を得已れば、苦なく樂なく、其の心轉た增す。鳥の瓶中に閉著せらるるに、瓶破れて出づるを得たるが如し。是を空處定と名く。是の空は無量無邊なり。識を以て之を緣ずるに、緣多ければ則ち散じ、能く定を破る。行者は虛空を觀じ、受想行識を緣ずるに、病の如く、癰の如く、瘡の如く、刺の如く、無常・苦・空・無我なり、欺誑に和合して則ち有れども、是れ實に非ざるなり。是の如く念じ已つて、虛空の緣を捨て、但だ識のみを緣ず。云何にしてか現前の識を緣じ、過去未來の無量無邊の識を緣ずる。是の識は無量無邊なること、虛空の無量無邊なるが如し。是を識處定と名く。是の識は無量

【二六】こゝに四無色定が說かれる、卽ち、空處定（空無邊處定）識處定（識無邊處定）無所有處定、非有想非無想處定（非想非非想處定）とである。

問うて曰く、阿毘曇に說くが如くんば、欲界乃至初禪の一心の中には覺と觀と相應す。今云何んぞ麁心の初念を名けて覺と爲し、細心の分別を名けて觀と爲すと言ふや。

答へて曰く、二法は一心に在りと雖も、二相は倶ならず。覺の時は觀は明了ならず、觀の時は覺は明了ならず。譬へば日出づれば、衆星現はれざるが如く、一切の心・心數法が時に隨つて名を受くるも亦復た是の如し。佛の說きたまふが如くんば、「若し一法を斷ぜば、我は汝は阿那含を得たることを證せん」と。一法とは所謂慳貪なり。實には應に[二四]五下分結を盡して、阿那含を得と說くべし、云何んぞ但だ一法を斷ずと言はん。是の人の慳貪は偏く多きを以て、諸餘の結使は皆な從つて生ず。是故に慳盡くれば、餘の結も亦た斷ずるなり。覺と觀と、時に隨つて名を受くるも亦復た是の如し。行者は是の覺・觀は是れ善法なりと雖も、而も定心を嬈亂すると知つて、心に離れんと欲するが故に、是の覺觀を呵して是の念を作さく、「覺觀は禪心を嬈動す。譬へば淸水も波盪すれば則ち見る所なきが如く、又疲極の人の息むことを得て、睡らんと欲するに、傍人喚呼して種種に惱亂するが如し。攝心の內の定を覺觀が嬈動するも亦復た是の如し」と。是の如きの種種の因緣によりて、覺觀を呵す。覺觀滅すれば、內淸淨にして、心を一處に繫け、覺なく觀なく、定生じ喜樂して[二五]二禪に入る。既に二禪を得れば、二禪の中に未だ曾つて得られざる無比の喜樂を得。覺觀滅すとは、覺觀の過罪を知るが故に滅す。內淸淨とは、深き禪定に入つて、初禪の覺觀を捨つれば得る所の利は重く、失ふ所は甚だ少く、獲る所は大に多きを信じ、心を一緣に繫くるが故に、內淸淨と名く。行者の喜の過を觀ることも亦た覺觀の如し。所喜の處に隨つて多喜なれど多憂なり。所以いかんとなれば貧人の寶を得れば、歡喜すること無量なれど、一旦之を失すれば、其の憂も亦た深きが如く、喜は即ち轉じて憂と成る。是故に當に捨つべし。此の喜を離るゝが故に捨と念智とを行じて身樂を受く。是の樂は聖人は能く得、能く捨つ。一心樂に在れば、第三禪に入る。捨とは、喜心を捨てて

【二四】五下分結。衆生を欲界に繫縛する五種の煩惱即ち、貪、瞋、身見、戒取見、疑の五結である。

【二五】二禪の相をもう一度、註しておく、內淨（こゝでは內淸淨）喜、樂、一心（こゝでは定）の四支である。註(22)參照。

聖人は能く捨つることを得、餘人は捨つるを難しと爲す。若し能く樂の患を知り、見、動かざれば大安なり。

憂喜先づ已に除き、苦樂今亦た斷じ、念を捨て、清淨心にして、第四禪の中に入る。

第三禪の中の樂は無常にして、動ずるが故に苦なり。欲界の中に憂を斷じ、初・二禪に喜を除く。是の故に佛世尊は、第四禪の中に說きたまはく、「先に已に憂苦を斷じ、今苦樂を除くことを得」と。』

復次に、持戒清淨にして、獨處に閑居し、諸根を守り攝し、初夜にも後夜には專精に思惟し、外樂を棄捨し、禪を以て自ら娛み、諸欲不善法を離るれば、未到地に依つて初禪を得。初禪は阿毘曇に說くが如し。禪に四種あり、一には味相應、二には淨、三には無漏、四には初禪に攝する所の報得の五衆なり。是の中、行者は淨、無漏に入る。二禪・三禪・四禪も亦た是の如し。佛の所說の如くんば、若し比丘ありて、諸欲及び惡不善の法を離るれば有覺・有觀にして、生を離れ喜・樂にして初禪に入る」と。諸欲とは愛著する所の色等の五欲なり、思惟分別して欲を呵すること先に說くが如し。惡不善の法とは、貪欲等の五蓋なり、此の內外の二事を離るるが故に初禪を得。初禪の相は[三]有覺・有觀・喜・樂・一心なり。有覺・有觀とは、初禪の中にて未だ曾つて得ざるところの善法の功德を得るが故に、心大に驚悟す、常に欲火の爲に燒れしが、初禪を得る時は清涼池に入るが如く、貧人の卒に寶藏を得るが如く、行者は欲界の過罪を思惟分別して、初禪は利益は功德甚だ多しと知り、心大に歡喜す。是を有覺・有觀と名く。

問うて曰く、有覺・有觀は、一法と爲んか。是れ二法と爲んか。

答へて曰く、二法なり。麁心の初念は是を名けて覺と爲し、細心の分別は是を名けて觀と爲す。譬へば鐘を撞くに、初聲の大なる時を名けて覺と爲し、後聲の微細なるを名けて觀と爲すが如し。

【三】既註の初禪の五支である。

すれば則ち百八なり、及び佛の得道・捨壽、是の如き等の種種の功德妙定は、皆禪の中に在り。是の故に禪を波羅蜜と名け、餘定を波羅蜜と名けず。

問うて曰く、汝は先に五欲を呵し、五蓋を除き、五法を行ずれば、初禪を得と言へり。何事を修し、何道に依つて、能く初禪を得るや。

答へて曰く、不淨觀、[二〇]安那般那等の諸定門に依る、禪經の禪義偈の中に說くが如し。

『欲及び惡法、有覺並に有觀を離れるれば、生を離れて喜・樂を得て、是の人は初禪に入る。

已に婬火を離るることを得て、則ち清涼定を得。人が大熱に悶えて、冷池に入れば、則ち樂むが如し。

貧（人）が寶藏を得れば、大に喜覺の心を動すが如く、分別して則ち觀を爲し、初禪に入ることも亦た然なり。

[二一]二法は心を亂すことを知らば、善と雖も而も離るべし、大水の澄靜なれば、波蕩も亦た見ゆること無きが如し。

譬へば、人の大に極めて安隱に睡臥する時、若し喚呼の聲あれば、其の心大に惱亂するが如し。

心を攝して禪に入る時は、覺觀を以て惱と爲す。是の故に覺觀を除けば、一識處に入ることを得るなり。

內心、淸淨なるが故に定生じて、喜と樂とを得。此の[二二]二禪に入ることを得れば、喜び勇んで心大に悅ぶ。

心を攝することは第一の定なり、寂然として念ずる所なく、患・喜・欲は之を棄つること、亦た覺・觀を捨つるが如し。

受に由るが故に喜あり、喜を失へば則ち憂を生ず、喜樂の身受を離れ、念及び方便を捨つ。

【二〇】安那般那（Anāpāna）。數息觀。

【二一】覺と觀とを意味する如し。

【二二】第二禪は、初禪。覺・觀を呵棄して得る。ここに、內淨、喜、樂、一心（定）の四支を得。偈はこの意を述べておる。猶、第三禪は、第二禪の喜受を呵棄して、捨、念、慧、樂、一心の五支があり、第四禪は第三禪の樂受を呵棄して、不苦不樂、捨、念、一心の四支がある。偈はその意味が述べられてあるのだ。

るが如く、摩竭魚の口を開くが如しと爲す。諸欲も亦た是の如く、甚だ怖畏すべし。若し諸欲に著せば、人をして惱苦せしむ。欲に著する人は亦た獄囚の如く、鹿の圍に在るが如く、鳥の網に入るが如く、魚の鉤を呑めるが如く、豺の狗を搏つが如く、烏の鵄群に在るが如く、蛇の野猪に値ふが如く、鼠の猫の中に在るが如く、群盲の坑に臨むが如く、蠅の熱油に著くが如く、[一七]倖人の陣に在るが如く、躄人の火に遭ふが如く、沸鹹の河に入るが如く、蜜を塗れる刀を舐るが如く、四衢の臠肉の如く、薄の刀林を覆ふが如く、華の不淨を覆ふが如く、蜜を塗れる毒甕の如く、毒蛇の篋の如く、夢の虛誑の如く、假借の當に歸すべきが如く、小兒を幻誑するが如く、焰の實なきが如く、大水に沒するが如く、船の摩竭魚の口に入るが如く、雹の穀を害するが如く、礔礰の人に臨むが如し。諸欲も亦た是の如く、虛誑・無實・無牢・無强にして、樂少く苦多し。欲は魔軍たり、善功德を破り、常に衆生に劫害を爲すが故に、是の如き等の種種諸の喩を出す。五欲を呵し、五蓋を除き、五法を行ずれば、初禪に至ることを得るなり。

問うて曰く、八背捨・八勝處・十一切入・四無量心・諸の定三昧、是の如き等の種種の定を波羅蜜と名けず、何を以てか但だ禪波羅蜜のみを言ふや。

答へて曰く、此の諸の定の功德は、都て是れ思惟修なり、禪は秦に思惟修と言ふ禪波羅蜜と言へば一切皆な攝す。復次に、禪は最大なること王の如く、禪を說けば則ち一切を攝し、餘定を說けば則ち攝せず。何んとなれば是の四禪の中は、智と定と等しくして樂なるを以てなり。[一八]未到地[一九]中間地は智多くして定少く、無色界は定多くして智少なく、是の處は樂に非ず。譬へば車の一輪は强く一輪は弱ければ、則ち安隱ならざるが如し、智と定と等じからざるも亦た是の如し。復次に、是の四禪處には、四等心・五神通・背捨・勝處・一切處・無諍三昧・願智・頂禪・自在定・練禪・十四變化心・般舟般・諸の菩薩の三昧首楞嚴等あり、略說すれば則ち百二十なり。諸佛の三昧の不動等は、略說

【一七】倖人。困憊疲勞せる人。

【一八】未到地。既註。未到定、未至定とも云ふ。欲界初禪の近分定を別に名けて未到定と云ふ。

【一九】中間地。また中間三昧、中間靜慮、中間禪とも云ふ。色界無色界の八地に各、根本定と近分定とあり。この中、初禪の近分定と根本定には覺と觀と相應し、第二禪以上は相應せず、たゞ此の中間に於て、たゞ觀の心數にのみ相應して、覺の心數に相應せざるあり、之を中間地と名く。

在世に疑ありと雖ども、當に妙善の法に隨ふべし。譬へば岐道を觀ては、利好の者を逐ふべきが如し。』

是の如き等の種種の因緣の故に應に疑蓋を捨つべし。是の五蓋を棄つるは、譬へば負債を脫することを得、重病を差ゆることを得、飢餓の地より豐國に至ることを得るが如く、獄より出づるを得るが如く、惡賊の中に於て、自ら免れ濟ふことを得て、安隱にして患なきが如し。行者も亦是の如く、五蓋を除却すれば其の心、安隱にして淸淨快樂なり。譬へば日月を五事を以て覆曀するが如し。(卽ち)煙・雲・塵・霧・羅睺[一五]・阿修羅の手もて障ゆれば、則ち明かに照すこと能はず。人心も亦た是の如く、五蓋の爲に覆はれて、自ら利なること能はず、亦た人を益することも能はざるなり。若し能く五欲を呵し、五蓋を除き、五法(卽ち)欲・精進・念・巧慧・一心を行ずれば、[一六]五支を得て、初禪を成就す。欲は欲界の中より出でんと欲し初禪を得んと欲するを名く。精進は家を離れ戒を持ち、初夜にも後夜にも專精にして懈らず、食を節し、心を攝し、馳散せしめざるを名く。念は初禪の樂を念じて、欲界は不淨、狂惑にして賤しむ可く、初禪は尊重にして貴む可しと知るを名く。巧慧は欲界の樂と初禪の樂との輕重得失を觀察し籌量するを名け、一心は、常に心を緣中に繫けて、分散せしめざるに名く。

復次に、專ら初禪を求めて欲樂を放捨することは、譬へば患怨を常に滅除せんと欲すれば、則ち怨の爲に害せられざるが如し。佛、欲に著する婆羅門の爲に說きたまふが如くんば、我は本、欲を觀じて、欲を怖畏憂苦の因緣と爲し、欲を樂少くして其苦甚だ多しと爲し、欲を魔網の纏綿して出で難しと爲し、欲を燒熱の諸樂を乾竭すと爲す。譬へば、樹林の四邊より火起るが如し。欲を火坑に臨んで甚だ怖畏すべきが如く、毒蛇に逼るが如く、怨賊の刀を拔くが如く、惡羅刹の如く、惡毒の口に入るが如く、銷銅を呑むが如く、三流の狂象の如く、大深坑に臨むが如く、師子の道を斷ず

【一五】羅睺。阿修羅の名なり。旣註、(Rahu asura)帝釋と戰ふとき、其手を以て日月を蔽ふ。

【一六】五支。初禪に於て五の功德法、卽ち、覺、觀、喜、樂、一心の五支これなり、此等の功德法に依て禪を支持する故に支と名ける。

る。既に法の利はなく、世樂をも失せん。』

悔の法とは、大罪を犯す人が、常に畏怖を懷くが如し。悔の箭心に入れば、堅くして拔く可らず、偈に說くが如し。

『作すべからざるを作し、作すべきを作さゞれば、悔の惱火に燒かれ、後世には惡道に墮す。若し人の罪にして能く悔い、已に悔いなば則ち放捨すべし。是の如くなれば心安樂なり、應に常に念著すべからず。

若しくは二種の悔あり、不作を已作の若くし、是を以て悔を心に著す、是れは則ち愚人の相なり。

心を以て悔いざるが故に、不作なれども而も能く作す。諸の惡事の已に作せるは、不作とならしむること能はず。』

是の如き等の種種の因緣もて、掉悔蓋を呵す。

疑蓋とは、疑心を覆ふを以ての故に、諸法の中に於て定心を得ず。定心なきが故に、佛法の中に於て空にして所得なし。譬へば人の寶山に入るに、若し手なくんば、能く取る所なきが如し。疑の義を說ける偈に言ふが如し。

『人の岐道に在つて、疑惑して趣く所なきが如く、諸法實相の中の疑も亦復た是の如し。

疑の故に諸法の實相を懃求せず。是の疑は癡より生ず、惡中の弊惡なり。

善と不善との法の中、生死及び涅槃は、定んで實に眞有の法なり、中に於て疑を生ずること莫れ。

汝、若し疑心を生ぜば、死王・獄吏の縛すること、師子の鹿を搏つが如く、解脫を得ること能はざらん。

若し瞋恚を滅せんと欲せば、當に慈心を思惟し、獨り自ら淸閑に處して、事を息め、因緣を滅すべし。

當に老病死を畏れ、九種の瞋惱を除くべし。是の如く慈を思惟せば、則ち瞋の毒を滅することを得ん。』

是の如き等の種種の因緣もて、瞋恚の蓋を除く。

睡眠蓋とは、能く今世の三事なる欲樂・利樂・福德を破し、能く今世後世の究竟の樂を破し、死と異なること無く、唯だ氣息有るのみ。一菩薩の偈を以て、睡眠の弟子を呵して言へるが如し。

『汝起きよ、臭身を抱いて臥すこと勿れ。種種の不淨を假りに人と名く。重病を得、箭の體に入るが如く、諸の苦痛の集なり、安んぞ眠るべけん。

一切の世間は死の火に燒かる、汝當に出でんことを求むべし、安んぞ眠る可き。人の縛せられて、將さに去つて殺されんとするが如し、災害至るに垂とす、安んぞ眠る可けん。

結賊滅せざれば、害は未だ除かず、毒蛇と共に同室に宿るが如く、亦た陣に臨んで白刄の間にあるが如し、爾の時安んぞ而も睡眠す可けんや。

眠は大闇たり、見る所なし。日日に侵し誑いて人の明を奪ふ。眠は心を覆ふを以て、識る所なし。是の如きの大失あり、安んぞ眠る可けんや。

是の如き等の種種の因緣もて、睡眠の蓋を呵す。』

掉悔蓋とは、之を掉かすを法と爲し、出家の心を破る。人の心を攝する如きすら、猶ほ住まること能はず、何に況んや掉散せんをや。掉散の人は、鉤なき醉象、鼻を缺ける駱駝の如く、禁制すべからず。偈に說くが如し。

『汝は已に頭を剃り、染衣を著し、瓦鉢を執持して、乞食を行ず。云何んぞ戲掉の法に樂著す

られず。

是の如き諸の觀法は、能く諸欲の火を滅すること、譬へば大に澍げる雨には、野火の在るもの無きが如し。』

是の如き等の種種の因緣もて、欲蓋を滅除す。

瞋恚蓋は、諸の善法を失するの本、諸の惡道に墮するの因、法樂の怨家、善心の大賊、種種の惡口の府藏なり。佛の瞋れる弟子を敎へたまひし偈に言ふが如し。

『汝當に、思惟して[一四]受身と、及び處胎と、穢惡の幽苦と、旣生の艱難とを知るべし。

旣に此の意を思ひ得て、而も復た瞋を滅せずんば、則ち知るべし。此の輩は則ち是れ心無き人なることを。

若し罪に報果なく、亦た諸の呵責なくとも、猶ほ當に慈忍すべし、何に況んや苦の果の劇しきに於いてをや。

當に老病死には、一切免るゝ者なきを觀ずべし、當に慈悲心を起すべし、云何んぞ惡を物に加へん。

衆生は相怨み賊ひ、斫刺して苦毒を受く、云何んぞ修善の人にして、而も復た惱害を加へん。

常に當に慈悲を行じ、定心にして諸善を修すべし、惡意を懷いて一切を侵害すべからず。

若し道法を勤修するに、惱害すれば則ち行ぜず、善惡の勢は竝ばざること、水火の相背くが如し。

瞋恚來つて心を覆へば、好醜を分つことを知らず、亦た利害を識らず、惡道を畏るゝことを知らず。

他の苦惱を計らず、身心の疲るるを覺らず、先に自ら苦因を受け、然る後他人に及ぼす。

【一四】受身。處胎・幽苦、旣生、の四は、生誕にいたるまでの經過。

鎧を著て刀杖を持し、敵を見て而して退き走らば、是の如き怯弱の人は、世を擧げて輕笑せられん。

比丘は乞士たり、髮を除き袈裟を著く、五情の馬に制せらるれば、笑を取ること亦た是の如し。

又豪貴の人の、盛服以て身を嚴り、而も行いて衣食を乞はば、笑を衆人に取るが如し。

比丘の飾好を除き、形を毀ち、以て心を攝しつゝ、而も更に欲樂を求めなば、笑を取ること亦た是の如し。

已に五欲の樂を捨て、之を棄てゝ顧みず。如何んぞ還た得んことを欲して、愚（人）の自ら吐けるを食ふが如くならん。

是の如き貪欲の人は、本願を觀ることを知らず、亦た好醜を識らずして、渇愛に狂醉す。

慚愧は尊重の法なり、一切皆已に棄てたる賢智の親まざる所にして、愚騃の愛し近づく所なり。

諸欲は求むる時苦しく、之を得れば怖畏多く、失ふ時は熱惱を懷く。一切樂しむ時なし。

諸の欲の患は是の如し、何を以てか當に之を捨つべき。諸の禪定の樂を得れば、則ち爲に欺かれず。

樂を欲し著して厭くこと無くんば、何を以てか能く滅除せん。若し不淨觀を得ば、此の心自然に無けん。

欲に著して自覺せずんば、何を以てか其の心を悟らん。當に老病死を觀じて、爾して乃ち四淵を出づべし。

諸欲は放捨すること難し、何を以てか能く之を遠けん。若し能く善法を樂しまば、此の欲は自然に息まん。

諸欲は解く可きこと難し、何を以てか能く之を釋かん。身を觀じて實相を得ば、則ち爲に縛せ

を知り、女は便ち道中に在つて臥して言く、「我極めり、復た行くこと能はず」と。仙人言く、「汝行くこと能はずんば、我が項上に騎れ、當に汝を項にして去るべし」と。女は先きに信を遣はして王に白さく、「王よ、我が智能を觀る可し」と。王は勅して駕を嚴り、出でゝ之を觀、問うて言く、「何に由つてか爾ることを得たるや」と。女は王に白して言さく、「我は方便力を以ての故に、今已に是の如く、復た能する所なし。城中に住せしめて、好く之を供養し恭敬し、五欲を足らしめよ」と。拜して大臣と爲す。城に住すること少日にして、身轉た羸痩し、禪定の心樂を念ひて、此世の欲を厭ふ。王、仙人に問ふ「汝何んぞ樂まずして、身は轉た羸痩するや」と。仙人、王に答ふ「我は五欲を得と雖も、常に自ら林間の閑靜なる諸仙の遊處を憶ひ念じて心を去ること能はず」と。王自ら思惟すらく「若し我强いて其の志に違はゞ、志に違ふを苦となし、苦極つて則ち死せん。本より以て旱患を除かんことを求む、今已に之を得たり、當に復たび何に緣つてか、强いて其の志を奪ふべき」と。卽ち之を發遣す。旣に山中に還りて、精進すること久しからず、還たび五通を得たり。佛、諸の比丘に告げたまはく、「一角仙人は我が身是なり。婬女は耶輸陀羅是なり。爾の時に歡喜丸を以て我を惑はせるに、我は未だ結を斷ぜず、之が爲に惑はさる。今復た藥の歡喜丸を以て我を惑はさんと欲すれども得べからざるなり」と。是の事を以ての故に、細軟の觸法は能く仙人をも動かすを知る。何に況んや、愚夫をや。是の如きの種種の因緣、是を細滑の欲を呵すと名く。是の如くにして五欲を呵す。

五蓋を除くとは復次に、貪欲の人は道を去ること甚だ遠し。所以いかんとなれば、欲は種種の惱亂の住處たり、若し心貪欲に著せば、道に近づくに由なければなり。欲蓋を除く偈に說く所の如し。

『入道せる慚愧の人は、鉢を持して衆生を福いす。云何んぞ塵欲を縱まゝにて、五情に沈没せんや。

爲にする者には當に國の半を分ち與へて治せしむべし」と。是の婆羅捺國に婬女あり、名けて扇陀と曰ふ。端正無雙なり。來つて王の募に應ず。諸人に問うて言く、「此は是れ人か、非人か」と。衆人言く、「是は人のみ、仙人の生ずる所なり」と。婬女言く、「若し是れ人ならば、我能く之を壞せん」と。是語を作し已つて金盤を取り、好き寶物を盛つて王に語つて言く、「我當に仙人の項に騎つて來るべし」と。婬女は卽時に五百乘の車を求め、五百の美女を載せ、五百の鹿車に種種の歡喜丸を載せ、皆衆の藥草を以て之に和し、衆彩を以て之に畫きて雜果に似せしめ、及び種種の大力の美酒を持して、色味を水の如くし、樹皮衣・草衣を服て林樹の間を行きて、以て仙人に像り。仙人の菴の邊に於て草庵を作つて而して住す。一角仙人、遊行して之を見るに、諸女皆出でゝ迎逆し、好華、好香を以て仙人に供養するに仙人は大に喜ぶ。諸女は美言敬辭を以て仙人を問訊し、將ゐて房中に入れ、好床の蓐を坐せしめ、好き淨酒を與へて以て淨水と爲し、歡喜丸を與へて以て果蓏と爲す。食ひ飲み飽き已つて諸女に語つて言く、「我は生れてより已來、初より未だ此の如きの好果好水を得ず」と。諸女言く、「我は一心に善を行ずるが故に、天我が願に與へて、此の好水好果を得たり」と。仙人、諸女に問ふ、「汝は何を以ての故に、膚色肥盛なるや」と。答へて言く、「我曹は、此の好果を食し、此の美水を飲むが故に、肥盛なること此の如し」と。女、仙人に白して言く、「汝は何を以てか、此の間に在つて住せざるや」と。答へて曰く、「亦た住す可きのみ」と。女言く、「共に澡洗す可し」と。卽ち亦た之を可とす。女の手は柔軟にして之に觸れて心動ず。便ち復た諸美女と更互に相洗ひ、欲心轉た生じ、遂に婬事を成す。卽ち神通を失ひて、天は大雨を爲す。七日七夜、歡樂して飲食を得せしめしに、七日已りて後、酒食皆盡きたり、繼ぐに山水木果を以てするに、其の味美ならず、更に前の者を索む。答へて言く、「已に盡きたり、今當に共に行くべし。此を去ること遠からずして得べき處あり」と。仙人言く、「意に隨はん」と。卽ち共に出づ。婬女城を去ること遠からざる

て、必ず宮中に還りたまふべし」と冀ひしが、佛の食は常の如く、身心に異なること無かりき。諸の比丘は明日、食時に著衣持鉢して城に入つて乞食し、具に此の事を聞き、増益恭敬して「佛力は無量にして神心測り難く、不可思議なり、耶輸陀羅の藥、歡喜丸は、其の力甚だ大なれども、而も世尊之を食したまふて身心に異なること無し」と。諸の比丘は食し已つて城を出で、是の事を以て具に世尊に白す。佛、諸の比丘に告げたまはく、「汝聞かんと欲するや不や、諦かに之を聽け、此の耶輸陀羅は、但だ今世にのみ、歡喜丸を以て我を惑はすに非ず、乃往過去世の時も、亦た歡喜丸を以て我を惑はせり」と。爾の時に世尊、諸の比丘の爲に、本生の因緣を說きたまふ。過去久遠世の時、婆羅捺國の山中に仙人あり。仲春の月を以て、澡盤の中に於て小便するに、鹿の麀麀の合會するを見て、婬心卽ち動き、精を盤中に流す。麀鹿之を飲んで、卽時に娠む有り。月滿みて、子を生むに、形類人の如く、唯、頭に一角あり、其の足は鹿に似たり。鹿は產まんとする時、仙人の菴の邊に至つて產めり。子を見るに是れ人なり、以て仙人に付して去る。仙人は出づる時、此の鹿の子を見、自ら本緣を念じ、是れ已が兒なるを知りて、取つて已に養育す。其の年大なるに及んで、學問を懃敎し、十八種の大經に通じ、又坐禪を學び、四無量心を行じて、卽ち五神通を得。一時、山に上つて大雨に値ふ。泥滑らかにして、其の足便ならず、地に躄きて其の鉀持を破り、又其の足を傷け、便ち大に瞋恚し、鉀持を以て水を盛り、呪して雨らざらしむ。仙人の福德もて、諸龍鬼神も皆爲に雨らさず、雨らざるが故に、五穀五果盡く皆生ぜず、人民は窮乏して復た生路なし。婆羅捺國王は憂愁懊惱し、諸の大臣に命じ集つて雨の事を議せしむ。明者議して言く、「我嘗て傳へ聞く、仙人山中に一角仙人あり、足便ならざるを以ての故に、山に上つて地に躄き足を傷め、瞋つて此雨を呪し、十二年墮ちざらしむ」と。王思惟して言く「若し十二年雨らずんば、我が國は了り、復た人民なけん」と。王卽ち募を開き、「其の能く仙人をして五通を失はしむる有りて、我に屬して民の

び楊枝を以て一切に施せり」と。仙人の言く、「王は已に施すと雖も、我が心の疑悔の罪を除かざるなり。願はくは今治せられ、後に罪せしむることなかれ」と。王の言く、「若し必ず爾せんと欲せば、小らく停つて我が入り還らんを待て」と。王は宮中に入つて六日出でず。此の仙人は王の園中に在ること六日にして飢渇す。仙人思惟すらく、「此の王は、正しく此を以て我を治す」と。王は六日を過ぎて出でて仙人に辭謝すらく、「我は便ち相忘れたり、咎めらるゝ莫れ」と。是の因緣を以ての故に、五百世に三惡道の罪を受け、五百世に常に六年母の胎內に在り。是を以て證するが故に、耶輸陀羅は罪あること無きなり」と。是の時に世尊は食し已つて出で去りたまふ。耶輸陀羅は心に悔恨を生ずらく、「此の如きの好人は世の希有とする所、我、遭遇することを得て而も今永く失ふ」と。世尊坐したまふ時には、諦視して眴かず、世尊、出でたまふ時には、後に尋いで之を觀、遠く沒すれば乃ち止み、心大に懊恨す。一たび思ひ至る每に、地に躄して氣絕ゆ。傍人水を以て之に灑いで、乃ち蘇息することを得、常に獨り思惟すらく、「天下に誰か善く呪術を爲して、能く其の心を轉じ、本意に復らしむること能はゞ、歡樂初の如くならん」と。卽ち七寶の名珠を以て、金盤の上に著け、以て持して人を募る。一の梵志あり之に應じて言く、「我能く之を呪して、其の意を轉ぜしめん。當に百味の歡喜丸を作り、藥草を以て之に和し、呪語を以て之を禁せば、其の心便ち轉じて、必ず來らんこと疑なかるべし」と。耶輸陀羅は其教法を受け、人を遣はして佛を請し、「願はくは聖衆と俱に、威神を屈したまへ」と。佛、王宮に入りたまひし時、耶輸陀羅は卽ち百味の歡喜丸を遣して佛鉢の中に著く、佛は既に之を食したまふ。耶輸陀羅は冀想す、「願の如く、歡娛すること初の如くならん」と。佛は食したまふに、異なること無く、心自から澄靜なり。耶輸陀羅の言く、「今動ぜざるは、藥力の未だ行かざるが故なるのみ、藥勢發する時は、必ず我が願の如くならん」と。佛は飯食し訖り、而して呪願し已つて、座より起つて去りたまふ。耶輸陀羅は、「藥力は、晡時、日入るれば當に發し

薩は出家して六年苦行するに、耶輪陀羅も亦た六年懷姙して產まず。[三]諸釋之を詰りて、「菩薩は出家せるに、何に由つてか此ある」と。耶輪陀羅言く、「我に他罪なし。我が懷む所の子は、實に是れ太子の體胤なり」と。諸釋の言く、「何を以てか久しくして而も產まざる」と。答へて言く、「我が知る所に非ず」と。諸釋は集つて議し、王に聞して法の如くに治罪せんと欲す、瞿毘耶は王に白して、「願はくは之を寬恕したまへ。我は常に耶輪陀羅と共に住せり。我其の證たり、其の罪なきことを知る。其の子の生るゝを待つて、父に似るや不やを知つて、之を治するも晩きこと無けん」と。王は卽ち寬置す。佛、六年の苦行既に滿ち、初めて成佛したまふ時、其の夜羅睺羅を生む。王は其の父に似たるを見て、愛樂して、憂を忘れ、群臣に語つて言く、「我が兒は去ると雖も、今や其子を得たり。兒の在ること異なることなし」と。耶輪陀羅は罪黜を免れしと雖も、惡聲國に滿てり、耶輪陀羅は惡名を除かんと欲せり。佛は成道し已つて迦毘羅婆に還り、諸の釋子を度したまふ時、淨飯王及び耶輪陀羅は、常に佛を請し宮に入つて食せしむ。是時耶輪陀羅は、一鉢の百味の歡喜丸を持つて羅睺羅に與へて、持つて佛に上つらしむ。是時佛は神力を以て、五百の阿羅漢を變じて、佛身の如くにし、別異あること無からしむ。羅睺羅は七歲の身を以て、歡喜丸を持つて、徑に佛前に至つて世尊に奉進す。是の時佛は神力を攝めたまふに、諸の比丘の身は復た故の如く、皆空鉢にして坐す。唯、佛鉢の中のみに歡喜丸を盛滿す。耶輪陀羅卽ち王に白して言く、「此を以て我罪なきことを證驗するなり」と。耶輪陀羅卽ち佛に問うて言く、「我は何の因緣あつてか懷姙すること六年なるや」と。佛の言はく、『汝が子羅睺羅は、過去久遠世の時、曾つて國王と作る。時に一の五通の仙人あり、來つて王國に入り、王に語つて言く、「王法は賊を治す、請ふ我が罪を治したまへ」と。王言く、「汝何の罪かある」と。答へて言く、「我は王國に入つて不與取を犯す、輙ち王の水を飲み、王の楊枝を用ふ」と。王の言く、「我は相與ふるを以て、何の罪かこれ有らん。我、初めて王位に登るとき、皆、水及

【三】諸釋。諸の釋迦族の人達。

朝に之を見て、其の常にあらざるを奇とし。即ち送つて王に與ふ。王は此の果の香色の殊異なるを珍とす。太子は之を見て便ち索む。王は其子を愛して、即ち以て之を與ふ。太子は果を食して其の氣味を得、染心深く著して日日に得んと欲す。王即ち園人を召して、其の所由を問ふに、園を守る人言く、「此果は種なし、地より之を得たれども、由來する所を知らざるたり」と。太子は啼哭して食せず、王は園人を催責して、「汝之を得よ」と仰す。園人は果を得し處に至り、見るに鳥巢あり、鳥の銜み來るを知り、身を樹上に翳し、伺つて之を取らんと欲し、鳥の母來れる時、即ち奪つて果を得て送り、日日に是の如くす。鳥の母は之を怒り、香山の中に於て毒果を取る、其の香味色は、全く前者に似たり。園人は奪ひ得て王に輸り、王は太子に與へしに、之を食して未だ久しからざるに、身肉爛壞して死せり。[九]味に著すれば是の如き身を失ふの苦あり。是の如き等の種種の因緣、是を味欲に著するを呵すと名く。

云何に觸を呵するや。此の觸は是れ諸の結使を生ずるの大因にして、心を繫縛するの根本なり。何となれば餘の[一〇]四情は則ち各其分に當るのみなれど、此は則ち身と識とに遍滿して生ずる處廣きが故に、多く染著を生ずるを以ての故なり。此の著は離れ難し。何を以てか之を知るや。人の色に著するが如きは、身の不淨の三十六種を觀ずれば、則ち厭心を生ず。觸中に於て著を生ずる若きは、不淨なりと知ると雖も、其の細軟を貪り、不淨を觀ずるも益する所なし、是の故に離れ難し。復次に、其の捨て難きを以ての故に、之を爲せば常に重罪を作る、若し地獄に墮せば、地獄に二部あり、一を寒氷と名け、二を焰火と名く。此の二獄の中は、皆な身觸を以て罪を受け、苦毒萬端なり。此觸を名けて大暗黑の處となす、危難の嶮道なり。　復次に、羅睺羅の母の如し本生經の中に說くが如く、釋迦文菩薩に二の夫人あり。一を[一一]瞿毘耶と名け、二を[一二]耶輸陀羅と名く。耶輸陀羅は羅睺羅の母なり。瞿毘耶は是れ寶女の故に子を孕まず。耶輸陀羅は菩薩出家の夜を以て、自ら娠身を覺ふ。菩

【九】「味に著す……苦あり」は別本になし。
【一〇】四情。觸を除ける色・聲・香・味。
【一一】瞿毘伽(Gopikā)。
【一二】耶輸陀羅(Yaśodharā)。

神之に語つて言く、「汝何を以ての故に、彼の林下の禪淨の坐處を捨てて、而して我が香を偸むや」と。香に著するを以ての故に、諸の結使の臥せる者、今皆覺めて起れり。時に更に一人あり、來つて池中に入り、多く其花を取り、根莖を掘り挽き、狼藉して去れるに、池神は默して言ふ所なし。比丘言はく、「此人は汝が池を破り、汝が花を取れるに、汝は都て言ふこと無し。我は但だ池の岸の邊に行くに、便ち見て呵し罵つて、我が香を偸むと言ふ」と。池神の言く、「世間の惡人は常に罪垢の糞中に在つて、不淨に頭を沒す、我は共に語らざるなり。汝は是れ禪を行ずる好人なるに、而も此香に著して汝が好事を破る。是の故に汝を呵すなり。譬へば白氎の鮮淨なるに、而も黑物の點汚あれば、衆人皆見るが如し。彼の惡人は、譬へば黑衣に墨を點ずるが如し。人の見ざる所なり。誰か之を問ふ者ぞ」と。是の如き等の種種の因緣は、是を香欲を呵すと名く。

云何に味を呵するや。當に自ら覺悟すべし、「我は但だ美味に貪著するを以ての故に、當に衆苦を受くべし。洋銅もて口に灌ぎ、燒けたる鐵丸を噉ふ。若し食法を觀ぜず、嗜心堅著すれば、不淨蟲の中に墮せん」と。一の沙彌の如し。心常に酪を愛し、諸の檀越、僧に酪を餉るとき、沙彌は殘分を得る每に、心中に愛著し、樂しみ喜んで離さざりしが、命終の後、此の殘酪の瓶中に生ぜり。沙彌の師は阿羅漢道を得たり。僧の酪を分つ時、語つて言く、「徐徐とせよ、此の愛酪の沙彌を傷くること莫れ」と。諸人言く、「此は是れ蟲なり、何を以てか愛酪の沙彌と言ふや」と。答へて言く、「此蟲は、本是れ我が沙彌なり。但だ坐して殘酪を貪愛せし故に、此の瓶中に生れたり」と。師、酪の分を得たるに、蟲は中に在つて來れり。師言く、「酪を愛するの人よ、汝は何を以てか來れる」と。卽ち酪を以て之に與へき。　復次に、一國王の如し。月分王と名く。太子有り美味に愛著せり。王の園を守る者、日に好果を送る。園中に一の大樹あり、樹上に鳥あつて子を養ひ、鳥母は常に飛んで香山の中に至り好き香果を取つて以て其子を養ふ。衆子之を爭ひ一果地に墮つ。園を守る人、晨

の歌ふ聲を聞いて卽ち禪定を失ひ、心醉ひ、狂逸にして自ら持つこと能はざること、譬へば大風の諸の林樹を吹くが如く、此の細妙なる歌聲の柔軟淸淨なるを聞いて、邪念の想を生ず。是の故に心の狂へるを覺らず、今世には諸の功德を失し、後世には當に惡道に墮すべし。有智の人は、聲の念念に生滅し、前後に倶ならず、相及ぶ者なきを觀ず。是の如き知を作さば則ち染著を生ぜず。斯の如きの人は、諸天の音樂すら尙ほ亂すこと能はず、何に況んや人聲をや。是の如き等の種種の因緣は、是を聲欲を呵すと名く。

云何に香を呵するや。人、「香に著するは罪少し」と謂へども、香に染愛すれば結使の門を開き、復た百歲戒を持つと雖も、能く一時に之を壞す。一の阿羅漢の如し。常に龍宮に入り、食し已つて鉢を以て、沙彌に授與して洗はしむ。鉢の中に殘飯數粒あり、沙彌之を嗅ぐに大に香しく、之を食するに甚だ美なり。便ち方便を作して、師の繩床の下に入り、兩手を以て繩床の脚を捉へ、其師至るの時、繩床と倶に龍宮に入る。龍の言く「此(人)は未だ得道せず、何を以て將ゐ來るや」と。師言く、「覺せざりき」と。沙彌は之を飯食するを得、又龍女の身體、端正香妙にして無比なるを見、心大に染著して卽ち要願を作さく、「我當に福を作して、此龍の處を奪ひ、其宮殿に居すべし」と。龍の言く、「後此の沙彌を將ゐ來ること莫れ」と。沙彌は還り已つて一心に布施し持戒し、專ら所願を求む、「願はくは早く龍と作らん」と。是の時寺を遶るに足下より水出で自ら「必ず龍と作ることを得」と知る。徑に師の本入る處の大池の邊に至り、袈裟を以て頭を覆ひ、入つて卽ち死し、變じて大龍と爲る。福德大なるが故に、卽ち彼の龍を殺す、池を擧げて盡く赤し。未だ爾らざるの前、諸師及び僧は之を呵す。沙彌の言く、「我が心は已に定まり、心相已に出づ」と。時に師は諸の衆僧を將ゐ、池に就て之を觀る。是の如きの因緣は、香に著するに由るが故なり。　復次に、一の比丘あり、林中の蓮華池の邊に在つて經行せるに、蓮華の香を聞ぎ、[八]其心悅樂して過つて心に愛す。池

【八】「其心……愛す」は別本にては「鼻に受けて心に著す。」とあり。

諸欲の樂は甚だ淺く、大苦の患は甚だ深し。
諸欲は得て厭くこと無く、之を失へば大苦と爲る。未だ得ざれば願つて得んと欲し、之を得れば爲に惱まさる。
諸欲の樂は甚だ少く、憂苦の毒は甚だ多し、之が爲に身命を失ふこと、蛾の燈火に赴くが如し。』

山神は此の偈を聞き已つて、卽ち此の人を擎さげて、送つて伴の中に至れり。是れ智者の爲に、欲の不可なることを呵するなり。五欲に著する者は、名けて妙なる色・聲・香・味・觸と爲す。禪定を求めんと欲せば、皆應に之を棄つべし。

云何に色を棄て、色の患を觀ぜん。若し人色に著すれば、諸の結使の火、盡く皆な熾然として人身を燒害すること、火の金銀を燒くが如し。煮沸せる熱蜜は色味ありと雖も、身を燒き口を爛らす、急に應に之を捨つべし。若し人、妙色・美味に染著するも、亦復た是の如し。 復次に、好惡は人に在り、色は定なし。何を以てか之を知る。遙に所愛の人を見れば、卽ち喜愛の心を生じ、若し遙に怨家惡人を見れば、卽ち怒害の心を生じ、若し中人を見れば、則ち怒ること無く喜ぶこと無きが如し。若し此の喜・怒を棄てんと欲せば、當に邪念及び色を除き、一時に倶に捨つべし。譬へば洋金の身を燒くが如し。若し之を除かんと欲せば、但だ火のみを棄てんと欲して、金を留むることを得ず、要ず當に金と火と倶に棄つべし。頻婆娑羅王の如きは、色を以ての故に、身敵國に入り、獨り婬女[六]阿梵婆羅が房中に在り。[七]憂塡王は色染を以ての故に、五百の仙人の手足を截る。是の如き等の種種の因緣は、是を色欲を呵すと名く。

云何に聲を呵するや、聲相は停まらず、暫らく聞えて卽ち滅す。愚癡の人は聲相の無常にして變失するを解せざるが故に、音聲の中に於て、妄に好樂を生じ、已に過ぎたるの聲に於て、念じて而して著を生ず。五百の仙人の如し。山中に在つて住するに、甄陀羅女が雪山の池の中に於て浴し其

【六】阿梵婆羅（Āmvapālī）。菴婆羅女、既註。
【七】憂塡王（Udyana）。憍賞彌城主、佛陀に惡意を持てる摩揵提女の夫。

我は甘露味を得て、安樂にして林間に坐す。恩愛の衆生、之が爲に慈心を起すのみ。』

是の時に三女は心に慚愧を生じ、自ら説いて言く、「此人は欲を離れて動かす可らざるなり」と。卽ち滅し去つて現ぜず。

問うて曰く、何の方便を行じてか禪波羅蜜を得るや。

答へて曰く、[二]五事を却け、[三]五法を除き、[四]五行を行ず、云何にして五事を却けん。當に[五]五欲を呵責すべし。哀い哉、衆生は常に五欲の爲に惱まされ、而も猶ほ之を求めて已まず。此の五欲は之を得れば轉た劇しくなること火に疥を炙るが如く、五欲は益なきこと狗の骨を齩むが如く、五欲は諍を增すこと鳥の肉を競ふが如く、五欲は人を燒くこと逆風に炬を執るが如く、五欲は人を害すること悪蛇を践むが如く、五欲は實なきこと夢の所得の如く、五欲は久しからざること假借の須臾なるが如し。世人の愚惑なる、五欲に貪著して死に至るまで捨てず、之が爲に後世に無量の苦を受く。譬へば愚人が好果に貪著して、樹に上つて之を食ひ、時に下るを肯んぜず、人、其の樹を伐り、樹傾いて乃ち墮ち、身首毀壞し、痛み惱んで而して死するが如し。又此の五欲は得る時は須臾にして、樂失する時は大苦と爲る。蜜を刀に塗つて舐る者が、甜を食つて舌を傷くるを知らざるが如し。五欲の法は畜生と共なり、有智の者は之を識つて能く自ら遠離す。説くが如く、一の優婆塞あり、衆の估客と遠く出でて治生す。是時、寒雪に夜行して、伴を失ひ、一の石窟の中に在つて住す。時に山神變じて一女と爲り、來つて之を試みんと欲し、此の偈を說いて言く、

『白雪山地を覆ふて、鳥獸は皆隱藏す。我獨り恃む所なし。唯願はくは愍傷せられよ。』

優婆塞は、兩手を以て耳を掩ひ、而して偈もて答へて言く、

『無羞弊惡の人は、此の不淨の言を說く、水に漂ひ、火を燒け去るとも、汝の聲を聞くことを欲せず。婦ありとも心に欲せず、何に況んや、邪婬を造んや。

【二】　五事。割註あり「五塵」と。卽ち、色・聲・香・味・觸の五境なり。この五は能く眞性を染汚する故に、塵と名く。

【三】　五法。割註あり、「五蓋」と。卽ち、貪欲、瞋恚、睡眠、悼悔、疑法の五蓋なり。心性を覆蓋して善法を生ぜざらしむる故に蓋と云ふ。

【四】　五行。欲・精進・念・巧慧・一心これなり。

【五】　五欲。五境。

故に、智慧も亦た淨し。譬へば油炷淨きが故に、其の明も亦た淨きが如し。是れを以ての故に、淨智慧を得んと欲する者は、此の禪定を行ず。復次に、世間の近事を求むる若きすら、專心なること能はずんば、則ち事業は成らず、何に況んや甚深の佛道にして、而も禪定を用ゐざらんや。禪定は「諸の亂心を攝す」と名く。亂心は輕飄なること鴻毛よりも甚だしく、馳散して停らず、駃ること疾風に過ぎ、制止すべからざること獼猴よりも劇しく、暫らく現じて轉た滅すること掣電よりも甚し。心相も是の如く、禁止す可らず。若し之を制せんと欲するに、禪に非ずんば定まらず。偈に說くが如し。

『禪は智を守るの藏、功德の福田たり。禪は清淨の水たり、能く諸の欲塵を洗ふ。
禪は金剛の鎧たり、能く煩惱の箭を遮る。未だ[一]無餘を得ずと雖も、涅槃の分を已に得。
金剛三昧を得て、結使の山を摧碎し、六神通の力を得て、能く無量の人を度す。
囂塵は天日を蔽ふも、大雨は能く之を淹ふ。
覺・觀の風は心を散ずれども、禪定は能く之を滅す。』

復次に、禪定は得難し、行者は、一心に專ら求めて廢せずんば、乃ち當に之を得べし。諸天及び神仙すら、尙ほ得ること能はず。何に況んや、凡夫にして懈怠心の者をや。佛の尼拘盧樹の下に在つて坐禪したまふときの如し。魔王の三女、偈を說いて問うて言はく、

『獨り林樹の間に坐して、六根常に寂默たり。有は重寶を失ひて、援無く、苦痛を愁ふるが若し。
容顏世に比なく、而も常に目を閉ぢて坐す。我等は心に疑あり、何を求めて此に在るや。』

爾の時に、世尊は偈を以て答へて曰く、

『我は涅槃の味を得て、染愛に處ることを樂はず。內外の賊は已に除き、汝が父も亦た滅退せり。

【一】無餘。無餘涅槃。

卷の第十七

初品第二十八……禪波羅蜜

經　不亂・不味の故に、應に禪波羅蜜を具足すべし。

論　問うて曰く、菩薩の法は一切衆生を度するを以て事と爲す。何を以ての故に、林澤に閑坐し、山間に靜默し、獨り其身を善くして、衆生を棄捨するや。

答へて曰く、菩薩は身は衆生を遠離すと雖も、心は常に捨てず。靜處に定を求めて、實智慧を獲得して、以て一切を度す。譬へば、藥を服するには、身を將つて權りに家務を息め、氣力平健となれば、則ち業を修すること故の如きが如く、菩薩の宴寂も亦復た是の如し。禪定力を以ての故に智慧の藥を服し、神通力を得れば、還たび衆生に在つて、或は父・母・妻・子と作り、或は師・徒・宗・長と作り、或は天、或は人、下つては畜生に至り、種種の語言、方便もて開導す。復次に、菩薩は布施・持戒・忍辱を行ず。是の三事を名けて福德門と爲す。無量世の中に於て、天王・釋提桓因・轉輪聖王・閻浮提王と爲り、常に衆生に七寶の衣服を施し、五情の欲する所を、今世に後世に皆な具足せしむ。經の中に說くが如く、轉輪聖王は十善を以て民を敎え、後世には皆な天上に生ぜしめ、世世に衆生を利益して快樂を得せしむれども、此樂は無常にして、還たび復た苦を受く、菩薩は此に因つて大悲心を發し、常樂の涅槃を以て衆生を利益せんと欲す。此の常樂の涅槃は實智慧より生じ、實智慧は一心禪定より生ず。譬へば燈を然すに、燈は能く照すと雖も、大風の中に在つては用を作すこと能はず、若し之を密宇に置けば、其の用乃ち全きが如し。散心の中の智慧も亦た是の如く、若し禪定の靜室なくんば、智慧ありと雖も其の用全からず、禪定を得れば則ち實智慧生ず。是れを以ての故に菩薩は衆生を離れて、遠く靜處に在つて禪定を得んことを求むと雖も、禪定淸淨なるを以ての

說す。一切の諸法は、智を以て、好惡・麁細・虛實・多少を分別し、無量の諸佛に供養し、慇懃に精進して、此の功德を求め、五波羅蜜を具足せんと欲す。我是の時に所得なし、檀(那)・尸(羅)・羼(提)・精進・禪(定)・智慧波羅蜜を得ず。然燈佛に見えて、五華を以て佛に散じ、髮を泥中に布いて無生法忍を得、卽時に六波羅蜜を滿せり。空中に於て立つて、然燈佛を讃じ、十方の無量の諸佛を見たてまつれり。是の時實の精進身を得、精進平等の故に心平等を得、心平等の故に、一切諸法の平等を得たり。是の如きの種種の因緣の相を名けて、精進波羅蜜と爲す。

復次に、菩薩は精進波羅蜜を行ずるに、一切諸法の不生・不滅・非常・非無常・非苦・非樂・非空・非實・非我・非無我・非一・非異・非有・非無なるに於て、盡く一切諸法は因緣和合して、但だ名字のみ有り、實相は不可得なることを知る。菩薩は是の如く觀を作して、一切の有爲は皆これ虛誑にして、心息んで無爲となるを知り、其の心を滅して、唯寂滅を以て安隱なりと爲さんと欲す。爾の時に、本願を念じ、衆生を憐愍するが故に、還つて菩薩の法を行じて、諸の功德を集む。菩薩自ら念ずらく、「我は諸法の虛誑なるを知ると雖も、衆生は是の事を知らず、五道の中に於て諸の苦痛を受く。我今當に具足して、六波羅蜜を行ずべし」と。菩薩は神通を報じ、亦た佛道の三十二相・八十種好・一切智慧・大慈大悲・無礙解脫・十力・四無所畏・十八不共法・三達等の無量の諸佛の法を得たまへり。是の法を得る時、一切衆生は、皆な信淨を得て、皆能く受行し、佛法を愛樂して、能く是の事を辦ず。皆これ精進波羅蜜の力なり。是を精進波羅蜜と爲す。佛の所說の如くんば、爾の時、菩薩は精進して、身を見ず、心を見ず、身に作す所なく、心に念ずる所なく、身心は一等にして分別なし。求むる所の佛道を以て衆生を度するに、「衆生を此岸と爲し、佛道を彼岸と爲す」ことを見ず。一切の身心の所作を放捨すること、夢に爲す所は覺めて所作なきが如し。是を寂滅と名け、諸の精進の故に、名けて波羅蜜と爲す。所以いかんとなれば一切の精進は。皆な是れ邪僞なりと知ればなり。一切の作法は、皆な是れ虛妄不實なるを以て、夢の如く、幻の如く、諸法は平等なり、是を眞實と爲す。平等法の中には求索する所あるべからず。是の故に一切の精進は、皆これ虛妄なりと知る。精進は虛妄なりと知ると雖も、而も常に成就して退かず、是を菩薩の眞實の精進と名く。佛の言ふが如くんば、我は無量劫の中に於て、頭・目・髓・腦を以て衆生に施し、其の願をして滿てしむ。持戒・忍辱・禪定の時、山林の中に在つて、身體乾枯し、或は持齋節食し、或は諸の色味を絕し。或は詈・辱・刀・杖の患を忍ぶ。是の故に身體燋枯す。又常に坐禪し、曝露懃苦して、以て智慧を求め、誦讀・思惟・問難・講

を犯すを擯す。擯せらるゝの人は、愁苦懊惱すれども、但だ戒を持たんと欲して、其の苦を慇まず、或る時は世俗の般若を行じて慈悲を息む。釋迦牟尼菩薩の如きは、宿世に大國王の太子と爲る。父王に梵志の師あり、詐つて以て五穀を食はず、衆人は敬信して以て奇特と爲す。太子思惟すらく、「人四體あれば、必ず五穀を資とす、而も此の人は食はず、必ず是れ曲にして人の心を取るなり。眞の法に非るなり」と。父母子に告げて、「此の人は精進にして食せず、是れ世に稀有なり、汝何すれぞ愚甚しくして、之を敬せざるや」と。太子答へて言はく、「願はくは小らく意を留めたまへ。此の人、久しからずして、證驗を自ら出すべし」と。是の時、太子は其の住處を求めて林樹の間に至り、林中の牧牛の人に問ふ、「此人は何の食噉ふ所かある」と。牧牛者答へて言く、「此の人は夜中に少多、酥を服して、以て自ら命を全うす」と。太子知り已つて宮に還り、其の證驗を出さんと欲し、卽ち種種の諸の下藥草を以て青蓮華を薫す。淸旦に梵志は宮に入つて王の邊に坐せり。太子は手づから此華を執つて、來つて之を供養し、拜し已つて授與す。梵志歡喜して自ら念ずらく、「王及び夫人、內外の大小、皆な服して我に事ふるに、唯だ太子のみは敬信せざりき。今日は好華を以て供養す。甚だ善きこと無量なり」と。此の好華を得て、敬ふ所に來り處し、擧げて以て鼻に向けて之を嗅ぐに、花中の藥氣腹に入り、須臾にして腹內に藥作り、下す處を求めんと欲す。太子言く、「梵志食はずんば、何に緣つてか厠に向はん」と。急に之を捉ふれば、須臾にして便ち王の邊に吐く。吐中に純酥あり。證驗現はれ已りて、王と夫人とは乃ち其の詐なることを知れり。太子言く、「此の人は眞の賊なり、名を求むるが故に、以て一國を誑かす」と。是の如く世俗の般若を行じて、但だ智を滿さんことを求め、憐愍の心を寢め、人の瞋を畏れず。或る時は菩薩は出世間の般若を行じ、持戒・布施に於て、心染著せず。何となれば、施者も受者も施す所の財物も、罪と不罪に於ても、瞋と不瞋に於ても、進に於ても、怠に於ても、攝心も散心も不可得なるが故なり。

の事を之に加へ。或は衆生あり、菩薩は讃美するに、反つて更に毀辱し、菩薩は恭敬するに、而も反つて輕慢し、菩薩は慈念するに、反つて其の過を求めて、謀つて中傷せんと欲す。此の衆生等は、力勢あること無きに、來つて菩薩を惱ます。菩薩は此の衆生に於て弘誓の願を發し、「我佛道を得ば、要らず當に此の惡中の惡たる諸の衆生の輩を度すべし」と。此の惡中に於て其の心懈らず、大悲心を生ず。譬へば慈母の、其の子の病を憐み、憂念して捨てざるが如し。是の如きの相は、是を菩薩の精進と爲す。　復次に、布施波羅蜜を行ずる時、十方の種種の乞兒來つて求索せんと欲し、索むべからざる者を、皆來つて之を索め、及び重んずる所、捨て難きの物を索めて、菩薩に語つて言く、「我に兩眼を與へよ、我に頭腦・骨髓・愛重の妻子及び諸の貴價の珍寶を與へよ」と。是の如き等の捨て難き物を、乞者の强いて索むるに、其心動ぜず、慳瞋起り見はれず、疑心を生ぜず、一心に佛道の爲の故に布施す。譬へば須彌山の四方より風吹くも、動かすこと能はざる所なるが如し。是の如き種種の相は、是を精進波羅蜜と名く。　復次に、菩薩は精進して、遍ねく五波羅蜜を行ず、是を精進波羅蜜と爲す。

問うて曰く、戒波羅蜜を行ずる時、若し人あり來つて三衣鉢盂を乞はんに、若し之に與ふれば則ち戒を毀る。何となれば佛の聽(ゆる)したまはざることなればなり。若し與へざれば則ち檀波羅蜜を破る。精進は云何にして遍ねく、[二四]五事を行ぜんや。

答へて曰く、新行の若(ごと)き菩薩は、則ち一世一時に遍ねく五波羅蜜を行ずること能はず、菩薩が檀波羅蜜を行ずる時の如きは、餓虎の飢急にして其の子を食はんと欲するを見て、菩薩は是の時、大悲心を興して、即ち身を以て施す。菩薩の父母は、子を失ふを以ての故に、憂愁懊惱して兩目明を失し、虎は菩薩を殺して、亦應に罪を得べきなるに、而も父母の憂苦し、虎の殺罪を得るをも、籌量せず、但だ檀を滿して自ら福德を得んと欲す。又持戒の比丘の如きは、事の輕重に隨つて諸の法

【二四】五事。布施・持戒・忍辱・智慧・禪定。

ず、懃めて施して倦まず。說くが如くんば、菩薩は諸の衆生の爲に、一日の中に千たび死し、千たび生ず。檀と尸と忍と禪との如く、般若波羅蜜の中の所行も是の如し。菩薩本生經の中の種種の因緣の相は、是を身精進と名け、諸の善法に於て修行し信樂して、疑悔を生ぜず、而も懈怠せず、一切の賢聖より、下は凡人に至るまで法を求めて厭ふこと無く、海の流を呑むが如き、是を菩薩の心精進と爲す。

問うて曰く、心に厭足なしとは、是の事然らず、所以いかんとなれば若し求むる所の事辦じ、願ふ所已に成らば、是れ則ち足るべし。若し理として求む可らず、事として辦ず可らずんば、亦應に捨廢すべし。云何にして恒に厭足なきや。人の井を穿つて泉を求むるが如し。功を用ふること轉た多くして、轉た水相なければ、則ち應に止息すべし。亦た道を行くが如し。已に所在に到れば、應に復た行くべからず、云何にしてか恒に厭足なけん。

答へて曰く、菩薩の精進は、世間の譬喩を以て比と爲す可らず。井を穿つが如きは力少ければ則ち水を得ること能はず、水なきには非ざるなり。若し此の處に水なくとも、餘處には必ず有り。至る所あるが如ければ、必ず求めて佛に至る。佛に至るも厭くこと無く、人を誨へて倦まざるが故に、厭ふこと無しと言ふ。　復次に、菩薩は精進の志願、弘曠にして、誓つて一切を度す、而して衆生は無盡なり。是の故に精進も亦盡く可らず。汝は、事辦ずれば止むべしと言ふも、是の事は然らず。佛に至ることを得と雖も、衆生未だ盡きずんば休息すべからず。譬へば火相の若し滅せざれば、終に冷やかならざるが如く、菩薩の精進も亦復た是の如し。未だ滅度に入らざれば、終に休息せず、是の故に十八不共法の中に、欲及び精進の二事は常に修するなり。　復次に、菩薩は、法に住せずして般若波羅蜜の中に住して精進を廢せず。是れ菩薩の精進にして、佛の精進に非ず。　復次に、菩薩が未だ菩薩道を得ず、生死の身にして、好き事を以て衆生に施すに、衆生は反つて更に、不善

れ人なり。

我今日より始めて、一切の肉を食はず。我は無畏を以て施し、且つ汝が意を安んず可し。』

諸の鹿は安きを得、王は仁信を得たり。

復次に、[三]愛法梵志の如きは、十二歲、閻浮提を遍りて聖法を知らんと求むるに、而も得ること能はず、時に世に佛なく、佛法も亦盡きたり。一の婆羅門ありて言く、「我に聖法の一偈あり、若し實に法を愛せば、當に以て汝に與ふべし」と。答へて言く、「實に法を愛す」。婆羅門言く、「若し實に法を愛せば、當に汝が皮を以て紙と爲し、身骨を以て筆と爲し、血を以て之を書かば、當に以て汝に與ふべし」と。卽ち其言の如く、骨を破り、皮を剝ぎ、血を以て偈を寫す。

『法の如くに應に修行すべし、非法は受くべからず、今世亦た後世に、法を行ずる者は安隱なり。』

復次に、昔、野火、林を燒く。林中に一の雉あつて、身自ら力を懃めて、飛んで水中に入り、其の羽毛を漬け、來つて大火を滅す。火は大に水は少し、往來して疲乏するも、以て苦と爲さず。是の時、天帝釋、來つて之に問うて言く、「汝は何等をか作す」と。答へて言く、「我れ此林を救ふは、衆生を愍むが故なり。此の林は蔭育の處にして廣く、淸涼快樂なり。我が諸の種類及び諸の宗親幷に諸の衆生は、皆此に依仰す、我は身力あり、云何んぞ懈怠して之を救はざらん」と。天帝問うて言く、「汝は乃ち精懃して、當に幾時にか至るべき」と。雉言く、「死を以て期と爲す」と。天帝言く、「汝が心は爾なりと雖も、誰か證知する者ぞ」と。卽ち自ら誓を立つらく、「我が心の至誠なり、信にして虛しからずんば、火は卽ち當に滅せん」と。是の時、淨居天は菩薩の弘誓を知つて卽ち爲に火を滅す。古より今に及んで、唯此の林のみ有つて常に獨り蔚茂して火の爲に燒かれず。是の如き等の種種の宿世の所行に、爲し難きを能く爲して、身命・國財・妻子・象馬・七珍・頭目・骨髓を惜ま

【三】愛法 (Dharmapriya)。

身は今日、應當に送られて死すべし、而るに我は子を懷めり、子は次に非ず。乞ふ、料理を垂れて、死者は次を得、生者は濫らざらしめたまへ」と、鹿王、之を怒つて言く、「誰か命を惜まざらん、次來らば、但だ去れ、何ぞ辭するを得んや」と。鹿母思惟すらく、「我が王は不仁なり。理を以て恕さず、我が辭を際せずして、横まゝに瞋怒せらる、告ぐるに足らざるなり」と。即ち菩薩の王の所に至つて、情を以て具に白す。王、此の鹿に問ふ、「汝が主は何と言ひしや」と。鹿曰く、「我が主は不仁にして料理せずして、而も瞋怒せらる。大王は仁にして一切に及ぶが故に來つて歸命す。我が今日の如きは、天地曠しと雖も控告する所なし」と。菩薩思惟すらく、「此は甚だ愍む可し、若し我理ならずんば、枉げて其の子を殺さん。若し次に非るを差次を更めて、未だ之に及ばざるを如何にしてか遣はす可き。唯我當に之に代るべき有るのみ」と。之を思ふて既に定め、即ち自ら身を送つて鹿母を還し遣り、「我今汝に代らん、汝憂ふる勿れ」と。鹿王は逕に王門に到る。衆人は之を見て、其の自ら來れることを怪しみ、事を以て王に白す。王も亦之を怪しんで、命じて前ましめ、問うて言く、「諸鹿盡くるや、汝、何を以てか來るや」と。鹿王言く、「大王の仁は群鹿に及んで、人の犯す者なし、但だ滋茂あるのみ、何ぞ盡くる時あらん。我が異部の群中に一鹿の子を懷める有り。子の産れんとするに身を殂割せば、子も亦た命を幷すべきを以て我に歸告す。我は之を愍めども、分にあらざるを、差を更ゆるは、是れ亦た不可なり。若し歸するに而も救はずんば、木石に異ならず。是の身は久しからず必ず死を免れず、苦厄を慈救せば、功德無量ならん。若し人、慈なくんば、虎狼と異なること無けん」と。王は是の言を聞いて卽ち坐より起ちて、而して偈を說いて言く、

『我は實には是れ畜獸なり、名けて人頭の鹿と曰ふ。汝は是れ鹿身なりと雖も、名けて鹿頭の人と爲す。

理を以て之を言はゞ、形を以て人と爲すに非ず、若し能く慈惠あらば、獸なりと雖も、實は是

で以て妙藥を求め、深き石窟に入つて、諸の異物、石汁・珍寶を求めて、以て衆生に給す。或は[二]薩陀婆と作つて嶮道を冒し渉るに、劫賊・師子・虎狼・惡獸あるも、衆生に布施せんが爲の故に財寶を勤求して、以て難しと爲さず。藥草・呪術もて、能く銅をして變じて金と爲らしむ。是の如く種種に變化して諸の財物及び四方に主なき物を致し、以て衆生に給す、是を身精進と爲す。五神通を得て能く自ら變作して諸の美味を作り、或は天上に至つて自然の食を取る、是の如き等を名けて心精進と爲す。能く財寶を集めて以て布施に用ゐる、是を身精進と爲し、是の布施の德を以て佛道に至ることを得る、是を心精進と爲す。生身の菩薩が六波羅蜜を行ず、是を身精進と爲し、法性身の菩薩が六波羅蜜を行ずる、是を心精進と爲す。「未だ法身を得ずんば、心は則ち身に隨ふ。已に法身を得ば、則ち心は身に隨はず。身は心を累はさゞるなり。」復次に、一切法の中に皆よく成辦して身命を惜まざる、是を身精進と爲し、一切の禪定の智慧を求むる時、心懈倦せざる、是を心精進と爲す。

復次に、身精進は諸の懃苦を受くるも、終に懈廢せず、說くが如きは、波羅奈國の[三]梵摩達王は、野に遊獵して林中に二の鹿群を見る。群には各主あつて、一主に五百の群鹿あり、一主の身は七寶色せり、是れ釋迦文菩薩にして、一主は是れ提婆達多なり。菩薩の鹿主は、人王の大衆が其の部黨を殺すを見て、大悲心を起して逕に王の前に到る。王人競ひ射て、矢を飛ばすこと雨の如し。王は此の鹿の直に進み趣き已つて、忌憚する所なきを見て、諸の從人に勅して、「汝が弓箭を攝めよ、其來意を斷つを得ること無れ」と。鹿王は既に至つて、跪いて人王に白さく、「君は、嬉遊逸樂の小事を以てする故に、群鹿は一時に皆な死苦を受く。若し以て膳に供するならば、當に自ら次を差して、日に一鹿を送つて以て王厨に供すべし」と。王は其の言を善しとし、聽すに其の意の如くす。是に於て二の鹿群の主は、大に集めて次を差して各一日の送に次に應ずる者を當つ。是時提婆達多の鹿群の中に、一鹿の子を懷めるも、次、至つて應に送らるべき者あり。來つて其主に白すらく、「我が

【二】薩陀婆(Sattva)(Bodhisattva)。の略にして菩薩の意味。

【三】梵摩達王(Brahmadatta)。梵豫王と譯す。

法を能く生じ能く辦ず。是の故に名けて、精進波羅蜜と爲す。波羅蜜の義は先に說くが如し。

復次に、菩薩の精進を名けて、精進波羅蜜と爲し、餘人の精進を波羅蜜と名けず。

問うて曰く、云何なるを精進を滿足すと爲すや。

答へて曰く、菩薩の生身・法性身に、能く功德を具ふ、是を精進波羅蜜を滿足すと名く。滿足の義は上に說くが如し、身心精進して廢息せざるが故なり。

問うて曰く、精進は是れ心數法なり。經に何を以てか、身精進と名くるや。

答へて曰く、精進は是れ心數法なりと雖も、身力より出づるが故に名けて身精進と爲す。受の如きは是れ心數法なれども、而も五識相應して受くる有り、是を身受と名け、意識相應して受くる有り是を心受と爲す。精進も亦た是の如く、身力にて勤修し、若くは手に布施し、口に法言を誦し、若しくは法を講說す。是の如き等を名けて、身口精進と爲す。復次に、布施持戒を行ずるは是を身精進と爲し、忍辱・禪定・智慧、是を心精進と名く。復次に、外事に勤修する、是を身精進と爲し、內に自ら專精する是を心精進と爲す。麁精進を名けて身と爲し、細精進を名けて心と爲す。福德の爲に精進するを名けて身と爲し、智慧の爲に精進する是を心と爲す。若し菩薩の初發心より、乃至無生忍を得るまで、是の中間を身精進と名く、生身未だ捨てざるが故なり。無生忍を得て肉身を捨て、法性身を得、乃至、成佛する、是を心精進と名く。復次に、菩薩の初發心の時は、功德未だ足らざるが故に、三福の因緣を種う、布施と持戒と善心となり。漸やく福報を得て、以て衆生に施すに、衆生未だ足らず、更に廣く福を修し大悲心を發し、「一切衆生は、財に於て足らずして、多く衆惡を作る。我少財を以て、其の意を滿足すること能はず、其の意滿たずんば、敎誨を勤受すること能はず、道敎を受けずんば、生老病死を脫するを得ること能はず、我當に大方便を作して、財を給足し、其を充ち滿たさしむべし」と。便ち大海に入つて諸の異寶を求め、山に登り危を履ん

是中に[二〇]拘伽離の住する處なり。有智の人は是を聞いて、驚いて言く、「咄、此の無明・恚・愛の法を以ての故に、乃ち此苦を受け、出でて復た入り、窮なく已むこと無し」と。菩薩は此を見て、是の如く思惟す「此の苦業の因緣は、皆これ無明、諸の煩惱の作す所なり。我當に精進して六度を懃修し、諸の功德を集めて、衆生の五道の中の苦を斷除すべし」と。大哀を興勃し精進を增益す。父母の囹圄に幽閉せられ、拷掠榜笞し、憂毒萬端なるを見て、方便して救心を求め、暫らくも捨てさるが如し。菩薩は諸の衆生の五道の苦を受くるを見て、之を念ふこと、父の如きことも亦復た是の如し。

復次に、菩薩は精進して世世に勤修し、諸の財寶を求めて衆生に給施して、心に懈廢なし、自ら財物あれば能く盡く施與して、心亦た懈らず。

復次に、精進して戒を持つに、若しくは大(戒)、若しくは小(戒)、一切能く受け、一切能く持つて、毀らず犯さず、大さ毛髮の如きに、設ひ違失あるとも、卽時に發露して初より覆藏せず。

復次に、忍辱を懃修するに、若し人、刀杖もて打害し、罵詈し毀辱するとも、及び恭敬し供養するとも、一切を能く忍んで、受けず、著せず、深さ法の中に於て其の心沒せず、亦た疑悔せざるなり。

復次に、專精一心に諸の禪定を修して、能く住し能く守れば、五神通、及び四無量心、八勝處、八背捨、十一切處を得、諸の功德を具して、四念處、及び諸の菩薩の見佛三昧を得。

復次に、菩薩は精進して、法を求めて懈らず、身心懃力して法師を供養し、種種に恭敬し、供給し、給使して、初より違失せず亦た廢退せず、身命を惜まざるは、法の爲の故を以てなり。誦讀し問答し、初・中・後夜に思惟し、憶念し、籌量し、分別して、其の因緣を求め、同異を選擇して實相を知らんと欲し、一切諸法の自相・異相・總相・別相・一相・有相・無相は實相の如く、諸佛菩薩の無量の智慧において心沒せず退かず。是を菩薩の精進と名く。是の如き等の種種の因緣もて、種種の善

【二〇】拘伽離。既肚、提婆の友人。

出でて、遥かに河水の清涼快楽なるを見、走り往いて之に趣き、中に入れば、變じて熱沸の鹹水と成り、罪人は中に在ること須臾の頃に皮肉離散し、骨のみ水中に立つ。獄卒羅刹は、釵鈎を以て之を出し、持して岸上に著く。此の人の宿業の因縁は、水性の魚鼈の屬を傷殺し、或時は人及び諸の衆生を推して水中に沒せしめ、或は之を沸湯に投じ、或は之を氷水に投ず。是の如き等の種種の悪業の因縁の故に、此の罪を受く。　若し銅橛地獄に在れば、獄卒羅刹は諸の罪人に問ふ、「汝は何の處より來るや」と。答へて言く、「我は苦に悶え、來る處を知らず、但だ飢渴のみを患ふ」と。若し渴すと言へば、是の時獄卒は即ち罪人を驅逐し、熱せる銅橛の上に坐せしめ、鐵の鉗を以て口を開き、灌ぐに洋銅を以てす。若し飢ゆと言へば、之を銅橛の上に坐せしめ、呑ましむるに鐵丸を以てす。口に入れば、口燋げて咽に入り、咽爛れて、腹に入り、腹燃えて五藏爛壞し、直に過ぎて地に墮つ。此人の宿行の因縁は、他の財を劫盗して以て自ら口に供す。諸の出家の人の、或る時は病と詐り、多く酥油石蜜を求め、或は戒なく禪なく、智慧あること無きに、而も多く人の施を受け、或は悪口して人を傷く、是の如きの種種の宿業の因縁もて、銅橛地獄に墮す。　若し人頞浮陀地獄の中に墮つれば、其處は氷を積み、毒風來り吹いて、諸の罪人をして、皮毛裂け落ち、筋肉斷絶し、骨破れ、髓出でしめ、即ち復た完堅して罪を受くること初の如し。此の人の宿業の因縁は、寒月に人を剝ぎ、或は凍人の薪火を劫盗し、或は悪龍と作つて瞋毒忿恚し、大雹雨氷凍を放つて人を害し、或は若し佛及び佛弟子・持戒の人を輕賤し誹毀し、或は口の四業に衆の重罪を作る。是の如きの種種の因縁もて、頞浮陀地獄の中に墮つ。　尼羅浮陀も亦た是の如し、頞浮陀には、少多、孔有つて時に出入することを得れども、尼羅浮陀には孔罅なく出入の處時なし。　呵婆婆・呵羅羅・睺睺、此の三地獄は、寒風に噤顫して、口を開くこと能はず、其の呼聲に因つて獄に名く。　漚波羅獄の中には、凍氷涎渫して、青蓮華に似たりあり。　波頭摩の狀は此の間、赤蓮華の如し。　摩呵波頭摩は、

もて、炭坑地獄の中に墮し、大火炎の炭は膝に至つて罪人の身を燒く。　若し沙門・婆羅門が福田の食に、不淨の手を以て觸れ、或は先に噉ひ、或は不淨物を以て中に著け、或は熱沸せる屎を以て他の身に灌ぎ、淨命を破つて、邪命を以て自活すれば、是の如き等の種種の因緣もて、沸屎地獄の中に墮す。沸ける屎は深廣にして大海水の如く、中に細蟲あり、鐵を以て嘴と爲し、罪人の頭を破つて腦を噉ひ、骨を破つて髓を食ふ。　若し草木を焚燒し、諸蟲を傷害し、或は林を燒きて、大いに獵し、害を爲すこと彌廣ければ、是の如き等の種種の因緣もて、燒林地獄の中に墮す。草木の火然へて、以て罪人を燒く。　若し刀劍を執持して鬪諍傷殺し、若しくは樹を斫り人を壓して、以て宿怨を報じ、若しくは人が忠信を以て誠を告ぐるに、而も密相の中に陷いれば是の如き等の種種の因緣もて、劍林地獄の中に墮す。此の地獄の罪人は中に入れば、風、劍葉を吹いて、手・足・耳・鼻を割截して皆な墮落せしむ。是の時林中に鳥・鷲・惡狗あつて、來つて其の肉を食ふ。　若し利刀を以て人を刺し、若しくは槊、若しくは鑽を以て人を傷け、若しくは道路を斷截し、橋梁を撥撤し、正法の道を破り、示すに非法の道を以てす。是の如き等の種種の因緣もて、利刀道地獄の中に墮す。利刀道地獄は絕壁の狹道の中に於て利刀を竪て、罪人をして上を行いて過ぎさしむ。　若しくは邪婬を犯し、他の婦女を侵し、樂觸を貪受す。是の如き等の種種の因緣を以て、鐵刺林地獄の中に墮す。刺樹の高さ一由旬にして、上に大毒蛇あり、化して美女の身と作り、此の罪人を喚び「上り來れ、汝と共に樂を作さん」と。獄卒は之を驅つて上らしむるに、刺は皆な下に向つて罪人を貫刺し、身は刺害を被つて骨に入り髓に徹す。既に樹上に至れば、化女は還た蛇身に復り、頭を破り腹に入つて、處處に穴を穿ち、皆悉く破爛す。忽ちにして復還た活き、身體平復す。化女は復た樹下に在つて之を喚び、獄卒は箭を以て仰ぎ射て、之を呼んで下らしむれば、刺復た仰いで刺し、既に地に到るを得れば、化女の身は復た毒蛇と作り、罪人の身を破る。　是の如く久久にして、熱鐵刺林より

地に在り、流血は池を成す。二の大惡狗あり、一を睒摩と名け、二を睒婆羅と名く。鐵口猛毅にして人の筋骨を破碎し、力は虎豹に踰え、猛きこと師子の如し。大刺林あり、罪人を驅逼して强いて樹に上らしむ。罪人の上る時は、刺は便ち下に向ひ、下る時は、刺は便ち上に向ふ。大身の毒蛇・蝮蠍・惡蟲は、競ひ來つて之を齧み、大鳥長嘴は頭を破つて腦を噉ふ。鹹河の中に入つては、流に隨つて上下す。出づれば卽ち熱鐵の地を蹈み、鐵刺の上を行き、或は鐵杙に坐し、杙は下より入る。鉗を以て口を開き、灌ぐに洋銅を以てし、熱鐵の丸を呑んで口に入るれば、口焦げて咽に入り咽爛れて腹に入り、腹然へ、五臟、皆燋げて直に過ぎて地に墮つ。但だ惡色のみを見、恒に臭氣を聞き、常に麁澀に觸れ、諸の苦痛に遭ひ、迷悶委頓し、或は狂逸摚揬し、或は藏竄投擲し、或は顚仆墮落す。此の人の宿行は、多く大惡五逆の重罪を造り、諸の善根を斷じ、法を非法と言ひ、非法を法と言ひ、實を非實と言ひ、非實を實と言ひ、因を破り、果を破り、善人を憎嫉し、是の罪を以ての故に、此の地獄に入り、罪を受くること最も劇し。

是の如き等の種種の八大地獄の周圍に其外復た十六の小地獄あつて眷屬と爲る。八寒氷と、八炎火となり。其の中の罪毒は見聞す可らず。八炎火地獄とは、一を炭坑と名け、二を沸屎と名け、三を燒林と名け、四を劍林と名け、五を刀道と名け、六を鐵刺林と名け、七を鹹河と名け、八を銅橛と名け、是を八と爲す。八寒氷地獄とは一を[13]頞浮陀〔少多孔有り〕と名け、二を[14]尼羅浮陀〔孔無し〕と名け、三を[15]阿羅羅〔寒く戰く聲なり〕と名け、四を[16]阿婆婆〔亦た患寒の聲なり〕と名け、五を[17]睺睺〔亦た是れ患寒の聲なり〕と名け、六を[18]漚波羅〔此の地獄の外壁は青蓮花に似たり〕と名け、七を[19]波頭摩〔紅蓮化。罪人中に生じて苦を受くるなり〕と名け、八を摩訶波頭摩と名く、是を八と爲す。　若し淸淨の戒、出家の法を破り、白衣をして佛道を輕賤せしめ、或は衆生を推して、火坑の中に著け、或は衆生の命、未だ盡きざる頃に火上に於て之を炙る、是の如き等の種種の因緣

【一三】頞浮陀（Arbuda）。皰と云ふ。極寒身に逼りて身に皰を生す。
【一四】尼羅浮陀（Nirarbuda）。皰破と云ふ、その皰裂く。
【一五】阿羅羅（Atata）。
【一六】阿婆婆（Apapa）。
【一七】睺睺（Huhuva）。寒に逼られてなす叫聲に依て名く。
【一八】漚　羅（Utpala）。青蓮華、身破るゝことと青蓮花の如し。
【一九】波頭摩（Padma）。紅蓮華、同じく紅蓮花の如し。

故に、此の如き等の罪を受く。大叫喚地獄の中の人は、皆な穴居の類を熏殺し、囹圄或は闇煙窟中に幽閉し、之を熏殺し、或は井中に投じ、他の財を劫奪す、是の如き等の種種の因緣に座して、大叫喚地獄の罪を受く。　第六第七は熱大熱地獄なり。中に二の大銅鑊あり。一を難陀と名け、二を跋難陀「秦に喜大喜と言ふなり」と名く。鹹き沸水は中に滿てり。羅刹鬼獄卒は、罪人を以て中に投じ、厨士が肉を烹るが如くす。人は鑊中に在つて、脚を上にし頭を下にす。譬へば豆を煮て熟爛するが如く、骨節は解け散じ皮肉は相離る。其の已に爛るるを知つて、叉を以て叉し出す。行業の因緣を以て、冷風吹いて活くれば、復た炭坑の中に投じ、或は沸灰の中に著く。譬へば魚の水より出でて、熱沙の中に著くが如し。又膿血を以て自ら煎じ熬られ、炭坑の中より出して之を焰牀に投げ、强いて驅つて坐せしむれば、眼・耳・鼻・口及び諸の毛孔の一切より火出づ。此の人は宿世に、父母・師長・沙門・婆羅門を惱亂し、諸の好人の福田の中に於て、惱まして心を熱せしむ。此の罪を以ての故に、熱地獄の罪を受く。或は宿世に生繭を煮、或は生きながら猪羊を炙り。或は木を以て人を貫いて、生きながら之を炙り、或は山野及び諸の聚落・佛圖・精舍等及び天神等を焚燒し、或は衆生を推して火坑の中に著く、是の如き等の種種の因緣を以て、此の地獄の中に生ず。　阿鼻地獄を見るに、縱廣、四千里にして、鐵壁を周らし廻し、七地獄のうちに於て、其の處最も深し、獄卒・羅刹は大鐵椎を以て諸の罪人を椎つこと、鍛師の鐵を打つが如く、頭より皮を剝ぎ、乃ち其の足に至る。五百の釘を以て其身を釘礫すること、牛皮を磔るが如く、互に相掣挽して應に手を破裂せしむ。熱鐵の火車は以て其の身を轢き、驅つて火坑に入つて炭を抱いて出で熱沸の屎河に驅つて入らしむ。中に鐵嘴の毒蟲あり、鼻の中より入つて脚底に出で、足下より入つて口中に出づ。劍を道中に竪てて驅つて馳走せしむるに、足下の破碎すること厨の膾肉の如く、利刀劍矟の身中に飛び入ること、譬へば、霜樹の落葉が風に隨つて亂墜するが如し。罪人の手・足・耳・鼻・支節は、皆な斫剉割截せられて、

猪・羊・麞・鹿・狐・狗・虎・狼・師子・六駮・大鳥・鵰鷲・鶉鳥、此の種種諸の鳥獸の頭と作り、來つて罪人を呑み噉ひ、齩齧し、齰掣す。兩山は相合し、大熱の鐵輪は、諸の罪人を轢いて、身をして破碎せしめ、熱鐵の臼の中に、之を搗いて碎けしめ、蒲桃を笮るが如く亦た油を壓するが如し。譬へば蹂場の如く、肉を聚めて積を成し、頭を積むこと山の如く、血は流れて池と成り、鵰鷲虎狼は各來り爭つて掣く。此の人は宿業の因緣に、多く牛馬・猪羊・麞鹿・狐兎・虎狼・師子・六駮・大鳥・衆鳥を殺し、多く是の如き等の、種種の鳥獸を殘賊するが故に、還つて此の衆の鳥獸の頭、來つて罪人を害するなり。又力勢を以て相陵ぎ、羸弱を抂げ壓せば、兩山相合するの罪を受く。慳貪・瞋恚・愚癡・怖畏の故に、事の輕重を斷ずるに、正理を以てせず、或は正道を破り、正法を轉易すれば、熱鐵輪に轢かれ、熱鐵臼に搗かるることを受く。　第四と第五とを叫喚・大叫喚と名く。此の大地獄は、其の中の罪人、羅刹・獄卒の頭は黃にして金の如く、眼中より火を出し、赤色の衣を著け、身肉は堅勁にして、走疾すること風の如し。手足は長大にして、口よりは惡聲を出し、三股の叉を捉り、箭の墮つること雨の如くして、罪人を刺し射る。罪人は狂ひ怖れ、叩頭して哀を求むれば、小らく見て放捨し、小らく見て憐愍す。卽時に將ゐて熱鐵地獄に入る。縱廣百由旬なり、驅打せられて馳走すれば足は皆な焦げ然え、脂は髓より流れ出でて、蘇油を笮るが如く、鐵棒を以て頭を棒てば、頭は破れて腦の出づること、酪瓶を破るが如く、斫刺割剝し、身體糜爛す。復た將ゐて鐵閣に入る、屋の間より黑煙來り熏じて互に相ひ推壓し、更に相怨毒して、皆言く「何を以てか我を壓するや」と。纔に出づるを求めんと欲するに、其の門は以て閉ぢ、大聲嘷呼の音は常に絕えず。此の人の宿業の因緣は、皆斗秤を欺誑し、非法に事を斷じ、寄を受けて還さず、下劣を侵陵し、諸の窮貧を惱まし、其をして號哭せしめ、他の城郭を破り、人の聚落を壞り、傷害劫剝し、室家は怨毒し、城を擧げて叫喚するに由る。有る時は諂詐欺誑し、之を誘つて出でしめ、復た之を害す。是の如き等の種種の因緣の

或は餓鬼あり、羸瘦して狂ひ走り、毛髪は蓬亂して以て其の身を覆ふ。或は餓鬼あり、常に屎尿・涕唾・嘔吐・盪滌の餘汁を食し、或る時は厠溷の邊に至りて、立つて伺ひ不淨を求む。或は餓鬼あり、常に産婦の藏血を求めて之を飲む、形は燒けたる樹の如く、咽は針の孔の如し。若し其れに水を與ふれば、千歲なるも足らず。或は餓鬼あり、自ら其の頭を破り、手を以て腦を取つて舐む。或は餓鬼あり、形は黑山の如く鐵鎖頸を鎖す、頭を叩き哀を求め、獄卒に歸命す。或は餓鬼あり、先世に惡口して好んで麁語を以て衆生に加被す、衆生は憎惡して之を見ること讎の如し。此の罪を以ての故に餓鬼の中に墮す。是の如き等の種種の罪の故に、餓鬼趣の中に墮して無量の苦痛を受くるなり。

〔三〕八大地獄を見るに、苦毒萬端なり。　活大地獄の中の諸の受罪の人は、各各共に鬪ひ、惡心にして瞋り爭ひ、手に利刀を捉つて互に相割剝し、矟を以て相刺し、鐵叉相叉へ、鐵棒相棒す、鐵杖相撾き、鐵鏟相貫き、而して利刀を以て互に相切膾し、叉鐵の爪を以て相爴み裂き、各身血を把つて相ひ塗漫し、痛毒逼切し悶えて覺る所なし、宿業の因緣の、冷風來り吹き、獄卒之に咄と喚べば、諸の罪人は還たび活く。是を以ての故に活地獄と名く。卽時に平復して復たび苦毒を受く、此中の衆生は、宿行の因緣を以て、好んで物の命(卽ち)牛・羊・禽獸を殺し、田業・舍宅・奴婢・妻子・國土・錢財の爲の故に、相ひ殺害す。是の如き等の殺業の報の故に、此の劇罪を受く。　黑繩大地獄の中の罪人を見るに、惡羅刹・獄卒・鬼匠の爲に、常に黑熱の鐵繩を以て、罪人を拼度し、獄中の鐵斧を以て人を敎えて之を斫らしめ、長き者を短からしめ、短き者を長からしめ、方なる者を圓ならしめ、圓なる者を方ならしめ、四肢を斬截し、其の耳鼻を刵り、其の手足を落し、大鐵鋸を以て解析剸截して、其の肉を破り、臠臠に分つて之を稱す。此人は宿業の因緣に、忠良を讒賊し、妄語・惡口・兩舌・綺語を以て、枉げて無辜を殺し、或は姧吏と作つて、酷く暴く侵害す。是の如き等の種種の惡口讒賊の故に、此の罪を受く。　合會大地獄の中を見るに、惡羅刹・獄卒は種種の形と作り、牛馬・

【三】以下、八大地獄の說明。

た是の如し。[五]活地獄の中に死して[六]黒縄地獄の中に生じ、黒縄地獄の中に死して活地獄の中に生じ、活地獄の中に死して還た活地獄の中に生ず。[七]合會地獄、乃至[八]阿鼻地獄も亦た是の如し。炭坑地獄の中に死して[九]沸屎地獄の中に生じ、沸屎地獄の中に死して炭坑地獄の中に生じ、炭坑地獄の中に死して還た炭坑地獄の中に生ず。燒林地獄・乃至[一〇]摩訶波頭摩地獄も亦た是の如く、展轉して其の中に生ず。卵生の中に死して胎生の中に生じ、胎生の中に死して卵生の中に生じ、卵生の中に死して還た卵生の中に生ず。胎生・濕生・化生も亦た是の如し。閻浮提の中に死して弗婆提の中に生じ、弗婆提の中に死して閻浮提の中に生じ、閻浮提の中に死して還た閻浮提の中に生ず。劬陀尼・鬱怛羅越も亦た是の如し。四天處に死して、忉利天中に生じ、忉利天中に死して四天處に生じ、四天處に死して還た四天處に生ず。忉利天・乃至、他化自在天も、亦た是の如し。梵衆天の中に死して、梵輔天の中に生じ、梵輔天の中に死して梵衆天の中に生じ、梵衆天の中に死して還た梵衆天の中に生ず。梵輔天・少光天・無量光・光音・少淨・無量淨・遍淨・[一一]阿那跋羅伽に生ずることを得。大果虛空處・識處・無所有處・非有想非無想處も亦た是の如し。非有想非無想天の中に死して、阿鼻地獄の中に生じ、是の如く展轉して、五道の中に生ず。菩薩は是を見已つて、大悲心を生ず、「我は衆生に於て、益する所なしと爲す。世と與に樂むと雖も、樂極まれば則ち苦なり、當に佛道の涅槃の常樂を以て、一切を益すべし」と。云何にして益せん。當に大精進を懃めて、乃ち實智慧を得べし。實智慧を得れば、諸法の實相を知り、餘の波羅蜜を以て助成して、以て衆生を益す、是を菩薩の精進波羅蜜と爲す。

餓鬼の中を見るに、飢渴の故に兩眼陷み、毛髮長く、東西に馳走す。若し水に趣かんと欲すれば、水を護るの諸鬼、鐵杖を以て逆ひ打つ、設ひ守る鬼なきも、水は自然に竭く、或る時は天より雨すに雨は化して炭と爲る。或は餓鬼あり、常に火に燒かる。劫盡くる時、諸山より火の出づるが如し。

【五】活地獄(Saṃjīva)等活と云ふ。
【六】黒縄地獄(Kalasūtra)。
【七】合會地獄(Saṃghāta)。
【八】阿鼻地獄(Avīci)。
【九】沸屎地獄(Kuṇapa)。
【一〇】摩訶波頭摩地獄(Mahā-padma)。大紅蓮地獄、以下の天に干しては、論第二卷大欲天の註を參照すべし。
【一一】阿那跋羅伽(Anabhrakā)。無雲天。

著して還たび地獄に墮して、諸の苦痛を受く。人道の中を見るに、十善の福を以て、人身を貿得すれども、人身は苦多く樂少くして、壽盡くれば多く惡趣の中に墮す。諸の畜生を見るに、諸の苦惱を受け、鞭杖もて驅馳せられ、重を負ひ遠きを渉り、項領を穿壊せられ、熱鐵に燒烙せらる。此人は宿行の因緣に衆生を繫縛するを以て、鞭杖に苦惱するなり。是の如き等の種種の因緣の故に、象・馬・牛・羊・麞・鹿の畜獸の形を受く。婬欲の情重く、無明偏に多ければ、鵝鴨・孔雀・鴛鴦・鳩鴿・鷄・鷰・鸚鵡・百舌の屬を受く。此の衆鳥を受くるの種類は百千あり。婬行の罪の故に、身に毛羽を生じ、諸の細滑を隔て、觜距麁鞕にして觸味を別たず。瞋恚偏に多きは、毒蛇・蝮蠍・蚊蜂・百足などの毒を含むの蟲を受く。愚癡多きが故に、蚓・蛾・蜣蜋・蟻螻・鵂鶹・角鵄の屬、諸の騃蟲鳥を受く。憍慢と瞋と多きが故に師子・虎・豹の諸の猛獸の身を受く。邪慢の緣の故に、生を驢・猪・駱駝の中に受く。慳貪・嫉妬・輕躁・短促の故に獼猴・狎獿・熊羆の形を受く。邪貪・憎嫉の業因緣の故に、猫・狸・土虎の諸獸の身を受く。無愧・無慚・饕餮の因緣の故に、烏鵲・鵄鷲の諸鳥の形を受く。善人を輕慢するが故に、鷄・狗・野干等の身を受く。大に布施を作すも、瞋恚して曲心なれば、此因緣を以ての故に、諸の龍の身を受く。大に布施を修するも、心高ぶり、陵虐して衆生を苦惱すれば、金翅鳥の形を受く。是の如き等の種種の結使の業因緣の故に、諸の畜生・禽獸の苦を受く。

菩薩は天眼を得て、衆生が五道に輪轉し其の中に廻施するを觀ずるに、　天中に死して人中に生じ、人中に死して天中に生じ、天中に死して地獄の中に生じ、地獄の中に死して天上に生じ、天上に死して餓鬼の中に生じ、餓鬼の中に死して還た天上に生じ、天上に死して畜生の中に生じ、畜生の中に死して天上に生じ、天上に死して還た天上に生ず。地獄・餓鬼・畜生も亦た是の如し。欲界の中に死して色界の中に生じ、色界の中に死して欲界の中に生じ、欲界の中に死して無色界の中に生じ、無色界の中に死して欲界の中に生じ、欲界の中に死して欲界の中に生ず、色界・無色界も亦

して如意珠を得、以て衆生に給し、其の身苦を濟へり。菩薩は是の如く、爲し難きを能く爲す。是を菩薩の精進波羅蜜と爲す。　復次に、菩薩は精進力を以て首となして五波羅蜜を行ず、是の時を名けて、菩薩の精進波羅蜜と爲す。譬へば衆藥和合して、能く重病を治するが如し。菩薩の精進も亦た是の如し。但だ精進を行ずるのみにして、五波羅蜜を行ずる能はざれば、是を菩薩の精進波羅蜜とは名けず。　復次に、菩薩の精進は、財利・富貴・力勢の爲ならず、亦た身の爲ならず、天・轉輪聖王・梵釋天王に生れん爲にあらず、亦た自ら以て涅槃を求むるが爲ならず、但だ佛道の爲に衆生を利益するなり。是の如き相を名けて、菩薩の精進波羅蜜と爲す。　復次に、菩薩の精進は、一切の善法を修行するに、大悲を首と爲す。慈父母が唯だ一子のみ有るに、而も重病を得ば、一心に藥を求めて、其の病を救療するが如し。菩薩の精進の慈を以て首と爲すことも亦復た是の如く、一切を救療して心に暫らくも捨つること無し。　復次に、菩薩の精進は、實相の智慧を以て首と爲して、六波羅蜜を行ず。是を菩薩の精進波羅蜜と名く。

問うて曰く、諸法の實相は無爲無作なり。精進は有爲有作の相なり。云何にして實相を以て首と爲すや。

答へて曰く、諸法の實相は無爲無作なるを知ると雖も、本願の大悲を以て衆生を度せんと欲するが故に、無作の中に於て、精進力を以て一切を度脱す。　復次に、諸法の實相は、無爲無作なること涅槃の相の如くにして、二なし。汝云何んぞ、實相と精進の相とは異なると言ふや。汝は卽ち諸法の相を解せざるなり。

復次に、菩薩、神通力を得て、天眼を以て三界五道の衆生を見るに、各樂しむ所を失ふ。無色界天は、樂定に心著し、命の盡くるを覺らず、欲界の中に墮在して禽獸の形を受く、色界の諸天も亦復た是の如く、淸淨處より墮して、還つて婬欲を受けて不淨の中に在り。欲界の六天は、五欲に樂

け、心、能く開悟するを精進覺と名け、能く佛道・涅槃の城に到るを、是を正精進と名く。四念處の中に能く懃めて心を繋くる、是れ精進分にして、[三]四正懃は是れ精進門なり。四如意足の中の欲精進は卽ち是れ精進にして、六波羅蜜の中にては、精進波羅蜜と名く。

問うて曰く、汝は先に精進を讃じ、今は精進の相を說く。是は何の精進と名くるや。

答へて曰く、是れ一切善法の中の精進の相なり。

問うて曰く、今摩訶般若波羅蜜を說く論議の中に、應に精進波羅蜜を說くべし。何を以ての故に、一切善法の中の精進を說くや。

答へて曰く、初發心の菩薩は、一切善法の中の精進に於て、漸漸に次第して精進波羅蜜を得ればなり。

問うて曰く、一切善法の中には精進多し、今精進波羅蜜を說くも、已に一切善法の精進の中に入らん。答へて曰く、佛道の爲に精進するを名けて波羅蜜と爲す。諸餘の善法の中に精進するは、但だ精進と名けて、波羅蜜とは名けざるなり。

問うて曰く、一切善法の中に懃めざるは何を以てか精進波羅蜜と名けず、而して獨り菩薩の精進のみを名けて波羅蜜と爲すや。

答へて曰く、波羅蜜を到彼岸と名く、世間の人及び聲聞・辟支佛は、諸の波羅蜜を具足して行ずること能はず、是の故に名けて精進波羅蜜と爲さず。復次に、是の人は大慈大悲なく、衆生を棄捨し、十力・四無所畏・十八不共法・一切智・及び無礙解脫・無量の身・無量の光明・無量の音聲・無量の持戒・禪定・智慧等の諸の善法を求めず、是故に是人の精進を波羅蜜と名けず。復次に、菩薩の精進は、休まず息まずして、一心に佛道を求む、是の如く行ずるを、名けて精進波羅蜜と爲す。[四]好施菩薩の如きは、如意珠を求めて大海の水を抒み、正に筋骨をして枯れ盡くさしむるも、終に懈廢せず

【三】四正懃。三十七科道品中四念處に次で修する行。既註。已生・未生の惡を斷じ善を增長する精進。

【四】好施菩薩。既註の Sudāna。以下三界五道の說明。卽ち、無色界、色界・欲界の三天、並びに天・人・地獄・餓鬼・畜生の五道の說明出づ。

初品第二十七……毘梨耶波羅蜜義

問うて曰く、云何なるを精進の相と名くるや。

答へて曰く、事に於て必ず能く起發して難ること無く、志意堅强にして、心に疲倦なく、作すところを究竟す、此の五事を以て精進の相と爲す。

復次に、佛の所說の如くんば、精進の相とは身と心と息まざるが故なり。譬へば釋迦牟尼佛の如きは、先世に曾つて賈客の主と作り、諸の賈人を將ゐて、嶮難の處に入るに、是の中に羅刹鬼あり、手を以て之を遮つて言く、「汝住して動くこと莫れ、汝の去るを聽さず」と。賈客の主、即ち右拳を以て之を擊つに、拳は即ち鬼に著いて、挽けども離す可らず。復次に、左拳を以て之を擊つに、亦た離す可らず。右足を以て之を蹴るに足復た粘著し、復た左足を以て之を蹴るに亦復た是の如し。頭を以て之を衝くに、頭は即ち復た著く。鬼問うて言く、『汝今是の如くして、何等をか作さんと欲するや、心[一]休息すること未だしや』と。答へて曰く、「復た[二]五事繫がると雖も、我が心は終に汝が爲に伏せざるなり。當に精進力を以て、汝と相擊ちて、要らず懈怠せざるべし」と。鬼は時に歡喜して心に念ずらく「此人は膽力極めて大なり」と。即ち(その)人に語りて言く、『汝は精進の力大なり、必ず休息せずんば、汝を放つて去らしめん』と。行者も是の如く、善法の中に於て、初夜・中夜・後夜に誦經し坐禪して、諸法の實相を求め、諸の結使の爲に覆はれず、身心懈らざる、是を精進の相と名く。是の精神を心數法勤行不住の相と名く。心行に隨つて心と共に生じ、或は有覺・有觀、或は無覺・有觀、或は無覺・無觀なり。阿毘曇の法に廣く說くが如し。一切の善法の中に於て懃修して懈らざる、是を精進の相と名け、五根の中に於て精進根と名け、根の增長するを精進力と名

【一】休息。別本には「休伏」または「首伏」とあり。
【二】五事。この場合、左右の拳と足と頭を意味す。

目次

釋經論部 二

眞野正順譯

國譯一切經

大東出版社藏版